

サコ・浦山遺跡

—サコ遺跡第 1 次調査・浦山遺跡第 1・2 次調査—

令和 3 (2021) 年

太宰府市教育委員会

サコ・浦山遺跡

—サコ遺跡第 1 次調査・浦山遺跡第 1・2 次調査—

令和 3(2021)年

太宰府市教育委員会

序

本書は、大宰府政庁跡の北西部の坂本集落で計画された宅地造成に伴って実施した発掘調査について、まとめた調査報告書です。

サコ遺跡・浦山遺跡の調査は、丘陵上に位置する遺跡で、古墳時代の集落と江戸時代中期以降の墓地が営まれていました。特に墓地の調査では、木棺・桶棺・甕棺という埋葬施設に安置された人骨が遺存し、人類学・大宰府の民俗を考える上で貴重な成果が得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

結びになりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位並びに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

令和3年9月

大宰府市教育委員会
教育長 樋田 京子

例言

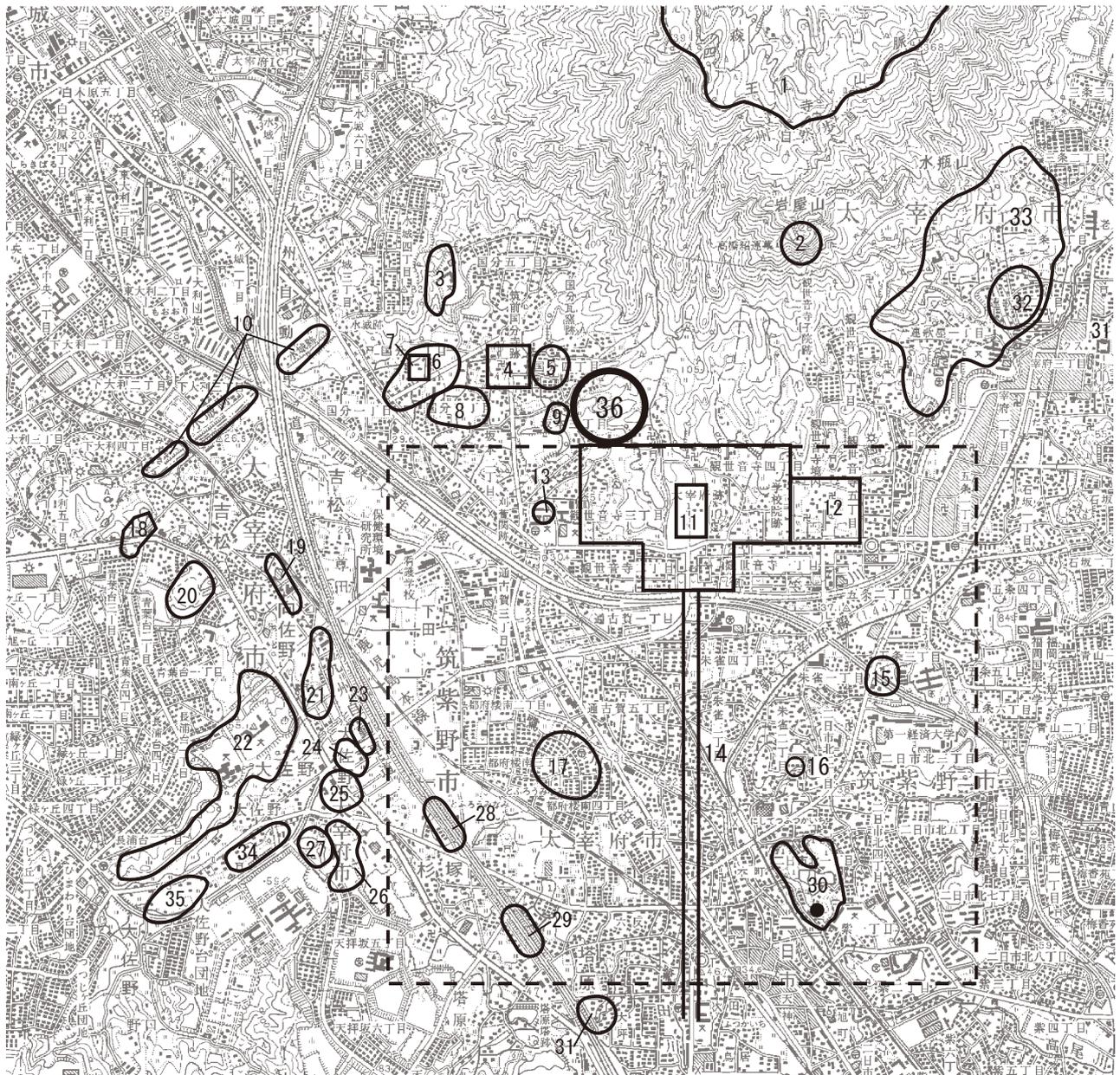
1. 本書は太宰府市坂本3丁目で行われたサコ遺跡・浦山遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測には、国土調査法第Ⅱ座標系（日本測地系）を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限り G.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度もこれを基準としたものである。
3. 遺構の実測及び写真撮影は宮崎、高橋、遠藤が行った。浦山遺跡第2次調査の遺構全体測量は、(株)測技に委託した。また、浦山遺跡第2次調査の墓碑の拓本は小西信二氏の協力を得た。
4. 遺構の空中写真撮影は(有)空中写真企画が行った。
5. 出土した金属製品の保存処理は(株)タクトが行った。
6. 出土した人骨の分析については、九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに委託した。
7. 遺物の実測は、山本麻里子、福井円、吉富千春、今岡一恵、池田晃子、宮崎が行った。
8. 表入力・写真整理は、瀬戸口みな子、市川晴美が行った。
9. 遺物の整理接合・復元作業は、馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。
10. 遺物の写真撮影は(有)システム・レコが行った。
11. 図の浄書は、宮崎が行った。
12. 本書に用いた分類は以下のとおり。
 - 須恵器・・・太宰府市教委『宮ノ本遺跡Ⅱ 一窯跡篇一』（太宰府市の文化財第10集）1992
 - 土器・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第7集）1983
 - 陶磁器・・・太宰府市教委『大宰府条坊跡ⅩⅤ』（太宰府市の文化財第49集）2000
 - 瓦・・・九州歴史資料館『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000
13. 執筆は、サコ遺跡第1次調査と浦山遺跡第1次調査を宮崎、浦山遺跡第2次調査は高橋・宮崎・遠藤が行った。サコ遺跡第1次調査・浦山遺跡第2次調査出土の人骨の分析報告については、松尾樹志郎・中野真澄・星野宙也・山下理呂・James Frances Loftus Ⅲ・Coralie Ferrero・冨田啓貴・梶佐古幸謙・米元史織・舟橋京子が行い、一部調査情報と体裁を整えるため、加筆修正した。
14. 編集は宮崎が担当した。

目次

I、遺跡の位置と歴史	3
II、調査体制	4
III、調査および整理方法	5
IV、調査報告	
1、サコ遺跡第1次調査	6
(1) 調査に至る経緯	6
(2) 基本層位	6
(3) 検出遺構	6
(4) 出土遺物	25
(5) サコ遺跡第1次調査出土人骨の分析	39
①サコ遺跡第1次調査出土人骨について	39
②サコ遺跡第1次調査出土近世人骨の形質について	91
(6) 小結	106
2、浦山遺跡第1次調査	107
(1) 調査に至る経緯	109
(2) 基本層位	109
(3) 検出遺構	109
(4) 出土遺物	113
(5) 小結	119
3、浦山遺跡第2次調査	124
(1) 調査に至る経緯	124
(2) 基本層位	124
(3) 検出遺構	124
(4) 出土遺物	142
(5) 浦山遺跡第2次調査出土人骨について	174
(6) 小結	230
4、御笠団印出土地周辺遺跡第8次調査補遺	260
(1) 報告経緯	260
(2) 出土遺物	260

写真図版・・・主な遺構および遺物写真

CD・・・遺構および遺物写真



- | | | | |
|------------|----------------------|-----------|---------------------|
| 1. 大野城跡 | 10. 水城跡 | 19. 原口遺跡 | 28. 剣塚遺跡 |
| 2. 岩屋城跡 | 11. 大宰府政庁跡 | 20. 篠振遺跡 | 29. 唐人塚遺跡 |
| 3. 陣ノ尾遺跡 | 12. 観世音寺 | 21. 前田遺跡 | 30. 峯・峯畑遺跡 (●は峯火葬墓) |
| 4. 筑前国分寺跡 | 13. 遠賀団印出土地 | 22. 宮ノ本遺跡 | 31. 太宰府天満宮(安楽寺跡) |
| 5. 辻遺跡 | 14. 大宰府条坊跡 (鏡山案、破線内) | 23. 雛川遺跡 | 32. 浦城跡 |
| 6. 国分松本遺跡 | 15. 君畑遺跡 | 24. フケ遺跡 | 33. 原遺跡 |
| 7. 筑前国分尼寺跡 | 16. 般若寺跡 | 25. 尾崎遺跡 | 34. 京ノ尾遺跡 |
| 8. 国分千足町遺跡 | 17. 市ノ上遺跡 | 26. 脇道遺跡 | 35. カヤノ遺跡 |
| 9. 御笠団印出土地 | 18. 神ノ前窯跡 | 27. 殿城戸遺跡 | 36. 報告地域(サコ遺跡・浦山遺跡) |

Fig.1 太宰府市とその周辺の遺跡 (1/30000)



- 略称
- 条 . . . 大宰府条坊跡
 - 御 . . . 御笠団印出土地周辺遺跡
 - 辻 . . . 辻遺跡
 - 堀田 . . . 堀田遺跡
 - 松倉 . . . 松倉遺跡
 - 国 . . . 筑前国分寺跡
 - 史 . . . 大宰府史跡

Fig. 2 調査地と周辺調査地点 (1/5000)

I、遺跡の位置と歴史

太宰府市は、北に四王寺山、北東に宝満山、南に脊振山地東端の天拝山に囲まれ、さながら盆地的な様相を示している。これらの山々が途切れている北西に福岡平野が、南東に筑後平野が広がっている。市役所から博多湾まで直線距離で15km、筑後川まで20kmの位置関係にある。

旧石器時代の遺物は、市内各所で散発的に出土し、脇道遺跡第4次調査では約1500点の剥片がまとまって出土している。縄文時代の遺構は多くはないが、大佐野地区の西端の低丘陵に位置するカヤノ遺跡では押型文土器が多く出土し、市内の平野部に位置する大宰府条坊跡でも縄文後・晩期を中心に縄文土器が出土するなど、明確な遺構こそ見つかっていないが、市内に居住地が点在していた可能性が窺える。

弥生時代から古墳時代にかけての集落は、佐野地区では弥生時代前期と後期、国分地区で弥生時代中期の集落が展開し、狭い太宰府盆地の中を100～200年ごとに移動しているような状況が窺える。佐野地区では弥生時代前期と後期の集落が前田遺跡で確認され、雛川・フケ遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての集落が、多くの木製品と共に確認されている。般若寺跡が所在する丘陵では、弥生前期後半頃の落とし穴や貯蔵穴が点在していることが確認されている。弥生時代の墓地として国分松本遺跡や高雄地区の吉ヶ浦遺跡では弥生時代中～後期の甕棺墓群が確認されている。

古墳時代には前期から中期にかけて、高雄地区と佐野地区に割竹形木棺を内部主体とする円墳（菖蒲浦、下高尾、宮ノ本）が築造されている。5世紀中頃には福岡平野を見渡す丘陵に帆立貝形前方後円墳の成屋形古墳が築造され、6世紀になると、成屋形古墳にほど近い裏ノ田遺跡で須恵器窯や集落が確認され、また、大佐野地区の尾崎遺跡から京ノ尾遺跡でも集落が確認されている。古墳として大佐野地区近くの剣塚古墳群で前方後円墳が確認されているものの、やや小規模であり、四王山裾部の来木丘陵や高尾山の裾部の丘陵周辺に円墳が僅かに築造されているが、群集墳と呼べる状況は示していない。

7世紀になると大宰府政庁が置かれ、博多側には四王寺山と吉松丘陵を塞ぐ水城跡の土塁が築造されたほか、周囲に山々には大野城・基肆城・阿志岐城などの古代山城が築造された。2016年には筑紫野市前畑遺跡で丘陵上に築造された土塁が発見され、周囲の古代山城と合わせ、羅城を形成していた可能性を示すものとして注目された。

四王寺山の南麓には大宰府政庁、観世音寺、学校院のほかに官衙が並び、その政庁を北辺中央に置いた南側一帯にはいわゆる大宰府条坊と呼ばれる都市が整備された。大宰府条坊はその規模は南北22条、東西12坊の約2km四方におよぶものと推定され、南辺部は筑紫野市まで広がり、その繁栄ぶりは、『続日本紀』神護景雲3(769)年10月甲辰の条に「此府人物殷繁、天下之一都会也」と記される程である。条坊の区画については、増加した発掘調査の成果から、一区画90m四方と推測されている。その後も左郭15条2坊付近で客館跡の発見や、政庁周辺の官衙城の再検討などがなされている。

中世になると、政治や経済的な機能は博多に移ったものの、都市機能は失われず、観世音寺や原山、宝満山などの寺社がその求心力を持つようになった。発掘調査でも観世音寺南面域や五条地区などの市内平野部の東側、そして四王寺山や宝満山の山腹で遺構が多く見られ、太宰府天満宮周辺では、条坊Ⅲ期頃に条坊と異なる土地区画が造られ、それをもとに中世から近世にかけてマチが形成されている。観世音寺や太宰府天満宮（安楽寺天満宮）など各寺社は、南北朝期や戦国時代の戦乱で堂宇の焼失・再建を繰り返しながら近世を迎える。

近世には太宰府天満宮周辺の門前町以外にも、日田街道沿いに水城や通古賀の都市近郊型の農村集落が形成された。四王寺山麓の都府楼跡北側の谷筋にある坂本集落は、集落南端に神社、集落周囲に田畑、さらにその周囲は丘陵に囲まれ、その丘陵には墓地が営まれるという典型的な農村集落を形成している。

II、調査体制

(平成 24 / 2012 年度) . . . 浦山遺跡第 1 次調査

統括	教育長	木村甚治
庶務	教育部長	古野洋敏
	文化財課長	菊武良一
	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一
	調査係長	山村信榮
	事務主査	橋川史典
	主事	古川あや
調査	主任主査	井上信正
	技術主査	高橋学
		宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜

(平成 25 / 2013 年度) . . . サコ遺跡第 1 次調査

統括	教育長	木村甚治
庶務	教育部長	今泉憲治
	文化財課長	菊武良一
	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一
	調査係長	山村信榮
	事務主査	廣見京子
	主事	古川あや
調査		有田ゆきな
	主任主査	井上信正
		高橋学
		宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜

(平成 26 / 2014 年度) . . . 浦山遺跡第 2 次調査

統括	教育長	木村甚治
庶務	教育部長	堀田徹
	文化財課長	菊武良一
	文化財副課長	城戸康利
	保護活用係長	友添浩一
	調査係長	山村信榮
	事務主査	廣見京子
	主事	有田ゆきな
		久木原駿史

調査	主任主査	井上信正 高橋学 宮崎亮一
	主任技師	遠藤茜
	技師	沖田正大 中村茂央

(令和3 / 2021年度) . . . 報告書刊行

統括	教育長	樋田京子
	教育部長	藤井泰人
文化財課	課長	友添浩一
	副課長	中島恒次郎
保護活用係	係長	井上信正
	主任主査	高橋学 城戸康利
	主任主事	岡部大治
	主事	篠田由梨
調査係	嘱託	井手上由美
	係長	山村信榮
	技術主査	遠藤茜 沖田正大
	主任技師	中村茂央 木村純也

Ⅲ、調査および整理方法

調査および整理方法については、『佐野地区遺跡群 I』（太宰府市の文化財第 14 集 1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂）に基づいている。

調査では、表土剥ぎをバックホーによって行った。遺構図や土層図は適時 1/10、1/20 等で記録し、遺構全体図は、サコ遺跡第 1 次調査が人力によって 1/100 縮尺の平板測量と 1/20 縮尺の実測、浦山遺跡第 1 次調査が人力によって 1/20 縮尺の実測、浦山遺跡第 2 次調査は航空測量で作成した。

整理に際し、規則性の強い陶磁器については、『大宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類 -』をもとに分類し、出土遺物一覧表に分類と破片数を掲載している。また、一緒に出土している遺物については、出土遺物一覧表も同時に確認して頂きたい。

また、墓地から出土した人骨については、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに持ち込み、分析調査を委託した。

これらの調査で得られた出土遺物や実測図等は太宰府市文化ふれあい館に保管している。人骨については九州大学アジア埋蔵文化財研究センター古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

IV、調査報告

1、サコ遺跡第1次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は大宰府市坂本3丁目231、232、233、234-1、234-2、235、1049で、大宰府政庁跡の北西500mの丘陵上に位置する。

2011(平成23)年12月頃からナガタ建設株式会社より、埋蔵文化財の取り扱いについての相談があり、2012(平成24)年4月から本格的な調整を行った。事業内容は当初から丘陵を大きく削平するものであったため、遺構が確認された場合、調査が必要ということで合意した。その後伐採と併行する形で、確認調査を2012(平成24)年6月12日、10月18日に行い、丘陵上で遺構や遺物を確認したため、開発者の調査費負担のもと調査を実施することとなった。

発掘調査は2013(平成25)年4月11日～6月24日に実施した。開発対象面積は6058㎡で、調査面積は1154㎡である。確認調査は宮崎亮一・遠藤茜が行い、調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位

調査地は四王寺山から八つの手状に派生する丘陵のひとつである。細長い丘陵の南北には谷が入り、対象地の南側については深い谷があり、2012(平成24)年6月12日、確認調査を行ったところ、深さ2.7m前後まで柔らかい泥状の黒茶色粘土の堆積層で、その下に遺物包含層を確認したが、遺構を確認するまでには至らなかった。遺物は8世紀後半が主体で、須恵器の坏、壺、蓋3、土師器の甕、皿、坏c、坏a、盤などがあつたが、龍泉窯系青磁や白磁が僅かにあり、平安時代後半以降にも遺物が混入する状況であったことが推測される。調査を行った丘陵上については、遺構面を覆う表土は一律ではないものの深さ50cm前後である。

調査前、丘陵上は現代の墓地と改葬後の墓石が並び、周囲は樹齢50年前後のアラカシやスダジイなどの常緑樹が繁茂し鬱蒼とした森となっていた。丘陵には東側150mの坂本集落からの里道が続いていて、墓地の奥には近現代のゴミが堆積していた。近隣の人たちの話によると、ゴミ回収が公的に行われる前、ここにゴミを捨てていたという話がある。

なお、土地や墓地の所有者は坂本集落在住の人々とその分家した人たちである。

(3) 検出遺構

ここでは現場調査時の所見を中心に記述する。なお、人骨については、部位ごとに取り上げ、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに依頼し分析を行った。人骨から見た性別や年齢、埋葬状態の分析や復元、人骨の形質分析については、p39の(5)に記述しているため、それとあわせてご覧いただきたい。

なお、発掘調査で付した遺構番号(1ST〇〇)と人骨分析の番号(〇号人骨)は同一のものである。

近世・近代墓

1ST003

一辺0.7×0.8m、深さ0.32mの方形墓壇で、棺は残存していなかったが、方形の木棺と推測される。棺内からは染付小椀が出土したが、調査時に埋土と共に掘り出され、出土状態を確認することができなかったが、副葬品と推測される。小椀には「笹紅」という文字があるため、埋葬者は女性である可能性が高い。

1ST004 (Fig. 5)

上部を別の墓の改葬で掘り取られているが、この墓自体の改葬は行われておらず、下半部0.4m程が残っていた。墓壇は大きさ0.9×9.8m、遺構面からの深さ1.22mの方形で、棺材は残っていなかった



Fig. 3 サコ遺跡第1次調査遺構全体図 (1/500)



Fig. 4 サコ遺跡第1次調査墓地部分遺構全体図 (1/150)

が、底面の状況から径 0.5m 程の桶棺と推測される。棺内には人骨が良好に遺存していた。北側で頭蓋骨、その南側で大腿骨などが並んで出土した。なお、人骨分析によりこの墓壙からは 3 体の人骨が検出されている。1 体の年齢は不明だが、他の 2 体は男性と幼児であった。合葬の可能性もあるが、隣接して ST114 や土坑があり、これらを改葬する際に ST004 の墓壙上半部が大きく掘削されており、それらの人骨が混入した可能性も考えられる。

1ST006 (Fig. 5)

墓壙は大きさ 1.04 × 1.04m、深さ 1.3m の方形で、調査では改葬が行われた痕跡はみられなかった。埋葬施設は、底面の釘の出土状況から一辺 0.45m 前後の方形木棺と推測され、頭部を北東に埋葬されていた。頭蓋骨の残りは悪かったが、胸元で下顎骨が検出された。腕は左右同じ形状で抱えるような状態で検出された。脚部は両脚とも膝を折り曲げたまま倒れずに残っていて、中足骨や指骨が左右とも並んだ状態で検出された。

1ST007 (Fig. 5)

墓壙は大きさ 1.12 × 1.08m、深さ 0.71m の方形で、棺内には人骨が遺存し、北西部で頭蓋骨が検出されたが、人骨の残りは悪く、調査時は埋葬状況が掴みづらかった。埋葬施設は人骨の出土状況から方形木棺と推測される。

1ST012 (Fig. 5)

墓壙は大きさ 1.22 × 1.15m、深さ 0.89m の方形で、棺材は腐食し遺存していなかったが、埋葬施設は棺材の痕跡と釘の出土から、一辺 0.45m 四方の方形木棺と推測される。棺内には人骨が遺存し、頭部を北に置いているが、頭蓋骨は残りが悪く、下顎骨が胸元付近で出土した。腕は軽く曲げて左脚は膝を折り曲げた状態で倒れずに残っていたが、右脚は倒れていた。

1ST013 (Fig. 6)

墓壙は大きさ 1.0 × 0.96m、深さは遺構面から 1.43m の方形で、上面には改葬の際のバックホウの痕跡が残っていたが、墓壙底面には達していなかった。棺は径 0.5m 前後の桶棺と推測される。人骨は良好に遺存し、頭部は北東で検出されたが、胸元に転落していた。髪の毛が西側で検出された。脚部は膝を折り曲げた状態で胸元に倒れていた。

1ST014

改葬の際のバックホウの痕跡が大きく入り、改葬痕の北東側に、大きさ 0.7m × 0.6m 以上、深さ 0.84m の円形墓壙が僅かに残っていた。人骨は遺存していなかったが、柔らかい埋土からは、甕の破片が出土している。

1ST017 (Fig. 6)

上部に改葬痕跡がみられるが、墓壙の破壊は少なく、墓壙は大きさ 1.3 × 1.02m、深さ 1.48m の方形である。人骨は土圧で底面に圧縮された状態であったが、良好に遺存し、墓壙北側で頭蓋骨が検出され、両腕は軽く曲げ、胸元で手を合わせたような状態に見える。折り曲げた脚部が胸元の腕の上に重なっている。人骨の左（東）側で「寛永通寶」が出土した。

1ST018 (Fig. 7)

上面は改葬痕跡がみられたが、墓壙下半には達していない。墓壙は大きさ 1.14 × 1.08m、深さ 1.93m の方形である。墓壙から釘が未検出であったことから、埋葬施設は桶棺であったと推測され、棺内には人骨が良好に遺存していた。人骨は墓壙南側にやや片寄って検出された。

1ST019

墓壙は大きさ 1.06 × 1m 以上、深さ 0.87m の方形で、人骨は頭蓋骨を中心に椎骨など僅かな骨が遺存していた。

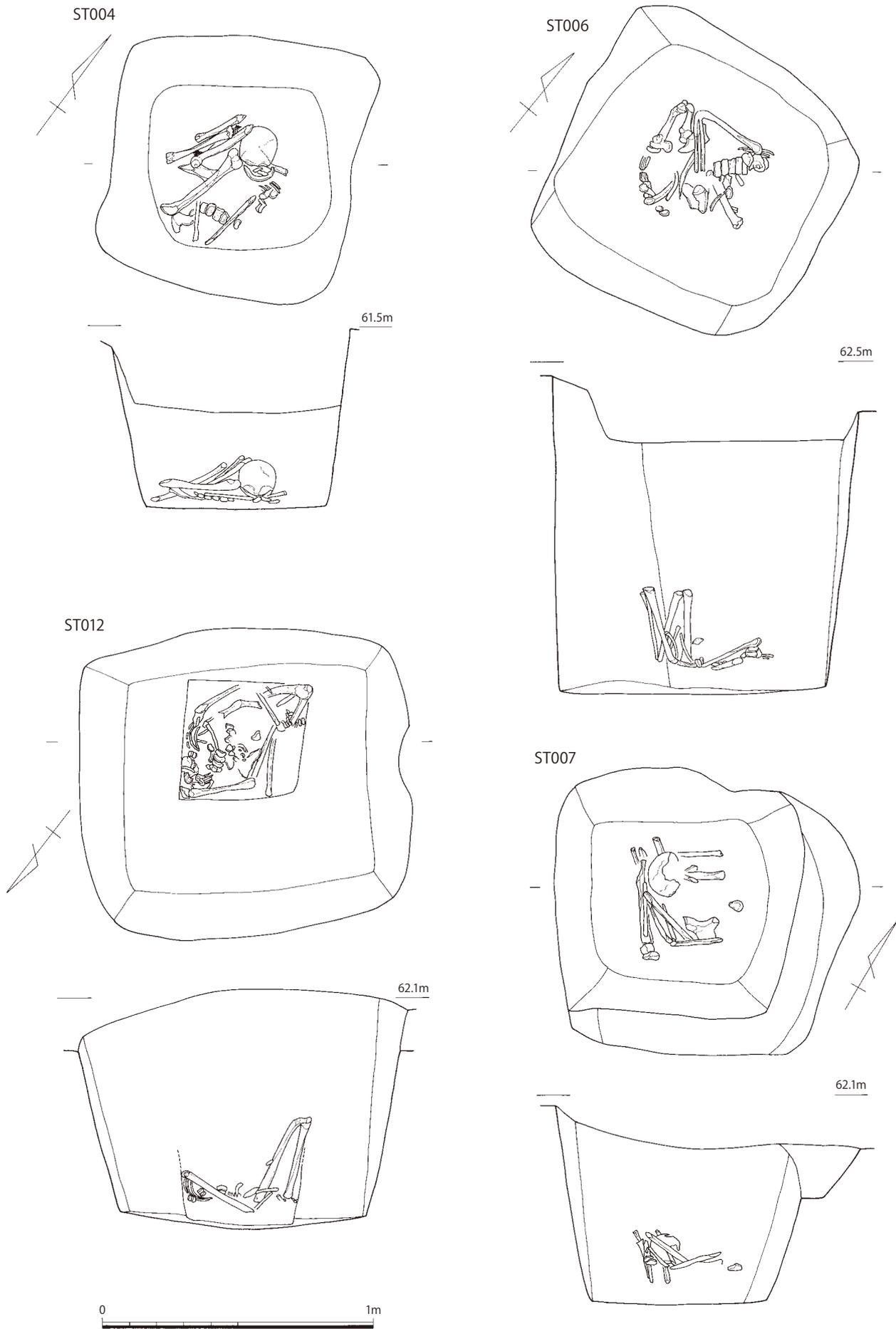


Fig. 5 サコ遺跡 1ST004・006・007・012 遺構実測図 (1/20)

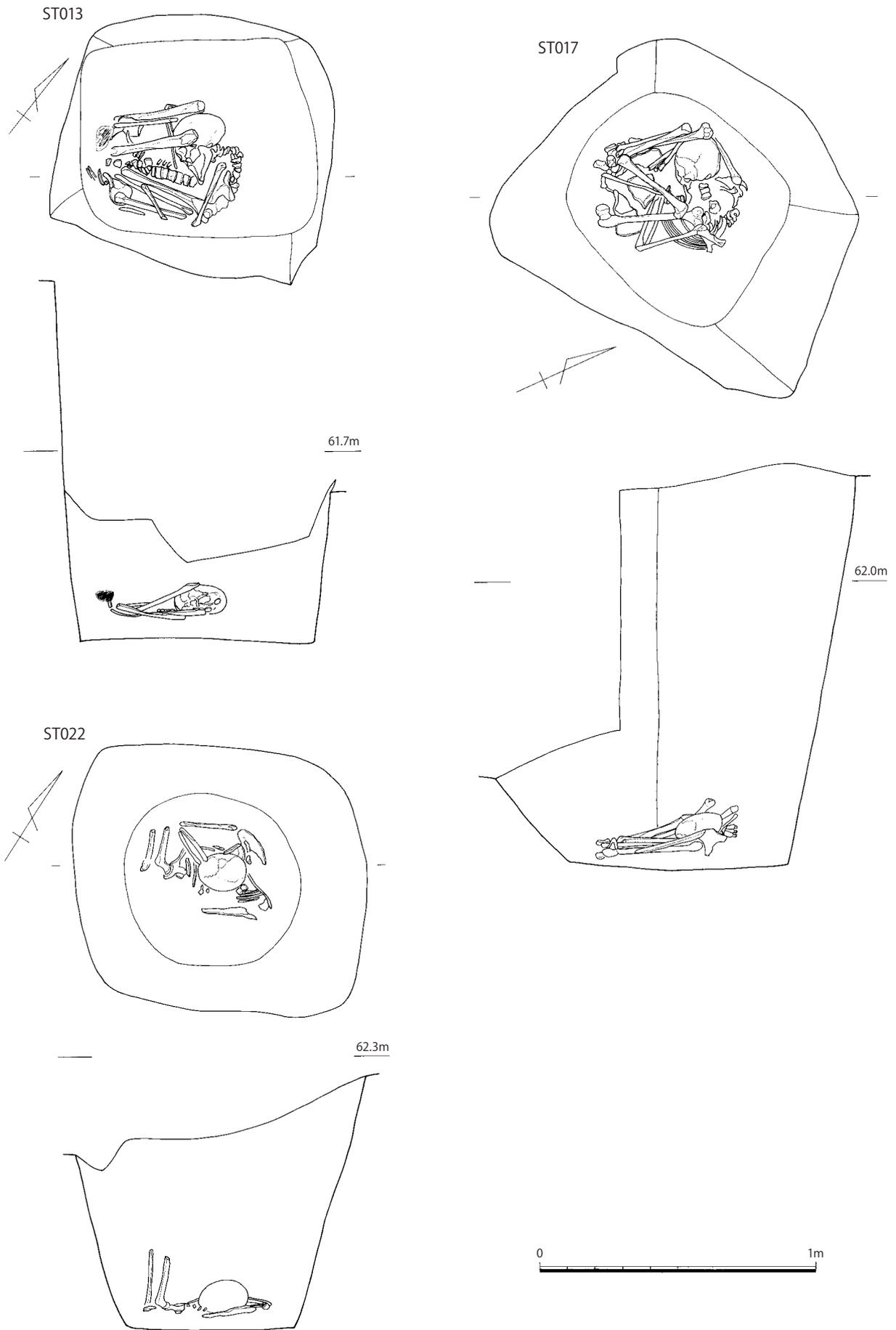


Fig. 6 サコ遺跡 1ST013・017・022 遺構実測図 (1/20)

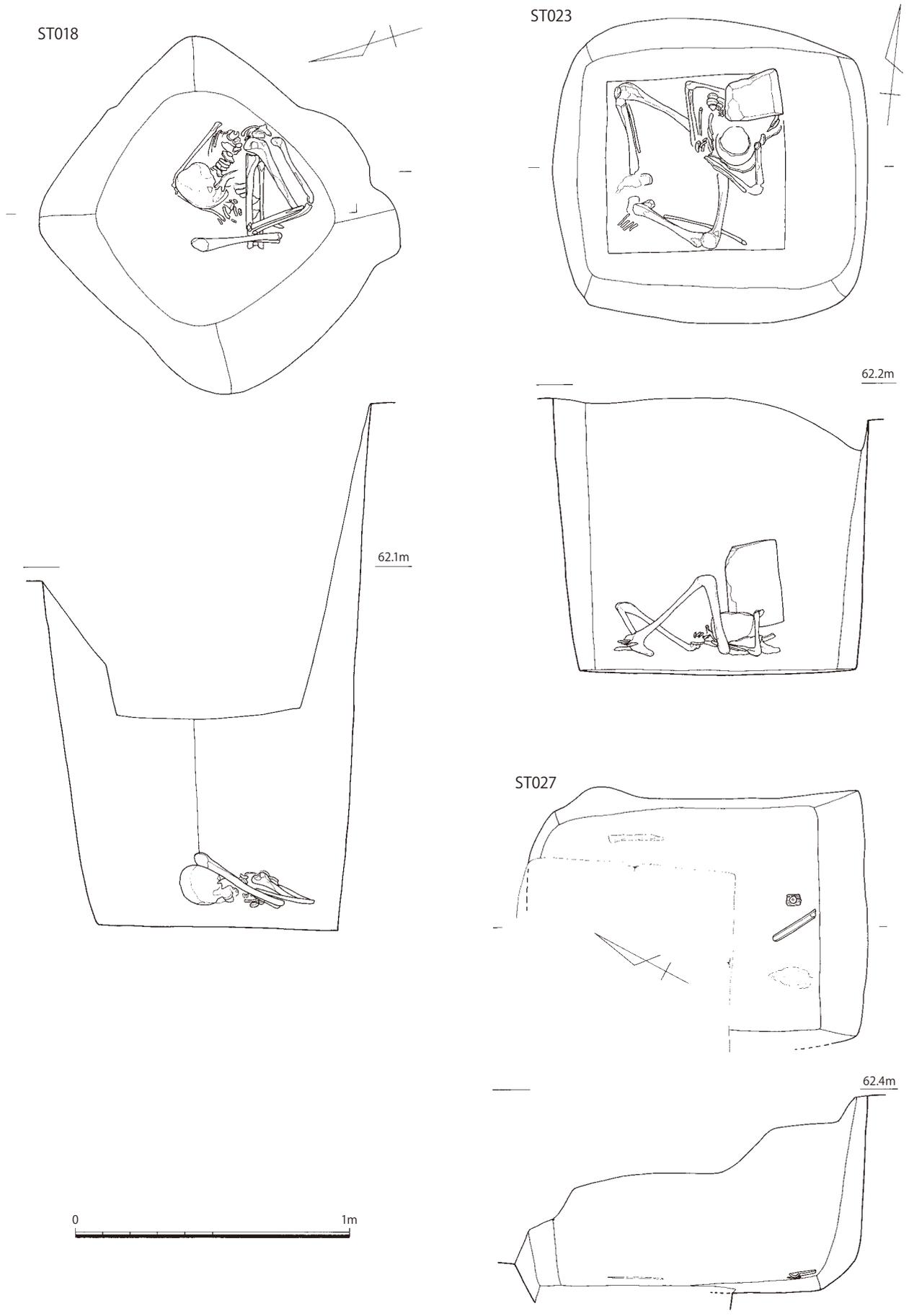


Fig. 7 サコ遺跡 1ST018・023・027 遺構実測図 (1/20)

1ST021

墓壇は大きさ 1.16 × 0.98m、深さ 1.63m の方形で、径 0.48m の円形の桶棺痕跡が確認された。その底部には黒色土が堆積し、それに混じって椎骨が僅かに遺存し、白灰色粘土塊の端で歯が検出された。

1ST022 (Fig. 6)

墓壇は大きさ 1.06 × 0.97m、深さ 0.98m の方形で、径 0.5m 程の桶棺の棺内に人骨が遺存していた。頭蓋骨は墓壇中央で検出された。

1ST023 (Fig. 7)

墓壇は大きさ 1.14 × 1.12m、深さ 1.2m の方形で、大きさ 0.64 × 0.65cm の方形木棺の棺内には人骨が良好に遺存していた。頭部を北東にし、身体は方形木棺の対角線に置かれていた。脚部は膝を折り曲げ、棺壁にもたれた状態で立っていた。両腕は折り曲げられ、股付近で手を結んでいた。頭部がある場所には花崗岩の切石 (0.17 × 0.18m、高さ 0.3m) があって、上半身の人骨は圧縮された状態になっていた。この切石は棺蓋上に置かれたものが棺の腐朽により落下したものと考えられる。また、底面で小さな炭片が多くみられたため、棺底に炭を敷いていた可能性が考えられる。

1ST024

墓は改葬で攪乱され、墓壇は全く残っていない。改葬状況から一辺 1m 前後の墓壇と推測される。

1ST026

墓壇は径 1.15m 前後、深さ 1.5m の円形だが、改葬によりほとんどが壊され、墓壇西側が僅かに残る。埋土からは、改葬時に混入したとみられるガラス片のほか大腿骨や肋骨などの骨の残片や棺として使用されたと推測される甕片が出土した。

1ST027 (Fig. 7)

墓壇は大きさ 1.25 × 0.92m、深さ 0.72m の方形で、上層や北側半分が改葬時の攪乱によって荒らされ、埋土中からは大腿骨など骨の一部が出土した。残存部には腐食した骨くずが残るのみで、埋葬状態は復元できないが、骨くずの広がり状態から、方形木棺であったと推測される。また、底部に近い位置で6枚の「寛永通寶」が棺材の木片に張り付いた状態で出土したため、棺底に置かれたものが錆ついて残ったものと考えられる。棺材は腐食しているが、厚さ 0.8 cm 以上の杉材を使用している。

1ST029 (Fig. 8)

墓壇は大きさ 0.82 × 0.78m、深さは遺構面から 0.8m の方形で、長辺 0.45m 前後、短辺 0.32m の方形棺材の残片が検出された。棺材は腐食し、粉状になっていたが、僅かに鉄釘が残っており、方形棺と推測される。棺内に人骨は遺存していなかった。

1ST031 (Fig. 8)

墓壇は大きさ 1.58 × 1.7m、深さ 1.28m の長方形で、その中央に長さ 0.81m、幅 0.37m 前後、深さ 0.3m 以上の長方形木棺を検出した。棺材は腐食していたが、粉状になった棺材から厚さ 0.2cm 前後と推測される。北西隅と南東隅から小さな鉄釘が1点づつ出土した。棺の深さは大腿骨の出土状況から 0.3m 以上と推測される。棺底は明確な棺材は残っていないが、棺材もしくは遺体の腐食土とみられる黒茶色土を検出した。棺内に残る人骨の残存状況は良好とは言えないものの、埋葬状態は復元でき、頭部を北西に置き、脚を屈曲させている。上腕骨は棺の両端にあり、尺骨が棺の中央付近にあることから、腕を胸元に置いた状態であったと推測される。副葬品は出土していない。現場での単純な計算だと埋葬された人物の身長は 130 ~ 140 cm 程と推測される。

1ST032 (Fig. 8)

墓壇は大きさ 0.9m 以上 × 1.0m、深さ 0.45m の方形で、人骨が良好な状態で遺存していた。棺材は全

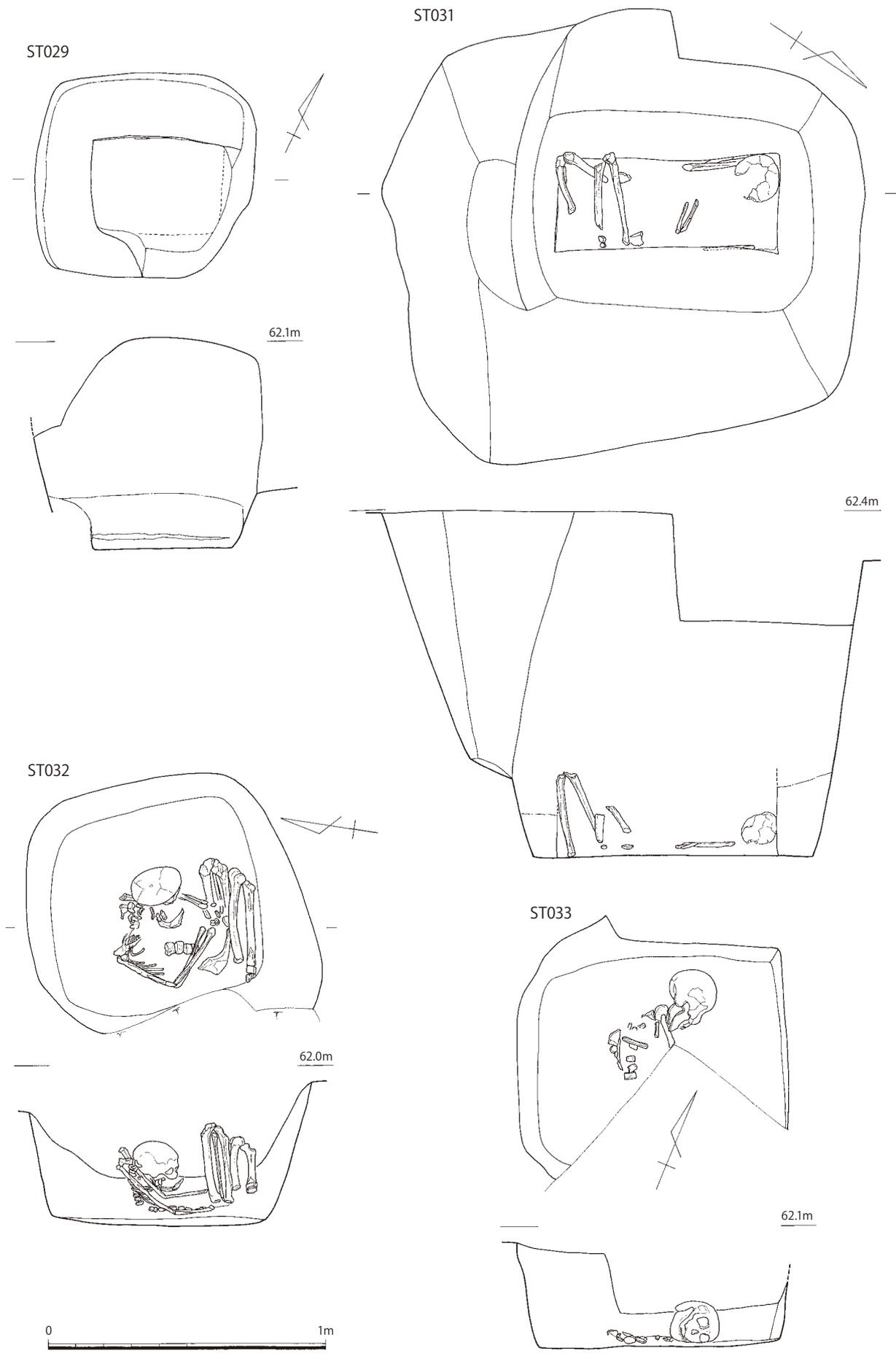
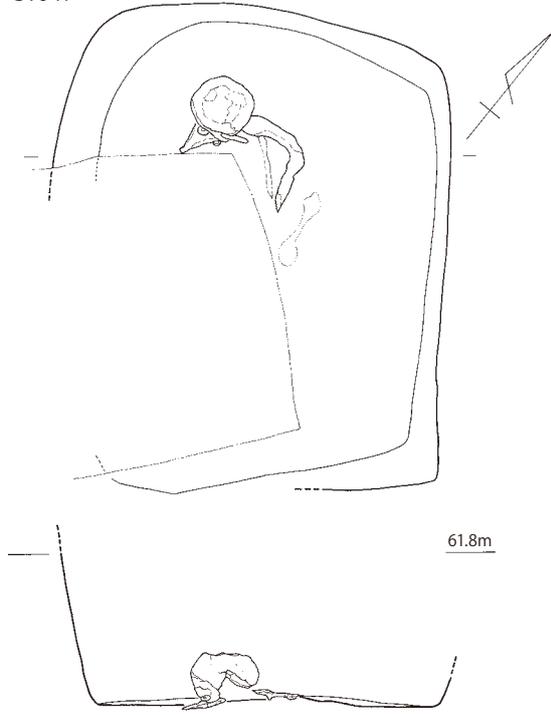
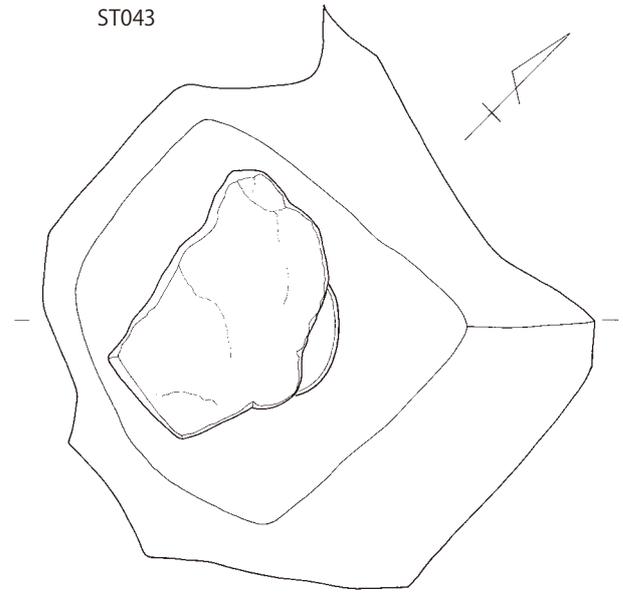


Fig. 8 サコ遺跡 1ST029・031・032・033 遺構実測図 (1/20)

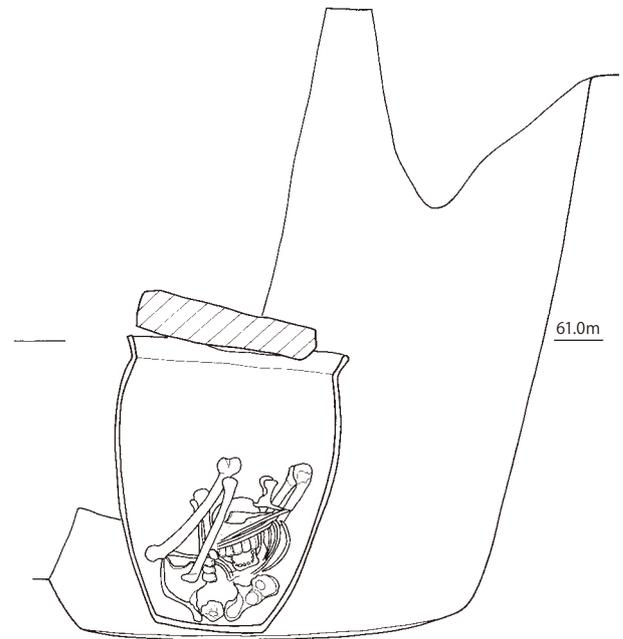
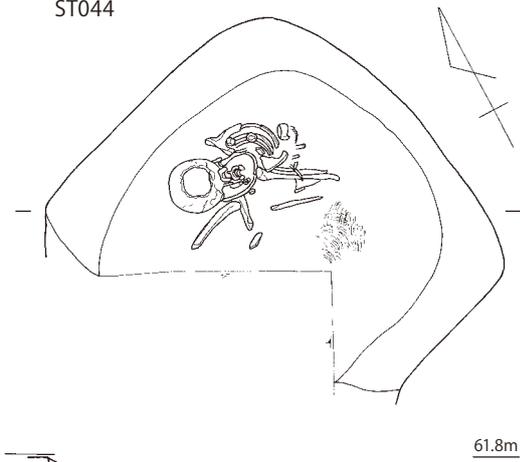
ST041



ST043



ST044



棺内平面図

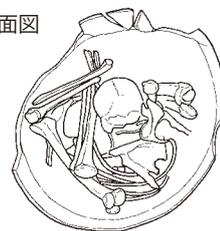


Fig. 9 サコ遺跡 1ST041・043・044 遺構実測図 (1/20)

く残っていなかったが、釘は出土しておらず、人骨の出土状況から直径0.5m程の桶棺と推測される。遺体は棺桶内に丸まった状態で埋葬され、頭蓋骨は左腕上にずれ落ちていたが、その他の部位は、埋葬時に近い位置を保っていた。体位は頭部を南に置き、両脚は膝を折り曲げ、両腕は軽く曲げ、腹上に手を置いている。「寛永通寶」が指骨と共に出土したため、手に持たせた状態で埋葬された可能性が高い。

1ST033 (Fig. 8)

墓壇は大きさ0.97×0.95m以上、深さ0.41mの方形で、南側は改葬痕が入っている。頭蓋骨は墓壇北側で検出されたが、それ以外の人骨の残りは悪い。釘は出土しておらず桶棺と推測される。

1ST034

墓壇は大きさ0.86×約1m、深さ0.42mの方形で、平面形状から墓と考えられるが、人骨は確認できていないため、墓以外の可能性もある。

1ST037

墓壇は大きさ0.8m以上×1.16m、深さ0.61mの方形を呈するが不定形で、西側に改葬痕(S-36)があり、墓壇は破壊され、墓壇と改葬穴の埋土に甕片や人骨が混ざっていたため、棺には甕が使用されていたと推測される。埋土には大きさ0.65×0.35m、厚さ0.1mの花崗岩の自然石があり、甕の蓋石と推測される。

1ST041 (Fig. 9)

墓壇は大きさ1.05×1.25m、深さは遺構面から0.92mの方形で、上面と西側が改葬の掘削で破壊されている。墓壇北側の改葬を免れた部分で頭蓋骨が検出されたが、その他の部位は骨くずの状態、埋葬状態や棺の種類は全く復元できないが、釘が出土しており木棺と推測される。頭蓋骨近くからは「寛永通寶」と蜻蛉玉が出土した。

1ST042

墓壇は大きさ1.24×1.2m、深さ1.78mの方形で、改葬されているが、墓壇の形状は良好に残っている。埋土中に人骨はなく、甕片が出土していることから、棺には甕が使用された可能性が高い。

1ST043 (Fig. 9)

墓壇は大きさ1.34×1.2m、深さ1.67mの方形で、棺は高さ0.75mの甕で蓋石もそのまま残されていたが、蓋石は僅かにずれていて、内部が一部見える状態であった。しかし、内部に土砂の混入は少なく、比較的きれいに人骨が遺存していた。

1ST044 (Fig. 9)

墓壇は大きさ0.9以上×1.0m、深さ1.1mの方形で、墓壇の一部改葬した痕跡がみられるが、人骨は残されている。頭蓋骨は墓壇北西部で検出された。南東部の離れた位置で毛髪が検出された。毛髪は長さ3cm前後であった。釘は出土しておらず、木棺に埋葬されていたと推測される。

1ST046

調査区端で全形は掴めていないが、墓壇が大きさ1.56×0.8m以上、深さ0.55mの楕円形である。人骨等は遺存していなかった。

1ST048

墓壇は大きさ1.4×2.14m、深さ0.91mの長方形で、バックホウによる改葬痕跡が残されている。埋土中には僅かな人骨と甕の破片、大石が数個出土した。その中に甕棺の蓋石と推測される大きさ0.6×0.5m、厚さ0.2mの花崗岩の平たい石も出土した。

1ST049

墓壇は大きさ1.3×1.18m、深さ1.95mの方形で、改葬された様子が伺われ、埋土中からは大石が数

個検出され、骨片も散在していた。

1ST052

北側を大きく改葬で攪乱され、墓壙は僅かに残るのみであるが、径 0.7m 以上、深さ 0.96m の円形をなすと考えられる。

1ST053

墓壙は大きさ 1.32 × 1.7m、深さ 1.37m の長方形で、墓壙中央に改葬痕が入っている。残存する底部付近で人骨らしいものが粉状態で検出された。

1ST056 (Fig. 10)

墓壙は大きさ 1.0 × 1.1m、深さ 1.67m の方形で、中央に径 0.47 ~ 0.5m の桶棺が検出された。桶は一部部材が残っていて、幅約 0.07m、厚さ 0.01m 程の縦板が使用されていた。桶内北側で頭蓋骨が検出されるなど人骨は遺存するものの、残り具合は良くなく、骨もブヨブヨで腐食が目立つ。

1ST057

墓壙はほとんどが改葬で攪乱され、東側に僅かに残るだけで、墓壙は一辺 0.6m 以上、深さ 0.78m の方形と推測される。

1ST058

墓壙は改葬で攪乱されほとんど残っていないが、深さ 0.44m の墓壙が、僅かに円形状に残る。

1ST059

墓壙は改葬で攪乱され、北側に僅かに残る程度で、形状は明確でないが、一辺 1.2m 程の墓壙と推測される。

1ST061 (Fig. 10)

上部は改葬で大きく掘り取られているが、墓壙底部付近が深さ 0.2m 程残っていて、墓壙の大きさは 0.62 × 0.72m、深さは遺構面から 1.3m の方形で、底部近くで僅かな骨片と銭貨と鏝や柄が出土した。柄の周辺には黒光りする薄い膜が出土し、棺材もしくは副葬品をおさめていた箱等に漆が塗られていた可能性が高い。銭貨は黒褐色に炭化した塊の中から出土したため、何か布のようなものに包まれていた可能性が考えられる。墓壙の形状や甕が出土していない状況から、方形木棺に埋葬されたものと推測される。

1ST062

墓壙は改葬で攪乱されているが、大きさ 0.8 × 1.1m 以上、深さ 0.7m の方形墓壙が僅かに遺存していた。

1ST063

長さ 2.3m の改葬痕の東端の底面に、大きさ 0.74 × 0.84m、深さ 1.3m の方形墓壙が遺存していた。

1ST064

墓壙は大きさ 0.8m 以上 × 1.2m、深さ 0.67m の方形だが、墓壙内の埋土から、頭蓋骨が中位で出土し、その他の骨の一部が埋土中に散乱している状況であったため、改葬で人骨が攪乱されていることがわかった。また、棺材の木片に付いた留金具が出土しており、方形木棺を推測される。

1ST066

墓壙は大きさ 0.82 × 0.82m、深さ 0.96m の方形で、底部には人骨が僅かに遺存していた。

1ST067

墓壙は大きさ 1.14 × 1.1m、深さ 1.67m の方形で、底部近くで頭蓋骨の可能性のある黒褐色土の塊が出土したが、完全に残る骨はなく粉の状態であった。墓壙上面は改葬した痕跡がみられるが下半までは

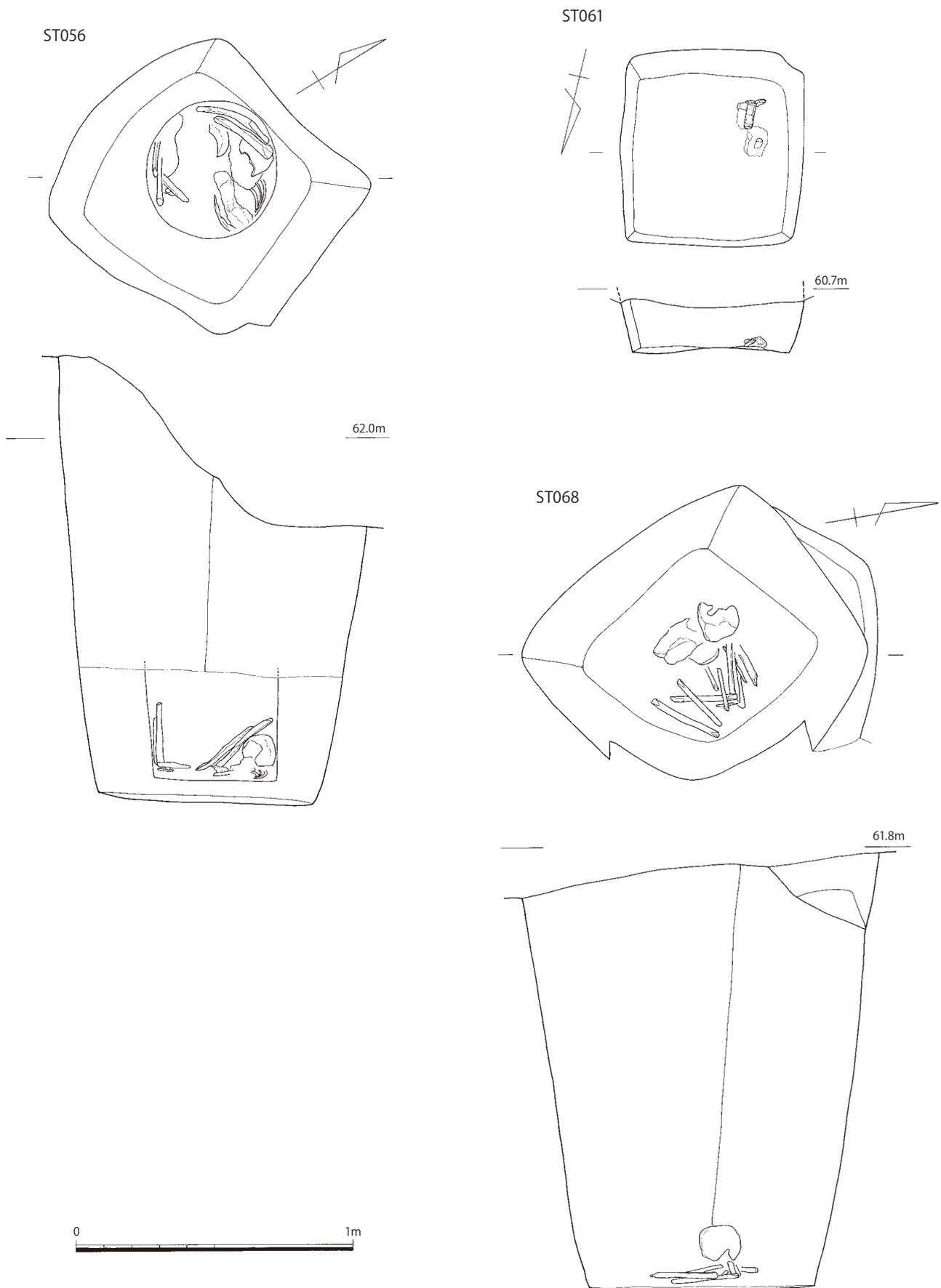


Fig. 10 サコ遺跡 1ST056・061・068 遺構実測図 (1/20)

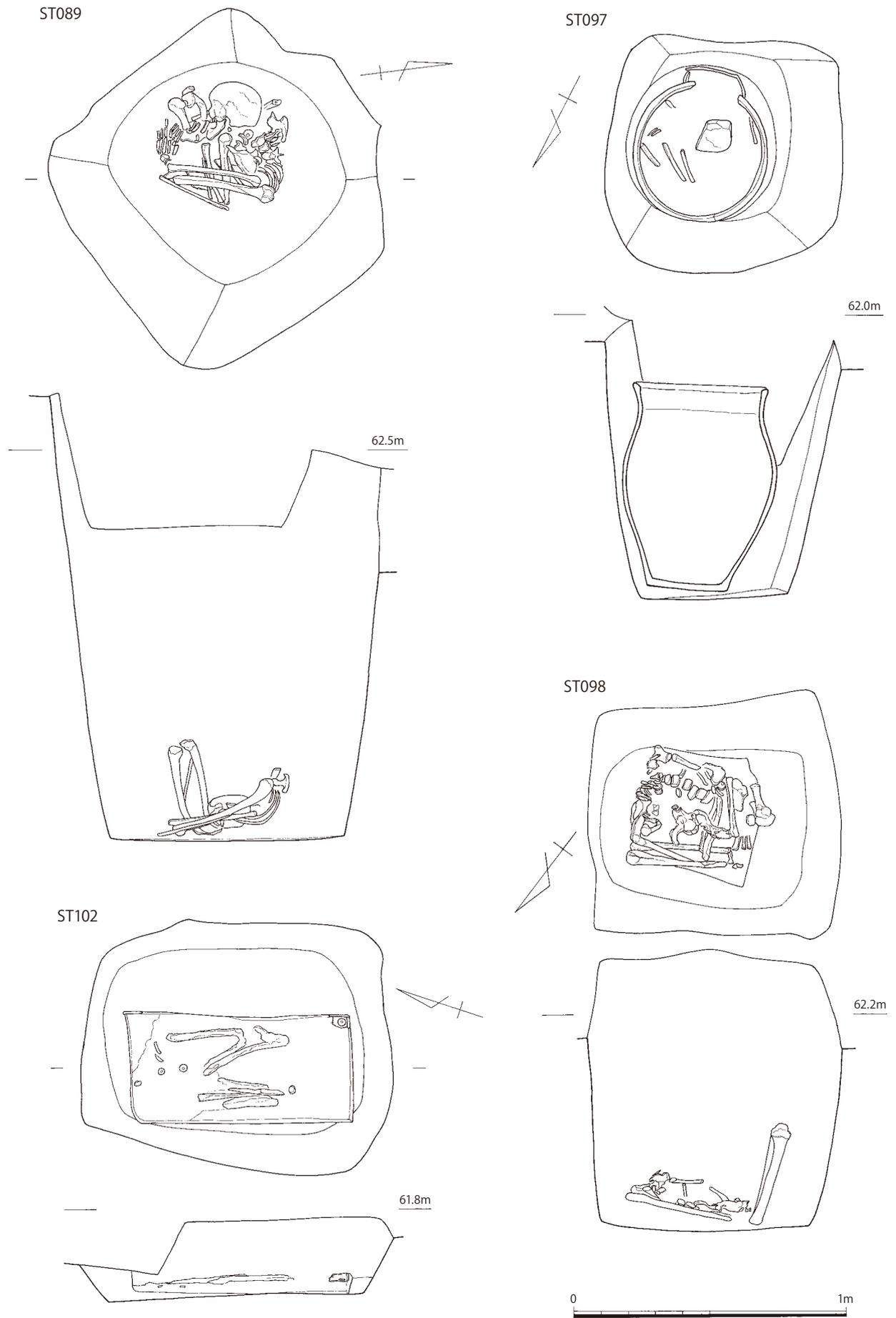


Fig. 11 サコ遺跡 1ST089・097・098・102 遺構実測図 (1/20)

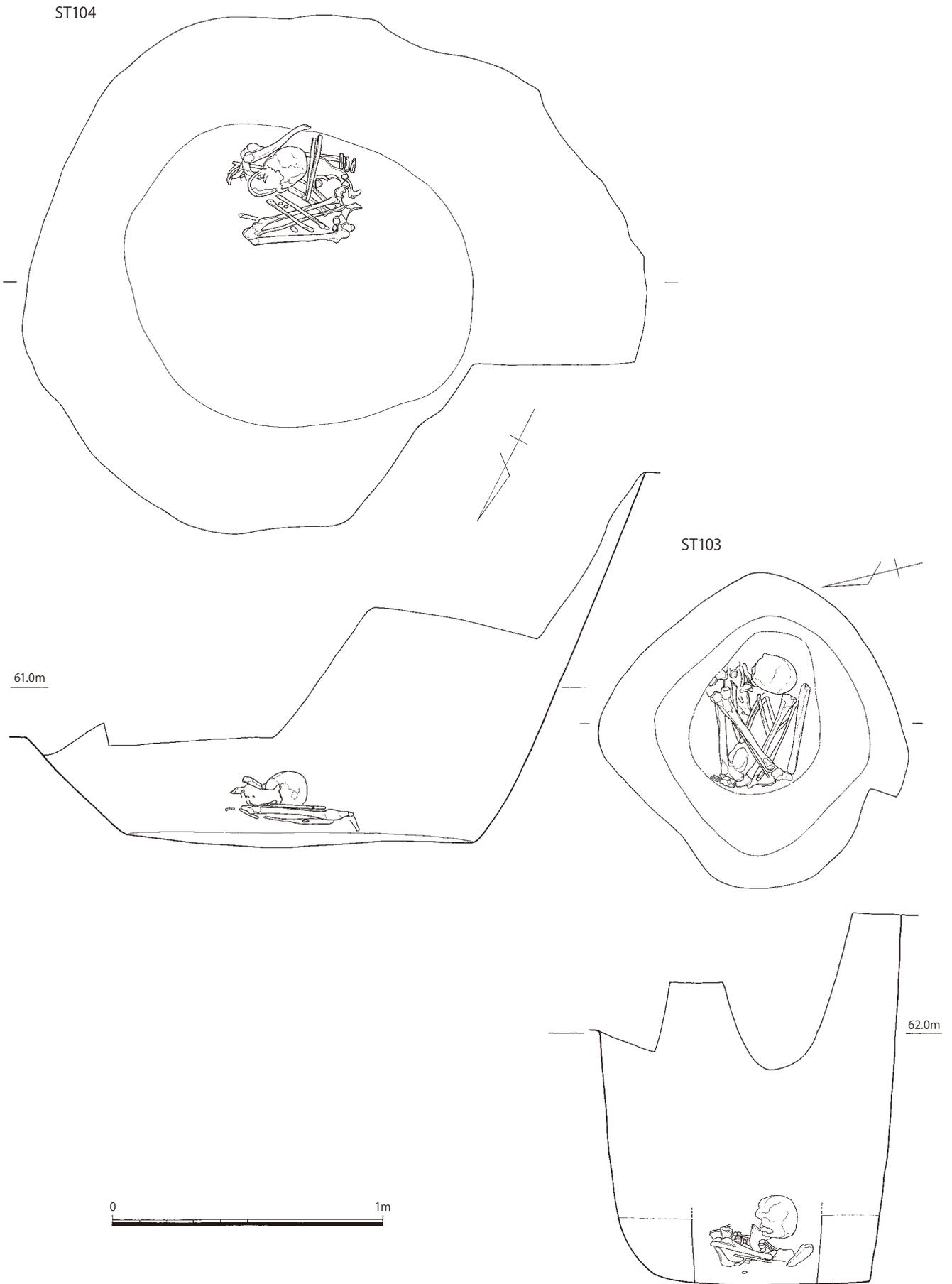


Fig. 12 サコ遺跡 1ST103・104 遺構実測図 (1/20)

達していない。

1ST068 (Fig. 10)

墓壙は大きさ $1.0 \times 1.06\text{m}$ 、深さ 1.6m の方形で、埋土は腐食土の混ざり込みがあり、上面は改葬した痕跡が伺える。しかし、墓壙底面には人骨が残る。人骨の残り具合は良好ではないが、墓壙東側で頭蓋骨が検出された。

1ST069

墓壙は大きさ $0.9 \times 0.7\text{m}$ 以上、深さ 0.62m の方形とみられる。墓壙北側は大きく改葬されている。

1ST071

調査区際で確認されたもので、上面は改葬で攪乱され、墓壙の形状は掴めないが、方形木棺の痕跡と人骨が遺存していた。釘が出土することから、棺は一辺 0.5m 程の方形木棺と考えられる。調査区際であったため、棺内の状況は調査できず明確でない。

1ST072

墓壙は $1.26 \times 1.34\text{m}$ 、深さ 1.28m の方形で、墓壙中央は大きく改葬されている。

1ST077

墓壙は改葬で南側を削平されていたが、大きさ $0.74 \times 0.58\text{m}$ 以上、深さ 0.88m の円形墓壙が僅かに遺存していた。

1ST078

上面は改葬で攪乱されているが、底面までは達しておらず、大きさ $1.2 \times 1.1\text{m}$ 、深さ 1.67m の方形墓壙が遺存していた。底面では骨片が僅かに出土した。埋土から甕や釘の出土がないため桶棺の可能性が高い。

1ST079

墓壙上面は改葬で攪乱されているが、底面までは達しておらず、大きさ $1.04 \times 1.06\text{m}$ 、深さ 1.66m の方形墓壙が遺存していた。底面で骨片が僅かに出土した。埋土から甕や釘の出土がないため桶棺の可能性が高い。

1ST081

墓壙は改葬で大きく攪乱されていたが、大きさ $1.1 \times 0.5\text{m}$ 以上、深さ 1.11m の方形墓壙が僅かに遺存していた。釘が出土したことから方形木棺の可能性が高い。

1ST083

墓壙は径 0.64m 、深さ 0.71m の円形で、北半分を改葬で削平されている。

1ST084

墓壙は大きさ 0.6m 以上 $\times 1.2\text{m}$ 、深さ 1.59m の方形で、改葬により半分以上破壊されていたが、残存部底面近くで径 0.5m 程の桶棺の痕跡が確認でき、棺内には人骨が少量遺存していた。

1ST089 (Fig. 11)

墓壙上面は改葬で攪乱されているが、墓壙底面には達していない。墓壙は大きさ $1.11 \times 1.14\text{m}$ 、深さ 1.66m の方形で、人骨が良好に遺存する。墓壙内からは釘が出土しているため、一辺 0.5m 前後の方形木棺と推測される。遺体は頭部を北としているが、頭蓋骨や右肩が胸元の方へ崩れ落ちており、頭蓋骨の下から右腕が検出された。脚部は膝を折り曲げ、右脚は直立したままであるが、左脚は胸元に倒れている。

1ST094

墓壙は大きさ $0.78 \times 0.86\text{m}$ 、深さ 0.23m の方形で、比較的浅い。棺材は未確認であったが、埋土中

には細かい骨片が散在していた。

1ST096

墓壙は大きさ 1.26 × 1.46m、深さ 0.74m の方形で、墓壙中央に改葬痕跡が入る。

1ST097 (Fig. 11)

墓壙は大きさ 0.87 × 0.87m、深さ 1.03m の方形で、高さ 0.76m、口径 0.5m の甕棺が据えられていたが、蓋石は残っておらず、棺内は礫混じり土が充満していた。甕の一部は欠損し、その破片は棺内の底面近くで出土した。人骨は棺底に僅かに遺存する程度であったため、改葬し人骨を取上げたものと推測される。

1ST098 (Fig. 11)

墓壙は大きさ 0.94 × 0.93m、深さ 1.05m の方形で、北側は ST097 と切り合い、ST097 の改葬で掘り方上部は削平されていた。棺材は残っていなかったが、痕跡が僅かに残っていて、釘も出土することから、およそ 0.45m 四方の方形木棺であったことがわかる。棺内には人骨が遺存していた。体位は頭部を北東に置くが、頭蓋骨は残りが悪く、胸元に落下している。両脚は膝を折り曲げ、左脚は直立したままであった。人骨は全体的に黒色土に覆われ、底面には 1cm 程の炭層のような黒色土が堆積している。「寛永通寶」が出土している。

1ST102 (Fig. 11)

墓壙上部は改葬により大きく削平されているが、底面には達していない。墓壙は大きさ 0.94 × 1.16m、周囲の遺構面から深さ約 0.73m の長方形で、墓壙中央には棺の痕跡が残り、南北隅には棺の板材が遺存していた。棺は 0.82 × 0.4m の長方形木棺である。棺内の人骨の残りは悪く、長く太い大腿骨が残り、肋骨がその北側から見つかったため、頭部は北と推測される。遺体があった付近の底面には黒灰色土が堆積していた。その黒灰色土に混じって、「寛永通寶」が中央北側から 2 点、南東隅からは棺の木材とその上に置かれた「寛永通寶」が 1 点出土した。

1ST103 (Fig. 12)

墓壙は大きさ 1.0 × 1.04m、深さ 1.38m の方形で、底面近くには棺の痕跡が残り、大きさ 0.49 × 0.52m の円形桶棺であることがわかる。棺内の人骨は良好に残り、体位は東に頭部を置くが、頭部は若干南側に転落している。腕は曲げて胸元に置いている。脚を折り曲げた後、土圧で腕の上に重なっている。胸元付近から「寛永通寶」が出土した。

1ST104 (Fig. 12)

墓壙は大きさ 2.23 × 2.0m、深さ 1.44m の円形で、とても大きな墓壙であるが、改葬痕 (S-101) の下層から検出されたこともあり、改葬痕跡も含まれている可能性がある。その墓壙底部には人骨が良好に遺存していた。人骨は若干灰混じりのような土に覆われ、人骨の下にも灰が堆積している。灰は有機物が腐ったものである可能性がある。

1ST107

墓壙は改葬で大きく削平され形状が不明確だが、長さ 1.6m 程、深さ 0.5m である。埋土中で頭蓋骨が出土したが、原位置を保っておらず、改葬時に残されたものとみられる。

1ST108

墓壙は径 1.1m、深さ 1.04m の円形で、改葬が行われたようで、埋土から甕の破片が少量出土している。

1ST109

墓壙は 0.5m 以上 × 0.7m 以上、深さ 0.17m の方形で、浅く形状も不明瞭であったが、埋土からは釘が多く出土した。

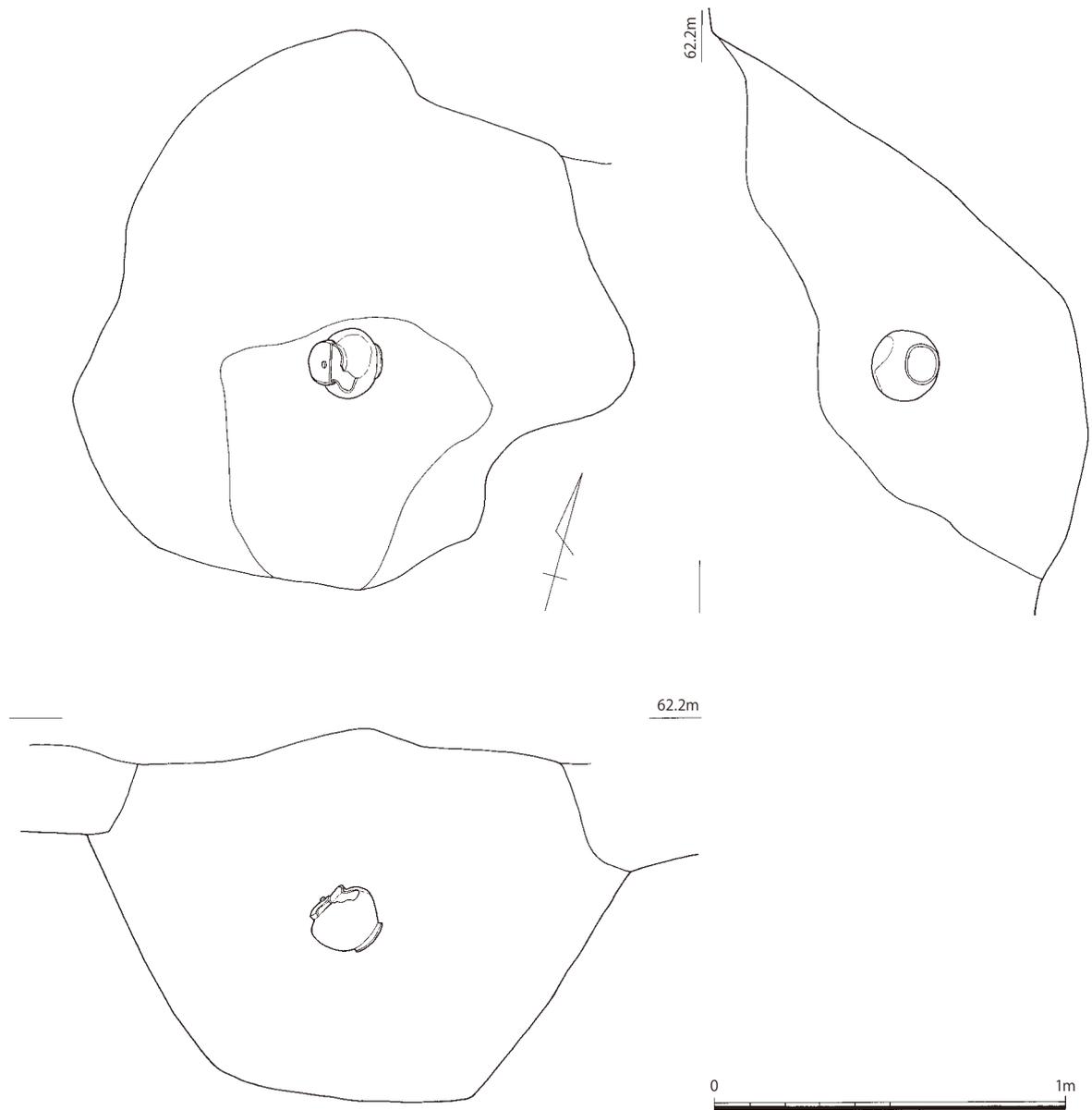


Fig. 13 サコ遺跡 1SX001 遺構実測図 (1/20)

1ST111

上面は改葬で攪乱されていて、残存する墓壙は径約 0.7m、深さ 1.26m の円形である。

1ST112

改葬の攪乱で大きく削平され、一辺 1.02m、深さ 0.97m の方形墓壙が僅かに残る。改葬痕跡の SX088 からは、陶器の甕の破片が出土しており、棺には甕が使用されていたと推測される。

1ST113

北側を改葬で大きく削平されているが、径約 1.1m、深さ 0.87m の円形墓壙が残る。

1ST114

墓壙は 1.1m × 1.2m 以上、深さ 0.54m の方形状で、南側は改葬で攪乱されている。

1ST116

墓壙は部分的に改葬で攪乱されているが、大きさ 0.9 × 1.54m、深さ 1.0m の長方形墓壙である。人骨は確認できていないが、形状から墓と考えられる。

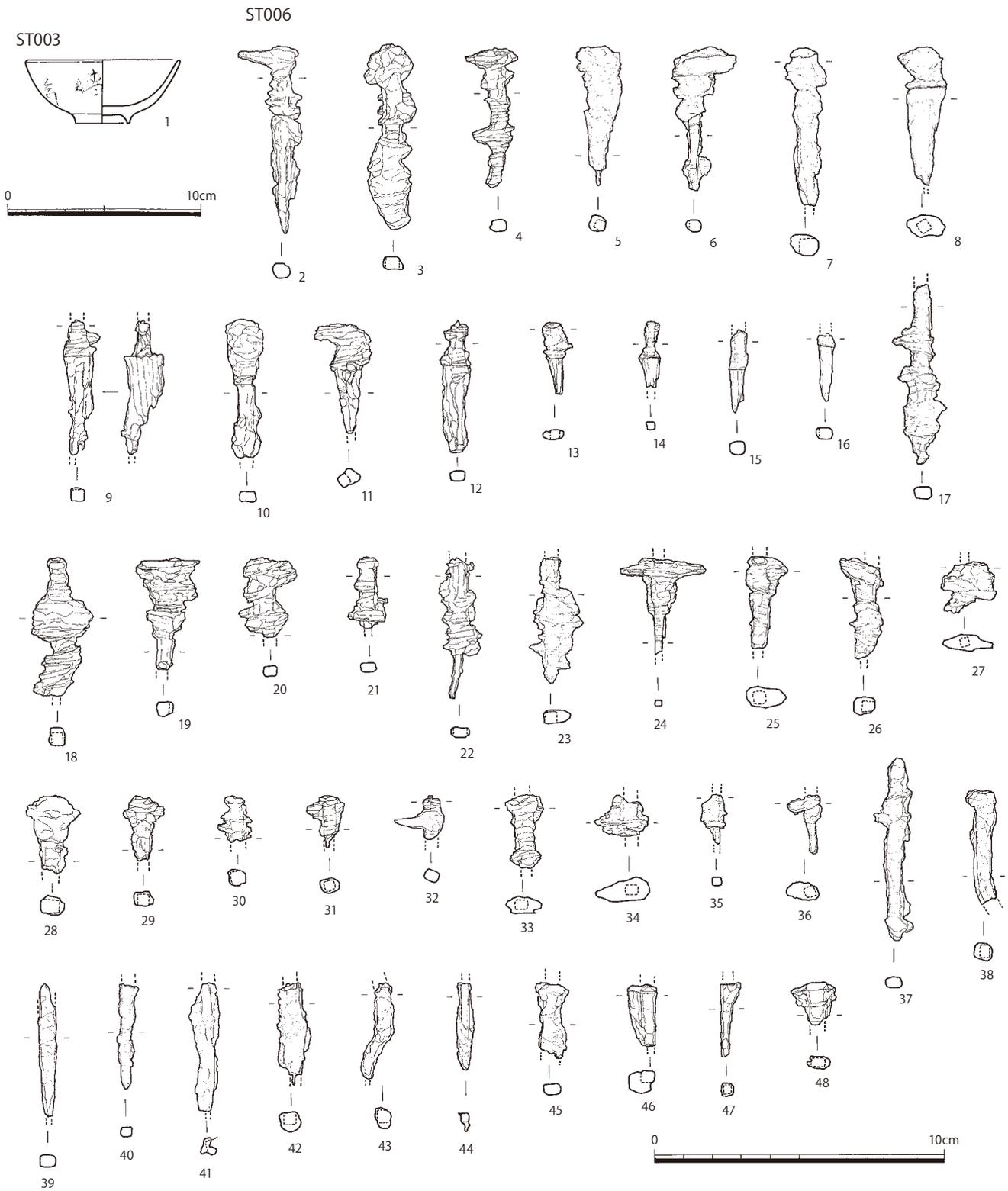


Fig. 14 サコ遺跡 1ST003・006 出土遺物実測図 (1は1/3、金属製品は1/2)

溝

1SD005

調査区東側で検出された溝。埋土は明褐色土で、幅4.4m前後、深さ0.73～1.4mで、南に向かって深くなっている。この溝を境に墓地が始まるのだが、遺物に近世以降のものがいないため、墓地とは無関係の堀切のような役割を持った溝の可能性も考えられる。

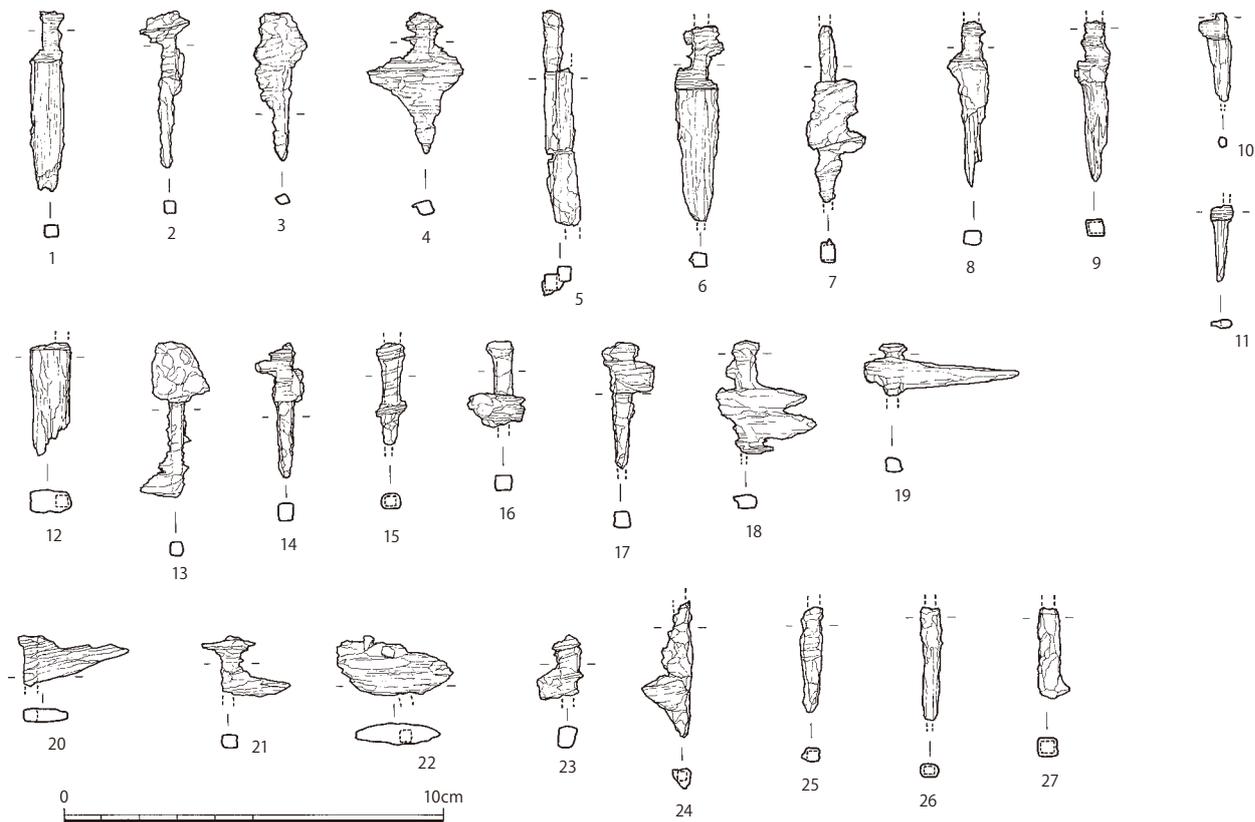


Fig. 15 サコ遺跡 1ST007 出土遺物実測図 (1/2)

その他の遺構

1SX001 (Fig. 13)

丘陵上部の南面する位置から、蓋を伴った短頸壺が1点出土した。しかし、周囲の埋土の状況から、当初の位置を保っておらず、壺の内部も新しい土に入れかわっていた。丘陵上から奈良時代の遺物が1点も出土していない状況から、生活に伴って廃棄したものとは考えにくく、蔵骨器もしくは何らかの祭祀のために埋められたものと推測される。

(4) 出土遺物

墓

1ST003 出土遺物 (Fig. 14)

肥前系磁器

小椀 (1) 口径 8.0 cm、器高 3.3 cm。全体に淡青白色釉を施し、外面に淡藍色釉で「博(傳?)多はし口町お笹紅」と描く。

1ST006 出土遺物 (Fig. 14)

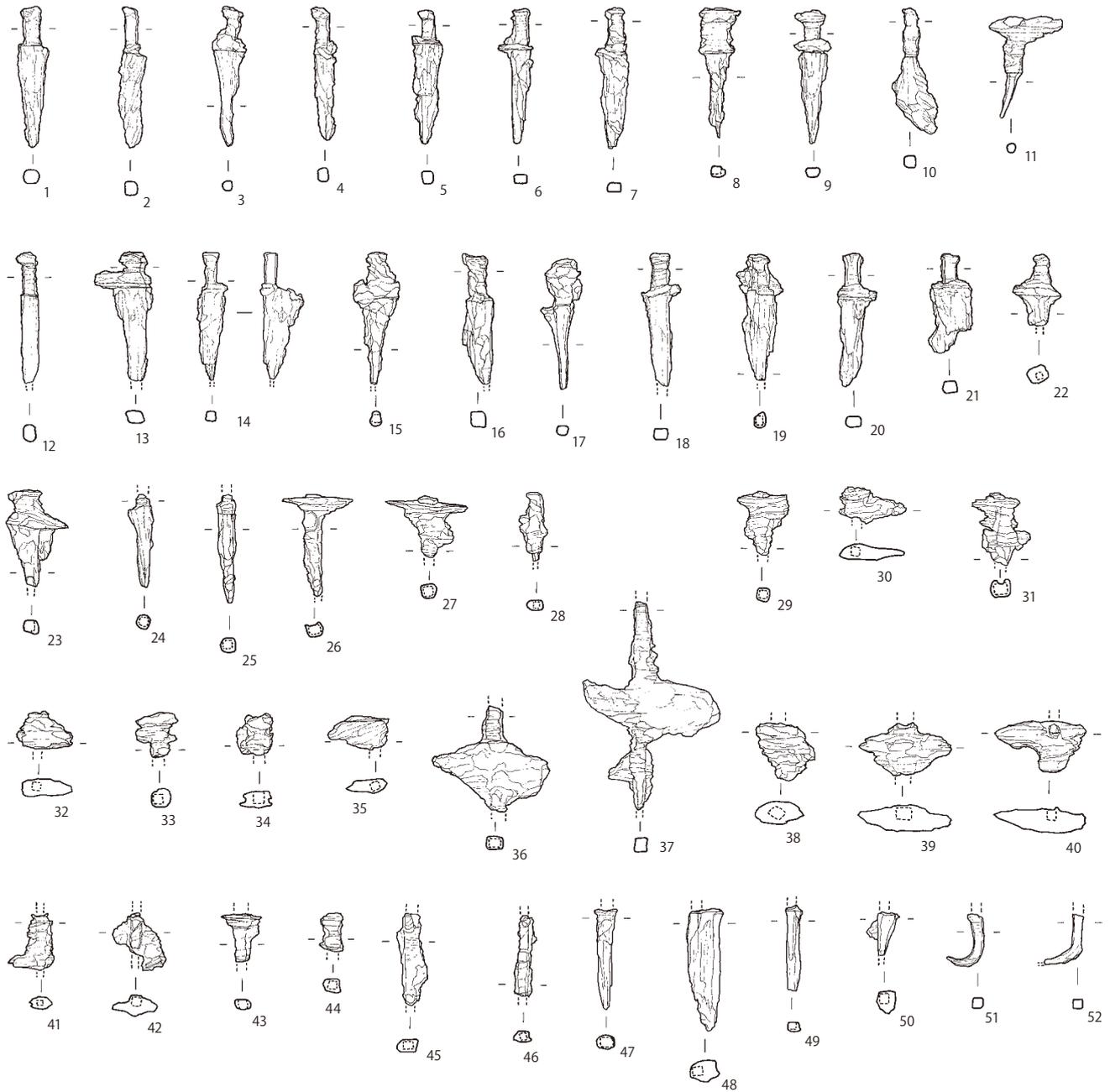
金属製品

鉄釘 (2~48) 断面方形の和釘で、木質が錆び付き遺存する。釘の一辺は最大 0.3~0.4 cm である。2~16 は 2 枚の板材を打ち抜いた釘で、釘に錆び付いて残る木質は上板が横目、下板が縦目である。2~6 は完形で、長さは 2・3 が 6.5 cm と 6.45 cm。4~6 が 4.8~5.0 cm。17~36 は横目の木質が残る。37~48 は木質の残りは少ない。木質から推測される上板の厚さは 1.25~1.4 cm と 2.2 cm である。

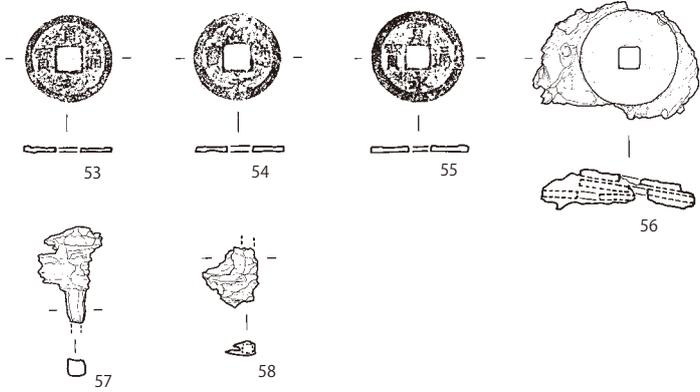
1ST007 出土遺物 (Fig. 15)

金属製品

ST012



ST017



ST019

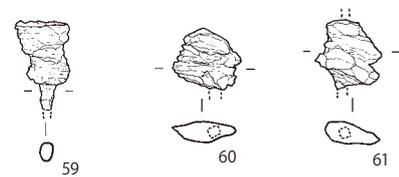


Fig. 16 サコ遺跡 1ST012・017・019 出土遺物実測図 (1/2)

鉄釘 (1～27) 断面方形の和釘で、木質が錆び付き遺存する。1～4は完形で、長さは3.75～4.8 cm。1・2は上板が横目、下板が縦目。3・4は全て横目のため横目の2枚を打ち抜いた釘とわかる。5～17は2枚の板材を打ち抜いた釘で、釘に錆び付いた木質が残る。5～12は上板が横目、下板が縦目である。5は2本の釘が接着している。13～17は上下の板材2枚とも横目だが、木目が交差している。18～24は横目の木質が残る。25～27は木質の残りは少ない。木質から推測される上板の厚さは1.4 cm。

1ST012 出土遺物 (Fig. 16)

金属製品

鉄釘 (1～52) 一辺0.3 cm前後の断面方形の和釘で、木質が錆び付き遺存する。2枚の板材を打ち抜いた釘で、釘に錆び付いた木質が残る。1～25は上板が横目、下板が縦目である。木質から推測される上板の厚さは1.15～1.45 cmである。26～46は横目の木質が残る。47～50は縦目の木質。51・52は下端をL字形に曲げる。

1ST017 出土遺物 (Fig. 16)

金属製品

銭貨 (53～56) 53～55は「寛永通寶」。53・54は径2.3 cm。55は径2.5 cm。56は3枚が有機質に覆われているが、文字は不明。

鉄釘 (57, 58) 断面方形の和釘で、木質が錆び付き遺存する。57は上板が横目で、それからわかる板材の厚さは1.5 cm。下板は縦目である。58は釘に横目の木質が残る。

1ST019 出土遺物 (Fig. 16)

金属製品

鉄釘 (59～61) 断面方形の和釘で、横目の木質が残る。59・60は釘の頭部が残る。

1ST023 出土遺物 (Fig. 17)

金属製品

鉄釘 (1～32) 断面方形の和釘で、木質が錆び付き遺存する。1～23は付着する木質が、上板が横目、下板が縦目で、1～6は完形である。木質から推定される上板の厚さは1.2 cm前後である。6・29は下端をL字形に曲げる。24～29は横目の木質が残る。30～32は縦目の木質が残り、32はやや曲がる。

1ST026 出土遺物 (Fig. 17)

肥前系陶器

甕 (33～36) 33は復元口径53.0 cm。頸部外面に1条、体部に2条の沈線を施す。胎土は橙茶色で、内面は茶褐色、外面は暗茶褐色釉を施し、口縁端部は釉を拭き取っている。34は復元口径50.0 cm。胎土は茶褐色で、頸部外面に沈線を2条巡らし、内外面とも茶褐色の鉄釉を施し、口縁端部上面は釉を拭き取る。35は復元底径27.6 cmで、底部内面には格子状の叩き痕が残る。33の底部とみられる。36は復元底径29.8 cm。内外面とも茶褐色の鉄釉を施し、底面には窯体の一部とみられるものが付着する。

1ST027 出土遺物 (Fig. 17)

金属製品

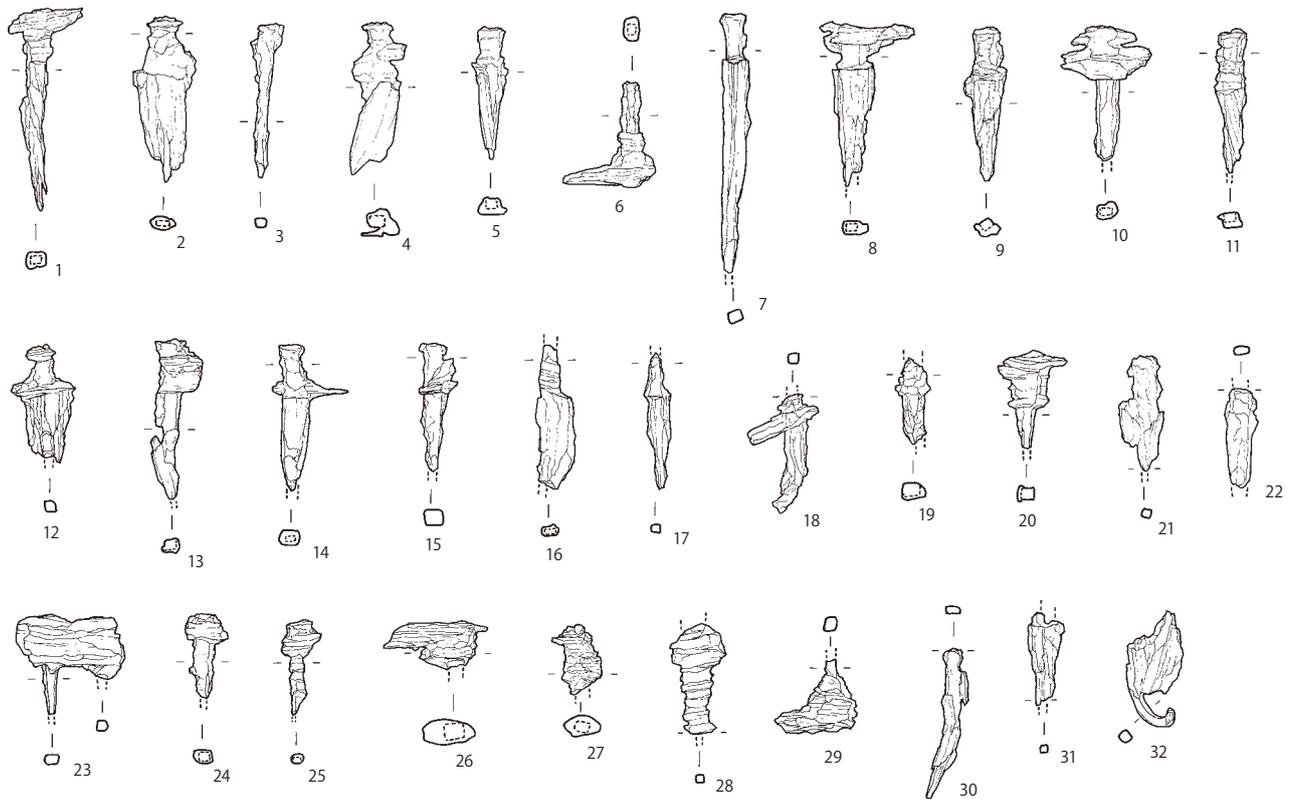
銭貨 (37～42) 「寛永通寶」。径は37～40が2.5～2.55 cm。41・42は2.35 cm。

1ST029 出土遺物 (Fig. 17)

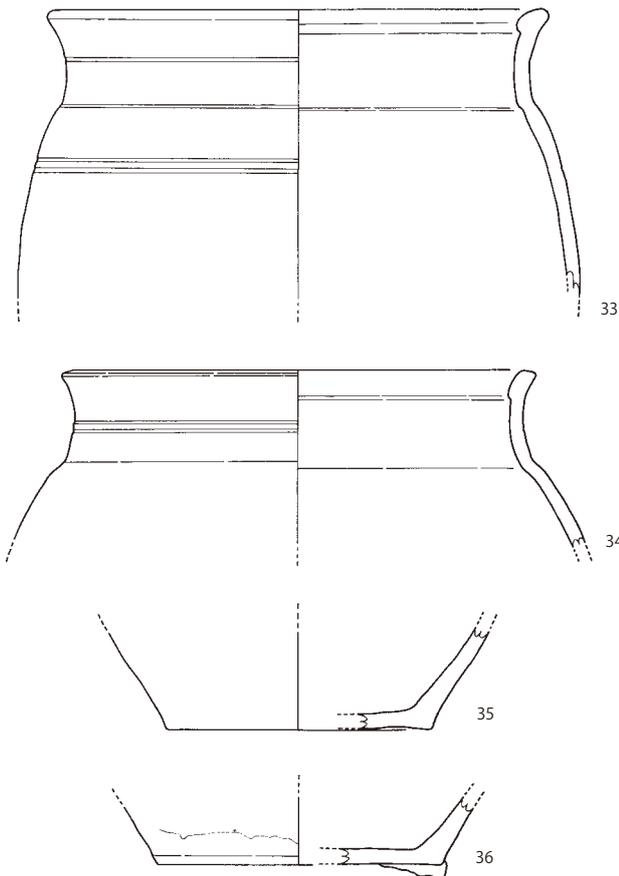
金属製品

鉄釘 (43, 44) 断面円形の洋釘で、木質が錆び付き遺存する。43は、長さ4.2 cm。横目と縦目の木質が残り、木質から推測できる上板の厚さは1.2 cm。44は釘の頭部が残り、横目の木質が付着する。

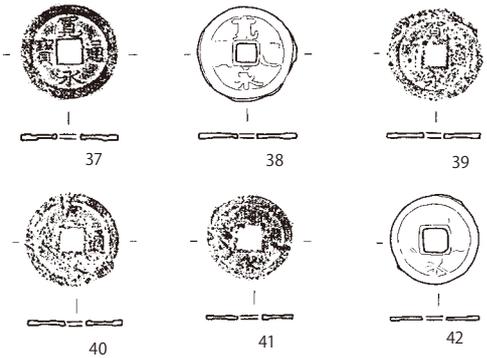
ST023



ST026



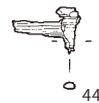
ST027



ST029



43



44

ST031



45

ST032

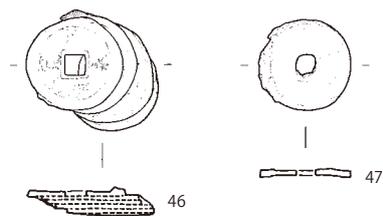


Fig. 17 サコ遺跡 1ST023・026・027・029・031・032 出土遺物実測図 (33～36は1/8、金属製品は1/2)

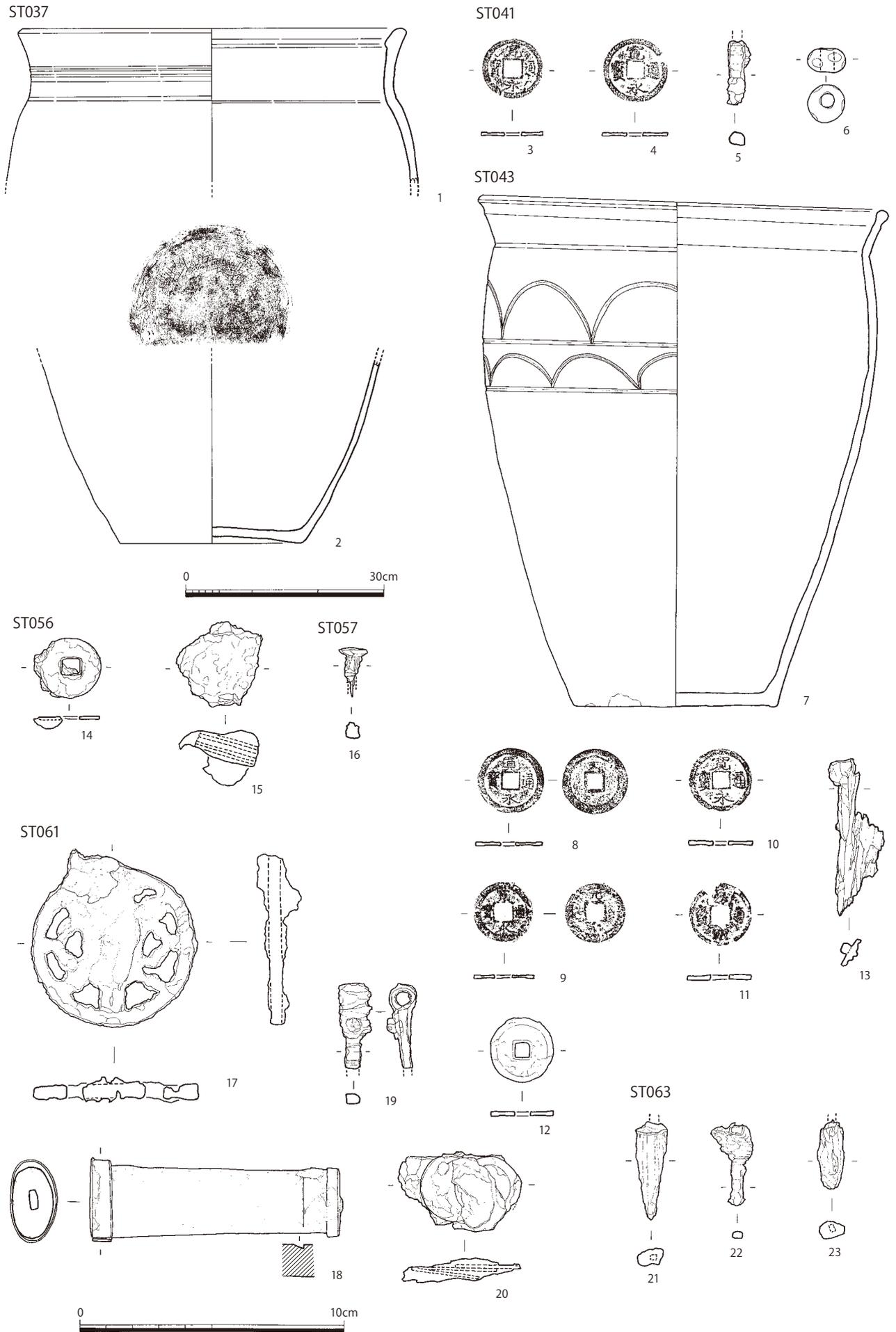


Fig. 18 サコ遺跡 1ST037・041・043・056・057・061・063 出土遺物実測図

(1・2・7は1/8、金属・ガラス製品は1/2)

1ST031 出土遺物 (Fig. 17)

金属製品

鉄釘 (45) 断面円形の洋釘で、横目の木質が残る。長さ 1.5 cm。

1ST032 出土遺物 (Fig. 17)

金属製品

銭貨 (46、47) 46 は「寛永通寶」で、5 枚が接着している。47 は錆び付いて刻印は不明。

1ST037 出土遺物 (Fig. 18)

肥前系陶器

甕 (1、2) 1 は復元口径 58.6 cm。頸部に 2 条の沈線を巡らし、内外面に暗茶褐色の鉄釉を施す。2 は復元底径 27.5 cm。底部内面には格子目の叩き痕が残る。外面は一部格子叩きを施した後暗茶褐色の鉄釉を施す。内面は釉がまだらに施されている。

1ST041 出土遺物 (Fig. 18)

金属製品

銭貨 (3、4) 「寛永通寶」。径は 3 が 2.3 cm、4 が 2.5 cm。

鉄釘 (5) 断面方形の和釘。

ガラス製品

蜻蛉玉 (6) 青色に黄土色で斑点を 5ヶ所に描く。径 1.4 cm、厚さ 0.95 cm、中央に径 0.5 cm の円孔を設ける。

1ST043 出土遺物 (Fig. 18)

肥前系陶器

甕 (7) 全体的に歪みがあり、口径 54.0～61.8 cm、器高 76.1～78.0 cm、底径 30.5 cm。口縁端部の肥厚は僅かで、口縁端部直下には低い突帯を巡らす。体部外面は圏線と半円状の波状文が施されている。外面は茶色釉に黒茶色釉が部分的にかかる。内面の施釉は刷毛目が明瞭にわかるように黒茶色釉と茶色釉がマーブル模様のように施されている。

金属製品

銭貨 (8～12) 8～11 は「寛永通寶」で、8・9 の裏面にはそれぞれ「文」と「元」の刻印がある。径は 2.3～2.5 cm。

鉄釘 (13) 長さ 6.0 cm。縦目の木質が付着する。

1ST056 出土遺物 (Fig. 18)

金属製品

銭貨 (14、15) 14 は表面に布のようなものが覆う。15 は 5 枚の銭が布と錆に覆われている。

1ST057 出土遺物 (Fig. 18)

金属製品

鉄釘 (16) 丸釘か。

1ST061 出土遺物 (Fig. 18)

金属製品

鏢 (17) 全体的に錆が覆う。径 6 cm。透かし彫りで、中央の茎穴には木質が詰まる。

小刀の柄 (18) 長さ 9.55 cm、幅 2.6～3.1 cm、木質部分の厚さ 1.5 cm。両端に銅製金具を巻いている。

金具 (19) 上部が環状になり、それ以外の部分には木質が残る。木棺に付けられた金具か。

銭貨 (20) 3～4 枚が接着している。

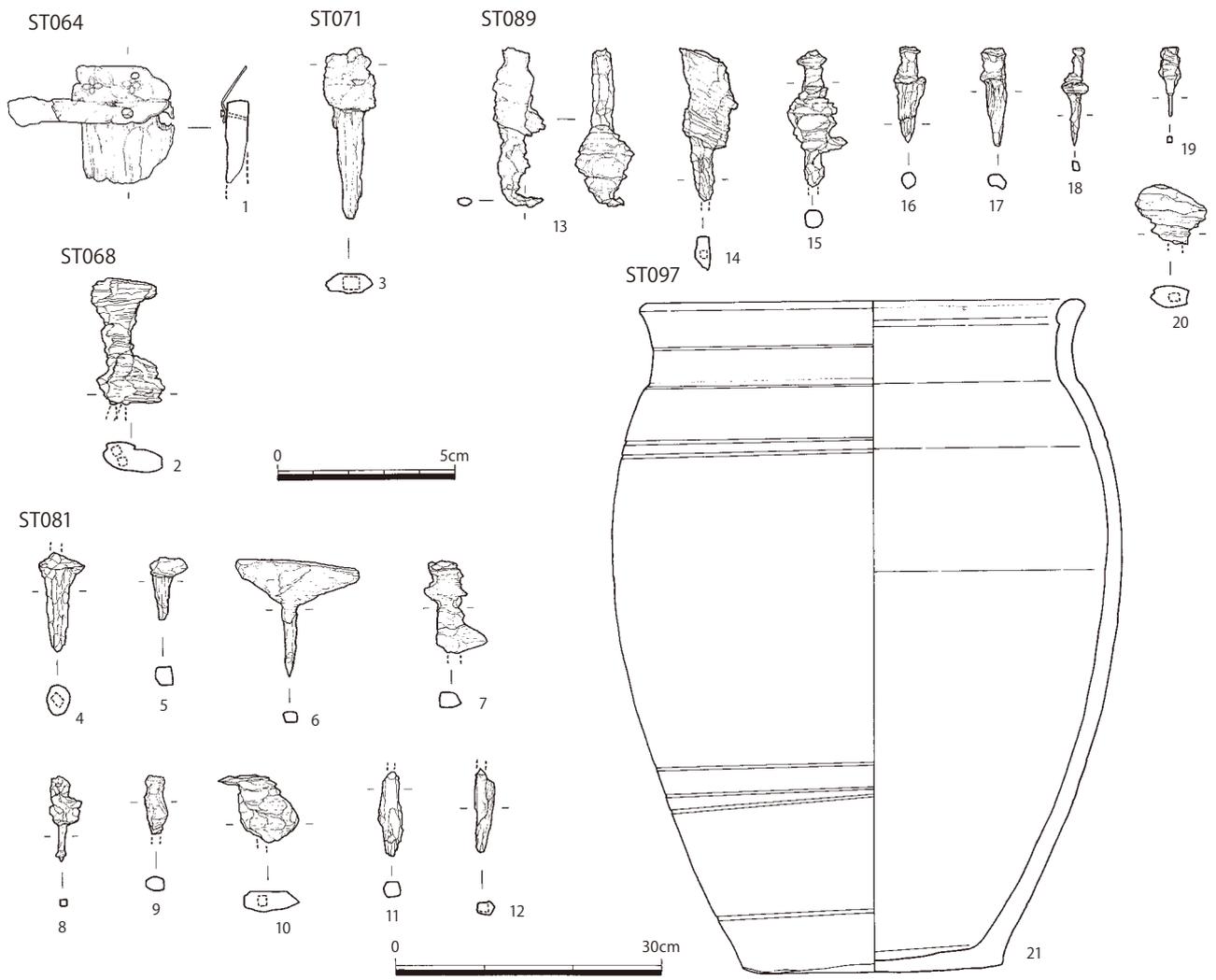


Fig. 19 サコ遺跡 1ST064・068・071・081・089・097 出土遺物実測図 (21 は 1/8、金属製品は 1/2)

1ST063 出土遺物 (Fig. 18)

金属製品

鉄釘 (21 ~ 23) 断面方形の和釘。21 に残る木質は横目と縦目が交差する。22 は横目の木質、23 は縦目の木質が残る。

1ST064 出土遺物 (Fig. 19)

金属製品

留金具 (1) 棺材とみられる木質の端に薄い銅板が釘で留められている。銅板の表面には花文が彫られている。銅板は中央で折れ曲がっていて、別の板材にも留められていたと推測される。

1ST068 出土遺物 (Fig. 19)

金属製品

鉄釘 (2) 断面方形の和釘。頭部は残り、端部は欠損する。横目の木質が遺存する。

1ST071 出土遺物 (Fig. 19)

金属製品

鉄釘 (3) 断面方形の完形の和釘で、長さ 4.9 cm。2 枚の板材が残っていて、木目は上板が横目、下板は縦目である。木質の遺存状況から上板の厚さは 1.4 cm。

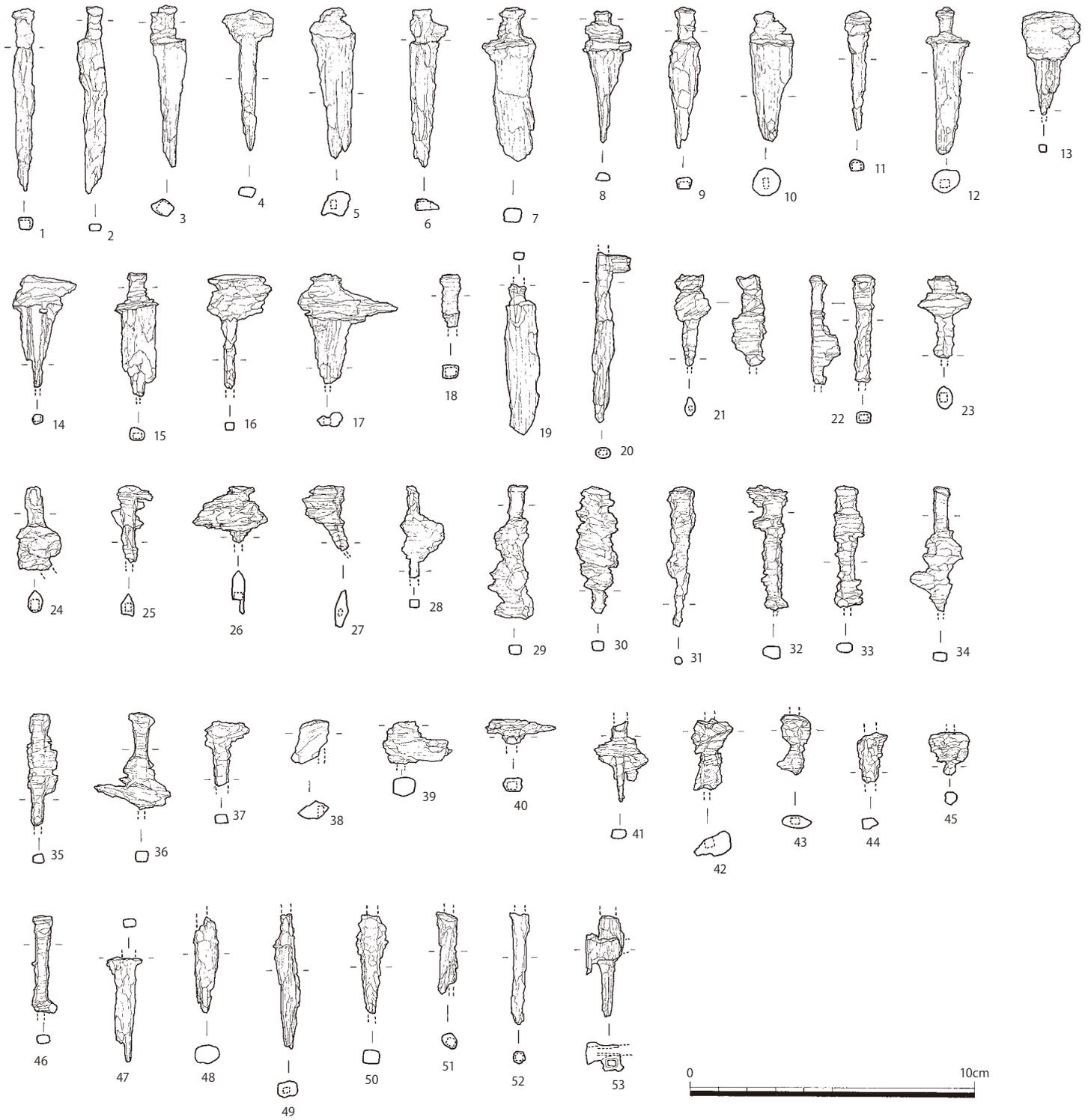


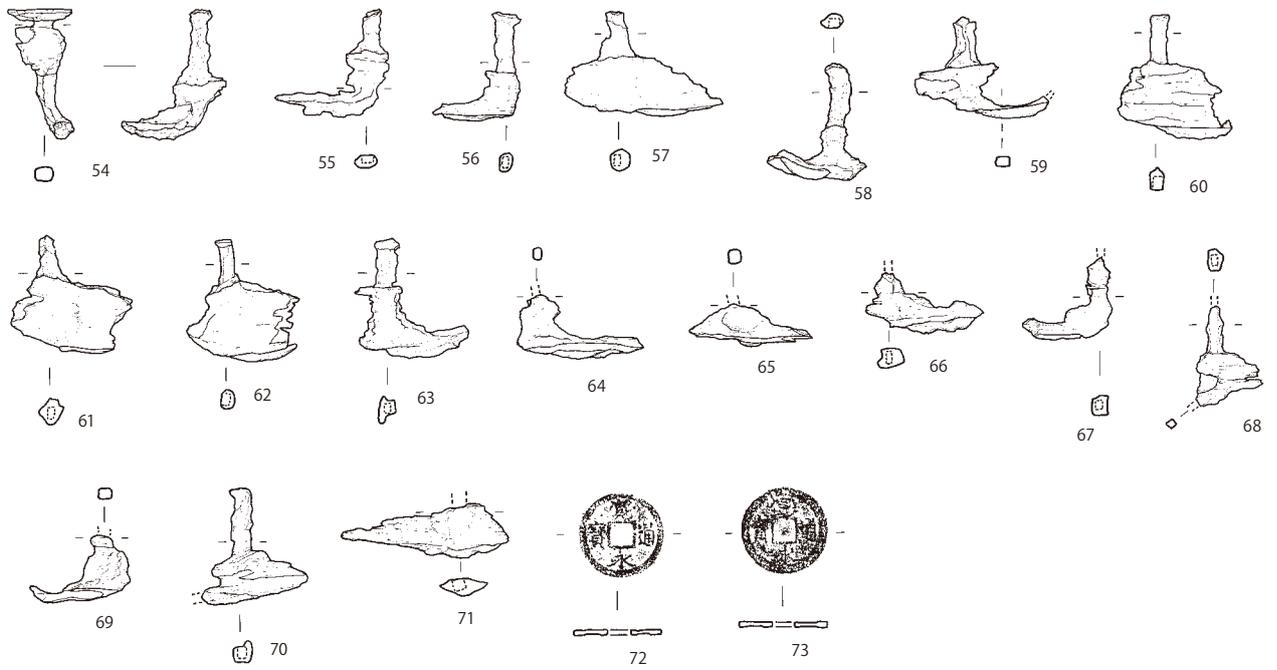
Fig. 20 サコ遺跡 1ST098 出土遺物実測図① (1/2)

1ST081 出土遺物 (Fig. 19)

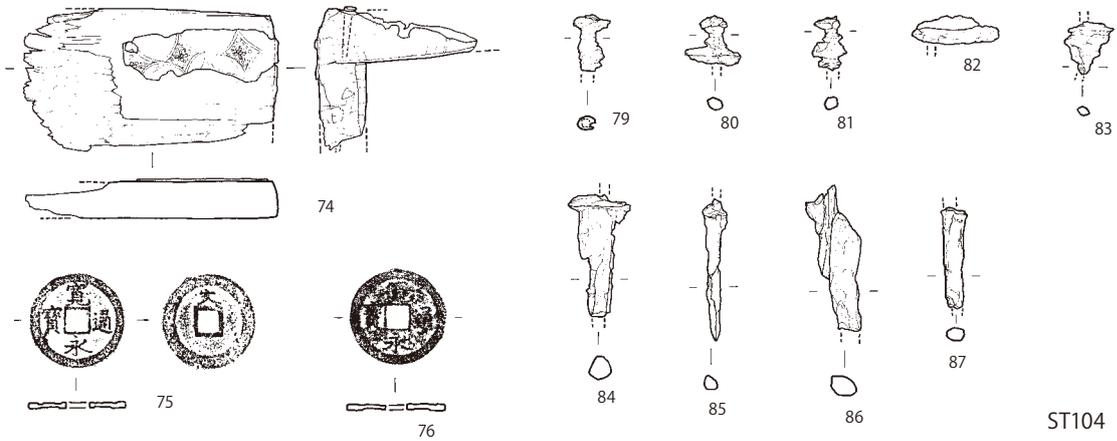
金属製品

鉄釘 (4 ~ 12) 断面方形の和釘、木質が錆び付き遺存する。4・5は上板が横目、下板は縦目。6 ~ 8は上板・下板共に横目である。6の木質の遺存状況から上板の厚さは1.7 cmである。9・10は横目。11・12は縦目とみられる。

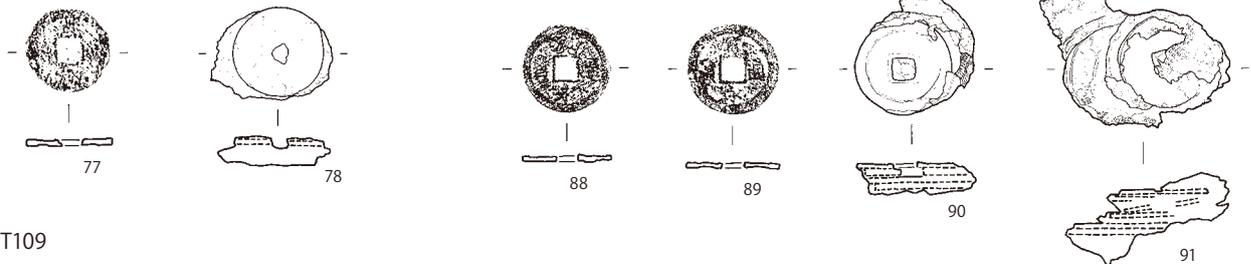
ST098



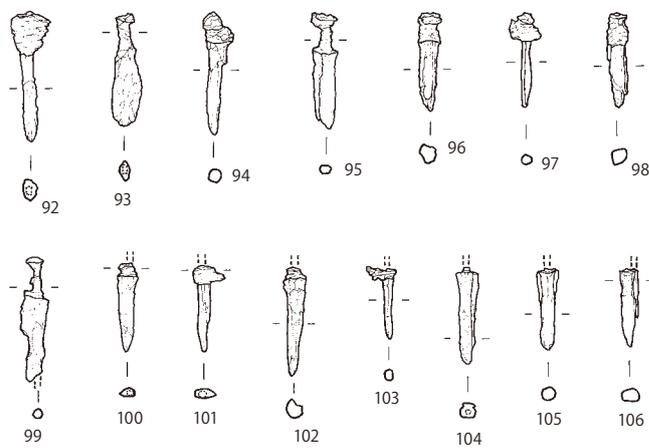
ST102



ST104



ST109



SX082

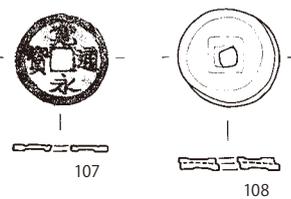


Fig. 21 サコ遺跡 1ST098 ②・102・103・104・109、SX082 出土遺物実測図 (1/2)

1ST089 出土遺物 (Fig. 19)

金属製品

鉄釘 (13～20) 断面方形の和釘、木質が錆び付き遺存する。頭部は若干曲げている。13～15は上板・下板共に横目で、木目は交差するが、13・14は上板の木目がやや斜行する。上板の厚さは13が2.1cm、14が2.2cm、15が2.65cm。13は先端をL字形に曲げ、先端は板を突き抜け露出している、下板の厚さは1.6cm。16～19は上板が横目、下板が縦目で、16・17からわかる上板の厚さは0.9cmである。

1ST097 出土遺物 (Fig. 19)

肥前系陶器

甕 (21) 口径50.2cm、器高75.9～76.5cm、底径29.5cm。口縁端部を肥厚させ、頸部外面に1条、体部下半に4条の沈線を巡らす。内面底部には叩き痕が残る。内外面とも褐灰色の鉄釉を施す。

1ST098 出土遺物 (Fig. 20・21)

金属製品

鉄釘 (1～71) 断面方形の和釘で、木質が錆び付き遺存する。頭部が残るものは僅かにL字形に曲げる。完形の鉄釘の長さは4.2～6.6cm。1～20の木目は上板が横目、下板が縦目。1～12は完形。21～28の木目は上板・下板とも横目で交差している。29～46は横目の板材。47～52は縦目。53は縦目の板材が遺存する釘に、直交するように別の釘が付着する。54～70は向きの違う横目の板材に釘を打ち、下半をL字形に曲げ、その曲がった部分のほとんどが板材から露出している。

銭貨 (72、73) 「寛永通寶」。径2.3cm。

1ST102 出土遺物 (Fig. 21)

金属製品

金具 (74) 厚さ1.0cmと1.4cmの板材をL字形に組み合わせ、その隅を銅板で留めている。銅板表面には魚々子で文様を作る。銅板は銅釘で板材に留めている。

銭貨 (75～78) 「寛永通寶」。75の裏面には「丈」の刻印。径は75が2.6cm、76が2.5cm、77が2.3cm。78は表面に有機質が付着し刻印は不明。

鉄釘 (79～87) 断面円形の洋釘で、木質が錆び付き遺存する。79～83は上板が横目。84・85は上板が横目、下板が縦目。86・87は縦目で、86については木質に釘が2本残る。

1ST103 出土遺物 (Fig. 21)

金属製品

銭貨 (88～90) 88・89は「寛永通寶」。88は径2.3cm。89は径2.4cm。90は布に包まれた銭。銭は4枚。

1ST104 出土遺物 (Fig. 21)

金属製品

銭貨 (91) 銭は麻のような粗い布に包まれ、最低6枚あるとみられる。

1ST109 出土遺物 (Fig. 21)

金属製品

鉄釘 (92～106) 断面円形の洋釘で、木質が

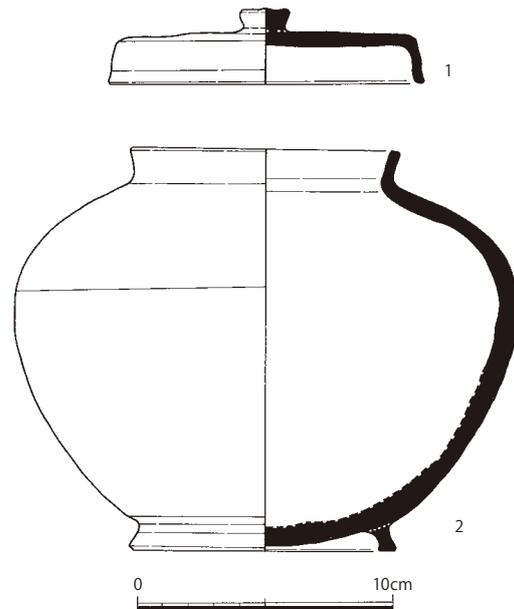


Fig. 22 サコ遺跡 1SX001 出土遺物実測図 (1/3)

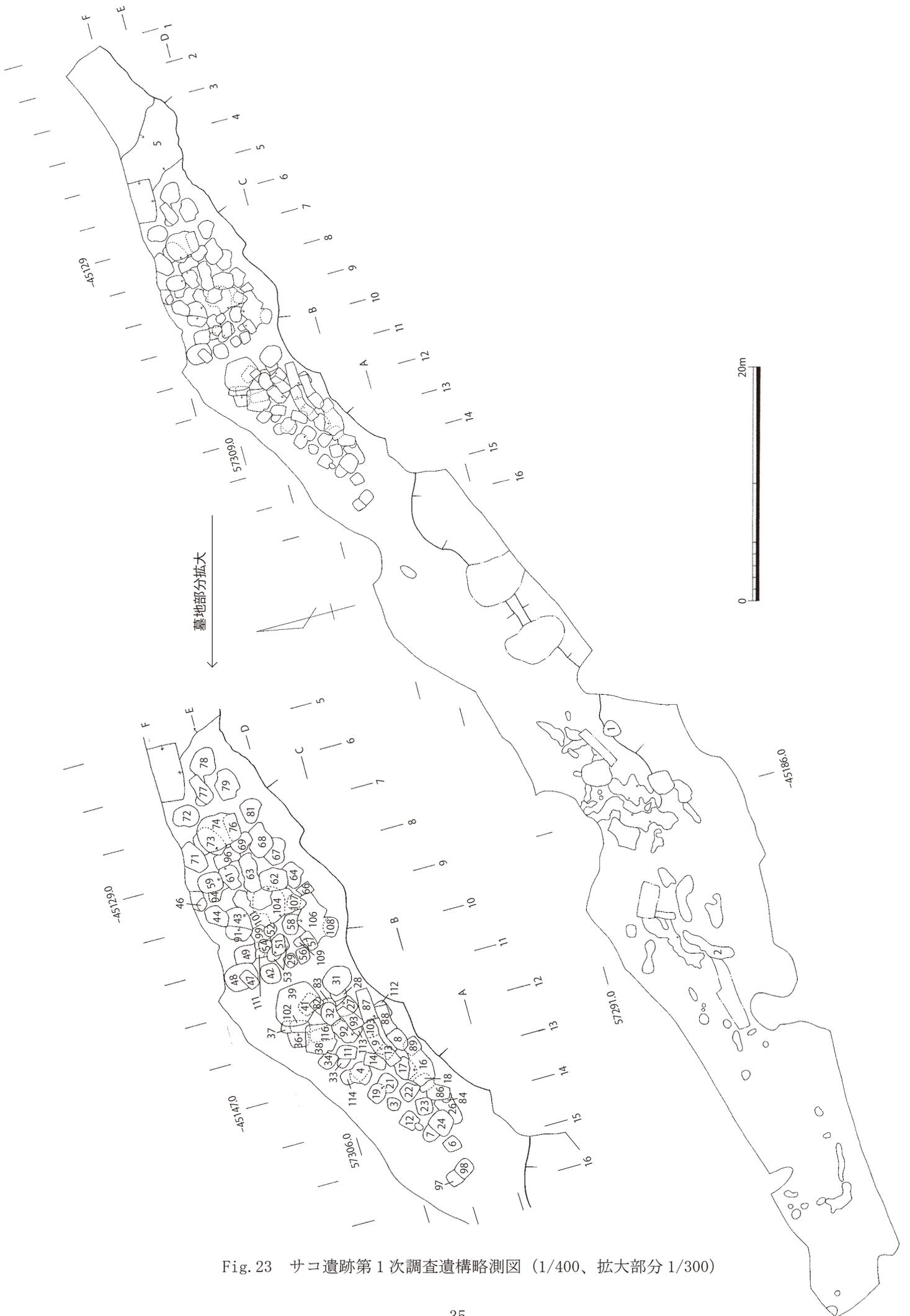


Fig. 23 サコ遺跡第1次調査遺構略測図 (1/400、拡大部分 1/300)

表1 サコ遺跡第1次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	埋葬施設	時期	地区
1	1SX001	墳墓もしくは祭祀遺構	短頸壺出土		8世紀	
2		溝				
3	1ST003	墓		方形木棺	近世後期	C13
4	1ST004	墓	3体の人骨確認。	桶棺	近世後期～近代	C12
5	1SD005	溝	明褐色土		古代	D～F3・4
6	1ST006	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	B14
7	1ST007	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	B14
8		改葬痕	埋土に甕破片あり。		現代	B12
9		改葬痕	埋土に甕破片あり。		現代	BC12
11		改葬痕	埋土に甕破片あり。		現代	C12
12	1ST012	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	B14
13	1ST013	墓	人骨残存。S-13→14→9	桶棺	近世後期～近代	B12
14	1ST014	墓と改葬痕	埋土に甕破片あり。	甕棺?	近世後期?	C12
16		改葬痕	埋土に甕破片少量あり。		現代	B12・13
17	1ST017	墓	人骨残存。S-16の下。	方形木棺	近世後期	B12・13
18	1ST018	墓	人骨残存。	桶棺	近世後期～近代	B13
19	1ST019	墓	人骨残存。S-21→19	木製棺?	近世後期～近代	C13
21	1ST021	墓	人骨残存。S-21→19	桶棺	近世後期～近代	C13
22	1ST022	墓	人骨残存。	桶棺	近世後期～近代	B13
23	1ST023	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	B13
24	1ST024	墓と改葬痕	柔らかい埋土。墓壙は全く残っていない。		現代	B14
26	1ST026	墓と改葬痕	埋土に甕やガラス片あり。人骨片あり。	甕棺?	近世後期	A14
27	1ST027	墓	上部の攪乱層より大腿骨片出土。	方形木棺	近世後期	C11
28		改葬痕?			現代	C11
29	1ST029	墓		方形木棺	近代	D10
31	1ST031	墓	人骨残存。	方形木棺	近代	C10
32	1ST032	墓	人骨残存。	桶棺	近世後期～	C11
33	1ST033	墓	人骨残存。	桶棺?	近世後期～	C12
34	1ST034	墓?		?		D12
36		改葬痕	S-37を破壊。埋土に甕・人骨片あり。		現代	D11
37	1ST037	墓	改葬済だが人骨残存。埋土に甕片・蓋石あり。	甕棺	近世後期	D11
38		改葬痕			現代	D11・12
39		改葬痕			現代	D10・11
41	1ST041	墓	人骨残存。	木製棺?	近世後期	D11
42	1ST042	墓	改葬あり。埋土に甕片あり。	甕棺?	近世後期～近代	D10
43	1ST043	墓	甕棺に人骨残存。蓋石残る。	甕棺	近世後期	E9
44	1ST044	墓	人骨残存。一部改葬あり。	木製棺?	近世後期	E8
46	1ST046	墓	人骨なし。	?	近世後期～近代	E8
47		改葬痕	S-48の改葬時の穴		現代	E10
48	1ST048	墓	改葬済。埋土に大石と僅かに人骨あり。	甕棺?	近世後期～近代	E10
49	1ST049	墓	改葬済。埋土に大石数個と人骨散在。	?	近世後期～近代	E9
51		改葬痕	改葬済。埋土に甕片と現代の木杭あり。		現代	D9
52	1ST052	墓	改葬済。	?	近世後期～近代	D9
53	1ST053	墓	S-51に破壊される。人骨は粉状態。	?	近世後期～近代	D9
54		改葬痕	S-99と同一遺構か?埋土に甕片やコンクリート片。		現代	D9
56	1ST056	墓	人骨残存。	桶棺	近世後期～近代	D10
57	1ST057	墓	埋土に明治13年の墓石や甕片あり。	木製棺?	近代	C9
58	1ST058	墓と改葬痕		?	近世後期～	D9
59	1ST059	墓と改葬痕		?	近世後期～	E8
61	1ST061	墓と改葬痕		方形木棺?	近世後期	E8
62	1ST062	墓と改葬痕		?	近世後期～近代	D8
63	1ST063	墓と改葬痕		木製棺?	近世後期	D7・8
64	1ST064	墓と改葬痕	埋土中に頭蓋骨の一部あり。その他人骨も位置保たず。	方形木棺	近世後期～近代	C8
66	1ST066	墓	底部に骨片。	桶棺?	近世後期～近代	C8
67	1ST067	墓	底面近くに黒褐色土の塊があるが粉状態。	桶棺?	近世後期～近代	D7

S-番号	遺構番号	種別	埋土等	埋葬施設	時期	地区
68	1ST068	墓と改葬痕	人骨残存。	桶棺?	近世後期	D7
69	1ST069	墓	改葬済。	?	近世後期～近代	D7
71	1ST071	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	E7
72	1ST072	墓	改葬あり。	?	近世後期～近代	E6
73		改葬痕			現代	E7
74		改葬痕	墓石残骸あり。		現代	DE7
76		改葬痕			現代	D6・7
77	1ST077	墓と改葬痕		桶棺?	近世後期～近代	E6
78	1ST078	墓と改葬痕	底部に人骨少量残存。	桶棺?	近世後期～近代	DE5
79	1ST079	墓と改葬痕	人骨少量残存。	桶棺?	近世後期～近代	D6
81	1ST081	墓と改葬痕		方形木棺?	近世後期	D6
82		改葬痕	S-41・83を破壊。出土した銭貨はこの墓のものか。		現代	D11
83	1ST083	墓		?	近世後期～近代	C11
84	1ST084	墓	人骨残存。	桶棺	近世後期～近代	A13
86		改葬痕	磔多く出土。S-84を破壊。		現代	B13
87		改葬痕	大石あり。埋土に甕片あり。		現代	C11
88		改葬痕	埋土に甕片あり。		現代	B11
89	1ST089	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	B12
91		改葬痕			現代	E9
92		改葬痕			現代	C11
93		改葬痕	S-27を破壊。		現代	C11
94	1ST094	墓	埋土に人骨片あり。	桶棺?	近世後期～近代	E8
96	1ST096	墓		?	近世後期～近代	DE7
97	1ST097	墓	甕棺。改葬済。	甕棺	近世後期	B15
98	1ST098	墓	人骨残存。	方形木棺	近世後期	B15
99		改葬痕	S-54の下。		現代	D9
101		改葬痕	埋土に骨片や大理石片		現代	D8・9
102	1ST102	墓		方形木棺	近代	D11
103	1ST103	墓	S-9の下。	桶棺?	近世後期～近代	C12
104	1ST104	墓	人骨残存。S-101の下。	桶棺?	近世後期～近代	D8
106		改葬痕			現代	C9
107	1ST107	墓と改葬痕	頭蓋骨あり。S-106の下。	?	近世後期～近代	C9
108	1ST108	墓	改葬済。S-106の下。埋土に甕少量含む。	甕棺?	近世後期～近代	C9
109	1ST109	墓		方形木棺	近代以降	D9
111	1ST111	墓	S-54の下。	桶棺?	近世後期～近代	D9
112	1ST112	墓	S-88に破壊される。	甕棺?	近世後期～近代	B11
113	1ST113	墓	S-92に破壊される。	?	近世後期～近代	C11
114	1ST114	墓		?	近世後期～近代	C12
116	1ST116	墓	S-38で改葬。	?	近世後期～近代	D11

錆び付き遺存する。92～98は完形で、長さ2.5～3.4cm。

その他の遺構

1SX082 出土遺物 (Fig. 21)

金属製品

銭貨 (107、108) 107は「寛永通寶」。径2.5cm。108は2枚が付着し刻印は不明。

1SX001 出土遺物 (Fig. 22)

須恵器

壺蓋 (1) 口径12.3cm、器高3.0cm。外面は回転ナデ、内面上半部は不定方向のナデ調整。焼成良好で灰色を呈する。

壺 a (2) 口径10.5cm、器高15.9cm、高台径10.5cm。外面下半は回転ヘラケズリ、内面上半部と内面は回転ナデ調整。焼成良好で灰色を呈する。

表2 サコ遺跡第1次調査 出土遺物一覧表

S-1	須 恵 器	壺蓋、壺a
S-3	肥前系陶磁器	小椀
S-5	須 恵 器	甕
S-6	金 属 製 品	鉄釘
S-7	金 属 製 品	鉄釘
S-8	国 産 陶 器	甕
S-9	国 産 陶 器	甕
S-11	国 産 陶 器	破片
	瓦 類	破片
S-12	金 属 製 品	鉄釘
S-17	錢 貨	「寛永通宝」、銅錢
	金 属 製 品	鉄釘
S-19	金 属 製 品	鉄釘
S-23	須 恵 器	蓋3
	金 属 製 品	鉄釘
	石 製 品	チャート破片
S-26	肥前系陶器	甕
S-27	錢 貨	「寛永通宝」
S-28	土師質土器	蓋(素焼)、鉢
S-29	金 属 製 品	鉄釘
S-31	金 属 製 品	鉄釘
S-32	錢 貨	「寛永通宝」、銅錢
S-37	肥前系陶器	甕、破片
S-41	錢 貨	「寛永通宝」
	金 属 製 品	鉄釘、玉
	ガ ラ 製 品	蜻蛉玉
S-42	須 恵 器	破片
	国 産 陶 器	甕
S-43	肥前系陶器	甕、破片
	錢 貨	「寛永通宝」
	金 属 製 品	鉄釘
S-47	須 恵 器	坏c
S-49	土師質土器	壺(素焼)
	国 産 陶 器	甕
S-51	須 恵 器	破片
	土 師 質 土 器	壺蓋(素焼)
S-54	土師質土器	小鉢
	国 産 陶 器	骨甕蓋、骨甕、破片
	石 製 品	砥石
S-56	錢 貨	銅錢

S-57	土 師 器	破片
	国 産 陶 器	甕
	金 属 製 品	鉄釘
S-58	国 産 陶 器	甕
S-61	錢 貨	銅錢
	金 属 製 品	鉄釘、鈔付柄、金具
	そ の 他	漆
S-63	金 属 製 品	鉄釘
S-64	金 属 製 品	留金具
S-67	須 恵 器	破片
S-68	金 属 製 品	鉄釘
S-71	金 属 製 品	鉄釘
S-81	金 属 製 品	鉄釘
S-88	国 産 陶 器	甕
S-89	金 属 製 品	鉄釘
S-91	土 師 質 土 器	蓋(素焼)
S-96	須 恵 器	壺
S-97	肥前系陶器	甕
S-98	錢 貨	「寛永通宝」
	金 属 製 品	鉄釘
S-99	国 産 陶 器	甕
S-101	須 恵 器	蓋、椀、甕
	土 師 器	坏、甕
	土 師 質 土 器	壺(素焼)
	肥前系陶磁器	皿、椀
	国 産 陶 器	甕蓋、甕
	瓦 類	平瓦(縄目)、平瓦(焼し瓦)
	金 属 製 品	鉄釘
	石 製 品	軽石
S-102	錢 貨	「寛永通宝」
	金 属 製 品	鉄釘、金具
	木 製 品	棺材
S-103	錢 貨	「寛永通宝」、銅錢
S-104	錢 貨	銅錢
S-106	須 恵 器	坏c
S-107	土 師 器	坏、甕?
S-109	土 師 器	坏
	金 属 製 品	鉄釘
茶色土	須 恵 器	坏c、甕
	土 師 器	坏a、甕、破片
	国 産 陶 器	甕
表土	龍泉窯系青磁	椀：1(1)
	国 産 陶 器	破片
表採	国 産 磁 器	椀

(5) サコ遺跡第1次調査出土人骨の分析

①サコ遺跡1次調査出土人骨について

松尾樹志郎¹⁾・中野真澄¹⁾・星野宙也¹⁾・山下理呂¹⁾・
James Frances Loftus III¹⁾・Coralie Ferrero¹⁾・
富田啓貴¹⁾・米元史織^{2)・3)}・舟橋京子^{3)・4)}

- 1) 九州大学大学院地球社会統合科学府
- 2) 九州大学総合研究博物館
- 3) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
- 4) 九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

福岡県太宰府市サコ遺跡の第1次調査において検出した近世～近代の墓壇のうち、26基から出土した計28体の人骨について、調査を担当した太宰府市教育委員会よりアジア埋蔵文化財研究センターに人骨の整理・報告の依頼があった。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、若年人骨について Scheuer and Black (2000)、成人人骨について恥骨結合面は Brooks and Suchey (1990)、耳状面は Lovejoy (1985)、歯牙の咬耗は 柄原 (1957) を用い、性判定には、頭蓋・骨盤について Buikstra and Ubelaker (1994) の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部第二解剖学教室編 1988）記載の区分に従い、乳児0－1歳、幼児1－6歳、小児6－12歳、若年12－20歳、成年20－40歳、熟年40－60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。計測は主に Martin-Saller (1957)、馬場 (1991) に従い、鼻根部については鈴木 (1963) の方法を用いた。齲歯の観察基準は石川ほか (1986) に従った。

なお、人骨資料は現在、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

1、出土状態

【4号人骨①】

頭位：北

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

正方形の墓壇底部から人骨が出土している。人骨の整理段階で3体の人骨が検出されており、取り上げ番号と照合した結果、出土図に相当する個体と判断できる人骨①の出土状況について以下記述する。人骨①の頭蓋骨が墓壇北側より、頭蓋底を南東側に、顔面を下側に向けた状態で出土している。頭蓋骨の西側から下顎骨がオトガイを下に向けた状態で出土している。頭蓋骨の東側下位から近位を上に向けた状態で右上腕骨が出土している。頭蓋西側から右尺骨・橈骨が長軸を南北方向にそろえた状態で出土している。頭蓋南東側から左上腕骨が長軸を南北方向に向けた状態で出土しており、また、頭蓋南側から左尺骨が長軸を北西－南東方向に向けた状態で出土していることから、左上肢は肘関節を屈した状態であると推定される。頭蓋西側から右大腿骨が遠位を上に向けた状態で出土している。右大腿骨遠位部分は頭蓋骨の上ののっている状態である。右大腿骨の西側から右脛骨が近位を上に向けた状態で出土している。右大腿骨と右脛骨は長軸を南北方向にそろえた状態であり、右膝関節は屈した状態であると考えられる。頭蓋骨南側より頭蓋骨と近接して左大腿骨が近位を南側、遠位を北側、後面を上に向けた状

態で出土している。その西側、右大腿骨と右脛骨の間から左脛骨が近位を上に向けた状態で、右下肢の上位から出土している。左下肢も長軸を南北にそろえた状態で出土している。左膝関節も屈した状態であったと考えられる。頭蓋南東側から腰椎3点が相対的位置関係を保った状態で出土している。右寛骨が頭蓋南側、右大腿骨近位および左大腿骨骨体部中央付近の下側から出土している。また、左寛骨が左大腿骨近位および左尺骨の下側から出土している。

以上のことから、人骨①について、本来は頭位を北側、顔面を南側に向け、右腕は体を抱えるように屈し、背側に強く傾いた状態で膝を強屈した坐葬であったと考えられる。顔面部が下を向いていること、左大腿骨が後面を上に向け墓壇底に落ち込んだ状態であることから、埋葬後、軟部組織の腐朽に伴い、本来の埋葬姿勢が崩れたものと思われる。また、このことから、埋葬施設は遺存していないものの木棺に埋葬された可能性が考えられる。改葬は行われていないと推定される。

なお、本4号墓壇からは、他に2体の人骨が取り上げられていたことが整理作業中に判明しているが、他2体の出土状況については詳細不明である。

【6号人骨】

頭位：北東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：有

方形の墓壇内から人骨が出土している。本墓壇内からは頭蓋骨が出土していないが、墓壇内南東側から下顎が後面を上、咬合面を南西に向けた状態で出土している。墓壇内北東側から軀幹骨が出土しており、胸椎は関節状態を保った状態で出土している。胸椎の下位から左上腕骨が出土している。下顎の西側から左橈骨・左尺骨が長軸を南北に揃えて出土している。胸椎の北側から右上腕骨が近位を東に向け、右橈骨・右尺骨が右上腕骨と関節状態を保ちながら近位を北西に向け、長軸を北西—南東に揃えた状態で出土している。左右の肘関節は体軸側に屈曲した状態と考えられる。下顎の下位から左寛骨が出土しており、その西側から左大腿骨が近位を下に、左脛骨・左腓骨が近位を上に向けた状態で出土しており、左脛骨・左腓骨の西側から左足の骨が出土している。右橈骨・右尺骨の下位から右寛骨が出土しており、右寛骨に関節して右大腿骨が近位を下に、脛骨が近位を上に向けた状態で出土しており、左右の膝関節は膝を立てて屈曲した状態であったと考えられる。右脛骨の南側から右距骨・右踵骨が関節状態を保って出土している。

以上の出土状況から、頭位は北東向きで、膝を立てて屈し、両腕は体を抱えるように屈した状態の坐葬であると推定される。頭蓋骨の出土が確認されないことから、改葬を受けていると考えられる。土壇内から釘が出土していることから木棺に埋葬されたと推定される。

【7号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋骨が顔面を南東に向けた状態で出土している。頭蓋骨の北東部から右上腕骨が近位を北東に向けた状態で出土している。右上腕骨の南側から右尺骨が長軸を右上腕骨と揃えた状態で出土している。頭蓋骨の南東部から左上腕骨が近位を北に内側縁を上に向けた状態で出土している。頭蓋骨の南東、左上腕骨の西側から左橈骨・左尺骨が近位を南東部

に向けた状態で出土しており、左橈骨が南西側、左尺骨が北東側に位置する。左右の肘関節は体軸側に屈している状態であったと推定される。右寛骨が頭蓋骨の北東、右上腕骨の南東部から出土している。右大腿骨が頭蓋骨の下部、右寛骨の南西から近位を下に向けた状態で出土しており、右脛骨・右腓骨は右大腿骨の南西から近位が北西壁に接し遠位を下にした状態で出土している。右膝関節は屈していたと推定される。右寛骨の南東から左寛骨が出土している。左大腿骨は近位を西に向け外側を上に向けた状態で出土しており、遠位が近位よりも高いレベルに位置し、近位は左上腕骨の下に入り込んだ状態である。左脛骨・左腓骨は外側を上に向け、相対的位置関係を保った状態で出土している。左脛骨の南東部から左距骨・左踵骨が関節状態を保って出土している。左膝関節も屈した状態であったと考えられる。

以上の出土状況から本人骨は頭位東向きで、両腕を胸部に置き、膝を立てた状態の坐葬であったと推定される。軟部組織の腐朽に伴い頭蓋骨が北西側に、左下腿が西側に落ちたものと考えられ、木棺の存在が示唆される。

【12号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：有

方形の墓壇内から人骨が出土している。頭蓋骨は出土しておらず、下顎骨のみが墓壇中央部付近からオトガイを下にした状態で出土しており、その北側から頸椎・腰椎・仙骨が出土している。下顎骨の北東側からは左鎖骨が出土しており、その北西側から右鎖骨が出土している。椎骨の東側から左肋骨が、西側から右肋骨が、数本相対的位置関係を保った状態で出土している。左鎖骨の南側から左肩甲骨が出土し、さらにその南側から左上腕骨が近位を北東、遠位を南西に向けた状態で出土しており、左肩関節は関節状態にあったと考えられる。左上腕骨の南西側からは左橈骨・左尺骨が東西に長軸をそろえた状態で出土している。このことから、左肘関節は体軸側に屈した状態であると考えられる。右鎖骨の北西側からは右肩甲骨が出土しており、その南西側から右上腕骨が北東から南西に長軸をそろえた状態で出土している。右上腕骨の南側からは右橈骨・右尺骨が北西から南東に長軸をそろえた状態で出土している。このことから、右肘関節も体軸側に屈した状態と考えられる。左上腕骨の西側からは左寛骨が出土しており、左寛骨の南側からは左大腿骨が遠位を上に向け、左脛骨・左腓骨が近位を上に向けた状態で出土している。このことから、左膝関節は膝を立てて屈していると考えられる。左脛骨の下位からは、左膝蓋骨と指骨がまとまって出土している。右上腕骨の東側から右寛骨が出土している。

以上の出土状況から、本来は頭位北側・顔面南向き、両腕を胸部に置き、膝を立てた状態の坐葬と推定される。下顎骨が南側に落ち込んでいることから埋葬施設の存在が推定され、おそらく木棺であると考えられる。本人骨は四肢骨が相対的な位置関係をある程度保った状態で出土しており、極めて遺存しにくい舌骨が遺存しているにもかかわらず、頭蓋骨および右下肢骨が遺存していない。このことから、本人骨は改葬を受けていると推定される。多くの部位が相対的位置関係を保っていることから、改葬は軟部組織腐朽前に行われたものと考えられる。

【13号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内中央付近から頭蓋骨が右側頭骨外面を下に、顔面を南に向けた状態で出土している。頭蓋骨の西側から下顎骨がオトガイを南東に向けた状態で出土している。頭蓋骨東側から環椎・軸椎・頸椎・胸椎・左右鎖骨・左右肩甲骨が出土しており、環椎は上面を西に、腹側を南に向けて頭蓋骨と関節状態を保っており、頸椎・胸椎は上面を北に、腹側を西に向け、関節状態に近い。環椎南側から左上腕骨が近位を北に向けて出土している。頭蓋骨南側から胸椎・腰椎・指骨が出土しており、腰椎は関節状態を保っている。左上腕骨の南西側から左橈骨が近位を南東に向けた状態で出土しており、その南側から左尺骨が近位を西に向けた状態で出土している。関節状態を保っていないが相対的な位置関係から右肘関節は体軸側に屈した状態と考えられる。頭蓋骨の西側から右上腕骨・右橈骨・右尺骨が出土しており、右上腕骨は近位を北東に遠位を西側に向け、右前腕は近位を西側に向け長軸を東西にそろえた状態で出土している。右肘関節も体軸側に屈した状態と考えられる。腰椎の南西側から西側に右寛骨が東側から左寛骨が出土している。左寛骨は左大腿骨の上位、左腓骨の下位に位置する。腰椎の南側から左大腿骨が近位を東に、左腓骨が近位を東に、左脛骨が近位を西に向けて長軸を東西方向に揃えた状態で出土している。左下肢は左上腕及び橈骨の下位から出土している。右寛骨の西側から右大腿骨・右腓骨が出土している。左大腿骨・腓骨は右上肢の上位から出土している。その南東側から、右脛骨が近位を頭蓋骨の左側頭骨上面に乗った状態で出土している。左右の膝関節を体軸側に強く屈曲した状態であると考えられる。

以上の出土状況から、頭位は北・顔面南向き、右腕を胸部に置き、左腕は左下肢を抱えるように屈し、背側に強く傾いた状態の坐葬であると推定される。墓壇の南西側から髪の毛が出土している。

【17号人骨】

頭位：南

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

隅丸方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内中央部よりやや北西側から、頭蓋骨が左側頭骨を上、顔面を南に向けた状態で出土している。頭蓋骨南側から、下顎骨がオトガイを南東に向けた状態で出土している。本人骨の顎関節は関節状態を保っておらず上下顎は咬合状態にない。下顎骨の下位から左右手の骨が出土している。頭蓋骨東側より、椎骨が概ね関節した状態で出土している。椎骨北側から、右鎖骨・右上腕骨が相対的位置関係を保った状態で出土しており、右上腕骨の上から右肩甲骨が出土している。右上腕骨が遠位を西に、前面を上に向けた状態で出土し、頭蓋骨の下位に位置する。右上腕骨遠位西側から、右橈骨・右尺骨が遠位を南に向け関節状態を保って出土しており、右肘関節は体軸側に屈した状態であったと考えられる。椎骨南東側から、左肋骨が近位・遠位を北西に向けた状態で出土している。椎骨南東側から左肩甲骨が関節窩を西に向け、後面を上に向けた状態で出土している。左上腕骨・左肩甲骨は関節状態を保ち、左上腕骨が遠位を南に向けた状態で出土している。左橈骨・左尺骨は近位を東側に向け、長軸を東西方向にそろえた状態で出土しており、左上腕骨遠位と左前腕の近位の位置から肘関節の関節状態を保って出土している。左肘関節も体軸側に屈した状態であったと考えられる。左橈骨・左尺骨の付近から指骨が出土している。右橈骨遠位・右尺骨遠位下方東側から、右寛骨が出土している。右寛骨西側から、右大腿骨が遠位を北に向け後面を上に向けた状態で頭蓋骨の上から出土している。右脛骨・右腓骨は近位を北に向け、右大腿骨の上位から関節した状態で出土している。右下肢は膝関節を屈した状態であり、右脛骨・右腓骨・足骨の関節状態は保たれていると推定される。左上腕骨近位東側下方に、左大腿骨が遠位を南西に後面を上に向けた状態で出土している。左大腿骨骨体

は左橈骨の骨体・左尺骨の骨体を上位から出土している。左骨盤は左大腿骨骨体の上部の下位にある。左脛骨は遠位をやや南西に向け、前面を上に向けた状態で出土し、外側顆が左大腿骨の骨体上部の上位にある。左脛骨遠位が足骨北東側から近い位置にあつて、足骨との関節状態は保たれていると推定される。左腓骨は左脛骨の下位から出土し、関節状態は保たれていると推定される。左右ともに膝関節を屈した状態であったと考えられる。

以上の出土状態から、両腕を下肢を抱えるように回し膝を屈し背側側に強く傾いた状態で膝を強屈坐葬であったと推定される。頭蓋骨が右側頭部を下にして西側に転じていることから、軟部組織の腐朽に伴い骨が動いたと考えられ、棺に埋葬されたものと推定される。

【18号人骨】

頭位：南

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：不明

正方形の墓壇底部から人骨が出土している。頭蓋骨が、墓壇中央部から頭蓋底を南東側に、顔面を南西側に向けた状態で出土している。右上腕骨が頭蓋骨の東側下位から、近位を南東側、遠位を北西側に向けた状態で出土している。右橈骨・尺骨が頭蓋北西側下位から、近位を北東側、遠位を南西側に向けた状態で出土している。右上腕骨・橈骨・尺骨はそれぞれ相対的位置関係を保っており、肘関節を体軸側に屈した状態であったと推定される。左上腕骨が頭蓋骨南西側から近位を南東側、遠位を北西側に向けた状態、左橈骨・尺骨が頭蓋骨東側から近位を北東側、遠位を南西側に向けた状態で出土している。左上腕骨・橈骨・尺骨は相対的位置関係を保っており、肘関節を体軸側に屈した状態であると推定される。右脛骨・腓骨が左尺骨・橈骨の北西側から長軸をそろえた状態で近位を北東側、遠位を南西側に向けた状態で出土している。左大腿骨は、左上腕骨北側から左上腕骨と長軸をそろえた状態で、近位を西側、遠位を東側に向けた状態で出土している。左大腿骨は近位部分を左尺骨・橈骨の下側にして出土している。左脛骨・腓骨が頭蓋骨南西側から近位を南東側、遠位を北西側に向けた状態で、長軸をそろえて出土している。左脛骨・腓骨は近位部が左大腿骨の下側、遠位部を左橈骨・尺骨の遠位部、右脛骨・腓骨の遠位部の下側からそれぞれ出土している。左大腿骨・脛骨・尺骨は相対的位置関係を保った状態で出土しており、膝関節は屈した状態であると考えられる。

以上のことから、本人骨は、本来頭位を南側、顔を北側に向け、右腕を胸部に置き、左腕は下肢を抱えるように屈し、背側に強く傾いた状態で膝関節を屈した坐葬であったと推定される。頭蓋骨が墓壇中央部から出土しているが、肩関節は墓壇南側に位置することから軟部組織腐朽に伴って本来の埋葬姿勢が崩れたと考えられ、埋葬施設の存在が示唆される。おそらく木棺に埋葬されたものと考えられる。また、右大腿骨のみ遺存していないことから改葬も含め、攪乱を受けた可能性がある。

【22号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇中央付近から頭蓋骨が頭蓋底を下にして出土しており、頭蓋骨北側から上顎骨・下顎骨が出土している。下顎骨はオトガイを下にむけた状態である。頭蓋骨の北側から環椎・軸椎・右肩甲骨片、東側から左鎖骨・椎骨・肋骨片、南東から右上腕骨が出土している。

頭蓋骨西側からは右尺骨・右橈骨・指骨が出土している。右上腕骨と右尺骨・橈骨の位置関係から右肘関節は体軸側に屈した状態であったと考えられる。右橈骨南側から右寛骨が出土しており、右大腿骨が右寛骨と関節した状態で近位を下に、右脛骨が右大腿骨の西側から近位を上に向けた状態で出土しており、膝関節を屈した状態であったと考えられる。

以上の出土状況から、頭位東向き、腕を胴部に置き、膝を立てた状態の坐葬であると推定される。頭蓋骨は軟部組織の腐朽に伴い西側に転じていると考えられることから木棺に埋葬されたと推定される。

【23号人骨】

頭位：北東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内東側から頭蓋骨が頭蓋底を下に、顔面を南西に向けた状態で出土している。その西側から左鎖骨が近位を北に前面を上に向けた状態で出土している。頭蓋骨の東側から右鎖骨が近位を北に後面を上に向けた状態で出土している。右鎖骨より南西側から胸骨が出土している。頭蓋骨の西側から右上腕骨が近位を北西側に向けた状態で出土しており、右尺骨と右橈骨が上腕骨の南西側から近位を北西に向けて出土している。肘関節は関節状態にあり、体軸側に肘を屈した状態で出土している。頭蓋骨の東側から左上腕骨が近位を北西側に向けた状態で出土しており、左尺骨と左橈骨が上腕骨の南西側から近位を東に向けて出土している。肘関節は関節状態にあり、体軸側に肘を屈した状態で出土している。指骨は頭蓋骨南西側から出土している。左右寛骨は頭蓋骨の下位から出土しており、右寛骨が西側、左寛骨が東側に位置する。右大腿骨が右前腕の下位から、近位を東側に遠位を上に向けた状態で出土しており、右寛骨との相対的な位置関係は概ね正しい。右大腿骨の南西側から右脛骨と右腓骨が近位を北西側に遠位を下に向けた状態で、右膝関節は関節状態を保ったまま出土している。左前腕の下位から左大腿骨が近位を北に遠位を上に向けた状態で出土しており、左寛骨との相対的な位置関係は概ね正しい。左大腿骨の南西側から左脛骨と左腓骨が近位を南東・遠位を下に向けた状態で、左膝関節は関節状態を保ったまま出土している。左腓骨は左大腿骨と左脛骨の下位から出土しており、遠位端が左脛骨の骨体中央部に位置する。右脛骨の南東側と左脛骨の南西側から左右の足根骨および趾骨が相対的位置関係を保った状態で出土している。

以上のことから、本人骨は頭位を北東に向け、両腕を胴部に置き、膝を立てた状態の坐葬で埋葬されたと考えられる。頭蓋骨が前方に転じていること、左右膝関節が大きく左右に開き左腓骨が動いていることから、軟部組織の腐朽に伴い骨が動いていると考えられ、本被葬者は木棺などの棺に埋葬されたものと推定される。なお、頭蓋骨の上に切石が落下し、墓壇底には小さな炭片が散在している。

【31号人骨】

頭位：北西

埋葬姿勢：仰臥屈葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

長方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北西側の隅から頭蓋骨が頭蓋底を下に、顔面を東に向けた状態で出土している。頭蓋骨の南西側から右尺骨が出土しており、その南東から右上腕骨が近位を南に前面を上に向けた状態で出土している。頭蓋骨のやや東側から左上腕骨が近位を北に前面を上に向けた状態で出土している。頭蓋骨のやや南側、墓壇中央部から右橈

骨が近位を西に後面を上に向けた状態で出土しており、その南側から左尺骨が近位を東に前面を上に向けた状態で出土している。右肘関節は頭蓋骨の方に屈し、左肘関節は軀幹の方へ屈した状態であると考えられる。墓壇内の南側から右橈骨と左尺骨のやや南東側から左寛骨片が出土しており、その南側から左大腿骨が近位を下に向けた状態で出土している。左大腿骨の東側から左脛骨が近位を上に向けた状態で出土している。左寛骨の南西側から右寛骨片が出土しており、その南側から右大腿骨が近位を下にした状態で、右大腿骨の南側から右脛骨が近位を上に向けた状態で出土している。右脛骨の下位から右腓骨が長軸を東西方向に向けて出土している。左右寛骨片・左右大腿骨・左右脛骨は相対的位置関係を保った状態であり、膝関節は左右とも膝を立てて屈した状態である。

以上の出土状況から、本人骨は仰臥屈葬位で埋葬されたと考えられる。棺材が粉状態で検出されていることから木棺に埋葬されていたと考えられる。

【32号人骨】

頭位：西

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。頭蓋骨は墓壇内中央部から頭蓋底を下に、顔面を北西に向けた状態で出土している。頭蓋東側から下顎がオトガイを下に向けた状態で出土している。頭蓋下部から頸椎が数点前面を北に向け相対的位置関係を保った状態で出土している。下顎東部から腰椎が相対的位置関係を保ち出土している。右肋骨は腰椎の東側、左肋骨は西側に位置し、肋骨も相対的位置関係を保った状態で出土している。頭蓋骨南東部から右鎖骨が近位を北に、前面を上にした状態で出土しており、右鎖骨の下部から近位を西に向けた状態で右肩甲骨が出土している。右上腕が近位を西に、上面を上にした状態で出土している。さらに、右尺骨・右橈骨が右上腕骨の北側から肘関節を保ち、遠位を西側に向けた状態で出土している。右尺骨が右橈骨の上ののっており回外した状態である。右肘関節は体軸側に屈した状態であったと考えられる。頭蓋骨の下部から左上腕骨が近位を南にした状態で出土しており、その北部から左尺骨・左橈骨が近位を北に向けた状態で出土しており肘関節は関節状態を保っていると考えられる。左肘関節も体軸側に屈した状態であったと考えられる。左指骨および右指骨は左尺骨の東部、右尺骨の西部から出土しており、左大腿骨および右大腿骨の上部に位置する。墓壇の北部、右尺骨の東部から右寛骨が前面を南西に向けた状態で出土している。右大腿骨は右寛骨の北側から近位を東、外側縁を上にした状態で出土しており、右脛骨が近位を西、上面を北に向けた状態で相対的位置関係を保ち出土している。左大腿骨は左尺骨の北から近位を北、上面を南に向けて出土しており、左脛骨及び左腓骨は近位を西、上面を北に向け関節状態を保った状態で出土している。下肢骨も概ね関節状態を保ち、股関節及び膝関節を強屈した状態である。

以上の出土状況から、本人骨は頭位西向きで、両腕を胴部に置き、膝を立てた状態の坐葬であると推定される。多くの部位が関節状態を保った状態であるにもかかわらず上下顎が関節していないこと、および頭蓋骨が肩関節の位置よりも北側に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋と下顎の位置が動いたと考えられ、何らかの施設に埋葬されたと考えられる。なお、銭が指骨付近から出土しており、手元に六道銭として置かれていたと推定される。

【33号人骨】

頭位：西

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇は改葬時の攪乱を受け南東部が切り取られている。墓壇内北側から頭蓋骨が顔面を東に向け、右側頭骨を下にした状態で出土している。頭蓋骨南側から下顎骨が出土しており上顎と咬合状態を保っている。下顎南側から胸椎が9点相対的位置関係を保った状態で出土しており、その周囲から肋骨片が出土している。

以上の出土状況から、本人骨は頭位西向きであることが推定される。改葬時の攪乱によって体部の人骨の遺存状態がよくないが、軀幹骨の位置から考えて頭蓋は北側に転じていると考えられ、棺の存在が推定される。

【41号人骨】

頭位：南西

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇南西部は82号墓によって切り取られている。墓壇北西側から頭蓋骨が後頭部を北、顔面を南に向けた状態で出土している。頭蓋骨の下から下顎が出土しており、顎関節は関節している。下顎と頭蓋骨の間に上腕骨が近位を西にした状態で出土している。下顎の下から右尺骨が出土している。

本人骨は、頭蓋を除き遺存状態が悪く、部位の判定が困難であったが、下顎と上腕の位置関係をふまえると坐葬であったと推定するのが妥当である。なお、頭蓋骨の後ろから釘が出土していることから木棺が存在したことが推定される。また、下顎付近から銭と玉が出土している。

【43号人骨】

頭位：北西

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：甕棺

改葬：無

円形の墓壇内に埋置された甕棺から人骨が出土している。甕棺内西北側から頭蓋骨が頭蓋底を下に、顔面を東に向けた状態で出土している。下顎骨は、上顎との関節状態を保った状態で出土している。頭蓋骨と関節した状態で環椎・軸椎が連なって出土しており、その下位から舌骨が出土している。頭蓋骨の下位からは胸椎・腰椎が出土している。頭蓋骨の東側から左肩甲骨が出土しており、その北側から右肩甲骨が出土している。左右肩甲骨の下位から、左肋骨が南側に、右肋骨が北側に位置し、相対的位置関係を保った状態で出土している。左肩甲骨の南側から左上腕骨が近位を上に向けた状態で出土しており、左上腕骨遠位部の西側から左橈骨・左尺骨が近位を南西、遠位を北東に向けて出土している。このことから、左肘関節は屈していると考えられる。右肩甲骨の北西側から右上腕骨が近位を上に向けた状態で出土している。右上腕骨の西側からは右橈骨・右尺骨が出土しており、右上腕骨とはやや離れて位置しているため右肘関節の状態は確認できない。左上腕骨の下位からは左寛骨が出土しており、その北側から仙骨が出土している。左寛骨の上位から左大腿骨が遠位を上に向けた状態で出土している。左大腿骨の南側からは左脛骨・左腓骨が近位を上に向けた状態で出土しており、膝関節は関節状態を保った状態で出土している。このことから、左膝関節は膝を立てて屈している状態であると考えられる。左寛骨の北側から右寛骨が出土している。右寛骨の北側からは、右大腿骨・右脛骨・右腓骨・右膝蓋骨が出

土している。右大腿骨は遠位部を上に向けた状態で出土しており、右脛骨は近位部を上に向けた状態で出土している。このことから、右膝関節も膝を立てて屈していると考えられる。甕棺底部からは、指骨がまとまって出土している。

以上の出土状況から、本人骨は頭位西北側・顔面東向きで、両腕を胸部に置き、膝を立てた状態の坐葬であると推定される。埋葬施設は甕棺である。本人骨はほぼ全ての部位が遺存しており、概ね相対的位置関係を保っていることとあわせ、改葬は行われていないものと推定される。

【44号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内の西側から頭蓋骨が顔面を下に向けた状態で出土している。頭蓋骨の下方より下顎骨が出土しており相対的な位置関係は正しい。頭蓋骨の東側から左肋骨と左肩甲骨が出土し、頭蓋骨の南東側から頸椎が背側を北西に向け数点連なった状態で出土しており、これらの相対的な位置関係は正しい。右上腕骨が頭蓋骨の南東側から近位を北に向けた状態で出土しており、左上腕骨が右上腕骨の北東側から出土している。左右前腕の出土位置は不明である。頭蓋骨の南西側から右大腿骨が近位を上に向けた状態で出土している。右大腿骨の東側から左大腿骨が出土している。

以上のことから頭位を北、顔面を南東に向け、立膝の坐葬で埋葬されたと考えられる。頭蓋骨が後方に転じていることから軟部組織の腐朽に伴い骨が動いたと考えられ、棺が存在していたと推定される。なお墓壇南側に髪の毛が検出されている。

【56号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：円形木棺

改葬：無

円形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋骨・下顎骨が出土しており、環椎・軸椎は頭蓋骨に関節した状態で出土している。頭蓋骨の南東側から右肋骨が相対的位置関係を保った状態で出土している。右肋骨の南側からは椎骨が数点連なった状態で出土している。墓壇内南側からは左鎖骨・左上腕骨・左指骨が出土している。左橈骨・左尺骨も出土しているが、これらは掘削中に出土しているため、左肘関節の状態は不明である。墓壇内南側からは右上腕骨も出土しているが、右橈骨は墓壇内北側から出土しているため、右肘関節の状態も不明である。墓壇の西側から左寛骨が出土しており、その南側から左大腿骨が遠位を上に向けた状態で出土している。左大腿骨の北側からは、左脛骨が近位を上に向けた状態で出土している。このことから、左膝関節は膝を立てて屈していると考えられる。墓壇内北西側からは右寛骨が出土しており、その北側から右大腿骨が遠位を上に向けた状態で出土している。右大腿骨の西側からは、右脛骨が近位を上に向けた状態で出土し、右大腿骨の遠位及び右脛骨の近位は頭蓋骨の上に接した状態で出土している。このことから、右膝関節も膝を立てて屈した状態であると考えられる。

以上の出土状況から、本人骨は本来頭位北側・顔面西向きで背側に強く傾いた状態で膝を立てた坐葬と推定される。頭蓋骨が西側に転じていることから軟部組織の腐朽に伴い骨が動いたと考えられ、埋葬施設の存在が推定され、おそらく木棺であると考えられる。本人骨は多くの部位が遺存しており、概ね

相対的位置関係を保っていることから、改葬は行われていないものと推定される。

【68号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇から人骨が出土している。墓壇内東側から頭蓋骨が顔面を下に向けた状態で出土しており、下顎骨は掘削中に出土している。頭蓋骨の南西側から左上腕骨が東西に長軸をそろえた状態で出土しており、その北側から左橈骨・左尺骨が東西に長軸をそろえた状態で出土している。このことから、左肘関節は体軸側に屈した状態であると想定される。頭蓋骨の北西側から右上腕骨が近位を北東、遠位を南西に向けた状態で出土しており、その南側から右橈骨が東西に長軸をそろえた状態で出土している。このことから、右肘関節も体軸側に屈していると考えられる。墓壇内北西側から左大腿骨が近位を北東、遠位を南西に向けた状態で出土している。左大腿骨遠位部の南東側から左脛骨・左腓骨が東西に長軸をそろえた状態で出土している。このことから、左膝関節は屈していると考えられる。左上腕骨の南側から右大腿骨が近位を東、遠位を西に向けて出土している。右大腿骨遠位部の北西側から右脛骨・右腓骨が近位を南、遠位を北に向けた状態で出土している。このことから、右膝関節は屈していると考えられる。左右の膝関節は頭蓋骨の下位に位置している。

以上の出土状況から、本人骨は頭位東・顔面西向き、両腕を胴部に置き、背側に強く傾いた状態で膝を強屈した坐葬と推定される。本人骨は多くの部位が遺存しており、概ね相対的位置関係を保っていることから、改葬は行われていないものと推定される。なお、釘と考えられる遺物が掘削中に1点出土しており、本人骨は木棺に埋葬されたものと推定される。

【89号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

隅丸方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内西側から右側頭部を下に顔面を南に向けた状態で頭蓋骨が出土しており、下顎骨がオトガイを南に向けた状態で出土している。上下顎は相対的位置関係を保っていると考えられる。頭蓋骨の南側から右肩甲骨が出土している。頭蓋骨の下から右橈骨が近位を北・遠位を南に前面を上に向けた状態で出土し、その東側から右尺骨が近位を北・遠位を南に前面を上に向けた状態で出土している。右橈骨と右尺骨は長軸を北-南方向にそろえた状態で出土している。頭蓋骨東から胸椎が連なった状態で出土している。胸椎の下方西側から右肋骨が多数出土し、その下方東側から左肋骨が多数出土している。頭蓋骨の北東から左肩甲骨が出土しており、頭蓋骨の東から左上腕骨が近位を西に向けた状態で出土しており、遠位の方が近位よりも低い位置から出土している。左肩甲骨および左上腕骨の相対的な位置関係は概ね正しい。左上腕骨の南側から左橈骨・左尺骨が近位を東に向け長軸を東西にそろえた状態で出土しており、肘関節は関節状態を保っており、肘関節を体軸側に屈した状態であったと推定される。左上肢の上方から左大腿骨が近位を南側に背側を上にした状態で、左脛骨が近位を北に内面を上に向けた状態で出土している。左大腿骨と左脛骨は長軸を北-南方向にそろえた状態であり、左膝を屈した状態で埋葬されたと考えられる。頭蓋骨の南側から右大腿骨が遠位を上、右脛骨が近位を下にした状態で出土している。右大腿骨と右脛骨は関節状態を保っており、膝を

立てて屈した状態と考えられる。右脛骨の南側から左足骨が多数出土している。

以上のことから、頭位は北側に向け、両腕を胴部に置き、膝を立てた状態の坐葬と考えられる。頭蓋骨が軟部組織の腐朽に伴い南西側に転じたと考えられ、棺の存在が推定される。

【97号人骨】

頭位：南西

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：甕棺

改葬：不明

方形の墓壇内に埋置された甕棺から人骨が出土している。甕棺内南西側から下顎骨が出土している。下顎骨北側より長管骨が長軸をそろえた状態で出土している。下顎骨南側からも長管骨が南北に長軸をそろえた状態で出土している。

以上の出土状況から、本人骨の頭位は南西と考えられるが、人骨の遺存状態が良好でないため、詳細な埋葬姿勢は不明である。

【98号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内中央から頭蓋骨・下顎骨・頸椎がまとまった状態で出土している。頭蓋骨の東側から鎖骨・肩甲骨・肋骨がまとまった状態で出土している。頭蓋骨の北西側から右上腕骨が近位を北東に向け、長軸を北東－南西に揃えた状態で出土し、右上腕骨の遠位部付近から右橈骨・右尺骨が近位を北に向け、長軸を北西－南東に揃えて出土している。頭蓋の南東側から左上腕骨が近位を北東に向け、長軸を北東－南西に揃えた状態で出土しており、左上腕骨の遠位に近位を接した状態で、左橈骨・左尺骨が近位を南東に向けた状態で出土している。左右上腕骨の遠位部付近からそれぞれ左右前腕が出土していること、左右上腕骨は長軸を北東－南西に揃えているが、左右前腕は長軸を北西－南東に揃えて出土していることから、両腕を回内して埋葬されたと考えられる。また、頭蓋の南東側からは胸椎・腰椎が長軸を東－西に連なった状態で出土している。頭蓋の西側、左右前腕の下方から左右寛骨が出土している。墓壇の北西側、右上腕骨の上方から、右大腿骨が近位を西に向けた状態で出土しており、右大腿骨の上方から右脛骨・右腓骨が近位を北東に向けた状態で出土している。左大腿骨は左寛骨の西側から近位を下に墓壇に立てかけた状態で出土しており、左脛骨・左腓骨は近位を上に向けた状態で出土している。左大腿骨と左脛骨・左腓骨は解剖学的位置関係を保っており、また右大腿骨と右脛骨・右腓骨も相対的位置関係を保った状態で墓壇の上方から出土していることから、本来は膝を立てて屈した状態で出土していたと考えられる。

以上のことから、頭位東で両腕を回内させ、膝を立てた状態の坐葬と考えられる。軟部組織の腐朽に伴い、頭蓋が墓壇底部に、胴部が東側に、左下肢が西側に転じたと考えられる。また右脛骨付近から釘が出土していることから、棺の存在が推定される。

【102号人骨】

頭位：北？

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：木棺

改葬：不明

長方形の墓壇内から人骨がまとまった状態で出土している。墓壇北側の黒灰土中に肋骨が確認されており、頭位は北と推定される。墓壇内中央部よりやや北側から右尺骨が骨体をやや北南軸に向けた状態で出土している。右尺骨南西側から、左大腿骨が骨体を北西・南東軸に向けた状態で出土している。左大腿骨西側から、右大腿骨が骨体をやや北南軸に向けた状態で出土している。

遺存状態が悪く、部位の判定が困難であったため、本人骨の埋葬姿勢は不明である。土壇の南西縁・北西縁から棺材が検出されており、本人骨は木棺に埋葬されたと考えられる。墓壇の北側から銭が出土している。

【103号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

円形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内東側から頭蓋骨が顔面を下に、下顎の後面を上に向けた状態で出土しており、頭蓋の下位から頸椎・胸骨・胸椎・腰椎・肋骨・左右鎖骨・左右肩甲骨が出土している。頭蓋骨の西側から右上腕骨が近位を東に、右上腕骨に関節した状態で右橈骨・右尺骨が近位を西に向けた状態で出土しており、その南側から左上腕骨が近位を東に、左上腕骨に関節した状態で左橈骨・左尺骨が近位を西に向けた状態で出土している。左右の肘関節は体軸側に屈した状態であったと考えられる。下肢骨は上肢骨の上位から出土している。墓壇内西側の寛骨に関節した状態で左右大腿骨が近位を西に向け、長軸を東西に揃えた状態で出土している。左右大腿骨の遠位関節面にそれぞれ左右脛骨の近位部が接した状態で出土しており、左右腓骨がそれぞれ左右脛骨と長軸方向を南東—北西、北東—南西に揃えた状態で出土していることから、左右の膝関節も屈した状態であったと考えられる。

以上の出土状況から頭位東向きで両腕を胴部に置き、背側に強く傾いた状態で膝を強屈した坐葬であると推定される。頭蓋が東向きに動いていることから軟部組織の腐朽時に空間があったと推定され、木棺に埋葬された可能性が考えられる。なお、人骨の下位から銭が出土している。

【104号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：背側に強く傾いた状態の坐葬

埋葬施設：木棺

改葬：無

円形の墓壇底部から人骨が出土している。墓壇南側から頭蓋骨が頭蓋底を北側に、顔面を下側に向けた状態で出土している。頭蓋骨北側より下顎骨がオトガイを下に向けた状態で出土しており、頭蓋骨・下顎骨は相対的位置関係を概ね保った状態である。左鎖骨が下顎骨北西側から、左肩甲骨が下顎東側から出土している。頭蓋骨西側から左上腕骨が近位を北側に、遠位を南西側に向けた状態、左尺骨・橈骨がそれぞれ近位を北側、遠位を北西側に向けた状態で出土している。左鎖骨・肩甲骨及び左上腕骨・尺骨・橈骨はそれぞれ相対的位置関係を保った状態で出土しており、左肘関節を体軸側に屈した状態であると推定される。右鎖骨が下顎骨北東側から、右橈骨と尺骨が下顎骨西側から近位を東側に向けた状態、遠位を西側に向け長軸をそろえた状態で出土している。左寛骨が頭蓋骨の西側下位から、仙骨がその北側、右寛骨がさらにその北側から相対的位置関係を保った状態で出土している。右寛骨は右の下腿の下位から出土している。右大腿骨が頭蓋骨北西側から近位を北東、遠位を南西側に向けた状態で出土

しており、右寛骨との相対的位置関係から股関節は関節状態にあったと推定される。右脛骨・腓骨が頭蓋骨北西側から近位を北東側、遠位を南西側に向けた状態で出土している。右大腿骨・脛骨・腓骨はそれぞれ相対的位置関係を保った状態で出土しており、膝関節を屈した状態であると推定される。左大腿骨が頭蓋骨南東側、上腕骨の下側から近位を北東側、遠位を南西側に向けて出土している。左寛骨との相対的な位置関係から股関節は関節状態にあった可能性が高い。左脛骨・腓骨が頭蓋骨西側、頭蓋骨および左尺骨・橈骨の下側から出土しているが、近遠位の方法は不明である。

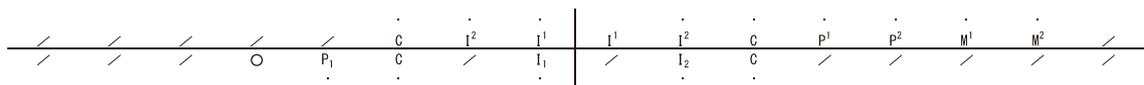
以上のことから、本人骨は、本来頭位を南側、顔面を北側に向け、腕を胸部に置き、背側に強く傾いた状態で膝を強屈した坐葬であったと推定される。頭蓋骨が顔面を下にして南側に転じており、軟部組織腐朽に伴って本来の埋葬姿勢が崩れたものと考えられることから、遺体の周辺に空間が存在するような木棺に埋葬されていたと考えられる。右上腕骨のみ遺存していないが多くの部位が相対的位置関係を保っていることから、改葬は認められない。

2、保存状態

【4号人骨①】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は、鼻骨・上顎骨・左頬骨が遺存しておらず、頭頂骨右側の一部外板以外は遺存している。下顎骨は右オトガイ孔の周辺部のみが遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。



(○歯槽開放、×歯槽閉鎖、/欠損、△歯根のみ、・遊離歯、c 齢歯 以下同様)

歯牙の咬耗度は柘原(1957)の1° aから1° bである。

軀幹骨は、頸椎2点・胸椎3点・腰椎3点・肋骨片複数・仙骨片が依存している。

上肢骨は、左右肩甲骨の関節窩周辺部分および肩峰棘の一部、右鎖骨の胸骨端・肩峰端、左鎖骨が肩峰端以外は遺存している。左右上腕骨は、上腕骨頭および外側顆・内側顆以外は遺存している。左右尺骨は尺骨頭を以外、右橈骨は橈骨頭及び手骨関節面・茎状突起の一部以外は遺存している。その他、左右不明上腕骨頭片、左舟状骨1点、右中手骨片3点、左右不明の中手骨1点、左右不明基節骨3点、指骨片複数点が出土している。

下肢骨は、左右寛骨の腸骨翼の一部および恥骨部以外は遺存している。右大腿骨は、大転子周辺および遠位の一部以外が遺存しており、左大腿骨は大腿骨頭から大転子および外側顆・内側顆の一部以外は遺存している。右脛骨の近位関節面および腓骨関節面から下関節面の一部以外、左脛骨の近位関節面および内顆の一部以外、右腓骨の近位関節面および外顆の一部以外が遺存している。その他、右膝蓋骨の一部、右中足骨2点、左右距骨片、右踵骨片が依存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大坐骨切痕角が小さく乳様突起部が発達していることから男性と判定される。年齢は、仙骨が未癒合である一方四肢骨の骨端は癒合していることから、20代前後であると考えられる。

〔特記事項〕

左脛骨に骨膜炎の痕跡がみられる。腰椎の椎体に骨棘形成がみられる。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大幅が138mm、バジオン・ブレグマ高133mmであり、近世の比較集団の中でも江戸の集団よりはやや小さく、浦山や大町など九州の近世集団よりは大きな値を示す。頭幅高示数は96.4であ

り、中頭型である。

上腕骨は、骨体最小周が 53 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、最小周が 35 mm、骨体横径 15.3 mm、骨体矢状径 10.3 mm、骨体断面示数 67.3 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

尺骨は、矢状径が 10.4 mm、横径 15.0 mm、骨体断面示数 69.3 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 24.2 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央横径は 26.7 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央周は 80 mm、骨体上横径 29.8 mm、骨体上矢状径 21.0 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央断面示数は 90.6、上骨体断面示数 70.5 であり、柱状性は見られず、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が 28.6 mm、栄養孔位横径 18.9 mm、栄養孔位周 73 mm、最小周 63 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。栄養孔位断面示数は 66.1 であり、扁平性は弱い。

【4号人骨②】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良くない。

躯幹骨は、胸骨柄の一部が遺存している。

上肢骨は、左尺骨・橈骨の近位関節部、右大菱形骨・舟状骨、右中手骨 3 点、左右不明の中手骨 3 点、基節骨 3 点、中節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨片、右脛骨の近位部、左脛骨の遠位部、腓骨頭および外顆を除く左腓骨・左右距骨・左中間楔状骨・右中足骨 3 点・左中足骨 3 点・左右不明中足骨 1 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は判別可能な部位が遺存していないため不明である。

〔形質的特徴〕

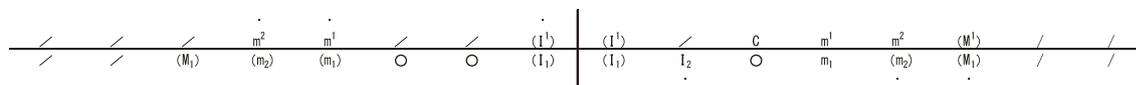
脛骨は、栄養孔位最大径が 26.7 mm、栄養孔位横径 18.7 mm、栄養孔位周 73 mm、最小周 64 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。栄養孔位断面示数は 70.0 であり、扁平性は弱い。

【4号人骨③】

〔人骨所見〕

保存状態：本人骨の保存状態は良くない。

頭蓋骨は右頭頂骨・前頭骨・後頭骨・側頭骨・上顎骨の一部が遺存している。下顎骨は左下顎切痕から左下顎角周辺部を除き遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



躯幹骨は、第一仙椎の一部、胸椎 1 点、肋骨多数が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨が肩峰端から近位部にかけて、左上腕骨が上腕骨頭および近位骨体の一部、右中手骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、右大腿骨骨体部・左大腿骨近位骨体部・右脛骨骨体部・左右不明腓骨が遺存している。

その他、中手骨又は中足骨 3 点、不明指骨 1 点、不明長管骨 2 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は歯牙の萌出状態から2歳前後であると考えられる。

【6号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は、下顎骨・舌骨の一部が遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は柄原(1957)の1° bから2° bである。

軀幹骨は、胸骨柄・頸椎4点・胸椎8点・腰椎4点・その他詳細不明椎骨片2点・仙骨片・肋骨片が多数遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の胸骨関節面から骨体中央部までが遺存している。左右肩甲骨は関節窩から外側縁までが遺存している。左上腕骨は大結節・小結節を除く部分が遺存しており、右上腕骨は大結節・上腕骨滑車を除く部分が遺存している。左橈骨は手根関節面を除く部分が遺存しており、右橈骨は骨体近位部から手根関節面までが遺存している。左尺骨は尺骨頭を除く部分が遺存しており、右尺骨は肘頭から骨体中央部までが遺存している。その他、右有鈎骨・右三角骨・右舟状骨・右大菱形骨・左第1中手骨・右第2中手骨・右第3中手骨・右第4中手骨・右第5中手骨・基節骨5点・中節骨3点・末節骨6点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨は腸骨翼と恥骨下枝を除く部分が遺存しており、右寛骨は腸骨体から寛骨臼の部分および恥骨片が遺存している。左大腿骨は大腿骨頭から骨体遠位部までが遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭・大腿骨頸から骨体遠位部までが遺存している。左脛骨は近位関節面を除く部分が遺存しており、右脛骨は内側顆の一部・外側顆の一部・内果の一部を除く部分が遺存している。左腓骨は骨体近位部から外果までが遺存しており、右腓骨は骨体中央部が遺存している。その他、左舟状骨片・左立方骨片・左内側楔状骨・左中間楔状骨・左外側楔状骨・左第1中足骨片・左右第2中足骨片・左第3中足骨片・右第4中足骨片・中足骨片2点が遺存している。その他、部位不明四肢骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大坐骨切痕角が小さいことから男性と判定される。年齢は左寛骨の耳状面がLovejoy(1985)のphase6であることから熟年以上と推定される。

〔特記事項〕

下顎隆起が確認される。胸椎が4点癒合しており、椎体の前縁から垂直方向にのびる骨棘が癒合している。それ以外の部位に過度の炎症反応がみられないことからDISHの可能性はある。本症例は女性よりも男性に、さらに40歳以上の発症が多いことが指摘されている。腰背痛と胸腰椎の不撓性により日常生活に困難が生じる(林、2003)。(写真19)

〔形質的特徴〕

上腕骨は、全長が285mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示し、中央最大径は24.6mm、中央最小径18.0mm、骨体最小周67mm、中央周70mmであり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は73.2であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、骨体横径が16.3mm、骨体矢状径11.6mm、骨体断面示数71.2であり、比較集団の中でもや

や小さな値を示す。

尺骨は、矢状径が 13.2 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、横径は 17.6 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は 75.0 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 27.5 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央横径は 26.5 mm であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。中央周は 85 mm、骨体上横径 32.0 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、骨体上横径は 25.9 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。中央断面示数は 103.8、上骨体断面示数は 80.9 であり、柱状性は見られず、扁平性はやや強い。

脛骨は、最大長が 336 mm、中央最大径 28.7 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、栄養孔位最大径は 32.1 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央横径は 21.2 mm、栄養孔位横径 23.9 mm、中央周 79 mm、栄養孔位周 89 mm、最小周 74 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 73.9、栄養孔断面示数 74.5 であり、扁平性は弱い。

【7号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は前頭骨の一部・頭頂骨の一部・後頭骨の一部・左側頭骨の外耳孔付近・右側頭骨の外耳孔付近が遺存している。

躯幹骨は肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左上腕骨は骨体から遠位関節面まで遺存しており、右上腕は骨体から肘頭窩上位まで遺存している。左橈骨は骨体から遠位関節面まで遺存している。左尺骨は鉤状突起から骨体が遺存しており、右尺骨は鉤状突起と骨体の一部が遺存している。

下肢骨は、寛骨は左右共に腸骨の一部と寛骨臼が遺存している。左大腿骨は、大腿骨頭と大転子の一部、骨体が遺存しており、右大腿骨は小転子下位から骨体が遺存している。左脛骨は内側顆の一部と骨体から内顆関節面まで遺存している。右脛骨は骨体のみ遺存している。左腓骨は、骨体のみ、右腓骨は骨体中央付近が遺存している。他に左距骨・左踵骨・右距骨・右踵骨が遺存している。

また、右大腿骨近位部および左橈骨骨体部が重複して遺存しており別個体と考えられる。

〔性別と年齢〕

性別は乳様突起が発達しておらず、大坐骨切痕角も大きいことから女性と判定される。年齢は、頭蓋骨の矢状縫合が閉鎖していることから成人と推定される。

〔特記事項〕

右寛骨に前耳状溝が観察され経産婦と考えられる。

〔形質的特徴〕

上腕骨は、骨体最小周が 57 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、最小周が 37 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。

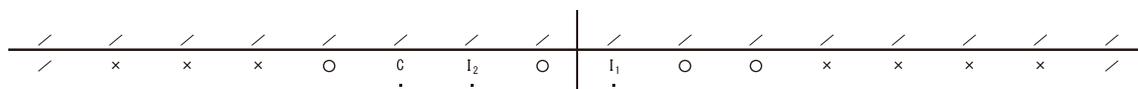
大腿骨は、中央矢状径が 25.5 mm、中央横径 25.3 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央周は 80 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。骨体上横径は 29.2 mm、骨体上矢状径 22.2 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 100.2、上骨体断面示数 76.0 であり、柱状性は見られず、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位最大径は 30.5 mm、栄養孔位横径 22.2 mm、栄養孔位周 81 mm、最小周 67 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。栄養孔断面示数は 72.8 であり、扁平性は弱い。

【12号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は遺存していないが、下顎骨の左下顎枝から右下顎体までが遺存しており、舌骨は舌骨体中央部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は栃原(1957)の2° bである。

躯幹骨は、環椎片・軸椎片・頸椎4点・胸椎11点・腰椎5点・仙骨片・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨は骨体部が遺存している。左肩甲骨は遠位肩甲棘・関節窩・肩峰の一部・関節窩付近の外側縁が遺存している。右肩甲骨は遠位肩甲棘・関節窩・烏口突起片・外側縁の一部が遺存している。左右上腕骨は上腕骨頭の一部と上腕骨滑車の一部以外は遺存している。左橈骨は橈骨頭付近と茎状突起付近の一部以外は遺存しており、右橈骨は骨体部が遺存している。左尺骨は肘頭から近位骨体部が遺存しており、右尺骨は肘頭の一部を除き、肘頭から近位骨体部が遺存している。その他、左第1中手骨・右第2中手骨・左第3中手骨・右第4中手骨・右第5中手骨・基節骨3点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨は腸骨翼の一部・腸骨体・寛骨臼の一部・坐骨の一部・恥骨の一部が遺存している。右寛骨は腸骨が遺存しているが、腸骨翼と寛骨臼の一部が遺存していない。左大腿骨は大転子以外は遺存している。左脛骨はほぼ完存しており、左腓骨は腓骨頭から近位骨体部が遺存している。左膝蓋骨はほぼ完存している。その他、左右踵骨片・左距骨・左右舟状骨・左立方骨・右内側楔状骨・左右第1中足骨・左右第2中足骨・左右第3中足骨・左第4中足骨・左第5中足骨・右第1基節骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕が大きく右寛骨に前耳状溝がみられることから、女性と判定される。年齢は左右寛骨の耳状面がLovejoy(1985)のphase VIであることから、熟年と推定される。

〔特記事項〕

胸椎1点に圧迫骨折が認められ(写真20)、腰椎1点に骨棘の形成がみられる。椎体の圧迫骨折は多くの場合加齢による骨の脆弱化(骨粗しょう症)に起因し、弥生時代から女性により高頻度でみられる(弦本, 2012)左右の肩甲骨の関節窩に関節炎がみられ、左側上腕骨の上腕三頭筋附着部に膨隆がみとめられる。左上腕骨遠位の関節面および左大腿骨遠位の関節面にリップリングがみられる。右寛骨に前耳状溝が認められる。

〔形質的特徴〕

上腕骨は、最大長が273 mmであり、比較集団の中でも浦山や大町といった他の太宰府市の近世集団と近似する値を示し、中央最大径は19.0 mm、中央最小径15.2 mmであり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央周は56 mmであり、比較集団の中でも九州の現代人に近似する値を示し、骨体断面示数は80.0であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。

橈骨は、骨体横径が14.8 mmであり、他の近世の比較集団と近似する値を示し、骨体矢状径は10.9 mmであり、比較集団の中でも中間的な値を示す。骨体断面示数は73.6であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が11.0 mmであり、他の近世の比較集団と近似する値を示し、横径は16.2 mmであり、比較集団の中でも大きな値を示す。骨体断面示数は67.9であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が24.9 mmであり、近世の比較集団と近似する値を示し、中央横径は26.8 mm、

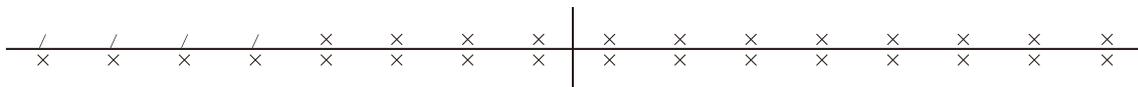
中央周 82 mm、骨体上横径 31.1 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体上矢状径は 22.4 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 92.9、上骨体断面示数 72.0 であり、柱状性は見られず、扁平性は非常に強い。

脛骨は、全長が 322 mm、最大長 326 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最大径は 25.8 mm、栄養孔位最大径 27.9 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央横径は 20.2 mm、栄養孔位横径 21.9 mm、中央周 73 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、栄養孔位周は 79 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 78.3、栄養孔断面示数 78.5 であり、扁平性は弱い。

【13号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は上顎骨の一部・左頬骨弓・左下顎枝を除いた部分が遺存している。歯牙は遺存していない。下顎歯槽の閉鎖状態は以下の通りである。



軀幹骨は胸骨柄の一部・頸椎 7 点・胸椎 8 点・腰椎 5 点・仙骨片・肋骨片が多数遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の胸骨関節面から骨体遠位部までが遺存している。左右肩甲骨は、肩峰・鳥口突起・関節窩・外側縁が遺存している。左上腕骨は大結節・上腕骨顆を除いた部分が遺存している。右上腕骨は近位関節面以外が遺存している。左尺骨は肘頭から骨体中央部までが遺存している。右尺骨はほぼ完存している。左橈骨は骨体中央部が遺存しており、右橈骨はほぼ完存している。その他、左右有頭骨・左大菱形骨・左右第 1 中手骨・右第 2 中手骨・右第 3 中手骨・右第 4 中手骨・中手骨片 1 点・基節骨 2 点・中節骨 3 点・末節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨は腸骨体近位部・恥骨下枝を除き遺存しており、右寛骨は腸骨翼の一部・恥骨下枝を除いた部分が遺存している。左大腿骨は大腿骨頭の一部・大転子を除いた部分が遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭・大腿骨顆から骨体遠位部までが遺存している。左脛骨はほぼ完存しており、右脛骨は近位関節面の一部以外が遺存している。左腓骨は外果窩を除いた部分が遺存しており、右腓骨は骨体近位部から骨体遠位部までが遺存している。その他、左膝蓋骨・左右腫骨片・左舟状骨・左立方骨・左右内側楔状骨・左中間楔状骨・左右外側楔状骨・左右第 1 中足骨・左第 2 中足骨・左第 3 中足骨・左右第 4 中足骨・左第 5 中足骨・右第 1 基節骨・基節骨 2 点が遺存している。

その他、部位不明指骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が大きく、乳様突起が発達していないことから、女性と判定される。年齢は、歯槽が全て閉鎖しており、寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase 5 ~ 6 であることから、熟年と推定される。

〔特記事項〕

腰椎椎体に骨棘が形成される。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が 181 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、最大幅は 129 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。頭長幅示数は 71.3 であり、長頭型である。眼窩幅は 42.3 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、眼窩高は 32.9 mm であり、近世の比較集団の中でも

小さな値を示す。眼窩示数は 77.8 であり、中眼窩型である。鼻骨最小幅は 3.9 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

下顎骨は、下顎枝高が 57.7 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示し、下顎枝幅は 30.9 mm、下顎枝示数 53.6 であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が 54 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

橈骨は、最小周が 35 mm であり、近世の比較集団の中でも浦山や大町といった他の太宰府市の近世集団と近似する値を示し、骨体横径は 13.8 mm、骨体矢状径 9.9 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。骨体断面示数は 71.7 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が 11.0 mm、横径 14.7 mm、骨体断面示数 74.8 であり、近世の比較集団と近似する値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 24.6 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央横径は 25.1 mm であり、比較集団の中でも太宰府市の浦山の集団と近似する値を示す。中央周は 78 mm、骨体上横径 30.6 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体上矢状径は 20.7 mm であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。中央断面示数は 102.0、上骨体断面示数 67.6 であり、扁平性は非常に強い。

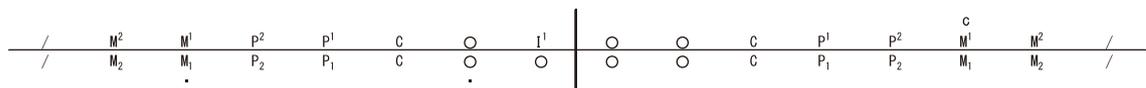
脛骨は、全長が 303 mm、最大長 311 mm、中央最大径 25.6 mm、栄養孔位最大径 28.7 mm、中央横径 19.8 mm、栄養孔位横径 20.5 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央周は 73 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。栄養孔位周は 79 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、最小周は 66 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央断面示数は 77.3、栄養孔断面示数 71.4、長厚示数 21.8 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、全長が 310 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

【17号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の残存状態は極めて良好である。頭蓋は、頭蓋骨、下顎骨ともに概ね完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は柘原 (1957) の 1° a から 2° b である。

躯幹骨は環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・仙骨が遺存しており、左右肋骨はほぼ完存している。

上肢骨は左右鎖骨・左右肩甲骨・左右上腕骨・左右尺骨・左右橈骨はほぼ完存している。その他、左右舟状骨・左右月状骨・左右三角骨・左右小菱形骨・左右有頭骨・左右有鈎骨・左右中手骨・基節骨 10 点・中節骨 3 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・左膝蓋骨・左右脛骨・左右腓骨がほぼ完存している。その他、左右踵骨・左右距骨・左右舟状骨・左右立方骨・左右外側楔状骨・左内側楔状骨・右中間楔状骨・左右第 1 中足骨・左右第 2 中足骨・左右第 3 中足骨・左右第 4 中足骨・左右第 5 中足骨・基節骨 5 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が大きく、乳様突起および眼窩上隆起と外後頭隆起が発達していないことから女性と判定される。年齢は歯牙の咬耗度が柘原 (1957) の 1° a から 2° b であり、耳状面が phase IV

(Lovejoy, 1985) であることから、成年であると推定される。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が 177 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、最大幅は 136 mm、バジオン・ブレグマ高 131 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。頭長幅示数は 76.8 で中頭型、頭長高示数は 74.0 で中頭型、頭幅高示数は 96.3 で中頭型である。中顔幅は 95.1 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示し、顔高は 110.4 mm、上顔高 63.6 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。ウィルヒョウの顔示数は 116.1 で低顔型、ウィルヒョウ上顔示数は 66.9 で低顔型である。眼窩幅は 38.9 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、眼窩高は 33.5 mm であり、近世の比較集団の中でも将軍家・大名を除いた集団に近似する値を示す。眼窩示数は 86.1 であり、中眼窩型である。鼻幅は 26.5 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、鼻高は 46.1 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。鼻示数は 57.5 であり、広鼻型である。全側面角は 79°、歯槽側面角 62° であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、前眼窩間幅は 17.1 mm、鼻根横弧長 21 mm、鼻根湾曲示数 81.4 であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。鼻骨最小幅は 6.7 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が 27.7 mm、下顎枝高 49.1 mm、下顎枝幅 28.3 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、下顎枝示数は 57.6 であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。

上腕骨は、最大長が 263 mm、全長 261 mm、中央最大径 19.1 mm、中央最小径 15.6 mm であり、比較集団の中でもやや小さな値を示し、骨体最小周は 54 mm、中央周は 56 mm であり、比較集団の中でも九州の現代人と近似する値を示す。骨体断面示数は 81.7、長厚示数 20.5 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

橈骨は、最小周が 33 mm、骨体横径 12.6 mm、骨体矢状径 8.9 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、骨体断面示数は 70.6 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、機能長が 185 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、最小周は 31 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。矢状径は 9.9 mm、横径 13.8 mm、骨体断面示数 71.7 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、最大長が 378 mm であり、比較集団の中で中間的な値を示し、自然位長は 369 mm、中央矢状径 20.4 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央横径は 23.6 mm であり、比較集団の中で中間的な値を示し、中央周は 70 mm、骨体上横径 26.0 mm、骨体上矢状径 19.1 mm であり、比較集団の中でやや小さな値を示す。長厚示数は 19.0、中央断面示数 86.4、上骨体断面示数 73.5 であり、柱状性は見られず、扁平性は非常に強い。

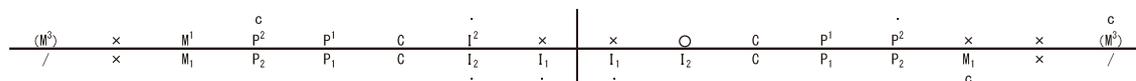
脛骨は、全長が 295 mm、最大長 300 mm、中央最大径 22.9 mm、栄養孔位最大径 26.3 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央横径は 19.4 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。栄養孔位横径は 21.4 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央周は 65 mm、栄養孔位周 74 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。最小周は 61 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 84.7、栄養孔断面示数 81.4、長厚示数 20.7 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、全長が 294 mm、中央最大径 12.0 mm、中央最小径 8.5 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央周は 35 mm であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。最小周は 32 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央断面示数は 70.8 であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。長厚示数は 10.9 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

【18号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は、左右頬骨弓・左側頭骨の一部・左乳様突起以外は完存している。頭蓋主要三縫合は、内板がほとんど閉じており、外板が閉じかけている。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は柘原(1957)の0°から2° bである。

躯幹骨は、胸骨柄が完存した状態、胸骨体の一部・頸椎1点・胸椎4点・腰椎3点・判別不明の椎体1点、左右第一肋骨および肋骨複数点が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨はほぼ完存している。左右肩甲骨ともに関節窩の周辺が遺存している。右上腕骨の骨頭及び外側上顆の一部以外、左上腕骨の骨体の一部以外が遺存している。右橈骨は完存しており、左橈骨は橈骨頭以外ほぼ完存している。右尺骨の尺骨頭以外、左尺骨の遠位骨体部の一部以外が遺存している。その他、右中手骨5点、左中手骨5点、右大菱形骨・小菱形骨・有頭骨・舟状骨・三角骨・有鉤骨、左大菱形骨・小菱形骨・有頭骨・舟状骨・豆状骨、基節骨7点、中節骨4点、末節骨5点が遺存している。

下肢骨は、耳状面の一部を含む左右寛骨片、右大腿骨頭、大腿骨頭から大転子・小転子の一部を除く左大腿骨、左右膝蓋骨の一部、遠位部および内側顆の一部を除く右脛骨、右腓骨の遠位部、左脛骨・腓骨がほぼ完存した状態で遺存している。その他、左右距骨、右踵骨、右中足骨破片、左踵骨・舟状骨・外側楔状骨・中間楔状骨・内側楔状骨・左第2・3中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切角が小さいことから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況、歯牙の咬耗度から熟年と推定される。

〔特記事項〕

腰椎に骨棘が形成されている。胸椎が5点、椎体の前縁から垂直方向にのびる骨棘のより癒合している(写真21)。それ以外の部位に過度の炎症反応がみられないことからDISHの可能性はある(林、2003)。上顎左第3大臼歯は萌出中であり、かつ、齶歯が認められる。下顎左第1大臼歯にも同様に齶歯が認められる。右脛骨に骨膜炎の痕跡が確認される。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が187mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、最大幅は130mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。バジオン・ブレグマ高は132mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。頭長幅示数は69.5で超長頭型、頭長高示数は70.6で中頭型、頭幅高示数は101.5で狭頭型である。顔高は115.6mm、眼窩幅43.4mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示し、眼窩高は34.1mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。眼窩示数は78.6であり、中眼窩型である。鼻幅は25.2mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示し、前眼窩間幅は16.9mm、鼻根横弧長24mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、鼻根湾曲示数は70.4、鼻骨最小幅は5.3mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

下顎骨は、下顎枝高が50.7mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、下顎枝幅は34.2mm、下顎枝示数67.5であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、機能長が 225 mm、最小周 42 mm、骨体横径 16.4 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。
尺骨は、矢状径が 13.8 mm、横径 17.6 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、骨体断面示数は 78.4 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 26.2 mm、中央横径 25.1 mm、骨体上横径 31.9 mm、骨体上矢状径 23.9 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。中央断面示数は 104.4、上骨体断面示数 74.9 であり、柱状性は見られず、扁平性は非常に強い。

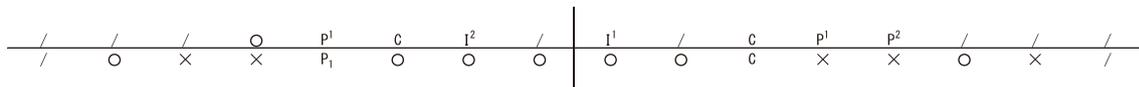
脛骨は、栄養孔位横径が 21.0 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、最小周は 73 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

腓骨は、全長が 342 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最大径は 14.0 mm、中央最小径 11.7 mm、中央周 41 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央断面示数は 83.6 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

【22 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は比較的良好である。頭蓋は頬骨・上顎骨を除いた部分が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は枊原 (1957) の 2° b である。

軀幹骨は頸椎 5 点・仙骨片・肋骨片・椎骨 4 点が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨は骨体近位部から遠位部までが遺存している。左肩甲骨は肩甲棘付近の部分が遺存しており、右肩甲骨は関節窩の部分が遺存している。左上腕骨は上腕骨頭から骨体遠位部まで内側側のみ遺存している。右橈骨は骨体近位部が遺存している。その他、右第 1 中手骨・基節骨 1 点・中節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、右寛骨は大坐骨切痕から寛骨臼までが遺存している。右大腿骨は大腿骨頭から骨体中央部までが遺存している。左脛骨は外側顆が遺存しており、右脛骨は骨体部・下関節面の部分が遺存している。その他、右距骨片が遺存している。

その他、詳細部位不明の四肢骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が大きく乳様突起が発達していないことから、女性と判断される。年齢は歯牙の咬耗度から成年～熟年と推定される。

〔特記事項〕

胸椎の椎体及び軸椎の歯突起に骨棘形成が見られる。左右不明であるが下顎の大白歯に齶歯が確認される。

〔形質的特徴〕

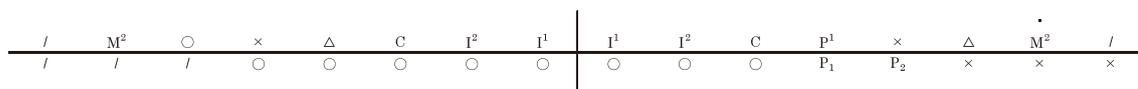
頭蓋骨は、最大長が 176 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 23.1 mm、中央横径 23.6 mm、中央周 73 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央断面示数は 97.9 であり、柱状性は見られない。

【23号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は前頭骨・右側頭骨が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は栃原（1957）の2° a～2° bである。

躯幹骨は胸骨体・頸椎3点・腰椎5点が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨はほぼ完存している。左肩甲骨は関節窩から外側面の下角までが遺存しており、右肩甲骨は肩峰・鳥口突起・関節窩から肩甲切痕までの部分が遺存している。左右上腕骨はほぼ完存している。左右橈骨はほぼ完存している。左右尺骨はほぼ完存している。その他、左第1中手骨・左第2中手骨・左第3中手骨・基節骨3点・中節骨1点・右第1中手骨・右第2中手骨・右第3中手骨・右第5中手骨・基節骨3点・中節骨2点・末節骨4点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨は腸骨翼から寛骨臼までの部分が遺存しており、右寛骨はほぼ完存している。左右大腿骨はほぼ完存している。右左脛骨はほぼ完存している。左右腓骨は近位関節面以外はほぼ完存している。その他、左右膝蓋骨・左踵骨・左距骨・左舟状骨・左立方骨・左内側楔状骨・左中間楔状骨・左外側楔状骨・左第1中足骨・左第2中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・左第5中足骨・右踵骨・右距骨・右舟状骨・右立方骨・右内側楔状骨・右外側楔状骨・右基節骨5点・右第1中足骨・右第2中足骨・右第3中足骨・右第4中足骨・右第5中足骨・右末節骨2点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起が発達しており大坐骨切痕が小さいことから、男性と判定される。年齢は左寛骨の耳状面はLovejoy（1985）のPhase VIであり、歯牙の咬耗度は栃原（1957）の2° a～2° bであることから熟年前半であると推定される。

〔特記事項〕

前頭骨中央部に陥没痕と亀裂痕がみられ、該当箇所の頭蓋内側面も多孔であることから、陥没骨折と考えられる（写真22）。生体反応が確認され表面平滑であることから治癒している。変形は頭蓋全体に及んでいないため屈曲骨折であり作用面の局限した凶器で強打された、などが要因と考えられる（高津，1996）。左橈骨にコーレス骨折の痕跡が認められる。腰椎の椎体に骨棘の形成が確認される。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、眼窩幅が42.1mm、眼窩高34.3mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示し、九州の比較集団の値に近い。眼窩示数は81.5であり、中眼窩型である。鼻幅は24.6mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、鼻高は52.9mmであり、比較集団の中でも中間的な値を示す。鼻示数は46.5であり、狭鼻型である。前眼窩間幅は17.0mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、鼻根横弧長は26mmであり、比較集団の中でも大きな値を示す。鼻根湾曲示数は65.4であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が38.5mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が65mmであり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。

橈骨は、最小周が43mmであり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体横径は16.4mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。骨体矢状径は10.9mm、骨体断面示数は66.5であり、比較

集団の中でも小さな値を示す。

尺骨は、矢状径が 12.4 mm であり、比較集団の中でもやや小さな値を示し、横径は 16.4 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。骨体断面示数は 75.6 であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。

大腿骨は、最大長が 430 mm、自然位長 418 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央矢状径は 26.9 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央横径は 26.6 mm、中央周 85 mm、骨体上横径 30.5 mm、骨体上矢状径 25.1 mm、長厚示数 20.3 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 101.1、上骨体断面示数 82.3 であり、柱状性は見られず、扁平性は強い。

脛骨は、全長が 326 mm、最大長 331 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央最大径は 28.5 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。栄養孔位最大径は 31.8 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央横径は 21.8 mm、栄養孔位横径 24.6 mm、中央周 81 mm、栄養孔位周 89 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 73.9、栄養孔断面示数 77.4 であり、扁平性は弱い。

【31 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は右側眼窩下孔から頬骨までと前頭骨片が遺存している。下顎骨は左の下顎頭や左右の下顎枝の一部を除きほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	P ¹	P ₂	M ¹	M ²	M ³
○	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	P ₁	P ₂	×	M ²	×

歯牙の咬耗度は栃原（1957）の 1° b ~ 1° c である。

上肢骨は、右鎖骨は鎖骨体の中央部から肩峰端まで遺存している。左右上腕骨は上腕骨頭がない状態で骨体部が遺存している。左右尺骨は肘頭・尺骨頭を除いた骨体部が遺存している。右橈骨は橈骨体が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨は寛骨臼の部分が遺存している。左大腿骨は大腿骨頸から大転子を除き遺存している。右大腿骨は転子間線から大腿骨体が遺存している。左脛骨は脛骨体が遺存している。右脛骨は内果を除き遺存している。左右腓骨は骨体部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は四肢骨のサイズから、女性の可能性が高い。年齢は、咬耗度が栃原（1957）の 1° b ~ 1° c であることから成年前半であると推定される。

〔形質的特徴〕

四肢骨の計測値は、近世の女性の集団に近い傾向を示す。

右橈骨は、骨体横径が 14.3 mm、骨体矢状径 10.2 mm であり、近世の女性の比較集団に近似する値を示す。骨体断面示数は 71.2 であり、近世の女性の比較集団の中で中間的な値を示す。

【32 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は前頭骨・頭頂骨・後頭骨・両側頭骨が遺存しており、顔面部以外は概ね遺存している。下顎骨は右の関節突起、下顎枝の一部を除き遺存している。歯牙も一部残存しており、以下に歯式を示す。

/	/	/	/	×	c	/	I ¹		/	○	.	.	P ¹	/	/	/
/	/	/	P ₂	P ₁	c	○	○		○	×	c	c	×	/	/	/

歯牙の咬耗度は柘原 (1957) のから 2° a である。

軀幹骨は頸椎 7 点、胸椎 12 点、腰椎 4 点が遺存している。左肋骨が 5 本、右肋骨が 9 本遺存している。

上肢骨は、左鎖骨が近位骨端以外は遺存しており、右鎖骨は骨体が遺存している。左肩甲骨は関節窩と肩峰近位、外側縁が遺存しており、右肩甲骨は関節窩・肩甲切痕・肩甲棘の一部が遺存している。左上腕骨は骨体から肘頭窩上位及び上腕骨滑車の一部が遺存している。右上腕骨は骨体の一部が遺存している。左橈骨は関節環状面の一部と骨体が遺存しており、右橈骨は骨体の一部及び尺骨切痕と手根関節面の一部が遺存している。左尺骨は尺骨粗面から骨体が遺存している。右尺骨はほぼ完存している。左基節骨は 3 点、左中手骨は第 2 指・第 3 指・第 4 指が遺存している。右手根骨は豆状骨・有鉤骨・三角骨・月状骨が遺存しており、右中手骨は第 2 指・第 3 指・第 4 指が遺存している。ほかに左右不明の大菱形骨・手根骨・中手骨が 2 点・指骨が 9 点遺存している。

下肢骨は、左寛骨の腸骨翼の一部と寛骨臼・大坐骨切痕・恥骨上枝・恥骨体の一部・恥骨下枝が遺存している。右寛骨は腸骨翼の一部から寛骨臼・恥骨上枝が遺存している。左大腿骨は大転子・小転子・内側上顆を除き遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭の一部と大転子、外側上顆・内側上顆の一部を除き遺存している。左脛骨は外側顆の一部・内側顆の一部・脛骨粗面・内果の一部を除き遺存している。右脛骨は外側顆・脛骨粗面・内果溝・腓骨切痕を除き遺存している。左腓骨は腓骨関節面の一部から骨体・外果の一部が遺存している。右腓骨は骨体の一部が遺存している。左足根骨は距骨・踵骨・外側楔状骨・内側楔状骨が遺存しており、右足根骨は距骨・踵骨・外側楔状骨・内側楔状骨・足根骨 3 点・中足骨 3 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が大きく乳様突起部が発達していることから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度から成年と推定される。

〔特記事項〕

右眼窩にクリブラオルビタリアが観察される (写真 23)。右上顎切歯は先天的に欠如している。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が 178 mm、バジオン・ブレグマ高 136 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、最大幅は 129 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。頭長幅示数は 72.5 で長頭型、頭長高示数は 76.4 で高頭型、頭幅高示数は 105.4 で狭頭型である。眼窩幅は 40.0 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。

下顎骨は、下顎枝幅が 30.5 mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

橈骨は、骨体横径が 14.7 mm であり、比較集団の中でも九州の現代人と近似する値を示し、骨体矢状径は 12.0 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は 81.6 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が 14.4 mm、横径 16.5 mm、骨体断面示数 87.3 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 30.1 mm、中央横径 25.6 mm、中央周 88 mm、骨体上横径 29.7 mm、骨体上矢状径 25.9 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。中央断面示数は 117.6、上骨体断面示数 87.2 であり、柱状性が見られ、扁平性は弱い。

脛骨は、全長が 345 mm、最大長 353 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、中央最大径は 29.3 mm、栄養孔位最大径 30.7 mm、中央横径 23.3 mm、栄養孔位横径 23.4 mm、中央周 86 mm、栄養孔位周 89 mm、最小周 76 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。中央断面示数は 79.5、栄養孔断面

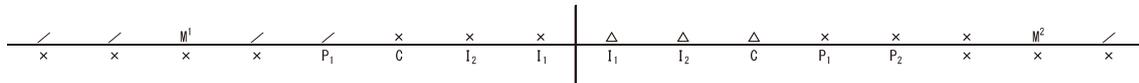
示数 76.2、長厚示数 22.0 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、最小周が 34 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。

【33 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は左右頬骨弓・後頭骨の一部を除き遺存している。下顎は下顎頭を除きほぼ遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙咬耗度は栃原（1957）の 2° b ~ 3° である。

躯幹骨は、胸椎 9 点、右肋骨片が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨の骨体部、左肩甲骨の関節窩と肩甲棘の一部が遺存しており、右肩甲骨は肩峰の一部及び外側縁が遺存している。左上腕骨は近位骨体が遺存しており、右橈骨は骨体の一部が遺存している。

下肢骨は右大腿骨の骨体近位部及び、外側顆が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は乳様突起および眼窩上隆突起、外後頭隆起が発達しているため、男性と判定される。年齢は、歯牙の咬耗度から、熟年と推定される。

〔形質的特徴〕

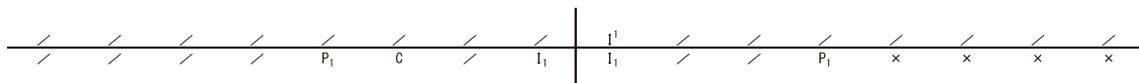
頭蓋骨は、バジオン・ブレグマ高が 134 mm、上顔高は 68.8 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩幅は 41.5 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、眼窩高は 37.2 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。眼窩示数は 89.6 であり、高眼窩型である。鼻幅は 26.5 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、鼻高は 51.8 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。鼻示数は 51.2 であり、広鼻型である。前眼窩間幅は 20.2 mm、鼻骨最小幅 9.4 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

下顎骨は、下顎枝幅が 32.5 mm であり、近世の比較集団の中でも九州の近世集団に近似する値を示す。

【41 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は前頭骨の一部・頭頂骨の右部・後頭骨の一部・右側頭骨・左側頭骨の一部・鼻骨の一部が遺存している。下顎は左下顎角を除き遺存しており、歯牙も一部遺存している。以下に残存歯牙の歯式を示す。



上肢骨は、右尺骨がほぼ完存している。他に左右不明の上腕骨の骨体近位部、左右不明の前腕の骨体、基節骨が 2 点、中節骨が 3 点遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は乳様突起・眼窩状隆起が発達しているため男性と判定される。年齢は、歯槽の閉鎖状態から熟年以上の可能性が高いと考えられる。

【43号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は極めて良好である。頭蓋骨はほぼ完存しており、舌骨の左大角が遺存している。歯牙も全て遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

.	.					.											.
M ²	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ²	.
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	.

躯幹骨は、環椎・軸椎・頸椎5点・胸椎12点・腰椎5点・左右肋骨12点・肋骨片が遺存している。仙骨は完存しており、尾骨も遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨は完存している。左肩甲骨は下角付近以外は遺存している。右肩甲骨は肩甲下窩から下角以外の部分は遺存している。左肩甲骨は下角以外は遺存している。左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨はほぼ完存している。その他、右月状骨・左右舟状骨・左右大菱形骨・右小菱形骨・左右有頭骨・左右鈎骨・三角骨片1点・左右豆状骨・左右第1中手骨・左右第2中手骨・左右第3中手骨・左右第4中手骨・左右第5中手骨・左右第1基節骨・左右第2基節骨・左右第3基節骨・左右第4基節骨・左右第5基節骨・第2中節骨1点・左右第3中節骨・左右第4中節骨・左第5中節骨・右第1末節骨・末節骨3点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨は前殿筋線から後殿筋線の間で一部遺存していないが、それ以外は遺存している。左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨はほぼ完存しており、左右膝蓋骨も完存している。その他、左右踵骨・左右距骨・左右舟状骨・左右立方骨・左右内側楔状骨・左右中間楔状骨・左右外側楔状骨・左右第1中足骨・左右第2中足骨・左右第3中足骨・左右第4中足骨・左右第5中足骨・左右第1基節骨・第2基節骨1点・左右第5基節骨・基節骨2点・左右第1末節骨・末節骨3点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起・乳様突起が発達しており、大坐骨切痕が鋭角であることから、男性と判定される。年齢は左右寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase IV であり、恥骨結合面が Sakaue (2006) の phase IV であることから、成年であると推定される。

〔特記事項〕

乳様突起が肥厚しており、大後頭孔付近にも点状に肥厚がみられる。左右上顎第2大臼歯・左右上顎第3大臼歯に嚢胞がみられ、左下顎第1小臼歯・左下顎第1大臼歯に歯槽骨の吸収が認められる。歯槽骨は全体的に多孔である。歯槽骨にみられるこのような変化は代謝性の骨疾患と強く関連し、嚢胞の形成などは副甲状腺機能亢進症の際に頻発する傾向が指摘されている（高橋, 1985）。胸骨は胸骨柄と胸骨体が癒合しており、甲状軟骨および仙骨の仙骨角部分が骨化した状態で遺存している。胸椎には骨棘の形成が認められ、椎体部は多孔である。第5腰椎にも骨棘の形成と椎体の陥凹が認められる（写真17）。仙骨は6椎骨仙骨である（竹内1980）（写真18）。骨折か先天性の変異か不明であるが左の有鈎骨の有鈎骨鈎が一部収縮している。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が176 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、最大幅は144 mm、バジオン・ブレグマ高136 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。頭頂幅示数は81.8 で短頭型、頭頂高示数は77.3 で高頭型、頭幅高示数は94.4 で中頭型を示す。頬骨弓幅は138 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、中顔幅は100 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。顔高は132.9 mm、上顔高77.9 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値であり、将軍

家に近い値を示す。コルマン顔示数は 96.3 で過狭顔型、ウィルヒョウ顔示数は 132.9 で狭顔型、コルマン上顔示数は 56.4 で狭上顔型、ウィルヒョウ上顔示数は 77.9 で狭顔型である。眼窩幅は 42.0 mm、眼窩高 34.9 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、眼窩示数は 83.1 であり、中眼窩型である。鼻幅は 24.9 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値であり、鼻高は 55.0 mm であり、近世の比較集団の中でも将軍家・大名家を除いた集団よりやや大きな値を示す。鼻示数は 45.3 であり、狭鼻型である。全側面角は 89°、歯槽側面角 86° であり、比較集団の中でも大きな値を示す。前眼窩間幅は 20.5 mm、鼻根横弧長 30 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示し、鼻根湾曲示数は 68.3 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。鼻骨最小幅は 7.3 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

下顎骨は、下顎頭間幅が 126.6 mm、下顎角幅 109.7 mm、下顎骨長 69.8 mm、オトガイ高 37.8 mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示し、下顎枝幅は 61.4 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、下顎枝幅は 29.7 mm、下顎枝示数 48.4 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

上腕骨は、最大長が 321 mm、全長 313 mm、中央最大径 24.2 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最小径は 17.7 mm、骨体最小周 66 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央周は 70 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は 73.1、長厚示数 20.6 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、最大長が 236 mm、機能長 220 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、最小周は 39 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。骨体横径は 17.6 mm、骨体中央横径 15.8 mm、骨体矢状径 12.0 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、骨体中央矢状径は 11.5 mm、長厚示数 17.7、骨体断面示数 68.2、中央断面示数 72.8 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

尺骨は、最大長が 253 mm、機能長 220 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、最小周は 35 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、矢状径は 11.8 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。横径は 17.1 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、長厚示数は 15.9、骨体断面示数 69.0 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、最大長が 438 mm、自然位長 434 mm、中央矢状径 29.4 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央横径は 27.3 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央周は 88 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体上横径は 34.0 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。骨体上矢状径は 26.4 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、長厚示数は 20.3 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 107.7、上骨体断面示数 77.6 であり、柱状性は見られず、扁平性は強い。

脛骨は、全長が 353 mm、最大長 358 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最大径は 27.4 mm、栄養孔位最大径 29.8 mm、中央横径 20.9 mm、栄養孔位横径 21.3 mm、中央周 75 mm、栄養孔位周 82 mm、最小周 68 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央断面示数は 76.3、栄養孔断面示数 71.5、長厚示数 19.3 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、全長が 353 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最大径は 13.9 mm、中央最小径 10.3 mm、中央周 39 mm、最小周 33 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央断面示数は 74.1 であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、長厚示数は 9.3 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

【44号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は前頭骨の一部と後頭骨以外は遺存している。下顎骨はほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ²	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	○	I ¹		I ¹	I ²	C	P ¹	P ₂	M ¹	/	/
M ²	M ²	/	P ²	P ¹	C	○	I ¹		I ¹	I ²	C	P ₁	P ₂	×	○	/

歯牙咬耗度は栃原（1957）の1° a～1° bである。

躯幹骨は、胸骨は胸骨柄・胸骨体の二つの部分が遺存している。環椎は後弓・横突起がない状態で遺存している。軸椎は棘突起以外が遺存している。頸椎6点・胸椎10点・腰椎4点が遺存している。仙骨は第4・5前仙骨孔の部分を除き遺存している。肋骨は16点が遺存している。

上肢骨は、左右肩甲骨は鳥口突起・肩峰・関節窩の部分が遺存している。左右鎖骨・左右上腕骨はほぼ完存している。左橈骨は前面側の橈骨頸・橈骨体の半分が遺存している。左尺骨は肘頭から尺骨体が遺存している。右尺骨は肘頭から尺骨粗面の一部が遺存している。

下肢骨は、左寛骨は寛骨臼の部分が遺存し、右寛骨は坐骨枝以外が遺存している。左大腿骨は大転子・小転子を除く大腿骨頭・大腿骨頸・大腿骨体の四分の一が遺存している。右大腿骨は大転子・小転子を除く大腿骨頭・大腿骨頸・大腿骨体の半分が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起が発達しておらず、四肢骨も華奢であることから女性と判定される。年齢は歯牙咬耗度は栃原（1957）の1° a～1° bであり、下顎骨の右第3大臼歯が萌出していないこと、左右鎖骨の近位骨端が未癒合であることから若年前半と推定される。（Buikstra and Ubelaker 1994）。

〔特記事項〕

左鎖骨の骨体中央部やや近位側よりに骨折痕が認められる（写真24）。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大幅が136mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、中顔幅は90.1mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩幅は40.4mm、眼窩高33.5mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。眼窩示数は82.9であり、中眼窩型である。

【56号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は概ね良好である。頭蓋骨は、頭頂骨の一部・後頭骨の左乳様突起以外・右側頭骨の外耳孔付近・左側頭骨の鱗状縫合付近および外耳孔付近・前頭骨の中央部が遺存している。下顎骨は左下顎枝・オトガイ隆起付近が遺存している。

躯幹骨は、環椎・軸椎・椎骨7点・左肋骨2点・右肋骨2点・左右不明肋骨4点が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の骨体部が遺存している。左肩甲骨は関節窩付近が一部遺存しており、右肩甲骨は関節窩付近が遺存している。左上腕骨は近位骨体部・遠位骨体部から上腕骨滑車までが遺存しており、右上腕骨は近位骨体部が遺存している。その他、左第3基節骨・左第2中節骨が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の寛骨臼付近が遺存している。左大腿骨は骨体部が遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭付近から骨体部まで遺存している。左右脛骨は骨体部が遺存しており、左腓骨は遠位骨体部が遺存している。

その他、詳細不明の指骨が数点遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起があまり発達していないことから、女性の可能性が考えられる。年齢は推定可能な部位が遺存していないため詳細は不明であるが四肢骨のサイズから成人と考えられる。

〔特記事項〕

左尺骨の茎状突起に骨増殖がみられる。

〔形質的特徴〕

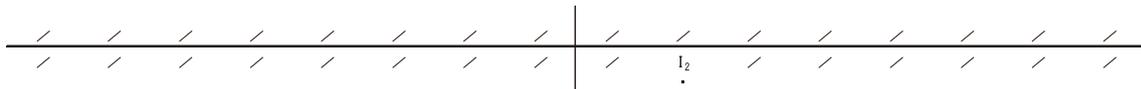
四肢骨の計測値は、近世の女性の集団に近い傾向を示す。

右大腿骨は、中央矢状径が 24.1 mm であり、近世の女性の比較集団と近似する値を示し、中央横径は 23.7 mm、中央周 75 mm、骨体上横径 27.1 mm、骨体上矢状径 23.1 mm であり、近世の女性の比較集団と比べ小さな値を示す。骨体中央断面示数は 101.5、上骨体断面示数 85.4 であり、柱状性は見られず、扁平性は弱い。

【68 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、右頭頂骨・右側頭骨の外耳孔付近・後頭骨・左側頭骨の乳様突起付近・右下顎体の一部が遺存している。その他、頭蓋骨片 2 点が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



上肢骨は、左右上腕骨の骨体部が遺存している。左橈骨は骨体部が遺存している。左尺骨は骨体部が遺存しており、右尺骨は骨体中央部・遠位部が遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨の骨体部・左右脛骨の骨体部・左腓骨の骨体部・右腓骨の近位骨体部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判別可能な部位が遺存していないため不明である。

〔形質的特徴〕

四肢骨の計測値は、近世の女性の集団に近い傾向を示す。

左橈骨は、骨体横径が 13.3 mm、骨体矢状径 9.9 mm であり、近世の女性の比較集団と近似する値を示し、骨体断面示数は 74.6 であり、近世の女性の比較集団の中で小さな値を示す。

左尺骨は、矢状径が 12.9 mm、横径 15.5 mm であり、近世の男女の比較集団の中で中間的な値を示す。骨体断面示数は 83.3 であり、近世の男女の比較集団の中で大きな値を示す。

右大腿骨は、中央矢状径が 22.4 mm、中央横径 24.2 mm、中央周 75 mm であり、近世の女性の比較集団の中で小さな値を示す。骨体中央断面示数は 92.7 であり、近世の女性の比較集団の中で大きな値を示し、柱状性は見られない。

左脛骨は、栄養孔位横径が 21.3 mm であり、近世の女性の比較集団の中で中間的な値を示す。

【71 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋骨や躯幹骨は遺存していない。

上肢骨は、左鎖骨の肩峰端付近・左肩甲骨の肩峰付近・左上腕骨の上腕骨頭が遺存している。

下肢骨は、左大腿骨は大腿骨頭から近位骨体部までが遺存している。左脛骨は遠位骨体部から外果ま

で、左腓骨は遠位骨体部から内果までが遺存している。その他、左距骨・左踵骨・左舟状骨・左外側楔状骨・左中間楔状骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大腿骨のサイズから男性の可能性が高い。年齢は推定可能な部位が遺存していないため詳細は不明であるが四肢骨のサイズや関節面の状態から成人と考えられる。

【78号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は左右側頭骨の一部が遺存している。

上肢骨は、右尺骨の近位部が遺存している。

下肢骨は、左大腿骨の骨体部および左脛骨の骨体の一部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判別可能な部位が遺存していないため不明である。

〔形質的特徴〕

四肢骨の計測値は、近世の男性の集団に近い傾向を示す。

左大腿骨は、骨体上横径が 32.2 mm、骨体上矢状径 24.3 mm であり、近世の男性の比較集団と近似する値を示す。上骨体断面示数は 75.5 であり、扁平性は強い。

【84号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良くない。下肢骨の一部のみが遺存している。右寛骨は、腸骨体・寛骨臼の一部が遺存している。右大腿骨は大腿骨頭・大腿骨頸から大腿骨体の一部および内側顆・膝蓋面・外側顆の一部が遺存している。右脛骨は内側顆の一部・骨体近位部・遠位関節面が遺存している。右腓骨は骨体中央部が遺存している。その他、左距骨・左第4中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が大きいことから女性と判定される。年齢は右寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase3 であることから成年と推定される。

〔形質的特徴〕

四肢骨の計測値は、近世の女性の集団に近い傾向を示す。

右大腿骨は、骨体上横径が 26.7 mm、骨体上矢状径 18.2 mm であり、近世の女性の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は 68.3 であり、扁平性は非常に強い。

【89号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は極めて良好である。頭蓋骨は左右の頬骨弓を除き完存している。下顎骨も右の下顎頭を除いて完存している。舌骨は左大角がない状態で遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	/	M ²	M ³
M ²	M ²	○	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	△	P ²	○	○	M ³

歯牙の咬耗度は 栢原 (1957) の 2° a ~ 2° b である。

軀幹骨は、胸骨体・胸骨柄・環椎・軸椎が遺存しており、頸椎 5 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・仙骨が遺存している。肋骨は大部分が遺存している。

上肢骨は、左肩甲骨はほぼ遺存している。右肩甲骨は下角以外遺存している。左右鎖骨はほぼ完存し

ている。左上腕骨が完存している。右上腕骨は上腕骨頭以外遺存している。左右橈骨・左右尺骨は完存している。その他、左第1中手骨・左第2中手骨・左第3中手骨・左第4中手骨・左第5中手骨・左基節骨4点・左中節骨5点・左末節骨4点・右第2中手骨・右第3中手骨・右第4中手骨・右第5中手骨・右基節骨4点・右中節骨5点・右末節骨4点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨はほぼ完存している。右左大腿骨・左右脛骨がほぼ完存している。左右腓骨は腓骨頭以外遺存している。その他、左右膝蓋骨左外側楔状骨・左中間楔状骨・左内側楔状骨・左立方骨・左舟状骨・左距骨・左踵骨・左第1中足骨・左第2中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・左第5中足骨・左指節骨5点・右外側楔状骨・右中間楔状骨・右立方骨・右距骨・右踵骨・右第1中足骨・右第2中足骨・右第3中足骨・右第4中足骨・右第5中足骨・右指節骨6点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達していることから、男性と判定される。年齢は左寛骨の耳状面はLovejoy (1985) のPhase VIであり、歯牙の咬耗度は栃原 (1957) の $2^{\circ} a \sim 2^{\circ} b$ であることから熟年前半であると推定される。

〔特記事項〕

鼻骨の骨折が確認される (写真 26)。右鎖骨の近位側 1/3 の位置に骨折痕が確認され (写真 25) 本個体は右鎖骨の変形治癒により左右の鎖骨の長さが異なる。腰椎椎体に骨棘の形成がみられる。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大長が 184 mm、バジオン・ブレグマ高 141 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、最大幅は 140 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。頭長幅示数は 76.1 で中頭型、頭長高示数は 76.6 で高頭型、頭幅高示数 100.7 で狭頭型である。眼窩幅は 43.1 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、眼窩高は 32.4 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩示数は 75.2 であり、低眼窩型である。

下顎骨は、オトガイ高が 34.9 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。

上腕骨は、最大長が 293 mm、全長 289 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央最大径は 21.8 mm であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。中央最小径は 18.8 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体最小周は 61 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央周は 66 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、骨体断面示数は 86.2 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。長厚示数は 20.8 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、機能長が 219 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、骨体横径は 15.2 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。骨体矢状径は 12.0 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、骨体断面示数は 78.9 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、最大長が 253 mm、機能長 224 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、最小周は 35 mm であり、比較集団の中でも九州の現代人に近似する値を示す。矢状径は 13.5 mm、横径 17.2 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、長厚示数は 15.6 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。骨体断面示数は 78.5 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 28.5 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央横径は 26.5 mm、中央周 87 mm、骨体上横径 31.6 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。骨体上矢状径は 24.8 mm であり、比較集団の中でも太宰府市の浦山の集団と近似する値を示す。中央断面示数は 107.5、上骨体断面示数 78.5 であり、柱状性は見られず、扁平性は強い。

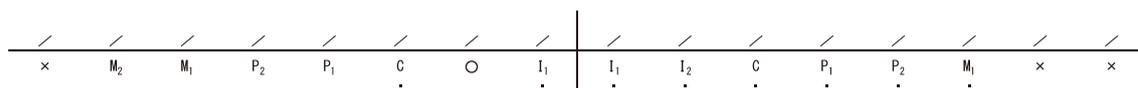
脛骨は、全長が 339 mm、最大長 344 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最大径は

27.6 mm、栄養孔位最大径 30.3 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示す。中央横径は 22.9 mm、栄養孔位横径 25.2 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央周は 80 mm、栄養孔位周 88 mm、最小周 73 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 83.0、栄養孔断面示数 83.2、長厚示数 21.5 であり、扁平性は弱い。

【97号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋骨は遺存していない。下顎骨は右下顎枝と左側下顎頭以外遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



躯幹骨は、環椎片・軸椎・頸椎 3 点・胸椎 8 点・椎弓片が数点遺存している。また、胸骨体の一部および肋骨片が多数遺存している。

上肢骨は、左鎖骨は完存しており、右鎖骨もほぼ完存している。肩甲骨は左右ともに関節窩付近が遺存している。左上腕骨は小結節稜付近から上腕骨滑車まで遺存しており、右上腕骨は上腕骨頭・上腕骨滑車の遠位部以外は遺存している。また、左右不明の上腕骨頭 1 点が遺存している。左橈骨は遠位骨体部が遺存している。左尺骨は近位骨体部と遠位骨体部が遺存しており、右尺骨は肘頭から近位骨体部が遺存している。その他、左第 1 中手骨・左右第 2 中手骨・左右第 3 中手骨・左右第 4 中手骨・左第 5 中手骨・基節骨 3 点および不明指骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨の骨体部が遺存している。左脛骨は骨体部が遺存しており、左尺骨は遠位骨体部が遺存している。右脛骨は近位骨体部が遺存している。右膝蓋骨は完存している。また、右第 1 中足骨が遺存している。

その他、部位不明骨片が数点遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は関節面が小さく、四肢骨が華奢であることから、女性の可能性が考えられる。年齢は、推定可能な部位が遺存していないため詳細は不明であるが四肢骨のサイズから成人の可能性が考えられる。

〔特記事項〕

左第 5 中手骨は骨折の痕跡が確認され X 線画像により骨頸部付近に斜方向の骨折線が認められることから捻転骨折と考えられる（写真 28）。LEH が確認された（写真 27）。

〔形質的特徴〕

下顎骨は、下顎枝幅が 27.8 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、骨体横径が 14.9 mm であり、比較集団の中でも浦山や大町といった他の太宰府市の近世集団と近似する値を示し、骨体矢状径は 11.0 mm、骨体断面示数 73.8 であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が 10.7 mm であり、比較集団の中でも九州の現代人と近似する値を示し、横径は 14.6 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。骨体断面示数は 73.3 であり、比較集団の中でも小さな値を示す。

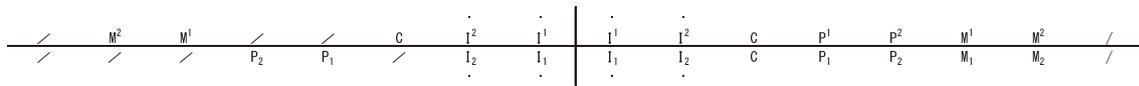
大腿骨は、中央横径が 23.0 mm であり、比較集団の中でも小さな値であり九州の現代人と近似する値を示す。

脛骨は、栄養孔位横径が 22.1 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

【98号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋骨は左頬骨のみが遺存している。下顎骨は下顎体の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙咬耗度は栃原 (1957) の 1° a から 1° c である。

躯幹骨は、環椎・軸椎および第 3～7 頸椎の内 2 点の頸椎・胸椎 11 点・第 1—5 腰椎、左右肋骨片多数・仙骨が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨が完存している。左右肩甲骨の関節窩周辺部が遺存している。左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨がほぼ完存した状態で遺存している。その他、右月状骨・三角骨・有鈎骨、右中手骨 2 点、右基節骨 5 点、右中節骨 3 点、右末節骨 4 点、左有鈎骨・大菱形骨・三角骨・舟状骨・有頭骨、左中手骨 5、左基節骨 4 点、左中節骨 3 点、左末節骨 3 点が遺存している。

下肢骨は、右寛骨は腸骨翼と恥骨体、坐骨の一部が遺存している。左寛骨は腸骨翼の一部以外が遺存している。左右大腿骨は大転子および外側顆・内側顆の一部を除いてほぼ完存している。左右脛骨、左右腓骨はほぼ完存している。その他、右膝蓋骨、右踵骨・距骨・舟状骨・立方骨・外側楔状骨・中間楔状骨・内側楔状骨、右中足骨 5 点、右基節骨 3 点、左踵骨・距骨・舟状骨・立方骨・内側楔状骨、左中足骨 4 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大坐骨切痕角が小さいことから男性であると判定される。耳状面が phase2 (Lovejoy, 1985) であること、歯牙の咬耗度から 25 歳前後の成年であると推定される。

〔形質的特徴〕

上腕骨は、最小周が 65 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、機能長が 216 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体横径は 16.0 mm、骨体矢状径 11.6 mm であり、比較集団の中でも九州の現代人に近い値を示す。骨体断面示数は 72.5 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

尺骨は、矢状径が 13.8 mm、横径 17.9 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体断面示数は 77.1 であり、比較集団の中でもやや小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 29.3 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央横径は 26.8 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央周は 88 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体上横径は 31.7 mm、骨体上矢状径 25.5 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 109.3、上骨体断面示数 80.4 であり、柱状性は見られず、扁平性は強い。

脛骨は、最大長が 334 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央最大径は 30.1 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央横径は 22.4 mm、栄養孔位横径 24.4 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示し、中央周は 82 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央断面示数は 74.4 であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

腓骨は、最小周が 36 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

【102号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の存在状態は良くない。上肢骨は、右尺骨の骨体の一部が遺存している。下肢骨は、右大腿骨の骨体の一部と左大腿骨の骨体の一部が遺存している。

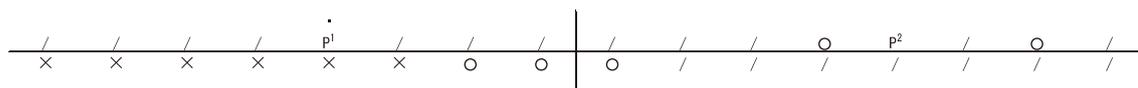
〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判別可能な部位が遺存していないため不明である。

【103号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋はほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は柘原(1957)の3°である。

躯幹骨は、胸骨柄・胸骨体・頸椎・胸椎・腰椎・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨は胸骨関節面から鎖骨体中央部までが遺存しており、右鎖骨は鎖骨体近位部から肩峰端の一部までが遺存している。左肩甲骨は鳥口突起・肩峰の一部から外側縁の一部までが遺存しており、右肩甲骨は鳥口突起の一部・肩峰の一部から外側縁が遺存している。左上腕骨は大結節を除いた部分が遺存しており、右上腕骨は大結節・上腕骨顆を除いた部分が遺存している。左橈骨は骨体中央部が遺存しており、右橈骨は完存している。左尺骨は尺骨頭を除いた部分が遺存しており、右尺骨はほぼ完存している。その他、左有鉤骨・左豆状骨・左月状骨・左舟状骨・左第1中手骨・左第2中手骨・左第3中手骨・左第4中手骨・左第5中手骨・右第2中手骨・中節骨1点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨は腸骨体から寛骨臼・坐骨体近位部までが遺存しており、右寛骨は腸骨体から寛骨臼および恥骨上枝・恥骨下枝の一部から恥骨結合面までが遺存している。左大腿骨は大転子を除く部分が遺存しており、右大腿骨は小転子を除く部分が遺存している。左脛骨は外側顆の一部・内側顆の一部・骨体近位部から遠位関節面までが遺存しており、右脛骨は骨体近位部から遠位関節面までが遺存している。左腓骨は腓骨頭の一部・骨体部が遺存しており、右腓骨は腓骨頭の一部から骨体中央部までが遺存している。その他、左膝蓋骨・左右距骨・左右踵骨・左舟状骨・左立方骨・左中間楔状骨・左外側楔状骨・左第3中足骨・左第4中足骨・左第5中足骨・基節骨1点が遺存している。

その他、部位不明四肢骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大坐骨切痕角が大きく、外後頭隆起・乳様突起が発達していないものの眼窩上隆起が発達しており四肢骨も太いことから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度と左寛骨の耳状面がLovejoy(1985)のphase5-6であることから熟年と推定される。

〔特記事項〕

左鎖骨(写真29)と左上腕(写真30)に骨折治癒した痕跡がみられる。左鎖骨は骨体の中央部に、左上腕骨は大結節稜にズレが生じており、大胸筋の起始と停止部に骨変形が生じている。上腕骨の骨幹部の骨折に伴う筋収縮があったものと考えられる。他に、軸椎の歯突起、左右肩甲骨の肩甲窩、左大腿骨頭と寛骨臼に骨棘が形成される。

〔形質的特徴〕

頭蓋骨は、最大幅が175mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示し、バジオン・ブレグマ高

は 144 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。頭幅高示数は 82.3 であり、高頭型である。眼窩幅は 43.6 mm であり、近世の比較集団の中でも将軍・大名家を除いた集団と比べて大きな値を示し、眼窩高は 32.6 mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩示数は 74.8 であり、低眼窩型である。前眼窩間幅は 17.5 mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示し、鼻骨最小幅は 7.8 mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

上腕骨は、最小周が 63 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

橈骨は、機能長が 223 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、骨体横径は 14.5 mm、骨体矢状径 10.8 mm であり、比較集団の中でも小さな値を示し、骨体断面示数は 74.5 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が 14.5 mm であり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、横径は 16.4 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。骨体断面示数は 88.4 であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

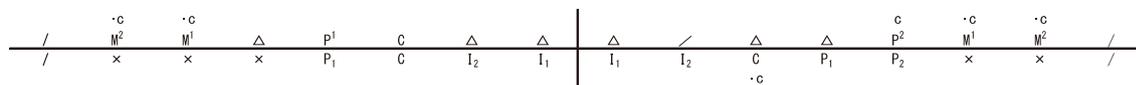
大腿骨は、中央矢状径が 30.4 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央横径は 26.5 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央周は 90 mm であり、比較集団の中でも大きな値を示し、骨体上横径は 29.8 mm であり、比較集団の中でも九州の現代人と近似する値を示す。骨体上横径は 25.0 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は 114.7、上骨体断面示数 83.9 であり、柱状性、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位横径が 24.3 mm であり、比較集団の中でも中間的な値を示す。

【104 号人骨】

〔人骨所見〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は、上顎骨から左右頬骨・左右側頭骨・後頭骨にかけての一部を除き遺存しており、下顎骨は右下顎切痕以外が遺存している。冠状縫合・矢状縫合は内板・外板が閉鎖している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙咬耗度は栃原 (1957) の 1° b から 2° b である。

軀幹骨は、胸椎 1 点、左肋骨 4 点、仙骨が完存した状態で遺存している。

上肢骨は、右鎖骨が胸骨端の一部を除いて遺存しており、左鎖骨は胸骨端および肩峰端を除いて遺存している。右肩甲骨が関節窩・肩峰棘・烏口突起の一部が遺存している。左上腕骨は上腕骨頭以外遺存している。左右尺骨が尺骨頭の一部を除いて遺存しており、左右橈骨が橈骨頭および遠位骨体部の一部を除いて遺存している。その他、左中手骨 4 点、左月状骨・大菱形骨・少菱形骨、左基節骨 2 点、左中節骨 1 点、左末節骨 2 点が遺存している。

下肢骨は、右寛骨の耳状面および恥骨下肢の一部を除いて、左寛骨の腸骨翼の一部を除き遺存している。右大腿骨は大腿骨頭・大転子・外側顆・内側顆の一部以外はほぼ完存しており、左大腿骨は完存している。左膝蓋骨も遺存している。右脛骨が外側顆・内側顆を除き、右腓骨は腓骨頭および外顆の一部を除き遺存しており、左脛骨・腓骨は完存している。その他、右距骨・踵骨・舟状骨、左距骨・外側楔状骨・立方骨、左中足骨 3 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が小さいことから男性と判定される。年齢は、耳状面が phase6 (Lovejoy, 1985) であること、歯牙の咬耗度から熟年であると推定される。

〔特記事項〕

上顎右第1・第2大臼歯および上顎左第2小臼歯にC2の齲蝕、上顎左第1・第2大臼歯および下顎左切歯にC3の齲蝕が認められる。右肩甲骨の関節窩に骨棘の形成が確認される。左腓骨の遠位関節面は伸張している。

〔形質的特徴〕

上腕骨は、最小周が65mmであり、比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、最小周が41mmであり、比較集団の中でも九州の現代人に近似する値を示し、骨体横径は14.5mmであり、比較集団の中でも小さな値を示す。骨体矢状径は12.2mmであり、比較集団の中でも中間的な値を示し、骨体断面示数は84.1であり、比較集団の中でも大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が29.5mm、中央横径28.1mm、中央周89mm、骨体上横径33.0mmであり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、骨体上矢状径は24.8mmであり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は105.0、上骨体断面示数75.2であり、柱状性はみられず、扁平性は強い。

脛骨は、中央最大径が27.9mmであり、比較集団の中でもやや小さな値を示し、栄養孔位最大径は33.1mmであり、比較集団の中でも小さな値であり、九州の現代人と近似する値を示す。中央横径は23.5mm、栄養孔位横径27.4mm、中央周82mm、栄養孔位周94mmであり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、最小周は71mmであり、比較集団の中でも中間的な値を示す。中央断面示数は84.2、栄養孔位断面示数82.8であり、扁平性は弱い。

腓骨は、全長が345mmであり、比較集団の中でも大きな値を示し、中央最大径は14.3mmであり、比較集団の中でも九州の現代人と近似する値を示す。中央最小径は12.0mm、中央周43mm、最小周39mmであり、比較集団の中でもやや大きな値を示し、中央断面示数は83.9であり、比較集団の中でも大きな値を示す。長厚示数は11.3であり、比較集団の中でもやや大きな値を示す。

3、おわりに

人骨の出土状況および遺存状況から得られたサコ遺跡第1次調査出土人骨の特徴は以下の通りである(表3)。

- ・埋葬施設の内訳は木棺19基(方形16基、円形3基)、甕棺2基、土壇1基、不明4基である。
- ・埋葬姿勢が判明している18体のうち、8体が背側に強く傾いた状態の坐葬、5体が立膝坐葬、4体が坐葬、1体が仰臥屈葬である。
- ・本遺跡出土人骨は男性13体(成年3体、熟年5体、熟年以上2体、成年3体)、女性(若年1体、成年3体、成年から熟年1体、熟年2体、成人3体)、性別不明(うち年齢不明4体、幼児1体)から構成されている。

- ・出土人骨のうち2体が改葬を受けている。

- ・病変・外傷

1：変形性関節症による骨棘形成は以下の個体に確認された。

椎骨(主に腰椎)：4号、6号、12号、13号、18号、43号、89号

軸椎歯突起：22号、103号

2：骨折

12号の胸椎に圧迫骨折、23号の前頭骨に陥没骨折・左橈骨の遠位にコーレス骨折、44号人骨の左鎖骨、89号の鼻骨・右鎖骨、97号の左第5中手骨で骨折が認められる。特に23号の前頭骨に関してはその位置と骨折の形状から考えて、その要因として作用面の限局した凶器で強打されたと考えられる。

3 : クリブラ・オルビタリア 32号の右眼窩

4 : DISH 6号・18号の胸椎

5 : 43号人骨に関しては熟年段階にも関わらず、甲状軟骨の骨化や胸骨の癒合が確認された。本人骨は大後頭孔付近にも点状に肥厚がみられ、齒槽骨の吸収や嚢胞の形成がみられ、全体的に多孔であった。これらの要因として代謝異常によるものである可能性が考えられる。

参考文献

馬場悠男 (1991) 人体計測法 II 人骨計測法. 人類学講座別巻1, 雄山閣出版.

Brooks S. and Suchey J.M. (1990) Skeletal age determination based on the os pubis: A comparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution* 5, 227-238.

Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains.

Fayetteville, Arkansas :Arkansas Archaeological Survey Report Number44.

林泰史 2003 28. 関節疾患、脊椎疾患 骨の事典 編集：鈴木隆雄・林泰史 朝倉書店 pp404-420.

石川梧・小椋秀亮・塩田重利・砂田今男ほか (1986) 新歯学大辞典 ポケット版. 永末書店.

九州大学医学部解剖第二講座編 (1988) 日本民族・文化の生成2. 九州大学医学部解剖第二講座所蔵個人骨資料集成, 六興出版.

Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. (1985) Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. *American Journal of Physical Anthropology*, 68, 15-28.

Martin-Saller (1957) *Lehrbuch der Anthropologie*. Bd. I. GustavFischerVerlag. Stuttgart.

Scheuer L. and Black S. (2000) *Developmental juvenile osteology*. Academic Press, San Diego.

鈴木尚 (1963) 日本人の骨. 岩波書店.

高橋栄明 1985 第16章代謝性骨疾患の病態生理 骨の科学 編集 須田立雄・小澤英浩・高橋栄明 医歯薬出版株式会社 pp. 249-288

高津光洋 1996 検死ハンドブック 南山堂

栢原博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31, 607-656.

弦本敏行 2012 骨折. 古病理学事典 編集藤田尚 同成社 48-58.

表3 サコ遺跡第1次調査出土土人骨一覧

No.	遺存状態	性別	年齢	頭位	方位	埋葬施設	埋葬姿勢
4①	良	男性	成人	北	南東	木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬
4②	不	不明	不明	不明	不明	不明	不明
4③	不	不明	幼児	不明	不明	不明	不明
6	良	男性	熟年以上	北東	不明	木棺	立膝坐葬
7	良	女性	成人	東	南東	木棺	坐葬
12	良	女性	熟年	北	不明	木棺	坐葬
13	良	女性	熟年	北	南	土壙	背側に強く傾いた状態の坐葬
17	良	女性	成年	南	南	木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬
18	良	男性	熟年	南	南西	木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬
22	良	女性	成年一熟年	東	不明	木棺	立膝坐葬
23	良	男性	熟年前半	北東	南西	木棺	立膝坐葬
31	良	女性	成年前半	北西	東	木棺	仰臥屈葬
32	良	男性	成年	西	北西	木棺	坐葬
33	良	男性	熟年	西	東	木棺	不明
41	良	男性	熟年以上	南西	南	木棺	不明
43	良	男性	成年	北西	東	甕棺	坐葬
44	良	女性	若年前半	北	不明	木棺	立膝坐葬
56	良	女性	成人	東	西	円形木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬
68	不	不明	不明	東	西	木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬
71	不	男性	成人	不明	不明	不明	不明
78	不	不明	不明	不明	不明	不明	不明
84	不	女性	成年	不明	不明	不明	不明
89	良	男性	熟年前半	北	南	木棺	立膝坐葬
97	良	女性	成人	南西	不明	甕棺	不明
98	不	男性	成年	不明	不明	不明	不明
102	不	不明	不明	北?	不明	木棺	不明
103	良	男性	熟年	東	不明	木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬
104	良	男性	熟年	東	北	木棺	背側に強く傾いた状態の坐葬

表4 男性の頭蓋計測値（単位はmm）

Martin No.		サコ遺跡1次調査					
		4号	23号	33号	43号	89号	103号
1	最大長	-	-	(179)	176	184	175
8	最大幅	138	-	-	144	140	-
17	バジオン・プレグマ高	133	-	134	136	141	144
8/1	頭長幅示数	-	-	-	81.8	76.1	-
17/1	頭長高示数	-	-	-	77.3	76.6	82.3
17/8	頭幅高示数	96.4	-	-	94.4	100.7	-
45	頬骨弓幅	-	-	-	138	-	-
46	中顔幅	-	-	-	100.0	-	-
47	顔高	-	-	-	132.9	-	-
48	上顔高	-	-	68.8	77.9	-	-
47/45	顔示数 (K)	-	-	-	96.3	-	-
47/46	顔示数 (V)	-	-	-	132.9	-	-
48/45	上顔示数 (K)	-	-	-	56.4	-	-
48/46	上顔示数 (V)	-	-	-	77.9	-	-
51	眼窩幅	-	42.1	41.5*	42.0	43.1	43.6*
52	眼窩高	-	34.3	37.2*	34.9	32.4	32.6*
52/51(L)	眼窩示数	-	81.5	89.6*	83.1	75.2	74.8*
54	鼻幅	-	24.6	26.5	24.9	-	-
55	鼻高	-	52.9	51.8	55.0	-	-
54/55	鼻示数	-	46.5	51.2	45.3	-	-
72	全側面角	-	-	-	89	-	-
74	齒槽側面角	-	-	-	86	-	-
M50	前眼窩間幅	-	17.0	20.2	20.5	-	17.5
F	鼻根横弧長	-	26	-	30	-	-
50/F	鼻根湾曲示数	-	65.4	-	68.3	-	-
M57	鼻骨最小幅	-	-	9.4	7.3	-	7.8

*は右側の計測値、()は推定値

表5 男性の下顎骨計測値（単位はmm）

Martin No.	サコ遺跡1次調査			
	23号	33号	43号	89号
65下顎頭間幅	-	-	126.6	-
66下顎角幅	-	-	109.7	-
68下顎骨長	-	-	69.8	-
69オトガイ高	38.5	(36.4)	37.8	34.9
70下顎枝高 (L)	-	-	61.4	-
71下顎枝幅 (L)	-	32.5	29.7	-
71/70下顎枝示数 (L)	-	-	48.4	-

() は推定値

表6 女性の頭蓋計測値（単位はmm）

Martin No.	サコ遺跡1次調査					
	13号	17号	18号	22号	32号	44号
1 最大長	181	177	187	176	178	-
8 最大幅	129	136	130	-	129	136
17 バジオン・プレグマ高	-	131	132	-	136	-
8/1 頭長幅示数	71.3	76.8	69.5	-	72.5	-
17/1 頭長高示数	-	74.0	70.6	-	76.4	-
17/8 頭幅高示数	-	96.3	101.5	-	105.4	-
45 頬骨弓幅	-	-	-	-	-	-
46 中顔幅	-	95.1	-	-	-	90.1
47 顔高	-	110.4	115.6	-	-	-
48 上顔高	-	63.6	-	-	-	-
47/45 顔示数 (K)	-	-	-	-	-	-
47/46 顔示数 (V)	-	116.1	-	-	-	-
48/45 上顔示数 (K)	-	-	-	-	-	-
48/46 上顔示数 (V)	-	66.9	-	-	-	-
51 眼窩幅(L)	42.3*	38.9	43.4	-	40.0	40.4*
52 眼窩高(L)	32.9*	33.5	34.1	-	-	33.5*
52/51(L) 眼窩示数	77.8*	86.1	78.6	-	-	82.9*
54 鼻幅	-	26.5	25.2	-	-	-
55 鼻高	-	46.1	-	-	-	-
54/55 鼻示数	-	57.5	-	-	-	-
72 全側面角	-	79	-	-	-	-
74 齒槽側面角	-	62	-	-	-	-
M50 前眼窩間幅	-	17.1	16.9	-	-	-
F 鼻根横弧長	-	21	24	-	-	-
50/F 鼻根湾曲示数	-	81.4	70.4	-	-	-
M57 鼻骨最小幅	3.9	6.7	5.3	-	-	-

* は右側の計測値

表7 女性の下顎骨計測値（単位はmm）

Martin No.	サコ遺跡1次調査				
	13号	17号	18号	32号	97号
65下顎頭間幅	-	-	-	-	-
66下顎角幅	-	-	-	-	-
68下顎骨長	-	-	-	-	-
69オトガイ高	-	27.7	-	(31.7)	-
70下顎枝高 (L)	57.7*	49.1*	50.7*	-	-
71下顎枝幅 (L)	30.9*	28.3*	34.2*	30.5	27.8
71/70下顎枝示数 (L)	53.6*	57.6*	67.5*	-	-

* は右側の計測値、() は推定値

表8 男性の上肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	サコ遺跡1次調査									
	4号	6号	23号	43号	89号	98号	103号	104号		
上腕骨	1最大長	-	(290)	-	321	293	-	-	-	
	2全長	-	285	-	313	289	-	-	-	
	5中央最大径	-	24.6	-	24.2	21.8	-	-	-	
	6中央最小径	-	18.0	-	17.7	18.8	-	-	-	
	7骨体最小周	53*	67	65	66	61	65*	63*	65	
	7a中央周	-	70	-	70	66	-	-	-	
	6/5骨体断面示数	-	73.2	-	73.1	86.2	-	-	-	
	7/1長厚示数	-	-	-	20.6	20.8	-	-	-	
	橈骨	1最大長	-	-	-	236	-	-	-	-
		2機能長	-	-	-	220	219	216	223*	-
3最小周		35*	-	43	39	-	-	-	41	
4骨体横径		15.3*	16.3	16.4	17.6	15.2	16.0	14.5*	14.5	
4a骨体中央横径		-	-	-	15.8	-	-	-	-	
5骨体矢状径		10.3*	11.6	10.9	12.0	12.0	11.6	10.8*	12.2	
5a骨体中央矢状径		-	-	-	11.5	-	-	-	-	
3/2長厚示数		-	-	-	17.7	-	-	-	-	
5/4骨体断面示数		67.3*	71.2	66.5	68.2	78.9	72.5	74.5*	84.1	
5a/4a中央断面示数		-	-	-	72.8	-	-	-	-	
尺骨	1最大長	-	-	-	253	253	-	-	-	
	2機能長	-	-	-	220	224	-	-	-	
	3最小周	-	-	-	35	35	-	-	-	
	11矢状径	10.4	13.2	12.4	11.8	13.5	13.8	14.5	-	
	12横径	15.0	17.6	16.4	17.1	17.2	17.9	16.4	-	
	3/2長厚示数	-	-	-	15.9	15.6	-	-	-	
	11/12骨体断面示数	69.3	75.0	75.6	69.0	78.5	77.1	88.4	-	

*は右側の計測値

表9 男性の下肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	サコ遺跡1次調査									
	4号	4①号	6号	23号	43号	89号	98号	103号	104号	
大腿骨	1最大長	-	-	-	430*	438	-	-	-	-
	2自然位長	-	-	-	418*	434	-	-	-	-
	6中央矢状径	24.2	-	27.5	26.9	29.4	28.5	29.3	30.4	29.5
	7中央横径	26.7	-	26.5	26.6	27.3	26.5	26.8	26.5	28.1
	8中央周	80	-	85	85*	88	87	88	90	89
	9骨体上横径	29.8	-	32.0	30.5*	34.0	31.6	31.7	29.8	33.0
	10骨体上矢状径	21.0	-	25.9	25.1*	26.4	24.8	25.5	25.0	24.8
	8/2長厚示数	-	-	-	20.3*	20.3	-	-	-	-
	6/7中央断面示数	90.6	-	103.8	101.1	107.7	107.5	109.3	114.7	105.0
	10/9上骨体断面示数	70.5	-	80.9	82.3*	77.6	78.5	80.4	83.9	75.2
脛骨	1全長	-	-	-	326*	353	339*	-	-	(335)
	1a最大長	-	-	336*	331*	358	344	334*	-	(339)
	8中央最大径	-	-	28.7*	28.5	27.4	27.6	30.1	-	27.9
	8a栄養孔位最大径	28.6*	26.7	32.1	31.8	29.8	30.3	-	-	33.1
	9中央横径	-	-	21.2*	21.8	20.9	22.9	22.4	-	23.5
	9a栄養孔位横径	18.9*	18.7	23.9	24.6	21.3	25.2	24.4	24.3	27.4
	10中央周	-	-	79	81	75	80	82	-	82
	10a栄養孔位周	73*	73	89	89	82	88	-	-	94
	10b最小周	63*	64	74	-	68	73*	-	-	71
	9/8中央断面示数	-	-	73.9*	73.9	76.3	83.0	74.4	-	84.2
9a/8a栄養孔断面示数	66.1*	70.0	74.5	77.4	71.5	83.2	-	-	82.8	
10b/1長厚示数	-	-	-	-	19.3	21.5*	-	-	-	
腓骨	1全長	-	-	-	-	353	-	-	-	345
	2中央最大径	-	-	-	-	13.9	-	-	-	14.3
	3中央最小径	-	-	-	-	10.3	-	-	-	12.0
	4中央周	-	-	-	-	39	-	-	-	43
	4a最小周	-	-	-	-	33	-	36	-	39
	3/2中央断面示数	-	-	-	-	74.1	-	-	-	83.9
	4a/1長厚示数	-	-	-	-	9.3	-	-	-	11.3

*は右側の計測値、()は推定値

表 10 女性の上肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	サコ遺跡1次調査						
	7号	12号	13号	17号	18号	32号	97号
大腿骨	1最大長	-	273	-	263* (296)	-	-
	2全長	-	-	-	261*	-	-
	5中央最大径	-	19.0	-	19.1*	-	-
	6中央最小径	-	15.2	-	15.6*	-	-
	7骨体最小周	57	-	54	54*	-	-
	7a中央周	-	56	-	56*	-	-
	6/5骨体断面示数	-	80.0	-	81.7*	-	-
	7/1長厚示数	-	-	-	20.5*	-	-
	橈骨	1最大長	-	-	-	-	-
2機能長		-	-	-	-	225*	-
3最小周		37	-	35	33	42*	-
4骨体横径		-	14.8	13.8	12.6	16.4	14.7
4a骨体中央横径		-	-	-	-	-	-
5骨体矢状径		-	10.9	9.9	8.9	-	12.0
5a骨体中央矢状径		-	-	-	-	-	-
3/2長厚示数		-	-	-	-	-	-
5/4骨体断面示数		-	73.6	71.7	70.6	-	81.6
5a/4a中央断面示数		-	-	-	-	-	-
尺骨		1最大長	-	-	-	-	-
	2機能長	-	-	-	185	-	-
	3最小周	-	-	-	31	-	-
	11矢状径	-	11.0	11.0	9.9	13.8*	14.4
	12横径	-	16.2	14.7	13.8	17.6*	16.5
	3/2長厚示数	-	-	-	-	-	-
	11/12骨体断面示数	-	67.9	74.8	71.7	78.4*	87.3
							73.3*

*は右側の計測値、()は推定値

表 11 女性の下肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	サコ遺跡1次調査							
	7号	12号	13号	17号	18号	22号	32号	97号
大腿骨	1最大長	-	-	-	378*	-	-	-
	2自然位長	-	-	-	369	-	-	-
	6中央矢状径	25.5	24.9	24.6	20.4	26.2	23.1	30.1
	7中央横径	25.3	26.8	25.1	23.6	25.1	23.6	25.6
	8中央周	80	82	78	70	-	73	88
	9骨体上横径	29.2	31.1	30.6	26.0	31.9	-	29.7
	10骨体上矢状径	22.2	22.4	20.7	19.1	23.9	-	25.9
	8/2長厚示数	-	-	-	19.0	-	-	-
	6/7中央断面示数	100.8	92.9	98.0	86.4	104.4	97.9	117.6
	10/9上骨体断面示数	76.0	72.0	67.6	73.5	74.9	-	87.2
脛骨	1全長	-	322	303	295	(344)	-	345*
	1a最大長	-	326	311	300	(352)	-	353*
	8中央最大径	-	25.8	25.6	22.9	-	-	29.3*
	8a栄養孔位最大径	30.5	27.9	28.7	26.3	-	-	30.7
	9中央横径	-	20.2	19.8	19.4	-	-	23.3*
	9a栄養孔位横径	22.2	21.9	20.5	21.4	21.0	-	23.4
	10中央周	-	73	73	65	-	-	86*
	10a栄養孔位周	81	79	79	74	-	-	89
	10b最小周	67	-	66	61	73	-	76*
	9/8中央断面示数	-	78.3	77.3	84.7	-	-	79.5*
	9a/8a栄養孔断面示数	72.8	78.5	71.4	81.4	-	-	76.2
	10b/1長厚示数	-	-	21.8	20.7	-	-	22.0*
腓骨	1全長	-	-	310	294	342	-	-
	2中央最大径	-	-	-	12.0	14.0	-	-
	3中央最小径	-	-	(8.8)	8.5	11.7	-	-
	4中央周	-	-	-	35	41	-	-
	4a最小周	-	-	-	32	-	-	34
	3/2中央断面示数	-	-	-	70.8	83.6	-	-
	4a/1長厚示数	-	-	-	10.9	-	-	-

*は右側の計測値、()は推定値



①正面観



①正面観



②側面観



②側面観



③上面観

写真1 13号頭蓋骨



③上面観

写真2 17号頭蓋骨



①正面観



①正面観



②側面観



②側面観



③上面観

写真3 18号頭蓋骨



③上面観

写真4 23号頭蓋骨



①正面観



①正面観



②側面観



②側面観



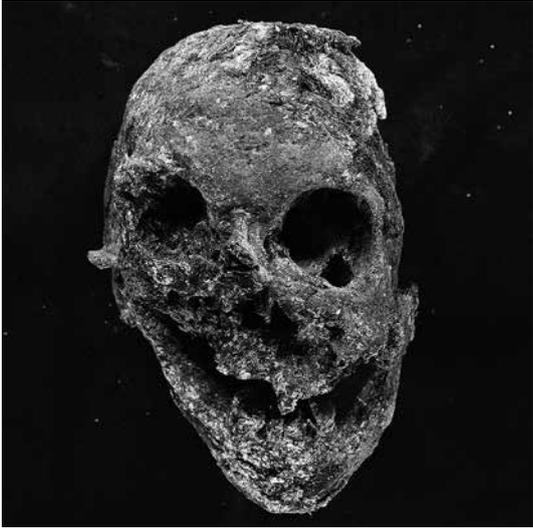
③上面観

写真5 32号頭蓋骨

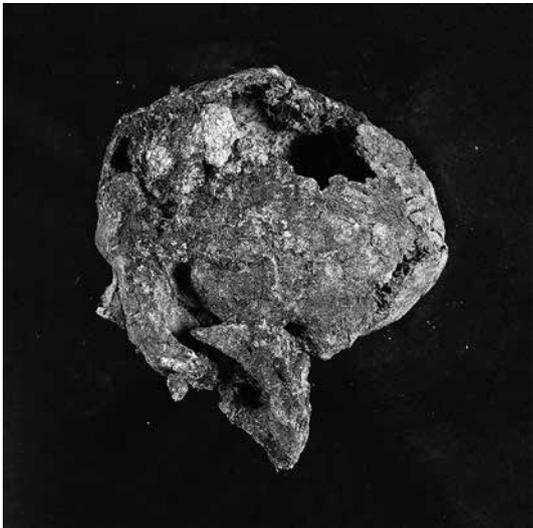


③上面観

写真6 33号頭蓋骨



①正面観



②側面観



③上面観

写真7 41号頭蓋骨



①正面観



②側面観



③上面観

写真8 43号頭蓋骨



①正面観



①正面観



②側面観



②側面観



③上面観

写真9 44号頭蓋骨



③上面観

写真10 89号頭蓋骨



①正面観



①正面観



②側面観



②側面観



③上面観

写真 11 103 号頭蓋骨



③上面観

写真 12 104 号頭蓋骨



写真 13 13号下顎骨



写真 14 23号下顎骨



写真 15 32号下顎骨



写真 16 104号下顎骨

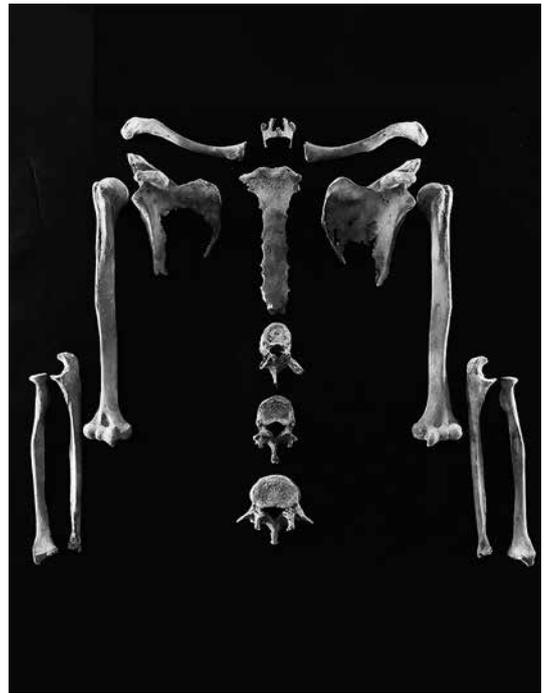


写真 17 43号上肢骨



写真 18 43号下肢骨

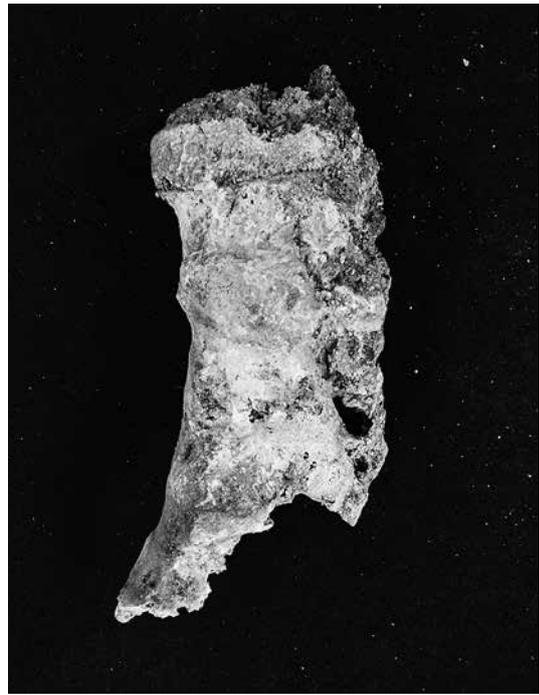


写真 19 6号椎骨癒合

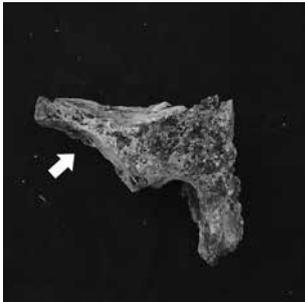


写真 20
12号胸椎压迫骨折



写真 21 18号椎骨癒合

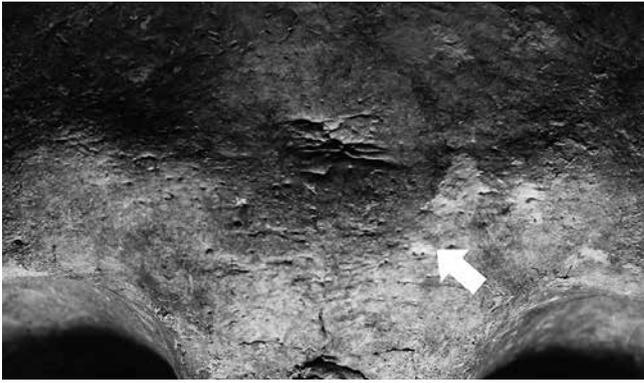


写真 22 23 号前頭骨陥没骨折

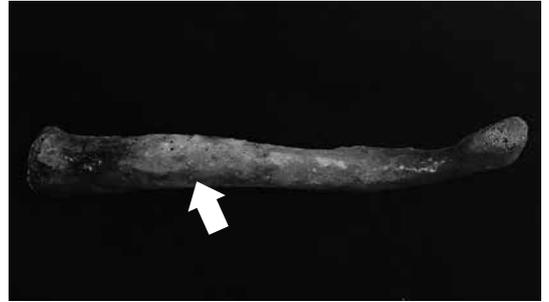


写真 25 89 号鎖骨骨折

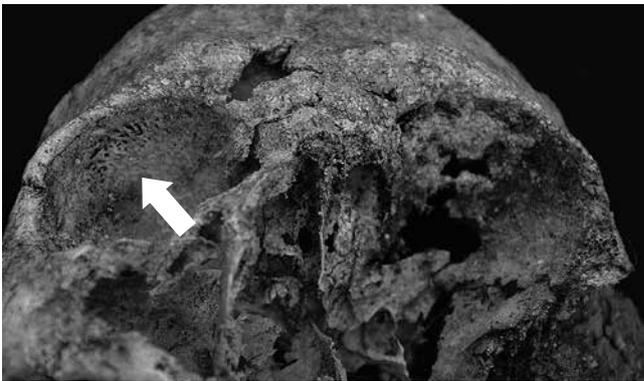


写真 23 32 号クリブラオルビタリア

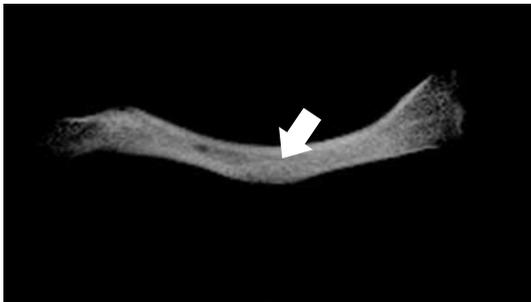


写真 24 44 号鎖骨骨折

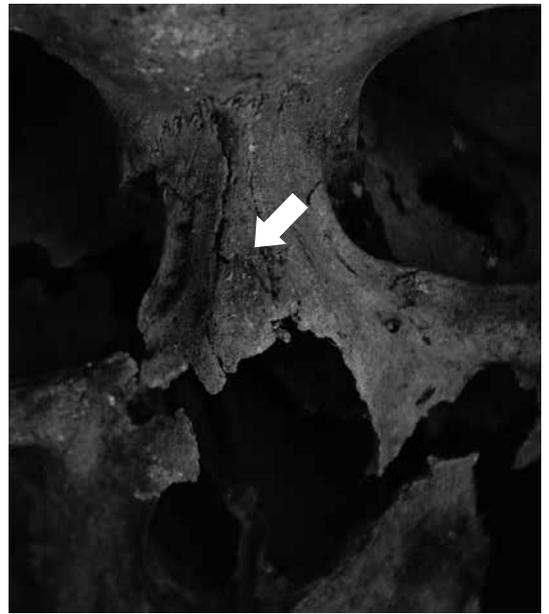


写真 26 89 号鼻骨骨折

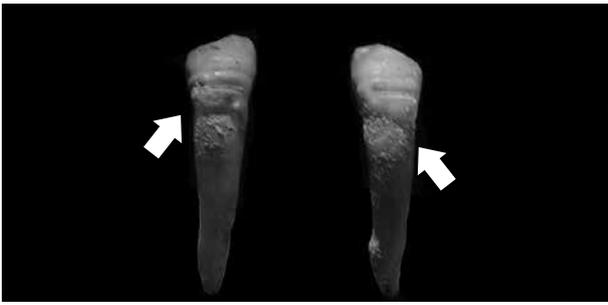


写真 27 97号エナメル質減形成

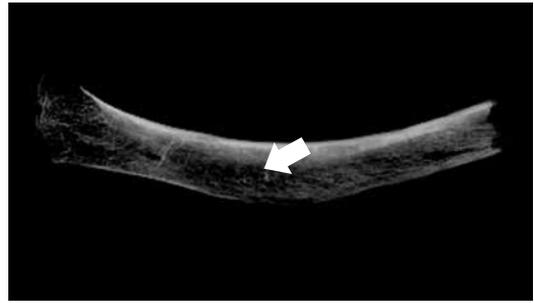
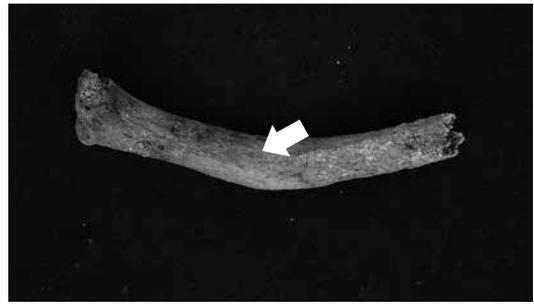


写真 29 103号鎖骨骨折

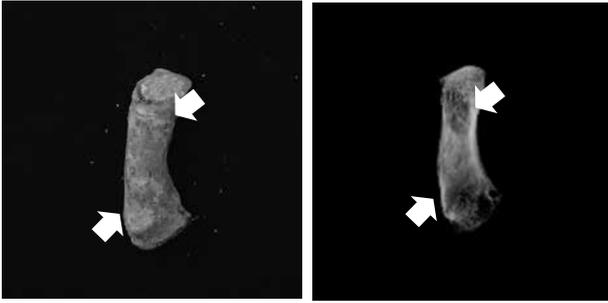


写真 28 97号中手骨骨折

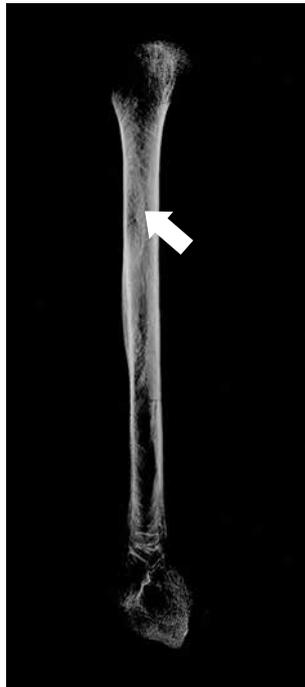
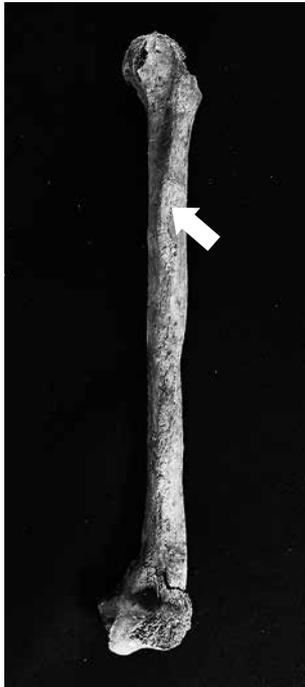


写真 30 103号上腕骨骨折

②サコ遺跡第1次調査出土近世人骨の形質について

富田啓貴¹⁾・松尾樹志郎¹⁾・中野真澄¹⁾・星野宙也¹⁾・
山下理呂¹⁾・James Frances Loftus III¹⁾・Coralie Ferrero¹⁾・
米元史織^{2)・3)}・舟橋京子^{3)・4)}

- 1) 九州大学大学院地球社会統合科学府
- 2) 九州大学総合研究博物館
- 3) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
- 4) 九州大学大学院比較社会文化研究院

1、はじめに

福岡県太宰府市サコ遺跡第1次調査において近世人骨が出土した。当該遺跡は、江戸時代後半から明治時代に位置付けられる。この時期の人骨は近年発掘事例が増加しており、それに伴い人骨の形質学的研究もおこなわれ始めている。しかし、その調査の中心は東京などの都市部であり、日本列島内では未だ空白地帯が多いのが現状である。近世人集団の地域性を明らかにすることは、現代の日本列島集団の地域的特徴の形成に関する新しい視座を与えてくれると考えられる。

本報告では、サコ遺跡第1次調査出土人骨に関する形質について報告するとともに、近年人骨が発見されている太宰府市の浦山遺跡第2次調査出土近世人骨および大町遺跡第3次調査出土近世人骨、既報告済みの近世の他集団、現代人との比較も行い、サコ遺跡第1次調査出土の近世人骨の形態的特徴について明らかとしたい。比較に用いた近世の各集団は、古野（大野城市）、原口（大野城市）、原田（福岡県筑紫野市）、稲荷谷（大分県竹田市）、祇園原（日田市）、江戸市中甕棺に埋葬された人々（以下、甕棺（武士層）とする）、早桶に埋葬された人々（以下、早桶（町人層）とする）、芝公園（東京都港区）、将軍家・大名家・その他家老の一族である。また当該集団の諸ストレスマーカーの特徴を検討し、栄養状態や身体的な活動負荷の特徴についても述べる。

2、方法

計測は主に Martin-Saller(1957)、馬場(1991)に従い、鼻根部については鈴木(1963)の方法を用いた。エナメル質減形成については山本(1988)、Primeau et al(2015)の基準を、筋骨格ストレスマーカーについては Hawkey and Merbs(1995)の基準を用いた。

結果

○頭蓋

【男性】（表12・13）

最大長は比較群中で小さな値を示し、九州の現代人の集団に近似した値を示す。最大幅についても比較群中で中間的な値を示し、九州の現代人の集団に近似した値を示し、浦山や大町など九州の近世集団に比べ大きな値を示す。バジオン・ブレグマ高は比較群中でもやや小さな値であり、九州の近世の集団の中で中間的な値を示す。頭長幅示数(79.0)は中頭型を示し、頭長高示数(78.7)は高頭型、頭幅高示数(97.2)は中頭型を示す。この結果は、本遺跡の集団の最大長が小さな値であることが影響していると考えられる。

顔面部については、計測可能な個体が1個体程度で少ないが、頬骨弓幅、顔高について九州の他の近世の集団に比べやや大きな値を示し、中顔幅、上顔高について九州の他の近世の集団中で中間的な値を示す。コルマンの顔示数(96.3)、上顔示数(56.4)およびウィルヒョウの顔示数(132.9)、上顔示数(77.9)について狭顔型を示し、九州の近世の集団より将軍家・大名家に近い形態を示す。顔面部について計測可能であった主な個体(43号人骨)が躯幹骨や四肢骨に代謝性の骨疾患が見られることから、

表 14 頭蓋計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	サコ1次		浦田2次 ¹⁾		大町3次 ²⁾		原田 ³⁾		稲荷谷 ⁴⁾		祇園原 ⁵⁾		鹿野 ⁶⁾		早稲 ⁷⁾		家茂 正室 ⁸⁾		内藤 頼郷 正室 ⁹⁾		内藤 長好 正室 ¹⁰⁾		内藤 頼孝 先室 ¹¹⁾		内藤 頼直 正室 ¹²⁾		水野 忠友 正室 ¹³⁾		水野 忠誠 正室 ¹⁴⁾		水野 忠誠 正室 ¹⁵⁾		牧野家 ¹⁶⁾		西前日本 ¹⁷⁾		四里 ¹⁸⁾				
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M			
1	5	179.8	6	178.5	-	-	26	172.8	14	164.1	3	170.0	48	169.1	70	172.3	173.0	172.0	165.0	172.0	167.0	176.0	172.0	183.5	175.2	3	167.0	42	172.8	82	170.8	-	-	10	113.0	84	115.0	-	-		
8	5	132.0	2	135.0	1	130.0	26	131.1	15	135.8	2	131.1	48	135.3	70	133.2	144.0	140.0	145.0	140.0	140.0	140.0	143.5	137.0	4	133.8	42	133.8	82	135.9	-	-	10	90.5	84	92.2	-	-			
17	3	133.0	2	129.0	1	136.0	23	131.3	11	130.3	2	128.3	48	132.0	70	130.6	141.0	130.0	133.0	130.0	132.0	136.0	142.0	136.5	132.8	4	131.3	42	131.5	81	132.5	-	-	10	118.3	84	123.3	-	-		
8/1	4	72.5	1	74.3	-	-	24	75.5	14	83.4	2	78.0	48	80.0	70	77.0	83.3	87.9	81.4	84.3	80.3	81.4	-	-	78.1	2	80.4	42	77.5	82	79.7	-	-	40	55.1	83	53.8	-	-		
17/1	3	73.7	2	71.3	-	-	22	76.1	11	79.5	2	75.5	48	78.0	70	76.0	81.5	80.6	75.6	79.0	77.3	82.6	-	-	75.8	2	77.7	42	76.2	81	77.7	-	-	40	55.1	83	53.8	-	-		
17/8	3	101.1	1	99.2	1	104.6	20	100.9	11	96.5	1	104.6	48	98.0	70	98.0	98.0	91.7	93.5	94.3	96.5	101.4	-	-	96.9	3	98.0	42	98.4	81	97.7	-	-	40	55.1	83	53.8	-	-		
45	-	-	-	-	-	-	19	123.7	7	122.3	48	123.8	70	125.0	114.0	120.0	117.0	124.0	121.0	119.0	-	-	-	-	118.2	2	114.5	42	124.3	84	124.9	-	-	10	113.0	84	115.0	-	-		
46	2	92.6	1	93.0	-	-	19	94.5	5	88.8	2	94.8	48	92.2	70	93.3	83.0	88.0	91.0	88.0	93.0	89.0	88.0	-	-	90.0	2	83.5	42	83.6	84	93.5	-	-	10	90.5	84	92.2	-	-	
47	2	113.0	-	-	-	-	13	112.2	4	113.5	3	111.2	-	-	-	-	114.0	-	114.0	119.0	119.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48	1	63.6	-	-	-	-	16	67.1	5	66.2	3	63.8	48	68.5	70	66.7	66.0	-	65.0	72.0	67.0	-	-	-	65.7	1	67.0	48	68.6	83	67.1	-	-	10	90.5	84	92.2	-	-		
47/45	1	63.6	-	-	-	-	10	92.0	3	92.2	-	-	-	-	-	-	100.0	-	97.4	96.0	98.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
47/46	1	116.1	-	-	-	-	8	118.1	3	127.6	2	116.3	-	-	-	-	137.3	119.8	129.6	128.0	55.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48/45	1	66.9	-	-	-	-	12	54.6	5	53.6	-	-	48	55.0	70	53.0	57.9	-	55.6	58.1	133.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
48/46	5	41.0	3	39.6	-	-	19	40.4	6	41.7	3	37.9	48	41.2	70	40.8	42.0	37.0	37.0	39.0	40.0	42.5	42.5	39.8	2	39.5	42	40.7	84	41.1	-	-	40	73.2	83	72.0	-	-			
51	4	33.5	2	33.2	-	-	17	33.9	6	36.3	3	33.9	48	34.6	70	33.3	37.0	34.0	36.0	37.0	36.0	37.5	-	-	36.2	1	35.0	42	34.0	84	33.8	-	-	40	73.2	83	72.0	-	-		
52	4	81.3	2	85.7	-	-	17	84.2	6	87.2	3	89.6	48	84.0	70	82.0	88.2	91.9	97.3	94.9	90.0	88.2	-	-	36.2	1	35.0	42	34.0	84	33.8	-	-	40	73.2	83	72.0	-	-		
52/51(L)	2	25.9	2	24.3	-	-	24	25.0	7	25.9	3	25.6	48	24.5	70	24.4	25.0	25.0	21.0	21.0	24.0	24.0	-	-	24.8	1	24.0	42	25.2	84	24.5	-	-	40	73.2	83	72.0	-	-		
54	1	46.1	2	46.5	-	-	25	47.2	7	48.9	2	48.3	48	49.4	70	48.5	51.0	50.0	48.0	54.0	51.0	54.0	52.7	49.5	2	49.0	42	48.7	84	49.0	-	-	40	73.2	83	72.0	-	-			
54/55	1	57.5	2	52.3	-	-	24	53.0	7	52.9	2	52.7	48	50.0	70	51.0	49.0	50.0	43.8	38.9	47.1	44.4	-	-	-	1	48.0	42	51.9	84	50.2	-	-	55	83.0	83	83.6	-	-		
72	1	79.0	-	-	-	-	12	83.0	5	81.8	-	-	48	82.7	70	81.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
74	1	62.0	-	-	-	-	12	68.6	5	64.4	3	74.3	48	64.3	70	62.8	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
M50	2	17.0	4	14.4	-	-	25	17.0	7	16.3	-	-	48	16.3	70	16.4	17.0	19.0	15.0	20.0	14.0	16.0	-	-	16.5	2	14.0	57	16.8	84	17.4	-	-	55	67.1	83	73.2	-	-		
F	2	22.5	1	28.0	-	-	24	19.1	7	18.5	-	-	48	16.3	70	16.4	19.0	24.1	18.0	24.0	16.5	22.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50/F	2	75.9	1	51.8	-	-	24	89.0	7	88.9	-	-	-	-	-	-	89.5	78.8	83.3	83.3	84.8	72.7	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M57	3	5.3	3	7.3	-	-	25	7.5	5	7.7	-	-	48	7.8	70	7.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

1)富田ほか (2017)、2)富田ほか (2016)、3)中橋・土肥 (2008)、4)岡崎ほか (2004)、5)高橋ほか (2011)、6)原上 (2012)、7)鈴木尚 (1985b)、8)加藤 (1891)、9)原田 (1954)、10)藤田 (1950)

表 15 下顎計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	サコ1次		浦田2次 ¹⁾		大町3次 ²⁾		原田 ³⁾		稲荷谷 ⁴⁾		祇園原 ⁵⁾		天徳寺 ⁶⁾		鹿野 ⁷⁾		早稲 ⁸⁾		家茂 正室 ⁹⁾		水野 忠誠 正室 ¹⁰⁾		牧野家 ¹¹⁾		西前日本 ¹²⁾		岡東 ¹³⁾		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
65 下顎頭幅	-	-	-	-	1	117.0	9	117.8	4	111.0	-	-	23	114.9	48	110.8	70	113.8	112.0	113.5	112.0	112.0	113.5	2	115.5	-	-	84	115.7
66 下顎角幅	-	-	1	95.8	2	97.7	8	93.6	8	92.4	4	90.5	27	92.0	48	90.9	70	93.8	83.0	82.8	83.0	83.0	82.8	3	87.0	36	88.8	84	90.3
68 下顎体長	-	-	1	54.8	1	65.4	9	71.1	6	65.7	3	69.0	27	66.3	48	65.6	70	66.2	70.0	70.0	-	-	3	62.3	-	-	-	-	-
69 オトガイ高	1	27.7	5	33.8	1	27.5	10	33.4	8	29.9	5	27.6	23	31.7	48	32.2	70	31.6	28.0	26.6	26.6	26.6	2	34.5	-	-	84	33.2	
70 下顎枝高 (L)	3	52.5	2	46.6	2	54.5	7	55.3	2	52.5	1	59.1	22	56.3	48	57.6	70	57.6	61.0	61.5	61.0	61.5	3	58.0	36	57.7	84	57.6	
71 下顎枝幅 (L)	5	30.3	5	30.2	2	30.3	8	32.3	2	30.5	3	31.4	23	32.6	-	-	-	-	32.0	26.5	26.5	26.5	3	28.7	36	31.4	84	31.1	
71/70 下顎枝示数 (L)	3	59.6	2	62.9	2	55.6	6	56.0	2	58.3	1	51.1	22	57.2	48	54.0	70	58.0	52.5	-	-	-	3	49.5	36	54.7	84	54.0	

1)富田ほか (2017)、2)富田ほか (2016)、3)中橋・土肥 (2008)、4)岡崎ほか (2004)、5)高橋ほか (2011)、6)加藤 (1891)、7)原上 (2012)、8)鈴木尚 (1985b)、9)原田 (1954)、10)藤田 (1950)

そのことが本結果に影響している可能性がある。

眼窩の形態は、計測値は九州の近世の比較群の中で中間的な値を示し、中眼窩型 (80.8) である。

鼻型は、鼻幅ならびに鼻高について九州の近世の比較群と比べ大きな差は認められず、中鼻型 (47.6) である。鼻根横弧長の値が大きいことから、鼻根湾曲示数は小さな値である。

全側面角、歯槽側面角は比較群中で大きな値を示し、正顎であり、近世の特徴である突顎は認められない。

下顎骨は、下顎頭間幅、下顎角幅、オトガイ高について比較群中で大きな値をとり、比較的サイズが大きいことが示される。

以上のことから、男性の頭蓋の形質は、最大長が小さいことから、脳頭蓋は中頭型を示すが、顔面部については将軍家・大名家に近い狭顔型を示し、全体的にサイズが中程度大きいことが指摘される。

【女性】(表 14・15)

最大長は比較群中で大きな値を示すが、最大幅は九州の近世の比較群と同程度の値を示す。また、バジオン・ブレグマ高は九州の近世集団に比べやや大きな値を示す。頭長幅示数 (72.5) は長頭型、頭長高示数 (73.7) は中頭型、頭幅高示数 (101.1) は狭頭型を示す。最大長が大きいことから、長頭型を示していると考えられる。また、狭頭型は他の九州の近世の集団にも認められ、九州の近世集団の特徴と考えられる。

顔面部については、顔高は九州の他の近世の集団と近似した値をとるが、中顔幅および上顔高は九州の他の近世の比較群の中でも小さな値を示す。ウィルヒョウの顔示数 (116.1)、上顔示数 (66.9) は低顔型であり、他の九州の近世の比較群と同様の傾向を持つ。

眼窩の形態は、計測値は九州の近世に属する比較群と大きな差は認められず、中眼窩型 (81.3) である。

鼻型は、鼻幅は九州の近世の比較群と大きな差は認められないが、鼻高は九州の近世の比較群と比べやや小さな値を示す。鼻示数 (57.5) は広鼻型を示し、他の九州の近世の比較群と同様の傾向を持つ。鼻根横弧長が比較群の中でやや大きいことから、鼻根湾曲示数はやや小さな値を示す。また、鼻骨最小幅は比較群中で小さな値を示す。

下顎骨は、計測可能な項目が少なかったが、オトガイ高は比較群中で小さな値を示すことは顔面部の低顔型に影響していると考えられる。下顎枝高ならびに下顎枝幅も比較群中でやや小さな値を示すことから、下顎のサイズが小さいことが指摘される。

以上のことから、女性の頭蓋の形質は、最大長が大きいことから、長頭型を示し、また他の九州の近世の集団と同様に狭頭型の特徴を示す。顔面部は低眼型を示し、鼻型についても広鼻型を示すことから、男性とは逆に顔面部の横幅が大きいことが指摘される。

○頭蓋の集団間の比較分析

男性については頭蓋 10 項目 (頭蓋最大長・頭蓋最大幅・Ba-Br 高・頬骨弓幅・中顔幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高)、女性については頭蓋 8 項目 (頭蓋最大長・頭蓋最大幅・Ba-Br 高・中顔幅・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高) の各集団の平均値を用いて主成分分析を行った。

【男性】(表 16、図 1)

第 1 主成分は、固有値が 3.39、寄与率 31.92% で、眼窩高を除いて正の相関が認められ、サイズの違いをあらわしており、特に最大長・頬骨弓幅・中顔幅・眼窩幅・鼻幅と正の相関が強い。このことから、第 1 主成分得点が+に位置するほど頭蓋のサイズが大きく、特に脳頭蓋の長さ、顔面部の横幅が大

【女性】（表 17、図 2）

第 1 主成分は、固有値が 3.39、寄与率 42.32% で、最大長・中顔幅・鼻幅に関する項目を除いて正の相関が認められ、特に最大幅・バジオン・ブレグマ高・眼窩高・鼻高と正の相関が強い。このことから、第 1 主成分得点が+に位置するほど、最大幅、脳頭蓋・顔面の高さが高いことを示し、-に位置するほど、最大長や中顔幅・鼻幅といった顔面の横幅が大きいことを示す。第 2 主成分は、固有値が 1.32、寄与率 16.50% で、最大幅・中顔幅・鼻高に関する項目を除いて正の相関が認められ、主成分得点の負の値も小さいことから、およそサイズの違いをあらわしており、特に最大長・バジオン・ブレグマ高・眼窩幅と正の相関が強い。このことから、第 2 主成分得点が+に位置するほど、サイズが大きく、特に最大長・バジオン・ブレグマ高・眼窩幅の値が大きいことを示す。

表 17 主成分分析の固有ベクトル（女性）

	成分	
	1	2
最大長	-0.314	0.930
最大幅	0.895	-0.009
Ba-Br高	0.782	0.486
中顔幅	-0.749	-0.085
眼窩幅(L)	0.123	0.413
眼窩高(L)	0.794	0.009
鼻幅	-0.286	0.160
鼻高	0.766	-0.128
固有値	3.39	1.32
累積寄与率 (%)	42.32	16.50

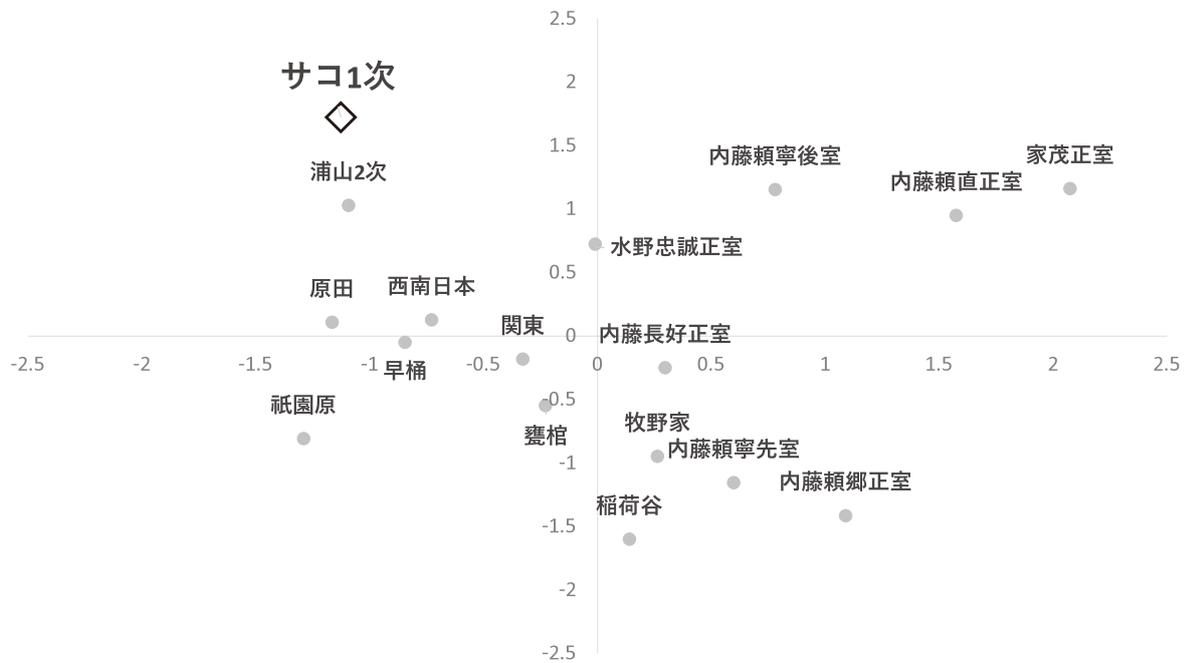


図 2 女性の頭蓋計測値における主成分分析（横軸：第 1 主成分、縦軸：第 2 主成分）

各集団の第 1 主成分得点を横軸に第 2 主成分得点を縦軸に 2 次元展開した図を図 2 に示した。サコ 1 次の女性は、第 2 象限上に位置し、第 1 主成分得点は負の値を示すことから最大長・顔面の横幅が大きく、第 2 主成分得点は正の値を示すことからサイズが大きいという特徴を示す。他集団との類似性をみると、同じ太宰府市に位置する浦山 2 次の女性と近似する傾向を示した。その他、男性と同様に原田や祇園原といった九州の百姓集団、江戸市中の早桶（主に町人層）、現代日本人集団と近くなる傾向を示した。そして、稲荷谷や江戸市中の甕棺（武士層）といった武士や大名家・将軍家と大きく離れるといった特徴が見られる。このことから、サコ 1 次の女性は江戸時代の百姓の集団、特に太宰府市に位置する百姓集団と類似する特徴を持ち、形質を共有していたと考えられる。

表 18 上肢の計測値の比較 (男性) (単位はmm)

Martin No.	サコ1次		浦山2次 ¹⁾ (近世)		大町3次 ²⁾ (近世)		稲荷谷 ³⁾ (近世)		原田 ⁴⁾ (近世)		席田喜木 ⁵⁾ (近世)		魏航 ⁶⁾ (江戸市中)		早稲 ⁸⁾ (江戸市中)		芝公園 ⁷⁾ (近世)		九州 ⁹⁾ (現代)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n
上腕骨	1最大長	2	307.0	2	290.0	1	290.0	6	293.2	15	294.4	18	296.6	31	291.6	26	290.8	14	301.4	106	295.3
	2全長	3	295.7	2	286.0	1	286.0	8	287.0	15	290.3	16	292.6	-	-	-	-	14	297.0	106	290.6
	5中央最大径	3	23.5	2	23.2	1	21.3	6	22.7	22	22.8	30	24.1	32	22.2	26	22.3	47	22.2	106	21.9
	6中央最小径	3	18.2	2	17.5	1	16.3	6	18.5	22	17.8	30	18.6	26	17.6	26	17.8	47	17.3	106	16.9
	7骨体最小周	8	63.1	11	63.5	6	64.5	16	62.3	28	63.5	28	67.1	24	61.6	23	62.8	46	62.0	106	61.8
	7a中央周	3	68.7	2	68.0	1	62.0	6	64.5	22	67.8	30	70.0	-	-	-	-	47	65.7	106	63.7
	6/5骨体断面示数	3	77.5	2	75.9	1	76.5	6	81.8	22	78.4	3	77.3	22	78.2	25	78.5	47	78.4	106	79.1
7/1長厚示数	2	20.7	2	22.1	1	20.3	6	21.1	15	21.4	17	22.6	24	21.2	23	21.7	14	21.0	106	20.9	
橈骨	1最大長	1	236.0	5	228.2	3	227.0	5	219.6	14	225.8	19	231.4	30	219.4	49	223.5	23	226.9	64	219.9
	2機能長	4	219.5	6	216.0	3	213.3	7	207.7	17	211.8	14	215.9	-	-	-	-	24	212.8	64	208.2
	3最小周	4	39.5	10	43.1	4	40.3	12	39.8	30	43.6	26	44.9	-	-	-	-	50	40.4	63	40.1
	4骨体横径	8	15.7	12	16.7	4	18.0	14	17.5	32	17.1	27	18.3	-	-	-	-	51	16.2	63	16.0
	4a骨体中央横径	1	15.8	8	16.1	3	16.1	5	15.2	18	15.8	22	16.9	30	15.6	49	16.0	52	14.9	63	15.2
	5骨体矢状径	8	11.4	12	12.1	4	12.4	14	12.2	32	12.2	27	13.2	-	-	-	-	51	11.6	63	11.7
	5a骨体中央矢状径	1	11.5	8	12.7	3	12.3	5	12.2	18	12.4	22	13.3	30	11.9	49	12.1	52	11.8	63	11.9
	3/2長厚示数	1	17.7	6	19.7	3	18.6	6	18.9	16	20.5	14	20.4	-	-	-	-	23	19.4	61	20.4
	5/4骨体断面示数	8	72.9	12	73.0	4	68.5	14	70.0	32	71.7	27	72.6	-	-	-	-	51	71.9	60	71.4
	5a/4a中央断面示数	1	72.8	8	79.6	3	76.6	5	80.3	18	79.1	22	78.8	29	76.2	47	76.5	52	79.2	-	-
尺骨	1最大長	2	253.0	1	251.0	4	243.5	6	236.2	10	247.8	15	249.8	33	236.2	39	240.4	25	243.0	62	236.2
	2機能長	2	222.0	5	212.2	4	216.3	11	206.8	14	216.7	13	222.6	-	-	-	-	27	213.1	64	209.2
	3最小周	2	35.0	7	35.1	4	39.3	12	34.8	24	40.9	18	40.4	-	-	-	-	46	35.8	65	35.8
	11矢状径	7	12.8	12	13.5	5	13.5	17	13.1	38	12.8	30	13.6	36	13.1	37	13.3	52	12.9	63	12.8
	12横径	7	16.8	12	16.3	4	16.8	17	16.4	37	17.0	30	17.6	35	16.2	35	16.6	52	15.9	64	16.5
	3/2長厚示数	2	15.8	4	16.5	3	18.2	11	16.8	14	18.7	12	18.3	-	-	-	-	27	17.0	63	17.0
	11/12骨体断面示数	7	76.1	12	83.3	4	82.5	17	80.2	37	75.5	30	77.7	35	81.1	34	80.5	52	81.8	63	74.9

1) 富田ほか (2017)、2) 富田ほか (2016)、3) 阿崎ほか (2004)、4) 中橋・土肥 (2008)、5) 中橋 (1993)、6) 報告者計測、7) 加藤 (1957)、8) 専頭 (1991)、9) 溝口 (1957)

表 19 下肢の計測値の比較 (男性) (単位はmm)

	サコ1次		浦山2次 ¹⁾ (近世)		大町3次 ²⁾ (近世)		稲荷谷 ³⁾ (近世)		原田 ⁴⁾ (近世)		席田草木 ⁵⁾ (近世)		麩箱 (江戸市中) ⁶⁾		早稲 (江戸市中) ⁶⁾		芝公園 ⁷⁾ (近世)		九州 ⁸⁾⁹⁾ (現代)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
大腿骨																					
1最大長	2	434.0	1	401.0	2	430.0	9	407.4	24	420.2	31	419.6	38	405.0	30	405.2	18	415.8	59	406.5	
2自然位長	2	426.0	1	395.0	1	416.0	8	406.5	17	415.5	13	418.0	-	-	-	-	17	418.6	59	403.2	
6中央尖状径	8	28.2	14	27.6	3	31.0	20	28.4	43	28.2	40	28.1	38	26.5	32	27.5	51	27.2	59	26.5	
7中央横径	8	26.9	14	27.7	4	27.4	21	26.7	43	26.6	40	29.0	35	25.2	32	27.3	51	26.7	59	25.6	
8中央周	8	86.5	14	87.9	3	92.0	20	84.1	43	86.4	39	89.4	36	82.6	28	84.4	51	84.8	59	82.4	
9骨体上横径	8	31.6	13	31.7	3	30.9	20	30.6	42	31.6	38	33.8	-	-	-	-	51	31.2	59	29.4	
10骨体上尖状径	8	24.8	13	24.6	3	27.4	20	25.7	42	25.6	38	25.7	-	-	-	-	52	23.9	59	24.3	
8/2長厚示数	2	20.3	1	21.8	-	-	8	21.2	17	20.9	12	21.5	-	-	-	-	16	20.5	59	20.4	
6/7中央断面示数	8	105.0	14	99.8	2	112.7	20	106.7	43	106.3	40	97.0	34	106.2	30	101.4	51	102.1	58	82.8	
10/9上骨体断面示数	8	78.7	13	77.6	3	88.5	20	84.2	42	81.5	38	76.2	-	-	-	-	51	76.9	58	72.8	
脛骨																					
1全長	3	339.3	3	315.7	2	339.0	10	330.4	20	334.2	21	330.3	-	-	-	-	15	339.4	61	320.3	
1a最大長	5	340.6	6	325.5	3	343.7	10	335.5	21	339.0	24	337.0	29	333.7	27	330.2	17	343.0	60	326.9	
8中央最大径	6	28.4	6	28.6	2	29.3	10	28.7	25	28.7	26	30.2	27	28.0	30	28.9	48	28.7	61	27.8	
8a栄養孔位最大径	7	30.3	11	31.8	3	33.2	16	34.0	39	33.2	34	34.4	-	-	-	-	48	33.0	60	30.6	
9中央横径	6	22.1	6	21.6	2	24.4	10	21.6	25	22.5	26	22.7	27	20.4	29	21.6	48	20.8	61	21.1	
9a栄養孔位横径	9	23.2	13	23.5	4	24.8	16	24.6	39	24.7	34	24.9	-	-	-	-	49	23.5	61	23.7	
10中央周	6	79.8	6	81.2	2	80.5	10	77.2	25	80.9	25	83.0	22	78.6	28	80.8	48	78.8	62	78.4	
10a栄養孔位周	7	84.0	11	88.5	3	92.3	14	88.6	39	91.5	32	93.0	-	-	-	-	-	-	61	88.9	
10b最小周	6	68.8	10	70.7	3	74.7	17	70.6	41	72.3	29	76.0	-	-	-	-	46	71.9	60	71.3	
9/8中央断面示数	6	77.6	6	75.7	2	82.8	10	75.6	25	78.7	26	75.4	27	73.1	29	75.2	48	72.8	61	76.1	
9a/8a栄養孔断面示数	7	75.1	11	74.7	3	74.2	16	72.4	39	74.6	34	72.3	-	-	-	-	48	71.1	60	77.5	
10b/1長厚示数	2	20.4	3	22.1	2	21.5	10	21.1	20	21.7	19	23.0	-	-	-	-	15	21.5	60	22.4	
腓骨																					
1全長	2	349.0	-	-	2	341.5	7	332.0	8	331.8	6	333.0	-	-	-	-	13	336.7	58	322.9	
2中央最大径	2	14.1	-	-	2	14.2	6	15.3	17	15.1	24	15.2	-	-	-	-	43	14.9	59	14.5	
3中央最小径	2	11.2	-	-	2	11.0	6	11.0	17	11.2	24	11.2	-	-	-	-	43	10.6	59	10.0	
4中央周	2	41.0	-	-	2	41.0	6	41.2	17	43.6	24	43.7	-	-	-	-	43	42.9	59	41.5	
4a最小周	3	36.0	6	35.7	5	35.6	7	34.9	26	37.3	14	38.0	-	-	-	-	34	34.0	59	35.6	
3/2中央断面示数	2	79.0	-	-	2	77.1	6	72.3	17	75.0	24	74.2	-	-	-	-	43	71.6	59	69.5	
4a/1長厚示数	2	10.3	-	-	2	9.5	7	10.5	8	11.2	6	11.1	-	-	-	-	16	10.5	58	11.1	

1)富田ほか(2017)、2)富田ほか(2016)、3)岡崎ほか(2004)、4)中橋・土肥(2008)、5)中橋(1993)、6)報告者計測、7)加藤(1991)、8)岡籾(1957)、9)錦嶺(1955)

○四肢骨

【男性】（表 18・19）

・上腕骨：最大長・全長については比較群中でも最も大きな値を示す。最大径と最小径、周径の値も比較集団中では大きい。最大径と最小径の値がともに大きいため断面径については近世の集団と同程度の値を示す。長厚示数がやや小さくなるのは、最大長の値が大きいためであると考えられるが、各示数について他の近世集団と値の大きな違いは認められない。

・橈骨：最大長・機能長について比較群中で最も大きな値を示すが、横径や矢状径・最小周など周径については比較群中で小さな値を示す。最小周の値が小さいことから、長厚示数も値が小さく、華奢な特徴を示す。

・尺骨：最大長・機能長について比較群中で大きな値を示すが、断面径・周径については比較群中と同程度かやや小さな値を示す。最小周の値が小さいことから、長厚示数も値が小さく、華奢な特徴を示し、矢状径の値がそれほど大きくないことから、骨体断面示数の値も比較群中で小さな値を示す。

・大腿骨：最大長・自然位長について比較群中で大きな値を示す。断面径・周径については九州の近世の比較群の値と概して同程度の値を示す。中央断面示数 (105.0) は柱状性を示さず、上骨体断面示数 (78.7) は扁平性を示す。

・脛骨：全長・機能長について比較群中で最も大きな値を示すが、断面径・周径については九州の近世の比較集団の中でやや小さな値を示す。栄養孔断面示数 (75.1) は扁平性を示す。

・腓骨：全長について比較群中で最も大きな値を示す。断面径・周径については九州の近世の比較集団と概して同程度の値を示し、中央断面示数はやや大きな値を示す。

以上、男性の四肢骨の特徴として、概して最大長など長さは長い。断面径・周径については九州の近世の比較群と同程度あるいはやや小さい値を示す。大腿骨・脛骨は扁平性を示す。また、骨体周が概して小さいことから華奢な傾向を示す。

【女性】（表 20・21）

・上腕骨：最大長・全長は、九州の近世に属する比較群の中で原田に次いで小さな値を示す。断面径・周径については、九州の近世の比較群と比べて同程度の値を示し、大きな差は認められない。

・橈骨：機能長は比較群中で最も大きな値を示し、最小周は近世の比較集団の中でも中程度の値を示す。骨体断面示数が比較群中で最も大きな値を示すが、個別別に見た時に矢状径が横径に対して値が大きい傾向を示しているからであると考えられる。

・尺骨：機能長は比較群中で最も小さな値を示し、最小周も比較群中で小さな値を示す。矢状径は九州の近世に属する比較群と比べて同程度の値を示すが、横径はやや大きな値を示し、骨間縁が発達している。そのため、骨体断面示数が比較群中では小さな値を示す。

・大腿骨：最大長・自然位長は比較群中で江戸の甕棺（武士層）・早桶（主に町人層）の集団の次に小さな値を示すが、断面径・周径については比較群中でも大きな傾向を示す。中央断面示数 (99.7) は柱状性を示さないが、上骨体断面示数 (75.2) は扁平性を示す。

・脛骨：全長・最大長は比較群中で最も大きな値を示す。断面径について、最大径は九州の近世に属する比較群と同程度の値を示すが、横径・周径については比較群中で最も大きな値を示す。中央断面示数・栄養孔断面示数が比較群中で最も大きな値を示すのは、横径が大きいことが関係していると考えられる。また、ヒラメ筋線もあまり発達していない。栄養孔断面示数 (76.1) について扁平性は弱い。

・腓骨：全長は比較群中で席田青木に次いで大きな値を示す。断面径と周径も比較群中でやや大きな値を示し、席田青木に次いだ値を示す。

表 20 上肢の計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	サコ1次		浦山2次 ¹⁾ (近世)		大町3次 ²⁾ (近世)		稲荷谷 ³⁾ (近世)		原田 ⁴⁾ (近世)		席田青木 ⁵⁾ (近世)		魏船 ⁶⁾ (江戸市中 ⁶⁾)		早稲 ⁶⁾ (江戸市中 ⁶⁾)		芝公園 ⁷⁾ (近世)		九州 ⁸⁾⁹⁾ (現代)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
上腕骨	1最大長	2	268.0	1	287.0	1	275.0	4	268.5	8	260.4	7	284.9	21	262.8	19	268.7	18	269.7	36	271.7
	2全長	1	261.0	-	-	-	-	5	264.8	5	258.6	5	281.0	-	-	-	-	17	265.5	36	268.6
	5中央最大径	2	19.1	1	21.1	1	18.9	5	19.0	10	19.0	17	21.6	21	19.2	18	19.9	37	19.2	36	19.8
	6中央最小径	2	15.4	1	16.4	1	16.7	5	15.2	10	14.8	17	16.2	20	14.5	16	15.8	37	14.4	36	14.8
	7骨体最小周	3	55.0	4	55.0	2	54.5	11	51.4	14	52.9	17	59.1	18	52.8	18	55.9	36	52.9	36	54.8
	7a中央周	2	56.0	1	63.0	1	61.0	4	52.5	10	56.3	17	62.1	-	-	-	-	37	56.4	36	56.9
	6/5骨体断面示数	2	80.8	1	77.8	1	88.4	5	80.1	10	78.0	17	75.2	18	75.3	15	78.9	37	75.0	36	75.3
7/1長厚示数	1	20.5	-	-	1	20.0	4	18.8	7	20.2	17	20.8	18	20.1	18	20.9	18	19.9	36	20.2	
橈骨	1最大長	-	-	-	-	1	183.0	5	196.2	10	196.4	6	206.2	19	192.7	27	203.4	20	204.4	12	199.9
	2機能長	1	225.0	-	-	1	172.0	6	185.2	12	185.2	6	192.8	-	-	-	-	21	192.2	12	187.0
	3最小周	4	36.8	2	35.0	2	35.5	10	33.4	16	37.8	11	40.2	-	-	-	-	38	34.2	12	24.7
	4骨体横径	6	14.5	4	14.9	2	14.8	12	15.1	18	14.4	15	16.2	-	-	-	-	38	14.4	12	14.5
	4a骨体中央横径	-	-	-	-	1	14.1	5	13.8	9	13.6	8	15.8	18	13.6	27	14.2	38	13.3	12	13.5
	5骨体矢状径	5	10.5	4	10.4	2	9.4	12	10.1	18	9.8	15	11.5	-	-	-	-	38	10.0	12	9.7
	5a骨体中央矢状径	-	-	-	-	1	9.5	5	10.2	9	10.0	8	11.6	19	9.7	26	10.2	38	10.0	12	9.7
	3/2長厚示数	-	-	-	-	1	20.3	5	18.4	9	20.0	5	20.8	-	-	-	-	21	17.7	11	18.1
	5/4骨体断面示数	5	74.3	4	69.6	2	63.9	12	67.2	18	68.8	15	71.8	-	-	-	-	38	69.6	10	68.3
	5a/4a中央断面示数	-	-	-	-	1	67.5	5	74.6	9	73.9	8	73.9	18	71.3	26	72.4	38	76.3	-	-
	尺骨	1最大長	-	-	-	-	-	-	2	212.0	9	215.1	4	223.7	20	210.5	21	214.8	18	219.2	12
2機能長		1	185.0	-	-	2	188.0	4	188.3	12	191.5	3	195.7	-	-	-	-	23	191.5	12	189.2
3最小周		1	31.0	3	34.0	2	32.5	8	30.4	16	36.2	5	36.4	-	-	-	-	39	30.9	12	32.1
11矢状径		6	11.8	7	11.7	2	11.1	13	10.8	18	11.1	17	11.9	21	11.1	21	11.1	42	10.5	12	10.9
12横径		6	15.6	8	15.0	2	14.5	13	13.9	18	14.4	17	16.2	19	13.6	23	14.2	42	14.0	12	13.9
3/2長厚示数		-	-	-	-	2	17.3	4	15.7	11	18.5	3	18.8	-	-	-	-	22	15.9	12	16.8
11/12骨体断面示数	6	75.6	7	77.9	2	76.2	13	77.5	18	77.2	17	73.7	19	81.0	21	80.2	42	75.8	12	77.5	

1)富田ほか (2016)、2)富田ほか (2004)、3)岡崎ほか (2008)、4)中橋・土肥 (2008)、5)中橋 (1993)、6)報告者計測、7)加藤 (1957)、8)専頭 (1991)、9)溝口 (1957)

表 21 下肢の計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	サコ1次	浦山2次 ¹⁾ (近世)	大町3次 ²⁾ (近世)	稲荷谷 ³⁾ (近世)	原田 ⁴⁾ (近世)	席田青木 ⁵⁾ (近世)	魏館 (江戸市中) ⁶⁾	早稲 (江戸市中) ⁶⁾	芝公園 ⁷⁾ (近世)	九州 ⁸⁾⁹⁾ (現代)											
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M											
大腿骨	1最大長	1	378.0	-	-	8	382.0	12	382.8	15	389.1	21	363.6	15	377.6	13	382.5	13	380.1		
	2自然位長	1	369.0	-	-	8	376.9	8	378.8	5	388.4	-	-	-	-	12	376.9	13	375.9		
	6中央矢状径	7	25.0	8	23.7	2	22.7	15	24.3	27	24.1	25	24.8	19	22.6	14	23.9	13	23.6		
	7中央横径	8	24.8	8	25.1	2	22.3	15	24.5	27	24.3	25	26.6	20	22.9	16	24.9	37	23.2		
	8中央周	6	78.5	7	76.7	2	70.5	16	74.6	27	75.7	25	80.5	19	71.3	15	76.5	37	74.2		
	9骨体上横径	6	29.8	11	29.3	2	27.4	14	28.7	31	28.8	25	30.2	-	-	38	27.7	13	27.5		
	10骨体上矢状径	6	22.4	11	21.0	2	21.4	14	21.6	31	22.4	25	23.0	-	-	38	20.2	13	21.3		
	8/2長厚示数	1	19.0	-	-	-	8	19.3	7	20.6	3	21.2	-	-	-	12	19.7	13	19.8		
	6/7中央断面示数	7	99.7	7	96.1	2	102.5	15	99.4	27	99.7	25	93.6	19	99.1	14	96.9	37	98.6	13	77.1
	10/9上骨体断面示数	6	75.2	11	72.0	2	78.2	14	75.4	31	78.0	25	77.0	-	-	38	73.3	13	66.4		
脛骨	1全長	4	316.3	2	300.5	-	-	7	303.1	13	304.8	8	309.1	-	-	15	306.5	14	301.0		
	1a最大長	4	322.5	1	300.0	-	-	7	307.6	18	306.4	10	314.0	17	297.7	17	311.5	14	306.6		
	8中央最大径	4	25.9	1	27.3	-	-	7	25.3	15	24.5	10	26.1	16	23.4	17	25.6	14	24.7		
	8a栄養孔位最大径	5	28.8	9	28.7	-	-	12	28.8	24	28.0	19	29.5	-	-	35	26.5	14	28.1		
	9中央横径	4	20.7	1	19.6	-	-	7	17.9	16	19.0	10	20.1	13	17.6	17	19.1	14	18.8		
	9a栄養孔位横径	7	21.8	9	21.0	-	-	12	20.0	23	20.7	19	21.6	-	-	35	19.1	14	21.1		
	10中央周	4	74.3	1	73.0	-	-	7	66.7	15	69.5	9	72.2	15	66.7	15	71.1	14	70.1		
	10a栄養孔位周	5	80.4	9	79.2	-	-	11	76.1	22	77.8	19	80.6	-	-	-	-	14	78.2		
	10b最小周	5	68.6	7	65.1	-	-	13	60.4	24	62.3	15	66.1	-	-	35	60.3	14	63.6		
	9/8中央断面示数	4	80.0	-	-	-	7	70.8	15	78.2	10	77.1	12	74.9	17	75.0	36	74.8	14	76.3	
9a/8a栄養孔断面示数	5	76.1	9	73.3	-	-	12	69.6	23	74.3	19	73.5	-	-	35	72.2	14	74.9			
10b/1長厚示数	3	21.5	1	21.5	-	-	7	19.9	11	20.4	6	21.4	-	-	14	19.9	14	21.2			
腓骨	1全長	3	315.3	-	-	4	298.0	9	301.4	2	323.0	-	-	-	-	13	302.5	14	300.6		
	2中央最大径	2	13.0	-	-	4	13.0	11	12.2	7	15.1	-	-	-	-	35	12.4	14	12.9		
	3中央最小径	2	10.1	-	-	4	9.0	11	9.5	7	11.3	-	-	-	-	35	8.7	14	8.6		
	4中央周	2	38.0	-	-	4	34.8	11	37.1	7	42.7	-	-	-	-	35	35.7	14	36.8		
	4a最小周	2	33.0	-	-	5	29.4	15	33.9	5	34.2	-	-	-	-	34	29.9	14	32.3		
	3/2中央断面示数	2	77.2	-	-	4	69.8	11	77.8	7	74.8	-	-	-	-	35	70.3	14	67.6		
4a/1長厚示数	1	10.9	-	-	4	10.1	8	11.0	2	11.0	-	-	-	-	13	10.4	10	10.8			

1) 富田ほか (2017)、2) 富田ほか (2016)、3) 阿崎ほか (2004)、4) 中橋・土肥 (2008)、5) 中橋 (1993)、6) 報告者計測、7) 加藤 (1991)、8) 阿部 (1957)、9) 齋藤 (1955)

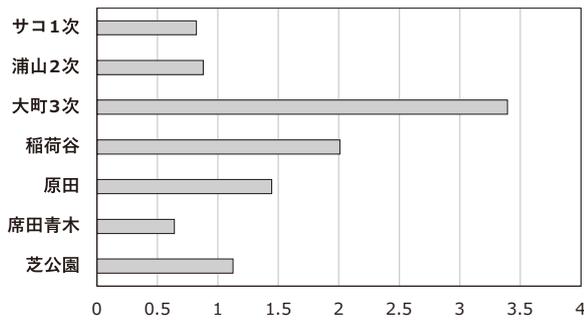


図3 現代九州人を基準とした男性の四肢骨におけるペンローズの形態距離

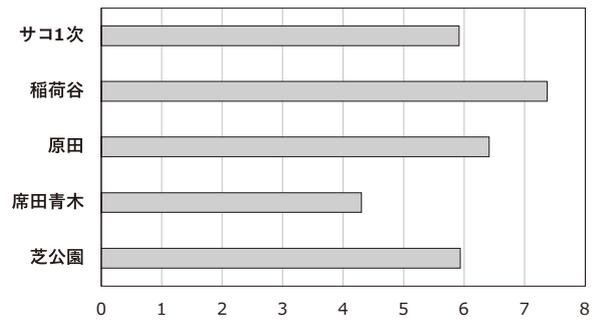


図4 現代九州人を基準とした女性の四肢骨におけるペンローズの形態距離

以上、女性の四肢骨の特徴として、上腕骨・橈骨・大腿骨の長さは短い、前腕の尺骨や下腿の長さは長い傾向を示す。断面径・周径についても概して九州の近世の比較群と同程度の値あるいは大きな値を示し、特に脛骨や腓骨といった下腿の断面径や周径は比較群中でも大きな値を示す。大腿骨の扁平性は強いが、脛骨の扁平性は弱い。

○四肢骨の集団間の比較分析

四肢骨の形態は、比較的生業・生活環境の影響を受けやすいことが指摘されており、また、その影響は四肢骨の相対的なバランスに影響を与えるものであると考えられる。そのことから、四肢骨全体の特徴の集団差を示すために、男女それぞれ、上腕骨・橈骨・尺骨の骨体断面示数、大腿骨の骨体中央断面示数・骨体上断面示数・脛骨の中央断面示数・栄養孔断面示数を基に、サコ1次出土人骨と表18～21で計測可能であった集団についてペンローズの形態距離分析を行った。

ペンローズの形態距離は、連続変数に基づく生物学的距離であり、2集団間の形質のプロポーシオンの違いについて数値で示す方法である。本報告では現代九州人の値を基準として、各集団の現代九州人からの距離を算出した。

現代九州人の男性からのそれぞれの形態距離については、図3に示した。結果として、サコ1次の男性は同じ太宰府市の浦山2次と最も距離が近くなる傾向を示した。そのほかでは、武士層である稲荷谷とは異なり、武士層ではない原田や席田青木、江戸市中の芝公園と距離が近くなる傾向が認められた。このことから、概して本遺跡出土の人骨は江戸時代人骨の百姓や町人層と同様の四肢骨の断面形態であったと考えられる。同じ太宰府市に位置する大町3次とは大きく離れる傾向が見られたが、大町3次の集団のサンプルサイズが少ないことに起因する可能性がある。

現代九州人の女性からのそれぞれの形態距離については、図4に示した。太宰府の各集団とは比較できなかったが、結果として、サコ1次の女性は江戸市中の芝公園と最も距離が近くなる傾向が認められ、そのほかでは九州の原田と近い傾向を示し、概して男性と同様の傾向を示した。しかし、席田青木とは大きく離れ、それに加えて大分県の武士層である稲荷谷とも大きく離れる傾向を示した。

○推定身長（表22・23）

大腿骨最大長に藤井（1960）の身長推定式を適用して身長を算出した。算出できたのは男性で2体（23号、43号）、女性で1体（17号）であった。男性については他の集団と比較したところ、他の近世集団より大きな値を示した。女性については比較群の中で中間的な値を示し、江戸の早桶の集団に近似する値を示した。

表 22 推定身長（男性）の比較（単位はcm）

男 性	n	M
サコ1次	2	162.1
浦山2次 ¹⁾	(近世) 1	153.8
大町3次 ²⁾	(近世) 2	161.8
稲荷谷 ³⁾	(近世) 12	155.4
原田 ⁴⁾	(近世) 30	158.7
席田青木 ⁵⁾	(近世) 30	158.5
甕棺（江戸市中） ⁶⁾	(近世) 38	154.9
早桶（江戸市中） ⁶⁾	(近世) 30	155.0
芝公園 ⁷⁾	(近世) 15	159.0
九州 ⁸⁾	(現代) 59	155.2

1)富田ほか(2017)、2)富田ほか(2016)、3)岡崎ほか(2004)、
4)中橋・土肥(2008)、5)中橋(1993)、6)報告者計測、
7)加藤(1991)、8)阿部(1957)
*推定値は藤井(1960)を用いて、大腿骨最大長平均値より算出

表 23 推定身長（女性）の比較（単位はcm）

女 性	n	M
サコ1次	1	145.7
稲荷谷1)	(近世) 8	146.8
原田2)	(近世) 12	147.0
席田青木3)	(近世) 15	148.5
甕棺（江戸）4)	(近世) 21	142.5
早桶（江戸）4)	(近世) 30	145.6
芝公園5)	(近世) 13	147.0
九州6)	(現代) 13	146.4

1)岡崎ほか（2004）、2)中橋・土肥（2008）、
3)中橋（1993）、4)報告者計測、5)加藤（1991）、
6)阿部（1957）
*推定値は藤井(1960)を用いて、大腿骨最大長平均値より算出

○ストレスマーカー

本遺跡のほとんどの人骨の歯牙にエナメル質減形成が認められた。エナメル質減形成は、歯冠が形成される幼少期の栄養障害・胃腸疾患・発疹性高熱疾患（麻疹、水痘、風疹、猩紅熱、ジフテリアなど）・肺炎・結核・内分泌異常などの多様な障害によって起こるエナメル質の形成不全であり、個体の栄養状態や所属集団への環境ストレスを示す指標として人類学の研究において用いられる（Goodman and Rose, 1990; 山本, 1988）。自然人類学の研究では、主に歯牙のエナメル質形成上に水平な線状で認められるエナメル質の欠損が観察され、分析に用いられている。本遺跡では、Goodman and Rose(1990)や山本(1988)で観察に適していると言われている下顎犬歯の観察を行い、他集団との比較を行った。

左右下顎犬歯のどちらかが観察可能であった4号人骨・12号人骨・17号人骨・18号人骨・22号人骨・43号人骨・44号人骨・89号人骨・97号人骨・98号人骨・104号人骨の全てにエナメル質減形成が認められた（11個体中11体：100%）（図5）。また、1本の歯牙当たり何本ものエナメル質減形成が形成された場合、歯冠形成期に何回ものストレスを受けたことがわかる。そこで1歯牙当たりのエナメル質減形成の本数を観察したところ、左下顎犬歯では1本が2体、2本が6体、3本が1体で認められた。右下顎犬歯でも1本が2体、2本が6体、3本が1体で認められた。本遺跡では1本の歯牙当たりに2本以上の減形成を形成されている個体が多く、また明瞭で溝状の減形成を形成している個体（97号人骨、写真27）も認められた。このことから、幼少期に熱性疾患や栄養不良などの強いストレスを何度も受けた集団であったと考えられる。

さらに、エナメル質減形成が形成されている歯牙の位置からおおよそのストレスを受けた時期の推定を行うことができる。本報告では、Primeau et al. (2015)の基準に従い、エナメル質減形成が形成さ

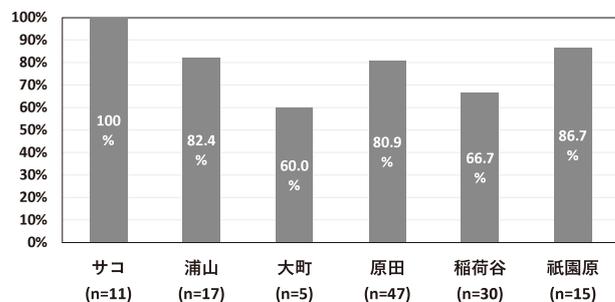


図 5 エナメル質減形成の出現頻度

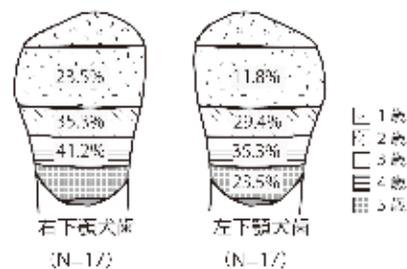


図 6 エナメル質減形成の形成年齢

れている歯冠の位置を観察した。その結果として、全個体の全エナメル質減形成の形成時期について、左下顎犬歯では、2歳の時に2回、3歳の時に5回、4歳の時に6回、5歳の時に4回認められた。また、右下顎犬歯では、2歳の時に4回、3歳の時に6回、4歳の時に7回認められた。このことから、サコ1次の集団では、およそ3歳から4歳の時に多くのストレスを受けていたことが明らかとなった(図6)。

今後、文献資料や江戸時代の他集団との比較を行っていくことで、サコ1次の集団の幼少期の生活環境についてより詳細に復元できる可能性があると考えられる。

○筋骨格ストレスマーカー

筋骨格ストレスマーカー (Musculoskeletal stress markers: MSMs) は、Hawkey and Merbsによって1995年に確立された方法であり、筋付着部の発達度から身体活動を復元する方法の1つである。本稿における評価基準もHawkey and Merbs (1995) に依っており、詳細部位の記述・形態写真に関しては米元 (2012) に記す。

当該集団の筋付着部の発達の特徴は、大腿骨の粗線に付着する筋群およびヒラメ筋線の発達が極めて不明確であるのに対し、上腕骨の特に大胸筋や三角筋などの肩関節の動きにかかわる筋の発達が強い点である。このような傾向が、大腿骨や脛骨の矢状径の値の小ささ、大腿骨の柱状性の弱さと脛骨の扁平性の強さ、さらには上腕骨の周径・中央最大径・中央最小径の値の大きさの一因と考えられる。これは男女差なく同様の傾向を示すが、女性は観察可能であった個体数が少ないため極端なスコアが出ている可能性が高い。上腕の大胸筋や三角筋のような肩関節の動きにかかわる筋体積の大きな筋のMSMsスコアが発達していることから、何らかの重労働に従事していた可能性が示唆される。このような傾向は縄文時代の男性により顕著にみられるものである(米元, 2016)。縄文時代の男性は下肢も発達していたため本対象集団のMSMsパターンと完全に傾向が一致しているわけではないが、極めて肉体的な負荷の高い生活を送っていたものと考えられる。

3. おわりに

本報告から得られたサコ遺跡第1次調査出土人骨の形態的特徴は以下の通りである。

- ・頭蓋について、男性では脳頭蓋は中頭型、顔面部は狭顔型であり、女性では脳頭蓋は長頭型、顔面部は広顔型を示す。
- ・頭蓋についての主成分分析の結果から、男性・女性ともに九州の百姓の集団と類似する特徴を示す。
- ・四肢骨について、男性は最大長などの長く上腕骨の値は大きいですが、断面径、周径については小さな値であり、華奢な傾向を示す。
- ・四肢骨について、女性は上腕骨、橈骨、大腿骨の長さは小さいが、それに対して尺骨や下腿の長さは大きく、また断面径や周径は近世の他の集団と同程度か大きな値を示す。
- ・四肢骨の断面形態についてのペンローズの形態距離分析の結果から、男性は概して九州の百姓の集団と近い特徴を示し、女性についても概して近世の町人や百姓の集団と近い特徴を示し、男女ともに頭蓋骨の主成分分析の結果と同様の傾向を示した。
- ・推定身長について、男性は他の近世の集団より高い値であり、女性は他の近世の集団と同程度の値である。
- ・幼少期の生活環境と関係するエナメル質減形成について、江戸時代の他集団より高頻度で見られ、幼少期(特に3-4歳)にストレスを多く受けていたと考えられる。
- ・筋骨格ストレスマーカーからみると、下肢よりも上肢、特に上腕骨の大胸筋や三角筋のスコアが高く、身体的な負荷の高い生活を送っていたものと推測される。

参考文献

- 阿部英世 (1957) 現代九州人大腿骨の人類学的研究. 人類学研究 2(2), 301-346.
- 馬場悠男 (1991) 人体計測法 II 人骨計測法. 人類学講座別巻 1, 雄山閣出版.
- 藤井明 (1960) 四肢長骨の長さとの関係に就いて. 順天堂大学体育学部紀要 3, 49-61.
- Goodman, A., Rose, J. (1990) Assessment of systemic physiological perturbations from dental enamel hypoplasias and associated histological structures. Yearbook of Physical Anthropology, 33:59-110.
- 原田忠昭 (1954) 西南日本人頭蓋骨の人類学的研究. 人類学研究 1, 11-51.
- Hawkey D.E. and Merbs C.F. (1995) Activity-induced musculoskeletal stress markers (MSM) and subsistence strategy changes among ancient Hudson Bay Eskimos. International Journal of Osteoarchaeology 5, 324-338.
- 鑄鍋勝登 (1955) 現代九州人下腿骨の人類学的研究. 人類学研究 2 (1) , 1-41.
- 加藤征 (1991) 江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究. 平成 2 年度科学研究費補助金一般研究 B 研究成果報告.
- 川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦 (2011) 第 7 章 1: 東畑瀬遺跡 9 区から出土した人骨について. 東畑瀬遺跡 3 東畑瀬遺跡 6G・7・9 区—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6—, 218-239.
- 欠田早苗 (1959) 畿内人頭蓋骨の人類学的研究—現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について—. 人類学輯報 25, 53-83.
- Martin-Saller (1957) Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. GustavFischerVerlag. Stuttgart.
- 溝口静男 (1957) 現代九州日本人前腕骨の人類学的研究. 人類学研究 4, 237-272.
- 森田茂 (1950) 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究. 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集 3, 1-54.
- 中橋孝博 (1993) 福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨. 席田青木遺跡, 福岡市教育委員会.
- 中橋孝博・土肥直美 (2008) 原田第 1・2・40・41 号墓地出土の近世人骨. 原田第 1・2・40・41 号墓地下巻, 筑紫野市教育委員会.
- 中井歩・福永将大・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・藤井恵美・舟橋京子・足立達朗・中野伸彦・小山内康人・田中良之 (2015) 古野遺跡第 2 次調査出土近世人骨について. 乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 古野遺跡第 2・3・5 次調査. 乙金地区遺跡群 12, 大野城市文化財調査報告書第 123 集, 56-93.
- 岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之 (2004) 稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨. 国道 502 号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書, 262-323.
- Primeau, C., Arge, S.O., Boyer, C., Lynnerup, N. (2015) A test of inter- and intra-observer error for an atlas method of combined histological data for the evaluation of enamel hypoplasia. Journal of Archaeological Science. 2:384-388.
- 佐倉朔・梶ヶ山真里 (1991) 付編 自證院遺跡 第 2 次調査出土人骨. 自證院遺跡: 日本上下水道設計 (株) 富久町社屋新築工事に伴う第 2 次緊急発掘調査報告書, 15-17.
- 専頭時義 (1957) 現代九州日本人上腕骨の人類学的研究. 人類学研究 4, 273-301.
- 鈴木尚 (1963) 日本人の骨. 岩波書店.
- 鈴木尚 (1985a) 骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと. 財団法人東京大学出版.
- 鈴木尚 (1985b) 江戸時代における貴族形質の顕現. 人類学雑誌 93 (1) , 1-32.
- 高椋浩史・李ハヤン・谷澤亜里・早川和賀子・米元史織・岩橋由季・舟橋京子・田中良之 (2011) 大分県日田市所在の祇園原遺跡から出土した近世人骨について. 祇園原 II (近世墓編 2) , 8-54.

竹内修二 (1980) 日本人椎骨数についての研究. 東京慈恵会医科大学雑誌, 95(3), 584-597.

山本美代子 (1988) 日本古人骨永久歯のエナメル質減形成. 人類学雑誌, 96:417-433.

米元史織 (2012) 生活様式の復元における筋骨格ストレスマーカーの有効性. Anthropological Science, 120, pp. 15-46.

米元史織・高椋浩史・李ハヤン・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・中井歩・舟橋京子・田中良之 (2013) 福岡県大野城市原口遺跡 4 次調査 B 地区出土近世人骨について. 乙金地区遺跡群 7, 大野城市文化財調査報告書第 110 集, 161-202.

米元史織 (2016) 筋付着部の発達度からみる縄文時代の生業様式の地域的多様性. 九州大学総合研究博物館研究報告, 14, 37-57.

(6) 小結

当初予想された中世墓は検出されず、遺構はほぼ近世～近代墓のみで、それ以外の遺物も皆無に等しい。

そのような遺構状況の中で、丘陵中央の南を見渡す位置で、祭祀もしくは蔵骨器と推測される須恵器の短頸壺 (SX001) が検出されたことは、大宰府政庁の北西に位置するこの丘陵が、奈良時代に都市の外側として認識されていたことが理解できる。

近世～近代墓地については、全体的に改葬のためのバックホウのバケット痕跡があちこちに残されていたが、墓地は東西に 2 グループに分かれている。西側の墓地は 3～4 列づつ墓壙が並んでいるのに対し、東側の墓地はやや雑然と墓壙が掘られている。墓石も除去され、墓地の状態としては、良好な状態で残されていたわけではない。墓石の一部は改葬の際に調査地北方に移設されており、現場内に放置されていた墓石 6 基を含めると 38 基の墓石が観察できた。江戸時代の墓石は約 11 基で、最も古い年号は延享 4(1747) 年で、最も新しいものでは平成 13(1999) 年のものがあつたが、土葬されたものは地権者の話によると昭和 26(1951) 年頃が最後とみられる。残された墓には改葬されなかったものも多くあり、残された墓からわかる埋葬施設は、甕棺・桶棺・方形木棺の 3 種で、推定を含めると甕棺 11 基、方形木棺 17 基、桶棺 18 基、木製棺 4 基、棺不明瞭が 17 基、合計 67 基の墓が確認された。一部の墓には六道銭である寛永通宝が副葬されていた。

太宰府市における近代の墓制について、『太宰府市史 民俗資料編』によると以下の通りである。甕棺の使用が明治中期以降という所見については、現場所見と異なっているが、桶棺の使用や六道銭としての寛永通宝が副葬されていることなどは、市史調査と同様であつた。

- ・昭和 10 年頃までは土葬が一般的だった。
- ・明治初期頃までは桶棺だったが、明治中期以降は土甕棺も使うようになった。
- ・経済的に購入できる家は土甕棺、一般的には木棺を使用するが多い。
- ・木棺には座棺と寝棺がある。火葬されるようになって座棺より寝棺が好まれるようになった。
- ・頭陀袋にお金を 6 文入れる。後には、紙で作ったものや六文と書いた紙を入れた。
- ・棺には袋に入れたハナ柴、茶殻を入れる。
- ・土甕棺の場合は底にゴザを敷き、死装束を付けた死者は膝を曲げ座らせるように納棺する。
- ・棺の中には生前死者が愛用していたものや好物を入れる。
- ・死者が夫の場合はその妻の髪の毛を切って、白い紙で包んで入れる。妻が死んだ場合は夫の帯の端を切って入れることもあつた。

2、浦山遺跡第1次調査

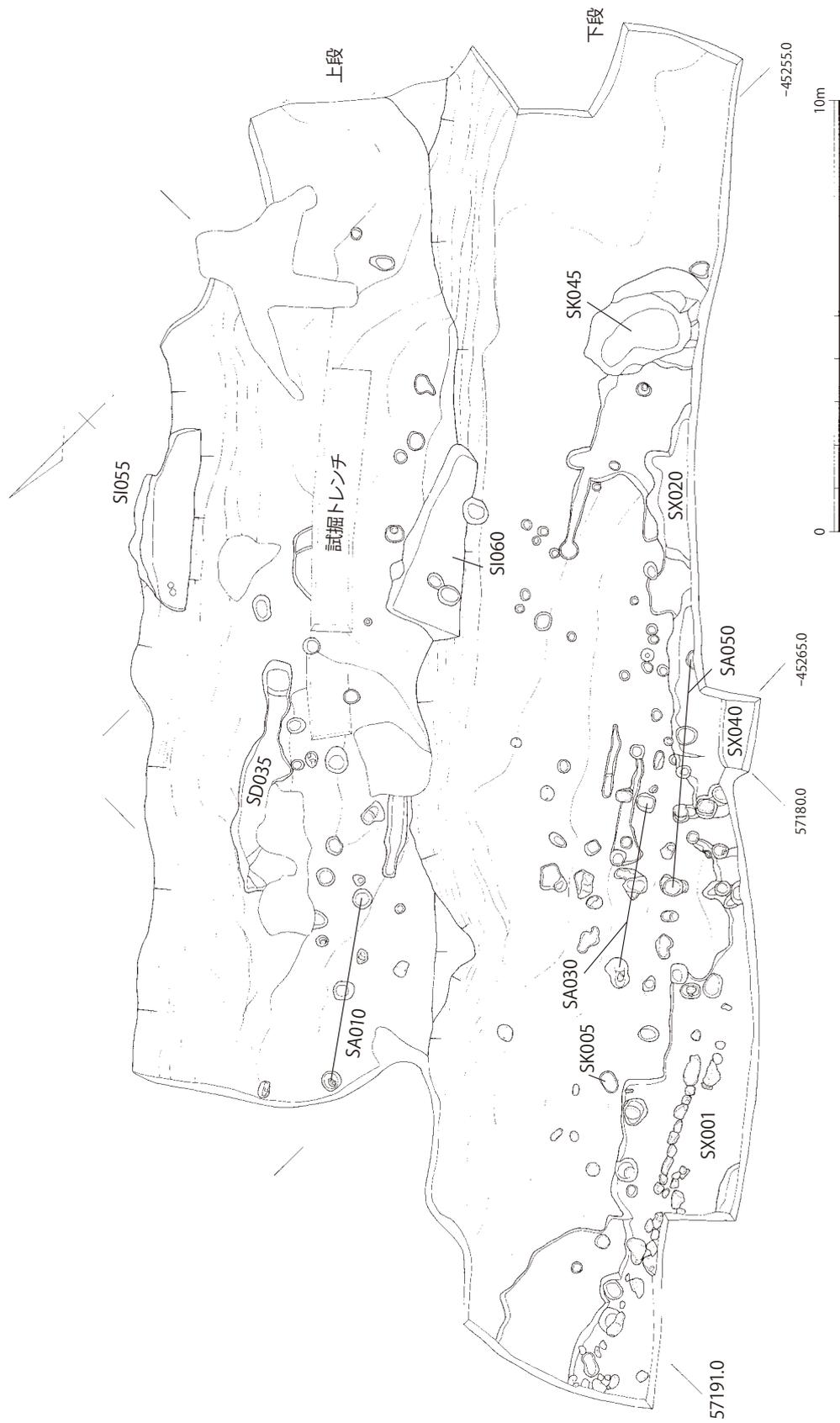


Fig. 24 浦山遺跡第1次調査遺構全体図 (1/150)

丘陵と遺構配置図



基本土層模式図

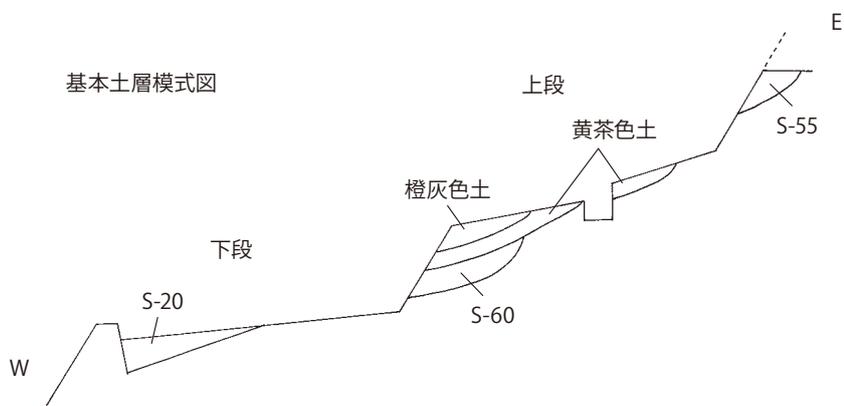
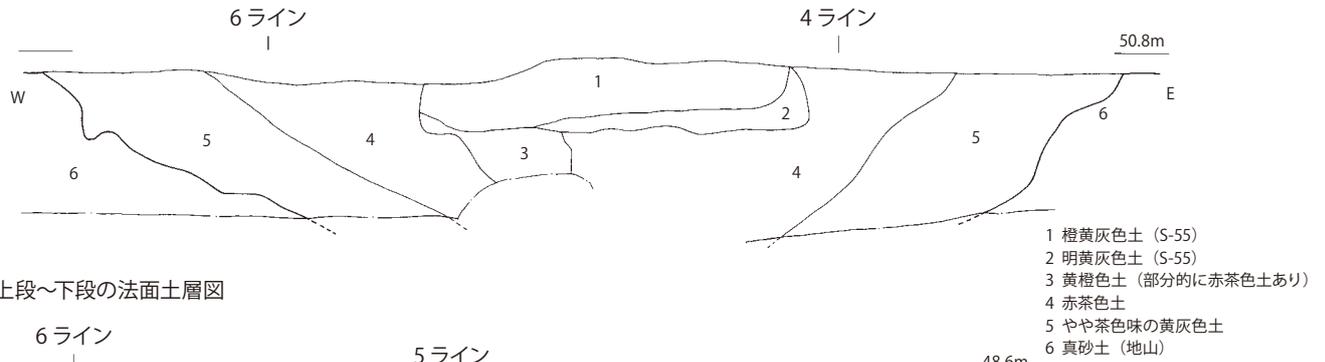


Fig. 25 浦山遺跡第1次調査地と丘陵図 (1/400)、基本土層模式図

上段上方の法面土層図



上段～下段の法面土層図

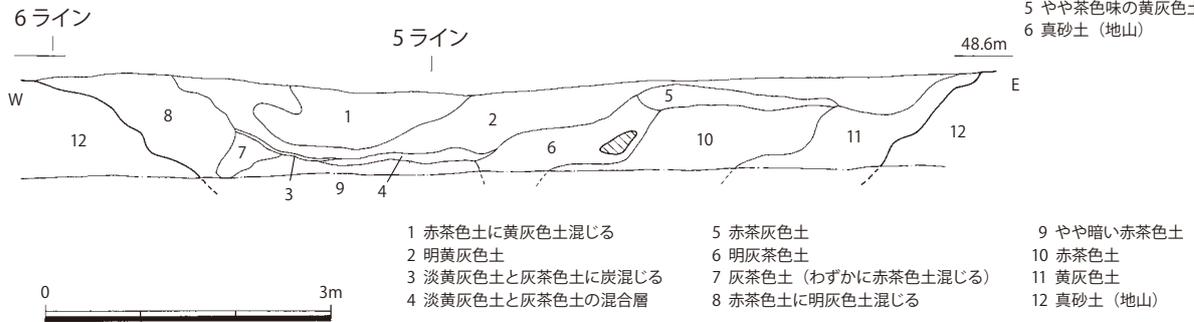


Fig. 26 浦山遺跡第1次調査地盤堆積層実測図 (1/80)

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市坂本3丁目250-4、251-1、49で、御笠団印出土地の東方80m付近に位置し、坂本旧池に隣接している。

2011（平成23）年12月より、周辺一帯を含めた土地開発に伴う文化財の取り扱いについて、ナガタ建設㈱から問い合わせが始まった。丘陵東側と北側は、池や開発などで大きく削平され、遺構の存在は望めないが、西側については丘陵の状態を保っていたため、その部分を中心に協議が進められた。そして、樹木伐採後の2012（平成24）年7月19日に確認調査を実施し、丘陵裾付近で遺構や遺物を確認した。開発では丘陵全体を削平し宅地化とする計画であったため、遺構の保存は望めなかったことから、開発者の調査費用負担のもと発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は2013（平成25）年2月26日～3月29日に実施した。開発対象面積は600㎡で、調査面積は330㎡である。調査は宮崎亮一が担当した。

(2) 基本層位 (Fig. 25)

調査地は丘陵の先端部に位置していたが、昭和後半期に調査地の東側が土取りされ、丘陵が分断され住宅地となったため、調査直前は標高60m程の円形の独立丘陵をなしていた。調査対象地は約4段の平坦地があって、樹根を含む橙灰色土や黄茶色土の表土を除去すると、淡橙色の真砂土で遺構が確認された。

(3) 検出遺構

竪穴住居

1S1055 (Fig. 27)

西側は大きく削平されていて、現状では南北方向で長さが4.24m、深さは0.7mを測る。表土剥ぎの段階で、完形の須恵器坏身が2個出土し、調査段階でも北側で伏せた状態の坏身が2個出土した。坏身内は空洞であった。

1S1060 (Fig. 27)

西側が大きく削平されているが、南北両端はぎりぎり確認でき、南北長4.42m、深さは0.68mを測る。

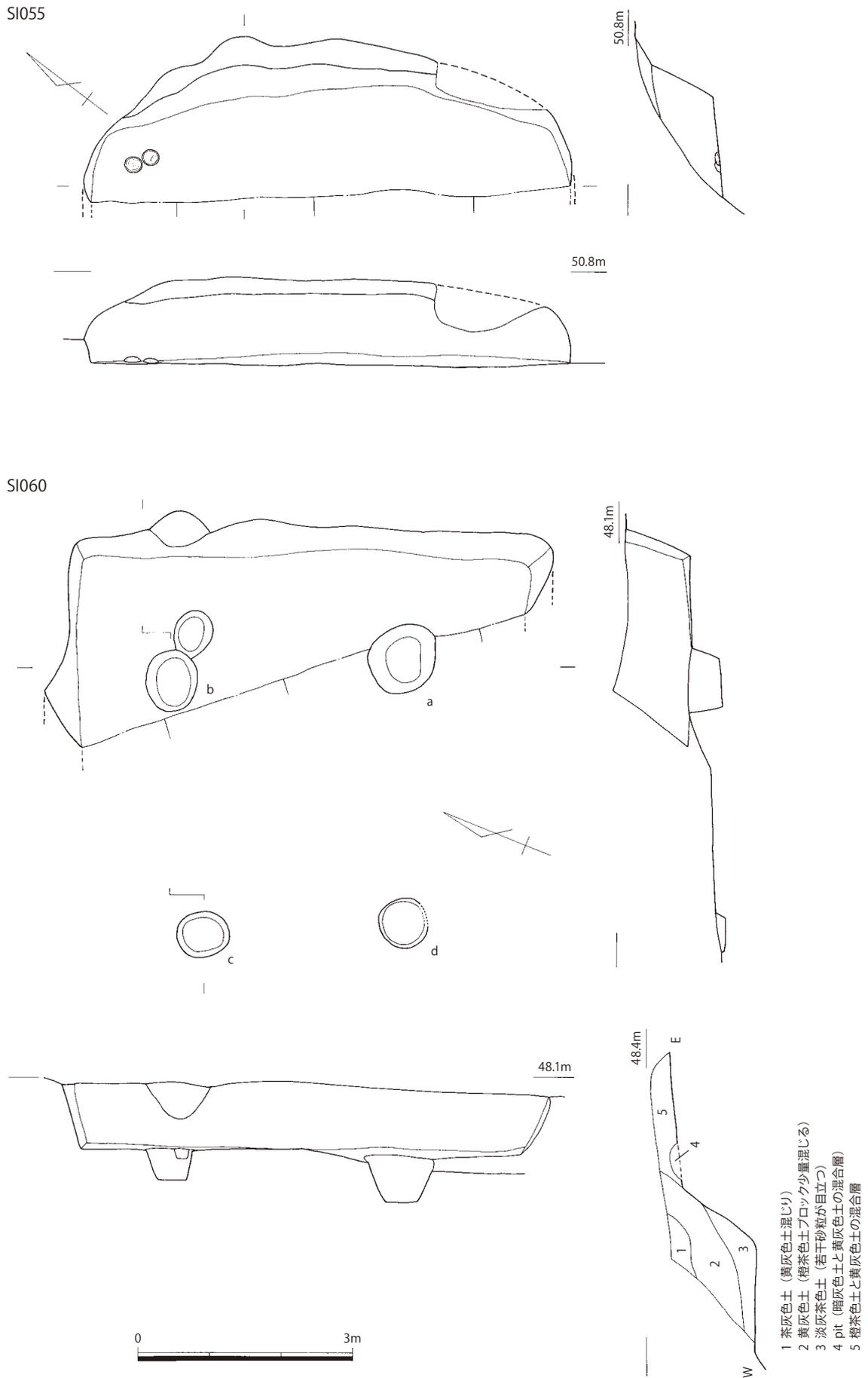


Fig. 27 浦山遺跡 1SI055・060 遺構実測図 (1/80)

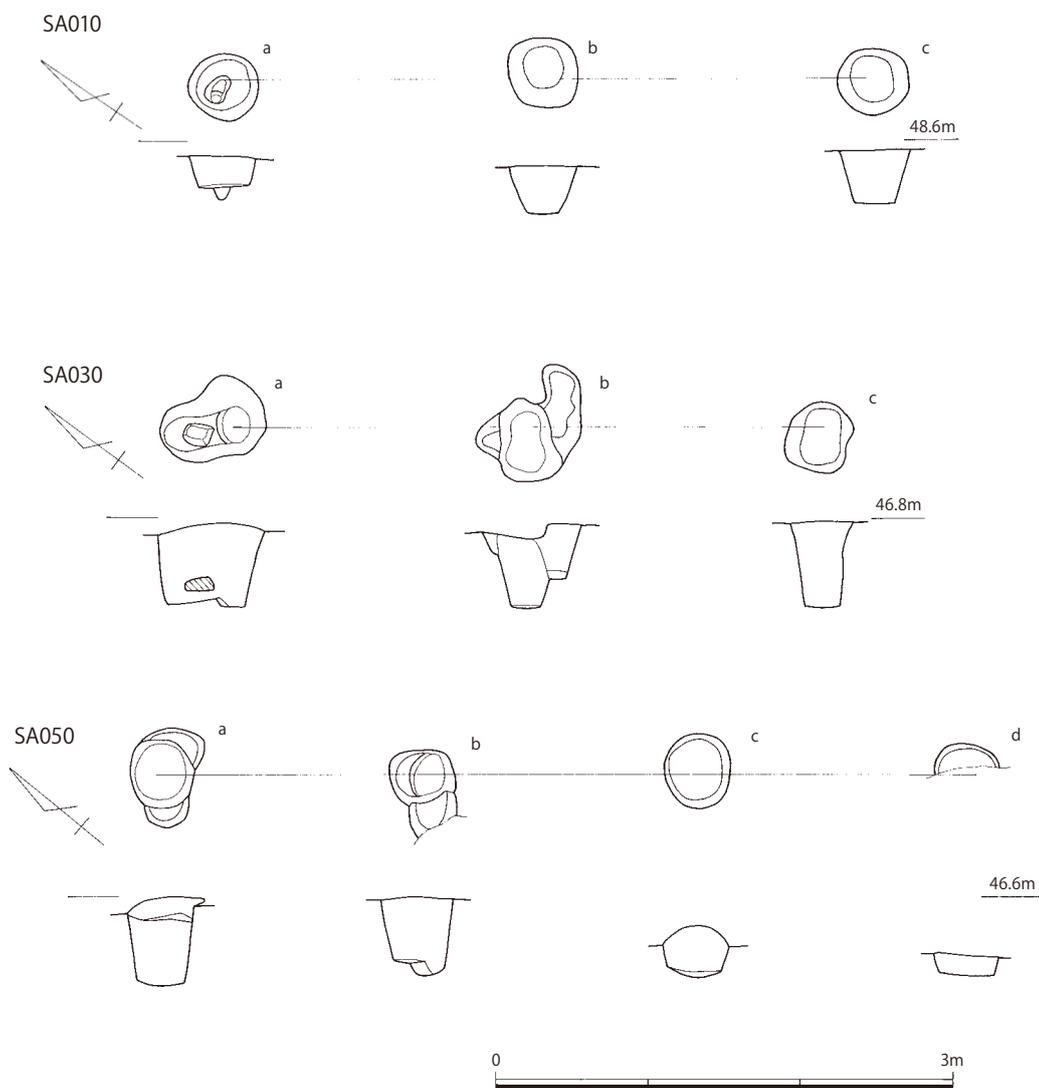


Fig. 28 浦山遺跡 1SA010・030・050 遺構実測図 (1/50)

柱穴は4ヶ所確認でき、柱の位置関係から東西の長さは5m程と推測できる。北側端で炭層が確認できたため、北辺にカマドが設置されていたものと推測される。

柵列

1SA010 (Fig. 28)

2間の柵列で、検出長4.2m、各柱間は2.1m。振れは約 $W-34^{\circ} 25' 48'' -N$ を示す。掘り方は円形で、埋土は黄褐色土である。

1SA030 (Fig. 28)

2間の柵列で、検出長3.9m、各柱間は約1.95m。振れは約 $W-36^{\circ} 43' 27'' -N$ を示す。掘り方は円形ではなく、本来は隅丸方形に近い形で掘削されたのではないかと推測される。埋土は黄褐色土である。

1SA050 (Fig. 28)

3間の柵列で、検出長5.4m、各柱間は約1.8m。振れは約 $W-39^{\circ} 14' 46'' -N$ を示す。掘り方は円形で、埋土は黄褐色土である。

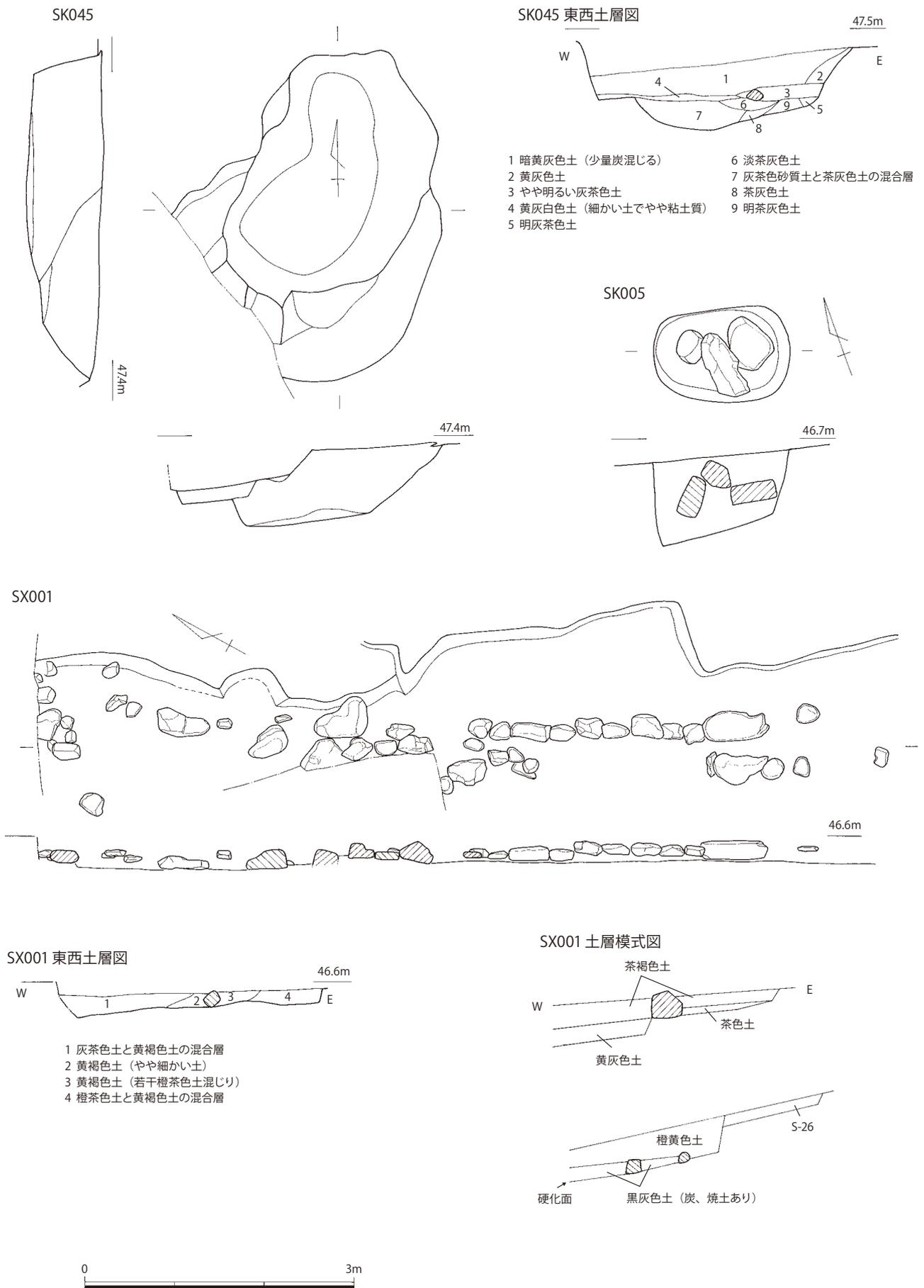


Fig. 29 浦山遺跡 1SK005・045、SX001 遺構実測図 (1/60)

土坑

1SK005 (Fig. 29)

大きさは0.5 × 0.3m、深さ0.32mの楕円形の土坑で、土坑内には花崗岩礫が3個置かれていた。

1SK045 (Fig. 29)

調査区際にあるやや長い土坑で、東西2.5m、南北3.04m、深さ0.76m。埋土は黄褐色土で、西側を中心に0.1m前後の花崗岩礫が10個ほど検出され、同レベルで平瓦が出土した。しかし、これら以外の遺物は散発的に見つかる程度であった。

溝

1SD035

検出長5.4m、深さ0.15m。溝の途中に切株があり、全容がつかめない。溝の北西端が深さ0.3mの土坑となり、遺物を多く包含していた。

石列

1SX001 (Fig. 29)

検出長8.7m、現状では1段分だけの石列で、高さは最大0.2m程である。部分的に石材が存在しないところがあるが、欠落したものか、意図的なのかは不明である。また、石列以外にも礫が点在しており、それが転落した石材と考えると、石列は数段の石積みであった可能性も考えられる。振れは約E-58°-Sを示す。

石列の山側には裏込めとみられる橙灰色土が存在するが、必ずしも石列と並行して掘られていないため、石列設置直前にあった地盤の名残の可能性もある。裏込め土および石列の覆土から出土する遺物は、8世紀末頃のものである。

段落ち地形

1SX020

調査区下段端で検出され、深さ0.3mほどで、埋土は黄褐色土で、下段の法面の落ち込みの一部である。

1SX025 (Fig. 26)

調査区の平坦面を直角に横切る谷地形で、幅6～9.5m、深さは1m以上。埋土は赤茶色土や黄灰色土で、この埋土に切り込んで竪穴住居(SI055・060)が造られており、出土する遺物は住居とほとんど同じ時期のものであることから、谷が埋まった直後に竪穴住居が造られたことになる。

1SX040

SX020の下層に位置し、南西の丘陵法面に向かってさらに深くなっていく。SX020の底面からはさらに0.4m以上深くなっているが完掘できていない。

(4) 出土遺物

竪穴住居

1SI055 出土遺物 (Fig. 30)

須恵器

坏蓋(1～4) 1は口縁端部を平坦に仕上げる。色調は暗灰色を呈する。外面上半部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号を施す。復元口径8.3cm、器高3.05cm。2は復元口径13.1cm。3は外面中位に浅い沈線が巡る。口縁部内面には沈線のような僅かな段がある。

坏身(5～9) 色調は全体として灰色や淡灰色を呈する。5は復元口径12.8cm、器高3.8cm。6は口径13.1cm、器高4.0cm。外面底部にヘラ記号がある。7は口径14.0cm、器高4.0cm。8は復元口径

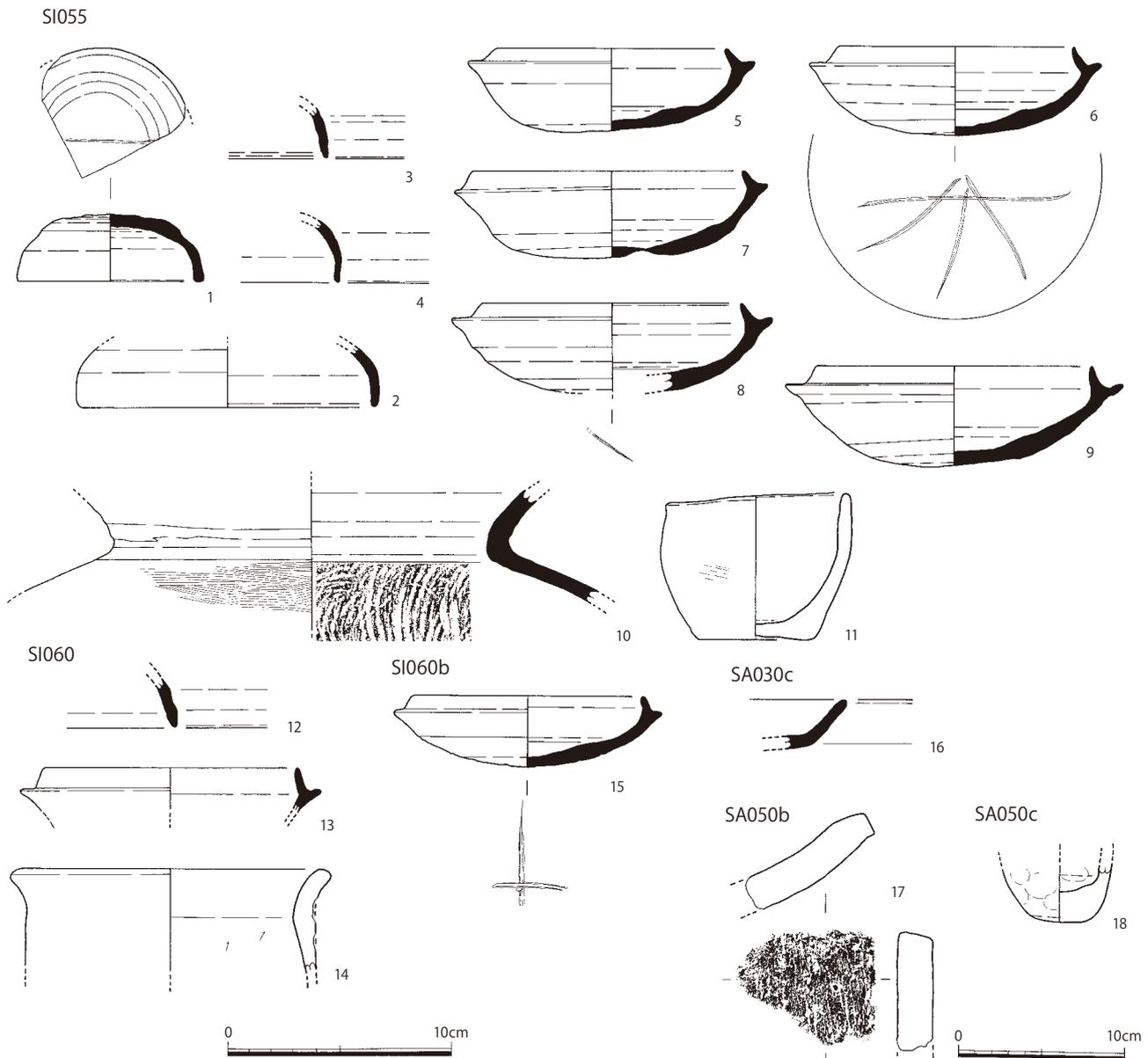


Fig. 30 浦山遺跡 1SI055・060、SA030・050 出土遺物実測図 (1/3、17は1/4)

14. 4 cm。外面底部にヘラ記号がある。9は口径 15.1 cm、器高 4.5 cm。

甕 (10) 体部外面はハケ目状の叩き、内面には当て具痕が残る。

古式土師器

小鉢 (11) 口径 8.3 cm、器高 6.5 cm、底径 5.2 cm。底部外面は未調整、内面はナデ調整で、体部外面には僅かにハケが残る。

1SI060 出土遺物 (Fig. 30)

須恵器

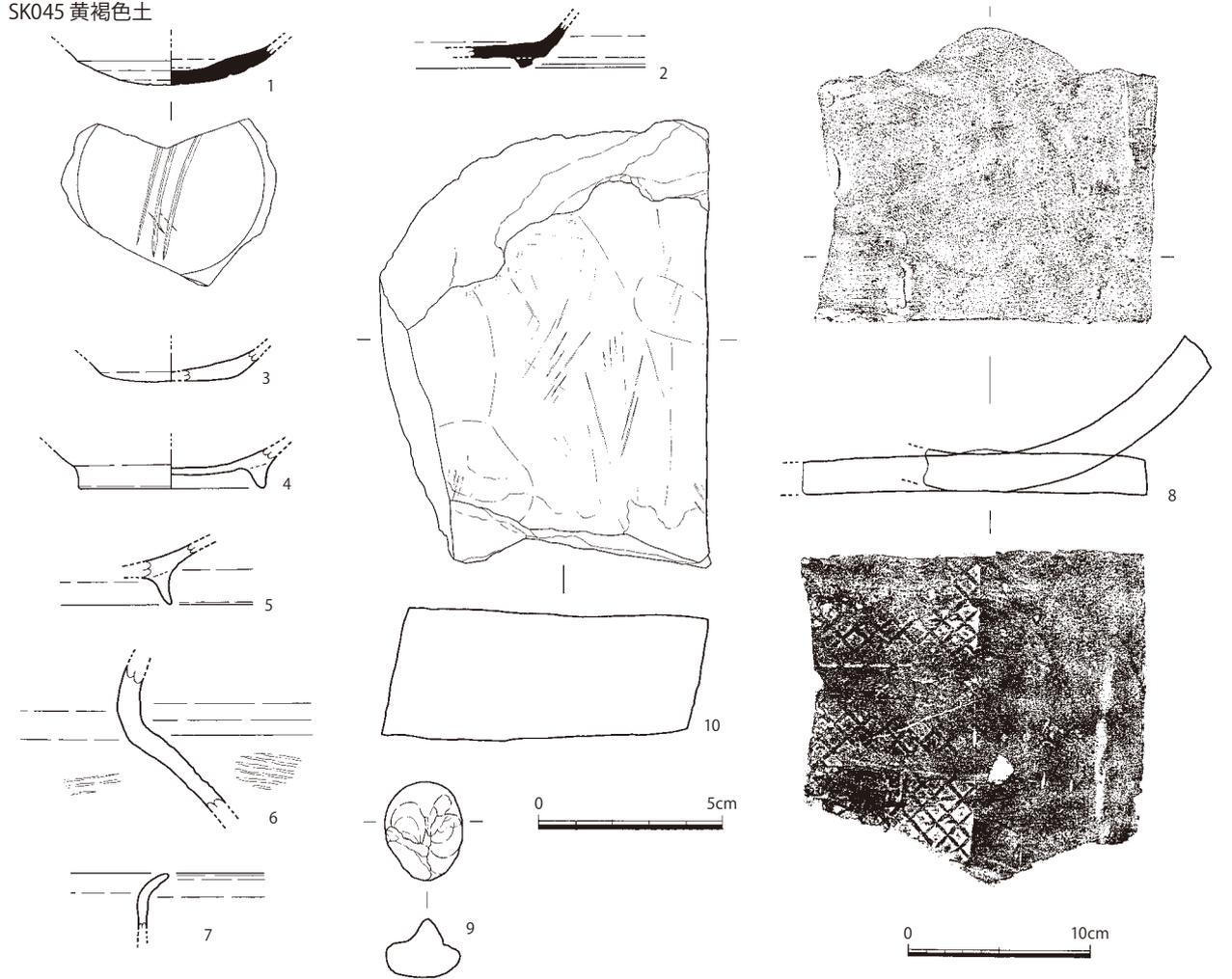
坏蓋 (12) 口縁端部をやや細く仕上げる。色調は淡黄茶色を呈する。

坏身 (13) 復元口径 13.5 cm。

古式土師器

小甕 (14) 外面は剥落し、摩滅も目立つが、体部内面にはヘラケズリが確認できる。復元口径 14.3 cm。

SK045 黄褐色土



SD035

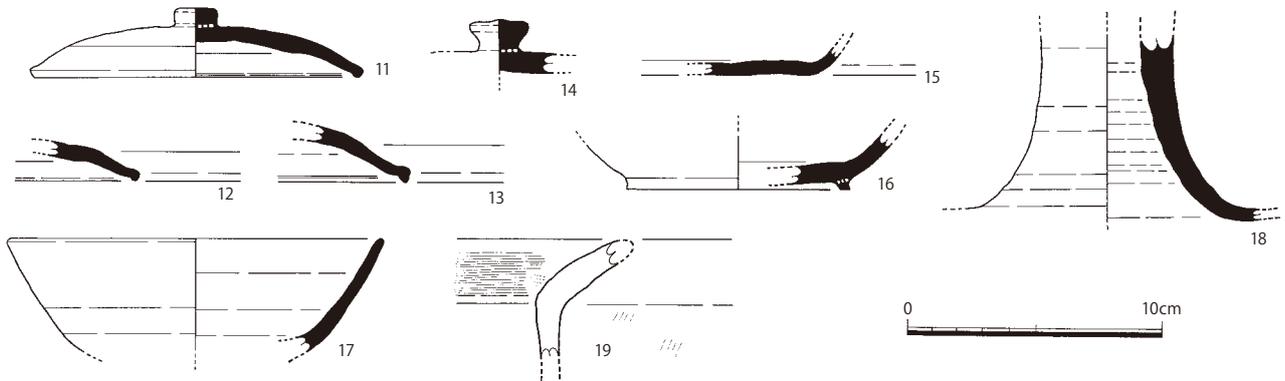


Fig. 31 浦山遺跡 1SK045、SD035 出土遺物実測図 (1/3、10は1/2、8は1/4)

1S1060b 出土遺物 (Fig. 30)

須恵器

坏身 (15) 復元口径 12.0 cm、器高 3.2 cm。外面底部には十字形のヘラ記号を施す。

柵列

1SA030c 出土遺物 (Fig. 30)

須恵器

皿 a (16) 焼成還元とも良好で灰色を呈する。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。

1SA050b 出土遺物 (Fig. 30)

瓦類

平瓦 (17) 凹面は縄目叩きだが、摩滅が目立つ。

1SA050c 出土遺物 (Fig. 30)

土師器

ミニチュア土器小鉢 (18) 手捏ね成形され、指頭圧痕が残る。色調は薄茶色を呈する。

土坑

1SK045 黄褐色土出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

坏身 (1) 蓋か身か不明瞭である。外面は回転ヘラケズリで、3本のヘラ記号を施す。

坏c (2) 焼成良好で色調は灰色を呈する。

土師器

坏a (3) 僅かに丸味のある底部で、復元底径 6.0 cm。色調は薄茶色を呈する。

椀c (4、5) 4は高台径 7.7 cm。底部はやや丸味を帯びる。色調は淡黄茶色を呈する。5は細く高い高台を貼付する。色調は淡茶灰色を呈する。

甕 (6) 内面ハケで、外面叩きを施す。胎土は 0.2 cm以下の砂粒を含み、色調は薄茶色を呈する。

黒色土器

小甕 (7) A類。摩滅が目立つが内面にミガキが僅かに残る。

瓦類

平瓦 (8) 凸面に方形格子叩きを施し、「平井」が陰刻されている。九歴分類 901B。

土製品

土製模造鏡 (9) 大きさは 4.1 × 3.15 cm、高さ 2.4 cm。中央を摘まんで紐を作り出している。

石製品

砥石 (10) 2面使用され、擦痕も残る。

溝

1SD035 出土遺物 (Fig. 31)

須恵器

蓋c3 (11) 口縁端部は僅かに摘まんだ程度の断面三角形を呈する。外面上半部は回転ヘラ切り後粗いナデ調整で、ボタン状のツマミを貼付する。復元口径 13.1 cm、器高 2.75 cm。

蓋3 (12、13) 口縁端部は僅かに摘まんだ程度の断面三角形を呈する。12の外面上半部はナデ調整。13は外面上半部が回転ヘラケズリ。

蓋c (14) やや高めのツマミを貼付する。

坏aもしくは皿a (15) 色調は白茶色を呈する。底部外面は回転ヘラ切り。

坏c (16) 低い断面方形の高台を貼付する。復元高台径 8.8 cm。焼成良好で色調は灰色を呈する。

坏 (17) 復元口径 14.85 cm。内外面とも回転ナデ調整。

高坏 (18) 内外面とも回転ナデ調整。色調は青灰色を呈する。

土師器

甕 (19) 体部より口縁部が張り出した口縁部である。内面は口縁部がヨコハケ、体部はヘラケズリ。外面には僅かにタテハケが残る。

石列

1SX001 橙黄色土出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

蓋c3 (1) 復元口径 14.3 cm。外面上半部は回転ヘラ切り後ナデ調整。口縁端部には重ね焼き痕が残る。

蓋3 (2～4) 口縁端部は摘まんだ程度の断面三角形を呈する。

皿a (5) 器高 2.25 cm。外面底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。

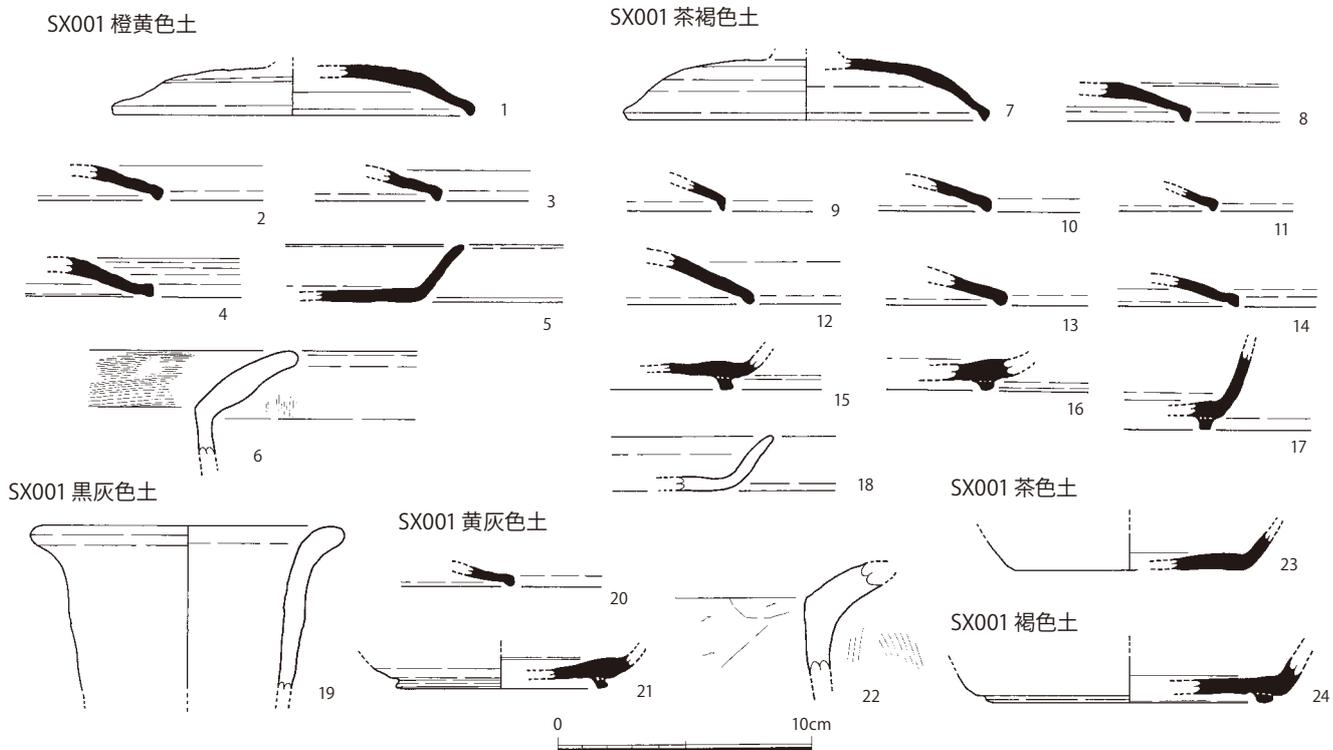


Fig. 32 浦山遺跡 1SX001 出土遺物実測図 (1/3)

土師器

甕 (6) 口縁部内面はヨコハケ、体部内面はヘラケズリ。くびれ部外面にタテハケが残る。

1SX001 茶褐色土出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

蓋 c3 (7) 復元口径 14.4 cm。口縁端部は断面三角形。外面上半部は回転ヘラケズリ、下半は回転ナデ。

蓋 3 (8～14) 口縁端部は 8・9 が断面三角形に摘まわれているが、その他は僅かに膨らんでいる程度である。

坏 c (15～17) 断面方形のやや貧弱な高台を貼付する。

土師器

皿 a (18) 焼成不良で摩滅が目立つ。

1SX001 黒灰色土出土遺物 (Fig. 32)

土師器

甕 (19) 復元口径 12.4 cm。色調は暗茶色や淡茶色を呈する。摩滅が目立ち調整不明。

1SX001 黄灰色土出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

蓋 3 (20) 口縁端部は摘んだ程度の断面三角形を呈する。

坏 c (21) 低い高台を貼付する。復元高台径 8.3 cm。

土師器

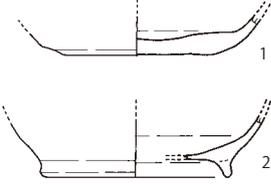
甕 (22) 体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリ。

1SX001 茶色土出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

坏 a (23) 復元底径 9.3 cm。焼成不良で、色調は灰色で全面摩滅する。土師器の可能性もある。

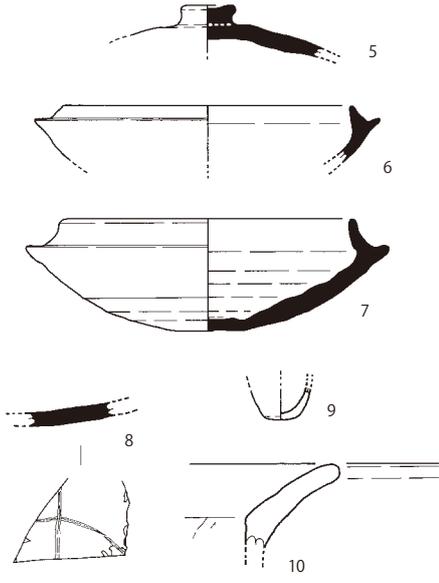
SX020 黄褐色土



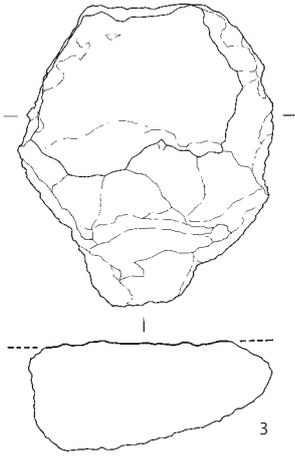
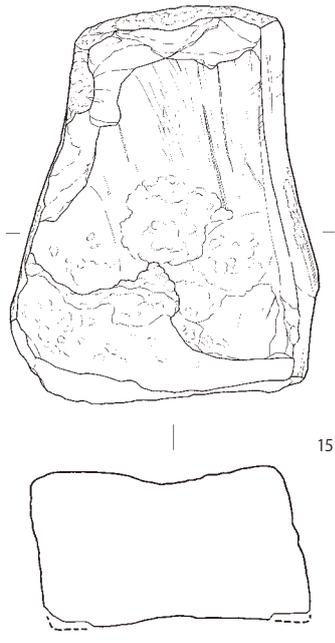
SX020 茶灰色土



SX025 黄茶色土



表土



SX040 黄褐色土

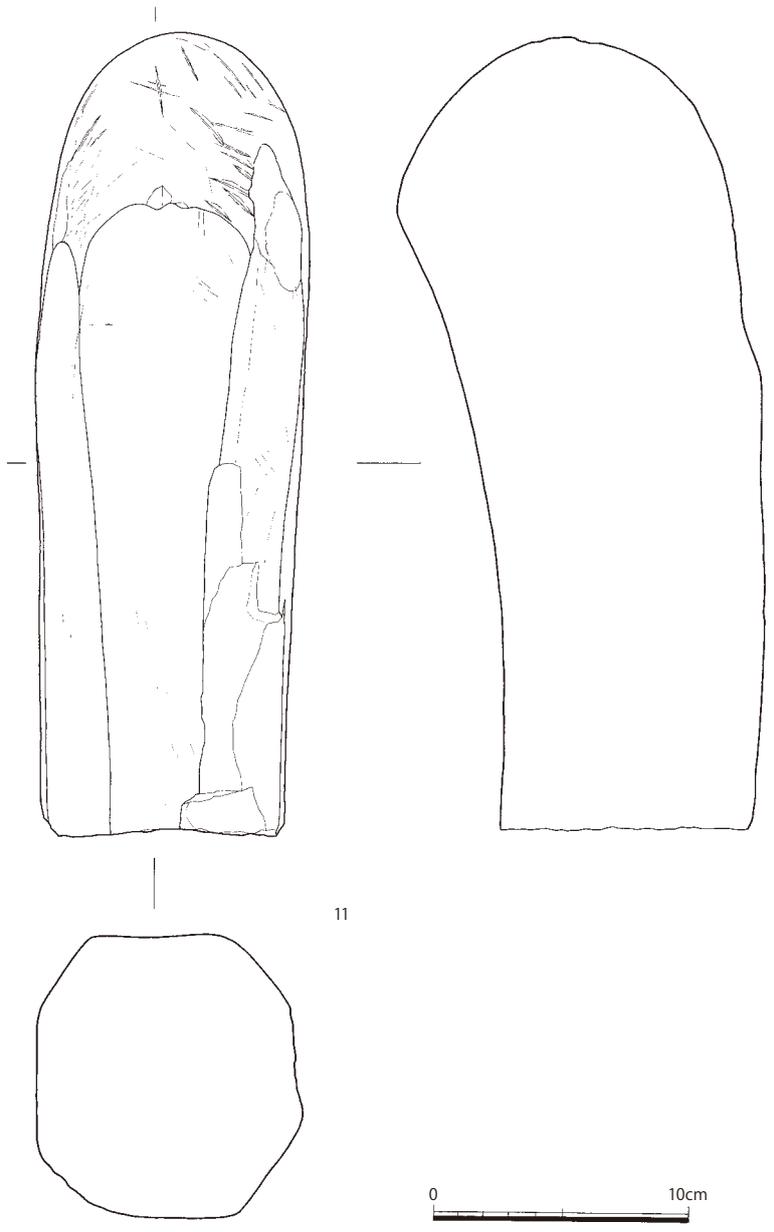
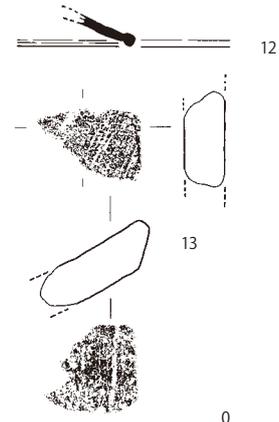


Fig. 33 浦山遺跡 1SX020・025・040、表土出土遺物実測図 (1/3、瓦は1/4、15は1/2)

1SX001 褐色土出土遺物 (Fig. 32)

須恵器

坏 c (24) 低い高台を貼付する。復元高台径 11.3 cm。還元不良で白灰色を呈する。

段落ち地形

1SX020 黄褐色土出土遺物 (Fig. 33)

土師器

坏 a (1) 底部と体部境はやや丸味があり、色調は淡黄灰色を呈する。

碗 c (2) 復元高台径 7.6 cm。色調は薄茶色を呈する。

土製品

土壁 (3) 片面に平坦面が残る。胎土は 0.5 cm 以下の白色砂粒を多く含み、黄茶色を呈する。

1SX020 茶灰色土出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

皿 a (4) 器高 2.2 cm。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。色調は灰色を呈する。

1SX025 黄茶色土出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 c (5) 蓋の外表面は回転ヘラケズリで、内面は不定方向のナデ。方形のしっかりしたツマミを貼付する。

坏身 (6、7) 6 の立ち上がりはやや短く、復元口径 13.6 cm。焼成良好で色調は暗灰色を呈する。7 は復元口径 14.3 cm、器高 4.5 cm。立ち上がりはやや長い。体部下半は回転ヘラケズリ。還元やや不良で、色調は白茶色を呈する。

坏身もしくは坏蓋 (8) 小片で蓋か身か不明瞭である。十字形のヘラ記号が施されている。

古式土師器

ミニチュア土器小鉢 (9) 丸味のある底部で、復元底径 1.5 cm。手捏ねの土器で、色調は淡茶色を呈す。

甕 (10) 全体的に摩滅するが、体部内面はヘラケズリである。

石製品

砥石 (11) 縦 31.9 cm、厚さ 10.75 × 13.2 cm。断面八角形で、8 面がよく研磨されている。面には細かい擦痕があり、端部には刃先を当てたような大きな傷が多くみられる。

1SX040 黄褐色土出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

蓋 3 (12) 口縁部は僅かに断面三角形を呈する。焼成良好で色調は灰色を呈する。

瓦類

平瓦 (13) 縄目叩きだが、焼成不良で摩滅が著しい。

表土出土遺物 (Fig. 33)

須恵器

坏 c (14) 底部端に貧弱な高台を貼付する。

石製品

叩き石 (15) 砥石としても使用している。3 面を主に研磨され、もう 1 面は僅かに研磨痕がある程度である。また、4 面と断面部に敲打痕が明確に残り、凹みとなる。砥石を再利用したものか。

(5) 小結

この付近で古墳時代の堅穴住居は初めて確認された。周辺には平坦地があるにも関わらず、平野部を

見渡す丘陵斜面の狭い空間に竪穴住居を構えたことは特筆すべきことである。

また、御笠団印や遠賀団印が出土したこの坂本地区では、過去の調査（大宰府条坊跡第97・190次調査）で、今回のように丘陵の段造成箇所でも柵列が検出されていることが多く、軍団との関連性も考えられる。

今回の調査地南西270m付近では、大宰府条坊跡第326次調査（2018年調査、未報告）が実施され、整理・報告がなされていないので、詳細な時期は検討を要するものの、古墳時代前期から後期にかけての方形プランの竪穴住居が重複して10棟と掘立柱建物1棟が確認されている。また、大宰府条坊跡第336次調査（2020年調査、未報告）では、甘木古寺墳墓群出土と同形の渦文把手を持つジョッキ型須恵器が出土している。

調査地南西部の水城幼稚園が所在する場所は、かつて細長い丘陵があつて、幼稚園の北東側を造成中に6世紀後半の須恵器の脚付壺や無蓋高坏が出土し近隣住民により採集されている。さらに、かつて学業院中学校と水城小学校の間に小さな「どたん山」という二、三反の山があつて、その頂上に8畳くらいの穴が南向きにあつたと言われている。詳細は不明であるが古墳の石室の可能性も考えられる。また、九州歴史資料館が学業院中学校北側の丘陵で4基の古墳を確認し、その1基の古墳の発掘調査を実施している。時期は7世紀後半であつた。数は多くないものの、来木古墳群を形成している。

以上のように、今回の調査地付近一帯では、古墳時代前期から「大宰府」が成立するまで、来木地区の丘陵地を墓域とし、その北側に小規模な集落が形成されたと考えられる。

参考文献

太宰府市教委「大宰府条坊跡第326次調査現地説明会資料」2018年

九州歴史資料館『大宰府史跡 昭和52年度発掘調査概報』1978年

太宰府市史編集委員会『大宰府の民俗 第一集 -水城・国分・坂本-』太宰府市史民俗調査報告書(1) 1990年

甘木市教委『古寺墳墓群』甘木市文化財調査報告第14集 1982年

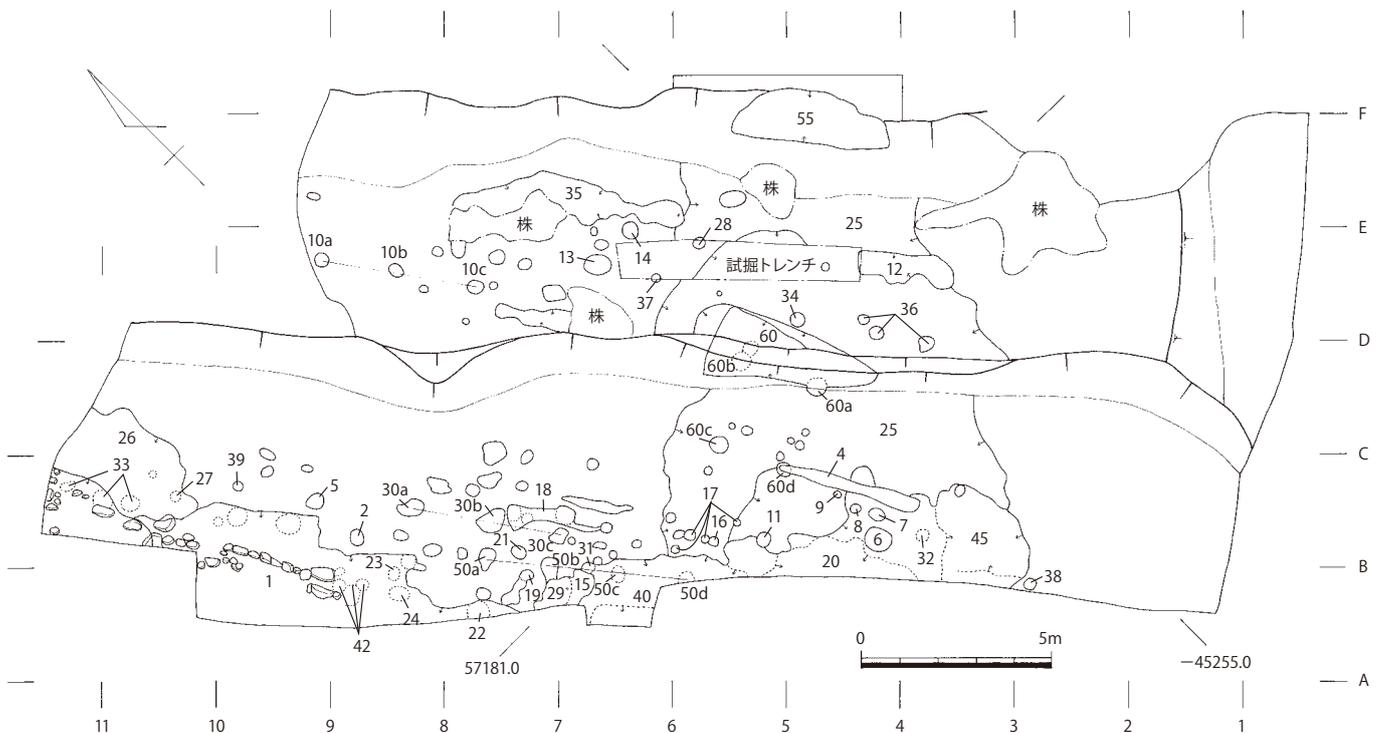


Fig. 34 浦山遺跡第1次調査遺構略測図 (1/200)

表 24 浦山遺跡第 1 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種 別	埋 土 等	時 期	地 区
1	1SX001	石列	S-26→1	8世紀末	AB9
2		ピット			B8
4		溝	黄褐色土	平安前期	B4
5	1SK005	土坑	礫あり		B9
6		土坑	浅いか炭を多く含む		B4
7		ピット		古代	B4
8		ピット		古代	B4
9		ピット			B4
10	1SA010	柵列	明灰色土。柱痕不明瞭。	古代?	D7～9
11		ピット		奈良時代?	B5
12		溝	灰茶色土		D3・4
13		ピット		奈良時代	D6
14		ピット		古代	D6
15	1SX015	焼土	赤茶色土。0.8×0.9m、厚さ0.7m。		A6
16		ピット		古代	B5
17		ピット群			B5
18		溝			A7
19		ピット		古代	A7
20	1SX020	堆積層(段落ち)	S-25→40→20→45	9世紀前半	B3～6
21		ピット			B7
22		ピット			A7
23		ピット		古代	A8
24		ピット			A8
25	1SX025	谷地形		6世紀末	
26		堆積層	黄灰色土 S-26→1		BC10・11
27		ピット	S-26の下		B10
28		ピット		8世紀～	D5
29		ピット			A7
30	1SA030	柵列		奈良時代～	B7・8
31		ピット			B6
32		ピット		古代	B3
33		ピット群	S-1下	8世紀	B10・11
34		ピット			D4
35	1SD035	溝	橙茶色土。北西側に遺物多い土坑あり。	8世紀末	E7
36		ピット群			D3・4
37		ピット		8世紀～	D6
38		ピット			A2
39		ピット		古代～	B9
40	1SX040	段落ち	S-25→40→20→45	8世紀末	A5・6
41		ピット	S-60の床面		C5
42		ピット群	S-1の下		A8
45	1SK045	土坑	S-25→40→20→45	9世紀	B3
50	1SA050	柵列		古代?	A5～7
55	1SI055	竪穴住居		6世紀末	E4・5
60	1SI060	竪穴住居		6世紀末	D5
橙色土		上段遺構検出時の土色			上段
茶色土		下段遺構検出時の土色			下段

表 25 浦山遺跡第 1 次調査 出土遺物一覽表

S-1 黒灰色土		
須	恵	器 坏
土	師	器 甕
瓦		類 破片(縄目)
S-1 黄灰色土		
須	恵	器 蓋3、坏、坏c、甕
土	師	器 坏、甕
S-1 茶色土		
須	恵	器 坏身、坏a、甕
土	師	器 坏a、甕、破片
瓦		類 破片
S-1 褐色土		
須	恵	器 蓋、坏、坏c、甕
土	師	器 蓋?、坏、甕?、破片
土	製	品 土塊
S-1 橙黄色土		
須	恵	器 蓋、蓋3、蓋c3、坏、坏a、坏c、皿a
土	師	器 甕、破片
瓦		類 平瓦(縄目)
土	製	品 土塊
S-1 茶褐色土		
須	恵	器 蓋3、蓋c3、蓋?、坏、坏身、坏a、坏c、甕
土	師	器 坏、皿a、甕
瓦		類 平瓦(縄目、破片)
土	製	品 土塊
S-2		
土	師	器 破片
S-4		
土	師	器 椀c、破片
瓦		類 平瓦(格子)
S-5		
須	恵	器 甕
S-6		
土	師	器 坏、甕
S-7		
土	師	器 坏
S-8		
土	師	器 甕
黒色土	器A類	椀c
S-9		
土	師	器 坏
S-10a		
土	師	器 甕
そ	の	他 炭
S-11		
土	師	器 坏、坏a、甕
S-12		
須	恵	器 高坏脚部
土	師	器 甕
S-13		
須	恵	器 坏c
土	師	器 破片
S-14		
土	師	器 破片
瓦		類 平瓦(無文)
S-16		
土	師	器 坏、甕
S-17		
土	師	器 破片
S-18		
土	師	器 破片
S-19		
須	恵	器 破片
土	師	器 甕
瓦		類 平瓦(縄目)

S-20 黄褐色土		
須	恵	器 蓋3、蓋c、坏蓋、坏、坏身、甕、壺
土	師	器 坏、坏a、椀c、甕、破片
瓦		類 平瓦(縄目、破片)、丸瓦
金	属	製 品 小刀?
土	製	品 土壁
S-20 茶灰色土		
須	恵	器 皿a、坏、甕
土	師	器 坏a、甕
瓦		類 平瓦(縄目)
石	製	品 剥片(黒曜石)
土	製	品 土壁
S-21		
土	師	器 破片
S-22		
須	恵	器 破片
S-23		
土	師	器 坏
S-24		
土	師	器 甕
瓦		類 平瓦(縄目)
S-25		
土	師	器 甕
S-25 黄茶色土		
須	恵	器 坏蓋、坏身、高坏蓋、坏身×坏蓋
古	式	土 師 器 甕、ミニチュア土器小鉢
石	製	品 砥石
S-26		
須	恵	器 破片
土	師	器 甕
S-27		
須	恵	器 甕
S-28		
須	恵	器 坏c、甕
S-29		
須	恵	器 破片
土	師	器 破片
S-30a		
土	師	器 甕
S-30b		
土	師	器 破片
S-30c		
須	恵	器 皿a、破片
土	師	器 破片
S-31		
須	恵	器 破片
土	師	器 甕
S-32		
黒色土	器A類	椀
S-33		
須	恵	器 坏、甕
土	師	器 蓋c、甕、破片
S-34		
土	師	器 破片
S-35		
須	恵	器 蓋、蓋3、蓋c、蓋c3、坏、坏a、坏a×皿a、坏c
土	師	器 高坏、甕、壺、壺b
土	師	器 坏、甕、甕類、破片
瓦		類 平瓦(縄目)
S-36		
須	恵	器 破片
土	師	器 破片
土	製	品 土塊
S-37		
須	恵	器 蓋3、壺、破片
土	師	器 破片

S-38

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-39

土	師	器	破片
瓦		類	破片

S-40 黄褐色土

須	恵	器	蓋3、坏蓋、坏身、甕、壺、破片
土	師	器	甕、壺、把手
瓦		類	平瓦(縄目)
金	属	製	品 鈹滓
石	製	品	剥片(黒曜石)

S-40 黄灰色土

土	師	器	甕
---	---	---	---

S-41

土	師	器	破片
---	---	---	----

S-42

須	恵	器	坏
土	師	器	破片
金	属	製	品 釘?

S-45 黄褐色土

須	恵	器	蓋、蓋3、坏蓋、坏身、坏c、甕、壺?
土	師	器	坏a、椀c、甕、甕類
黒	色	土	器A類 小甕、破片
瓦		類	平瓦(縄目、格子)
石	製	品	砥石
土	製	品	土製模造鏡

S-50a

須	恵	器	破片
土	師	器	破片

S-50b

須	恵	器	蓋?
土	師	器	破片
瓦		類	平瓦(縄目)

S-50c

須	恵	器	坏蓋?、破片
土	師	器	ミニユチユア土器小鉢、破片

S-50d

石	製	品	丸石
---	---	---	----

S-55

須	恵	器	蓋3、坏蓋、坏身、甕
土	師	器	坏、甕、破片
古	式	土	師器 小鉢

S-60

須	恵	器	坏蓋、坏身
古	式	土	師器 小甕

S-60b

須	恵	器	坏身
土	師	器	破片

S-60d

土	師	器	破片
---	---	---	----

橙色土

土	師	器	甕
---	---	---	---

茶色土

須	恵	器	蓋3、蓋?、坏蓋、坏、坏身、坏c、甕、鉢a、破片
土	師	器	坏、椀c、甕?、破片
黒	色	土	器A類 椀c
弥	生	土	器 丹塗り土器
瓦		類	平瓦(格子、破片)
石	製	品	丸石
土	製	品	土塊

表土

須	恵	器	蓋3、坏、坏身、坏c、甕、壺、破片
土	師	器	蓋?、坏a、甕、破片
瓦		類	平瓦(縄目)
石	製	品	砥石

3、浦山遺跡第2次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は太宰府市坂本三丁目 240、241-1、242、248、249 に所在し、四王寺山から南へ派生する標高 66～70m ほどの 2 つの低丘陵とその尾根に挟まれた谷地形に位置する。2013（平成 25）年 12 月 20 日にナガタ建設㈱より、対象地を含む周辺の宅地造成をするにあたり、埋蔵文化財の取り扱いについて照会があった。2014（平成 26）年 1 月 10 日に現地を確認し、山林部のため確認調査には樹木の伐採が必要とナガタ建設㈱に伝えた。2014（平成 26）年 5 月 2 日に確認調査を実施し、主に 2 つの尾根筋に近世の遺構が確認されたため、開発者の調査費用負担のもと、2015（平成 27）年 1 月 20 日～同年 3 月 31 日にかけて発掘調査を実施した。文化財保護法第 93 条の届出は、2014（平成 26）年 10 月 27 日に提出されている（文書番号 26 太教文第 495 号）。確認調査は遠藤茜が実施し、発掘調査は高橋学・遠藤茜が担当した。開発対象面積 940 m²、調査面積 758 m²を測る。

(2) 基本層位

調査区は、北尾根、南尾根、2 つの尾根に挟まれた谷部の 3 つに分けられる。南・北尾根は表土（腐葉土）の直下に赤色土とした花崗岩風化土由来の土層があり、これを遺構検出土とした。この下層は花崗岩風化土の地山である。南尾根の南側は昭和 30 年代に土取り工事が行われており、その際に墓域の一部を削っている。南尾根南東部の遺構検出時には手のひら大の緑色片岩が出土しており、周囲に中世墓が存在する可能性が高い。調査地から少し南東方向へ下った開けた場所に自然石を墓標とした墓が 2 基確認できる。

(3) 検出遺構

○南尾根

墓

2ST001 (Fig. 36)

大きさは東西 1.4m、南北 1.2m、深さ 0.7m の楕円形土壇である。検出時には花崗岩礫が検出された。埋土は淡赤茶色土で、締まっておらず真砂土由来の埋め戻し土と考えられる。人骨は確認されていない。土坑の底面が二段掘り状態になっているが、これは検出時に地山の土質の違いを間違えて掘り下げてしまったもので本来は平坦なものである。底面には花崗岩風化土が確認されている。埋土からは陶器片が出土していることから、元々は小型陶器を棺として使用していたことが想定でき、改葬されたものとみられる。

2ST002 (Fig. 36)

掘り方は、東西 1.17m、南北 1.3m、深さ 1.1m の円形で、掘り方には高さ 80.2cm の陶器甕を据え、棺としている。検出時には甕の蓋石はなかったが、墓碑の底石と考えられる長方形の石が埋土中から出土した。また、甕内部からは上下を逆転させた墓碑が見つかり、その下には骨が残存していた。これらは状況的に改葬に伴う行為と考えられる。なお、墓碑（表 26、NO. 20）には正面に「大田謙助墓」と彫られていた。この墓碑は元来、甕が埋められた場所の地上にあって、この墓の存在を示すものであったと思われるが、改葬時にただ破棄されるのではなく、あえて甕の中に逆さまにして安置されていた。このことは、死者のよみがえりを防ぐための行為と考えられ、改葬時の事例として興味深い。

なお、甕棺内の人骨の出土状況から坐葬での埋葬が推定され、人骨と一緒に副葬品と思われる土師器皿も検出された。



Fig. 35 浦山遺跡第2次調査遺構全体図 (1/300)

2ST003 (Fig. 36)

掘り方は、東西 1.45m 以上、南北 1.18m、深さ 1.75m の円形である。西側は 2ST002 に切られている。埋土は明黄色の真砂土で、墓壇内には天地逆にした墓碑（表 26、NO. 19）が斜めになった状態で検出した。墓碑には「安永五年」と彫られている。安永五年は西暦 1776 年。人骨の頭位は北西、顔面の向きを南東に向けた立膝坐葬で埋葬されたと推定されている。頭蓋が墓壇内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと推定され、木棺に埋葬された可能性が考えられる。また、頭蓋骨近くから金属製煙管の雁首と吸口が出土しており、被葬者が生前に愛用したものを副葬したと考えられる。

2ST004

掘り方は、やや丸みを帯びた方形。改葬されており、遺体収納容器や人骨の痕跡は確認できない。埋土中には墓に伴うと推定される黒色凝灰岩の長方形切石が 3 点確認された。これらは改葬に伴い墓壇に廃棄されたものと考えられる。

2ST005 (Fig. 36)

調査区南壁際で検出した木棺墓。ST001 に切られ、南側は調査区外に続いているため、平面形は不明だが、残存部より長方形の可能性が考えられる。大きさは東西 0.95m、南北 1.1m 以上、深さ 1.5m である。真砂土由来の暗黄色土などの埋土を除去すると、深さ 1.3m 付近で木棺が土壌化した痕跡を確認でき、中央で背骨と肋骨が僅かに検出された。木棺痕跡の確認面より上位の埋土から、木棺に使用されたと考えられる鉄釘が出土しており、改葬に伴って掘り返した後に埋め戻したものと推定される。なお、人骨の近くで副葬品とみられる土師器皿が 2 枚出土した。

2ST006 (Fig. 36)

調査区際で検出した土壇で、ほとんどが調査区外だが、状況的に墓と推測され、検出状況から一辺 1.2m 以上の方形プランと推測される。深さは 0.95m。

2ST007

ST026 に切り込んだ土壇で、ST026 の甕を破壊している。埋土から焼骨と炭化物が出土したため、火葬の可能性が考えられる。

2ST008 (Fig. 36)

掘り方は、東西 0.8m、南北 1.0m、深さ 0.65m の不定円形である。

2ST009 (Fig. 36)

掘り方は、東西 1.14m、南北 1.13m、深さ 1.92m の隅丸方形である。底面には人骨が遺存していた。人骨の分析から頭位は東で顔面の向きは西で、埋葬姿勢は立膝坐葬と考えられている。

2ST010 (Fig. 36)

掘り方は、東西 1.4m、南北 1.4m、深さ 1.26m の不定円形である。底面やや北側で人骨が円形状にまとまって検出されたが、遺存状況はよくない。寛永通寶を含む銭 3 枚と金属製品が出土している。

2ST011 (Fig. 37)

掘り方は、長軸 1.9m、短軸 1.1m、深さ 2.0m の楕円形であるが、南西側には中段があり、深さ 0.3m 程で、隅丸方形となる。埋土は茶色の真砂土で、埋土中位には台石や割れた石造仏（舟形光背の地藏菩薩座像）が不規則に埋まっていた。底面には円形状に人骨が遺存し、毛髪も残されていた。人骨の分析から頭位は東、顔面の向きは西向きで埋葬されたと考えられている。

2ST012

調査区際で検出した遺構で周辺の遺構状況から墓と推測される。安全上の問題から完掘していない。

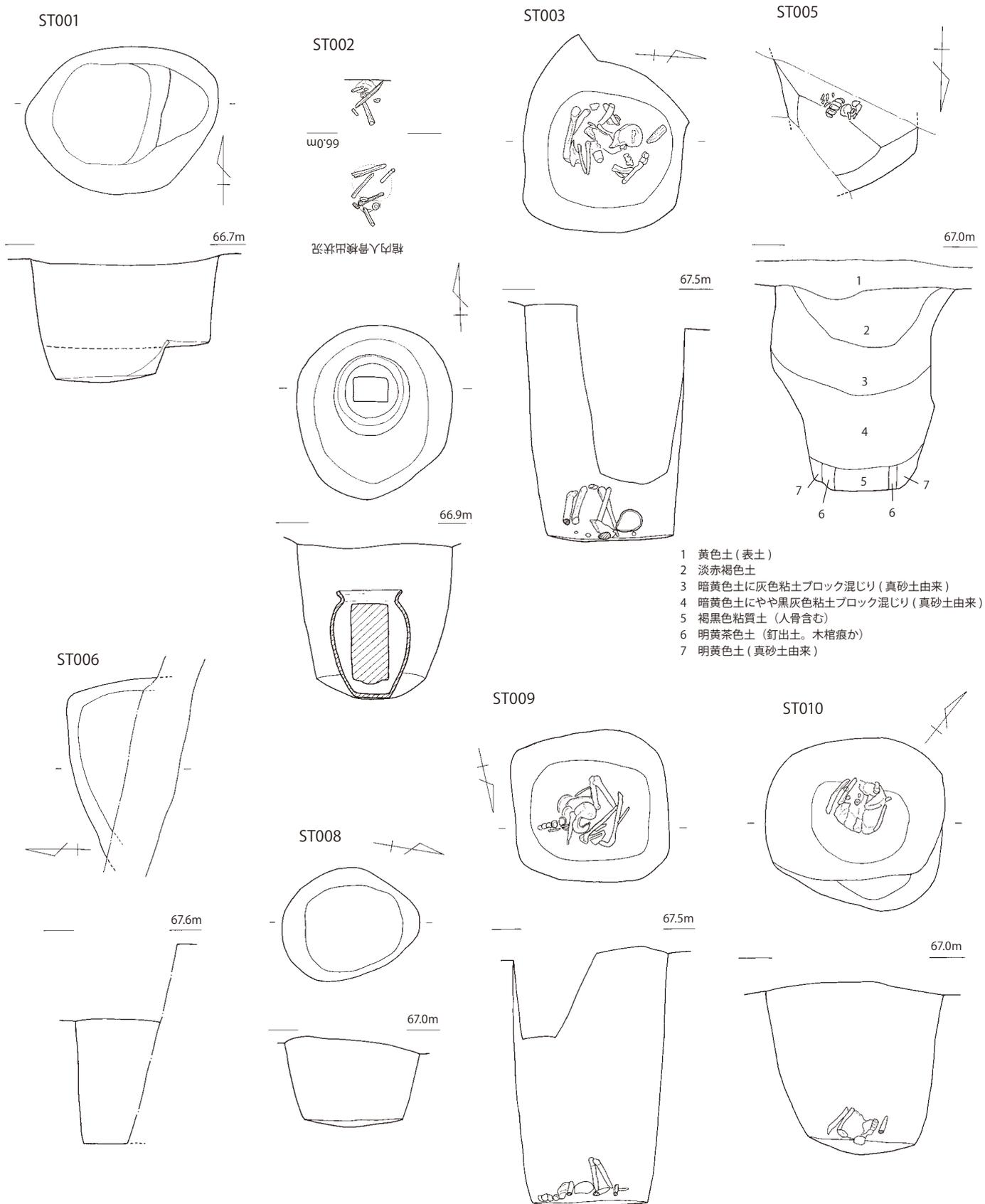


Fig. 36 浦山遺跡 2ST001・002・003・005・006・008・009・010 遺構実測図 (1/40)

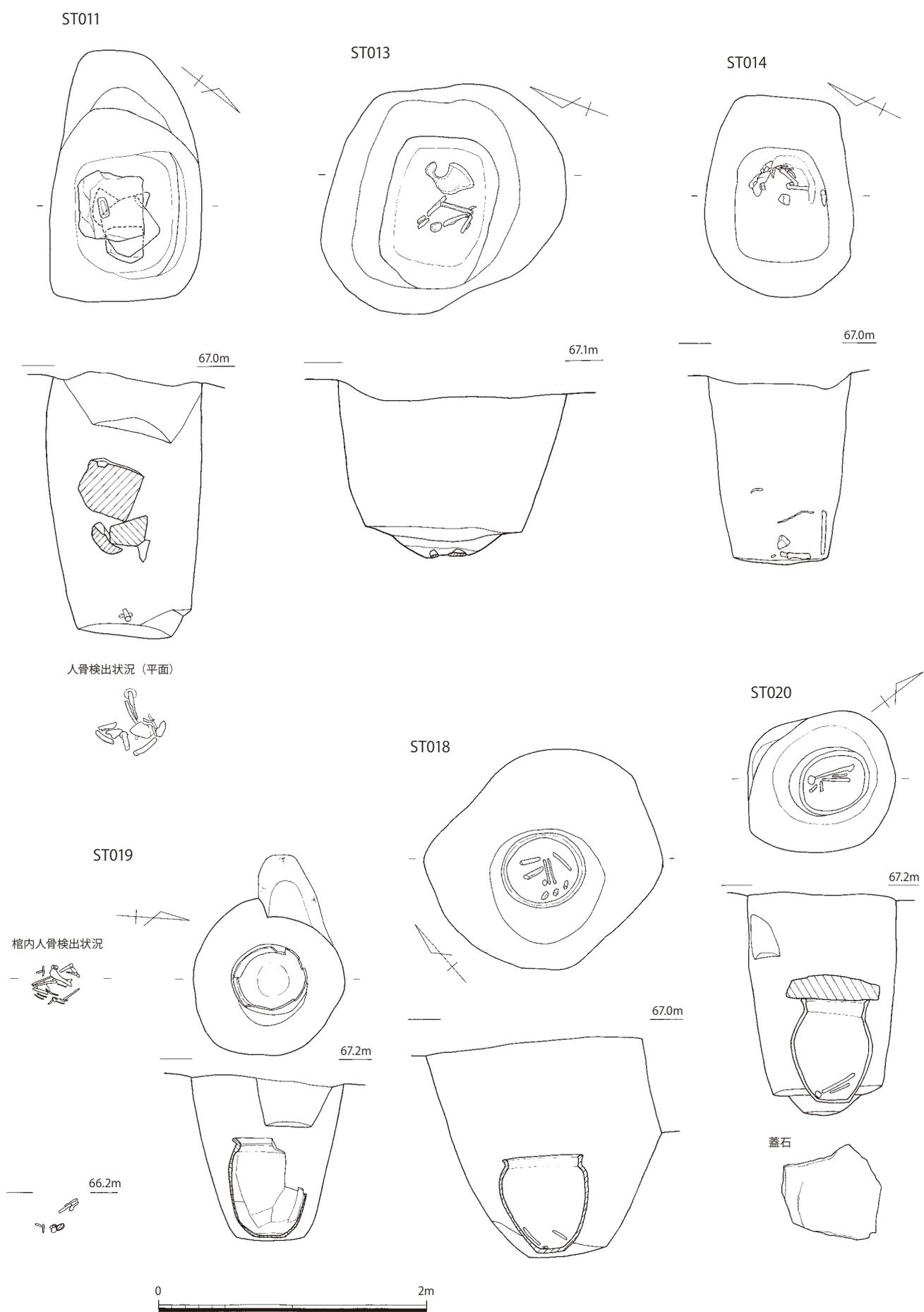


Fig. 37 浦山遺跡 2ST011・013・014・018・019・020 遺構実測図 (1/40)

検出状況から一辺 1.1m 以上の方形プランと推測される。

2ST013 (Fig. 37)

掘り方は、東西 1.9m、南北 1.7m の不定円形である。重機による検出段階で、墓壙内に長方形の細長い石が 5 本ほど埋められていたことを確認した。調査区の南側の斜面にそれらが崩落する可能性があったため、重機により石を撤去した。その際に、1 基の墓碑 (A) を移動し、さらに下げたところで墓碑 (B) をもう 1 基検出した。墓碑 (表 26、NO. 11) (B) は、表を上にして頂部を北に向けて埋められており、正面に「享和二年 釈妙榮之墓 戊十月廿日」と彫られていた。享和二年は西暦 1802 年。掘り方は深さ 1.2m 程で底面となるが、その中央に、東西 1.1m 以上、南北 0.8m、深さ 0.19m の長形状の土壙が掘られ、人骨が遺存していた。人骨の分析から、詳細な埋葬姿勢は不明であるが、上肢と下肢は概ね同じ場所から出土しており、長軸をそろえた状態であることから、坐葬で埋葬されたと推定されている。

2ST014 (Fig. 37)

掘り方は、長軸 1.5m、短軸 1.1m、深さ 1.37m の隅丸長方形である。埋土は淡赤灰色土で、底面近くで、人骨や杭のようなものが検出されたが、残りは良くない。

2ST015

調査区の西北端 O21 地区あたりで重機による遺構検出中に出土した土師質壺があり、火葬墓が存在したと考えられる。この壺は地表面浅くに埋められていたと考えられ、その後の遺構検出でも明確な掘り方は検出されなかった。甕内には火葬骨が納められていた。

2ST016

南の尾根の北西部に位置する墓。掘り方は東西 0.5m、南北 0.48m、深さ 0.77m の隅丸方形である。埋土は黄色土で部分的に黒色土であった。改葬したためか埋土中から釘以外何も出土していない。

2ST017

掘り方は東西長 0.8m、南北長 0.9m、深さ 0.52m の楕円形で、埋土は茶黄色土である。掘り方底面に東西長 0.5m、南北長 0.4m、深さ 0.1m の平面方形土坑を掘る。埋土中から金属製の釘が出土しており、木製棺の使用の可能性がある。底面からは土師質土器、陶磁器が出土した。肥前系磁器の蓋付き容器は骨壺と考えられるが、蓋は外された状況であり、身内部から骨は出土していない。また隣接して土師質土器壺いわゆる火消し壺が完形で出土しており、これにも火葬骨を収めていたと思われる。埋土中からこれに伴うと考えられる土師質の蓋も出土している。壺内部から骨は確認されていない。この 2 つに隣接して小皿と湯呑椀が出土している。これらの出土状況から、この墓は改葬を受けていると判断している。出土遺物から遺構の年代は明治以降と考えられる。

2ST018 (Fig. 37)

掘り方は、東西 1.73m、南北 1.45m、深さ 1.6m の不定円形である。埋土上位では横倒しに埋められた墓碑 (表 26、NO. 4) が出土した。墓碑の正面中央には「釋妙鑑靈位」、正面右には、「嘉永四年」、正面左には、「九月廿五日」と彫られている。嘉永四年は西暦 1851 年。掘り方中央に高さ 73.4cm の甕が据えられ、内部から人骨は出土したが、遺存状況は悪く、改葬されたものと推測される。甕内面底部中央から六文銭が出土している。

2ST019 (Fig. 37)

掘り方は、東西 1.17m、南北 1.12m、深さ 1.26m の円形である。中央には高さ 74.0cm の甕が据えられ、内部には人骨が遺存していたが、残りが悪く改葬されたものと推測される。人骨の分析では、椎骨・四肢骨の出土状況から頭位東、顔面の向きは西向きであった可能性が考えられ、埋葬姿勢は甕棺の埋置のされ方から坐葬であったと推定される。右寛骨付近より寛永通寶が出土しており、左前腕骨付近から玉

が1点、右前腕骨近位部付近から玉が多数出土している。

2ST020 (Fig. 37)

掘り方は、東西1.1m、南北1.2m、深さ1.53mの円形である。底面中央にはさらに径0.52m、深さ0.14mの円形土坑に高さ75.9cmの甕が据えられている。甕には0.74×0.68m、厚さ0.18mの花崗岩の蓋石が置かれていた。甕内部には人骨が遺存していたが、残存状況は良くない。坐葬と考えられる。

2ST021 (Fig. 38)

北側はST001によって切られている。東西0.86m、南北0.76m以上、深さ0.67mの円形で、底部に黒色土に混じって前頭骨の東側から銭貨が出土しており、その周辺から鈴や布らしき繊維が出土している。人骨の分析では頭蓋が墓壇の南側から出土しており、上下顎は、下顎がやや左側に動いているが概ね咬合状態であることがわかった。人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

2ST022

調査区際で検出した遺構で、2ST004の掘削中に甕棺を検出した。甕の口径は0.5m以上。安全上の問題から完掘していない。

2ST023 (Fig. 38)

掘り方は、東西1.32m、南北1.3m、深さ1.53mの円形である。底面で人骨がまとまって検出されたが、遺存状況はよくない。人骨の足指あたりで銭貨が出土している。

2ST024 (Fig. 38)

掘り方は、東西0.8m、南北1.1m、深さ1.05mの隅丸方形である。底面中央には厚さ0.02m程の円形状の黒色土が検出された。黒色土には、骨片と鉄釘が混じって出土し、人骨や棺桶が土壌化したものと推測される。

2ST025

尾根の平坦面からやや北側の斜面部にせり出して掘削されている。掘り方は、東西1.2m、南北1.2m、深さ0.74mの隅丸方形である。埋土は灰黄色土で、何も出土しておらず、改葬されたと考えられる。

2ST026 (Fig. 38)

掘り方は、東西1.0m、南北1.36m、深さ0.94mの楕円形で、中央に高さ92.4cmの甕を据えている。甕の上部はST007によって破壊されている。甕の上には0.42×0.5m、厚さ0.18mの蓋石が残されていたが、甕からややずれた状態で検出された。甕内は下層が灰色土、上層が淡赤色土で炭や人骨片が出土したが、明確に残された人骨はなく、改葬されたものと推測される。

2ST027

調査区際で検出した遺構で、安全上の問題から完掘していない。切り合う2ST011の埋土を除去すると、2ST027の埋土内に花崗岩の竿石が斜めに立っていた。

2ST028 (Fig. 38)

掘り方は、東西1.9m、南北1.4m、深さ2.05mの楕円形である。茶灰色土の埋土中には花崗岩の墓碑が2個出土した。底面中央には高さ79.6cmの甕が据えられていた。甕内で人骨を検出したが、残存部位が少ないため、改葬を受けたと考えられる。

2ST029 (Fig. 38)

掘り方は、東西1.7m、南北1.3m、深さ1.57mの楕円形である。検出面より1.2mほど掘り下げると、釘が出土した。釘が出土したレベルでは、北面に一部、棺材と思われる横方向の木材が残存していたため、棺材は木棺である。棺材は、縦0.33m、横0.45m程残存し、厚みは0.03～0.05mで、棺材裏面は炭化していた。木材の東端に金具と思われる金属製品が集中していた。土壌中央底面には人骨が遺存し

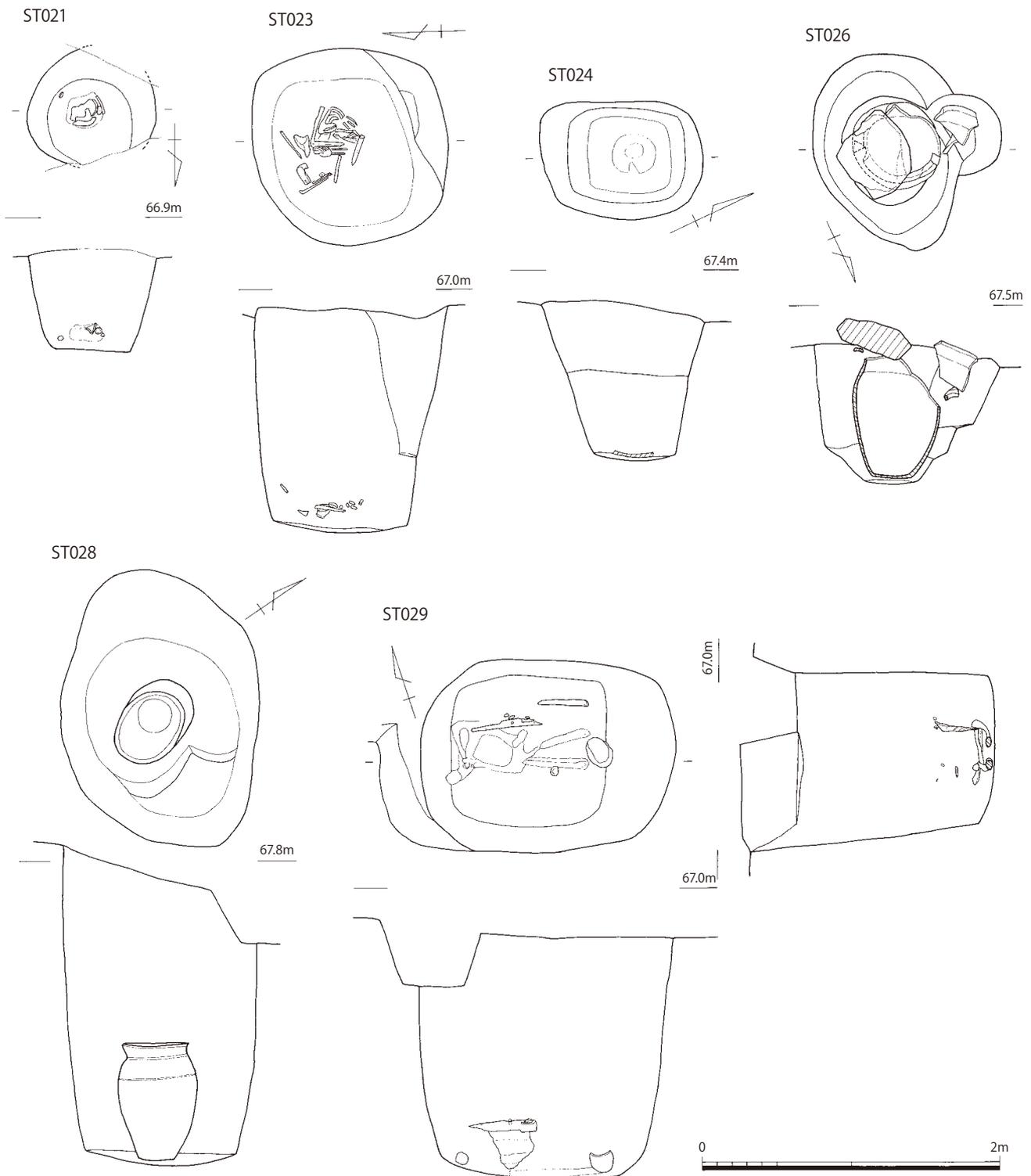


Fig. 38 浦山遺跡 2ST021・023・024・026・028・029 遺構実測図 (1/40)

ていた。人骨の分析から、頭位は東、埋葬姿勢は屈葬である。

2ST030 (Fig. 39)

地表面には部分的にしか残っていないが、方形状に礫が並べられている。その下にある掘り方は、東西 1.2～1.4m、南北 1.8m、深さ 1.7m の方形である。その列石内の埋土は黄灰色土、その外側は明赤色土であった。黄灰色土の底面には仰臥屈葬の人骨が遺存していた。人骨の分析から、頭位は北である。

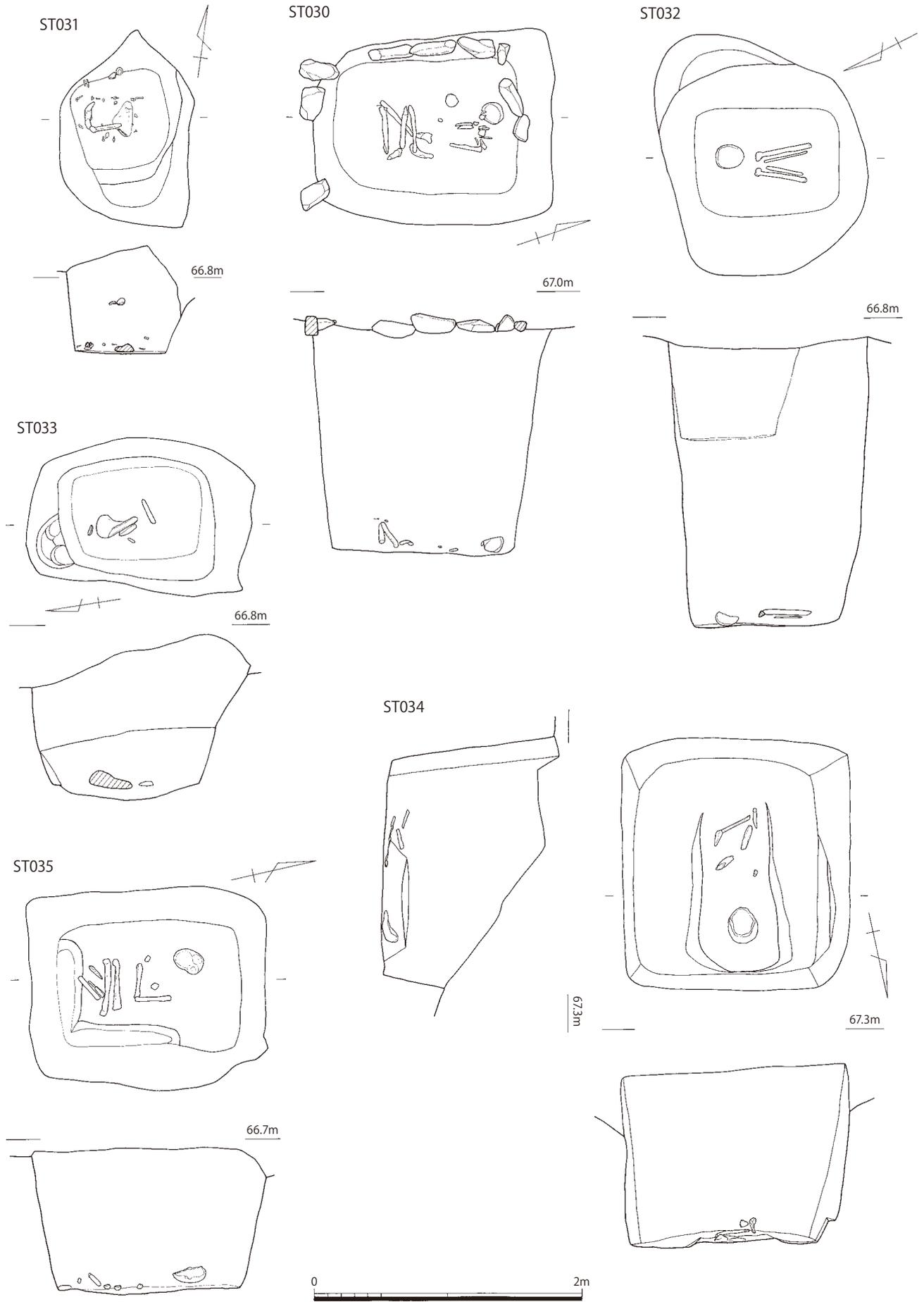


Fig. 39 浦山遺跡 2ST030・031・032・033・034・035 遺構実測図 (1/40)

2ST031 (Fig. 39)

掘り方は、東西 1.1m、南北 1.25m、深さ 0.8m のやや歪んだ方形で、ST045 を切って掘られている。検出面で花崗岩の竿石が埋まっていた。掘り方の南側には深さ 0.7m で中段がある。底面には人骨などが土壌化した黒色土が検出され、多量の鉄釘のほか骨片や陶器片、銭貨等が含まれていた。鉄釘の出土状況から木製の方形棺と推測される。

2ST032 (Fig. 39)

掘り方は、東西 1.9m、南北 1.46m、深さ 2.19m の不定円形で、東側は深さ 0.7m 程に中段がある。埋土は淡橙色土の下に黒色土・暗橙色土である。底面には人骨が遺存している。頭位は北。大腿骨などが中央部で検出されているが、人骨の数が極端に少ないため、改葬された後再埋葬されたものか。

2ST033 (Fig. 39)

掘り方は、東西 1.12m、南北 1.64m、深さ 1.1m の長方形で、底面近くで僅かに人骨が遺存していた。

2ST034 (Fig. 39)

掘り方は、東西 1.7m、南北 1.9m、深さ 1.38m の方形である。底面中央に人骨が僅かに遺存し、その両側の底面は人骨部分より 0.03m 前後掘り下げている。

2ST035 (Fig. 39)

掘り方は、東西 1.5m、南北 1.8m、深さ 1.08m の方形である。底面には人骨が遺存し、仰臥屈葬とみられる。

2ST036 (Fig. 40)

掘り方は、東西 1.5m、南北 1.65m、深さ 1.11m の隅丸方形で、底面には人骨が遺存していた。

2ST037 (Fig. 40)

掘り方は、東西 1.6m、南北 2.2m、深さ 1.25m の方形で、北側底面に頭位を北にした仰臥屈葬状態の人骨が良好に遺存していた。

2ST038 (Fig. 40)

掘り方は、東西 1.4m、南北 1.45m、深さ 1.36m の円形である。埋土からは墓碑が 3 個出土している。その 1 個が赤色長石の自然石墓碑（表 26、NO. 2）で、正面に「一得崇山」、左側面に「文政十二丑十月十六日」と彫られている。文政十二年は西暦 1829 年、干支は己丑。頂部が、かまぼこ型に整形された墓碑（表 26、NO. 1）の正面には「當菴中興春應心和尚禪師 妙應知觀信尼」、背面には「萬延二辛酉二月十三日 寿齡六十七才」とある。万延二年は西暦では 1861 年。干支は辛酉。花崗岩製。もう 1 個は花崗岩製の台座（表 26、NO. 3）である。台座は長方形をしており、その四面には 17 名の人名が刻まれている。短軸面の 1 つに「當村世話人 太田助七 太田伊右衛門 武藤弥助」とあるため、村民の結願によりこの台座に乗っていたものが製作されたと考えられる。前述のかまぼこ形の頂部をもつ墓碑とこの台座は石材も同じもので、出土状況からも同時に廃棄されていることがわかっているため、この 2 個が組み合わされていた可能性は高い。底面には人骨が遺存しており、人骨の分析によれば、2 体分の人骨が確認されている。人骨の西側では副葬品とみられる染付椀が出土している。

2ST039

調査区際で検出した遺構で、安全上の問題から完掘していない。検出時の平面形は隅丸方形で、東西長 1m 以上、南北長 1m を測る。

2ST040

調査区際で検出した遺構。埋土は黄赤色土で、墓壇内には墓碑が 3 個廃棄されていた。

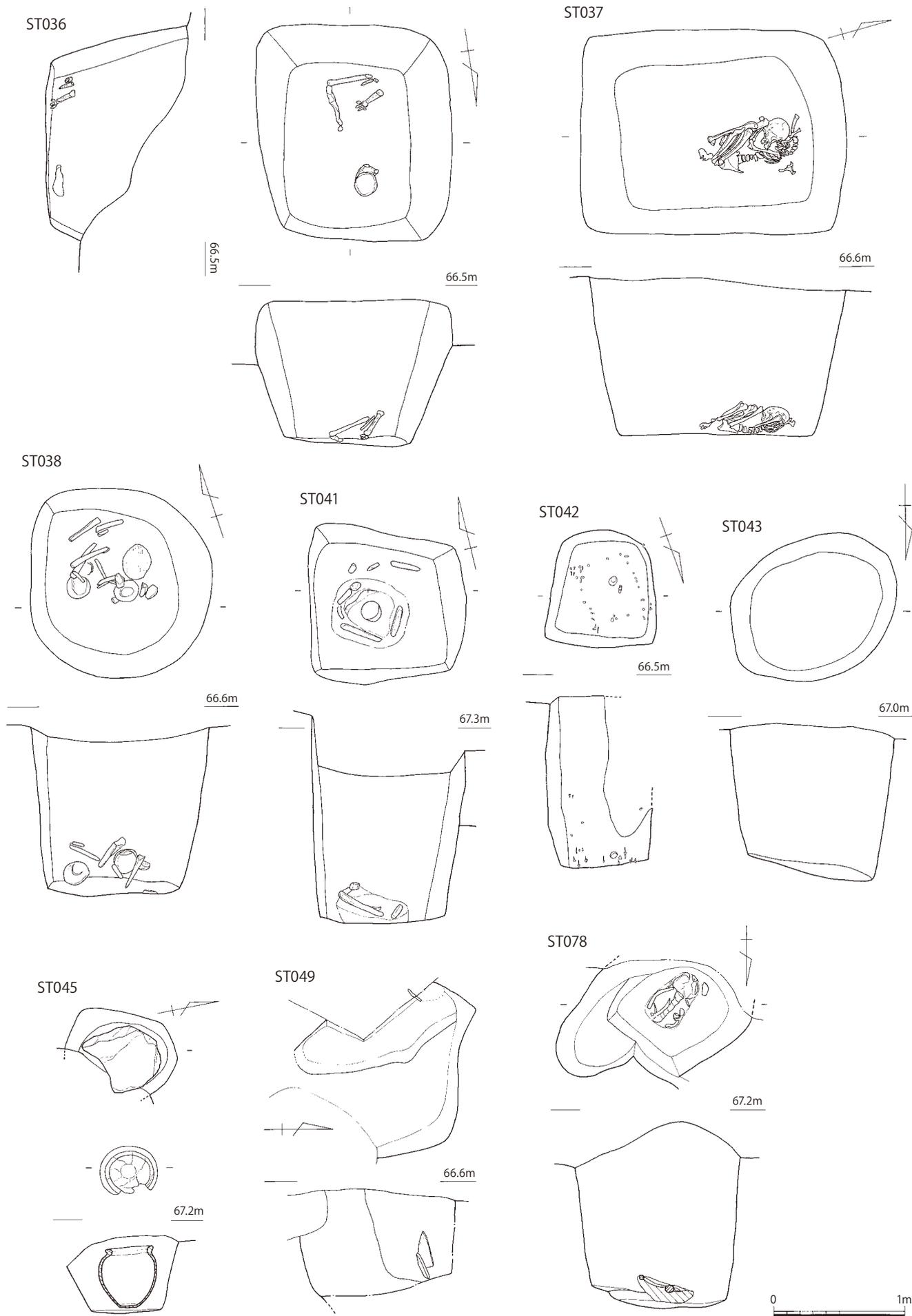


Fig. 40 浦山遺跡 2ST036・037・038・041・042・043・045・049・078 遺構実測図 (1/40)

2ST041 (Fig. 40)

掘り方は、東西 1.18m、南北 1.2m、深さ 1.61m の方形で、底面には僅かな人骨と人骨が土壌化したような黒色土があり、その中央で腕が出土した。

2ST042 (Fig. 40)

掘り方は、東西 0.7 ~ 0.82m、南北 0.9m、深さ 1.33m の方形である。埋土中位からは多量の鉄釘と、底面近くでは磁器皿が出土した。鉄釘の出土位置から、縦 0.45m、横 0.42m、深さ 0.51m の方形木棺が復元される。

2ST043 (Fig. 40)

掘り方は、東西 1.26m、南北 1.1m、深さ 1.15m の楕円形である。底面西側はやや掘りすぎている。人骨の分析から本個体は頭位を南西、顔面の向きは北東向きの膝関節を強屈した坐葬の可能性が考えられる。

2ST044

調査区際で検出した遺構。安全上の問題から完掘していない。隣接する 2ST049 の掘削の際、埋土断面で甕が埋められている状態を確認したため墓と考えられる。

2ST045 (Fig. 40)

東側を ST031 によって切られている。掘り方は、東西 0.7m 以上、南北 0.85m、深さ 0.64m の円形状をなす。掘り方内には蓋石が乗る高さ 50.1cm の甕が据えられていた。甕外では銭貨や鉄釘が出土した。

2ST046

調査区際で検出した遺構で、墓の可能性が高いが、安全上の問題から途中で掘削を止めた。

2ST047

調査区際で検出した遺構。調査区外に延びるため全形は不明だが、一辺が 0.8m の隅丸方形の平面形になる可能性がある。切り合い関係にある 2ST031 の断面から蓋石がある甕棺を確認した。安全上の問題から墓壇の掘削をせず、甕棺の破片を回収した。

2ST048 (Fig. 41)

掘り方は、南北 1.7m、東西 1.0m、深さ 0.17m の長楕円形で、2 個の土師器甕が口縁を合わせた状態で置かれていた。甕の半分は削平され、残存部分は土圧で割れていた。北側の甕の東側で供献されたと考えられる須恵器の坏が置かれていた。遺構の年代は須恵器の年代観から 8 世紀初頭に構築されたと考えられる。

2ST049 (Fig. 40)

調査区際で検出され、東側は ST011 に切られており、掘り方は、南北 1.3m 以上、東西 1.4m 以上、深さ 0.44m で、埋土からは蓋石のような石材が検出された。

2ST075

2ST020 の掘り方の南西上部で検出された隧道状の遺構で調査区外にのびる。2ST020 の墓壇からみると、墓壇検出レベルから 0.15m ほど下がった場所に、直径 0.3m ほどの穴を花崗岩の岩盤を削り貫いて掘っている。奥行が 0.4m を測り、奥には別の甕棺の存在を確認できた。埋土はパサパサした黒茶色土である。開口部は高さ 0.33m で、天井部はやや三角形を呈し、奥に向かって傾斜している。陶器甕の破片とミニチュ

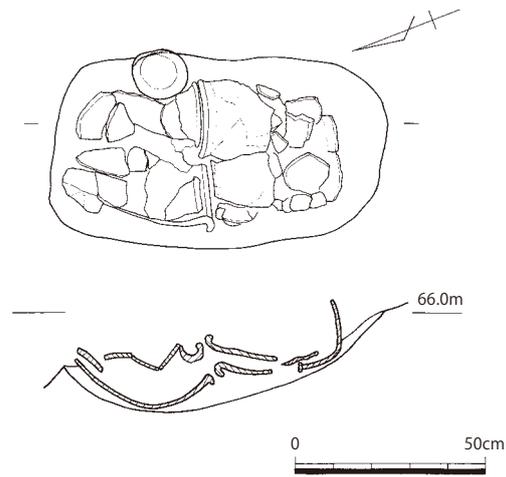


Fig. 41 浦山遺跡 2ST048 遺構実測図 (1/20)

ア製品と少量の人骨が出土したことから墓と考えられる。ミニチュア製品は穴の入り口付近に3点、奥で5点確認した。2ST020の墓壙に伴いミニチュア製品を収める棚的な機能の可能性も考えられる。

2ST076

調査区外の崖面で工事時に見つかった甕棺で蓋石を伴うことを確認した。

2ST078 (Fig. 40)

調査区際で検出され、上面はST008・040に切られ、ST044が切り込んで掘られており、南側は調査区外に続いている。検出範囲は1.0×1.4mの不定形をなし、深さは1.12mである。埋土は赤褐灰色土で、底面には人骨が遺存していたが、改葬されたものと考えられる。

○北尾根

2ST050 (Fig. 42)

掘り方は、東西1.05m、南北1.15m、深さ0.43mの方形で、底面から浮いた位置で、寛永通寶や土人形などの副葬品が出土した。その下層は締まりのない黄色土で、人骨は出土していない。

2ST051 (Fig. 42)

調査区東際で検出され、南東側半分ほどが調査区外へと続いている。掘り方は、1.16m×0.56m以上、深さ0.96mの方形状。埋土は黄茶色土で、底面近くに人骨が遺存し、頭蓋骨下付近でガラス製の数珠が出土した。

2ST052 (Fig. 42)

調査区南東際で検出され、南側半分ほどが調査区外へと続いている。掘り方は、東西0.45m以上、南北2.1m、深さ0.98mの長方形である。底面には人骨や毛髪が遺存し、棺材と考えられる飾金具が付いた板材が僅かに遺存し、木棺葬であったと推測される。人骨周囲では副葬品とみられる数珠や櫛が出土した。

2ST053 (Fig. 42)

掘り方は、大きさ1.02×0.84m、深さ0.54mの隅丸方形状で、埋土は黄茶色土で、底面中央には骨片が僅かに遺存していた。

2ST054 (Fig. 42)

掘り方は、東西1.1m、南北1.25m、深さ1.32mの円形である。埋土は黄灰色土で、底面に円形状に人骨がまとまって遺存していた。人骨の残存状況から桶棺であったと推測される。

2ST055 (Fig. 42)

掘り方は、一辺1.0m四方、深さ1.04mの方形で、底面に頭蓋骨が僅かに遺存し、土製人形と鉄釘が出土した。

2ST056 (Fig. 42)

調査区際で検出され、東側は調査区外へと続いている。掘り方は、東西0.83m以上、南北0.94m、深さ1.04mの隅丸方形である。橙色土の埋土からは墓碑が出土し、底面には人骨が遺存していた。人骨の周囲からは副葬品の数珠や銅銭のほか、鉄釘が多く出土した。底面に径0.4mの輪状の痕跡が確認されたため、桶棺に納められたと推測される。

2ST057 (Fig. 42)

掘り方は、東西1.38m、南北1.58m、深さ1.29mの隅丸方形である。底面には仰臥屈葬の人骨が遺存し、手骨付近で鉄製皿が出土した。

2ST058 (Fig. 42)

調査区際で検出され、半分ほど調査区外へと続いている。掘り方は、1.07×0.74m以上、深さ1.25m

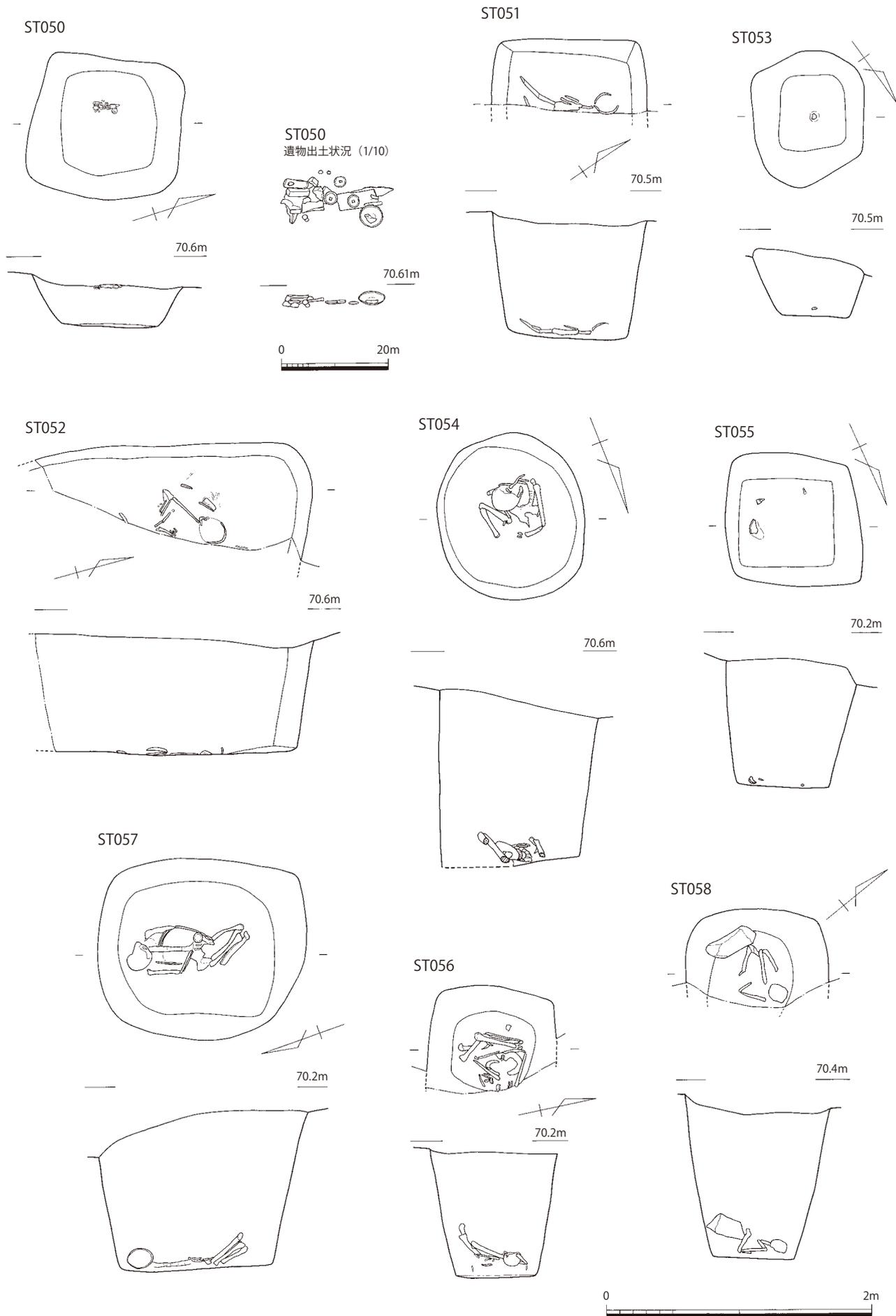


Fig. 42 浦山遺跡 2ST050・051・052・053・054・055・056・057・058 遺構実測図 (1/40)

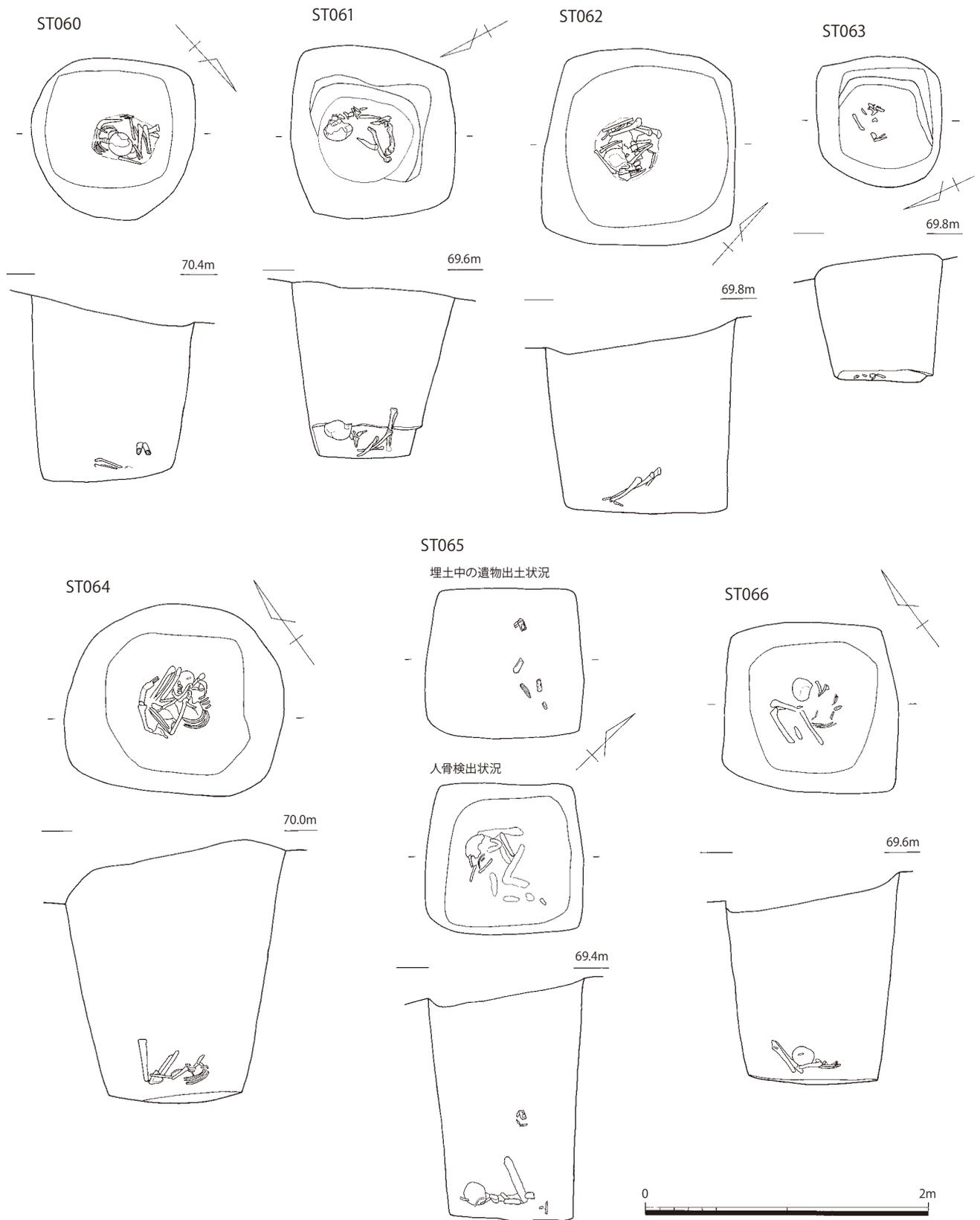


Fig. 43 浦山遺跡 2ST060・061・062・063・064・065・066 遺構実測図 (1/40)

の隅丸方形である。埋土は黄茶色土で底面に礫が1個あり、人骨が遺存していた。

2ST060 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ1.14m×1.15m、深さ1.31mの隅丸方形である。埋土は黄灰色土で、底面中央に方形にかたまって屈葬した人骨が遺存し、寛永通寶が出土した。人骨の残存状況から大きさ0.35×0.45m程の方形木棺に納められていたものと推測される。

2ST061 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ1.16m×1.22mの隅丸方形で、深さ1.16mで中段があり、そこから径0.8m、深さ0.2mの円形土壌が掘られ、その内部に人骨が遺存していた。

2ST062 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ1.36m×1.4m、深さ1.44mの隅丸方形である。埋土は黄茶色土で底面には人骨が円形にまとまって遺存していた。残存状況から木桶に埋葬されていたものと推測される。

2ST063 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ0.9×0.92m、深さ0.92mの隅丸方形で、埋土は黄茶色土で、底面に人骨が遺存するが、残存状況は良くない。

2ST064 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ1.34×1.52m、深さ1.87mの楕円形である。埋土は黄茶色土で、底面近くに円形にまとまって人骨が遺存していた。人骨の残存は良好で、桶棺に埋葬されていたものと推測される。

2ST065 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ1.08m×1.1m、深さ1.79mの方形である。埋土は黄茶色土で、底面には人骨が遺存していた。埋土中位で飾金具が付いた板材が出土したため、方形木棺に埋葬されていたと推測される。

2ST066 (Fig. 43)

掘り方は、大きさ1.2×1.22m、深さ1.54mの隅丸方形である。底面には人骨が遺存する。

2ST067 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ1.32m×1.4m、深さ1.45mの隅丸方形である。埋土は黄茶色土で底面には人骨が方形にまとまって遺存しており、方形木棺に埋葬されていたと推測される。

2ST068 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ1.38m×1.48m、深さ1.99mの方形である。中央に高さ74.4cmの甕を据えている。甕底には人骨が良好に遺存し、その上にやや扁平な礫がのっていた。鉄釘も出土していることから、もとは木蓋があり、礫はその重しとして置かれていたものと推測される。

2ST069 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ1.2m×1.16m、深さ1.77mの方形である。埋土は黄茶色土で、底面は僅かに楕円形に掘り窪められ、そこに人骨が遺存していた。

2ST070 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ1.2m×1.26mの方形で、深さ1.8mで中段があり、そこから径0.7m、深さ0.05mの円形土壌が掘られている。埋土は黄色土で、埋土中からは腐食した木質が検出された。木質は径0.48m、高さ0.35mの桶棺で、内部には人骨が良好に遺存していた。

2ST071 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ1.23m×1.24mの隅丸方形で、深さ1mで中段があり、そこから大きさ0.5×0.6m、深さ0.2mの隅丸方形の土壌が掘られ、屈葬された人骨が遺存していた。桶棺に埋葬されていたものと

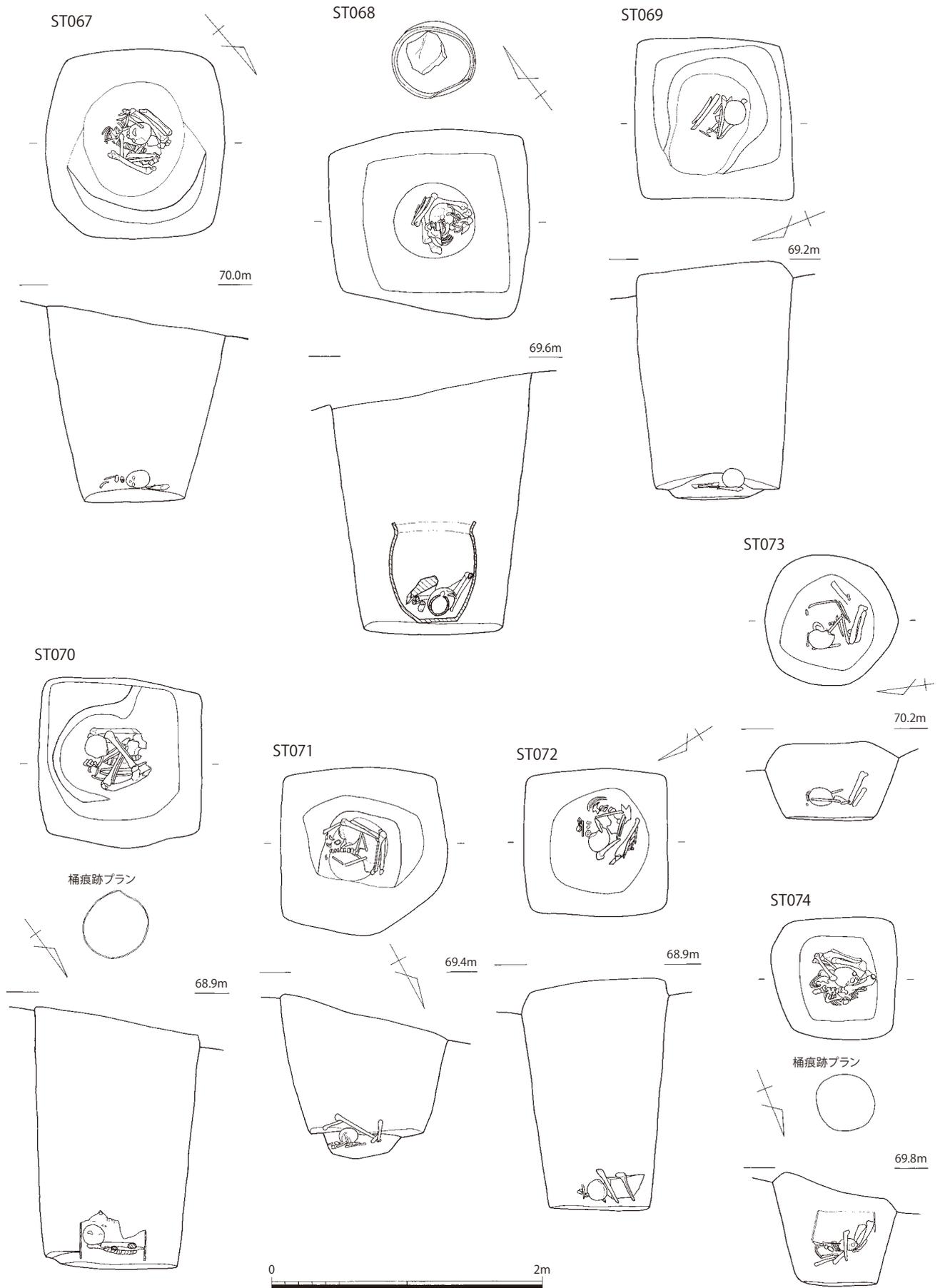


Fig. 44 浦山遺跡 2ST067・068・069・070・071・072・073・074 遺構実測図 (1/40)

推測される。

2ST072 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ 1.06m × 1.08m、深さ 1.7m の方形である。底面には花崗岩礫があり、人骨や毛髪が遺存していた。

2ST073 (Fig. 44)

掘り方は、径 0.98m、深さ 0.56m の円形である。底面に人骨が遺存し、煙管などが出土した。

2ST074 (Fig. 44)

掘り方は、大きさ 0.9m × 0.92m、深さ 0.8m の方形で、黄色土の埋土に径 0.42m の桶痕跡が検出され、内部には人骨が良好に遺存していた。

2ST077

調査区南東際で検出した方形と考えられる墓壇で、大部分が調査区外にある。一部を掘り下げたのみで未調査である。

○谷部

2SX080

北と南に挟まれた谷部で南北長 8m、東西長 15.5m を測る。遺構は検出されておらず、尾根から落ちたと考えられる遺物を含む暗茶色土が堆積していた。また、尾根から転がり落ちたと推測される墓碑を数点確認した。

(4) 出土遺物

○南尾根

墓

2ST001 出土遺物 (Fig. 45)

肥前系磁器

猪口 (1) 小片だが猪口と推測される。内外面に淡紺色釉で文様を描く。

国産磁器

椀 (2) 内外面とも淡水色釉を施す。復元高台径 3.8 cm。

2ST001 淡赤茶色土出土遺物 (Fig. 45)

国産陶器

灯明皿 (3) 胎土は明赤褐色を呈し、内外面とも回転ナデ調整。外面の一部にうっすらと黄褐色釉を施す。底径 4.4 cm。

2ST002 淡茶色土出土遺物 (Fig. 45)

金属製品

銭貨 (4) 「寛永通寶」。径 2.3 cm。

2ST002 出土遺物 (Fig. 45)

肥前系陶器

甕 (5) 口径 49.8cm、器高 80.2cm、底径 29.2cm。胎土は赤褐色で、内外面に小さな格子叩きを施した後、体部の上中下に 2 条づつ浅い沈線を巡らす。内面底部には格子叩きが残る。内外面には暗赤褐色の鉄釉を施し、頸部裾と口縁部は釉を拭き取っている。

2ST002 棺内出土遺物 (Fig. 45)

土師器

小皿 a (6、7) 6 は口径 6.3 cm、器高 1.2 cm。7 は口径 6.5 cm、器高 1.15 cm。底部切り離しは回転

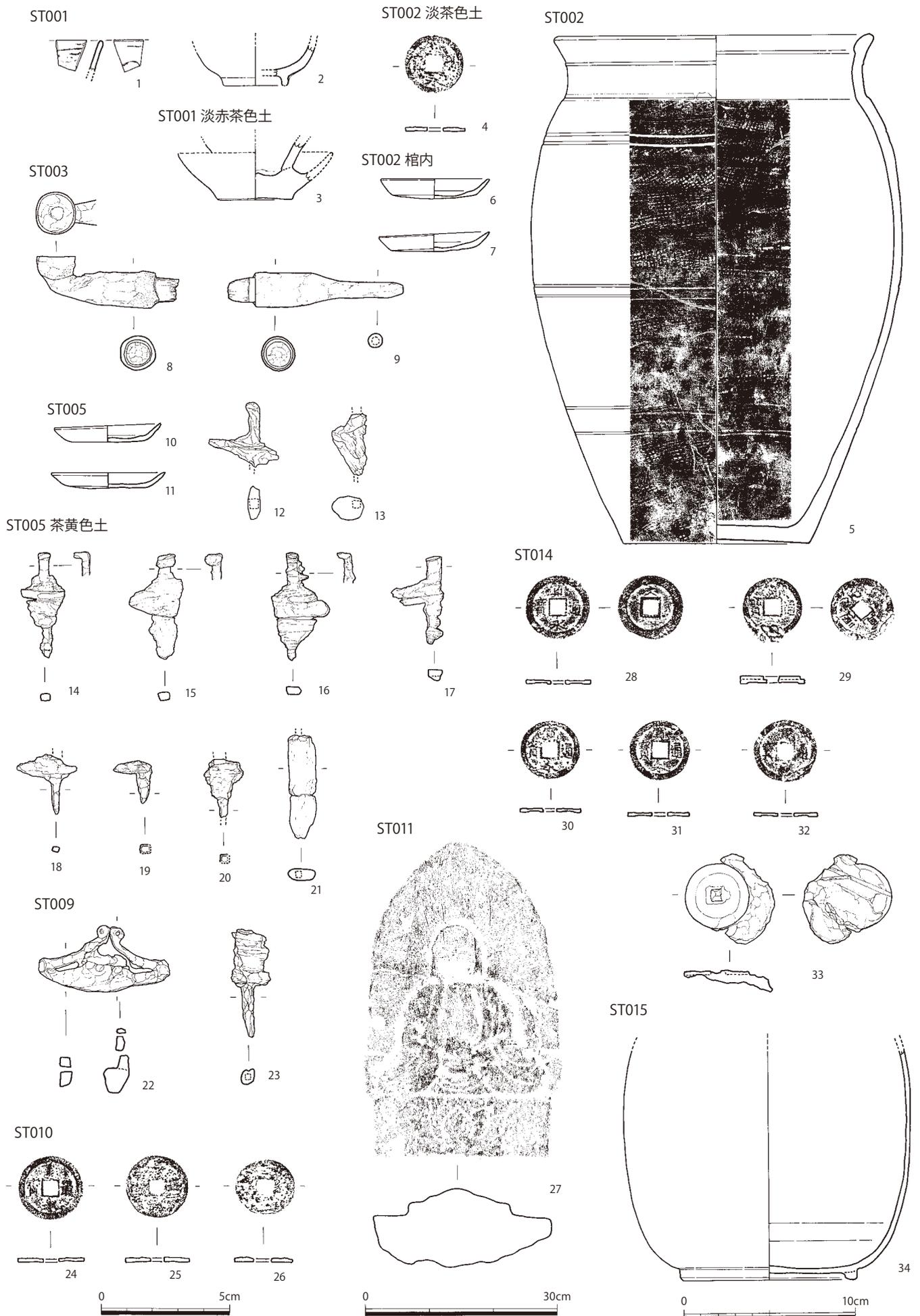


Fig. 45 浦山遺跡 2ST001・002・003・005・009・010・014・015 出土遺物実測図

(1/3、金属製品は1/2、5・27は1/8)

糸切り。色調は明茶褐色を呈する。

2ST003 出土遺物 (Fig. 45)

金属製品

煙管雁首 (8) 雁首は径 1.4 cm。火皿内部に黒色付着物が残り、竹製とみられる羅宇が残る。

煙管吸口 (9) 最大径 1.35 cm。竹製とみられる羅宇が残る。

2ST005 出土遺物 (Fig. 45)

土師器

小皿 a (10、11) 10 は口径 6.2 cm、器高 1.1 cm。11 は口径 6.6 cm、器高 0.95 cm。底部切り離しは回転糸切り。色調は明橙色を呈する。

金属製品

鉄釘 (12、13) 断面方形の和釘。12 はやや曲げた頭部が残る。横方向の木目が交差し、上部の木質の厚さは 1.6 cm。13 は横・縦方向の木目が交差。釘は木目に対し斜めに刺さる。

2ST005 茶黄色土出土遺物 (Fig. 45)

金属製品

鉄釘 (14～21) 断面方形の和釘で、断面の大きさは 0.4 × 0.3 cm、完形の長さ 4.1 cm 前後。釘に直交する横方向の木目の棺材が残る。14～17 は頂部を L 字形に曲げる。

2ST009 出土遺物 (Fig. 45)

金属製品

用途不明鉄製品 (22) 縦 2.6 cm、横 5.1 cm。

鉄釘 (23) 断面方形の和釘。長さ 4.2 cm。頂部を L 字形に曲げる。釘には上半部に横方向の木目、下半は縦方向の木目の棺材が残る、上部の棺材の厚さは 2 cm である。

2ST010 出土遺物 (Fig. 45)

金属製品

銭貨 (24～26) 24 は「寛永通寶」。径 2.5 cm。25 は「永」が確認できるので「寛永通寶」か。径 2.5 cm。26 は刻印文字不明。布が錆び付いている。径 2.3 cm。

2ST011 出土遺物 (Fig. 45)

石製品

石造地藏菩薩坐像 (27) 腹前で手を組み宝珠を持っている地藏菩薩で、蓮華座に座し舟形光背を持つ。高さ 49.5 cm、幅 28.3 cm、厚さ 15.0 cm。砂岩製。

2ST014 出土遺物 (Fig. 45)

金属製品

銭貨 (28～33) 28～32 は「寛永通寶」。径 2.3～2.5 cm。28 の裏面には「文」とある。29 は 2 枚が付着する。33 は刻印文字不明。2 枚接着しているか。

2ST015 出土遺物 (Fig. 45)

国産陶器

壺 (34) 骨壺として使用したもの。胎土は精製され、色調は明橙色を呈する。内外面とも回転ナデで、外面下半は回転ヘラケズリ。高台径 10.3 cm。

2ST017 出土遺物 (Fig. 46)

土師質土器

蓋 (1) 口径 12.1 cm、器高 2.55 cm。内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ。焼成良好で明橙色を呈

する。

国産磁器

皿 (2) 口径 11.2 cm、器高 2.3 cm、高台径 6.7 cm。内面は緑色釉で草花文様を描き、中央に壽を描く。

湯呑 (3) 口径 7.5 cm、器高 5.2 cm、高台径 3.4 cm。外面に梅の木を描く。

蓋 (4) 骨壺の蓋で、5 とセット。口径 13.0 cm、器高 3.5 cm。外面に鮮やかな紺色釉や緑色釉で草花を描く。受け部は釉を剥ぐ。

壺 (5) 骨壺の身で、4 とセット。口径 12.3 cm、器高 8.4 cm。外面に鮮やかな紺色釉や緑色釉で草花を描く。外面底部が釉を剥ぐ。

国産陶器

壺 (6) 骨壺として使用。短頸壺で、口径 11.2 cm、器高 16.1 cm、底径 10.0 cm。焼成は良好で、色調は淡黄橙色を呈する。内外面とも回転ナデ調整。

2ST017 明赤茶色土出土遺物 (Fig. 46)

金属製品

鉄釘 (7 ~ 14) 断面が丸い丸釘。完形の 7・8 の長さは 3.6 cm と 3.1 cm。

2ST018 出土遺物 (Fig. 46)

肥前系陶器

甕 (15) 口径 54.9 cm、器高 73.4 cm、底径 27.6 cm。内面は刷毛状工具によるヨコナデで、内面上部と下部に指頭圧痕があり、外面と内面底部には小さな格子叩きが残る。また、外面上部と中位に 3 条の浅い沈線を施す。内外面に暗茶褐色の鉄釉を施し、口縁端部は釉を拭き取っている。全体として薄い釉垂れがみられる。

金属製品

銭貨 (16、17) 16 は「寛永通寶」。17 は錆に覆われ 4 枚が接着する。

2ST019 出土遺物 (Fig. 47)

肥前系陶器

甕 (1) 口径 51.5 cm、器高 74.0 cm、底径 24.5 cm。胎土は茶褐色で、外面に僅かに平行叩きがみられ、内面底部には格子叩きが残る。頸部に沈線を 3 条施す。内外面に暗茶褐色の鉄釉を施す。内面は淡茶色の釉垂れがみられ、口縁端部には目跡のようなものがみられる。

金属製品

銭貨 (2、3) 2 は「寛永通寶」。径 2.3 cm。3 は刻印文字不明。6 枚が接着する。

小鉤 (4) 大きさ 1.5 × 1.65 cm、厚さ 0.05 cm。円孔を 2ヶ所穿つ。

鉄釘 (5、6) 断面円形の丸釘。

ガラス製品

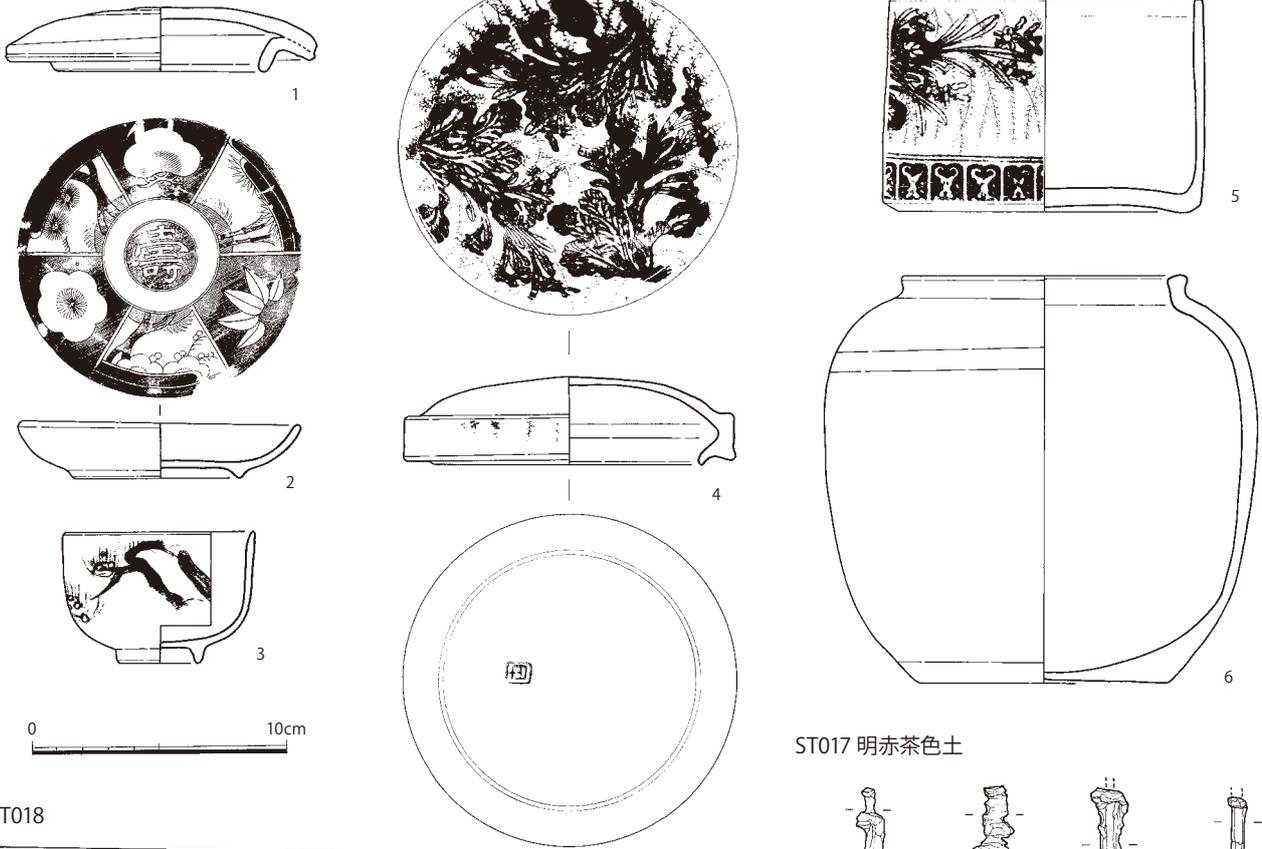
小玉 (7 ~ 50) 径 0.4 ~ 0.45 cm。中央に 0.1 cm の円孔がある。色調は白濁した透明色で、一部黄褐色を呈するものもある。7 は 3 個が接着。長さ 0.85 cm。8 は 2 個が接着。長さ 0.5 cm。9 ~ 50 は厚さ 0.2 ~ 0.3 cm。

2ST020 出土遺物 (Fig. 48)

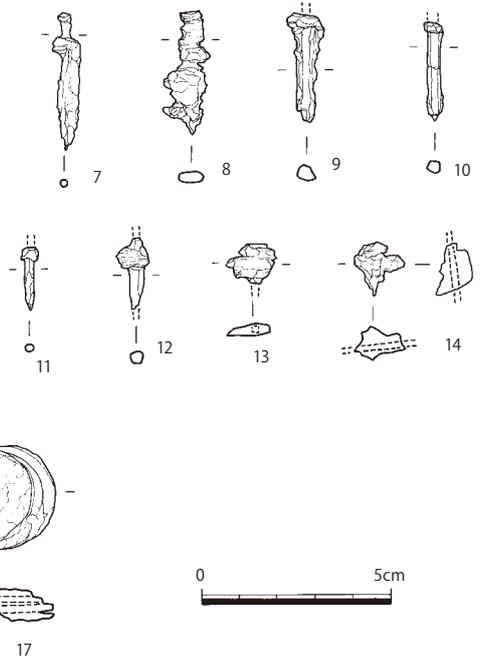
肥前系陶器

甕 (1) 口径 54.5 cm、器高 75.9 cm、底径 29.5 cm。胎土は赤褐色で内面はヨコナデ、外面は小さな格子叩きの後にヨコナデする。内面底部には格子叩きが残る。体部外面には 3ヶ所に、2条・2条・3条の浅い沈線を巡らす。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施し、口縁端部は釉を拭き取っている。外面上部に

ST017



ST017 明赤茶色土



ST018

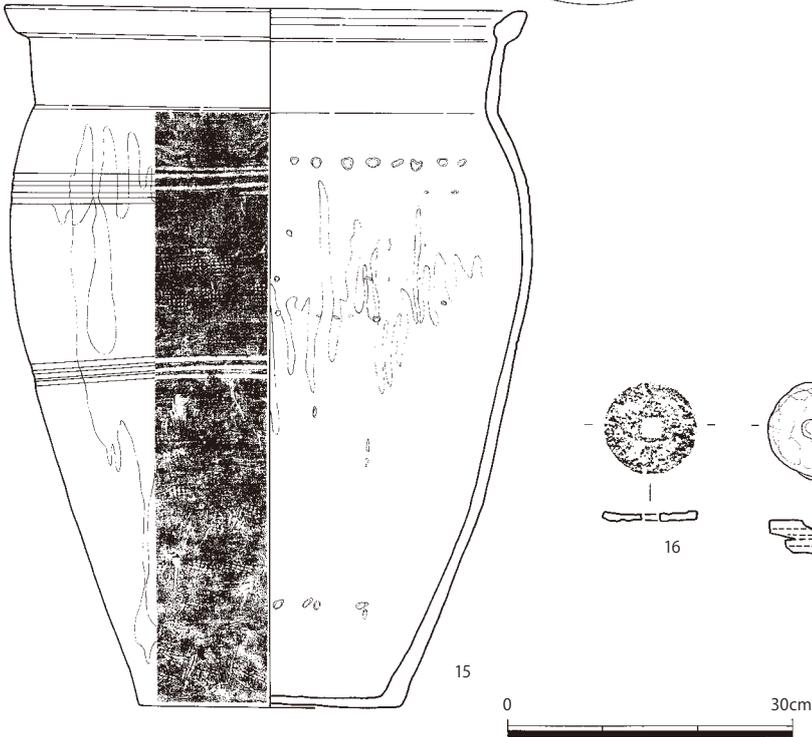


Fig. 46 浦山遺跡 2ST017・018 出土遺物実測図 (1/3、金属製品は1/2、15は1/8)

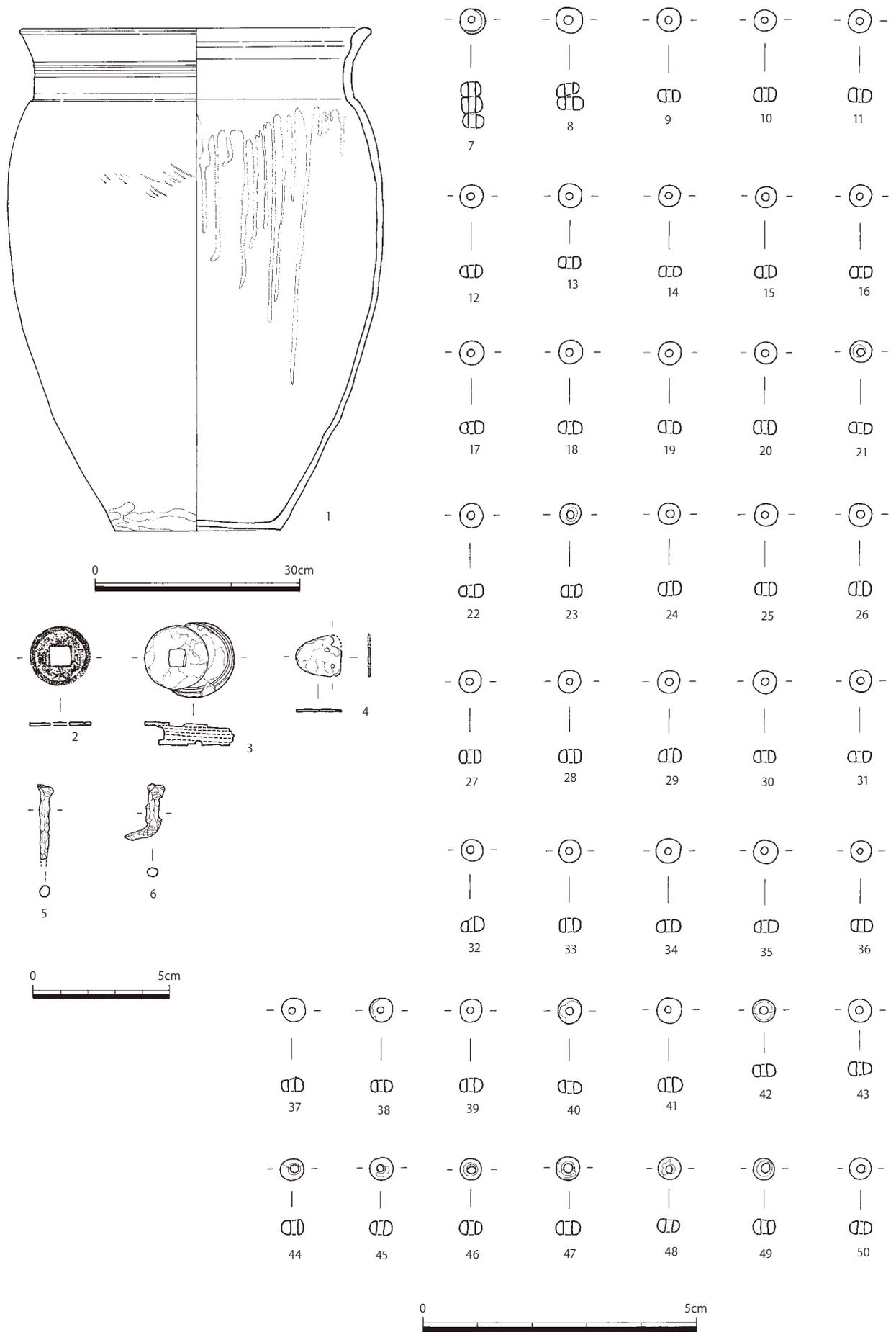


Fig. 47 浦山遺跡 2ST019 出土遺物実測図 (小玉は 1/1、金属製品は 1/2、1 は 1/8)

はやや釉垂れがみられる。

金属製品

鉄釘（2～4） 断面円形の丸釘。2は長さ2.5 cm。横方向の木目が残る。

2ST021 出土遺物 (Fig. 48)

金属製品

銭貨（5、6） 鉄銭。径は、5が2.5 cm、6が2.7 cm。全面錆に覆われる。

銅鈴（7） 縦4.1 cm、径3.1 cm。内部には球が付着する。

2ST023 出土遺物 (Fig. 48)

金属製品

銭貨（8、9） 8は「寛永通寶」。4枚接着か。9は鉄銭。錆に覆われ、3枚接着か。

2ST024 出土遺物 (Fig. 48)

金属製品

鉄釘（10～13） 断面円形の丸釘。横方向の木質が残る。10は先端部をL字形に曲げる。縦3.4 cm。

2ST026 出土遺物 (Fig. 48)

肥前系陶器

甕（14） 口径51.2 cm、器高92.4 cm、底径29.0 cm。胎土は赤橙色で、頸部に2条の浅い沈線を巡らす。内面底部には格子叩きが残る。内外面ともヨコナデの後暗茶褐色の鉄釉を施すが、全体的に薄茶色の釉垂れがみられる。また、口縁端部には目跡のような痕跡が残る。

金属製品

鉄釘（15） 断面円形の丸釘。横方向の木目が交差する。

2ST028 出土遺物 (Fig. 48)

肥前系陶器

甕（16） 口径53.8 cm、器高79.6 cm、底径28.0 cm。胎土は明茶色で、頸部に1条、体部には3ヶ所に2条・2条・3条の沈線を巡らす。内面には一部叩き痕が残る。内外面には暗茶褐色の鉄釉を施し、口縁端部と頸部裾は釉を拭き取り、体部上位はうっすらと釉垂れがみられる。内面底部には格子叩きが残る。

2ST028 茶灰色土出土遺物 (Fig. 48)

金属製品

銭貨（17） 「景德元寶」。11世紀初め初鑄の宋銭である。径2.5 cm。

2ST029 出土遺物 (Fig. 49)

土師器

小皿 a（1） 復元口径8.0 cm、器高1.1 cm。底部切り離しは回転糸切り。

金属製品

環状金具（2～5） 2・3は幅1.1～1.2 cm程の鉄製板材を曲げ、径1.5 cm前後の輪を作る。4・5は幅0.7 cm程の鉄製板材で輪を作り、鉄棒を通してある。

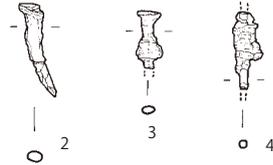
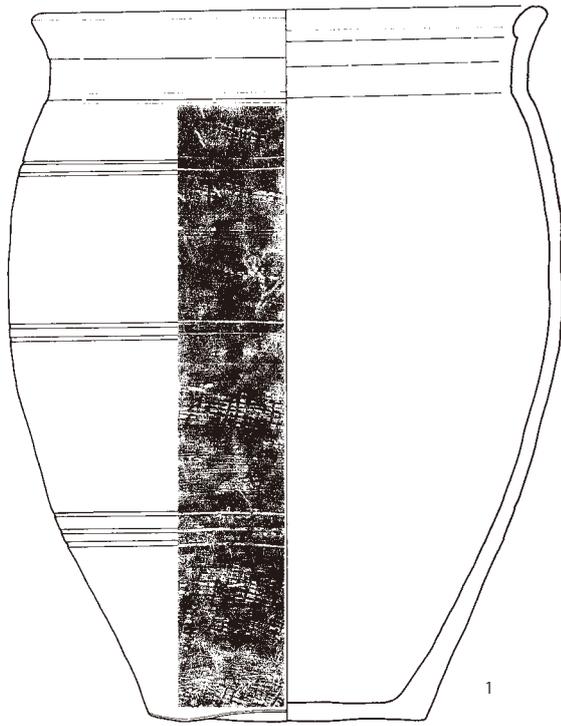
鉄釘（6、7） 断面方形の和釘。6は先端を曲げている。7はやや湾曲する。

留金具（8） 幅広の鉄板で、上部をL字形に曲げる。横方向の木目が残る。明灰色土より出土。

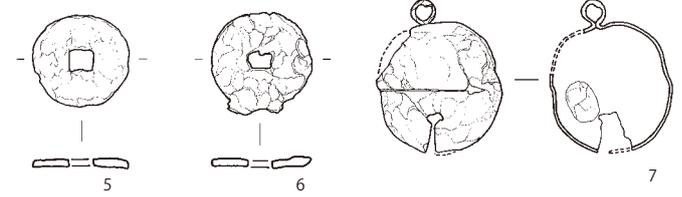
棒状鉄製品（9） 断面方形でやや湾曲する。現存長9.0 cm。

銅釘（10） 長さ1.3 cmで、先端をL字形に曲げる。

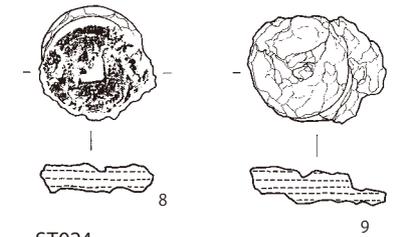
ST020



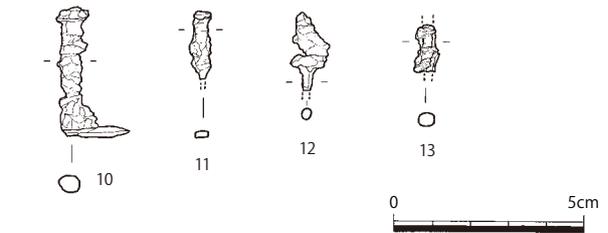
ST021



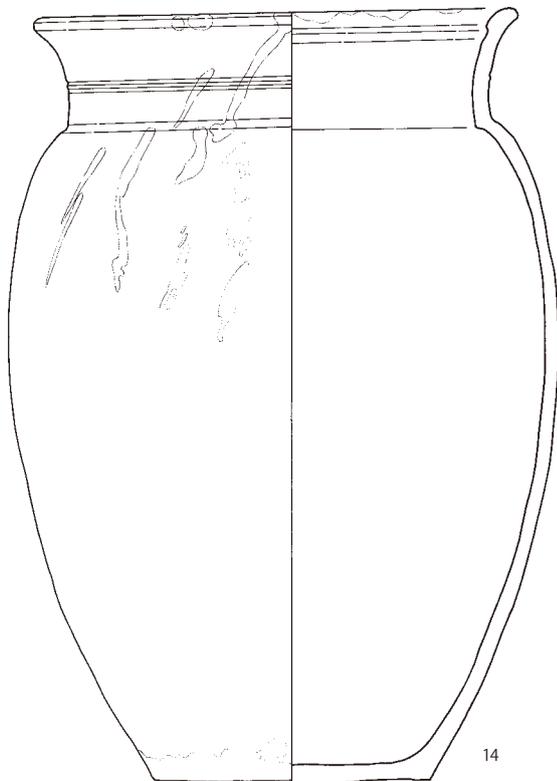
ST023



ST024



ST026



ST028

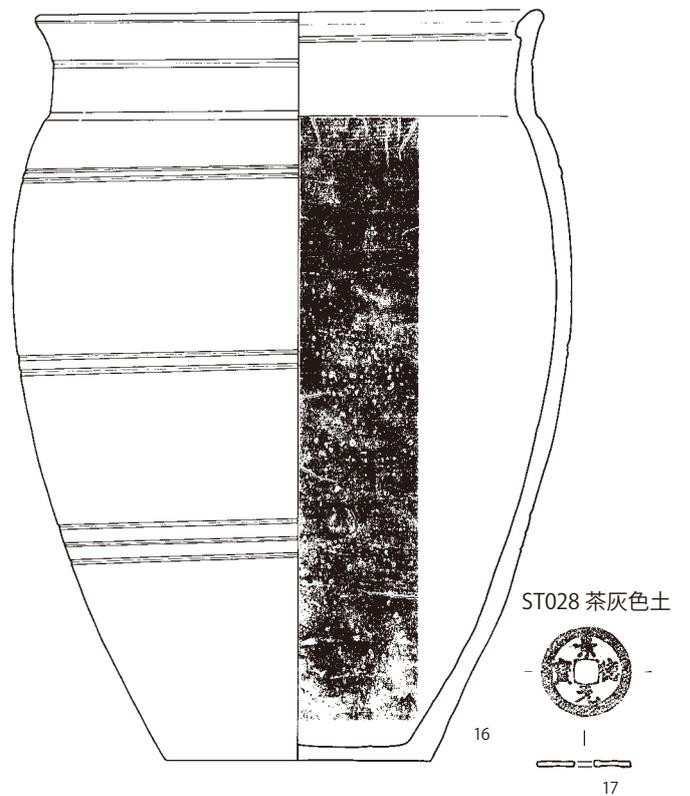
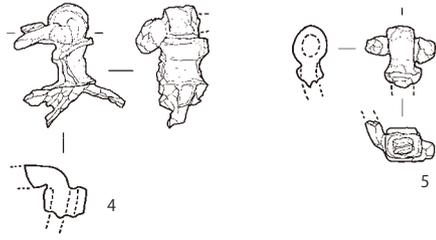
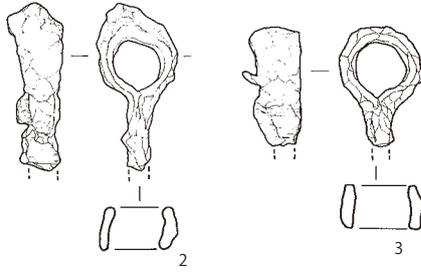
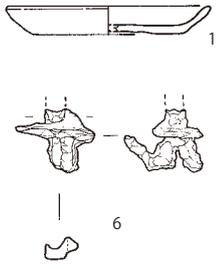
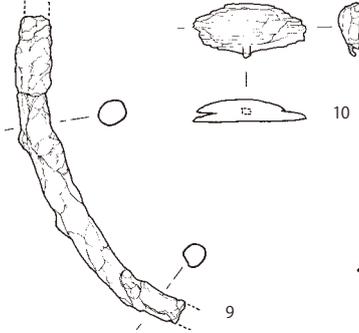
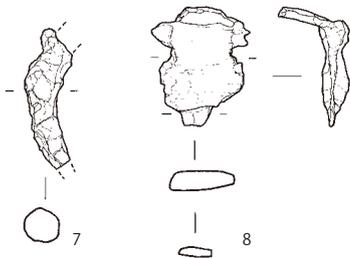


Fig. 48 浦山遺跡 2ST020・021・023・024・026・028 出土遺物実測図 (金属製品は1/2、甕は1/8)

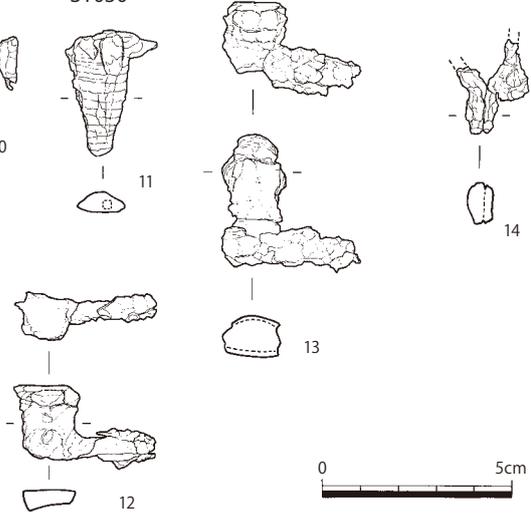
ST029



ST030 黄灰色土



ST030



ST031

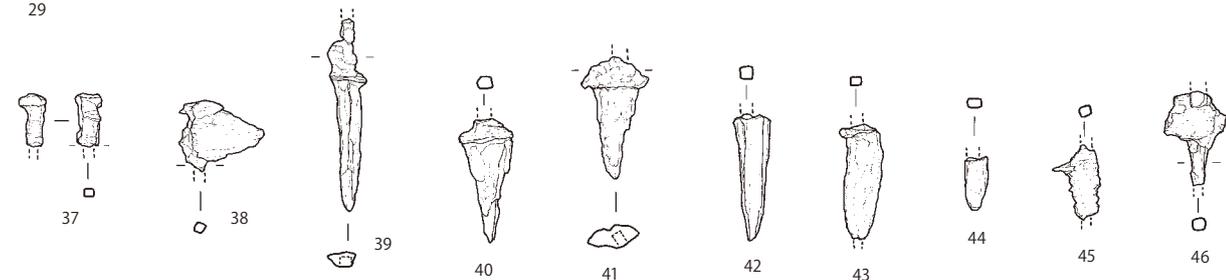
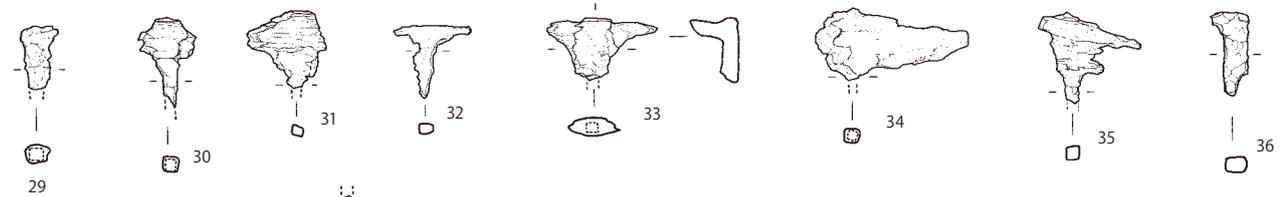
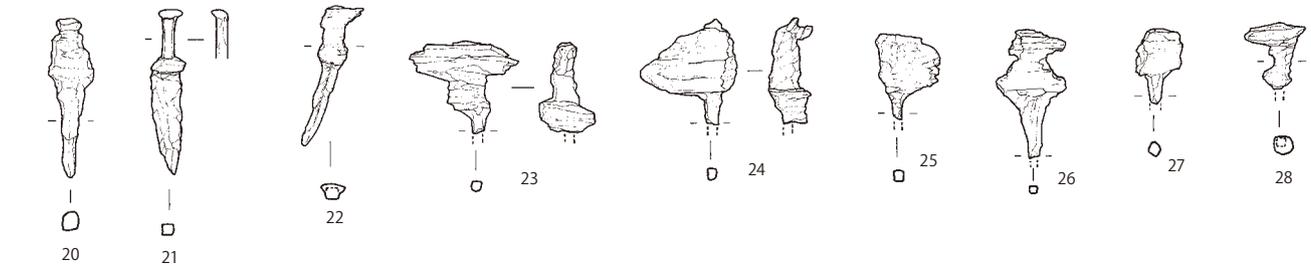
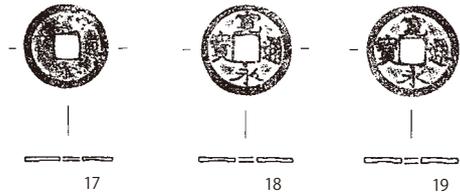
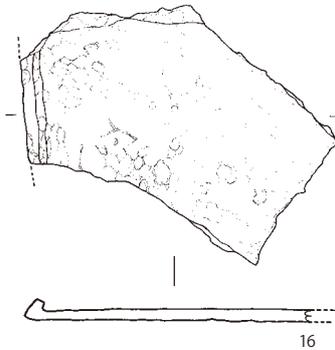
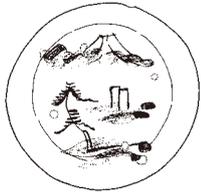


Fig. 49 浦山遺跡 2ST029・030・031 出土遺物実測図 (1/3、金属製品は1/2)

2ST030 出土遺物 (Fig. 49)

金属製品

鉄釘 (11) 断面方形の和釘とみられ、そのほとんどが木質に埋もれている。

2ST030 黄灰色土出土遺物 (Fig. 49)

金属製品

鉄製金具 (12、13) 鉄製板材をL字形に曲げ、木質が残る。

環状金具 (14) 環状の付け根部分である。

2ST031 出土遺物 (Fig. 49)

肥前系磁器

小皿 (15) 口径 7.6 cm、器高 1.7 cm。内面に淡紺色釉で松や富士山を描き、目跡も残る。

金属製品

鉄鋤 (16) 側面を折り曲げている。

銭貨 (17～19) 「寛永通寶」。径は、16 が 2.3 cm、17・18 は 2.5 cm。

鉄釘 (20～46) 断面方形の和釘。全体として釘に棺材の木質が錆び付き残る。20～38 は頂部が残る。完形の 20 は 4.2 cm、21 は 4.3 cm。20～27 は棺材が交差し、上部が横方向、下部は縦方向の木目で、釘に残る上部の棺材の厚さは、20 が 1.45 cm。21 が 1.3 cm。22 が 1.45 cm。23 が 1.5 cm。24 が 1.7 cm。25 が 1.6 cm。26 が 1.6 cm。27 が 1.2 cm。33 は頂部をL字形に曲げる。39～44 は下半の木目が縦目である。

2ST032 出土遺物 (Fig. 50)

ガラス製品

小玉 (1) 径 0.5 cm、厚さ 0.4 cm、中央に径 0.1 cmの円孔を作る。暗黄色を呈する。

2ST035 出土遺物 (Fig. 50)

金属製品

鉄釘 (2) 断面方形の和釘。現存長 2.6 cm。

2ST037 出土遺物 (Fig. 50)

金属製品

鉄釘 (3) 釘は和釘で、横方向の木目の棺材に3本の鉄釘が残る。中央の釘の長さは 2.9 cm。

2ST038 出土遺物 (Fig. 50)

肥前系磁器

椀 (4) 口径 10.8 cm、器高 5.4 cm、高台径 4.1 cmの完形。内外面に紺灰色釉で文様を描く。

2ST041 出土遺物 (Fig. 50)

国産陶器

椀 (5) 口径 11.2 cm、器高 5.9 cm。内外面とも淡灰色釉に乳白色釉をかける。

2ST042 出土遺物 (Fig. 51)

国産磁器

小坏 (1) 口径 6.7 cm、器高 2.9 cm。内外面に黄橙色釉や淡黄褐色釉を施釉する。

金属製品

銭貨 (2) 数枚接着しているが、錆に覆われ詳細不明。

鉄釘 (3～42) 断面方形の和釘。基本的に横方向の棺材の木質が付着する。3～19 は完形で、3～16 は棺材が交差し、上部が横方向、下部は縦方向の木目で、釘に残る上部の棺材の厚さは、3 が 1.25 cm。

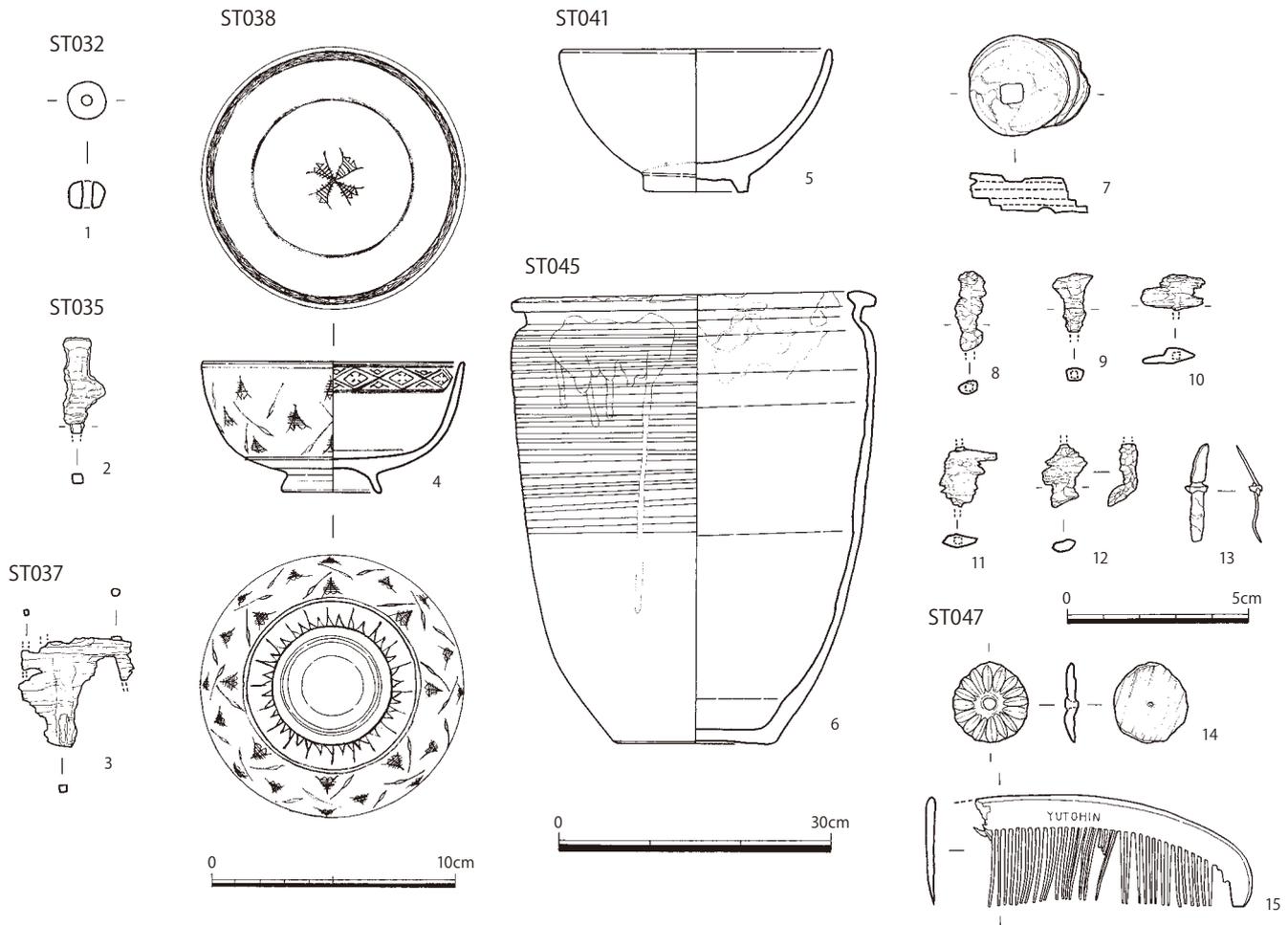


Fig. 50 浦山遺跡 2ST032・035・037・038・041・045・047 出土遺物実測図

(1/3、金属製品・15は1/2、6は1/8)

4が1.3cm。5が1.2cm。6が1.6cm。7が1.55cm。8が1.0cm。9が1.4cm。10が1.15cm。11が1.45cm。12が1.1cm。13が1.4cm。14が1.45cm。15が1.65cm。16が1.5cm。20～26は棺材が交差し、上部が横方向、下部は縦方向の木目で、釘に残る上部の棺材の厚さは、20が1.2cm。21が1.6cm。22が1.7cm。23が1.0cm。24が1.4cm。25が1.35cm。26が1.2cm。

2ST045 出土遺物 (Fig. 50)

肥前系陶器

甕 (6) 口径40.1cm、器高50.1cm、底径18.0cm。内外面に黄褐色釉を施し、その後外面のみ乳白色釉を均等に4ヶ所施す。露胎部分は鈍い赤褐色を呈する。

金属製品

銭貨 (7) 5枚が接着する。刻印文字は不明。

鉄釘 (8～12) 断面円形の洋釘。横目の木質が残る。

銅製金具 (13) 薄い板材を途中で接合させる。小片で全形は不明。

2ST047 出土遺物 (Fig. 50)

金属製品

鋌 (14) 大きさは2.1×2.2cm、厚さ0.3cm。表面は菊型で、背面は木質が付着し、中央に釘がある。

その他

櫛 (15) 1/3ほど欠損する。現存横7.5cm、縦3.1cm、厚さ0.25cm。片面にアルファベットで



Fig. 51 浦山遺跡 2ST042 出土遺物実測図 (1/3、金属製品は 1/2)

「YUTOHIN」と細く彫られているが、一部消えかかり読みづらい。色調は黒色を呈する。樹脂製か。

2ST048 出土遺物 (Fig. 52)

須恵器

坏 c (1) 口径 15.5 cm、器高 4.2 cm、高台径 11.5 cm。焼成良好で、色調は淡灰色を呈する。

土師器

甕 (2, 3) 2点とも調査時点では完形であったが、細かく碎けていたため、2点と完全に接合復元

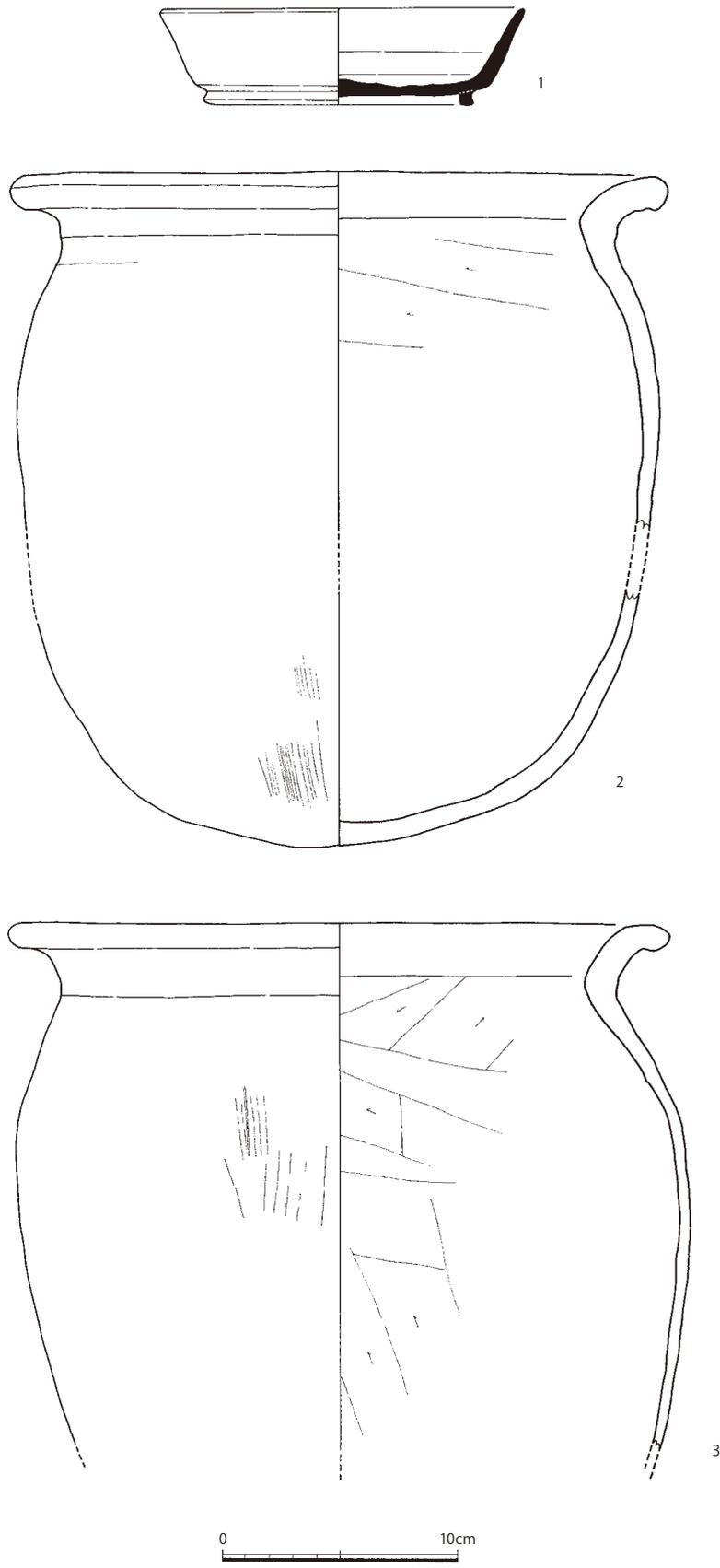
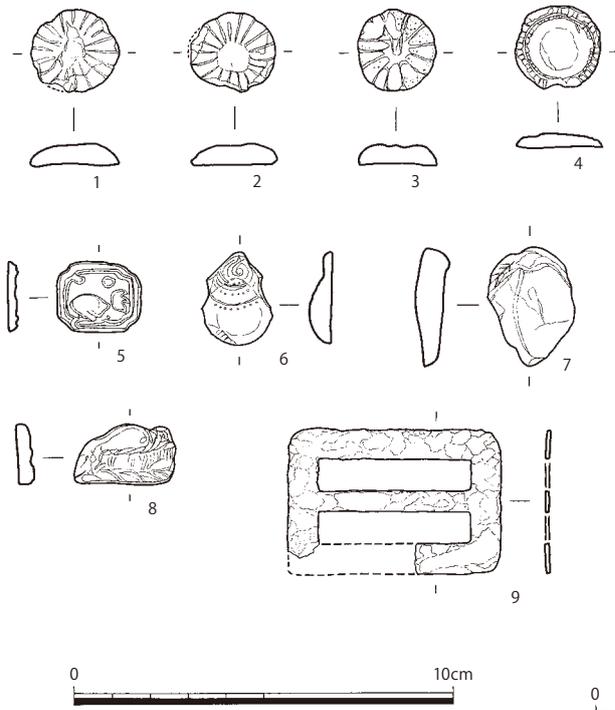


Fig. 52 浦山遺跡 2ST048 出土遺物実測図 (1/3)

ST075



ST076

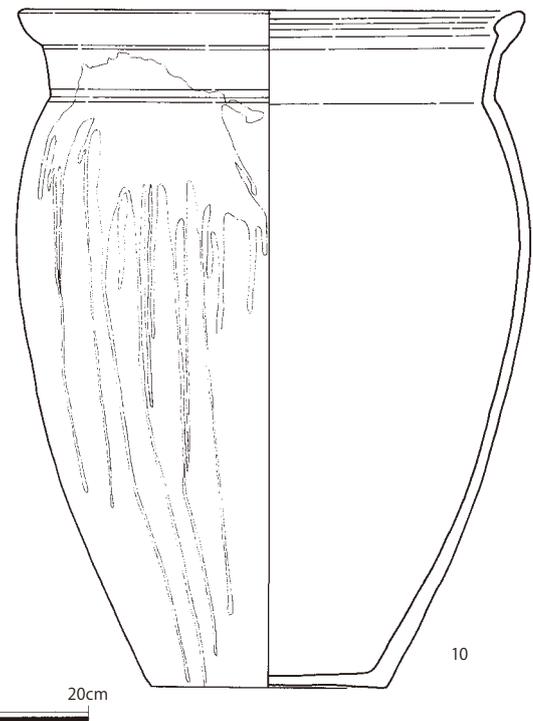


Fig. 53 浦山遺跡 2ST075・076 出土遺物実測図 (1/2、10は1/8)

できなかつた。復元口径は、2は28.0 cm、3は28.2 cm。内外面とも摩滅が目立つが、内面がヘラケズリ、外面はタテハケが僅かに残る。

2ST075 出土遺物 (Fig. 53)

土製品

おはじき (1～8) 型押しで花文などを作る。色調は茶褐色を呈する。1～3は径2.0～2.3 cm、厚さ0.6 cm。4は径2.2 cm、厚さ0.4 cm。5は2.3×1.9 cm、厚さ0.25 cm。文様は魚か。6は大きさ2.5×1.8 cm、厚さ0.6 cm。7は大きさ3.1×2.3 cm、厚さ0.8 cm。8は大きさ1.6×2.55 cm、厚さ0.4 cm。

金属製品

銅製金具 (9) 大きさ3.85 cm×5.6 cm、厚さ0.1 cmの銅板で、内側に2ヶ所長方形の穴をあける。

2ST076 出土遺物 (Fig. 53)

肥前系陶器

甕 (10) 口径53.6 cm、器高71.8 cm、底径24.8 cm。胎土は黄褐色で、内外面ともヨコナデで、暗茶褐色釉を施す。外面には乳白色釉を流し掛けし、うっすらと明茶色釉の釉垂れもみられる。

○北尾根

2ST050 出土遺物 (Fig. 54)

国産磁器

紅皿 (1) 口径4.5 cm、器高1.6 cm。胎土・釉とも色調は乳白色である。

国産磁器

人形 (2) 仙人のような人形で、高さ5.6 cm。顔面のみ茶色に塗られる。人形下半には斜め方向の穿孔を設ける。

土製品

人形 (3～5) 3は一部欠損する。型押しで作られ、表面には黒色と白銀色で着色されている。4は

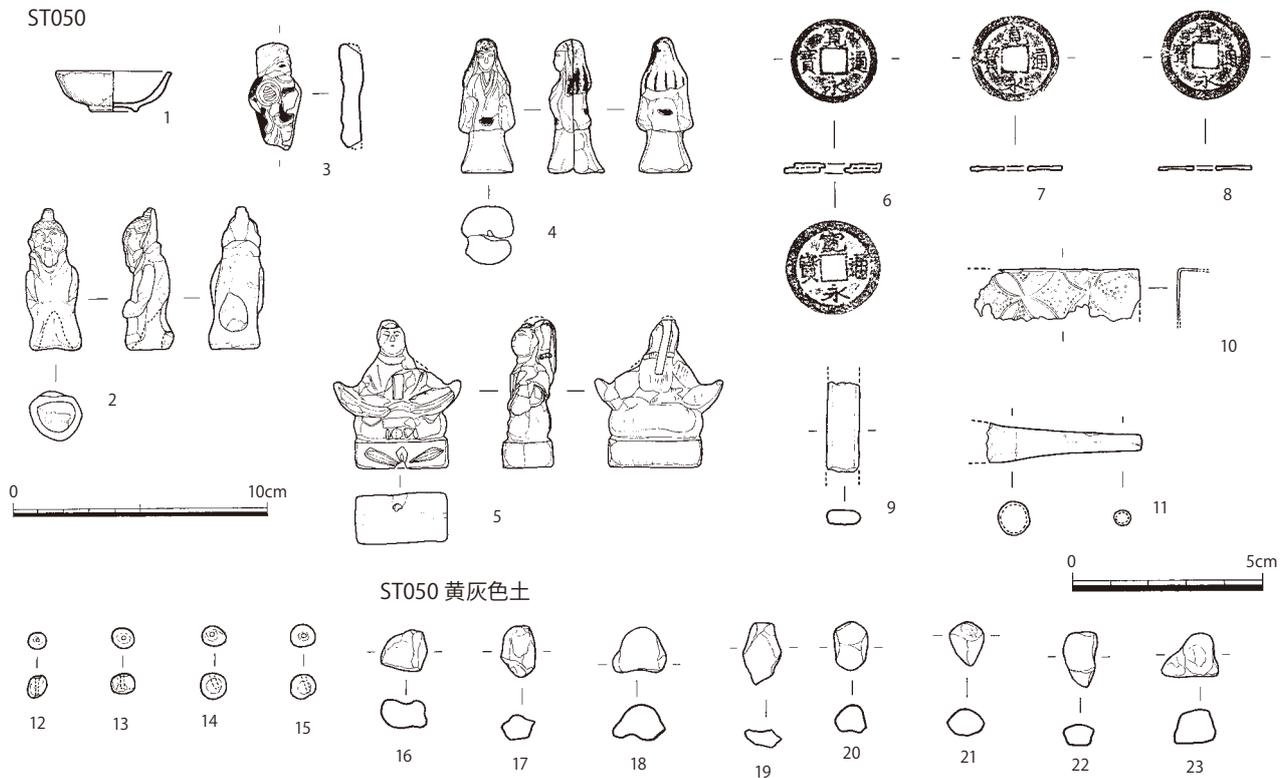


Fig. 54 浦山遺跡 2ST050 出土遺物実測図 (1/3、金属製品は1/2)

女官のような人形で、髪は黒色で、それ以外は白銀色に塗られる。正面・背面別々に型押しして作られ、接合している。5は雛人形の男雛のような形状の型押しで作られる。高さ5.85 cm、幅5.0 cm、厚さ1.7 cm。服部分は黒色でそれ以外にはうっすら白銀色に塗られている。内部は空洞である。

金属製品

銭貨 (6～8) 「寛永通寶」。径は2.2～2.4 cm。6は2枚が接着する。

棒状金属製品 (9) 棒状の小片だが、錆は全くなく銀色を呈する。

銅製隅飾金具 (10) 薄い銅板をL字形に折り曲げている。表面には魚々子で花文を作り出している。

煙管吸口 (11) 一部欠損する。

土製品

小玉 (12～15) 径0.7～1.0 cm。中央に幅0.2 cm程の穴を設けている。12は貫通しているが、その他は貫通していない。色調は淡黄灰色を呈する。

2ST050 黄灰色土出土遺物 (Fig. 54)

土製品

手ひねり土製品 (16～23) 手づくねで作られたもので、形は不成形で、大きさは1～2 cm程である。色調は灰白色を呈する。

2ST051 出土遺物 (Fig. 55)

金属製品

銭貨 (1、2) 「寛永通寶」。径2.4 cm。

ガラス製品

小玉 (3～95) 径0.4～0.55 cm、厚さ0.3～0.4 cm。中央に0.1 cmの円孔を作る。3～12はやや黄色味のある透明色、13・14は黒灰色と白色に緑色、15～95は透明で淡い水色を呈する。3は断面台

形状をなしているため他よりやや厚く厚さ 0.6 cm。

2ST052 出土遺物 (Fig. 56)

金属製品

銅製隅飾留金具 (1～6) 銅製で棺の隅飾と推測される。薄い板材の表面は魚々子が部分的に確認できるが、錆や劣化により文様は不明瞭である。金具の幅は 1.6 cm。金具は材に合わせ折り曲げている。1・4～6 は、棺の板材に留める穴が 2ヶ所あり、4 と 6 には釘が残る。また、4～6 の表面には一部紙が付着する。3 は 2 枚の板材を留金具で接合させる。板材は腐食するが、表面は黒色に塗られているように見える。

ガラス製品

小玉 (7～12) 大きさは 7 がやや大きく径 0.7 cm、高さ 0.5 cm。12 はやや小さく径 0.35 cm、高さ 0.35 cm。それ以外は径約 0.5 cm、高さ 0.4 cm である。中央に 0.13 cm 前後の円孔を穿つ。色調は、7 が無色透明、8 が青緑色、9 は黄灰色、10～12 は半透明の白色を呈する。

その他

櫛 (13) 横幅 10.5 cm、縦幅 4.5～5.7 cm、厚さ 0.3 cm。べつ甲細工とみられ、色調は黄茶色で、一部光沢が残る。

筭 (14) 両端を欠損し、現存長 12.9 cm、幅 1.05～1.2 cm、厚さ 0.3 cm。べつ甲細工とみられ、全体的に劣化が目立つが、色調は黄茶色を呈する。

2ST054 出土遺物 (Fig. 56)

金属製品

鉄釘 (15) 断面方形の和釘。L 字形に曲げ、下半は木質からわずかに飛び出している。横方向の木目残り、木質の厚さは 1.6 cm。

2ST055 出土遺物 (Fig. 56)

土師器

小皿 a (16) 口径 8.0 cm、器高 1.3 cm。底部切り離しは回転糸切りである。

土製品

人形 (17) 型押しで僧のような人形を作る。高さ 4.3 cm。全体的に暗褐色に塗られている。底面には円孔が穿たれている。

金属製品

銭貨 (18) 4 枚程接着する。布もしくは紙に覆われ、刻印文字は不明である。

鉄釘 (19) 断面方形の和釘で、上部を L 字形に曲げている。全体的に木質が付着している。

2ST056 出土遺物 (Fig. 57)

金属製品

鉄釘 (1～7) 断面方形の和釘で、棺材の木質が錆び付いて残る。全て頂部が遺存する。1 は完形で長さ 4.1 cm。2・3 は図上では木目が斜交するが釘が斜めに打ち込まれた結果だろう。

銭貨 (8～10) 付着物が覆い、刻印は不明。径 2.5～2.6 cm。

石製品

数珠玉 (11～19) 半透明の玉で、径 0.75～1.1 cm、厚さは 0.75～0.85 cm。中央に円孔を穿つ。11 のみ孔が 2ヶ所穿たれている。

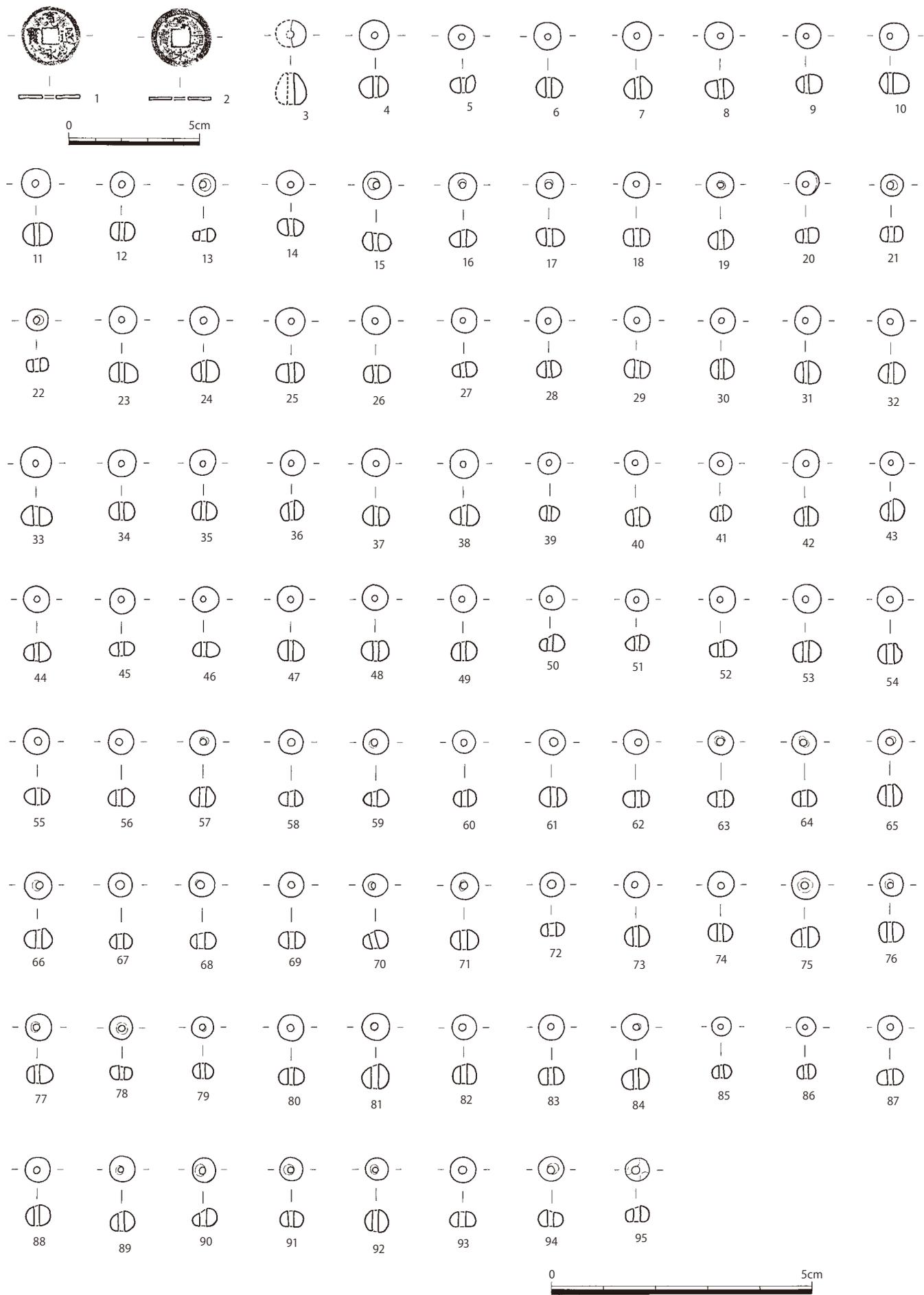
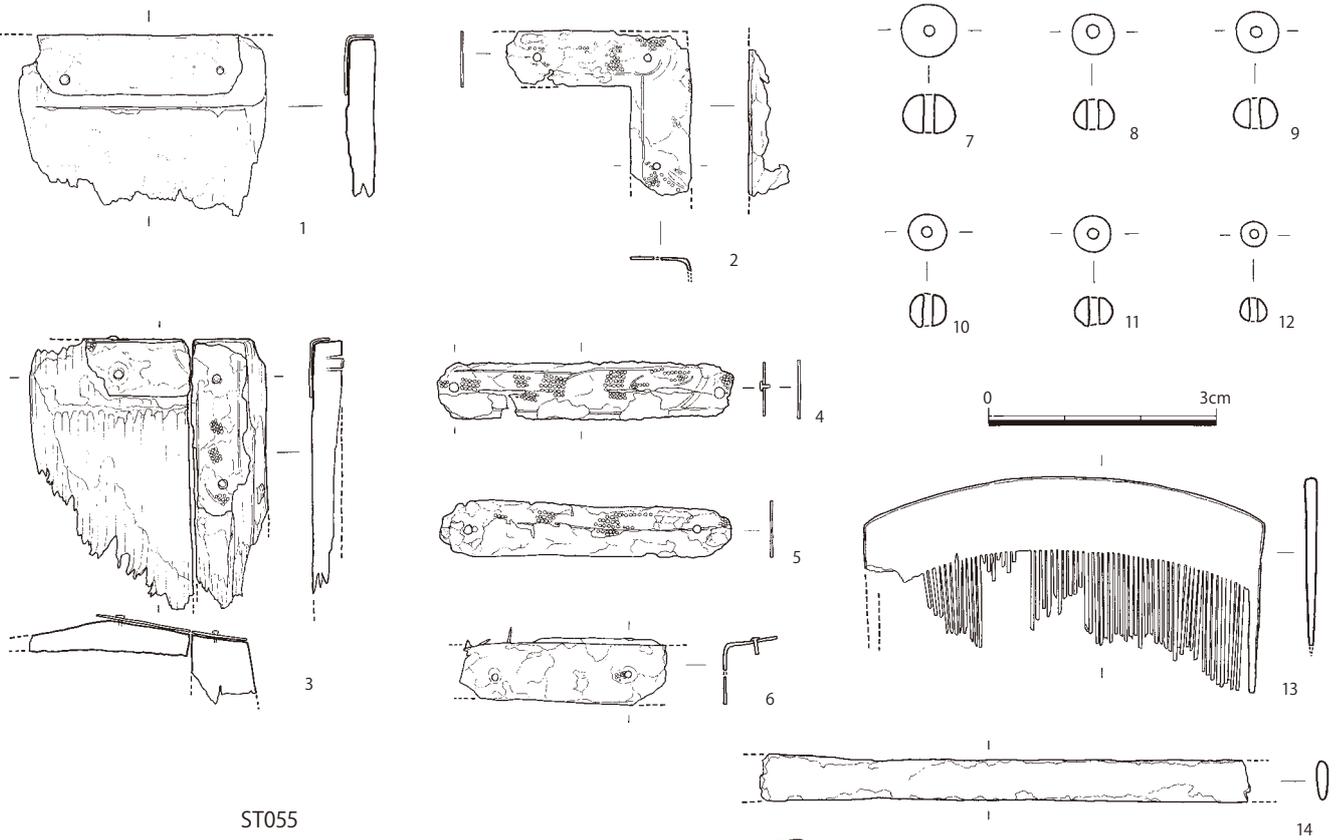


Fig. 55 浦山遺跡 2ST051 出土遺物実測図 (1/2、小玉は 1/1)

ST052



ST055

ST054

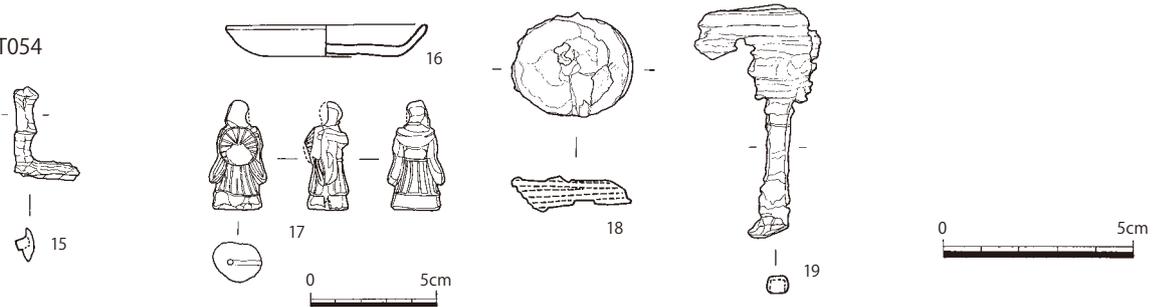


Fig. 56 浦山遺跡 2ST052・054・055 出土遺物実測図 (1/3、小玉は1/1、金属製品・13・14は1/2)

2ST057 出土遺物 (Fig. 57)

土師器

小皿 a (20 ~ 22) 復元口径は 20 が 7.5 cm、21・22 が 8.0 cm。底部切り離しは回転糸切り。

金属製品

鉄皿 (23) 口径 7.8 cm、器高 1.4 cm、器壁の厚さは 0.2 ~ 0.3 cm。全面錆に覆われている。

2ST058 出土遺物 (Fig. 57)

金属製品

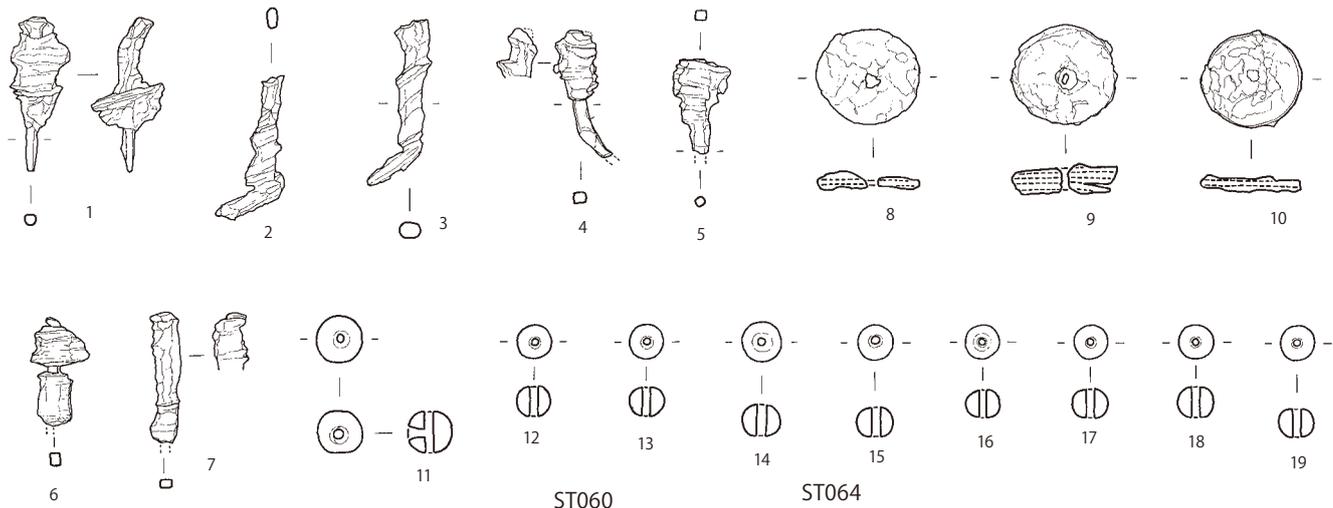
銭貨 (24) 「寛永通寶」。裏面に「文」のような刻印がある。径 2.5 cm。

2ST060 出土遺物 (Fig. 57)

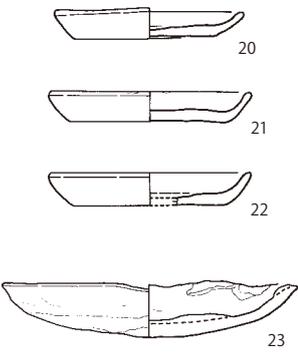
土師器

小皿 a (25) 口径 7.6 cm、器高 1.5 cm。底部切り離しは回転糸切り。口縁部に煤が付着する。

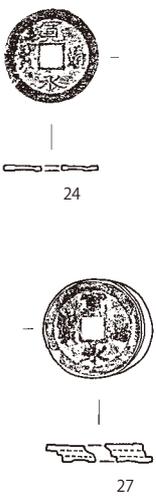
ST056



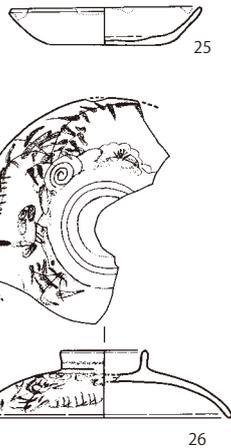
ST057



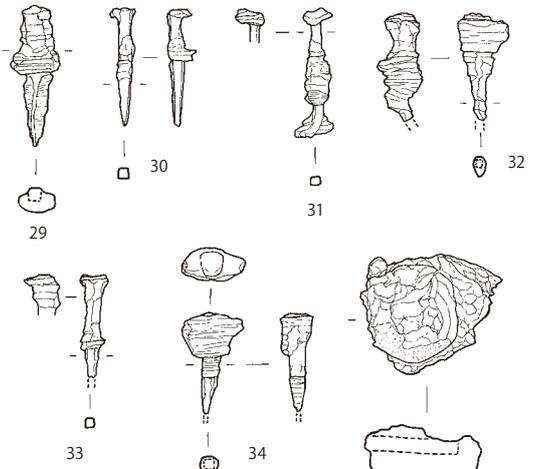
ST058



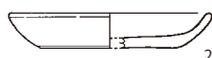
ST060



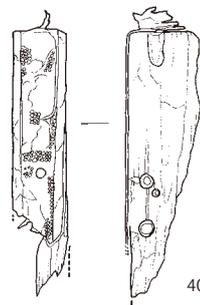
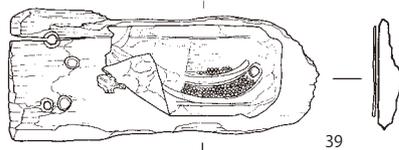
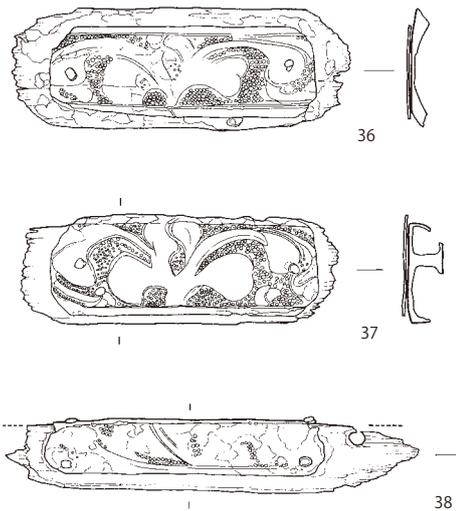
ST064



ST062



ST065



ST066

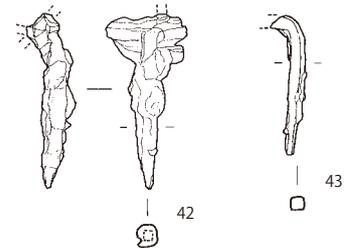


Fig. 57 浦山遺跡 2ST056・057・058・060・062・064・065・066 出土遺物実測図

(1/3、金属製品・小玉は1/2)

肥前系磁器

蓋 (26) 外面に呉須で草花文を描く。復元口径 10.0 cm、器高 2.1 cm、つまみ径 3.4 cm。

金属製品

銭貨 (27) 「寛永通寶」。3枚が接着する。

2ST062 出土遺物 (Fig. 57)

土師器

小皿 a (28) 口径 8.0 cm、器高 1.4 cm。底部切り離しは回転糸切り。

2ST064 出土遺物 (Fig. 57)

金属製品

鉄釘 (29～34) 断面方形の和釘である。29・30は完形で、長さは 3.7 cm と 3.1 cm。全て 2枚の板材痕が残り、上部の板材の厚さは、29が 1.7 cm、30が 1.4 cm、31が 1.2 cm、32が 0.95 cm、33が 1.55 cm、34が 1.6 cmである。

銭貨 (35) 3枚以上あるとみられるが、布に包まれ不明である。

2ST065 出土遺物 (Fig. 57)

金属製品

銅製隅飾留金具 (36～41) 棺材とみられる板材に施された飾金具で、薄い銅板の表面に魚々子で文様を浮き彫りする。しかし、36・37以外は錆や劣化で部分的に確認できる程度である。36・37は同じ文様を彫り出し、2つの釘で板材に留めている。銅板の長さは 7 cm、幅は 2.4 cm と 2.7 cm。38は銅板の幅は 1.45 cm。板材は厚さ 0.7 cm で、銅板を留めている 2つの釘は貫通しており、釘の長さは 1.05 cm とわかる。39は銅板が折れ曲がっていて、その部分の板材に 3ヶ所の釘穴と木釘穴が 2ヶ所確認できる。さらに紐が 1ヶ所通した穴がある。銅板の幅 2.4 cm。板材表面は褐色に塗られており、漆の可能性があり。40は板材の隅で、幅 1.0 cm の銅板を角で折り曲げている。板材の別の面には 2ヶ所の釘穴が穿たれている。41は板材の隅に施された留め具で、銅板幅 1～1.4 cm。板材側面には紐が 2ヶ所飛び出している。また、板材と銅板の間には縄のような有機質が挟まっている。板材の厚さは 1.1 cm。

2ST066 出土遺物 (Fig. 57)

金属製品

鉄釘 (42、43) 42は木質に 2つの釘が確認できる。1つの釘の上部は曲がっている。和釘。43は上部を L 字形に曲げている。

2ST068 出土遺物 (Fig. 58)

肥前系陶器

甕 (1) 全体的に若干歪んでいて、口径 52.8～61.2 cm、器高 72.1～74.4 cm、底径 31.5 cm。胎土は砂粒を多く含み粗く、黄橙色を呈する。外面には櫛目が確認できる。口縁部直下には低い突帯を貼付する体部上半部には沈線で波形を描き、内外面に暗茶褐色釉を施すが、内面は明瞭にハケ目が残る。底部はナデ調整。

金属製品

鉄釘 (2～9) 断面方形の和釘。2・3は横方向の木目の板材が多く残り、それからわかる板材の厚さは、2が 2.1 cm、3が 2.6 cm。4・5はやや幅広の釘。6・7は両端部を L 字形に曲げる。8・9は半分欠損するが、L 字形に大きく曲げている。

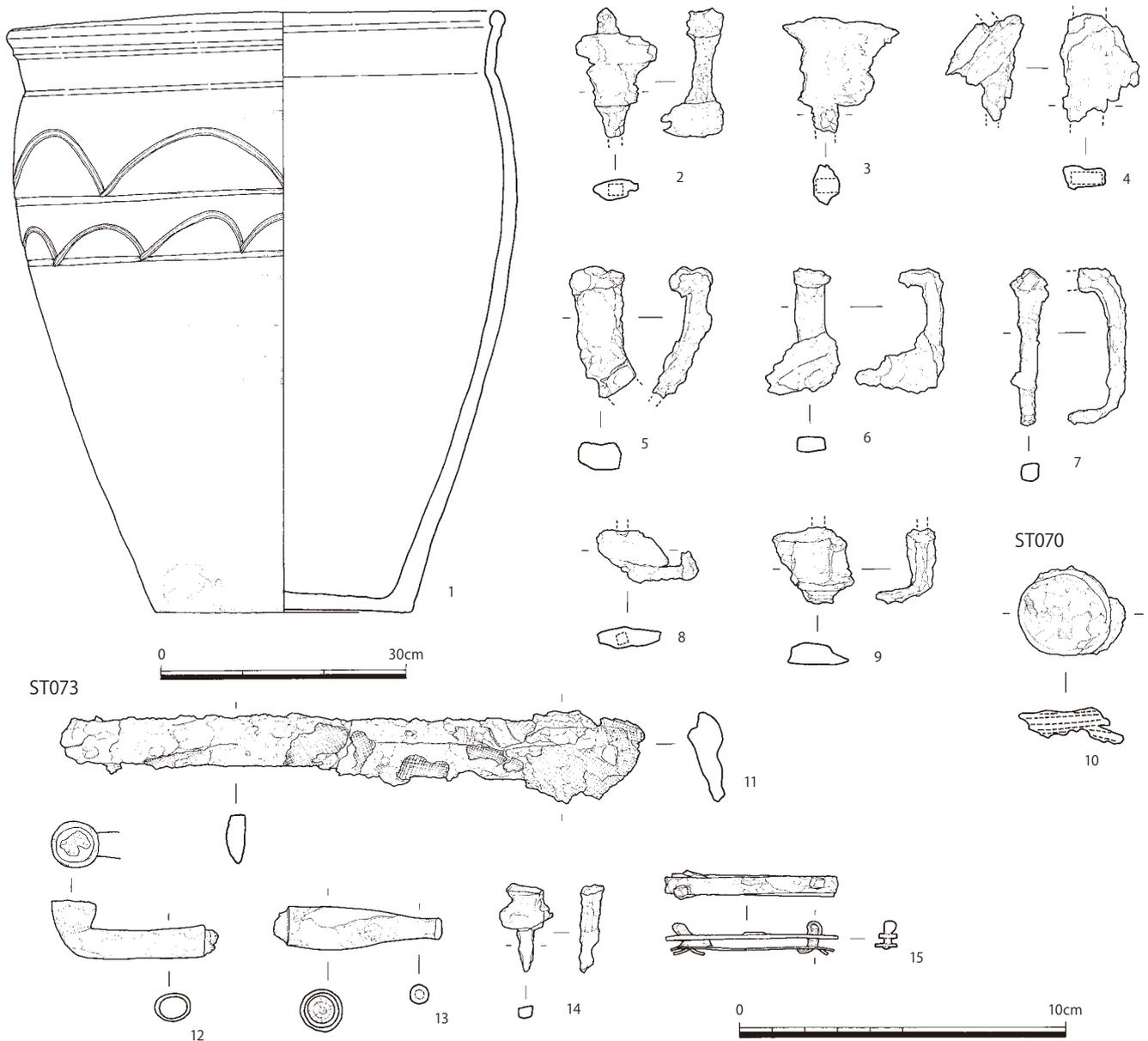


Fig. 58 浦山遺跡 2ST068・070・073 出土遺物実測図 (1/8、金属製品は1/2)

2ST070 出土遺物 (Fig. 58)

金属製品

銭貨 (10) 布目が確認でき、銭が布に包まれていたことがわかる。銭は4枚か。

2ST073 出土遺物 (Fig. 58)

金属製品

刀子 (11) 現存長 18.0 cm、幅 1.3 cm。全面錆に覆われ、部分的に布目痕が錆び付いて残っている。

煙管雁首 (12) 径 1.5 cm の火皿には煙草が残る。竹製とみられる羅宇が遺存する。

煙管吸口 (13) 最大径 1.35 cm で、竹製とみられる羅宇が遺存する。

鉄釘 (14) 長さ 2.7 cm の和釘で、上部の木質の状況から板材の厚さは 1.35 cm とみられる。

銅製金具 (15) 幅 0.5 cm で、長さ 5.3 cm と 5 cm の銅製板材を 2 つの留め具で繋いでいる。その銅板に挟まれて木片が僅かに残る。

○谷部

2SX080 出土遺物 (Fig. 59)

須恵器

坏蓋 (1) 外面上部に回転ヘラケズリの後ヘラ記号を施す。

蓋 3 (2) 口縁端部を僅かに摘まんで仕上げる。

坏 c (3、4) 断面方形のやや低い高台を貼付する。復元高台径 8.0 cm と 8.8 cm。

古式土師器

二重口縁壺 (5) 小片で分かりづらいが、口縁部はやや長く直上するような形状である。屈曲部には刻み目を施す。

土師器

椀 c (6) 復元高台径 7.6 cm。色調は淡黄橙色を呈する。

龍泉窯系青磁

椀 (7) II -b 類。

瓦類

平瓦 (8) 凸面に縄目、凹面に布目が残る。焼成良好で淡灰色を呈する。

石製品

石鏃 (9) 基部を僅かに欠損する。長さ 2.3 cm。安山岩製。

剥片 (10、11) 10 は大きさが 2.9 × 1.9 cm、厚さ 0.4 cm。黒曜石製。11 は大きさが 3.05 cm × 3.9 cm、厚さ 1.05 cm。側面部は自然面が残る。黒曜石製。

その他

赤色土出土遺物 (Fig. 59)

金属製品

銭貨 (12 ~ 15) 全て「寛永通寶」。12・13 の裏面には「文」の刻印がある。径は全て 2.5 cm。

表土出土遺物 (Fig. 59)

須恵器

小坏 a (16) 復元口径 10.0 cm、器高 2.25 cm。色調は淡褐灰色を呈する。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。

土師器

大坏 c (17) 復元高台径 10.4 cm。焼成不良で摩滅する。色調は明赤褐色を呈する。

金属製品

銭貨 (18) 鉄銭で錆が全面覆う。径 2.5 cm。

表採遺物 (Fig. 59)

金属製品

銭貨 (19、20) 「寛永通寶」。径は 19 が 2.4 cm、20 が 2.3 cm。

その他の出土遺物 (Fig. 59)

土師器

坏 a (21、22) ST049 より出土。底部切り離しは回転ヘラ切り。色調は明黄橙色を呈する。22 は、口径 12.4 cm、器高 2.9 cm。

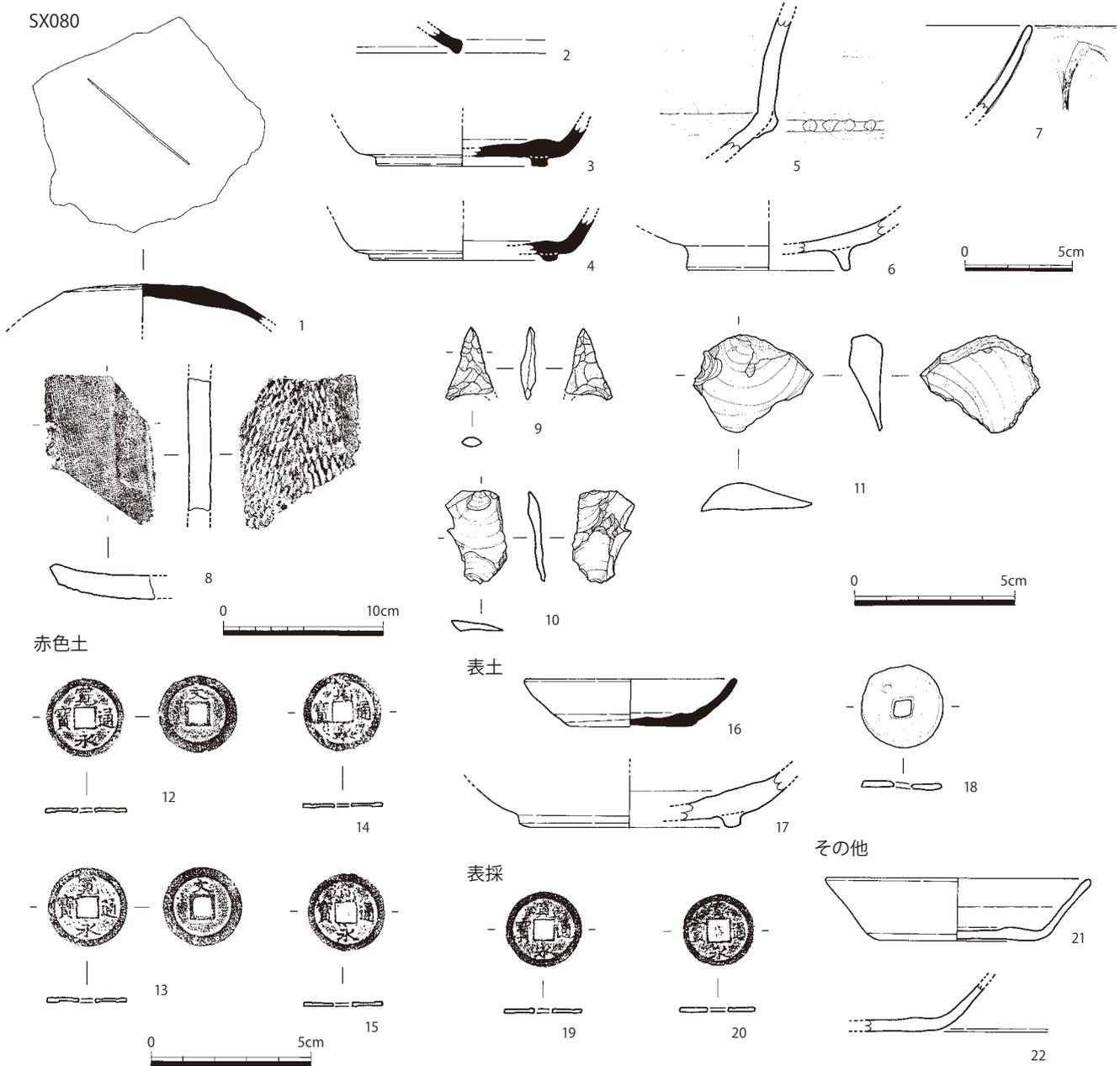


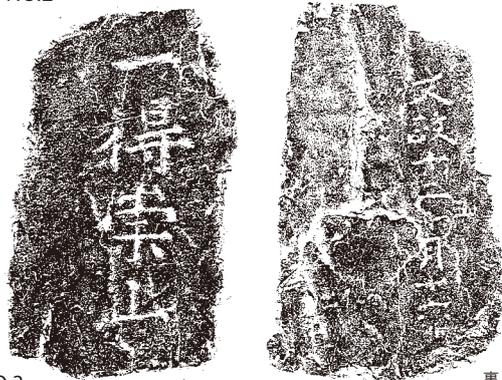
Fig. 59 浦山遺跡 2SX080、赤色土、表土、表採、その他の出土遺物実測図

(1/3、石製品・金属製品は1/2・瓦は1/4)

表 26 浦山遺跡第2次調査 墓碑一覧

No.		刻 銘	西 暦
No.1	表	當菴中興春應心和尚禪師妙應知觀信尼	
	裏	萬延二辛酉二月十三日壽齡六十七才	1861年
No.2	表	一得崇山	
	裏	文政十二丑十月十六日	1829年
No.3	①	小嶋□□助 小嶋久平	
	②	當村世話人 太田助七 太田伊右エ門 武藤弥助	
	③	木原源吉 太田藤吉 太田善七	
	④	山田喜市 浅川仁三郎 小嶋和平 中嶋利二次 萩尾治六 松島利平 吉塚善□	
No.4	表	釋妙鑑靈位	
	右	嘉永四年	1851年
	左	九月廿五日	
No.5	表	釋妙惠信女	
	裏	明治十二年卯旧六月廿六日 大田助三妻	1879年
No.6	表	釈妙徳信女	
	裏	水城花田伊七郎姉□ 大田伊右エ門妻 謙次郎母エン	
	左	明治廿四年 旧七月九日卒	1891年
	右	年六十六才	
No.7	表	釋智英□	
	裏	太田金太□	
	左	七月廿八日	
	右	文久□□年	1861 ~ 1864年
No.8	表	釋淨信居士	
	裏	明治十八年酉旧四月六日 大田伊右衛門	1885年
No.9	表	法號釋妙智信女	
	裏	明治廿九年六月十六日亡 大田伊三郎女タク	1896年
No.10	表	釋誓觀信士	
	裏	明治十四年巳旧四月二日 大田助三	1881年
No.11		享和二年 釈妙榮之墓 戊十月廿日 □右衛門□	1802年
No.12		(家紋)	
No.13	表	寛政九巳天 釈了禪信士灵 十月三日	1797年
	裏	大田□□□	
No.14		宝暦□年 釈妙□□□	1751 ~ 1764年
No.15	右	寛政四子天	1792年
	表	釈尼妙専灵	
	左	四月朔月信吉 妻	
No.16	表	安永□申天 釈妙閑□ □月六日	1772 ~ 1781年
	左	俗名□□	
No.17	表	釈妙善信女	
	裏	慶應二寅年 六月廿一日 卯市 妻	1866年
No.18	表	釈妙専信女	
	裏	慶應二寅年 二月廿七日 仁吉妻 タカ	1866年
No.19	表	安永五申天 釈是閑信士 一月七日	1776年
	右	大田□□	
No.20	表	太田謙助墓	
	裏	文久二年 戊八月十二日 六十七□□	1862年
No.21		寛政二年 釋慶榮之墓 亥三月五日	1790年
No.22	表	釈尼妙遙灵	
	裏	天明七未年 七月九日	1787年
No.23	表	大善海釋妙久靈	
	左	昭和二年八月廿一日亡 田村ヒサエ 行年二十三	1927年
No.24	表	釋妙惠信女	
	左	文化四卯年 七月□日	1807年
No.25	表	寛政十未天 法号釈智□ 三月□日	1798年
No.26	表	釈是空信士	
	裏	宝暦辰十年 二月□□ □□	1758年
No.27	表	江月妙澄信女	
	裏	大正二年九月十七日卒 大田伊右エ門妹キラ 享年六十一	1913年

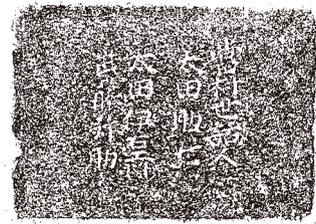
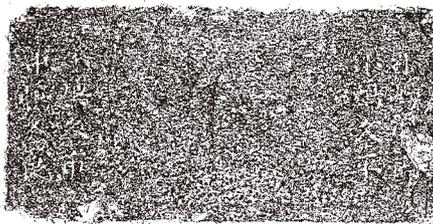
NO.2



NO.3

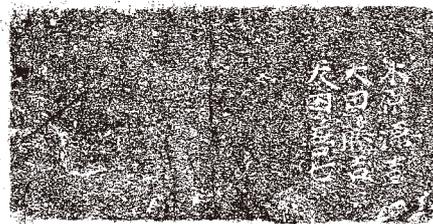
表

裏



①

②

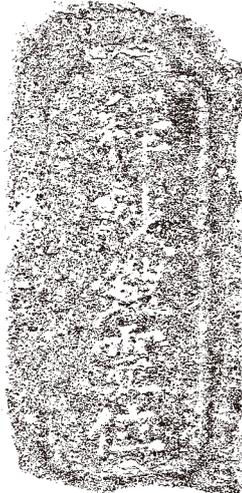


③

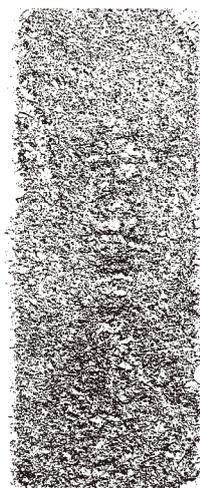


④

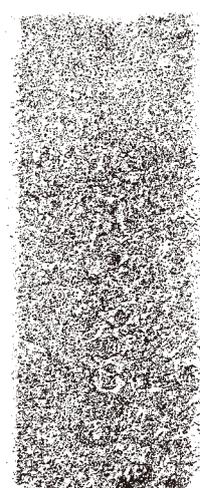
NO.4



表

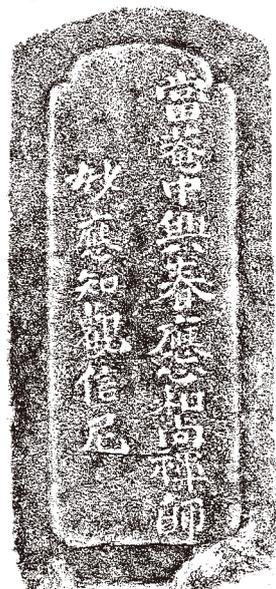


右



左

NO.1



表



裏

NO.5



表

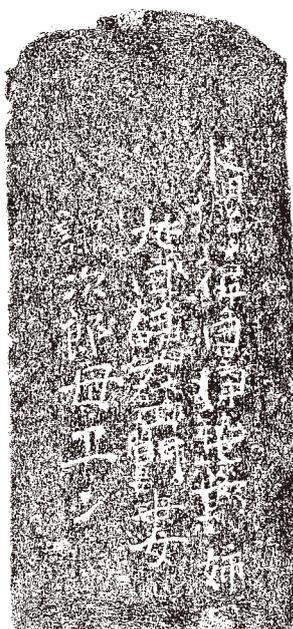


裏

NO.6



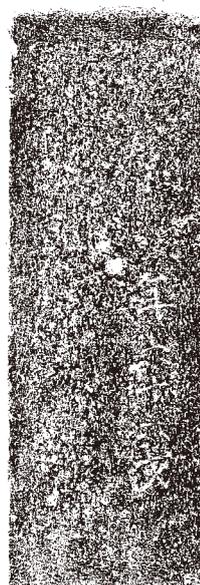
表



裏



左



右



Fig. 60 浦山遺跡第2次調査墓標拓本① (1/8)

NO.7

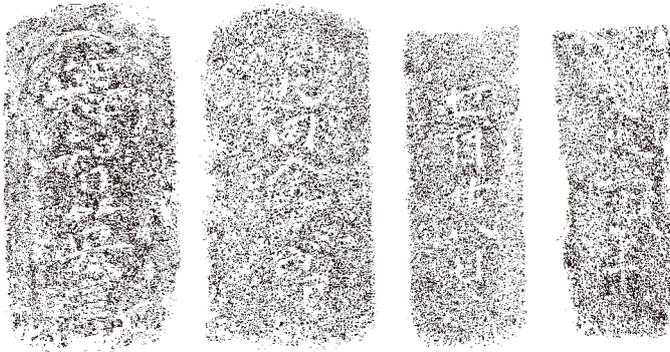


表 裏 左 右

NO.8

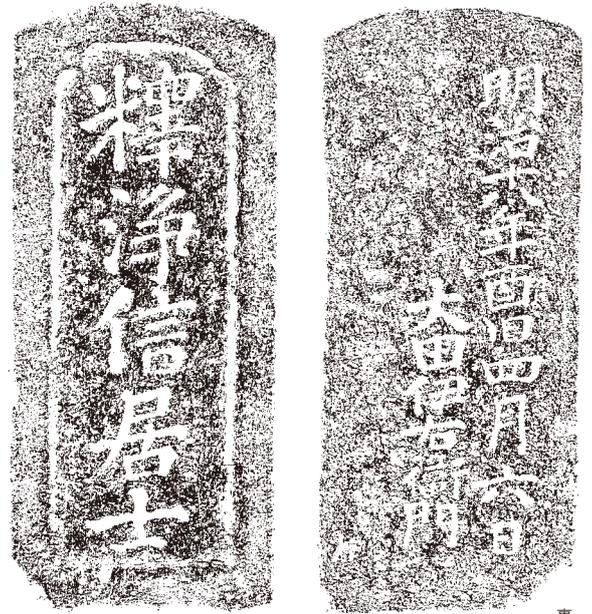


表 裏

NO.9

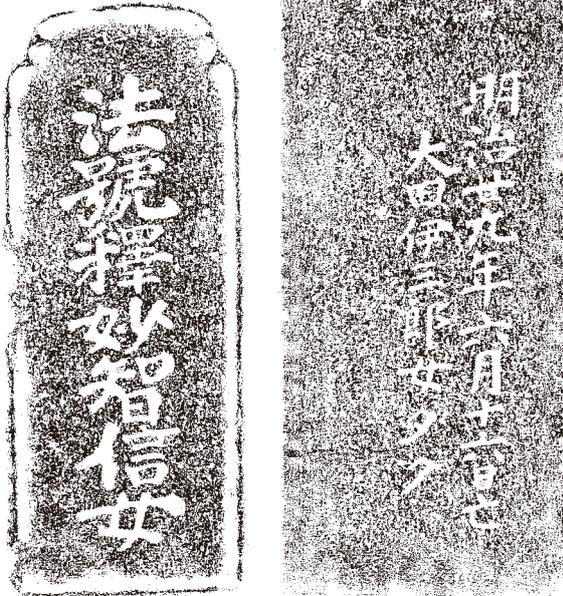


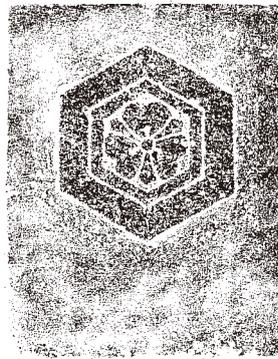
表 裏

NO.10



表 裏

NO.12



NO.11



NO.13

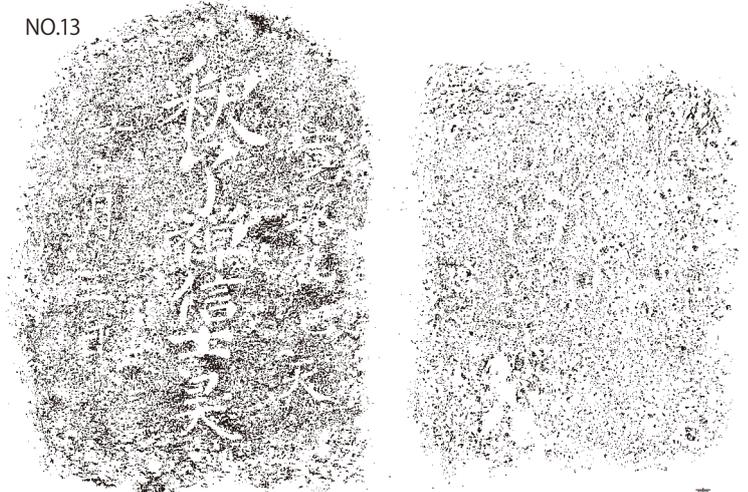
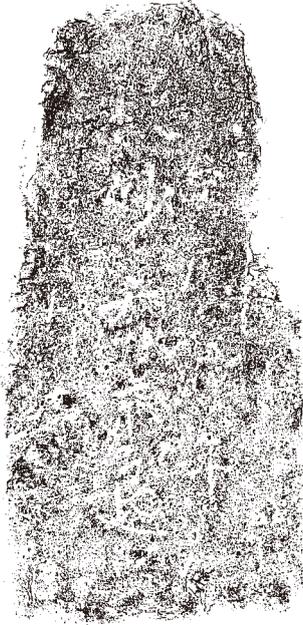


表 裏



Fig. 61 浦山遺跡第2次調査墓標拓本② (1/8)

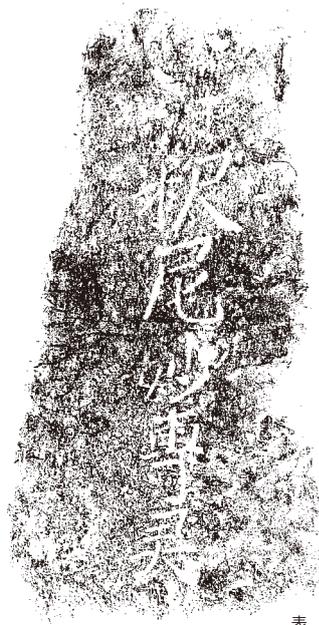
NO.14



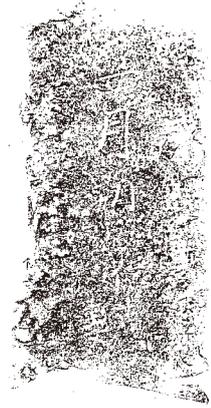
NO.15



右



表



左

NO.18

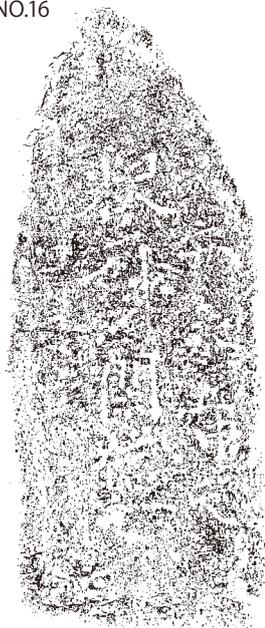


表



裏

NO.16



表



左

NO.17



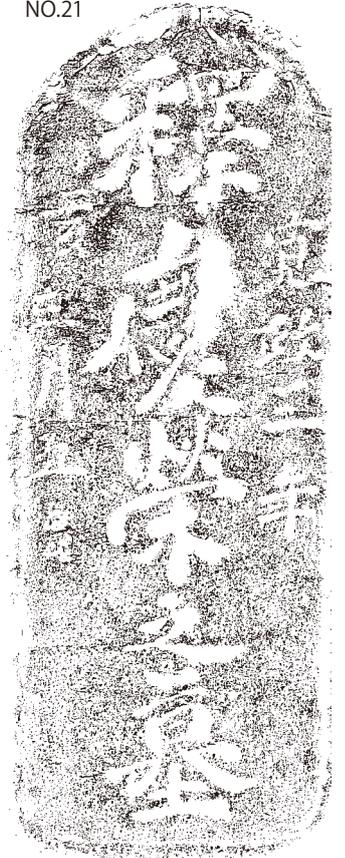
表



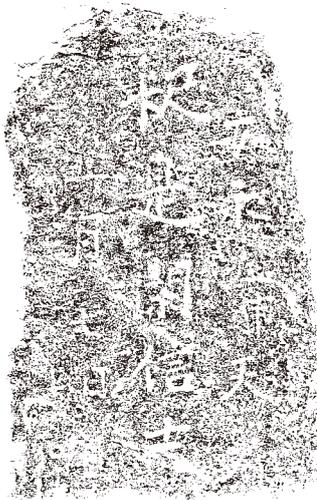
裏



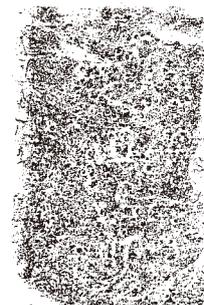
NO.21



NO.19



表

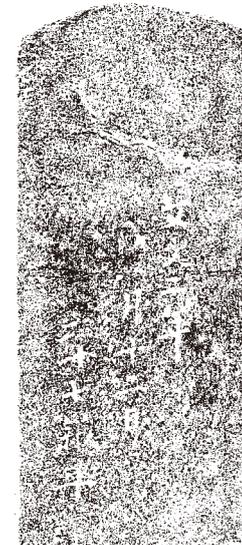


右

NO.20



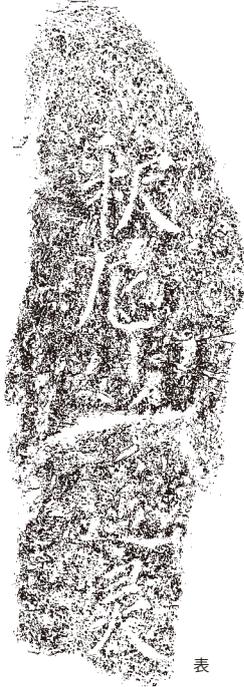
表



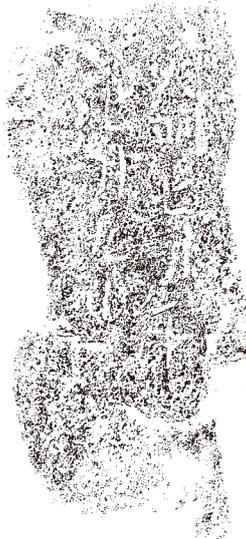
裏

Fig.62 浦山遺跡第2次調査墓標拓本③ (1/8)

NO.22



表

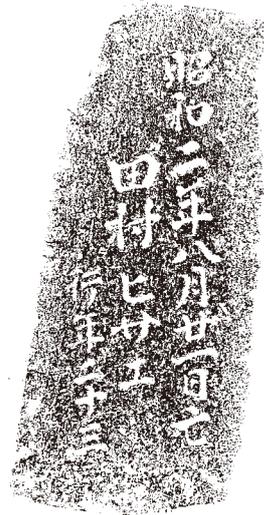


裏

NO.23



表

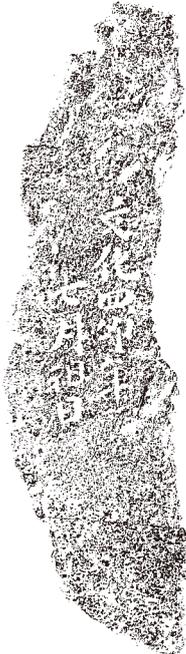


左

NO.24



表

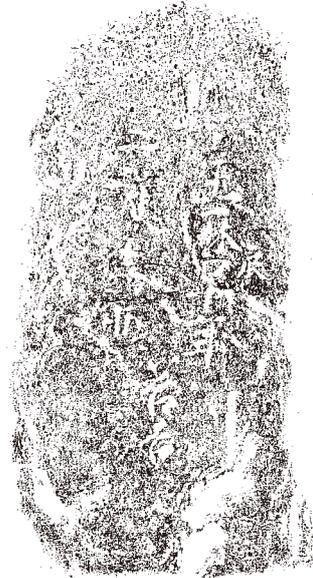


左

NO.26



表



裏

NO.27



表



裏

NO.25



Fig. 63 浦山遺跡第2次調査墓標拓本④ (1/8)

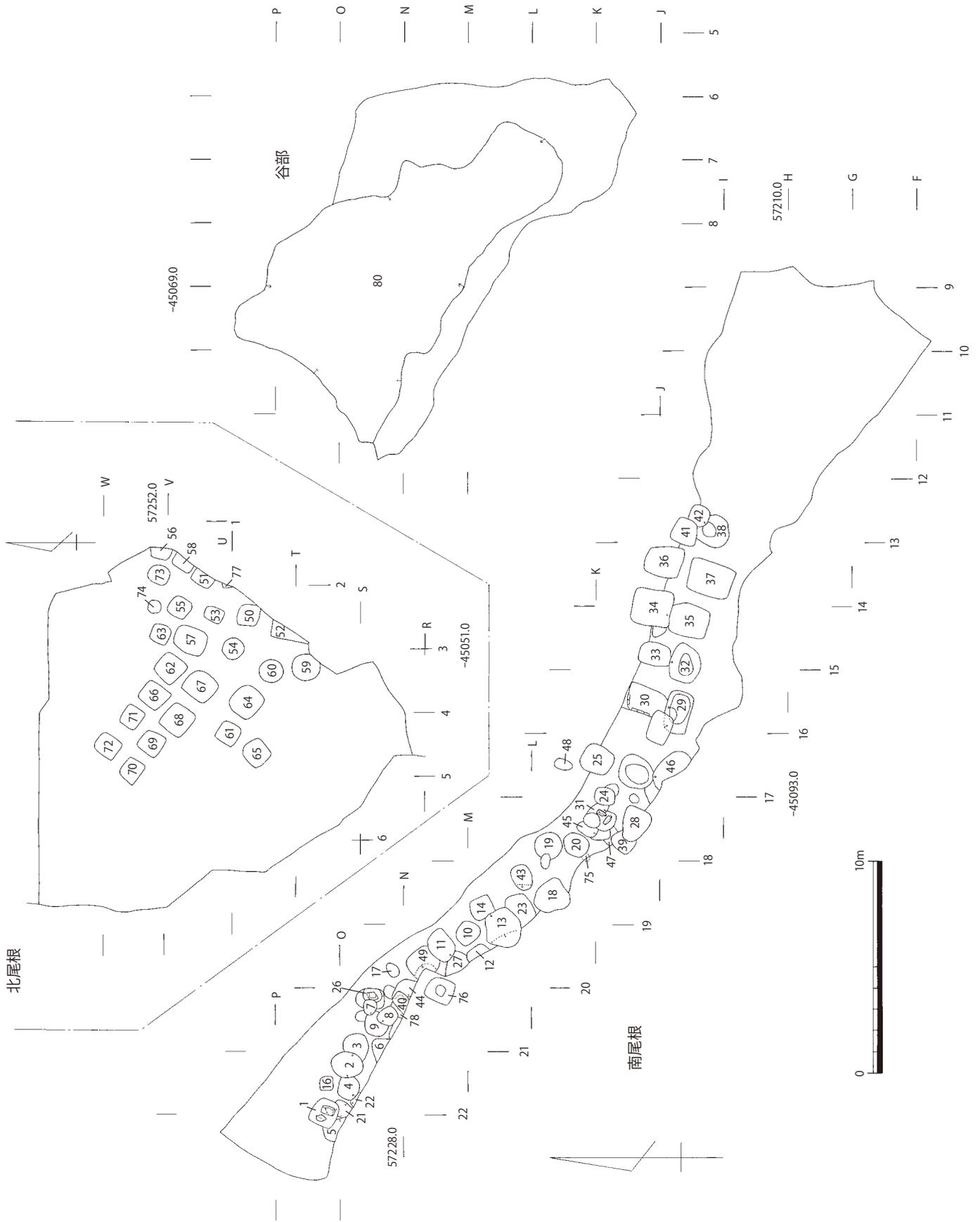


Fig. 64 浦山遺跡第2次調査遺構略測図 (1/250)

表 27 浦山遺跡第 2 次調査 遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種別	埋土状況 (古→新)	遺構間切合 (古→新)	時期	備考	地区番号
1	2ST001	墓	淡赤茶色土 (真砂土)	21→5→1	江戸中～後期		O21・O22
2	2ST002	墓	淡茶色土 (真砂土)	4・3→2	19世紀中頃	甕棺、土師皿2枚	N21・N22
3	2ST003	墓	明黄色土	3→2	18世紀後半～	墓石投げ込み、人骨、桶	N20
4	2ST004	墓	茶黄色土	22→4→2		墓石投げ込み	N21
5	2ST005	墓	茶黄色土	5→1	江戸中～後期	人骨出土、鉄釘	N22・O22
6	2ST006	墓	黄茶色土			出土遺物なし	N20・N21
7	2ST007	墓	黒色土	26→7		焼骨出土 (火葬か)	N20
8	2ST008	墓	真砂土	9→8			N20
9	2ST009	墓		9→8	江戸中～後期	人骨、桶形木棺	N20
10	2ST010	墓				人骨、桶形木棺	L19・M19
11	2ST011	墓	茶色土 (真砂土)	49・27→11		人骨、桶形木棺、石造品 (地蔵)	M19
12	2ST012	墓	黄色土 (真砂土)			未掘 (大部分が調査区外のため)	L19
13	2ST013	墓	赤茶色土 (真砂土)	14.23→13	18世紀初頭	人骨、墓石投げ込み	L19
14	2ST014	墓	淡赤灰色土	14→13		人骨	L18
15	2ST015	墓	詳細位置不詳		近代～	土師質甕内火葬人骨。表土剥ぎ中出土	O21付近
16	2ST016	墓	黄色土 (部分的に黒色土)			釘出土 (改葬済みか)	O21
17	2ST017	墓	茶黄色土		近現代	釘、陶器、磁器	N19
18	2ST018	墓	赤黄色土		19世紀中頃	甕棺、人骨、墓石	K18
19	2ST019	墓			近代	甕棺、人骨、銭貨、小玉	K17
20	2ST020	墓		75→20	近代	甕棺、蓋石、人骨	K17
21	2ST021	墓	黄茶色土	21→5→1		人骨、銅鈴	N21
22	2ST022	墓		22→4		甕棺 未掘 (調査区外)	N21
23	2ST023	墓	赤褐色土	23→13		人骨	L18
24	2ST024	墓	暗黄色土			人骨、釘	J16・J17
25	2ST025	墓か	灰黄色土			特に何も出土せず。改葬か。	J16・K16
26	2ST026	墓		26→7	江戸中～後期	甕棺、蓋石、人骨	N20
27	2ST027	墓か	赤茶色土	27→11.12			M19
28	2ST028	墓	茶灰色土		江戸中～後期	墓石、甕棺、人骨	J17
29	2ST029	墓	淡灰白色土→赤褐色土→黄色土	30→29	江戸中～後期	人骨	I15
30	2ST030	墓	茶灰色土	30→29	江戸中～後期	長方形石組み、人骨	I15・J15
31	2ST031	墓	赤茶灰色土	45→31→24	江戸中～後期	墓石、人骨、釘、銭	J17
32	2ST032	墓	淡褐色→黒色土・暗褐色	32→33		人骨、改葬済み。片づけられている。	I14・I15
33	2ST033	墓	暗褐色土	32→33		人骨	I14・J14
34	2ST034	墓	黒灰色土	35→34		人骨	J14
35	2ST035	墓	灰色土	35→34	江戸中～後期	人骨	I14
36	2ST036	墓	明黄灰色土			人骨	I13
37	2ST037	墓	灰色土 (真砂土)		19世紀前半	人骨	I13
38	2ST038	墓	明茶灰色土→淡淡色土	38→41・42		人骨、墓石投げ込み	I12
39	2ST039	墓		47→39→28		甕棺、未掘	J17
40	2ST040	墓	黄赤色土	44→43→40→8		墓石	M20・N20
41	2ST041	墓	黄茶色土	41→38			I12
42	2ST042	墓	黄茶色土	42→38			I12
43	2ST043	墓					L18
44	2ST044	墓	黄灰色土	44→43→40→8		未掘だが、S-49掘削中に甕棺確認	N20
45	2ST045	墓	明赤灰色土	45→31→24		甕棺、蓋石、人骨なし	K17
46	2ST046	墓か	明赤茶色土 (締まっている)			危険なため途中で掘削を中止	I16
47	2ST047	墓		47→39→28		甕棺、蓋石、櫛出土 途中で掘削を中止	J17
48	2ST048	墓				合わせ口土師器甕、須恵器杯	K16
49	2ST049	墓	茶色土		江戸時代(慶応～)	蓋石?	M19
50	2ST050	墓	黄色土			人骨なし。寛永通宝、人形	T2
51	2ST051	墓	黄色土			人骨。数珠。	U2
52	2ST052	墓	橙茶色土			人骨、櫛、銅製金具。	T2
53	2ST053	墓	黄茶色土			人骨	U2
54	2ST054	墓	黄灰色土		江戸中～後期	人骨	T2.T3
55	2ST055	墓			江戸中～後期	人骨、土製人形、銭	U2
56	2ST056	墓	橙色土		江戸後期～近代	人骨、釘、数珠	V1
57	2ST057	墓			江戸中～後期	人骨、鉄皿	U2
58	2ST058	墓	茶黄色土		江戸中～後期	人骨、寛永通宝	U1
59	2ST059	墓				人骨なし、茶椀出土。	S3
60	2ST060	墓	黄灰色土		江戸後期	人骨 (幼児)、寛永通宝	T3
61	2ST061	墓	黄灰色土			人骨	U4
62	2ST062	墓	黄灰色土		江戸後期～近代	人骨	U3
63	2ST063	墓	黄灰色土			人骨	V2
64	2ST064	墓	黄灰色土		江戸中～後期	人骨、鉄釘	T3
65	2ST065	墓	黄茶色土		江戸後期～近代	人骨、棺材片	T4
66	2ST066	墓	黄茶色土		江戸中～後期	人骨	V3
67	2ST067	墓	黄茶色土			人骨	U3
68	2ST068	墓	黄灰色土		江戸中～後期	甕棺、人骨、鉄釘	U4
69	2ST069	墓	黄茶色土			人骨	V4
70	2ST070	墓	黄色土			桶検出、寛永通宝、人骨	V4
71	2ST071	墓	黄色土			人骨	V4
72	2ST072	墓	黄灰色土			人骨	V・W4
73	2ST073	墓	黒茶色土		江戸中～後期	人骨、キセル	V1
74	2ST074	墓	茶色土			桶、人骨	V2
75	2ST075	墓	黒茶色土 (ハサバサ)		近代	横穴、S-20南壁に穿たれる。人骨、工芸品 (ミニチュア)、バックル?	K17
76	2ST076	墓			江戸中～後期	甕棺、蓋石あり、人骨	M19
77	2SX077	墓?	橙茶色土			未掘	U1
78	2ST078	墓	赤褐色土	44→78→40→8		人骨、改葬あり	N20
79	2ST079	墓か		79→39→28		未掘	J17
80	2SX080	谷堆積層	暗茶色土		12世紀	須恵器、土師器片、龍泉IIB類、黒曜石	L7～P9

表 28 浦山遺跡第 2 次調査 出土遺物一覽表

S-1	
土 師 器	坏
肥前系磁器	猪口?
国産陶器	椀
S-1淡赤茶色土	
土 師 器	破片
国産陶器	灯火皿
S-2 甃	
肥前系陶器	甃
S-2棺内	
土 師 器	小皿a(付)
S-2淡茶色土	
錢 貨	寛永通宝
S-3	
肥前系磁器	椀
金属製品	煙管吸口、煙管雁首
S-4	
国産陶器	破片
金属製品	鉄製針金
S-5	
土 師 器	小皿a(付)
金属製品	鉄釘
S-5茶黄色土	
金属製品	鉄釘
S-7	
国産陶器	甃
S-9	
須 惠 器	坏c
金属製品	鉄釘、用途不明品
S-10	
錢 貨	寛永通宝、錢
S-11	
土 師 器	坏a
国産陶器	甃
石 製 品	地蔵
S-14	
木 製 品	漆付き棒
錢 貨	寛永通宝、錢
S-14 NO.1	
錢 貨	寛永通宝、錢
S-15	
錢 貨	寛永通宝、錢
S-11	
国産陶器	壺
錢 貨	寛永通宝、錢
S-17	
肥前系磁器	皿、湯呑、壺蓋、壺
国産陶器	壺蓋、壺
土師質土器	蓋
金属製品	鉄釘

S-17明赤茶色土	
金属製品	丸釘
S-18	
肥前系陶器	甃
錢 貨	寛永通宝、錢
S-19	
肥前系陶器	甃
錢 貨	寛永通宝、錢
金属製品	小鉤、丸釘
ガラス製品	小玉
S-20	
肥前系陶器	甃
金属製品	丸釘
S-21	
錢 貨	鉄錢
金属製品	銅鈴
S-23	
土 師 器	坏a×小皿a
錢 貨	寛永通宝、鉄錢
石 製 品	扁平石
S-24	
金属製品	丸釘
S-26	
肥前系陶器	甃
金属製品	丸釘
S-28	
須 惠 器	壺?
肥前系陶器	甃
S-28茶灰色土	
錢 貨	景德元寶
S-29	
土 師 器	小皿a(付)
金属製品	鉄釘、留金具、環状金具、棒状鉄製品
木 製 品	棺材
S-29明灰色土	
金属製品	鉄釘、留金具
S-30黄灰色土	
金属製品	金具、環状金具
S-30	
金属製品	板状鉄製品、鉄釘
S-31	
肥前系磁器	小皿
国産陶器	甃
錢 貨	寛永通宝
金属製品	鉄釘、鋤先破片
S-32	
ガラス製品	小玉
S-34	
須 惠 器	甃
土 師 器	坏a(付)、破片
国産磁器	小皿
S-35	
金属製品	鉄釘
S-37	
金属製品	鉄釘

S-38	
肥前系磁器	椀
S-39	
国産陶器	甃
S-41	
国産陶器	椀
S-42	
国産磁器	小坏
金属製品	鉄釘、鉄銭
S-45	
肥前系陶器	甃
銭貨	銭
金属製品	鉄釘、銅製留金具
S-47	
国産陶器	甃
金属製品	鋳(菊型)
その他	櫛
S-48	
須恵器	坏c
土師器	甃
S-49	
土師器	坏a
S-50	
国産陶器	人形
国産磁器	紅皿、人形
銭貨	寛永通宝
金属製品	銅製留金具、煙管吸口、棒状金属製品、銅製隅金具、用途不明銅製品
土製品	土人形、土製小玉
S-50黄灰色土	
土製品	手ひねり土製品
S-51	
土師器	破片
国産陶器	椀?
銭貨	寛永通宝
ガラス製品	小玉
S-52	
金属製品	銅製留金具
ガラス製品	小玉
その他	櫛、筭
S-54	
金属製品	鉄釘
S-55	
土師器	小皿a(仆)
銭貨	銭
金属製品	鉄釘
土製品	土人形
S-56	
銭貨	銭
金属製品	鉄釘
ガラス製品	数珠玉
S-57	
土師器	小皿a(仆)
金属製品	鉄皿
S-58	
銭貨	寛永通宝
S-59	
国産磁器	椀

S-60	
土師器	小皿a
肥前系磁器	蓋
銭貨	寛永通宝
S-62	
土師器	小皿a(仆)
S-64	
銭貨	銭
金属製品	鉄釘
S-65	
金属製品	鉄釘、銅製留金具
S-66	
金属製品	鉄釘
S-68	
肥前系陶器	甃
金属製品	鉄釘、用途不明鉄製品
S-70	
土師器	破片
銭貨	銭
S-73	
金属製品	銅製留金具、鉄製品、煙管吸口、煙管雁首、刀子、鉄釘
S-75	
国産陶器	甃
金属製品	銅製留金具
土製品	おはじき
S-76	
肥前系陶器	甃
S-80	
須恵器	蓋3、坏蓋、坏、坏a、坏c、甃、壺
土師器	坏、椀c、甃
古式土師器	高坏、二重口縁壺
龍泉窯系青磁	椀; II-b(1)
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	剝片(黒曜石)、石鏃(安山岩)
赤色土	
須恵器	坏?、甃
土師器	坏、破片
肥前系磁器	皿、小椀、椀
国産陶器	椀
銭貨	寛永通宝
瓦類	平瓦(縄目)
黄茶色土	
須恵器	甃
土師器	破片
表土	
須恵器	小坏a
土師器	大坏c
肥前系磁器	皿?、壺
銭貨	鉄銭
土製品	土人形?
表採	
須恵器	坏、破片
白磁	皿; III-1(1)
銭貨	寛永通宝
瓦類	平瓦(無文)、破片(格子)
出土地不詳	
須恵器	坏、坏a、坏c、甃?、壺
土師器	蓋3、小皿b(仆)、坏a、破片
瓦類	平瓦(縄目)
石製品	砥石?、扁平石
その他	炭

(5) 浦山遺跡第2次調査出土人骨について

富田啓貴¹⁾・梶佐古幸謙¹⁾・米元史織^{2・3)}・舟橋京子^{3・4)}

- 1) 九州大学大学院地球社会統合科学府
- 2) 九州大学総合研究博物館
- 3) 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター
- 4) 九州大学大学院比較社会文化研究院

はじめに

福岡県太宰府市浦山遺跡の第2次調査において近世の墓壇57基から計58体の人骨が出土し、調査を担当した太宰府市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化研究院に人骨調査の依頼があった。浦山遺跡は、太宰府市の有力な大地主であった武藤氏の一族が主に埋葬されたことが知られている。人骨は、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターへと搬送され、本センターにおいて整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、若年人骨についてScheuer and Black (2000)、成人人骨について恥骨結合面はBrooks and Suchy (1990)、耳状面はLovejoy (1985)、歯牙の咬耗は栢原 (1957) を用い、性判定には、頭蓋・骨盤についてBuikstra and Ubelaker (1994)の方法を用いた。年齢の表記に関しては、九州大学医学部第二解剖学教室編集の『日本民族・文化の生成2』（九州大学医学部第二解剖学教室編 1988）記載の区分に従い、乳児0-1歳、幼児1-6歳、小児6-12歳、若年12-20歳、成年20-40歳、熟年40-60歳、老年60歳以上、成人20歳以上（詳細は不明）とする。計測はMartin-Saller (1957)、馬場 (1991)に従った。齲歯の観察基準は石川ほか (1986)に従った。

なお、人骨資料は現在、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターの古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

1. 人骨の出土状態

【2号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：甕棺墓

円形の墓壇内に底径約20cmの甕棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。甕棺内南側から左寛骨および左大腿骨・脛骨が出土しており、左大腿骨頭は寛骨臼と関節状態にある。左大腿骨・左脛骨は甕棺内南側で概ね長軸をそろえた状態で出土している。右大腿骨・右脛骨は甕棺内北側から概ね長軸をそろえた状態で出土している。以上のことから、股関節と膝関節は強屈していた可能性があり、坐葬で埋葬されたと推定される。

【3号人骨】

頭位：北西／顔面の向き：南東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壇墓（木棺）

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約60cmあり、頭蓋が墓壇の北西側から出土している。墓壇内北東側から左右上腕骨が出土しており、墓壇内北西側および南東側から右前腕および左前腕がそれぞれ出土している。墓壇内南西側からは下肢骨が出土している。下肢骨は北側から右下肢、南側から左下肢が出土しており、左右ともに膝関節を強屈し、墓壇に立てられた状態で出土している。

以上のことから、頭位北西、顔面の向きを南東に向けた立膝坐葬で埋葬されたと推定される。頭蓋が

墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと推定され、木棺に埋葬された可能性が考えられる。

【5号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓（木棺）

不整形の墓壙内から人骨が出土している。残存墓壙底は最大で約80cmあるが、墓壙の半分は1号墓により切られている。墓壙の中心部から椎骨が出土しているが、遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。墓壙内から釘が数点出土していることから、木棺に埋葬されたと推定される。金属片2点・土器片1点が遺存している。

【9号人骨】

頭位：東／顔面の向き：西

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓（図面に木棺の記載あり）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約90cm×70cmあり、墓壙の中心部から頭蓋が出土している。椎骨や胸骨が墓壙の東側から出土し、右上肢骨・左上肢骨は墓壙の西側からそれぞれまとまった状態で出土している。また、墓壙の西側から左大腿骨と左脛骨、右大腿骨と右脛骨はそれぞれ平行な状態で出土し、左大腿骨と左脛骨は墓壙に立てられた状態で出土しており、右大腿骨の遠位関節面・右脛骨の近位関節面が西向きである。以上のことから、頭位東、顔面の向きは西向きであったものが腐朽の過程で頭蓋が墓壙底面に落ち込んだものと考えられ、埋葬姿勢は膝を立てた坐葬であると推定される。

【10号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約80cm×60cmあり、墓壙のやや南側から人骨がまとまった状態で出土しているが、詳細な出土状況が不明であるため、埋葬姿勢は不明である。

【11号人骨】

頭位：東／顔面の向き：西

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約70cm×90cmあり、頭蓋は遺存していないが、墓壙の東側から毛髪・椎骨・寛骨が出土している。また、四肢骨の左側が墓壙の南側からまとまって出土しており、四肢骨の右側が墓壙の北側からまとまって出土している。以上のことから、頭位東、顔面の向きは西向きで埋葬されたと考えられる。ただ、四肢骨の詳細な出土状況が不明であるため、埋葬姿勢は不明である。

【13号人骨】

頭位：西の可能性あり／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：土壙墓

不整形の墓壇内から人骨が出土している。残存墓壇底は最大で約 60 cmあるが、墓壇の西側は発掘調査前の削平により破壊されている。そのため頭蓋などは遺存していない。右上肢が墓壇の北側から、左前腕と左右大腿骨が墓壇の南側から出土している。左寛骨片が墓壇の北東側から出土している。詳細な埋葬姿勢は不明であるが、上肢と下肢は概ね同じ場所から出土しており、長軸をそろえた状態であることから、坐葬で埋葬されたと推定される。

【14号人骨】

位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は約 70cm×80cmあり、墓壇の北側から人骨がまとまって出土しているが、遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【18号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：甕棺墓

不整形の墓壇内に底径約 20cm の甕棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。墓壇の中央から左右上腕骨・右橈骨・右大腿骨・左脛骨が出土しているが、詳細な出土状況が不明であるため、埋葬姿勢は不明である。墓壇底部中央から六文銭が出土している。また、土器片も出土している。

【19号人骨】

頭位：東の可能性あり／顔面の向き：西の可能性あり

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：甕棺墓

円形の墓壇内に底径約 20cm の甕棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。墓壇の北側から下顎骨・右鎖骨・右上腕骨が、墓壇の中央から右寛骨が、墓壇の東側から椎骨が、墓壇の南側から左上腕骨・左前腕骨・左寛骨・左腓骨が出土している。椎骨・四肢骨の出土状況から頭位東、顔面の向きは西向きであった可能性が考えられ、埋葬姿勢は甕棺の埋置のされ方から坐葬であったと推定される。右寛骨付近より銭貨が出土しており、左前腕骨付近から玉が 1 点、右前腕骨近位部付近から玉が多数出土している。また、甕の破片・木質が出土している。

【20号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：甕棺墓

円形の墓壇内に底径約 20cm の甕棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。詳細な出土状況が不明であるが、埋葬姿勢は甕棺の埋置のされ方から坐葬であったと推定される。

【21号人骨】

頭位：南／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

円形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約 60cm あり、墓壇は 5 号墓に切られている。頭蓋が墓壇の南側から出土している。上下顎は、下顎がやや左側に動いているが概ね咬合状態であ

る。人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。前頭骨の東側から銭貨が6枚まとまった状態で出土しており、その周辺から布らしき繊維が出土している。

【23号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

円形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は約90cm×100cmあるが、詳細な出土状況が不明のため、埋葬姿勢は不明である。銭貨が出土している。

【28号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：甕棺墓

円形の墓壇内に底径約20cmの甕棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。墓壇底は約100cmあるが、人骨の遺存部位が少ない。埋葬姿勢は甕棺の埋置のされ方から坐葬であったと推定される。

【29号人骨】

頭位：東

埋葬姿勢：屈葬

埋葬施設：土壇墓（木棺）

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は120cm×100cmあり、墓壇内の東側から頭蓋が出土しており、墓壇内の西側から四肢骨が出土している。埋葬姿勢は墓壇のサイズから屈葬であったと考えられる。釘・木質が遺存していることから、木棺に埋葬されていたと推定される。

【30号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：屈葬

埋葬施設：土壇墓（木棺）

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は約120cm×80cmあり、墓壇内の北側より頭蓋が出土している。上肢骨の出土状況は不明であるが、下肢骨は墓壇の南側から出土している。左大腿骨は遠位を西に、左脛骨は近位を西に向けて出土しており、関節状態をほぼ保っている。左脛骨の下より右大腿骨が遠位を南西に向けて、右脛骨は近位を西に向けた状態で出土しており、関節状態をほぼ保っている。以上のことから、下肢については、膝関節を曲げた屈葬であったと推定される。頭蓋が墓壇内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと推定され、木棺に埋葬された可能性が考えられる。鉄製品・木製品が出土している。

【31号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

不整形の墓壇内から人骨が出土している。残存墓壇底は約60cmあるが、墓壇は45号墓を切っている。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。墓壇内の東側から銭貨が出土している。

【32 号人骨】

頭位：北／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 110cm × 80cm あり、墓壙内の北側から頭蓋が出土している。墓壙の南側から下肢骨が出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。数珠玉が出土している。

【33 号人骨】

頭位：北／顔面の向き；不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

不整形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 100cm × 60cm あり、墓壙内の北側から頭蓋が出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【34 号人骨】

頭位：北／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約 160cm あり、墓壙内の北側から頭蓋が、南側から下肢骨片がまとまって出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【35 号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓（木棺？）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 130cm × 90cm あり、頭蓋が墓壙の北側から出土している。四肢骨は墓壙内の南側からまとまって出土しているが、詳細な出土状況が不明のため、埋葬姿勢は不明である。釘が 1 点出土しており、木棺に埋葬されていた可能性が考えられる。

【36 号人骨】

頭位：北／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 90cm × 120cm あり、頭蓋が墓壙内の北側から出土しており、四肢骨は墓壙内の南側から出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【37 号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：仰臥屈葬

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 150cm × 120cm あり、墓壙内の北側から頭蓋が出土している。頭蓋の下方から軀幹骨が出土しており、椎骨は関節状態を保ち、長軸を南北にそろえた状

態で出土している。寛骨は墓壇中央から出土しており、椎骨・大腿骨と関節状態にある。大腿骨・脛骨・腓骨は長軸をそろえた状態で墓壇内に立てられ、膝関節を強屈した状態である。以上のことから、頭位北の仰臥屈葬で埋葬されたと考えられる。

【38号人骨】

頭位：東頭位に1体、西頭位に1体の可能性あり／顔面の向き：2体とも不明

埋葬姿勢：少なくとも北西側の1体は立膝坐葬

埋葬施設：土壇墓

円形の墓壇内から人骨が2体出土している。墓壇底は約120cm×100cmあり、北西側から1体、南東側から1体出土している。四肢骨の詳細な出土状況が不明のため、この2体がそれぞれどのように埋葬されていたかは不明である。しかし、北西側から出土している1体は、大腿骨が墓壇壁に接するように立てられた状態で出土しているため、膝を立てた坐葬で埋葬されたと推定される。

【41号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約90cmあるが、出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【42号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約70cmあるが、出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【43号人骨】

頭位：南西／顔面の向き：北東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壇墓

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約50cmあり、墓壇は調査区の範囲外に伸びており、詳細な形態は不明である。墓壇内北東側から南西方向に腰椎および仙骨が連なって出土している。墓壇内の東側からは左肋骨および前腕が出土しており、墓壇内の西側からは右肋骨・鎖骨・右前腕が出土している。仙骨の東および西側からは左・右寛骨がそれぞれ出土しており、仙腸関節はほぼ関節した状態である。寛骨下縁の直上からは下肢骨が出土している。以上のことから、本個体は頭位を南西、顔面の向きは北東向きの膝関節を強屈した坐葬の可能性が考えられる。

【45号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：甕棺墓

墓壇内に埋置された底径約10cmの甕棺から人骨が出土している。墓壇は31号墓に切られており、詳細な墓壇形態は不明である。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。甕の破片が多数出土している。

【51号人骨】

頭位：北／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。残存墓壙底は約90cmあるが、墓壙の東側を発掘前の削平により破壊されている。墓壙内の北側から頭蓋が、中央から右上肢骨が、南側から右大腿骨が出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。右上肢骨の付近からガラス製小玉が多数出土している。その他にも、炭化物・玉数点が出土している。

【52号人骨】

頭位：北の可能性あり／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

不整形の墓壙内から人骨が出土している。残存墓壙底は約180cmあるが、墓壙の東側を発掘前の削平により破壊されている。墓壙内の北東側から頭蓋が、北側から毛髪が、中央から右上肢骨が、東側から軀幹骨・左上肢骨・右肩甲骨が出土している。人骨の詳細な出土状況が不明のため、埋葬姿勢は不明である。毛髪の近くから櫛が、右上肢骨の近くから数珠玉が出土している。また、木質が遺存している。

【53号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約60cmあり、墓壙内の中央から頭骨片が1点出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【54号人骨】

頭位：南西／顔面の向き：北東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓（木棺）

円形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約100cmあり、墓壙内の中央から頭蓋が出土している。墓壙内の南西側から軀幹骨・右鎖骨・右上腕骨が、東側から右下肢骨が、西側から左下肢骨が出土している。左右下肢骨は解剖学的位置関係を保っており、膝関節を屈曲した状態で出土している。頭蓋の下方から左寛骨・左上腕骨・右足根骨が出土している。軀幹骨が南西側から出土し、左側の四肢骨が東側から、右側の四肢骨が西側から出土していること、膝関節が屈曲していることから、頭位南西、顔面の向きは北東向きの立膝坐葬で埋葬されたと考えられる。釘が出土していることから、木棺に埋葬されたと推定される。毛髪が出土している。

【55号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓（木棺？）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約70cmあるが、頭骨片が墓壙の西側から出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。釘が1点出土していることから、木棺に埋葬された可能性が高いと考えられる。墓壙西側から土製の人形が出土している。

【56号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓（木棺）

円形の墓壙内から人骨が出土している。残存墓壙底は約80cmあるが、墓壙の東側を発掘前の削平により破壊されている。墓壙内の中央から頭蓋が出土し、その周辺及び下方から四肢骨がまとまって出土している。詳細な出土状況が不明のため、埋葬姿勢は不明である。木棺の痕跡及び釘が数点出土していることから、木棺に埋葬されたと推定される。

【57号人骨】

頭位：北

埋葬姿勢：仰臥屈葬

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨が出土している。残存墓壙底は約120cm×100cmあるが、墓壙の東側は発掘前の削平により破壊されている。墓壙内の北側から頭蓋が顔面を上に向けた状態で出土している。墓壙内の中央から、軀幹骨が関節状態を保ち、椎骨が連なった状態で出土している。墓壙内の東側から左上肢骨が、西側から右上肢骨が出土している。墓壙内の南側から左右寛骨と左右大腿骨が関節状態を保って出土している。左右下肢骨は膝関節を屈曲し、墓壙にたてられた状態で出土している。以上のことから、頭位北で、膝をたてた仰臥屈葬であると推定される。左前腕骨付近から鉄皿が出土している。土師器・小皿・糸切り・木質も出土している。

【58号人骨】

頭位：東／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：土壙墓

不整形の墓壙内から人骨が出土している。残存墓壙底は約60cmあるが、墓壙の東側は発掘前の削平により破壊されている。墓壙内の東側から頭蓋が、北側から右下肢が、南側から左上肢・左脛骨が出土しており、四肢骨は長軸の向きをおよそ東西にそろえた状態で出土している。出土人骨の遺存状態は良好ではないため、埋葬姿勢は不明であるが、墓壙底の大きさ、四肢骨の長軸がそろっていることから頭位東の坐葬で埋葬されたと推定される。下肢骨付近から銭貨が出土している。また、頭骨付近から炭化物が出土している。

【60号人骨】

頭位：南東／顔面の向き：北西

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓（木棺）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約100cm×80cmあり、墓壙内の中央から頭蓋が出土し、頭蓋の南側から椎骨・肋骨が出土している。頭蓋と椎骨は関節状態を保った状態で出土している。頭蓋の北側から右上肢骨が出土しており、頭蓋の南側から左上肢骨が出土している。墓壙の北西側から左右下肢骨がまとまった状態で出土しており、左大腿骨と左下肢骨・右大腿骨と右下肢骨は長軸を揃え、大腿骨の遠位部と脛骨・腓骨の近位部が向きを揃えた状態で出土している。頭蓋と軀幹骨の出土位置・左右四肢骨の出土状況から、埋葬時に頭蓋は南東側にあったものが、軟部組織の腐朽後に墓壙底部に落ち込んだと考えられる。以上のことから、本人骨は頭位南東、顔面の向きが北西向きの坐葬で埋葬され

たと考えられる。頭蓋が墓壇内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと推定され、木棺に埋葬されたと推定される。木質が遺存している。

【61号人骨】

頭位：北／顔面の向き：南の可能性あり

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約70cmあり、墓壇内の北側から頭蓋が、南側から四肢骨が出土している。人骨の出土状況が不明であるため、詳細な埋葬姿勢は不明である。

【62号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：土壇墓（凶面に木棺の記載あり）

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約110cmあり、墓壇内中央から頭蓋が出土している。頭蓋の南側から左上肢骨がまとまった状態で出土しており、北側から右上肢骨が出土している。頭蓋の下方からは左右寛骨が出土している。右下肢骨が頭蓋の北西側からそれぞれの遠位部が東を向いた状態で長軸をそろえて出土している。墓壇内中央から頭蓋が出土し、さらに四肢骨が長軸をそろえて出土していることから坐葬で埋葬されたと考えられる。頭蓋が墓壇内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【63号人骨】

頭位：不明／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓

方形の墓壇内から人骨がまとまって出土している。墓壇底は一辺約70cmあるが、出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【64号人骨】

頭位：南／顔面の向き：北

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壇墓（木棺）

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇底は一辺約100cmあり、頭蓋が墓壇中央から出土しており、左右肋骨が墓壇内の南側から出土している。左側の四肢骨が概ね墓壇内の西側から、右側の四肢骨が概ね墓壇内の東側から出土している。肋骨・四肢骨の出土状況から、頭位南、顔面の向きが北向きに埋葬され、軟部組織の腐朽後に頭蓋が墓壇中央に落ち込んだと考えられる。釘が出土していることから、木棺に埋葬されていたと推定される。

【65号人骨】

頭位：北西／顔面の向き：南東

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壇墓（木棺）

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇の底面は約100cm×90cmあり、墓壇北西側から頭蓋が出土している。右上肢・右下肢が墓壇の北側から、左上肢・左下肢が南側から出土しており、左右寛骨が墓壇の南東から出土している。右大腿骨と右脛骨は関節状態を概ね保っており、右大腿骨は墓壇壁に

接するように立てられた状態である。以上のことから、頭位北西、顔面の向きを南東に向けて膝を立てた坐葬で埋葬されたと推定される。頭蓋が墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【66号人骨】

頭位：南／顔面の向き：北

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓（木棺）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 100 cm × 90cm あり、墓壙内北側から頭蓋が出土している。頭蓋の南東側から右上腕骨が出土している。左右肋骨が墓壙内南側からまとまって出土しており、右肋骨は南西に、左肋骨は南東にそれぞれまとまった状態である。墓壙内西側から左右下肢骨が出土しており、左大腿骨と左脛骨は長軸を南北に概ね平行した状態で出土し、右大腿骨と右脛骨は左大腿骨の北側の近い位置から出土している。左大腿骨は墓壙壁に接するように立てられた状態であり、膝関節を立てた坐葬の可能性が考えられる。躯幹骨の出土位置から頭蓋は本来南にあったが、軟部組織の腐朽に伴い前方に転じたと考えられる。頭蓋が墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【67号人骨】

頭位：南／顔面の向き：北

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓（木棺）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約 80cm あり、墓壙の中央から頭蓋が出土している。頭蓋の下から、椎骨が長軸をおよそ南北にそろえた状態で出土し、その南側からは肋骨がまとまって出土している。頭蓋の西側より、左大腿骨が背面を上にし、近位を南に向けた状態で出土している。頭蓋の東側から右大腿骨が背面を上にし、近位を北に向けた状態で出土している。それらの四肢骨は長軸を平行に南北にそろえた状態で出土している。以上のことから、頭位南、顔面の向き北向きの状態で膝関節を強屈して膝を立てた坐葬で埋葬されたものが、軟部組織の腐朽に伴い、頭蓋・四肢骨が北側に倒れたものと考えられる。頭蓋が墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【68号人骨】

頭位：南／顔面の向き：北

埋葬姿勢：坐葬

埋葬施設：甕棺墓

方形の墓壙内に底径約 30cm の甕棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。墓壙の中央から頭蓋が出土している。墓壙の南側から左右肋骨が出土している。頭蓋の北東側から右大腿骨が出土し、その上から右脛骨が右大腿骨と長軸を南北にそろえた状態で出土している。頭蓋の南側から左大腿骨と左脛骨が長軸を南北にそろえた状態で出土している。以上のことから、頭位南、顔面の向き北向きの状態で坐葬で埋葬されたと推定される。頭蓋が墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【69号人骨】

頭位：南の可能性あり／顔面の向き：不明

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓

方形の墓壙内から人骨がまとまって出土している。墓壙底は一辺約 90cm あり、墓壙の南側から頭蓋が出土している。出土人骨の遺存状態が良好ではないため、埋葬姿勢は不明である。

【70 号人骨】

頭位：東

顔面の向き：西

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓（円形木棺）

方形の墓壙内に底径約 40cm の円形の木棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。墓壙内東側から頭蓋が出土しており、墓壙内北側から右側の四肢骨が、墓壙内南側から左側の四肢骨が長軸を東西にそろえた状態で出土している。人骨の詳細な出土状況が不明のため、埋葬姿勢は不明である。

【71 号人骨】

頭位：東／顔面の向き：西

埋葬姿勢：不明

埋葬施設：土壙墓（図面に木棺の記載あり）

方形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は約 60cm × 50cm あり、墓壙内の中央から頭蓋・椎骨が出土しており、椎骨は東西に軸を揃えて関節状態を保って出土している。墓壙内の北側から右側の上肢骨が出土しており、南側から左側の上肢骨が出土しており、下肢骨は墓壙内西側にまとまって出土している。左右下肢骨は長軸を平行にそろえた状態で出土している。以上のことから、頭位東、顔面の向きを西に向けて膝を立てた状態で埋葬されたものが軟部組織の腐朽に伴い、頭蓋・下肢骨が墓壙下方に落ち込んだものと考えられる。頭蓋が墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【72 号人骨】

頭位：北東／顔面の向き：西

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓（木棺）

方形の土壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約 50cm あり、墓壙中央から頭蓋が出土している。墓壙内の北東側から左右の肋骨および椎骨が出土している。肋骨は椎骨を挟んで、南側から左肋骨が、北側からは右肋骨が出土している。肋骨の西側からはそれぞれ左右の上肢骨が出土している。左上肢直下からは左右寛骨および仙骨が出土している。さらにその西側からは下肢骨が墓壙に立てられた状態で出土している。以上のことから、頭位北東、顔面の向きを西に向けて膝関節を立てた状態の坐葬で埋葬されたと推定される。頭蓋が墓壙内に落ち込んでいることから、軟部組織の腐朽時に頭蓋が落ち込む空間があったと考えられ、木棺に埋葬されたと推定される。

【73 号人骨】

頭位：北

顔面の向き：南

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壙墓

円形の墓壙内から人骨が出土している。墓壙底は一辺約 60 cm あり、墓壙内の北側から頭蓋が出土している。右上肢・右下肢が墓壙の南西側から、左上肢・左下肢は南東側から出土しており、寛骨が墓壙

の南東側から出土している。右下肢は大腿骨・脛骨ともに墓壇壁に接するように立てられた状態であり、概ね関節状態を保っている。以上のことから、頭位北、顔面の向きを南に向けて、膝を立てた状態の坐葬で埋葬されたと推定される。

【74号人骨】

頭位：東

顔面の向き：西

埋葬姿勢：立膝坐葬

埋葬施設：土壇墓（円形木棺）

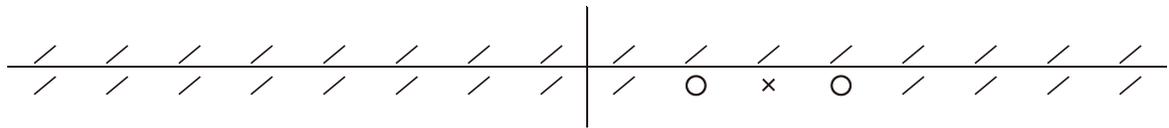
方形の墓壇内に底径約40cmの円形の木棺が埋置されており、その中から人骨が出土している。頭蓋は墓壇内中央から出土している。墓壇内の東側から椎骨・肋骨が出土しており、椎骨は長軸を東西にそろえた状態で概ね関節状態を保って出土している。頭蓋の北側より左大腿骨・左脛骨・左腓骨が長軸を北西にそろえた状態で出土している。頭蓋の南側から椎骨・右大腿骨・右脛骨・右腓骨・右尺骨が長軸を北西にそろえた状態で出土している。椎骨の南側から右肩甲骨が出土し、右肩甲骨の付近から右尺骨が出土している。頭蓋の西側から左尺骨が近位を北に向けた状態で出土している。以上のことから、頭位東、顔面の向きを西に向けて、膝を立てた状態の坐葬で埋葬されたと考えられる。毛髪が出土している。

2. 人骨所見

【2号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は下顎骨の一部が遺存するのみである。歯式は以下の通りである。



(○歯槽開放、×歯槽閉鎖、/欠損、△歯根のみ、・遊離歯 以下同様)

軀幹骨は部位不明の椎体が遺存している。

上肢骨は、右上腕骨の骨体部が遺存している。その他、右第1中手骨・中節骨3点・末節骨1点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨が完存している。左大腿骨は大腿骨頭・骨体部が遺存しており、右大腿骨は骨体部が遺存している。左右脛骨は骨体部が遺存している。その他、右踵骨・左右不明中間楔状骨・左右不明足根骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は左寛骨の大坐骨切痕角が大きいことから女性と判定される。年齢は四肢骨のサイズから成人と推定される。

〔形質〕

大腿骨は、骨体上横径が29.8mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体上矢状径は18.7mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は62.8であり、扁平性は強い。

【3号人骨】

〔保存状態〕

本個体の保存状態は比較的良好。頭蓋はほぼ完存している。冠状縫合・ラムダ縫合は外板が開放しており内板は閉鎖している。矢状縫合は外板・内板ともに閉鎖している。歯式は以下の通りである。

x	x	x	○	x	x	○	x		x	x	x	○	○	x	x	/
x	x	x	x	x	x	x	x		x	x	x	x	x	x	x	x

軀幹骨は、環椎・軸椎・胸椎9点・腰椎3点・仙骨片・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右肩甲骨の関節窩付近が遺存している。左鎖骨は骨体部が遺存しており、右鎖骨は胸骨端から骨体の遠位までが遺存している。左上腕骨はほぼ完存しており、右上腕骨は上腕骨頭以外が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左橈骨はほぼ完存しており、右橈骨は橈骨粗面から遠位関節面までが遺存している。左右尺骨はほぼ完存している。その他、左有鉤骨・右舟状骨・左月状骨・右第3中手骨・右第4中手骨が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の腸骨翼・恥骨枝付近以外が遺存している。左右大腿骨はほぼ完存しており、左右脛骨は近位関節面以外が遺存している。大腿骨の粗線は発達している。脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。左腓骨は骨体部が遺存しており、右腓骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。その他、右距骨・左右踵骨・左舟状骨・左内側楔状骨・左右第1中足骨・左第4中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達していること、脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではないが、上腕骨の三角筋粗面・大腿骨の粗線が発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は左寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase VI であること、頭蓋の縫合の閉鎖状況及び歯槽の閉鎖状況から、熟年と推定される。

〔特記事項〕

胸椎2点にわずかに骨棘が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が188mmであり、近世の比較集団の中でもやや高い値である。頭蓋最大幅は133mmであり、近世の比較集団と大きな差は見られないが、バジオン・ブレグマ高は144mmであり、近世の比較集団と比べて大きな値を示す。頭長幅示数は70.7であり、長頭型を示すが、頭長高示数は76.6であり、高頭型を示す。頭幅高示数は108.3であり、狭頭型を示す。中顔幅は94.1mm、眼窩幅39.8mmであり、近世の比較集団と比べてやや小さな値を示すが、眼窩高は37.5mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。眼窩示数は94.2であり、高眼窩型を示す。鼻幅は23.1mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、鼻高は55.9mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。鼻示数は41.3であり、狭鼻型を示す。前眼窩間幅は18.2mmであり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、鼻根横弧長は29mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。鼻根湾曲示数は62.8であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、鼻根最小幅は8.5mmであり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られない。

下顎骨は、下顎枝幅が32.7mmであり、近世の比較集団の中でも中間的な値である。

上腕骨は、骨体最小周が67mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値である。

橈骨は、最大長が233mm、機能長223mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、最小周

は 41mm、骨体横径 17.5mm、骨体中央横径 14.5mm、骨体矢状径 12.2mm、骨体中央矢状径 12.6mm、長厚示数 18.4、骨体断面示数 69.7 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数は 86.9 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、最小周が 37mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。矢状径は 14.1mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、横径は 16.2mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。骨体断面示数は 87.0 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 32.4mm、中央横径 27.5mm、中央周 97mm、骨体上横径 31.2mm、骨体上矢状径 28.4mm、中央断面示数 117.8 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。上骨体断面示数は 91.0 であり、扁平性は弱い。

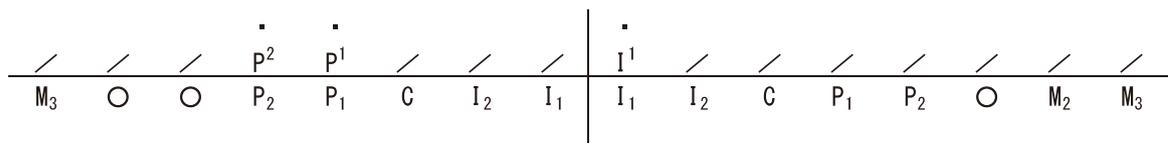
脛骨は、栄養孔位最大径が 33.1mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、栄養孔位横径は 26.9mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。栄養孔位周は 95mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、最小周は 71mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は 81.3 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、最小周が 35mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

【5号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は下顎骨の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は柄原（1957）の 1° b から 2° b である。

躯幹骨は頸椎 2 点・腰椎 4 点・椎体 3 点・仙骨片・椎骨片・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左肩甲骨の関節窩の付近・鳥口突起が遺存している。左橈骨・左尺骨の骨体部が遺存している。その他、左第 3 中手骨・左第 4 中手骨が遺存している。

下肢骨は、右寛骨の腸骨稜・下前腸骨棘・寛骨臼が遺存している。

その他、部位不明の四肢骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は歯牙の咬耗度、椎骨に骨棘が見られることから、成人と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。頸椎 1 点・椎体 1 点に骨棘が認められる。

【7号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。部位不明の頭骨片と四肢骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

〔特記事項〕

骨片は白く変色しており、炭化物も遺存していることから、本個体は火葬されたと考えられる。

【9号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は前頭骨の一部・左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・左右頬骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨が遺存している。冠状縫合・矢状縫合は内板がほぼ閉鎖しており、ラムダ縫合の内板は完全に閉鎖している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

(M ³)	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	○	I ¹	○	I ²	C	P ¹	P ²	△	/	/
/	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	○	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	○	×	/

歯牙の咬耗度は柄原（1957）の2° bから3° である。

軀幹骨は胸骨柄・胸骨体・頸椎8点・胸椎12点・腰椎6点・肋骨片・仙骨片が遺存している。

上肢骨は左右鎖骨が完存している。左肩甲骨は関節窩及び肩峰が遺存しており、右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨は上腕骨頭以外が遺存しており、右上腕骨はほぼ完存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左尺骨は肘頭から骨体の遠位までが遺存しており、右尺骨は鈎状突起から骨体の遠位までが遺存している。その他、左有頭骨・左舟状骨・左右大菱形骨・左右第1中手骨・左右第2中手骨・左右第3中手骨・左右第4中手骨・左右第5中手骨・基節骨5点・中節骨5点・末節骨2点・指骨片1点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨が腸骨翼から寛骨臼付近までが遺存しており、左右大腿骨は大腿骨頭から骨体の遠位までが遺存している。大腿骨の粗線は発達している。右膝蓋骨は完存している。左脛骨は近位関節面から骨体の遠位及び遠位関節面が遺存しており、右脛骨はほぼ完存している。脛骨のヒラメ筋線はやや発達している。左右腓骨は骨体が遺存している。その他、左右不明大腿骨遠位端・左右距骨片・左右踵骨片・右舟状骨片・右立方骨片・左内側楔状骨・左中間楔状骨・左外側楔状骨・左第1中足骨・左第2中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・左第1基節骨・中節骨1点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起・外後頭隆起・乳様突起が発達していること、上腕骨の三角筋粗面・大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線は発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は歯牙の咬耗度並びに冠状縫合・矢状縫合は内板がほぼ閉鎖しており、ラムダ縫合の内板は完全に閉鎖していること、椎骨に骨棘が見られること、寛骨の耳状面がLovejoy（1985）のphase VIであることから、熟年であると推定される。

〔特記事項〕

右下顎犬歯・右下顎第1大臼歯にC2、右下顎第2小臼歯の頰側面歯根部に齲歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。胸椎1点・腰椎3点に骨棘が見られ、胸骨柄と胸骨体は癒合している。頸椎・胸椎に一部別個体と考えられるものが認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が191mm、バジオン・ブレグマ高141mm、中顔幅121mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。頭長高示数は73.8であり、中頭型を示す。

上腕骨は、骨体最小周が62mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

橈骨は、最大長が235mm、機能長229mm、最小周44mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値であり、骨体横径は16.7mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、骨体中央横径は17.0mm、骨体矢状径13.5mm、骨体中央矢状径13.2mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

長厚示数は19.2であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体断面示数は80.8であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。中央断面示数は77.6であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

尺骨は、矢状径が11.5mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、横径は16.2mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は71.0であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が29.1mm、中央横径30.3mm、中央周93mm、骨体上横径35.3mm、骨体上矢状径26.4mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央断面示数は96.0であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は74.8であり、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が32.3mm、栄養孔位横径25.2mm、栄養孔位周89mm、最小周71mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は78.0であり、扁平性は弱い。

【10号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。

躯幹骨は胸骨柄の一部・胸椎11点・肋骨片・仙骨片が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨の胸骨端から骨体中央までが遺存しており、右鎖骨は骨体中央から肩峰端までが遺存している。左右肩甲骨は関節窩が遺存しており、左上腕骨は骨体の中央から近位関節面までが遺存している。

下肢骨は、左寛骨の腸骨稜から寛骨臼までが遺存しており、右寛骨は寛骨臼付近が遺存している。右大腿骨は大腿骨頭から骨体の近位までが遺存している。大腿骨の粗線は発達している。右脛骨・右腓骨は骨体部が遺存している。その他、右距骨片・右踵骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の粗線が発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は、寛骨の耳状面がLovejoy (1985) のphase VIIからVIIIであることから、熟年後半から老年と推定される。

〔特記事項〕

胸椎2点ならびに3点が癒合している。

左鎖骨の肩峰端に骨折が認められる。鎖骨骨折は介達外力によるものが多く、本事例も肩から倒れるなどして肩峰端に加わった力により生じたと考えられ、それが変形治癒したものだと考えられる(高岸1990)。

〔形質〕

大腿骨は、中央矢状径が30.7mm、中央横径27.7mm、中央周92mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央断面示数は110.8であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

【11号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。

躯幹骨は椎骨9点・仙骨片が遺存している。

上肢骨は、右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨は上腕骨頭・骨体の近位が遺存しており、右上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。左橈骨は橈骨頭から骨体中央までが遺存しており、右橈骨は骨体部が遺存している。左尺骨は鈎状突起下位から骨体中央までが遺存しており、右尺

骨は鈎状突起から骨体中央までが遺存している。その他、左大菱形骨片・左第1中手骨・右第2中手骨・右第3中手骨・右第4中手骨・左右第1基節骨・基節骨2点・右第1末節骨が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨が腸骨翼から寛骨臼付近までが遺存している。左大腿骨は大腿骨頸から遠位関節面までが遺存しており、右大腿骨は大腿骨頸から骨体の遠位までが遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。左脛骨は近位関節面・骨体の中央・骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、右脛骨は近位関節面・遠位関節面が遺存している。右腓骨は骨体の中央から外果までが遺存している。その他、右距骨片・右踵骨片・右立方骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、左右大腿骨の粗線がやや発達しているが、上腕骨の遠位関節面・大腿骨頭が小さいこと、寛骨の大坐骨切痕角がやや大きいことから、女性と判定される。年齢は四肢骨の骨端が癒合していることから、成人と推定される。

〔形質〕

尺骨は、矢状径が10.9mm、横径13.9mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、骨体断面示数74.1であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

大腿骨は、骨体上横径が27.2mm、骨体上矢状径20.3mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。上骨体断面示数は74.6であり、扁平性は強い。

脛骨は、最小周が62mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

【13号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。

上肢骨は、右上腕骨の骨体部・遠位関節面の一部が遺存している。左右橈骨は近位関節面の一部が遺存しており、尺骨は近位関節面の一部が遺存している。

下肢骨は、左寛骨の寛骨臼が遺存している。左右大腿骨は大腿骨頭・骨体部が遺存している。大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左脛骨は骨体の遠位・外果が遺存しており、右脛骨は外側顆・骨体の遠位・外果が遺存している。その他、右踵骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大腿骨の骨頭のサイズが小さいこと、大腿骨の粗線の発達が顕著ではないこと、大腿骨の骨体が細いことから、女性の可能性が高いと考えられる。年齢は四肢骨のサイズから成人と推定される。

【14号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は前頭骨の一部・右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・右頬骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。上顎・下顎ともに歯牙は喪失している。歯式は以下の通りである。

<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td> </tr> </table>	/	/	/	/	/	x	x	x	/	x	x	x	x	x	x	x	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">x</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td><td style="text-align: center;">/</td> </tr> </table>	x	x	x	/	/	/	/	/	x	x	x	x	x	/	/	/
/	/	/	/	/	x	x	x																										
/	x	x	x	x	x	x	x																										
x	x	x	/	/	/	/	/																										
x	x	x	x	x	/	/	/																										

上肢骨は、左肩甲骨が関節窩から肩峰までが遺存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。その他、肋骨片・部位不明骨頭片・部位不明四肢骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、歯槽が閉鎖していることから、熟年と推定される。

【15号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、下顎骨の一部が遺存している。その他、頭骨片・椎体片・肋骨片・部位不明骨頭片・指骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

〔特記事項〕

骨片にはクラックが入ったものもあり、硬質で灰色や白色に変色していることから、本個体は火葬されていると推定される。

【17号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。部位不明の骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

〔特記事項〕

骨片は、硬質で白色や灰色に変色していることから、本個体は火葬されたと考えられる。

【18号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・左右蝶形骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	x	x	x	○		x	x	○	○	/	/	M ²	/
/	/	/	P ₂	P ₁	C	x	x		x	x	x	x	x	x	x	x
		

歯牙の咬耗度は柄原（1957）の2° bである。

躯幹骨は環椎片・軸椎片・胸椎2点・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨が胸骨端から骨体中央までが遺存している。左上腕骨は骨体部が遺存しており、右上腕骨は骨体の近位から鈎突窩付近までが遺存している。左橈骨は橈骨粗面下位から骨体の近位までが遺存しており、右橈骨は橈骨粗面下位から骨体の近位及び遠位関節面が遺存している。左尺骨は尺骨粗面付近が遺存しており、右尺骨は尺骨粗面から遠位関節面までが遺存している。その他、左有鈎骨・左舟状骨・右第1中手骨・左右第2中手骨・左右第3中手骨・左右第4中手骨・左右第5中手骨・基節骨5点・中節骨2点が遺存している。

下肢骨は、右大腿骨が大腿骨頸から骨体の近位までが遺存している。右大腿骨の粗線は発達している。左右脛骨は骨体部が遺存しており、左腓骨は骨体部が遺存している。その他、寛骨片・左右不明脛骨近位関節面・左右距骨片・左踵骨片が遺存している。

その他、部位不明骨頭片・指骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の粗線が発達しているが、四肢骨の骨体が細いため、性別を判定することは困難である。年齢は歯牙の咬耗度から成人と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。

〔形質〕

上腕骨は、骨体最小周が 55.0mm である。

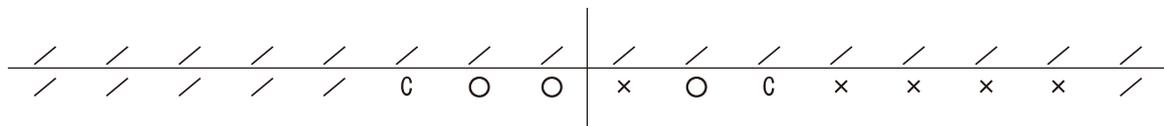
尺骨は、矢状径が 13.0mm、横径 15.1mm、骨体断面示数 86.1 である。

大腿骨は、中央矢状径が 24.7mm、中央横径 27.1mm、中央周 82mm、骨体上横径 32.2mm、骨体上矢状径 24.1mm、中央断面示数 91.1 である。上骨体断面示数は 74.8 であり、扁平性は強い。

【19号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、下顎骨の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は枊原（1957）の 2° b から 3° である。

軀幹骨は胸椎 1 点・腰椎 5 点・椎骨片多数・肋骨片多数が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨が胸骨端から骨体中央までが遺存している。左上腕骨は骨体部が遺存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。左右尺骨は鈎状突起から遠位関節面までが遺存しており、左右橈骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。その他、右有頭骨・右有鉤骨・右豆状骨・左右三角骨・右月状骨・右舟状骨・右大菱形骨・右第 4 中手骨・右第 5 中手骨・指骨片が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨が腸骨翼から寛骨臼までが遺存しており、左右腓骨は骨体部が遺存している。その他、右距骨片が遺存している。

その他、部位不明骨頭片・部位不明四肢骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、前腕が細いこと、寛骨の大坐骨切痕角が大きいことから、女性と判定される。年齢は歯牙の咬耗度から熟年以上と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。

〔形質〕

橈骨は、最小周が 35mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

尺骨は、最小周が 34mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

【20号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良い。頭蓋は上顎骨の一部・下顎骨の左下顎枝以外が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	/	/	/	P ²	/	/	/
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は栢原（1957）の2° bから3° である。

軀幹骨は環椎・軸椎・頸椎1点・胸椎6点・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨の骨体部と右鎖骨の肩峰端が遺存している。左上腕骨は上腕骨頭と骨体中央から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は骨体中央部以外が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左尺骨は近位関節面・骨体中央部から遠位関節面が遺存しており、右尺骨は近位関節面から骨体の遠位部までが遺存している。右橈骨はほぼ完存している。その他、右舟状骨が遺存している。

下肢骨は、右大腿骨の遠位関節面が遺存している。左右膝蓋骨は完存している。右脛骨はほぼ完存している。脛骨のヒラメ筋線は発達している。左腓骨は近位関節面が遺存しており、右腓骨は骨体中央から遠位関節面までが遺存している。その他、左右距骨・左右踵骨・左右舟状骨・左右外側楔状骨・左右中間楔状骨・左右内側楔状骨・左右立方骨、左右第1中足骨・左右第2中足骨・左右第3中足骨・左第4中足骨・左右第5中足骨・基節骨5点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、上腕骨の三角筋粗面が発達し、脛骨のヒラメ筋線が発達しているが、上腕骨頭のサイズ及び脛骨骨体の長径・骨端のサイズから、女性と判定される。年齢は歯牙の咬耗度から、熟年と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。左右尺骨の近位関節面に関節炎が認められる。

〔形質〕

下顎骨は、オトガイ高が35.6mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値である。

上腕骨は、骨体最小周が57mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が12.0mm、横径16.3mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。骨体断面示数は73.6であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

脛骨は、全長が297mm、最大長300mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央最大径は27.3mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。中央横径は19.6mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央周は73mm、最小周64mm、長厚示数21.5であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

【21号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良い。頭蓋は前頭骨の一部・右頭頂骨の一部・上顎骨・下顎骨の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

m ²	m ¹	c	i ²	i ¹		i ¹	i ²	c	m ¹	m ²	(M ¹)
m ₂	m ₁	c	△	△		/	/	/	/	/	

上肢骨は、左上腕骨の骨体部・左橈骨の骨体部・左右尺骨の骨体部が遺存している。

下肢骨は、左寛骨の腸骨の一部・恥骨の一部・坐骨の一部が遺存している。左大腿骨は骨体部が遺存

している。左脛骨は骨体部が遺存しており、左右腓骨は骨体部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は歯牙の萌出状態から3歳程度の幼児と推定される。

【23号人骨】

〔保存状況〕

本人骨の保存状況は比較的良い。頭蓋は遺存していない。

躯幹骨は軸椎片・頸椎5点・胸椎8点・腰椎5点・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨がほぼ完存しており、左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨は骨体部が遺存しており、右上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。上腕骨の三角筋粗面の発達は顕著ではない。左橈骨は橈骨粗面下位から遠位関節面までが遺存しており、右橈骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。左尺骨は尺骨頭以外が遺存しており、右尺骨はほぼ完存している。その他、左小菱形骨・種子骨・左第2中手骨・左第3中手骨・左第4中手骨・基節骨4点・中節骨5点・末節骨3点が遺存している。

下肢骨は左右寛骨の恥骨以外が遺存している。左右腓骨は骨体部が遺存している。その他、左右距骨・左右踵骨・左右立方骨・左右舟状骨・右内側楔状骨・右中間楔状骨・左右外側楔状骨・左第1中足骨・左右第2中足骨・左右第3中足骨・左右第4中足骨・左第5中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、上腕骨の三角筋粗面の発達は顕著ではないが、四肢骨の骨体が太いこと、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は、仙骨が未癒合であること、寛骨の耳状面がLovejoy (1985) の phase II から III を示すことから、成年と推定される。

〔形質〕

上腕骨は、骨体最小周が62mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

橈骨は、最小周が44mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体横径は14.9mmであり、近世の比較集団と比べて小さな値である。骨体中央横径は16.2mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体矢状径は11.3mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。骨体中央矢状径は12.3mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。骨体断面示数は75.8であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、中央断面示数は75.9であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

尺骨は、機能長が219mm、最小周37mm、矢状径14.0mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、横径は15.6mm、長厚示数16.9であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。骨体断面示数は89.7であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

【26号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。部位不明の骨片が多数遺存している。頭蓋は、左側頭骨の一部が遺存している。

躯幹骨は、右第1肋骨片が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨の肩峰端及び左上腕骨の骨体部が遺存している。

下肢骨は、左膝蓋骨が遺存している。

その他、頭骨片・肋骨片・下顎骨片が遺存している。

りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
/	/	/	/	/	/	/	/	I ₁	I ₂	/	/	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は栢原（1957）の 2° a から 3° である。

躯幹骨は頸椎片が遺存するのみである。

上肢骨は、左右鎖骨の骨体中央から肩峰端までが遺存している。左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。

下肢骨は、左寛骨が腸骨翼から寛骨臼までが遺存しており、右寛骨は寛骨臼が遺存している。左右大腿骨は大腿骨頭から骨体の遠位までが遺存している。左脛骨は近位関節面から骨体の中央までが遺存しており、右脛骨はほぼ完存している。左腓骨は骨体部が遺存しており、右腓骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起及び外後頭隆起が発達しておらず、寛骨の大坐骨切痕角が大きいことから、女性と判定される。年齢は歯牙の咬耗度から、熟年以上と推定される。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 176mm であり、近世の比較集団の中でも大きい値を示す。前眼窩間幅は 16.5mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

上腕骨は、骨体最小周が 50mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 23.6mm、中央横径 23.4mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、中央周は 75mm、骨体上横径 29.5mm、骨体上矢状径 22.6mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数は 100.9 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。上骨体断面示数は 76.6 であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が 28.0mm、栄養孔位横径 20.7mm、栄養孔位周 78mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は 73.9 であり、扁平性は弱い。

【31 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。左右不明橈骨骨体並びに部位不明の四肢骨片・骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

【32 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨の一部・左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・鼻骨・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。ラムダ縫合が内板・外板ともに閉鎖している。歯式は以下の通りである。

/	/	/	x	x	x	x	x	x	x	x	x	/	/	/	/	/
/	/	/	/	/	x	x	x	x	x	x	x	x	x	/	/	/

上肢骨は、右舟状骨片が遺存している。その他、指骨片が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨が寛骨臼が遺存している。左大腿骨は大腿骨頸から遠位関節面までが遺存しており、右大腿骨は大転子下方から遠位関節面までが遺存している。大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左脛骨は近位関節面から骨体の近位までが遺存しており、右脛骨は骨体部・遠位関節面が遺存している。左腓骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、右腓骨は腓骨頭・骨体部が遺存している。その他、左膝蓋骨片・右距骨片・右踵骨片・趾骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起・外後頭隆起が発達しておらず、大腿骨の粗線の発達は顕著ではないこと、四肢骨が細いことから、女性と判定される。年齢は頭蓋の縫合の閉鎖状況、歯槽の閉鎖状況から、熟年以上と推定される。

〔形質〕

大腿骨は、骨体上横径が 25.5mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、骨体上矢状径は 22.6mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。上骨体断面示数は 88.6 であり、扁平性は弱い。

【33 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。部位不明の頭骨片・四肢骨片・骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

【34 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。

下肢骨は、右大腿骨の骨体部・左右脛骨の骨体部・左右不明腓骨の骨体部が遺存している。

その他、頭骨片・部位不明骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。

【35 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨の一部・左右側頭骨の一部・外後隆起部付近の後頭骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。

下肢骨は右大腿骨の骨体部・左右脛骨の骨体部が遺存している。大腿骨の粗線は発達している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の粗線が発達しているが、その他の部位の遺存状態が良好ではないため、不明である。年齢は、四肢骨のサイズから、成人と推定される。

【36 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、左右側頭骨片が遺存するのみである。

下肢骨は、左右大腿骨骨体部・左右脛骨骨体部が遺存するのみである。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は、判定可能な部位が残存していないため不明である。

【37号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は、ほぼ完存している。冠状縫合・ラムダ縫合は開放しており、矢状縫合は外板が閉鎖し始めている。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	×
×	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は、柄原（1957）の 1° c から 3° である。

軀幹骨は、環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・肋骨片・仙骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨・左右肩甲骨の関節窩が遺存している。左上腕骨は近位関節面から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左右橈骨はほぼ完存しており、左右尺骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。その他、左右頭骨・左右鈎骨・左舟状骨・左小菱形骨・右第 1 中手骨・中節骨 1 点・左右不明中手骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨が腸骨翼から恥骨までが遺存しており、右寛骨は腸骨翼から寛骨臼までが遺存している。左右大腿骨・左右脛骨はほぼ完存しており、左右腓骨は遠位関節面を除いて遺存している。大腿骨の粗線は発達している。その他、右距骨・左右踵骨・左右不明中足骨 1 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、外後頭隆起・乳様突起・眼窩上隆起が発達し、寛骨の大坐骨切痕角が小さいこと、上腕骨の三角筋粗面・大腿骨の粗線が発達し、四肢骨の骨体が太いことから、男性と判定される。年齢は、矢状縫合の外板が閉鎖しかけていること、寛骨の耳状面が Lovejoy（1985）の phase VI から VII を示すこと、歯牙の咬耗度から、熟年と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。第 10 胸椎の下関節突起の椎孔側の上方、胸椎 1 点に骨棘が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 191mm、頭蓋最大幅 137mm、バジオン・ブレグマ高 149mm、顔高 132.9mm、上顔高 74.1mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値である。頭長幅示数は 71.7 であり、長頭型を示すが、頭長高示数は 78.0 であり、高頭型を示す。頭幅高示数は 108.8 であり、狭頭型を示す。眼窩幅は 44.2mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、眼窩高は 35.7mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られない。眼窩示数は 80.8 であり、中眼窩型を示す。鼻幅は 27.3mm、鼻高 54.9mm を示すが、近世の比較集団の中でも大きな差は見られない。鼻示数は 49.7 であり、中鼻型を示す。全側面角は 86° であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、歯槽側面角は 64° であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。前眼窩間幅は 16.3mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、鼻骨最小幅は 8.8mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値である。

下顎骨は、オトガイ高が 43.2mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。下顎枝高は 53.9mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、下顎枝幅は 36.3mm、下顎枝示数 67.3 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が 71mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、最小周が 46mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、骨体横径は 17.9mm、骨体中央横径 16.9mm、骨体矢状径 13.0mm、骨体中央矢状径 13.3mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は 72.6、中央断面示数 78.7 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

尺骨は、矢状径が 13.7mm、横径 16.2mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体断面示数は 84.6 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 28.7mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央横径は 29.2mm、中央周 93mm、骨体上横径 33.4mm、骨体上矢状径 27.9mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。中央断面示数は 98.3 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は 83.5 であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、最大長が 352mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、中央最大径は 29.6mm、栄養孔位最大径が 34.4mm、中央横径 22.6mm、栄養孔位横径 24.8mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央周は 85mm、栄養孔位周 95mm、最小周 78mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、中央断面示数は 76.4 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は 72.1 であり、扁平性は弱い。

【38 号人骨】

本墓壙からは 2 体の人骨が出土している。頭蓋の後頭骨に重複が見られ四肢骨の長さも大きく異なることから別個体と判断した。土壙西側から出土した人骨を 38 号-A、東側から出土した人骨を 38 号-B とする。

〔保存状態：38 号 - A〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は右頭頂骨の一部・後頭骨の一部が遺存するのみである。

上肢骨は、右上腕骨の骨体部が遺存している。右尺骨は近位関節面・骨体の近位が遺存している。

下肢骨は、右寛骨の寛骨臼が遺存している。右大腿骨は骨体部が遺存しており、右脛骨は骨体部が遺存している。大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線の発達は明瞭ではない。その他、左右不明腓骨片も遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではないが、外後頭隆起が発達していることから、男性と判定される。年齢は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

〔特記事項〕

B 号人骨よりも四肢骨が細い個体である。

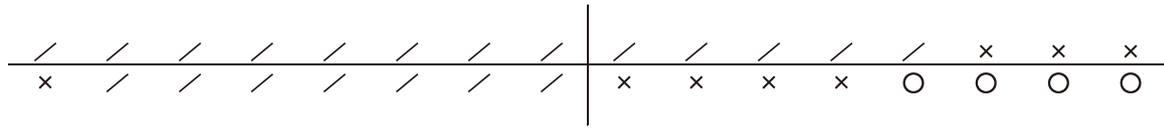
〔形質〕

大腿骨は、中央矢状径が 27.6mm、中央横径 27.6mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央周は 90mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。骨体上横径は 31.9mm、骨体上矢状径 26.1mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央断面示数は 100.0 であり、近世の比較集団の中でもやや低い値を示す。上骨体断面示数は 81.8 であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、栄養孔位横径が 21.8mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

〔保存状態：38 号 - B〕

本人骨の保存状態は比較的良い。頭蓋は、左右頭頂骨の一部・後頭骨の一部・左右上顎骨・下顎の右下顎頭以外は遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。歯式は以下の通りである。



躯幹骨は環椎・軸椎・頸椎3点・胸椎5点・腰椎4点が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨がほぼ完存している。右肩甲骨は関節窩・外側縁が遺存している。左上腕骨は上腕骨頭以外が遺存しており、左橈骨は骨体が遺存している。左尺骨は尺骨頭から骨体の近位までが遺存している。

下肢骨は、左大腿骨の骨体部が遺存している。大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左脛骨は近位関節面以外が遺存しており、左腓骨は骨体部が遺存している。脛骨のヒラメ筋線はやや発達している。その他、左距骨・左踵骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の粗線の発達は顕著ではないが、脛骨のヒラメ筋線はやや発達していること、外後頭隆起・乳様突起が発達していること、寛骨の大坐骨切痕角もやや小さいことから、男性と判定される。年齢は歯槽の閉鎖状況から熟年以上であると推定される。

〔特記事項〕

右頭蓋の乳様突起部よりもやや上方に円形の膨隆が認められる。腰椎2点に骨棘が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が183mm、頭蓋最大幅140mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。バジオン・ブレグマ高は145mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。頭長高示数は76.5であり、中頭型を示すが、頭長高示数は79.2であり、高頭型を示す。頭幅高示数は103.6であり、狭頭型を示す。眼窩幅は40.5mm、眼窩高33.5mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩示数は82.7であり、中眼窩型を示す。前眼窩間幅は16.2mmであり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、鼻骨最小幅は4.9mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が28.5mm、中央横径26.7mm、中央周88mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体上横径は33.2mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。骨体上矢状径は24.7mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央断面示数は106.7であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られない。上骨体断面示数は74.4であり、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位横径が23.6mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

【41号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。

左上腕骨骨体部が遺存しているのみである。

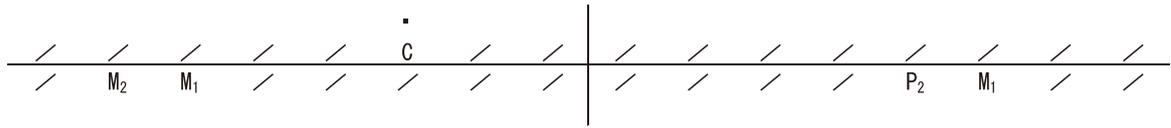
〔性別と年齢〕

性別・年齢は判別可能な部位が遺存していないため不明である。

【42号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は前頭骨の一部・左右頭頂骨の一部・右側頭骨の一部・後頭骨の一部・左右下顎枝片が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は栢原（1957）の 1° b から 1° c である。

下肢骨は右大腿骨の骨体部と左腓骨の骨体部が遺存している。

その他、部位不明の四肢骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判別可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、歯牙の咬耗度から、成年と推定される。

【43号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。

躯幹骨は第3 - 5 腰椎・仙骨片・左右肋骨片が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨・左右橈骨・左右尺骨の骨体部が遺存している。その他、左右中手骨片が複数遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の恥骨枝付近以外が遺存している。その他、左距骨・左舟状骨・左第1中足骨・左第2中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・右第一基節骨が出土している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は判別可能な部位が遺存していないため不明である。

【45号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。骨片と考えられるものが1点遺存している。

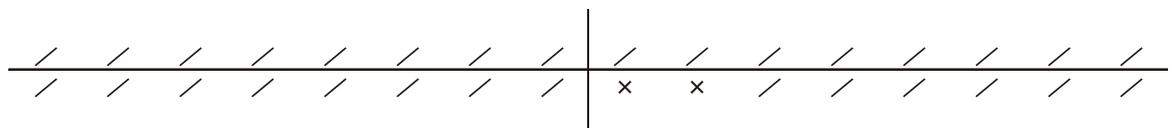
〔性別と年齢〕

性別・年齢は判別可能な部位が遺存していないため不明である。

【51号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨の一部・右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。歯式は以下の通りである。



躯幹骨は環椎片が遺存している。

上肢骨は、左上腕骨は骨体の中央から上腕骨滑車上位までが遺存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。左尺骨は鈎状突起下位から骨体の近位までが遺存しており、右尺骨は骨体部が遺存している。その他、左第1中手骨・基節骨2点が遺存している。

下肢骨は、右大腿骨が大腿骨頭から骨体中央までが遺存している。その他、左踵骨・左立方骨・左第1基節骨が遺存している。

その他、部位不明指骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、四肢骨がやや太いが、この部位からのみの判定は困難である。年齢は歯槽の閉鎖状況、右大腿骨の大腿骨頭が癒合していることから、成人と推定される。

〔特記事項〕

右大腿骨の骨体が前方に大きく湾曲している。

〔形質〕

大腿骨は、骨体上横径が 30.6mm、骨体上矢状径 22.6mm である。上骨体断面示数は 73.9 であり、扁平性は強い。

【52 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良好。頭蓋は、前頭骨の一部・左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。矢状縫合・ラムダ縫合が開放している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。その他、左右不明の下顎頭 1 点・歯根 3 点が遺存している。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	/	P ²	M ¹	/	M ³
M ₃	○	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	/

歯牙の咬耗度は栞原（1957）の 1° a から 1° b である。

軀幹骨は環椎・軸椎・頸椎 1 点・胸椎 10 点・腰椎 5 点・仙骨の一部・椎骨片・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、右肩甲骨の外側縁から関節窩までが遺存している。左上腕骨は骨体中央から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。左尺骨は肘頭から骨体中央までが遺存している。左橈骨は橈骨頭から橈骨粗面下部までが遺存しており、右橈骨は遠位関節面が遺存している。その他、右有頭骨・右有鉤骨・左月状骨・右舟状骨・右大菱形骨・右小菱形骨・左第 1 中手骨・右第 2 中手骨・右第 3 中手骨・右第 4 中手骨・左第 1 基節骨・基節骨 3 点・末節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨が腸骨翼から恥骨結合面までが遺存しており、右寛骨は腸骨翼・恥骨・坐骨の一部以外が遺存している。左右大腿骨は大腿骨頭から骨体中央までが遺存している。大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左脛骨は骨体部が遺存しており、左腓骨は骨体部が遺存している。

その他、左右不明下顎頭 1 点・指骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は外後頭隆起が発達しておらず、寛骨の大坐骨切痕角が大きいこと、大腿骨の粗線の発達が顕著ではないこと、大腿骨頭のサイズが小さいことから、女性と判定される。年齢は矢状縫合・ラムダ縫合が開放しており、第 1 仙椎・第 2 仙椎が未癒合であることから、成年と判定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められ、右下顎第 1 大臼歯に C2 の齶歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。

〔形質〕

尺骨は、横径が 14.5mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 23.9mm、骨体上横径 29.5mm、骨体上矢状径 20.9mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。上骨体断面示数は 70.8 であり、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が 28.7mm、栄養孔位横径 19.9mm、栄養孔位周 77mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は 69.3 であり、扁平性は弱い。

【53 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別・年齢は判別可能な部位が遺存していないため不明である。

【54 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋はほぼ完存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合の内板は閉鎖しており、冠状縫合・矢状縫合の外板は開放、ラムダ縫合の外板は一部閉鎖している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹		I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	/
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	×	×

歯牙の咬耗度は柄原（1957）の 1° b から 3° である。

軀幹骨は胸骨柄・胸骨体・環椎・軸椎・頸椎 3 点・胸椎 9 点・腰椎 5 点・肋骨片・椎骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨がほぼ完存しており、左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左右上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、左右橈骨は橈骨粗面から骨体の遠位までが遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左尺骨は鉤状突起から骨体の遠位までが遺存しており、右尺骨は鉤状突起から遠位関節面までが遺存している。その他、右第 2 中手骨・左右第 3 中手骨・右第 4 中手骨・中節骨 3 点・末節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨が腸骨窩から寛骨臼付近までが遺存している。左大腿骨は大腿骨頸から骨体の近位までが遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭から遠位関節面までが遺存している。左脛骨は脛骨粗面下位から近位関節面までが遺存しており、右脛骨は内側顆以外が遺存している。左右腓骨は骨体部が遺存している。その他、左右距骨片・左右踵骨片・右立方骨・右内側楔状骨・右中間楔状骨・左第 1 中足骨・左右第 4 中足骨・基節骨 2 点・部位不明中足骨片 1 点が遺存している。

その他、指骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、前頭結節が発達しており、寛骨の大坐骨切痕角も大きい。眼窩上隆起・乳様突起がやや発達しており、四肢骨の骨体が太く、上腕骨の三角筋粗面が発達していることから、男性と判定される。年齢は頭蓋の縫合の閉鎖状況、歯牙の咬耗度から成人と推定される。

〔特記事項〕

甲状軟骨に骨化が見られ、胸骨柄の第 1 肋間関節面にも軟骨の骨化が見られる。また、仙骨の未癒合が認められる。さらに、腰椎に骨棘が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 188mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、頭蓋最大幅が 143mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。バジオン・ブレグマ高 131mm であり、

ることから、幼児と推定される。

【56号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良い。頭蓋は、前頭骨の一部・左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・鼻骨の一部・左頬骨・上顎骨の一部・下顎骨が遺存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合の内板はほぼ閉鎖しており、ラムダ縫合の外板は一部閉鎖し始めている。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

○	○	×	×	×	△	I ²	I ¹	I ¹	×	×	×	×	×	/	/
M ₃	×	×	○	P ₁	○	○	○	○	○	○	/	P ₂	/	×	×

歯牙の咬耗度は柘原（1957）の2° aから3° である。

躯幹骨は環椎・軸椎・頸椎3点・胸椎5点・腰椎4点・仙骨片・椎骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨がほぼ完存している。左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨はほぼ完存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。上腕骨の三角筋粗面はやや発達している。左橈骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存しており、右橈骨は骨体部が遺存している。左右尺骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。その他、右第3中手骨・末節骨1点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の腸骨翼から寛骨臼までが遺存している。左右大腿骨は大腿骨頭から遠位関節面までが遺存しており、左右脛骨は骨端以外が遺存している。大腿骨の粗線はやや発達しているが、脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。左右腓骨は骨体部が遺存している。その他、右距骨・右踵骨・左右舟状骨・右第1中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、上腕骨の三角筋粗面・大腿骨の粗線はやや発達しているが、脛骨のヒラメ筋線の発達顕著ではないこと、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達しておらず、前頭結節が発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が大きいことから、女性と判定される。年齢は歯牙の咬耗度並びに寛骨の耳状面がLovejoy（1985）のphase VIIIを示すことから、老年と推定される。

〔特記事項〕

左眼窩上壁にクリブラ・オルビタリアが認められる。右上顎犬歯にC4の齶歯が認められる。腰椎4点に重度の骨棘が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が186mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値である。

下顎骨は、オトガイ高が31.4mm、下顎枝幅30.2mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

上腕骨は、最大長が287mm、中央最大径21.1mm、中央最小径16.4mm、骨体断面示数63mm、骨体断面示数77.8mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

橈骨は、骨体横径が15.9mm、骨体中央矢状径10.6mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体断面示数は66.7であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

尺骨は、最小周が34mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、矢状径は12.5mm、横径16.6mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は75.3であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

脛骨は、栄養孔位最大径が 25.3mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、栄養孔位横径は 19.6mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位周は 72mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、最小周は 60mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。栄養孔位断面示数は 77.5 であり、扁平性は弱い。

【58号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、左右頭頂骨の一部・後頭骨の一部・左頬骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は開放している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	○	○	○	I ¹	I ¹	I ²	○	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	P ₁	○	/	/	/

歯牙の咬耗度は柘原（1957）の 1° a から 2° b である。

軀幹骨は胸骨柄が遺存している。

上肢骨は、左上腕骨が骨体の中央から上腕骨滑車上位までが遺存している。左尺骨は鉤状突起から骨体の近位までが遺存している。

下肢骨は、左大腿骨が骨体中央から遠位関節面までが遺存しており、右大腿骨は小転子から遠位関節面までが遺存している。左右脛骨は近位関節面から骨体の中央までが遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、歯牙の咬耗度、四肢骨骨端が癒合していることから、成人と推定される。

〔特記事項〕

左上顎第 2 小臼歯に C2 の齲歯が認められる。

【60号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良い。頭蓋は前頭骨・左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・鼻骨・左右頬骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部・左ツチ骨が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

(M ³)	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	(M ³)
(M ₃)	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	(M ₃)

歯牙の咬耗度は柘原（1957）の 0° から 1° a である。

軀幹骨は環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 8 点・腰椎 4 点・肋骨片・仙骨片が遺存している。

上肢骨は、左鎖骨の骨体部が遺存している。左右肩甲骨は関節窩が遺存しており、左右上腕骨は骨体部が遺存している。左右橈骨は骨体部が遺存しており、左右尺骨は鉤状突起下位から骨体の遠位までが遺存している。その他、基節骨 2 点・中節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の腸骨の一部・恥骨の一部が遺存している。左右大腿骨は大腿骨頸から骨体の近位までが遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は、左右上・下顎の第3大臼歯が未萌出であること、歯牙の咬耗度、右肩甲骨の関節窩・椎骨・左右恥骨・左右大腿骨の大腿骨頭・左脛骨の近位関節面・指骨が未癒合であること、恥骨結合面が Brooks and Suchy (1990) の phase I を示すことから、若年と推定される。

〔特記事項〕

歯牙に歯石が認められる。

【61号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良好。頭蓋は前頭骨・左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・蝶形骨の一部・鼻骨・右頬骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。冠状縫合・矢状縫合の外板は開放しており、内板は閉鎖している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

x	M ²	x	P ²	x	C	O	O		/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	/	/	O	O	O	x		O	I ₂	C	P ₁	x	x	x	x	x

歯牙の咬耗度は 栢原 (1957) の 1° b から 3° である。

頭蓋骨は環椎片・軸椎片・頸椎1点・胸椎3点・腰椎5点・椎骨片・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右寛骨がほぼ完存しており、左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨は三角筋粗面から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は外科頸から骨体中央までが遺存している。左尺骨は鈎状突起から骨体中央までが遺存している。その他、左右不明上腕骨頭片が遺存している。

下肢骨は、左寛骨が腸骨窩から寛骨臼まで遺存している。左大腿骨は大腿骨頭から遠位関節面までが遺存しており、右大腿骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。左右脛骨は脛骨粗面から骨体までが遺存しており、左腓骨は骨体部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、眼窩上隆起が発達していないこと、寛骨の大坐骨切痕角が小さいこと、四肢骨が細いことから、女性と判定される。年齢は、冠状縫合・矢状縫合の内板が閉鎖していること、歯牙の咬耗度から、熟年以上と推定される。

〔特記事項〕

左眼窩上壁にクリブラ・オルビタリアが、下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、前眼窩間幅が 14.0mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値である。

大腿骨は、中央矢状径が 23.1mm、中央横径 23.4mm、中央周 73mm、中央断面示数 98.7 であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

脛骨は、栄養孔位最大径が 29.7mm、栄養孔位横径 18.8mm、栄養孔位周 79mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は 63.3 であり、扁平性はやや強い。

【62号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良好。前頭骨の一部・左右頭頂骨・左右側頭骨の一部・大後頭孔付近を含む後頭

径は 20.2mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位周は 73mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。栄養孔位断面示数は 76.2 であり、扁平性は弱い。

【63 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は前頭骨の一部・右側頭骨の一部・下顎骨の右側及び左オトガイ孔部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	(M ¹)	m ²	m ¹	(C) c	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
/	/	(M ₁)	m ₂	m ₁	○	/	/	○	○	○	○	/	/	/	/
					(C)					(C)					

歯牙の咬耗度は栢原 (1957) の 0° から 1° a である。

軀幹骨は椎体片・肋骨片が遺存している。

下肢骨は、左寛骨の大坐骨切痕付近が遺存している。左大腿骨は骨体部・遠位関節面が遺存しており、右大腿骨は骨体部が遺存している。その他、左右不明脛骨骨体部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、判定可能な部位が残存していないため不明である。年齢は、左大腿骨の最大長が 140mm であることと、第 1 大臼歯が未萌出だが上下ともに形成されていることから幼児と推定される。

〔特記事項〕

椎体 1 点に骨棘が認められる。

【64 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は完存している。冠状縫合・矢状縫合の外板は閉鎖しており、ラムダ縫合は開放している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

x	x	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	x	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	/	C	P ₁	P ₂	x	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は栢原 (1957) の 1° c から 3° である。

軀幹骨は環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・肋骨片・胸骨・仙骨が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨はほぼ完存している。左上腕骨は完存しており、右上腕骨は上腕骨頭以外が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左橈骨は近位関節面から遠位関節面までが遺存しており、右橈骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。左右尺骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。その他、左右頭骨・左月状骨・右舟状骨、左第 1 中手骨・右第 3 中手骨・左右第 4 中手骨・左右第 5 中手骨・基節骨 4 点・中節骨 10 点・末節骨 8 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・左膝蓋骨が完存している。大腿骨の粗線はやや発達している。左脛骨はほぼ完存しており、右脛骨は近位関節面以外が遺存している。脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。左右腓骨は遠位関節面以外が遺存している。その他、右距骨・左右踵骨・右舟状骨・左立法骨・左右内側楔状骨・左右中間楔状骨・左右外側楔状骨・右第 1 中足骨・左右第 2 中足骨・左右第 3 中足骨・左右第 4 中足骨・左第 5 中足骨・左右不明中足骨 1 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、外後頭隆起・乳様突起が発達していること、脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではないが、上腕骨の三角筋粗面が発達し、大腿骨の粗線がやや発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は、頭蓋の縫合の閉鎖状況、寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase VIII を示すこと、甲状軟骨の骨化が見られることから、老年と推定される。

〔特記事項〕

歯牙に歯石が見られ、下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また左下顎側切歯が先天性な欠如をしている。胸椎 6 点・腰椎 5 点に骨棘が見られ、甲状軟骨が骨化している。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 178mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、頭蓋最大幅は 133mm、バジオン・プレグマ高 130mm であり、近世の比較集団と比べて小さな値を示す。頭長幅示数は 74.7 であり、長頭型を示すが、頭長高示数は 73.0 であり、中頭型を示す。頭幅高示数は 97.7 であり、中頭型を示す。頬骨弓幅は 135mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、中顔幅は 95.3mm、顔高 119.2mm、上顔高 69.9mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。コルマンの顔示数は 88.3 であり、中顔型を示し、ウィルヒョウの顔示数は 125.1 であり、正顔型を示す。コルマンの上顔示数は 51.8 であり、中上顔型を示し、ウィルヒョウの上顔示数は 73.3 であり、低顔型を示す。眼窩幅は 41.4mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、眼窩高は 31.1mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩示数は 75.1 であり、低眼窩型を示す。鼻幅は 27.5mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、鼻高は 46.6mm、全側面角 78°、歯槽側面角 63° であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。鼻示数は 59.0 であり、過広鼻型を示す。前眼窩間幅は 18.7mm、鼻根横弧長 28mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、鼻根湾曲示数は 66.8、鼻骨最小幅 6.5mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

下顎骨は、下顎頭間幅が 127.4mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、オトガイ高は 32.6mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。下顎枝幅は 34.8mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

上腕骨は、最大長が 288mm、全長 283mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、中央最大径は 21.6mm、中央最小径 17.4mm、骨体最小周 63mm、中央周 67mm、骨体断面示数 80.6、長厚示数 21.9 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

橈骨は、機能長が 205mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、最小周は 42mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。骨体横径は 16.6mm、骨体矢状径 11.8mm、長厚示数 20.5、骨体断面示数 71.1 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

尺骨は、最小周が 34mm であり、近世の比較集団と比べてやや小さな値を示す。矢状径は 12.9mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、横径は 15.9mm であり、近世の比較集団と比べてやや小さな値を示す。骨体断面示数は 81.1 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

大腿骨は、中央矢状径が 26.7mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 26.6mm、中央周 83mm、骨体上横径 30.2mm、骨体上矢状径 24.3mm、中央断面示数 100.4 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。上骨体断面示数は 80.5 であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、全長が 306mm、最大長 312mm、中央最大径 27.5mm、栄養孔位最大径 30.1mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 23.2mm、栄養孔位横径 25.9mm、中央周 82mm、栄養孔位周 88mm、最小周 72mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数は 84.4

であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、長厚示数は23.5であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は86.0であり、扁平性は弱い。

腓骨は、最小周が37mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

【65号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋はほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	/	/	/	×	○	○	○	I ¹	○	C	P ¹	○	○	×	×
M ₃	△	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	O	△	×	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は栢原（1957）の2° aから3°である。

軀幹骨は環椎・軸椎・頸椎3点・胸椎3点・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、右鎖骨がほぼ完存しており、左鎖骨は骨体部が遺存している。左右肩甲骨は一部が遺存している。右上腕骨は遠位関節面以外が遺存しており、左上腕骨は骨体部が遺存している。左橈骨は骨体部が遺存しており、右橈骨は橈骨粗面下位から骨体の近位までが遺存している。左尺骨は骨体部が遺存しており、右尺骨は肘頭以外が遺存している。その他、左右有頭骨・左右鉤骨・左右三角骨・左月状骨・左大菱形骨・左小菱形骨・右第1中手骨・右第2中手骨・右第3中手骨・右第4中手骨・右第5中手骨・基節骨4点・左右不明指骨片数点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨の一部が遺存しており、右寛骨は腸骨翼・寛骨臼の一部が遺存している。左大腿骨は骨体部・大腿骨頭が遺存しており、右大腿骨は骨体部が遺存している。大腿骨の粗線は発達している。左右脛骨は骨体部が遺存しており、左右腓骨は骨体部が遺存している。脛骨のヒラメ筋線はやや発達している。その他、右距骨・右踵骨・左右不明第一中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の骨体が太く、粗線の発達が認められること、脛骨のヒラメ筋線もやや発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は、歯牙の咬耗度から、熟年と推定される。

〔特記事項〕

左上顎第1大臼歯・右下顎第3大臼歯にC2、右下顎第1大臼歯にC3、右下顎第2大臼歯・左下顎第2小臼歯にC4の齲歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。

右橈骨の遠位骨体部に肥厚が確認され、右前腕近位部にいわゆるコーレス骨折が認められる。また、左尺骨の尺骨頭に骨折由来と考えられる重度の関節炎が認められる。コーレス骨折は、手を背屈位にして転倒することにより性別年齢を問わず発生するが、変形治癒をしても機能障害は比較的軽度であることが知られている（田島 1990）。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大幅が137mm、頬骨弓幅126mm、顔高127.8mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。コルマンの顔示数は101.4であり、高顔型を示す。眼窩高は42.3mmであり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、眼窩幅は31.9mm、鼻幅22mm、全側面角78°であり、近世の比較集団と比べて小さな値を示す。眼窩示数は75.4であり、低眼窩型を示す。歯槽側面角は73°であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、前眼窩間幅は19.1mm、鼻根横弧長28mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示し、鼻根湾曲示数は68.2、鼻骨最小幅5.7mmであり、近世の比較集

団の中でも小さな値を示す。

下顎骨は、下顎枝幅が 34.3mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られない。

上腕骨は、骨体最小周が 70mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、最小周が 46mm であり、近世の比較集団と比べて大きな値を示すが、骨体横径は 16.5mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。骨体矢状径は 12.8mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体断面示数は 77.6 であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

尺骨は、矢状径が 15.3mm、横径 17.7mm、骨体断面示数 86.4 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

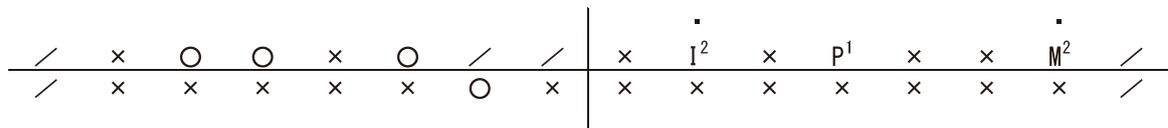
大腿骨は、中央矢状径が 33.4mm、中央横径 31.0mm、中央周 101mm、骨体上横径 33.5mm であり近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、骨体上矢状径 26.1mm、中央断面示数 107.7 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。上骨体断面示数は 77.9 であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、中央最大径 31.8mm、栄養孔位最大径 36.0mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、中央横径は 21.0mm、栄養孔位横径 23.4mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央周は 88mm、栄養孔位周 97mm、最小周 79mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、中央断面示数は 66.0 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。栄養孔位断面示数は 65.0 であり、扁平性は強い。

【66 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は前頭骨の一部・左右頬骨の一部・下顎の右下顎頭以外が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は栃原（1957）の 3° である。

軀幹骨は、環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 7 点・腰椎 1 点・椎骨片 4 点・左第一肋骨・肋骨片 4 点が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の骨体が遺存している。左右肩甲骨は完存している。左上腕骨は遠位関節面以外が遺存しており、右上腕骨は上腕骨頭以外が遺存している。左橈骨は骨体中央から遠位関節面までが遺存しており、左尺骨は骨体が遺存している。その他、左右有頭骨・左三角骨・右月状骨・左右舟状骨・右大菱形骨・右小菱形骨・右第 1 中手骨・右第 2 中手骨・右第 3 中手骨・右第 4 中手骨・右第 5 中手骨・基節骨 5 点が遺存している。

下肢骨は、右寛骨の一部が遺存している。左大腿骨は骨体部が遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭・骨体部が遺存している。左右大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左右脛骨は内側顆・骨体部が遺存しており、右腓骨は骨体部が遺存している。その他、右踵骨片が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起および外後頭隆起が発達しておらず、大腿骨の骨頭が小さいこと、粗線の発達も顕著ではないことから、女性と判定される。年齢は、歯槽の閉鎖状況、歯牙の咬耗度から、熟年以上と推定される。

〔特記事項〕

左大腿骨に重度の骨膜炎、加えて左大腿骨・左脛骨の関節面に重度の関節炎が認められる。

左鎖骨の肩峰端及び左肩甲骨の烏口突起に骨折が認められる。鎖骨骨折は介達外力によるものが多く、烏口突起骨折は直達外力によるものが多い。本事例も肩から倒れるなどして肩峰端・烏口突起に加わった力により生じたと考えられ、それが変形治癒したものだと考えられる（高岸 1990）。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大幅が 140mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値であり、眼窩幅は 41.2mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

上腕骨は、骨体最小周が 53mm であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。

大腿骨は、中央横径が 28.2mm、骨体上横径 31.0mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、骨体上矢状径は 20.1mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。上骨体断面示数は 64.8 であり、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が 29.5mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、栄養孔位横径は 20.5mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位周は 81mm、最小周 64mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。栄養孔位断面示数は 69.5 であり、扁平性は弱い。

【67 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は、ほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

x	x	x	○	P ¹	○	△	△	I ¹	I ²	△	P ¹	P ²	x	x	x
x	x	x	x	○	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	x

歯牙の咬耗度は、栃原（1957）の 1° c から 3° である。

躯幹骨は環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 12 点・腰椎 3 点・胸骨・肋骨片・仙骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の胸骨端から骨体の中央までが遺存している。左上腕骨は骨体の中央から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は上腕骨頭から遠位関節面までが遺存している。左右橈骨はほぼ完存しており、左右尺骨は鈎状突起から骨体の近位までが遺存している。その他、左右舟状骨・左右月状骨・左右有鈎骨・左右有頭骨・左右大菱形骨・左右豆状骨・左三角骨・左第 1 中手骨・左右第 2 中手骨・左右第 3 中手骨・左右第 4 中手骨・左右第 5 中手骨・左第一基節骨・基節骨 6 点・中節骨 3 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の腸骨翼から寛骨臼までが遺存している。左大腿骨は大腿骨頭から遠位関節面までが遺存しており、右大腿骨は大腿骨頭から骨体の近位・遠位関節面が遺存している。大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左脛骨は骨体部が遺存しており、右脛骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。左右腓骨は骨体部が遺存している。その他、左右距骨・右踵骨・右第一中足骨・部位不明中足骨 1 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大坐骨切痕角がやや小さいが、眼窩上隆起・外後頭隆起が発達しておらず、大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線の発達が顕著ではないことから、女性と判定される。年齢は、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合の外板は開放しているが、上下顎の歯槽が閉鎖していること、歯牙の咬耗度、寛骨の耳状面が Lovejoy（1985）の phase VI から VII を示すことから、熟年以上と推定される。

〔特記事項〕

左上顎中切歯・左上顎側切歯に C2、左上顎第 1 小臼歯に C3、右上顎側切歯・左上顎犬歯に C4 の齶歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。胸椎・腰椎の関節面に重度の骨棘が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 187mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、バジオン・ブレグマ高は 129mm、中顔幅 93mm、眼窩幅 40.2mm、眼窩高 33.5mm、鼻幅 24.9mm、鼻高 48.1mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。頭長高指数は 69.0 であり、低頭型を示す。眼窩示数は 83.3 であり、中眼窩型を示し、鼻示数は 51.8 であり、広鼻型を示す。前眼窩間幅は 12.6mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。鼻骨最小幅は 7.0mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

下顎骨は、下顎角幅が 95.8mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。下顎骨長は 54.8mm、下顎枝幅 29.9mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が 60mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、骨体横径が 15.4mm、骨体矢状径 10.8mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体断面示数は 70.1 であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

尺骨は、矢状径が 12.6mm、横径 16.8mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。骨体断面示数は 75.0 であり、近世の比較集団の中でもやや低い値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 24.3mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央横径は 26.2mm、中央周 80mm、骨体上横径 30.9mm、骨体上矢状径 23.4mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、中央断面示数は 92.7 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は 75.7 であり、扁平性は強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が 28.7mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、栄養孔位横径は 24.4mm、栄養孔位周 82mm、最小周 71mm であり、近世の比較集団と比べて大きな値を示す。栄養孔位断面示数は 85.0 であり、扁平性は弱い。

【68 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は、ほぼ完存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は外板がやや閉鎖しており、内板は冠状縫合のみやや開放している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

\diagup M ² M ¹ P ² P ¹ C I ² I ¹	I ¹ I ² C P ¹ P ² M ¹ M ² \diagdown
\diagdown M ₂ M ₁ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	I ₁ I ₂ C P ₁ P ₂ M ₁ M ₂ \diagup

歯牙の咬耗度は柘原 (1957) の 1° c から 3° である。

躯幹骨は環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 11 点・腰椎 5 点・胸骨・仙骨・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の遠位関節面の一部以外が遺存している。左上腕骨は完存しており、右上腕骨は上腕骨頭以外が遺存している。左右橈骨・左右尺骨はほぼ完存している。その他、左右舟状骨・左右月状骨・左右大菱形骨・左右三角骨・左右有鈎骨・左右有頭骨・左豆状骨・左右第 1 中手骨・左右第 2 中手骨・右第 3 中手骨・左右第 4 中手骨・右第 5 中手骨・基節骨 8 点・中節骨 1 点・末節骨 3 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・右膝蓋骨・左右脛骨・左右腓骨がほぼ完存している。その他、右

距骨・左右踵骨・右舟状骨・左右内側楔状骨・左右中間楔状骨・左右外側楔状骨・左立方骨・左右第1中足骨・左右第2中足骨・左右第3中足骨・左右第4中足骨・左右第5中足骨・基節骨5点・左右不明種子骨2点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起及び外後頭隆起が発達し、寛骨の大坐骨切痕角が小さいことから、男性と判定される。年齢は、寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase VI から VII を示すこと、寛骨の恥骨結合面が Brooks and Suchy (1990) の phase V を示すこと、歯牙の咬耗度から、熟年と推定される。

〔特記事項〕

人骨と共に動物骨が出土している。歯牙に歯石が見られ、下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、頸椎、胸椎、腰椎に重度の骨棘が見られる。さらに第一肋骨の軟骨が骨化している。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大幅が 189mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、頭蓋最大幅は 136mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。バジオン・ブレグマ高は 136mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。頭長幅示数は 72.0 であり、長頭型を示すが、頭長高示数は 72.0 であり、中頭型を示す。頭幅高示数は 100.0 であり、狭頭型を示す。頬骨弓幅は 134mm、中顔幅 95.6mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、顔高は 133mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。上顔高は 72.3mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られない。コルマンの顔示数は 99.3 であり、高顔型を示し、ウィルヒョウの顔示数は 139.1 であり、狭顔型を示す。コルマンの上顔示数は 54.0 であり、中上顔型を示し、ウィルヒョウの上顔示数は 75.6 であり、狭顔型を示す。眼窩幅は 38.9mm、眼窩高 34.0mm、鼻幅 23.9mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、鼻高は 51.5mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。眼窩示数は 87.4 であり、高眼窩型を示し、鼻示数は 46.4 であり、狭鼻型を示す。全側面角は 80°、歯槽側面角 70°、前眼窩間幅 16.8mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、鼻根横弧長は 29mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。鼻根湾曲示数は 57.9 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、鼻骨最小幅は 8.2mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

下顎骨は、下顎頭間幅が 123.2mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、下顎角幅は 95.2mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。下顎骨長は 70mm、オトガイ高 36.6mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。下顎枝高は 63.7mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、下顎枝幅は 28.7mm、下顎枝示数 45.1 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

上腕骨は、最大長が 292mm、全長 289mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央最大径は 24.7mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央最小径は 17.6mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体最小周は 65mm、中央周 69mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。骨体断面示数は 71.3 であり、近世の比較集団の中でも低い値を示すが、長厚示数は 22.3 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

橈骨は、最大長が 223mm、機能長 213mm、最小周 44mm、骨体横径 17.5mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体中央横径は 18.2mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。骨体矢状径は 11.7mm、骨体中央矢状径 12.6mm、長厚示数 20.7、骨体断面示数 66.9 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数 69.2 であり、近世の比較集団の中でも低い値を

示す。

尺骨は、機能長が 208mm、最小周 35mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、矢状径は 14.8mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。横径は 17.0mm、長厚示数 16.8 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体断面示数は 87.1 であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値である。

大腿骨は、中央矢状径が 26.1mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 26.5mm、中央周 84mm、骨体上横径 31.7mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。骨体上矢状径は 22.8mm、中央断面示数 98.5 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は 71.9 であり、扁平性は強い。

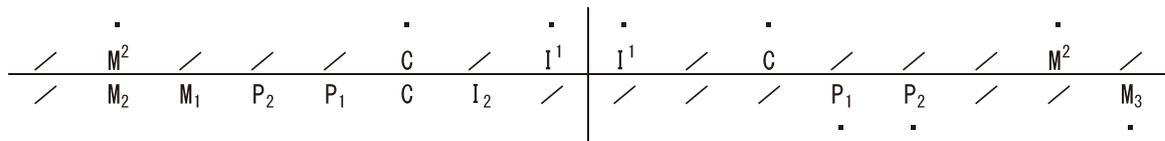
脛骨は、最大長が 316mm、中央最大径 28.0mm、栄養孔位最大径 31.9mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 22.6mm、栄養孔位横径 24.8mm、中央周 80mm、栄養孔位周 89mm、最小周 69mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数は 80.7 であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。栄養孔位断面示数は 77.7 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、最小周が 39mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

【69 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨の一部・右頭頂骨の一部・右側頭骨の一部・後頭骨の一部・鼻骨の一部・上顎骨の一部・下顎骨の一部が遺存するのみである。残存歯牙の歯式は以下の通りである。



歯牙の咬耗度は柄原（1957）の 2° b から 3° である。

躯幹骨は肋骨片が出土している。

上肢骨は、左上腕骨が骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は骨体部が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左橈骨・左尺骨は骨体部が遺存している。

下肢骨は左寛骨の寛骨臼付近が遺存している。左大腿骨は大腿骨頭から遠位関節面までが遺存しており、右大腿骨は小転子付近から骨体の遠位までが遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。左右脛骨・左右腓骨は骨体部が遺存している。脛骨のヒラメ筋線はやや発達している。その他、左距骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、上腕骨の三角筋粗面が発達し、大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線はやや発達しているが、四肢骨の計測値は男女どちらにも類似しているため、これらの部位からのみの判定は困難である。年齢は、矢状縫合の内板が閉鎖していること、歯牙の咬耗度から、熟年以上と推定される。

〔特記事項〕

左下顎第 3 大臼歯に C2 の齶歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。

〔形質〕

橈骨は、骨体横径が 16.4mm、骨体矢状径 15.6mm、骨体中央矢状径 12.1mm、骨体中央矢状径 13.0mm、骨体断面示数 73.8、中央断面示数 83.3 である。

尺骨は、矢状径が 12.3mm、横径 15.6mm、骨体断面示数 78.9 である。

大腿骨は、中央矢状径が 24.4mm、中央横径 26.8mm、中央周 81mm、骨体上横径 33.1mm、骨体上矢状径 21.2mm、中央断面示数 91.0 である。上骨体断面示数は 64.0 であり、扁平性は強い。

脛骨は、中央最大径が 24.7mm、栄養孔位最大径 31.7mm、中央横径 21.4mm、栄養孔位横径 22.3mm、中央周 74mm、栄養孔位周 87mm、最小周 67mm、中央断面示数 86.6 である。栄養孔位断面示数は 70.3 であり、扁平性は弱い。

【70 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は、ほぼ完存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

x	x	x	x	x	x	x	x	x	x	○	△	x	P ²	x	x	x
x	x	x	x	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	△	C	P ₁	x	x	x	x	M ₃

歯牙の咬耗度は、栃原 (1957) の 1° c から 2° b である。

軀幹骨は、環頸椎 1 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・胸骨柄の一部・胸骨体・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の胸骨端から骨体中央までが遺存しており、左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左右上腕骨は上腕骨頭以外が遺存しており、左右橈骨・左右尺骨はほぼ完存している。上腕骨の三角筋粗面の発達は顕著ではない。その他、左右舟状骨・左右月状骨・左右有鈎骨・左右大菱形骨・右有頭骨・右三角骨・左右第 1 中手骨・左第 2 中手骨・左右第 3 中手骨・左第 4 中手骨・左第 5 中手骨・基節骨 8 点・中節骨 4 点・末節骨 3 点・左右不明中手骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左寛骨が腸骨翼から寛骨臼までが遺存しており、右寛骨は腸骨の一部が遺存している。左右大腿骨は大腿骨頭の一部から遠位関節面までが遺存しており、左膝蓋骨はほぼ完存している。大腿骨の粗線はやや発達している。左右脛骨は骨体部が遺存している。脛骨のヒラメ筋線はやや発達している。左腓骨は骨体部が遺存しており、右腓骨は近位関節面以外が遺存している。その他、右距骨・左右踵骨・左右舟状骨・左右内側楔状骨・右外側楔状骨・右立方骨・左第 1 中足骨・部位不明中足骨 2 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起・外後頭隆起はあまり発達していないが、眼窩上隆起がやや発達していること、上腕骨の三角筋粗面の発達は顕著ではないが、大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線はやや発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が狭いことから、男性と判定される。年齢は、冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合の内板が閉鎖していること、歯牙の咬耗度、軟骨の骨化が見られること、寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase VIII を示すことから、老年と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が、右下顎中切歯・左下顎側切歯・左下顎犬歯に Periapical Abscess が認められる。上顎左犬歯・左下顎側切歯に C4 の齲歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。胸骨柄と左第 1 肋骨の関節軟骨及び剣状突起、甲状軟骨が骨化している。また、胸骨体の肋骨との関節部分に骨棘が認められる。

左右脛骨の最大長が約 1cm の差が見られ、左脛骨が短いことから、左脛骨について過労性骨障害の可能性が考えられる。過労性骨障害は強力に繰り返し加えられる外力が要因であり、重労働などによって発症する (宮城 1990)。発症後は、時間の経過とともに正常骨に置換されるため、本事例は日常生活

には支障はなかったと考えられる。

〔形質〕

頭蓋は、バジオン・ブレグマ高が 133mm、眼窩幅 39.3mm、眼窩高 32.5mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。眼窩示数は 82.7 であり、中眼窩型を示す。鼻幅は 26.5mm であり、近世の比較集団の中でも大きな差は見られず、鼻高は 53.2mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。鼻示数は 49.8 であり、中鼻型を示す。前眼窩間幅は 18.9mm であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示すが、鼻骨最小幅は 9.4mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が 61mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、最大長が 220mm、機能長 207mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、最小周は 44mm、骨体横径 18.1mm、骨体中央横径 17.5mm、骨体矢状径 13.7mm、骨体中央矢状径 13.2mm、長厚示数 21.3、骨体断面示数 75.7 であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央断面示数は 75.4 であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

尺骨は、機能長が 205mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、矢状径は 12.2mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。横径は 18.4 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、骨体断面示数は 66.3 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 25.2mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 28.6mm であり近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。中央周は 86mm、骨体上横径 31.8mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、骨体上矢状径は 23.8mm、中央断面示数 88.1 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は 74.8 であり、扁平性は強い。

脛骨は、全長が 322mm、最大長 328mm、中央最大径 26.5mm、栄養孔位最大径 31.3mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 21.7mm、栄養孔位横径 23.1mm、中央周 76mm、栄養孔位周 88mm、最小周 70mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数は 81.9 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、長厚示数は 21.7 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は 73.8 であり、扁平性は弱い。

【71 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋はほぼ完存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合の内板は閉鎖しており、外板は開放している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

\diagup x x x x x x x \diagdown \diagdown x x P ₂ P ₁ C I ₂ O	x x x x x M ¹ x \diagdown O I ₂ C x x x x \diagup
---	--

歯牙の咬耗度は柘原 (1957) の 2° a から 2° b である。

軀幹骨は、胸骨柄の一部・環椎・軸椎・頸椎 4 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・仙骨・肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の骨体が遺存しており、左右肩甲骨は関節窩が遺存している。左上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は上腕骨頭から骨体の遠位までが遺存している。左尺骨は近位関節面から遠位関節面までが遺存しており、左橈骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。その他、左有頭骨・右有鉤骨・右第 1 中手骨・基節骨 5 点・中節骨 1 点・部位不明中手骨 1 点が遺存している。

下肢骨は左右寛骨の腸骨翼から坐骨までが遺存している。左右大腿骨は近位関節面から遠位関節面ま

で遺存しており、左右脛骨はほぼ完存している。大腿骨の粗線はやや発達しているが、左右脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。右腓骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。その他、左距骨・左踵骨・左舟状骨・右第1中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・基節骨1点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達しておらず、前頭結節が発達していること、大腿骨の粗線はやや発達しているが、脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著でないこと、寛骨の大坐骨切痕角が大きいことから、女性と判定される。年齢は、歯槽の閉鎖状況、寛骨の耳状面が Lovejoy (1985) の phase VI を示すこと、寛骨の恥骨結合面が Brooks and Suchy (1990) の phase V を示すことから、熟年と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が、右下顎第1小臼歯に Periapical Abscess が認められる。また、右上腕骨の長軸がねじれている。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 175mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、頭蓋最大幅は 130mm、バジオン・ブレグマ高 129mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。頭長幅示数は 74.3 であり、長頭型を示すが、頭長高示数は 73.7 であり、中頭型を示す。頭幅高示数は 99.2 であり、狭頭型を示す。眼窩幅は 37.4mm、眼窩高 32.9mm、鼻幅 23.7mm、鼻高 44.9mm、前眼窩間幅 14.5mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。眼窩示数は 88.0 であり、高眼窩型を示し、鼻示数は 52.8 であり、広鼻型を示す。鼻根横弧長は 28mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、鼻根湾曲示数は 51.8 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。鼻骨最小幅は 7.9mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

下顎骨は、オトガイ高が 31.3mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、下顎枝高は 45.8mm、下顎枝幅 27.7mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。下顎枝示数は 60.5 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

橈骨は、最小周が 35mm、骨体横径 14.0mm、骨体矢状径 9.9mm であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、骨体断面示数は 70.7 であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

尺骨は、最小周が 34mm、矢状径 11.2mm、横径 14.7mm、骨体断面示数 76.2 であり、近世の比較集団の中でも中間的な値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 24.5mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央横径は 26.3mm、中央周 78mm、骨体上横径 29.8mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、骨体上矢状径は 20.6mm、中央断面示数 93.2 であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。上骨体断面示数は 69.1 であり、扁平性は強い。

脛骨は、全長が 304mm、栄養孔位最大径 28.9mm、栄養孔位横径 20.8mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、栄養孔位周は 81mm であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。栄養孔位断面示数は 72.0 であり、扁平性は弱い。

【72号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は、左右頬骨以外がほぼ完存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は外板が全て開放しており、内板は矢状縫合のみ一部閉鎖しかけている。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	○	○	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	○	C	P ¹	P ²	M ¹	×	○
M ₃	M ₂	×	×	P ₁	C	I ₂	○	○	I ₂	C	P ₁	P ₂	×	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は、栃原（1957）の2° bから2° cである。

躯幹骨は、環椎・軸椎・頸椎4点・胸椎12点・腰椎4点・仙骨片・肋骨片が遺存している。

上肢骨は左右鎖骨が関節端の一部以外が遺存している。左右肩甲骨は関節窩付近が遺存している。左上腕骨は近位関節面から遠位関節面までが遺存しており、右上腕骨は骨体の遠位から遠位関節面までが遺存している。左右尺骨・右橈骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存している。その他、左有頭骨・左有鈎骨・左右不明中手骨5点・基節骨2点・中節骨5点・末節骨2点が遺存している。

下肢骨は左右寛骨の腸骨翼付近および恥骨下肢付近以外が遺存している。左右大腿骨は近位関節面から遠位関節面までが遺存しており、左右膝蓋骨はほぼ完存している。大腿骨の粗線はやや発達している。左右脛骨は近位端以外が遺存している。脛骨のヒラメ筋線は発達している。左腓骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存しており、右腓骨は骨体部が遺存している。その他、右距骨・左右踵骨、左舟状骨、左内側楔状骨・左右中間楔状骨・左右外側楔状骨・左右立方骨、左右第1中足骨・左第2中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・左第5中足骨が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、大腿骨の粗線・脛骨のヒラメ筋線は発達傾向にあるものの、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起は発達しておらず、寛骨の大坐骨切痕角も大きいことから、女性と判定される。年齢は、歯牙の咬耗度、寛骨の耳状面が Lovejoy（1985）の phase VからVIであることから、熟年と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。頭蓋骨の左右下顎窩が前方への伸展及び一部小孔の形成が認められる。それに加えて、左肘頭窩にも関節面の伸展が認められる。左上腕骨の遠位関節面に関節炎が認められる。寛骨に前耳状溝が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が177mm、頭蓋最大幅126mm、バジオン・ブレグマ高133mm、中顔幅93.9mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。頭長幅示数は71.2であり、長頭型を示すが、頭長高示数は75.1であり、高頭型を示す。頭幅高示数は105.6であり、狭頭型を示す。顔高は124.6mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、上顔高は70.7mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。ウィルヒョウの顔示数は132.7であり、狭顔型を示し、ウィルヒョウの上顔示数は75.3であり、狭顔型を示す。眼窩幅は33.8mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、眼窩高は35.5mm、鼻高49.3mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。眼窩示数は105.0であり、高眼窩型を示す。全側面角は72°、歯槽側面角65°であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、前眼窩間幅は18.4mm、鼻根横弧長31mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。鼻根湾曲示数は59.4であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、鼻骨最小幅は7.1mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

下顎骨は、オトガイ高が37.9mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、下顎枝幅は32.1mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

橈骨は、骨体横径が16.5mm、骨体矢状径11.2mm、骨体断面示数67.9であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

尺骨は、最小周が 34mm、矢状径 12.9mm、横径 13.6mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、骨体断面示数は 94.9 であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が 24.4mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は 26.3mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央周は 81mm、骨体上横径 29.0mm、骨体上矢状径 22.9mm、中央断面示数 92.8 であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は 79.0 であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が 30.4mm、栄養孔位横径 22.4mm、栄養孔位周 85mm、最小周 64mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。栄養孔位断面示数は 73.7 であり、扁平性は弱い。

腓骨は、最小周が 34mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。

【73 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良好。頭蓋は、前頭骨の一部・右頭頂骨・右側頭骨・左側頭骨の一部・後頭骨・右頬骨・上顎骨の一部・鼻骨の一部・下顎骨の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

\diagup M ² Δ P ² P ¹ C I ² \diagdown	\diagdown I ¹ I ² C P ¹ ○ ○ \diagup \diagup
\diagdown M ₂ ○ P ₂ × C I ₂ I ₁	\diagup I ₂ \diagdown P ₁ P ₂ \diagup M ₂ \diagdown

歯牙の咬耗度は栢原（1957）の 1° b から 3° である。

軀幹骨は、胸骨柄及び胸骨体の一部・軸椎・胸椎 7 点・腰椎 1 点・椎骨片 1 点・右第一肋骨片が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨の胸骨端から骨体までが遺存している。左右肩甲骨は関節窩付近が遺存している。

左右上腕骨は骨体部が遺存しており、左右橈骨・左右尺骨は骨体部が遺存している。その他、左右第 2 中手骨・左第 3 中手骨・左右第 4 中手骨・左第 5 中手骨・中節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨の一部が遺存している。左右大腿骨は遠位関節面以外が遺存している。大腿骨の粗線の発達は顕著ではない。左右脛骨は近位関節面の外側顆以外が遺存しており、左右腓骨は骨体部が遺存している。脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。その他、左距骨・左右踵骨片・右第一中足骨・基節骨 1 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、寛骨の大坐骨切痕角はやや小さいが、残存状態が限定的であるためこの部位のみからの判定は困難である。加えて、眼窩上隆起はやや発達しているが、外後頭隆起は発達していないこと、大腿骨の粗線や脛骨のヒラメ筋線の発達も顕著ではなく、各筋附着部位からも性別を判定することは困難である。年齢は歯牙の咬耗度から熟年と推定される。

〔特記事項〕

前頭縫合が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 185mm である。

下顎骨は、右下顎枝幅が 30.6mm である。

橈骨は、骨体矢状径が 11.0mm、骨体中央矢状径 13.7mm である。

尺骨は、矢状径が 12.1mm、横径 14.9mm、骨体断面示数 81.2 である。

大腿骨は、中央矢状径が 28.7mm、中央横径 24.8mm、中央周 85mm、骨体上横径 30.0mm、骨体上矢状径 24.5mm、中央断面示数 115.8 である。上骨体断面示数は 81.7 であり、扁平性は強い。

脛骨は、中央最大径が 26.8mm であり、近世の男性と女性の比較集団の中でも中間的な値を示すが、栄養孔位最大径は 31.2mm であり、近世の男性の比較集団と比べてやや小さな値を示す。中央横径は 20.1mm、栄養孔位横径 23.2mm、中央周 76mm、栄養孔位周 88mm、最小周 66mm、中央断面示数 75 であり、近世の男性と女性の比較集団の中でも中間的な値を示す。栄養孔位断面示数は 74.4 であり、扁平性は弱い。

【74 号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良い。頭蓋は完存している。冠状縫合・矢状縫合・ラムダ縫合は外板がやや閉鎖しており、内板は閉鎖している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	○	I ¹	○	○	C	P ¹	P ²	M ¹	×	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	/	C	P ₁	P ₂	×	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は、栃原（1957）の 2° b から 3° である。

軀幹骨は、環椎・軸椎・頸椎 5 点・胸椎 12 点・腰椎 5 点・肋骨片・胸骨・仙骨が遺存している。

上肢骨は、左右鎖骨が完存しており、左右肩甲骨の一部が遺存している。左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨はほぼ完存している。その他、左右舟状骨・左右有鉤骨・左有頭骨・左大菱形骨・左三角骨・左小菱形骨・左右月状骨・左右第 1 中手骨・左右第 2 中手骨・左右第 3 中手骨・左右第 4 中手骨・左右第 5 中手骨・基節骨 7 点・中節骨 1 点が遺存している。

下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨が完存している。その他、左右距骨・左右踵骨・左右舟状骨・左右内側楔状骨・左中間楔状骨・左右外側楔状骨・右第 1 中足骨・右第 2 中足骨・左右第 3 中足骨・左右第 4 中足骨・基節骨 1 点・中節骨 1 点・末節骨 3 点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は、乳様突起が発達し、外後頭隆起がやや発達していること、寛骨の大坐骨切痕角が小さく、恥骨下角も小さいこと、さらに四肢骨の骨体が太いことから、男性と判定される。年齢は、寛骨の耳状面が Lovejoy（1985）の phase VII から VIII を示すこと、寛骨の恥骨結合面が Brooks and Suchy（1990）の phase V を示すこと、歯牙の咬耗度から、熟年後半以上と推定される。

〔特記事項〕

下顎犬歯にエナメル質減形成が、左上顎第 3 大臼歯に C2 に齶歯が認められる。また、歯牙に歯石が認められる。胸椎・腰椎に骨棘が認められる。右尺骨滑車面に関節炎が認められる。

〔形質〕

頭蓋は、頭蓋最大長が 179mm であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、頭蓋最大幅が 125mm、バジオン・プレグマ高 130mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。頭長幅示数は 69.8 であり、超長頭型を示すが、頭長高示数は 72.6 であり、中頭型を示す。頭幅高示数は 104.0 であり、狭頭型を示す。中顔幅は 95.7mm、顔高 115.7mm、上顔高 66.7mm、眼窩幅 40.1mm、眼窩高 32.4mm、鼻高 50.9mm であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。ウィルヒョウの顔示数は 120.9 であり、正顔型を示し、ウィルヒョウの上顔示数は 69.7 であり、低顔型を示す。眼窩示数は 80.8 であり、中眼

窩型を示す。全側面角は85°、歯槽側面角70°であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、前眼窩間幅は15.1mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示すが、鼻骨最小幅は9.2mmであり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

下顎骨は、オトガイ高が30.5mm、下顎枝高53.7mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、下顎枝幅は32.0mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。下顎枝示数は59.6であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

上腕骨は、骨体最小周が60mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、最大長が230mm、機能長219mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、最小周は39mm、骨体横径16.8mm、骨体中央横径13.4mmであり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。骨体矢状径は12.0mm、骨体中央矢状径12.4mm、長厚示数17.8、骨体断面示数71.4であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られず、中央断面示数は92.5であり、近世の比較集団の中でも大きな値を示す。

尺骨は、最大長が251mm、機能長223mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、最小周は34mm、矢状径11.6mm、横径15.9mm、長厚示数15.2、骨体断面示数73.0であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

大腿骨は、最大長が401mm、自然位長395mm、中央矢状径25.6mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央横径は28.9mm、中央周86mm、骨体上横径32.8mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。骨体上矢状径は22.2mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、長厚示数は21.8であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央断面示数は88.6であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。上骨体断面示数は67.7であり、扁平性は強い。

脛骨は、全長が319mm、最大長326mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、中央最大径は28.1mm、栄養孔位最大径33.1mmであり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。中央横径は18.2mm、栄養孔位横径20.2mm、中央周76mm、栄養孔位周84mm、最小周67mm、中央断面示数64.8であり、近世の比較集団の中でも小さな値を示すが、長厚示数は21.0であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。栄養孔位断面示数は61.0であり、扁平性は強い。

腓骨は、最小周が31mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

【75号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は良くない。右上腕骨の骨体部・左大腿骨の骨体部が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は左大腿骨の骨長が約173mm（男性：1歳144.8mm、2歳181.5mm、女性：1歳148.1mm、2歳182.3mm）（Scheuer and Black、2000）であることから、幼児であると推定される。

【76号人骨】

〔保存状態〕

本人骨の保存状態は比較的良い。頭蓋は、骨化した甲状軟骨が遺存している。

躯幹骨は、軸椎・胸椎1点・腰椎5点・肋骨片・胸骨片が遺存している。

上肢骨は左鎖骨の骨体が遺存しており、左右上腕骨は骨体の近位から遠位関節面までが遺存している。上腕骨の三角筋粗面は発達している。左橈骨は完存しており、右橈骨は近位関節面・遠位関節面が遺存している。左右尺骨は近位関節面から骨体中央までが遺存している。その他、右舟状骨・右有頭骨・

左右鈎骨・右第1中手骨・左右第2中手骨・左第3中手骨・左右第4中手骨・左右第5中手骨・基節骨2点・中節骨3点・末節骨2点が遺存している。

下肢骨は、左右大腿骨の大腿骨頭から骨体の遠位までが遺存している。大腿骨の粗線はやや発達している。左脛骨は近位関節面から骨体の遠位までが遺存しており、右脛骨は骨体が遺存している。脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではない。左右腓骨は骨体部が遺存している。その他、右距骨・右立方骨・右第1中足骨・左第2中足骨・左第3中足骨・左第4中足骨・左第5中足骨・基節骨1点・末節骨1点が遺存している。

〔性別と年齢〕

性別は大坐骨切痕角が小さいこと、左右脛骨のヒラメ筋線の発達は顕著ではないが、上腕骨の三角筋粗面が発達し、大腿骨の粗線もやや発達していること、四肢骨の骨体も太いことから、男性と判定される。年齢は、寛骨耳状面が Lovejoy (1985) の phase VIII を示すが、仙腸関節の癒合痕があることから、老年と推定される。

〔特記事項〕

左右寛骨の耳状面に仙骨との癒合痕があるため、仙腸関節面が癒合していたと考えられる。また、甲状軟骨が骨化している。腰椎4点に骨棘が認められ、それに加えて第12胸椎から第5腰椎まで上下関節突起の関節面に伸展が認められる。

〔形質〕

上腕骨は、骨体最小周が55mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。

橈骨は、骨体横径が15.5mm、骨体矢状径10.9mm、骨体断面示数70.3であり、近世の比較集団の中でもやや小さな値を示す。

尺骨は、矢状径が14.3mmであり、近世の比較集団の中でも大きな値を示すが、横径は17.1mm、骨体断面示数83.6であり、近世の比較集団の中でもやや大きな値を示す。

大腿骨は、中央矢状径が23.8mm、中央横径22.3mm、中央周73mm、骨体上横径26.1mm、骨体上矢状径20.7mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。中央断面示数は106.7であり、近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。上骨体断面示数は79.3であり、扁平性はやや強い。

脛骨は、栄養孔位最大径が27.1mm、栄養孔位横径21.6mm、栄養孔位周80mm、最小周66mmであり、近世の比較集団の中でも小さな値を示す。栄養孔位断面示数は79.7であり、扁平性は弱い。

3. 考察

3. 1 形質

以下に浦山遺跡第2次調査出土人骨と比較群の平均値との比較を行う。

【頭蓋形質】

脳頭蓋については、最大長は男女ともに近世の比較集団の中で大きな値を示す。最大幅・バジオン・ブレグマ高は男女ともに近世の比較集団と近似した値を示す。頭長幅示数は男女ともに長頭型を示し、頭長高示数は男女ともに中頭型、頭幅高示数は男女ともに狭頭型を示す。

顔面部については、男性の頬骨弓幅は近世の比較集団と比べてやや小さな値を示すが、中顔幅・顔高は近世の比較集団と比べて中間的な値を示す。上顔高は近世の比較集団と比べて小さな値を示す。コルマンの顔示数、ウィルヒョウの顔示数はそれぞれ高顔型、正顔型を示し、コルマンの上顔示数、ウィルヒョウの上顔示数はそれぞれ中上顔型、低顔型を示した。女性の中顔幅は近世の比較集団と近似した値を示す。眼窩幅・眼窩高は男女ともに近世の比較集団と比べてやや小さな値を示し、眼窩示数について

男性は高眼窩よりの中眼窩型、女性は高眼窩型を示す。鼻幅・鼻高は近世の比較集団と近似した値を示し、鼻示数について男性は中鼻型、女性は広鼻型を示す。男性の全側面角は近世の比較集団に比べやや小さな値を示し、突顎である。男性の齒槽側面角は近世の比較集団と比べてやや小さな値を示し、過突顎である。男性の前眼窩間幅は近世の比較集団と近似した値を示すが、女性の前眼窩間幅は近世の比較集団と比べてやや小さな値を示す。鼻根横弧長は男女ともに近世の比較集団と比べて大きな値を示す。鼻根湾曲示数は男女ともに近世の比較集団と比べて小さな値を示し、隆起が強い傾向を示した。鼻骨最小幅は男女ともに近世の比較集団と近似した値を示す。

下顎骨は、男性の下顎頭間幅・下顎骨長は近世の比較集団と近似した値を示すが、下顎角幅は近世の比較集団と比べてやや小さな値を示す。女性の下顎角幅は近世の比較集団と近似した値を示すが、下顎骨長は近世の比較集団と比べて小さな値を示す。男性のオトガイ高は近世の比較集団と近似した値を示すが、女性のおトガイ高は近世の比較集団と比べて大きな値を示す。下顎枝高は男女ともに近世の比較集団と比べて小さな値を示す。男性の下顎枝幅は近世の比較集団と近似した値を示すが、女性の下顎枝幅は近世の比較集団と比べて小さな値を示す。下顎枝示数は男女ともに近世の比較集団と比べて大きな値を示す。

以上のような浦山遺跡出土人骨の形質的特徴を比較集団中で総合的に検討するために、男性は頭蓋10項目（頭蓋最大長・頭蓋最大幅・Ba-Br高・頬骨弓幅・中顔幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高）、女性は頭蓋8項目（頭蓋最大長・頭蓋最大幅・Ba-Br高・中顔幅・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高）を用いて主成分分析を行った。ただし、本結果は個体数が少ないので、集団を代表するに足る値ではない。

男性について、第1主成分は、固有値が3.25、寄与率が32.50%で、全項目と正の相関が見られ、特に頭蓋最大長・頬骨弓幅・中顔幅・眼窩幅・鼻幅と正の相関が強い。このことから、第1主成分得点が+に位置するほど頭蓋のサイズが大きく、特に長頭型、顔面の幅が大きくなることを示している。第2主成分は、固有値が2.44、寄与率が56.88%で、頭蓋最大幅・Ba-Br高・上顔高・眼窩高・鼻高と正の相関が強く、頬骨弓幅・中顔幅・鼻幅と負の相関が強い。このことから、第2主成分が+に位置するほど頭蓋最大幅が大きく、脳頭蓋と顔面の高さが高いことを示し、-に位置するほど顔面の幅が狭いことを示している。各集団の第1主成分得点と第2主成分得点を2次元展開した図を図1に示した。浦山近世人集団の男性は比較集団の中で、第1主成分得点は中間的な値を示すが、第2主成分得点は最も低い値を示す。他集団との類似性を見ると、早桶の集団と最も近く、ほとんどの将軍家や大名の集団と大きく離れている。比較に用いた九州の近世人集団は、浦山近世人集団と同様に第4象限に位置し、他の比較集団に比べて近い値を示す。

女性について、第1主成分は、固有値が3.31、寄与率が41.41%で、頭蓋最大幅・Ba-Br高・眼窩高・鼻高と正の相関が強く、頭蓋最大長・鼻幅と負の相関が強い。このことから、第1主成分が+に位置するほど頭蓋最大幅が大きく、脳頭蓋の高さ・顔面の高さが高いことを示している。第2主成分は、固有値が1.19、寄与率が56.33%で、頭蓋最大長と正の相関が強く、頭蓋最大幅・眼窩高・鼻高と負の相関が見られる。このことから、第2主成分得点が+に位置するほど頭蓋最大長が大きく、-に位置するほど頭蓋最大幅・眼窩高・鼻高が低いことを示す。各集団の第1主成分得点と第2主成分得点を2次元展開した図を図2に示した。浦山近世人集団の女性は比較集団の中で、第1主成分得点は低い値を示すが、第2主成分得点は最も高い値を示す。他集団との類似性を見ると、原田近世人集団と最も近く、男性と同様に将軍家や大名の集団とは大きく離れている。また、江戸時代の庶民層や西南日本の現代人に近い傾向が見られるが、男性とは異なり甕棺の集団や九州地方の稲荷谷近世人集団といった武士層とは離

れる傾向が見られる。

以上の分析の結果を総合すると、男性・女性ともに長頭型であり、高眼窩型に近く、また計測可能であった男性では突顎の傾向が見られた。長頭型・突顎は近世の庶民層の特徴であり（鈴木 1963、片山 2015）、浦山近世人集団は近世の庶民層と共通した特徴を示していると考えられる。また、高眼窩型は他の九州の近世人集団でも見られる共通の特徴である。浦山近世人集団が出土した太宰府市は、近世において、日田街道の宿駅が置かれ、太宰府天満宮の門前町として栄えた場所であったが、住民の大多数は農業に従事する百姓であった（太宰府市史編集委員会編 2004）。本資料について、他地域あるいは異なる身分の集団との比較を今後より詳細に行っていくことで、九州の近世の百姓層の形質的特徴を明らかにすることができると思われる。

【四肢骨形質】

上腕骨について、男性は最大長、全長、骨体断面示数は近世の比較集団と比べてやや小さな値を示すが、中央最大径、中央最小径、骨体最小周、中央周、長厚示数は近世の比較集団と近似した値を示す。女性は骨体断面示数以外の項目で近世の比較集団と比べて大きな値を示し、頑丈な傾向が見られる。

橈骨について、男性は最大長、機能長、長厚示数は近世の比較集団と比べて大きな値を示すが、最小周、骨体横径、骨体中央横径、骨体矢状径、骨体中央矢状径、骨体断面示数、中央断面示数は近世の比較集団と近似した値を示す。女性は計測が可能であった全ての項目で近世の比較集団と近似した値を示す。

尺骨について、男性は最大長、骨体断面示数が近世の比較集団と比べて大きな値を示すが、最小周は近世の比較集団と比べて小さな値を示す。機能長、矢状径、横径、長厚示数は近世の比較集団と近似した値を示す。女性は計測が可能であった全ての項目で近世の比較集団と近似した値を示す。

大腿骨について、男性は最大長、自然位長、中央断面示数が近世の比較集団と比べて小さな値を示し、中央矢状径、中央横径、中央周、骨体上横径、骨体上矢状径、長厚示数は近世の比較集団と近似した値を示す。上骨体断面示数は 77.6 であり、やや扁平性が強い。女性は計測が可能であった全ての項目で近世の比較集団と近似した値を示す。上骨体断面示数は 72.0 であり、扁平性が強い。

脛骨について、男性は全長、最大長、栄養孔位最大径、最小周が近世の比較集団と比べて小さな値を示し、中央最大径、中央横径、栄養孔位周、中央断面示数、長厚示数は近世の比較集団と近似した値を示す。栄養孔位断面示数は 74.7 であり、扁平性が弱い。女性は全長、最大長は近世の比較集団と比べて小さな値を示すが、中央最大径、中央周、栄養孔位周、最小周は近世の比較集団と比べて大きな値を示す。栄養孔位最大径、中央横径、栄養孔位横径、長厚示数は近世の比較集団と近似した値を示す。栄養孔位断面示数は 73.3 であり、扁平性が弱い。

腓骨について、男性は最小周が近世の比較集団と比べて中間的な値を示す。

【推定身長】

大腿骨最大長に藤井（1960）の身長推定式を適用して身長を算出した。算出できたのは 74 号の男性人骨のみである。74 号人骨の身長は 153.8cm となり、他の近世人集団よりも低い値を示した。

3. 2 筋骨格ストレスマーカー

筋骨格ストレスマーカー（Musculoskeletal stress markers : MSMs）は、Hawkey and Merbs によって 1995 年に確立された方法であり、筋付着部の発達から身体活動を復元する方法の 1 つである。本稿における評価基準も Hawkey and Merbs (1995) に依っており、詳細部位の記述・形態写真に関しては米元（2012）に記す。

当該集団の筋付着部の発達の特徴は、ヒラメ筋が付着する脛骨ヒラメ筋線の発達が極めて不明確とい

うことである。すべての個体の人骨所見の項にそれぞれ上腕骨の三角筋粗面と大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線の観察結果を記してある。三角筋の付着する三角筋粗面や短内転筋・大内転筋・長内転筋・内側広筋・外側広筋・大腿二頭筋短頭の起始する粗線の MSMs スコアが高い個体は散見され、個体差はあるが、集団の全体的傾向としては概して筋付着部が発達していない傾向にあるといえよう。このような傾向は、大腿骨や脛骨の矢状径の値の小ささ、大腿骨の柱状性と脛骨の扁平性の弱さの一因と考えられる。これは男女差なく同様の傾向をしめすが、上記3部位の発達という点では女性の方が発達している個体やや多い。

特にヒラメ筋線が発達していない傾向は本集団において顕著である。ヒラメ筋は足関節底屈に作用する筋であり、すなわち歩行、とくにぬかるんだ・足場の悪い場所で足を上方に引き上げる動きに作用する筋である。四肢周径の生体計測のデータをもちいて台湾の水稻農耕民と漁撈民（邱 1956、顔 1959）を比較し、水稻農耕を行っていた集団と、水稻農耕を行っていなかった集団の四肢の筋発達の仕方の違いを検討した結果から、水稻農民は、四肢周径値の中では下腿の周径の値が大きい傾向にあることが指摘されており、相対的に下腿の発達がやや強いと考えられる（米元 2016b）。さらに、ヒラメ筋の付着部の MSMs スコアが高い集団としては弥生時代の水稻農耕適応地域の諸集団があげられる（米元 2016a、b）。しかし、本集団ではこの下腿の周径に大きな影響を与える筋であるヒラメ筋の付着部の発達が認められない。この結果から、本集団が水田における諸活動を必要とするような生業をおこなっていなかった可能性を断定的に論じることはできず、使用された道具に関する検討や同時期他集団との比較が必須であるが、上述したように本集団の筋付着部の発達は基本的にはどの部位も顕著ではなく、活動負荷は極めて低かったことは示唆される。

3. 3 ストレスマーカー

本人骨の歯牙の中でエナメル質減形成を持つ個体が認められた。エナメル質減形成は歯冠が形成される幼少期の栄養障害・胃腸疾患・発疹性高熱疾患（麻疹、水痘、風疹、猩紅熱、ジフテリアなど）・肺炎・結核・内分泌異常などの多様な障害によって起こるエナメル質の形成不全であり、個体の栄養状態や所属集団への環境ストレスを示す指標として人類学の研究において用いられる（山本 1988）。本報告では、エナメル質減形成の出現が高い下顎犬歯の出現頻度を算出した。

観察した結果、5号人骨・18号人骨・19号人骨・20号人骨・37号人骨・52号人骨・57号人骨・61号人骨・64号人骨・68号人骨・70号人骨・71号人骨・72号人骨・74号人骨にエナメル質減形成が認められた。出現頻度は82.4%（17個体中14個体）見られ、山本（1988）の集団に比べて高頻度で見られた。浦山遺跡の被葬者は有力な大地主の一族であるのだが、エナメル質減形成の結果からは幼少期に高い環境ストレスを受けていた集団であると考えられる。

4. おわりに

人骨の出土状況および遺存状況から得られた浦山近世集団の特徴は以下の通りである。

- ・埋葬姿勢は不明のものが多く、判明しているものでは坐葬が多い。
- ・頭蓋について、男女ともに長頭型・突顎であり、男性は高眼窩型に近い中眼窩型、女性は高眼窩型である。
- ・上肢骨について、男性は前腕の最大長が大きい傾向を示す。女性は近世の比較集団と比べて大きな差は見られない。
- ・下肢骨について、男女ともに最大長が小さい傾向を示す。また、男女ともに大腿骨の扁平性は強いが、脛骨の扁平性は弱い傾向を示す。

- ・推定身長は男性のみ算出可能であり、他の近世人集団と比較すると小さな値を示す。
- ・筋骨格ストレスマーカーの発達は顕著ではなく、下顎犬歯にエナメル質減形成が高頻度で見られる。

参考文献

- 阿部英世 (1957) 現代九州人大腿骨の人類学的研究. 人類学研究 2(2), 301-346.
- 馬場悠男 (1991) 人体計測法 II 人骨計測法. 人類学講座別巻 1, 雄山閣出版.
- Buikstra J.H. and Ubelaker D.H. (1994) Standards for Data Collection From Human Skeletal Remains. Fayetteville, Arkansas :Arkansas Archaeological Survey Report Number44.
- Brooks S. and Suchey J.M. (1990) Skeletal age determination based on the os pubis: A comparison of the Acsadi-Nemeskeri and Suchey-Brooks methods. Human Evolution 5, 227-238.
- 太宰府市史編集委員会編 (2004) 太宰府市史 通史編II. 太宰府市.
- 藤井明 (1960) 四肢長骨の長さとの関係に就いて. 順天堂大学体育学部紀要 3, 49-61.
- 原田忠昭 (1954) 西南日本人頭蓋骨の人類学的研究. 人類学研究 1, 11-51.
- Hawkey D.E. and Merbs C.F. (1995) Activity-induced musculoskeletal stress markers (MSM) and subsistence strategy changes among ancient Hudson Bay Eskimos. International Journal of Osteoarchaeology 5, 324-338.
- 石川梧・小椋秀亮・塩田重利・砂田今男ほか (1986) 新歯学大辞典 ポケット版. 永末書店.
- 鑄鍋勝登 (1955) 現代九州人下腿骨の人類学的研究. 人類学研究 2 (1), 1-41.
- 片山一道 (2015) 骨が語る日本人の歴史. ちくま新書.
- 加藤征 (1991) 江戸時代人骨の形質に関する人類学的研究. 平成2年度科学研究費補助金一般研究B研究成果報告.
- 川久保善智・澤田純明・大野憲五・竹下直美・隅康二・埴原恒彦 (2011) 第7章1: 東畑瀬遺跡9区から出土した人骨について. 東畑瀬遺跡3 東畑瀬遺跡6G・7・9区—嘉瀬川ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6—, 218-239.
- 顔蒼准 (1959) 福老系台湾漢族農民と漁民との体質の比較研究. 人類学研究 6, 547-756.
- 欠田早苗 (1959) 畿内人頭蓋骨の人類学的研究—現代畿内人骨と江戸時代後期墳墓骨について—. 人類学輯報 25, 53-83.
- 邱豊雄 (1956) 台湾澎湖島々民の生体学的研究. 人類学研究 3, 368-395.
- 九州大学医学部解剖第二講座編 (1988) 日本民族・文化の生成2. 九州大学医学部解剖第二講座所蔵個人骨資料集成, 六興出版.
- Lovejoy C.O., Meindl R.S., Pryzbeck T.R., Mensforth R.P. (1985) Chronological metamorphosis of the auricular surface of the ilium: a new method for the determination of adult skeletal age at death. American Journal of Physical Anthropology, 68, 15-28.
- Martin-Saller (1957) Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. GustavFischerVerlag. Stuttgart.
- 溝口静男 (1957) 現代九州日本人前腕骨の人類学的研究. 人類学研究 4, 237-272.
- 森田茂 (1950) 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究. 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集 3, 1-54.
- 中橋孝博 (1993) 福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨. 席田青木遺跡, 福岡市教育委員会.
- 中橋孝博・土肥直美 (2008) 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨. 原田第1・2・40・41号墓地下巻, 筑紫野市教育委員会.
- 中井歩・福永将大・米元史織・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・藤井恵美・舟橋京子・足立達朗・中野伸彦・

小山内康人・田中良之（2015）古野遺跡第2次調査出土近世人骨について．乙金第二土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 古野遺跡第2・3・5次調査．乙金地区遺跡群12，大野城市文化財調査報告書第123集，56-93.

山本美代子（1988）日本人古人骨永久歯のエナメル質減形成．*Anthropological Science*，96(4)，417-433.

岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之（2004）稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨．国道502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，262-323.

Sakaue K. (2012) Craniofacial Variation among the Common People of the Edo Period. *Bulletin of the National Science Museum Series D (Anthropology)*38, 39-49.

佐倉朔・梶ヶ山真里（1991）付編 自證院遺跡 第2次調査出土人骨．自證院遺跡：日本上下水道設計（株）富久町社屋新築工事に伴う第2次緊急発掘調査報告書，15-17.

Scheuer L. and Black S. (2000) *Developmental juvenile osteology*. Academic Press, San Diego.

専頭時義（1957）現代九州日本人上腕骨の人類学的研究．*人類学研究*4，273-301.

鈴木尚（1963）日本人の骨．岩波書店．

鈴木尚（1985a）骨は語る 徳川将軍・大名家の人びと．財団法人東京大学出版.

鈴木尚（1985b）江戸時代における貴族形質の顕現．*人類学雑誌*93（1），1-32.

高岸直人（1990）第4章 肩甲帯と肩関節．天児民和編，*神中整形外科学各論*，南山堂，311-378.

田島達也（1990）第6章 前腕と手．天児民和編，*神中整形外科学各論*，南山堂，457-704.

高椋浩史・李ハヤン・谷澤亜里・早川和賀子・米元史織・岩橋由季・舟橋京子・田中良之（2011）大分県日田市所在の祇園原遺跡から出土した近世人骨について．*祇園原II（近世墓編2）*，8-54.

枋原博（1957）日本人歯牙の咬耗に関する研究．*熊本医学会雑誌*，31，607-656.

宮城成圭（1990）第9章 膝関節と下腿 II．下腿．天児民和編，*神中整形外科学各論*，南山堂，1045-1070.

米元史織・高椋浩史・李ハヤン・岩橋由季・谷澤亜里・早川和賀子・中井歩・舟橋京子・田中良之（2013）大野城市原口遺跡4次調査B地区出土近世人骨について．乙金地区遺跡群7，大野城市文化財調査報告書第110集，161-202.

米元史織（2016a）筋付着部の発達度からみる縄文時代の生業様式の地域的多様性．九州大学総合研究博物館研究報告，14，37-57.

米元史織（2016b）筋付着部の発達度からみる弥生時代の身体活動の地域的多様性．*考古学は科学か*，田中良之先生追悼論文集，上，579-602.

(6) 小結

調査区は、四王寺山から南へ派生する標高66～70mほどの低丘陵の2つの尾根があり、それぞれの近世～近代墓が密集して形成されていた。2つの尾根の間には谷があり、谷の堆積土からは少量だが奈良時代から平安時代までの土器や瓦の破片が出土している。近世墓が構築されるまでの尾根の土地利用を推測できる資料と言える。古代の明確な遺構としては、南地区の北斜面に8世紀初頭と考えられる合わせ口の甕棺墓がある。須恵器杯cの完形品も伴っており、律令制大宰府の成立期資料として注目できる。さて、尾根ごとに墓の様相が異なるため、それぞれ北尾根と南尾根と分けて記述していく。

北尾根は、坂本地区で今も続く武藤氏一族の墓と伝えられている。現在も北尾根東側に隣接して墓地が存在しており、墓地の外縁に江戸時代以降の墓碑が多数建てられている。おそらく調査区や近隣から移設したものと考えられる。北尾根の墓は平面方形のものが多く、列状に整然と並んでいるという特徴が観察できた。特に尾根の中心を通るように、北西方向に2列で構築しているのは強い規制があったことを示していると考えられる。墓壇の深さは検出面より1～1.8mだが、元々の墓地の高さからいうと、

2mを越える深さである。一辺が1～1.5mの方形プランのものが多く、ほとんどが桶形木棺と推測される。北尾根では甕棺は1基だけであった。合計26基の墓が確認された。

南尾根は南東から北西の斜めに伸びる丘陵に墓地が展開している。この尾根は、坂本地区で今も続く大田氏一族の墓地と伝わっている。ただし地元の方の話では少数だが他の家の墓もあったという。これは墓碑の調査からも裏付けられる。南地区の東側は一辺が2m前後の大型方形プランをもつ墓が隣接して展開しているが、中央から西側の尾根突端に向かうと方形プランと円形プランが混在し、頻繁な切り合いが生じている。これは、南尾根の墓が江戸時代後期から長期に渡って墓地を利用しているため、墓地の面積が手狭になると〈寄せ墓〉という、古い墓を掘り起こして骨を一緒にして焼き、1つの墓にして石塔を立てる行為が行われたのだと考えられる。（『太宰府市史民俗資料編』P477参照）。南尾根は現状尾根の北側しか残っていないが、近所の方（田村氏・武藤氏）に話を聞くと、昭和30年代に地元の建設会社が山の南側を土取りし削ったためこのような状況になっているとのことである。昭和31年（1956）頃、宰府の光蓮寺に納骨堂ができたため、お骨はそちらに移したという。基本的に尾根に二列並ぶ墓地景観だったと遺構配置からは考えられる。

なお、出土した墓碑は地表にはほとんどなく、包含層内や墓壙内に埋められていた。このことを考慮すると、墓の片付け（改葬）は終わっているものが多かったと判断される。墓碑の銘は、大多数が〈積〉であり、埋葬されていたのは浄土真宗の門徒だと思われる。墓碑は27基確認でき、合計47基の墓を確認した。

今回の浦山遺跡第2次調査では、坂本地区を中心とした武藤・大田氏の一族墓を発掘調査して、江戸時代後期から近代に至るまでの資料が確認できた。本来、江戸時代後期では、それぞれの寺と民衆は寺請制度によって強いつながりがあり、宗門人別改帳などが残っていれば人名・間柄は調査できるのだが、宰府の光蓮寺が幕末に大火となり、過去帳等の資料が一度焼失してしまっている。今回の調査で出土した墓碑や墓地の展開を研究することで、坂本地区の歴史が解明でき、ひいては太宰府の近世史に貴重な資料を提供することができるだろう。

表 29 浦山遺跡第 2 次調査出土人骨一覽

No.	遺存状態	性別	年齢	頭位	方位	埋葬施設	埋葬姿勢
2	不	女性	成人	不明	不明	甕棺	坐葬
3	良	男性	熟年	北西	南東	木棺	立膝坐葬
5	不	不明	成人	不明	不明	木棺	不明
7	不	不明	不明	不明	不明	不明	不明
9	良	男性	熟年	東	西	木棺	立膝坐葬
10	不	男性	熟年後半-老年	不明	不明	土壙墓	不明
11	不	女性	成人	東	西	土壙墓	不明
13	不	女性	成人	西?	不明	土壙墓	坐葬
14	不	不明	熟年	不明	不明	土壙墓	不明
15	不	不明	不明	不明	不明	土壙墓	不明
17	不	不明	不明	不明	不明	土壙墓	不明
18	不	不明	成人	不明	不明	甕棺	不明
19	不	女性	熟年以上	東?	西?	甕棺	坐葬
20	良	女性	熟年	不明	不明	甕棺	坐葬
21	良	不明	幼児	南	不明	土壙墓	不明
23	良	男性	成年	不明	不明	土壙墓	不明
26	不	不明	不明	不明	不明	土壙墓	不明
28	不	不明	熟年	不明	不明	甕棺	坐葬
29	不	女性	熟年以上	東	-	木棺	屈葬
30	不	女性	熟年以上	北	-	木棺	屈葬
31	不	不明	不明	不明	不明	土壙墓	不明
32	不	女性	熟年以上	北	不明	土壙墓	不明
33	不	不明	不明	北	不明	土壙墓	不明
34	不	不明	不明	北	不明	土壙墓	不明
35	不	不明	成人	不明	不明	木棺?	不明
36	不	不明	不明	北	不明	土壙墓	不明
37	良	男性	熟年	北	-	土壙墓	仰臥屈葬
38A	不	男性	不明	西?	不明	土壙墓	立膝坐葬
38B	良	男性	熟年以上	東?	不明	土壙墓	不明
41	不	不明	不明	不明	不明	土壙墓	不明
42	不	不明	成年	不明	不明	土壙墓	不明
43	不	不明	不明	南西	北東	土壙墓	立膝坐葬
45	不	不明	不明	不明	不明	甕棺	不明
51	不	不明	成人	北	不明	土壙墓	不明
52	良	女性	成年	北?	不明	土壙墓	不明
53	不	不明	不明	不明	不明	土壙墓	不明
54	良	男性	成人	南西	北東	木棺	立膝坐葬
55	不	不明	幼児	不明	不明	木棺?	不明
56	良	女性	老年	不明	不明	木棺	不明
57	良	女性	成年	北	-	土壙墓	仰臥屈葬
58	不	不明	成人	東	不明	土壙墓	坐葬
60	良	不明	若年	南東	北西	木棺	立膝坐葬
61	良	女性	熟年以上	北	南?	土壙墓	不明
62	良	女性	成年-熟年	不明	不明	木棺	坐葬
63	不	不明	幼児	不明	不明	土壙墓	不明
64	良	男性	老年	南	北	木棺	不明
65	良	男性	熟年	北西	南東	木棺	立膝坐葬
66	良	女性	熟年以上	南	北	木棺	立膝坐葬
67	良	女性	熟年以上	南	北	木棺	立膝坐葬
68	良	男性	熟年	南	北	甕棺	坐葬
69	不	不明	熟年以上	南?	不明	土壙墓	不明
70	良	男性	老年	東	西	円形木棺	不明
71	良	女性	熟年	東	西	木棺	不明
72	良	女性	熟年	北東	西	木棺	立膝坐葬
73	良	不明	熟年	北	南	土壙墓	立膝坐葬
74	良	男性	熟年後半以上	東	西	円形木棺	立膝坐葬
75	不	不明	幼児	不明	不明	土壙墓	不明
76	良	男性	老年	不明	不明	土壙墓	不明

表 30 男性の頭蓋計測値 (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)											
	3号	9号	37号	38-B号	54号	64号	65号	68号	70号	72号	74号	
1	最大長	188	191	191	183	188	178	-	189	-	177	179
8	最大幅	133	-	137	140	143	133	137	136	-	126	125
17	バジオン・プレグマ高	144	141	149	145	131	130	-	136	133	133	130
8/1	頭長幅示数	70.7	-	71.7	76.5	76.1	74.7	-	72.0	-	71.2	69.8
17/1	頭長高示数	76.6	73.8	78.0	79.2	69.7	73.0	-	72.0	-	75.1	72.6
17/8	頭幅高示数	108.3	-	108.8	103.6	91.6	97.7	-	100.0	-	105.6	104.0
45	頬骨弓幅	-	-	-	-	-	135	126	134	-	-	-
46	中顔幅	94.1	121.0	-	-	-	95.3	-	95.6	-	93.9	95.7
47	顔高	-	-	132.9	-	-	119.2	127.8	133	-	124.6	115.7
48	上顔高	-	-	74.1	-	64.5	69.9	-	72.3	-	70.7	66.7
47/45	顔示数 (K)	-	-	-	-	-	88.3	101.4	99.3	-	-	-
47/46	顔示数 (V)	-	-	-	-	-	125.1	-	139.1	-	132.7	120.9
48/45	上顔示数 (K)	-	-	-	-	-	51.8	-	54.0	-	-	-
48/46	上顔示数 (V)	-	-	-	-	-	73.3	-	75.6	-	75.3	69.7
51	眼窩幅	39.8	-	44.2	40.5*	39	41.4	42.3	38.9	39.3	33.8	40.1
52	眼窩高	37.5	-	35.7	33.5*	31.8	31.1	31.9	34.0	32.5	35.5	32.4
52/51(L)	眼窩示数	94.2	-	80.8	82.7*	81.5	75.1	75.4	87.4	82.7	105.0	80.8
54	鼻幅	23.1	-	27.3	-	23.8	27.5	22.0	23.9	26.5	-	-
55	鼻高	55.9	-	54.9	-	46.4	46.6	-	51.5	53.2	49.3	50.9
54/55	鼻示数	41.3	-	49.7	-	51.3	59.0	-	46.4	49.8	-	-
72	全側面角	-	-	86	-	79	78	78	80	-	72	85
74	歯槽側面角	-	-	64	-	63	63	73	70	-	65	70
M50	前眼窩間幅	18.2	-	16.3	16.2	17.8	18.7	19.1	16.8	18.9	18.4	15.1
F	鼻根横弧長	29	-	-	-	26	28	28	29	-	31	-
50/F	鼻根湾曲示数	62.8	-	-	-	68.5	66.8	68.2	57.9	-	59.4	-
M57	鼻骨最小幅	8.5	-	8.8	4.9	8.6	6.5	5.7	8.2	9.4	7.1	9.2

*は右側の計測値

表 31 女性の頭蓋計測値 (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)								
	30号	56号	57号	61号	62号	66号	67号	71号	
1	最大長	176	186	171	-	176	-	187	175
8	最大幅	-	-	-	-	-	140	-	130
17	バジオン・プレグマ高	-	-	-	-	-	-	129	129
8/1	頭長幅示数	-	-	-	-	-	-	-	74.3
17/1	頭長高示数	-	-	-	-	-	-	69.0	73.7
17/8	頭幅高示数	-	-	-	-	-	-	-	99.2
45	頬骨弓幅	-	-	-	-	-	-	-	-
46	中顔幅	-	-	-	-	-	-	93.0	-
47	顔高	-	-	-	-	-	-	-	-
48	上顔高	-	-	-	-	-	-	-	-
47/45	顔示数 (K)	-	-	-	-	-	-	-	-
47/46	顔示数 (V)	-	-	-	-	-	-	-	-
48/45	上顔示数 (K)	-	-	-	-	-	-	-	-
48/46	上顔示数 (V)	-	-	-	-	-	-	-	-
51	眼窩幅(L)	-	-	-	-	-	41.2	40.2	37.4
52	眼窩高(L)	-	-	-	-	-	-	33.5	32.9
52/51	(L)眼窩示数	-	-	-	-	-	-	83.3	88.0
54	鼻幅	-	-	-	-	-	-	24.9	23.7
55	鼻高	-	-	-	-	-	-	48.1	44.9
54/55	鼻示数	-	-	-	-	-	-	51.8	52.8
72	全側面角	-	-	-	-	-	-	-	-
74	歯槽側面角	-	-	-	-	-	-	-	-
M50	前眼窩間幅	16.5	-	-	14.0	-	-	12.6	14.5
F	鼻根横弧長	-	-	-	-	-	-	-	28
50/F	鼻根湾曲示数	-	-	-	-	-	-	-	51.8
M57	鼻骨最小幅	-	-	-	-	7.1	-	7.0	7.9

表 32 男性の下顎骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)						
	3号	37号	54号	64号	65号	68号	74号
65 下顎頭間幅	-	-	-	127.4	-	123.2	-
66 下顎角幅	-	-	-	-	-	95.2	-
68 下顎骨長	-	-	-	-	-	70	-
69 オトガイ高	-	43.2	33.6	32.6	-	36.6	30.5
70 下顎枝高 (L)	-	53.9*	57.7*	-	-	63.7	53.7
71 下顎枝幅 (L)	32.7*	36.3*	33.4*	34.8	34.3	28.7	32
71/70 下顎枝示数 (L)	-	67.3*	57.9*	-	-	45.1	59.6

*は右側の計測値

表 33 女性の下顎骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)						
	20号	56号	57号	62号	67号	71号	72号
65 下顎頭間幅	-	-	-	-	-	-	-
66 下顎角幅	-	-	-	-	95.8	-	-
68 下顎骨長	-	-	-	-	54.8	-	-
69 オトガイ高	35.6	31.4	-	32.8	-	31.3	37.9
70 下顎枝高 (L)	-	-	47.4	-	-	45.8	-
71 下顎枝幅 (L)	-	30.2	31.0	-	29.9	27.7	32.1*
71/70 下顎枝示数 (L)	-	-	65.4	-	-	60.5	-

*は右側の計測値

表 34 男性の上肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.		浦山2次 (近世)												
		3号	9号	23号	37号	54号	64号	65号	68号	70号	72号	74号	76号	
上腕骨	1	最大長	-	-	-	-	-	288	-	292	-	-	-	
	2	全長	-	-	-	-	-	283	-	289	-	-	-	
	5	中央最大径	-	-	-	-	-	21.6	-	24.7	-	-	-	
	6	中央最小径	-	-	-	-	-	17.4	-	17.6	-	-	-	
	7	骨体最小周	67*	62	62*	71*	62	63	70*	65	61	-	60*	55
	7a	中央周	-	-	-	-	-	67	-	69	-	-	-	-
	6/5	骨体断面示数	-	-	-	-	-	80.6	-	71.3	-	-	-	-
	7/1	長厚示数	-	-	-	-	-	21.9	-	22.3	-	-	-	-
橈骨	1	最大長	233	235*	-	-	-	-	223*	220	-	230	-	
	2	機能長	223	229*	-	-	-	205*	-	213*	207	-	219	-
	3	最小周	41*	44*	44*	46	41	42	46*	44	44	-	39	-
	4	骨体横径	17.5*	16.7*	14.9	17.9	15.3	16.6	16.5*	17.5	18.1	16.5	16.8	15.5
	4a	骨体中央横径	14.5	17.0*	16.2*	16.9	15.2	-	-	18.2	17.5	-	13.4	-
	5	骨体矢状径	12.2*	13.5*	11.3	13.0	11.6	11.8	12.8*	11.7	13.7	11.2	12.0	10.9
	5a	骨体中央矢状径	12.6	13.2*	12.3*	13.3	12.2	-	-	12.6	13.2	-	12.4	-
	3/2	長厚示数	18.4	19.2	-	-	-	20.5	-	20.7	21.3	-	17.8	-
	5/4	骨体断面示数	69.7*	80.8*	75.8	72.6	75.8	71.1	77.6	66.9	75.7	67.9	71.4	70.3
	5a/4a	中央断面示数	86.9	77.6*	75.9*	78.7	80.3	-	-	69.2	75.4	-	92.5	-
尺骨	1	最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	251	-	
	2	機能長	-	-	219*	-	206*	-	-	208	205	-	223	-
	3	最小周	37*	-	37	-	35*	34	-	35	-	34*	34	-
	11	矢状径	14.1	11.5	14.0	13.7	14.8	12.9	15.3	14.8	12.2	12.9	11.6	14.3
	12	横径	16.2	16.2	15.6	16.2	15.5	15.9	17.7	17.0	18.4	13.6	15.9	17.1
	3/2	長厚示数	-	-	16.9	-	17.0*	-	-	16.8	-	-	15.2	-
	11/12	骨体断面示数	87.0	71.0	89.7	84.6	95.5	81.1	86.4	87.1	66.3	94.9	73.0	83.6

*は右側の計測値

表 35 女性の上肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.		浦山2次 (近世)											
		11号	19号	20号	30号	52号	56号	57号	62号	66号	67号	71号	
上腕骨	1	最大長	-	-	-	-	-	287	-	-	-	-	-
	2	全長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5	中央最大径	-	-	-	-	-	21.1	-	-	-	-	-
	6	中央最小径	-	-	-	-	-	16.4	-	-	-	-	-
	7	骨体最小周	-	-	57	50	-	-	-	-	53*	60	-
	7a	中央周	-	-	-	-	-	63	-	-	-	-	-
	6/5	骨体断面示数	-	-	-	-	-	77.8	-	-	-	-	-
	7/1	長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
橈骨	1	最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2	機能長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3	最小周	-	35*	-	-	-	-	-	-	-	-	35
	4	骨体横径	-	-	-	-	-	15.9*	-	14.4	-	15.4	14
	4a	骨体中央横径	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5	骨体矢状径	-	-	-	-	-	10.6*	-	10.2	-	10.8	9.9
	5a	骨体中央矢状径	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3/2	長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	5/4	骨体断面示数	-	-	-	-	-	66.7*	-	70.8	-	70.1	70.7
	5a/4a	中央断面示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
尺骨	1	最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	2	機能長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	3	最小周	-	34	-	-	-	34	-	-	-	-	34
	11	矢状径	10.3*	-	12.0*	-	-	12.5	11.5*	12	-	12.6*	11.2
	12	横径	13.9*	-	16.3*	-	14.5	16.6	12.8*	14.7	-	16.8*	14.7
	3/2	長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	11/12	骨体断面示数	74.1*	-	73.6*	-	-	75.3	89.8*	81.6	-	75.0*	76.2

*は右側の計測値

表 36 男性の下肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)															
	3号	9号	10号	37号	38-A号	38-B号	54号	64号	65号	68号	70号	72号	74号	76号		
大腿骨	1 最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	401	-	
	2 自然位長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	395	-	
	6 中央矢状径	32.4	29.1	30.7*	28.7	27.6*	28.5	24.1*	26.7	33.4	26.1	25.2	24.4	25.6	23.8	
	7 中央横径	27.5	30.3	27.7*	29.2	27.6*	26.7	28.6*	26.6	31	26.5	28.6	26.3	28.9	22.3	
	8 中央周	97	93	92*	93	90*	88	84*	83	101	84	86	81	86	73	
	9 骨体上横径	31.2	35.3	-	33.4*	31.9*	33.2	32.4	30.2	33.5	31.7	31.8	29	32.8	26.1	
	10 骨体上矢状径	28.4	26.4	-	27.9*	26.1*	24.7	23.3	24.3	26.1	22.8	23.8	22.9	22.2	20.7	
	8/2 長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21.8	-
	6/7 中央断面示数	117.8	96.0	110.8	98.3	100.0	106.7	84.3	100.4	107.7	98.5	88.1	92.8	88.6	106.7	
	10/9 上骨体断面示数	91.0	74.8	-	83.5	81.8	74.4	71.9	80.5	77.9	71.9	74.8	79.0	67.7	79.3	
	脛骨	1 全長	-	-	-	-	-	-	306	-	-	322	-	319	-	
1a 最大長		-	-	-	352*	-	-	319*	312	-	316	328	-	326	-	
8 中央最大径		-	-	-	29.6*	-	-	-	27.5	31.8	28	26.5	-	28.1	-	
8a 栄養孔位最大径		33.1	32.3	-	34.4	-	-	29.8*	30.1	36	31.9	31.3*	30.4	33.1	27.1	
9 中央横径		-	-	-	22.6*	-	-	-	23.2	21	22.6	21.7	-	18.2	-	
9a 栄養孔位横径		26.9	25.2	-	24.8	21.8*	23.6	21.7*	25.9	23.4	24.8	23.1*	22.4	20.2	21.6	
10 中央周		-	-	-	85*	-	-	-	82	88	80	76	-	76	-	
10a 栄養孔位周		95	89	-	97	-	-	82*	88	97	89	88	85	84	80	
10b 最小周		71	71	-	78	-	-	-	72	79	69	70	64	67	66	
9/8 中央断面示数		-	-	-	76.4	-	-	-	84.4	66.0	80.7	81.9	-	64.8	-	
9a/8a 栄養孔断面示数		81.3	78.0	-	72.1	-	-	72.8	86.0	65.0	77.7	73.8	73.7	61.0	79.7	
10b/1 長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	23.5	-	-	21.7	-	21.0	-		
腓骨	1 全長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	2 中央最大径	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	3 中央最小径	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	4 中央周	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		
	4a 最小周	35*	-	-	38*	-	-	-	37	-	39	-	34*	31	-	
	3/2 中央断面示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	4a/1 長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

*は右側の計測値

表 37 女性の下肢骨計測値 (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)														
	2号	11号	20号	29号	30号	32号	52号	56号	57号	61号	62号	66号	67号	71号	
大腿骨	1 最大長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	2 自然位長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	6 中央矢状径	-	-	-	-	23.6*	-	23.9	26.8	22.1	23.1	21.5	-	24.3	24.5
	7 中央横径	-	-	-	-	23.4*	-	-	25.7	22.9	23.4	24.9	28.2	26.2	26.3
	8 中央周	-	-	-	-	75*	-	-	85	72	73	74	-	80	78
	9 骨体上横径	29.8	27.2*	-	-	29.5*	25.5*	29.5	30.4	28.1*	-	30.1	31	30.9	29.8
	10 骨体上矢状径	18.7	20.3*	-	-	22.6*	22.6*	20.9	25.1	18.6*	-	18.1	20.1	23.4	20.6
	8/2 長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	6/7 中央断面示数	-	-	-	-	100.9	-	-	104.3	96.5	98.7	86.3	-	92.7	93.2
	10/9 上骨体断面示数	62.8	74.6	-	-	76.6	88.6	70.8	82.6	66.2	-	60.1	64.8	75.7	69.1
	脛骨	1 全長	-	-	297*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	304
1a 最大長		-	-	300*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8 中央最大径		-	-	27.3*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
8a 栄養孔位最大径		-	-	-	-	28.0*	-	28.7	32.7	25.3*	29.7	26.5	29.5	28.7	28.9
9 中央横径		-	-	19.6*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
9a 栄養孔位横径		-	-	-	-	20.7	-	19.9	23.8	19.6*	18.8	20.2	20.5	24.4	20.8
10 中央周		-	-	73*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
10a 栄養孔位周		-	-	-	-	78*	-	77	90	72*	79	73	81	82	81
10b 最小周		-	62	64*	66	-	-	-	69	60	-	-	64	71*	-
9/8 中央断面示数		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9a/8a 栄養孔断面示数		-	-	-	-	73.9	-	69.3	72.8	77.5	63.3	76.2	69.5	85.0	72.0
10b/1 長厚示数	-	-	21.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
腓骨	1 全長	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	2 中央最大径	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	3 中央最小径	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	4 中央周	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	4a 最小周	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	3/2 中央断面示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	4a/1 長厚示数	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

*は右側の計測値

表 38 頭蓋計測値の比較 (男性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)		大町3次 ¹⁾ (近世)		古野 ²⁾ (近世)		原口SX39 ³⁾ (近世)		原田 ⁴⁾ (近世)		稲荷谷 ⁵⁾ (近世)		祇園原 ⁶⁾ (近世)		甕棺 ⁷⁾ (近世)		早稲 ⁷⁾ (近世)		綱重 ⁸⁾	家宣 ⁸⁾	家重 ⁸⁾
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M			
1 最大長	9	184.9	-	-	1	175.0	1	177.0	25	185.3	14	175.4	2	182.0	50	177.4	131	181.5	190.0	186.0	182.0
8 最大幅	9	134.4	2	136.0	1	133.0	1	134.0	26	135.9	15	142.4	3	140.7	50	141.3	131	138.5	149.0	144.0	145.0
17 バジオン・プレグマ高	10	137.2	1	139.0	1	130.0	1	126.0	20	138.4	8	138.9	3	136.3	50	138.0	131	136.2	144.0	136.0	143.0
8/1 頭長幅示数	8	72.8	-	-	1	76.0	1	75.7	25	73.6	14	80.7	1	73.2	50	80.0	131	76.0	78.5	77.4	79.7
17/1 頭長高示数	9	74.5	-	-	1	74.3	1	71.2	19	75.0	8	79.7	1	71.4	50	78.0	131	75.0	75.8	73.2	78.5
17/8 頭幅高示数	8	102.4	1	101.5	1	97.7	1	94.0	19	101.0	8	96.9	2	98.4	50	98.0	131	98.0	96.7	94.5	98.5
45 頬骨弓幅	3	131.7	1	138.0	1	127.0	1	135.0	19	136.1	8	137.4	1	132.5	50	133.1	131	134.9	142.0	136.0	140.0
46 中顔幅	6	99.3	2	104.7	1	86.0	1	105.0	18	99.5	7	97.7	4	102.4	50	97.3	131	99.9	-	-	-
47 顔高	6	125.5	1	118.0	-	-	1	102.0	11	121.6	6	128.0	1	120.0	-	-	-	-	135.0	137.0	138.0
48 上顔高	6	69.7	-	-	-	-	-	-	17	72.8	7	75.6	4	71.6	50	73.7	131	72.2	82.0	82.0	78.0
47/45 顔示数 (K)	3	96.3	1	85.5	-	-	1	75.6	10	89.6	6	93.9	-	-	-	-	-	-	95.1	100.7	98.6
47/46 顔示数 (V)	4	129.4	1	111.1	-	-	1	97.1	9	122.5	6	131.1	1	117.3	-	-	-	-	-	-	-
48/45 上顔示数 (K)	2	52.9	-	-	-	-	-	-	14	53.3	6	56.1	1	53.0	50	55.0	131	54.0	57.7	60.3	55.7
48/46 上顔示数 (V)	4	73.5	-	-	-	-	-	-	11	73.4	6	78.3	1	69.4	50	76.0	131	72.0	-	-	-
51 眼窩幅	10	39.9	1	43.3	1	40.0	1	41.0	24	42.2	8	44.6	5	39.7	50	43.4	131	43.3	49.0	48.0	46.0
52 眼窩高	10	33.6	1	31.7	1	34.0	1	35.0	24	35.0	8	36.9	5	34.1	50	35.6	131	34.1	40.0	39.0	38.0
52/51(L) 眼窩示数	10	84.6	1	73.2	1	85.0	1	85.4	24	83.0	8	82.7	5	85.9	50	82.0	131	79.0	81.7	81.3	83.9
54 鼻幅	7	24.9	2	26.9	1	25.0	1	27.0	23	25.6	7	26.1	6	25.6	50	24.5	131	25.6	28.0	26.0	25.0
55 鼻高	8	51.1	2	50.5	1	51.0	1	46.0	25	51.2	7	54.4	6	53.2	50	53.6	131	52.3	62.0	62.0	58.0
54/55 鼻示数	6	49.6	2	53.1	1	49.0	1	58.7	23	50.0	7	48.1	6	48.2	50	80.0	131	87.0	45.2	41.9	43.2
72 全側面角	7	79.7	-	-	-	-	-	-	6	85.0	6	83.7	-	-	50	84.4	131	83.3	-	-	-
74 齒槽側面角	7	66.9	-	-	-	-	-	-	6	72.5	5	72.6	4	70.5	50	67.5	131	64.8	-	-	-
M50 前眼窩間幅	10	17.6	2	17.3	1	15.0	1	16.0	22	19.1	6	16.7	-	-	50	16.9	131	16.9	-	-	-
F 鼻根横弧長	6	28.5	2	19.0	1	22.0	1	20.0	22	21.9	6	19.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-
50/F 鼻根湾曲示数	6	63.9	2	91.0	1	68.2	1	80.0	22	87.3	6	85.2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
M57 鼻骨最小幅	10	7.7	2	8.2	1	6.0	1	6.0	26	8.2	6	8.6	-	-	50	7.2	131	7.3	-	-	-

1)富田ほか (2016)、2)中井ほか (2015)、3) 米元ほか (2013)、4)中橋・土肥 (2008)、5)岡崎ほか (2004)、6)高塚ほか (2011)、7) 坂上 (2012)、8) 鈴木尚 (1985a)、9) 鈴木尚 (1985b)、10) 加藤 (1991)、11) 川久保ほか (2011)、12) 欠田 (1959)、13) 原田 (1954)、14) 森田 (1950)

Martin No.	家慶 ⁹⁾		家茂 ⁹⁾		徳川 義宣 ⁹⁾		伊達 政宗 ⁹⁾		伊達 忠宗 ⁹⁾		伊達 綱宗 ⁹⁾		内藤 頼尚 ⁹⁾		内藤 長好 ⁹⁾		内藤 頼直 ⁹⁾		水野 忠義 ⁹⁾		水野 忠武 ⁹⁾		水野 忠良 ⁹⁾		牧野家 ¹⁰⁾ (近世)		神代 9代目 ¹¹⁾		畿内 ¹²⁾ (現代)		西南日本 ¹³⁾ (現代)		関東 ¹⁴⁾ (現代)					
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M				
1 最大長	192.0	184.0	167.0	193.0	182.0	180.0	179.0	175.0	183.0	181.0	180.5	175.2	9	174.8	179.0	37	177.3	108	181.4	143	178.9																	
8 最大幅	156.0	142.0	138.0	140.0	150.0	144.0	152.0	147.0	143.0	145.2	141.3	134.5	8	141.5	132.0	37	142.9	108	139.3	143	140.3																	
17 バジオン・プレグマ高	150.0	142.0	133.0	136.0	138.0	129.0	148.0	138.0	144.0	139.0	141.2	133.5	9	137.7	132.0	37	139.1	108	139.3	143	138.1																	
8/1 頭長幅示数	81.3	77.3	82.6	72.5	82.4	80.0	84.9	84.0	78.1	80.2	78.2	76.2	8	81.3	73.7	37	80.7	108	76.6	143	78.5																	
17/1 頭長高示数	70.2	77.3	79.6	70.5	75.8	71.7	84.9	78.9	78.6	76.8	78.2	76.2	9	78.8	73.7	37	78.4	108	76.9	143	77.3																	
17/8 頭幅高示数	96.2	100.0	96.4	97.1	101.4	89.6	97.4	93.9	100.7	95.7	99.2	99.2	8	97.6	100.0	37	97.5	108	100.1	143	98.6																	
45 頬骨弓幅	126.0	131.0	113.0	133.0	138.0	132.0	128.0	125.0	127.0	129.8	119.6	119.5	7	129.3	126.0	32	133.5	106	134.5	144	132.9																	
46 中顔幅	95.0	92.0	83.0	100.0	100.0	98.0	95.0	87.0	92.0	95.8	89.7	88.6	8	93.0	94.0	32	97.2	107	99.9	143	98.6																	
47 顔高	140.0	141.0	-	(130.0)	(126.0)	120.0	124.0	121.0	-	-	131.0	132.5	5	125.4	-	-	-	-	66	122.2	142	123.8																
48 上顔高	82.0	82.0	73.0	(76.0)	(78.0)	71.0	69.0	72.0	(75.0)	75.7	76.2	75.0	5	73.0	75.0	30	69.9	92	71.8	144	70.7																	
47/45 顔示数 (K)	111.1	107.6	-	97.7	91.3	90.9	96.9	96.8	-	-	109.5	110.9	5	96.9	-	-	-	-	64	91.4	142	93.1																
47/46 顔示数 (V)	147.3	153.3	-	130.0	126.0	122.4	130.5	139.1	-	-	146.0	149.5	5	132.3	-	-	-	-	65	122.2	141	125.4																
48/45 上顔示数 (K)	65.8	62.6	64.6	57.1	56.5	53.8	53.9	57.6	(59.1)	58.5	63.7	62.8	5	56.4	59.5	27	52.3	90	53.5	144	53.3																	
48/46 上顔示数 (V)	86.3	89.1	88.0	76.0	78.0	72.4	72.6	82.8	(81.5)	79.0	84.9	84.4	5	77.0	79.8	28	72.1	91	71.8	143	71.8																	
51 眼窩幅	43.0	46.0	36.0	43.0	43.0	42.0	42.0	45.0	45.5	41.8	42.2	9	44.3	41.0	37	41.8	108	43.0	142	42.7																		
52 眼窩高	37.0	38.0	38.0	39.0	38.0	36.0	36.0	36.0	37.0	35.2	35.0	34.0	9	37.8	36.0	37	35.1	108	34.4	144	34.3																	
52/51(L) 眼窩示数	86.1	82.6	105.6	90.7	88.4	83.7	87.8	90.8	82.4	77.4	83.7	80.5	9	85.3	87.8	37	84.0	108	80.2	142	80.4																	
54 鼻幅	23.0	22.0	20.0	26.0	27.0	26.0	23.0	24.0	23.5	21.2	23.8	9	22.9	21.0	37	25.0	108	25.9	144	25.0																		
55 鼻高	57.0	58.0	55.0	58.0	59.0	56.0	52.0	51.0	61.0	57.0	51.6	52.3	9	54.3	56.0	37	53.4	108	52.2	143	52.0																	
54/55 鼻示数	40.4	37.9	36.4	44.8	45.8	46.4	50.0																															

表 39 頭蓋計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)		大町3次 ¹⁾ (近世)		原田 ²⁾ (近世)		稲荷谷 ³⁾ (近世)		祇園原 ⁴⁾ (近世)		養椋 ⁵⁾ (近世)		早桶 ⁵⁾ (近世)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1 最大長	6	178.5	-	-	26	172.8	14	164.1	3	170.0	48	169.1	70	172.3
8 最大幅	2	135.0	1	130.0	26	131.1	15	135.8	2	131.1	48	135.3	70	133.2
17 バジオン・プレグマ高	2	129.0	1	136.0	23	131.3	11	130.3	2	128.3	48	132.0	70	130.6
8/1 頭長幅示数	1	74.3	-	-	24	75.5	14	83.4	2	78.0	48	80.0	70	77.0
17/1 頭長高示数	2	71.3	-	-	22	76.1	11	79.5	2	75.5	48	78.0	70	76.0
17/8 頭幅高示数	1	99.2	1	104.6	20	100.9	11	96.5	1	104.6	48	98.0	70	98.0
45 頬骨弓幅	-	-	-	-	19	123.7	7	122.3	-	-	48	123.8	70	125.0
46 中顔幅	1	93.0	-	-	19	94.5	5	88.8	2	94.8	48	92.2	70	93.3
47 顔高	-	-	-	-	13	112.2	4	113.5	3	111.2	-	-	-	-
48 上顔高	-	-	-	-	16	67.1	5	66.2	3	63.8	48	68.5	70	66.7
47/45 顔示数 (K)	-	-	-	-	10	92.0	3	92.2	-	-	-	-	-	-
47/46 顔示数 (V)	-	-	-	-	8	118.1	3	127.6	2	116.3	-	-	-	-
48/45 上顔示数 (K)	-	-	-	-	12	54.6	5	53.6	-	-	48	55.0	70	53.0
48/46 上顔示数 (V)	-	-	-	-	11	71.6	5	74.5	2	65.4	48	75.0	70	72.0
51 眼窩幅(L)	3	39.6	-	-	19	40.4	6	41.7	3	37.9	48	41.2	70	40.8
52 眼窩高(L)	2	33.2	-	-	17	33.9	6	36.3	3	33.9	48	34.6	70	33.3
52/51(L) 眼窩示数	2	85.7	-	-	17	84.2	6	87.2	3	89.6	48	84.0	70	82.0
54 鼻幅	2	24.3	-	-	24	25.0	7	25.9	3	25.6	48	24.5	70	24.4
55 鼻高	2	46.5	-	-	25	47.2	7	48.9	2	48.3	48	49.4	70	48.5
54/55 鼻示数	2	52.3	-	-	24	53.0	7	52.9	2	52.7	48	50.0	70	51.0
72 全側面角	-	-	-	-	12	83.0	5	81.8	-	-	48	82.7	70	81.3
74 齒槽側面角	-	-	-	-	12	68.6	5	64.4	3	74.3	48	64.3	70	62.8
M50 前眼窩間幅	4	14.4	-	-	25	17.0	7	16.3	-	-	48	16.3	70	16.4
F 鼻根横弧長	1	28.0	-	-	24	19.1	7	18.5	-	-	-	-	-	-
50/F 鼻根湾曲示数	1	51.8	-	-	24	89.0	7	88.9	-	-	-	-	-	-
M57 鼻骨最小幅	3	7.3	-	-	25	7.5	5	7.7	-	-	48	7.8	70	7.0

1) 富田ほか (2016)、2) 中橋・土肥 (2008)、3) 岡崎ほか (2004)、4) 高棟ほか (2011)、5) 坂上 (2012)、6) 鈴木尚 (1985b)、7) 加藤 (1991)、8) 原田 (1954)、9) 森田 (1950)

Martin No.	家茂 正室 ⁶⁾		内藤 頼郷 正室 ⁶⁾		内藤 長好 正室 ⁶⁾		内藤 頼寧 先室 ⁶⁾		内藤 頼寧 後室 ⁶⁾		内藤 頼直 正室 ⁶⁾		水野 忠友 正室 ⁶⁾		水野 忠誠 正室 ⁶⁾		牧野家 ⁷⁾ (近世)		西南日本 ⁸⁾ (現代)		関東 ⁹⁾ (現代)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1 最大長	173.0	165.0	172.0	167.0	176.0	172.0	183.5	175.2	3	167.0	42	172.8	82	170.8								
8 最大幅	144.0	145.0	140.0	140.0	141.0	140.0	143.5	137.0	4	133.8	42	133.8	82	135.9								
17 バジオン・プレグマ高	141.0	133.0	130.0	132.0	136.0	142.0	136.5	132.8	4	131.3	42	131.5	81	132.5								
8/1 頭長幅示数	83.3	87.9	81.4	84.3	80.1	81.4	-	78.1	2	80.4	42	77.5	82	79.7								
17/1 頭長高示数	81.5	80.6	75.6	79.0	77.3	82.6	-	75.8	2	77.7	42	76.2	81	77.7								
17/8 頭幅高示数	98.0	91.7	93.5	94.3	96.5	101.4	-	96.9	3	98.0	42	98.4	81	97.7								
45 頬骨弓幅	114.0	120.0	117.0	124.0	121.0	119.0	-	118.2	2	114.5	42	124.3	84	124.9								
46 中顔幅	83.0	91.0	88.0	93.0	89.0	88.0	-	90.0	2	83.5	42	93.6	84	93.5								
47 顔高	114.0	-	114.0	119.0	119.0	-	-	-	-	-	10	113.0	84	115.0								
48 上顔高	66.0	-	65.0	72.0	67.0	-	-	65.7	1	67.0	48	68.6	83	67.1								
47/45 顔示数 (K)	100.0	-	97.4	96.0	98.4	-	-	-	-	-	10	90.5	84	92.2								
47/46 顔示数 (V)	137.3	119.8	129.6	128.0	55.4	-	-	-	-	-	10	118.3	84	123.3								
48/45 上顔示数 (K)	57.9	-	55.6	58.1	133.7	-	-	-	-	-	40	55.1	83	53.8								
48/46 上顔示数 (V)	79.5	-	73.9	77.4	75.3	-	-	-	-	-	40	73.2	83	72.0								
51 眼窩幅(L)	42.0	37.0	37.0	39.0	40.0	42.5	42.5	39.8	2	39.5	42	40.7	84	41.1								
52 眼窩高(L)	37.0	34.0	36.0	37.0	36.0	37.5	-	36.2	1	35.0	42	34.0	84	33.8								
52/51(L) 眼窩示数	88.2	91.9	97.3	94.9	90.0	88.2	-	-	1	89.7	42	83.7	84	82.4								
54 鼻幅	25.0	25.0	21.0	21.0	24.0	24.0	-	24.8	1	24.0	42	25.2	84	24.5								
55 鼻高	51.0	50.0	48.0	54.0	51.0	54.0	52.7	49.5	2	49.0	42	48.7	84	49.0								
54/55 鼻示数	49.0	50.0	43.8	38.9	47.1	44.4	-	-	1	48.0	42	51.9	84	50.2								
72 全側面角	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	55	83.0	83	83.6								
74 齒槽側面角	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	55	67.1	83	73.2								
M50 前眼窩間幅	17.0	19.0	15.0	20.0	14.0	16.0	-	16.5	2	14.0	57	16.8	84	17.4								
F 鼻根横弧長	19.0	24.1	18.0	24.0	16.5	22.0	-	-	-	-	57	19.6	-	-								
50/F 鼻根湾曲示数	89.5	78.8	83.3	83.3	84.8	72.7	-	-	-	-	57	88.7	-	-								
M57 鼻骨最小幅	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	57	8.6	84	7.1								

表 40 主要下顎計測値の比較 (男性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)	大町3次 ¹⁾ (近世)	古野 ²⁾ (近世)	原口 SX39 ³⁾ (近世)	原田 ⁴⁾ (近世)	稲荷谷 ⁵⁾ (近世)	天徳寺 ⁷⁾ (近世)	天徳寺 ⁸⁾ (近世)	早稲 ⁸⁾ (近世)	自照院 89号 ⁹⁾ (近世)	細首 ¹⁰⁾	家宣 ¹⁰⁾	家重 ¹⁰⁾	家慶 ¹¹⁾	家茂 ¹¹⁾	伊達 政宗 ¹¹⁾ 忠宗 ¹¹⁾	伊達 綱宗 ¹¹⁾	伊達 綱宗 ¹¹⁾	牧野家 ⁷⁾ (近世)	神代 9代目 ¹³⁾	西南日本 ¹³⁾ (現代)	四東 ¹⁴⁾ (現代)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
65 下顎頭間幅	2	125.3	2	119.5	131.0	11	123.4	6	125.7	2	132.2	30	122.9	50	120.8	131	121.6	-	-	-	-	-	-
66 下顎角幅	1	95.2	2	97.8	93.0	10	103.3	10	104.6	5	104.4	39	100.5	50	98.9	131	100.2	98.5	-	-	-	-	-
68 下顎骨長	1	70.0	2	72.9	68.0	11	70.7	9	70.6	3	66.0	42	70.2	50	69.8	131	70.7	84.0	-	-	-	-	-
69 オトガイ高	5	35.3	3	35.1	-	8	37.6	9	33.2	4	34.7	29	33.8	50	36.0	131	35.6	(32.0)	-	-	-	-	-
70 下顎枝高(L)	4	57.3	5	59.3	56.0	7	61.7	8	61.3	6	61.2	32	63.5	50	64.8	131	64.9	-	-	-	-	-	-
71 下顎枝幅(L)	7	33.2	6	31.9	32.0	10	34.7	8	32.6	7	31.5	36	35.4	50	20.6	131	20.7	-	-	-	-	-	-
71/70 下顎枝示数(L)	4	57.5	5	54.3	57.1	7	55.6	8	53.3	5	53.0	-	-	50	50.0	131	54.0	-	-	-	-	-	-

1) 富田ほか (2016)、2) 中井ほか (2015)、3) 米元ほか (2013)、4) 中橋・土肥 (2008)、5) 岡崎ほか (2004)、6) 高橋ほか (2011)、7) 加藤 (1991)、8) 坂上 (2012)、9) 佐倉 (1985)、10) 鈴木尚 (1985a)、11) 鈴木尚 (1985b)、12) 川久保ほか (2011)、13) 原田 (1954)、14) 森田 (1950)

表 41 主要下顎計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)	大町3次 ¹⁾ (近世)	原田 ²⁾ (近世)	稲荷谷 ³⁾ (近世)	天徳寺 ⁵⁾ (近世)	天徳寺 ⁶⁾ (近世)	早稲 ⁸⁾ (近世)	家茂 正室 ⁷⁾	水野 忠誠 正室 ⁷⁾	牧野家 ⁵⁾ (近世)	西南日本 ⁸⁾ (現代)	四東 ⁹⁾ (現代)												
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M												
65 下顎頭間幅	-	-	1	117.0	9	117.8	4	111.0	-	-	23	114.9	48	110.8	70	113.8	112.0	113.5	2	115.5	-	-	84	115.7
66 下顎角幅	1	95.8	2	97.7	8	93.6	8	92.4	4	90.5	27	92.0	48	90.9	70	93.8	83.0	82.8	3	87.0	36	88.8	84	90.3
68 下顎骨長	1	54.8	1	65.4	9	71.1	6	65.7	3	69.0	27	66.3	48	65.6	70	66.2	70.0	-	3	62.3	-	-	-	-
69 オトガイ高	5	33.8	1	27.5	10	33.4	8	29.9	5	27.6	23	31.7	48	32.2	70	31.6	28.0	26.6	2	34.5	-	-	84	33.2
70 下顎枝高(L)	2	46.6	2	54.5	7	55.3	2	52.5	1	59.1	22	56.3	48	57.6	70	57.6	61.0	61.5	3	58.0	36	57.7	84	57.6
71 下顎枝幅(L)	5	30.2	2	30.3	8	32.3	2	30.5	3	31.4	23	32.6	-	-	-	-	32.0	26.5	3	28.7	36	31.4	84	31.1
71/70 下顎枝示数(L)	2	62.9	2	55.6	6	56.0	2	58.3	1	51.1	22	57.2	48	54.0	70	58.0	52.5	-	3	49.5	36	54.7	84	54.0

1) 富田ほか (2016)、2) 中橋・土肥 (2008)、3) 岡崎ほか (2011)、4) 高橋ほか (2011)、5) 加藤 (1991)、6) 坂上 (2012)、7) 鈴木尚 (1985b)、8) 原田 (1954)、9) 森田 (1950)

表 42 上肢の計測値の比較 (男性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)		大町3次 ¹⁾ (近世)		箱荷谷 ²⁾ (近世)		原田 ³⁾ (近世)		席田青木 ⁴⁾ (近世)		麩箱 (江戸市中) ⁵⁾ (近世)		早桶 (江戸市中) ⁵⁾ (近世)		芝公園 ⁶⁾ (近世)		九州 ⁷⁾⁸⁾ (現代)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
上腕骨	1 最大長	2	290.0	1	290.0	6	293.2	15	294.4	18	296.6	31	291.6	26	290.8	14	301.4	106	295.3
	2 全長	2	286.0	1	286.0	8	287.0	15	290.3	16	292.6	-	-	-	-	14	297.0	106	290.6
	5 中央最大径	2	23.2	1	21.3	6	22.7	22	22.8	30	24.1	32	22.2	26	22.3	47	22.2	106	21.9
	6 中央最小径	2	17.5	1	16.3	6	18.5	22	17.8	30	18.6	26	17.59	26	17.8	47	17.3	106	16.9
	7 骨体最小周	11	63.5	6	64.5	16	62.3	28	63.5	28	67.1	24	61.6	23	62.8	46	62.0	106	61.8
	7a 中央周	2	68.0	1	62.0	6	64.5	22	67.8	30	70.0	-	-	-	-	47	65.7	106	63.7
	6/5 骨体断面示数	2	75.9	1	76.5	6	81.8	22	78.4	3	77.3	22	78.2	25	78.5	47	78.4	106	79.1
7/1 長厚示数	2	22.1	1	20.3	6	21.1	15	21.4	17	22.6	24	21.2	23	21.7	14	21.0	106	20.9	
桡骨	1 最大長	5	228.2	3	227.0	5	219.6	14	225.8	19	231.4	30	219.4	49	223.5	23	226.9	64	219.9
	2 機能長	6	216.0	3	213.3	7	207.7	17	211.8	14	215.9	-	-	-	-	24	212.8	64	208.2
	3 最小周	10	43.1	4	40.3	12	39.8	30	43.6	26	44.9	-	-	-	-	50	40.4	63	40.1
	4 骨体横径	12	16.7	4	18.0	14	17.5	32	17.1	27	18.3	-	-	-	-	51	16.2	63	16.0
	4a 骨体中央横径	8	16.1	3	16.1	5	15.2	18	15.8	22	16.9	30	15.6	49	16.0	52	14.9	63	15.2
	5 骨体矢状径	12	12.1	4	12.4	14	12.2	32	12.2	27	13.2	-	-	-	-	51	11.6	63	11.7
	5a 骨体中央矢状径	8	12.7	3	12.3	5	12.2	18	12.4	22	13.3	30	11.9	49	12.1	52	11.8	63	11.9
	3/2 長厚示数	6	19.7	3	18.6	6	18.9	16	20.5	14	20.4	-	-	-	-	23	19.4	61	20.4
	5/4 骨体断面示数	12	73.0	4	68.5	14	70.0	32	71.7	27	72.6	-	-	-	-	51	71.9	60	71.4
	5a/4a 中央断面示数	8	79.6	3	76.6	5	80.3	18	79.1	22	78.8	29	76.2	47	76.5	52	79.2	-	-
	尺骨	1 最大長	1	251.0	4	243.5	6	236.2	10	247.8	15	249.8	33	236.2	39	240.4	25	243.0	62
2 機能長		5	212.2	4	216.3	11	206.8	14	216.7	13	222.6	-	-	-	-	27	213.1	64	209.2
3 最小周		7	35.1	4	39.3	12	34.8	24	40.9	18	40.4	-	-	-	-	46	35.8	65	35.8
11 矢状径		12	13.5	5	13.5	17	13.1	38	12.8	30	13.6	36	13.1	37	13.3	52	12.9	63	12.8
12 横径		12	16.3	4	16.8	17	16.4	37	17.0	30	17.6	35	16.2	35	16.6	52	15.9	64	16.5
3/2 長厚示数		4	16.5	3	18.2	11	16.8	14	18.7	12	18.3	-	-	-	-	27	17.0	63	17.0
11/12 骨体断面示数		12	83.3	4	82.5	17	80.2	37	75.5	30	77.7	35	81.1	34	80.5	52	81.8	63	74.9

1) 富田ほか (2016)、2)岡崎ほか (2004)、3)中橋・土肥 (2008)、4)中橋 (1993)、5)報告者計測、6)加藤 (1991)、7)専頭 (1957)、8)溝口 (1957)

表 43 上肢の計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)		大町3次 ¹⁾ (近世)		稲荷谷 ²⁾		原田 ³⁾		席田青木 ⁴⁾		麴箱 (江戸市中) ⁵⁾		早稲 (江戸市中) ⁵⁾		芝公園 ⁶⁾		九州 ⁷⁾⁸⁾	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨																		
1 最大長	1	287.0	1	275.0	4	268.5	8	260.4	7	284.9	21	262.8	19	268.7	18	269.7	36	271.7
2 全長	-	-	-	-	5	264.8	5	258.6	5	281.0	-	-	-	-	17	265.5	36	268.6
5 中央最大径	1	21.1	1	18.9	5	19.0	10	19.0	17	21.6	21	19.2	18	19.9	37	19.2	36	19.8
6 中央最小径	1	16.4	1	16.7	5	15.2	10	14.8	17	16.2	20	14.5	16	15.8	37	14.4	36	14.8
7 骨体最小周	4	55.0	2	54.5	11	51.4	14	52.9	17	59.1	18	52.8	18	55.9	36	52.9	36	54.8
7a 中央周	1	63.0	1	61.0	4	52.5	10	56.3	17	62.1	-	-	-	-	37	56.4	36	56.9
6/5 骨体断面示数	1	77.8	1	88.4	5	80.1	10	78.0	17	75.2	18	75.3	15	78.9	37	75.0	36	75.3
7/1 長厚示数	-	-	1	20.0	4	18.8	7	20.2	17	20.8	18	20.1	18	20.9	18	19.9	36	20.2
桃骨																		
1 最大長	-	-	1	183.0	5	196.2	10	196.4	6	206.2	19	192.7	27	203.4	20	204.4	12	199.9
2 機能長	-	-	1	172.0	6	185.2	12	185.2	6	192.8	-	-	-	-	21	192.2	12	187.0
3 最小周	2	35.0	2	35.5	10	33.4	16	37.8	11	40.2	-	-	-	-	38	34.2	12	24.7
4 骨体横径	4	14.9	2	14.8	12	15.1	18	14.4	15	16.2	-	-	-	-	38	14.4	12	14.5
4a 骨体中央横径	-	-	1	14.1	5	13.8	9	13.6	8	15.8	18	13.6	27	14.2	38	13.3	12	13.5
5 骨体矢状径	4	10.4	2	9.4	12	10.1	18	9.8	15	11.5	-	-	-	-	38	10.0	12	9.7
5a 骨体中央矢状径	-	-	1	9.5	5	10.2	9	10.0	8	11.6	19	9.7	26	10.2	38	10.0	12	9.7
3/2 長厚示数	-	-	1	20.3	5	18.4	9	20.0	5	20.8	-	-	-	-	21	17.7	11	18.1
5/4 骨体断面示数	4	69.6	2	63.9	12	67.2	18	68.8	15	71.8	-	-	-	-	38	69.6	10	68.3
5a/4a 中央断面示数	-	-	1	67.5	5	74.6	9	73.9	8	73.9	18	71.3	26	72.4	38	76.3	-	-
尺骨																		
1 最大長	-	-	-	-	2	212.0	9	215.1	4	223.7	20	210.5	21	214.8	18	219.2	12	215.0
2 機能長	-	-	2	188.0	4	188.3	12	191.5	3	195.7	-	-	-	-	23	191.5	12	189.2
3 最小周	3	34.0	2	32.5	8	30.4	16	36.2	5	36.4	-	-	-	-	39	30.9	12	32.1
11 矢状径	7	11.7	2	11.1	13	10.8	18	11.1	17	11.9	21	11.1	21	11.1	42	10.5	12	10.9
12 横径	8	15.0	2	14.5	13	13.9	18	14.4	17	16.2	19	13.6	23	14.2	42	14.0	12	13.9
3/2 長厚示数	-	-	2	17.3	4	15.7	11	18.5	3	18.8	-	-	-	-	22	15.9	12	16.8
11/12 骨体断面示数	7	77.9	2	76.2	13	77.5	18	77.2	17	73.7	19	81	21	80.2	42	75.8	12	77.5

1) 富田ほか (2016)、2)岡崎ほか (2004)、3)中橋・土肥 (2008)、4)中橋 (1993)、5)報告者計測、6)加藤 (1991)、7)尊頭 (1957)、8)溝口 (1957)

表 44 下肢の計測値の比較 (男性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)		大町3次 ¹⁾ (近世)		稲荷谷 ³⁾ (近世)		原田 ³⁾ (近世)		席田青木 ⁴⁾ (近世)		魏栢 (江戸市中) ⁵⁾ (近世)		早稲 (江戸市中) ⁵⁾ (近世)		芝公園 ⁶⁾ (近世)		九州 ⁷⁾⁸⁾ (現代)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨																		
1 最大長	1	401.0	2	430.0	9	407.4	24	420.2	31	419.6	38	405.0	30	405.2	18	415.8	59	406.5
2 自然位長	1	395.0	1	416.0	8	406.5	17	415.5	13	418.0	-	-	-	-	17	418.6	59	403.2
6 中央尖状径	14	27.6	3	31.0	20	28.4	43	28.2	40	28.1	38	26.5	32	27.5	51	27.2	59	26.5
7 中央横径	14	27.7	4	27.4	21	26.7	43	26.6	40	29.0	35	25.2	32	27.3	51	26.7	59	25.6
8 中央周	14	87.9	3	92.0	20	84.1	43	86.4	39	89.4	36	82.6	28	84.4	51	84.8	59	82.4
9 骨体上横径	13	31.7	3	30.9	20	30.6	42	31.6	38	33.8	-	-	-	-	51	31.2	59	29.4
10 骨体上尖状径	13	24.6	3	27.4	20	25.7	42	25.6	38	25.7	-	-	-	-	52	23.9	59	24.3
8/2 長厚示数	1	21.8	-	-	8	21.2	17	20.9	12	21.5	-	-	-	-	16	20.5	59	20.4
6/7 中央断面示数	14	99.8	2	112.7	20	106.7	43	106.3	40	97.0	34	106.2	30	101.4	51	102.1	58	82.8
10/9 上骨体断面示数	13	77.6	3	88.5	20	84.2	42	81.5	38	76.2	-	-	-	-	51	76.9	58	72.8
脛骨																		
1 全長	3	315.7	2	339.0	10	330.4	20	334.2	21	330.3	-	-	-	-	15	339.4	61	320.3
1a 最大長	6	325.5	3	343.7	10	335.5	21	339.0	24	337.0	29	333.7	27	330.2	17	343.0	60	326.9
8 中央最大径	6	28.6	2	29.3	10	28.7	25	28.7	26	30.2	27	28.0	30	28.9	48	28.7	61	27.8
8a 栄養孔位最大径	11	31.8	3	33.2	16	34.0	39	33.2	34	34.4	-	-	-	-	48	33.0	60	30.6
9 中央横径	6	21.6	2	24.4	10	21.6	25	22.5	26	22.7	27	20.4	29	21.6	48	20.8	61	21.1
9a 栄養孔位横径	13	23.5	4	24.8	16	24.6	39	24.7	34	24.9	-	-	-	-	49	23.5	61	23.7
10 中央周	6	81.2	2	80.5	10	77.2	25	80.9	25	83.0	22	78.6	28	80.8	48	78.8	62	78.4
10a 栄養孔位周	11	88.5	3	92.3	14	88.6	39	91.5	32	93.0	-	-	-	-	-	-	61	88.9
10b 最小周	10	70.7	3	74.7	17	70.6	41	72.3	29	76.0	-	-	-	-	46	71.9	60	71.3
9/8 中央断面示数	6	75.7	2	82.8	10	75.6	25	78.7	26	75.4	27	73.1	29	75.2	48	72.8	61	76.1
9a/8a 栄養孔断面示数	11	74.7	3	74.2	16	72.4	39	74.6	34	72.3	-	-	-	-	48	71.1	60	77.5
10b/1 長厚示数	3	22.1	2	21.5	10	21.1	20	21.7	19	23.0	-	-	-	-	15	21.5	60	22.4
腓骨																		
1 全長	-	-	2	341.5	7	332.0	8	331.8	6	333.0	-	-	-	-	13	336.7	58	322.9
2 中央最大径	-	-	2	14.2	6	15.3	17	15.1	24	15.2	-	-	-	-	43	14.9	59	14.5
3 中央最小径	-	-	2	11.0	6	11.0	17	11.2	24	11.2	-	-	-	-	43	10.6	59	10.0
4 中央周	-	-	2	41.0	6	41.2	17	43.6	24	43.7	-	-	-	-	43	42.9	59	41.5
4a 最小周	6	35.7	5	35.6	7	34.9	26	37.3	14	38.0	-	-	-	-	34	34.0	59	35.6
3/2 中央断面示数	-	-	2	77.1	6	72.3	17	75.0	24	74.2	-	-	-	-	43	71.6	59	69.5
4a/1 長厚示数	-	-	2	9.5	7	10.5	8	11.2	6	11.1	-	-	-	-	16	10.5	58	11.1

1) 富田ほか (2016)、2) 岡崎ほか (2004)、3) 中橋・土肥 (2008)、4) 中橋 (1993)、5) 報告者計測、6) 加藤 (1991)、7) 阿部 (1957)、8) 齋藤 (1955)

表 45 下肢の計測値の比較 (女性) (単位はmm)

Martin No.	浦山2次 (近世)		大町3次 ¹⁾ (近世)		稲荷谷 ²⁾ (近世)		原田 ³⁾ (近世)		席田青木 ⁴⁾ (近世)		魏棺 (江戸市中) ⁵⁾ (近世)		早稲 (江戸市中) ⁵⁾ (近世)		芝公園 ⁶⁾ (近世)		九州 ⁷⁾ (現代)		
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
大腿骨	1 最大長	-	-	-	8	382.0	12	382.8	15	389.1	21	363.6	15	377.6	13	382.5	13	380.1	
	2 自然位長	-	-	-	8	376.9	8	378.8	5	388.4	-	-	-	-	12	376.9	13	375.9	
	6 中央矢状径	8	23.7	2	22.7	15	24.3	27	24.1	25	24.8	19	22.6	14	23.9	37	22.9	13	23.6
	7 中央横径	8	25.1	2	22.3	15	24.5	27	24.3	25	26.6	20	22.9	16	24.9	37	23.3	13	23.2
	8 中央周	7	76.7	2	70.5	16	74.6	27	75.7	25	80.5	19	71.3	15	76.5	37	73.1	13	74.2
	9 骨体上横径	11	29.3	2	27.4	14	28.7	31	28.8	25	30.2	-	-	-	-	38	27.7	13	27.5
	10 骨体上矢状径	11	21.0	2	21.4	14	21.6	31	22.4	25	23.0	-	-	-	-	38	20.2	13	21.3
	8/2 長厚示数	-	-	-	-	8	19.3	7	20.6	3	21.2	-	-	-	-	12	19.7	13	19.8
	6/7 中央断面示数	7	96.1	2	102.5	15	99.4	27	99.7	25	93.6	19	99.1	14	96.9	37	98.6	13	77.1
	10/9 上骨体断面示数	11	72.0	2	78.2	14	75.4	31	78.0	25	77.0	-	-	-	-	38	73.3	13	66.4
脛骨	1 全長	2	300.5	-	-	7	303.1	13	304.8	8	309.1	-	-	-	-	15	306.5	14	301.0
	1a 最大長	1	300.0	-	-	7	307.6	18	306.4	10	314.0	17	297.7	17	311.5	15	310.3	14	306.6
	8 中央最大径	1	27.3	-	-	7	25.3	15	24.5	10	26.1	16	23.4	17	25.6	36	23.4	14	24.7
	8a 栄養孔位最大径	9	28.7	-	-	12	28.8	24	28.0	19	29.5	-	-	-	-	35	26.5	14	28.1
	9 中央横径	1	19.6	-	-	7	17.9	16	19.0	10	20.1	13	17.6	17	19.1	36	17.5	14	18.8
	9a 栄養孔位横径	9	21.0	-	-	12	20.0	23	20.7	19	21.6	-	-	-	-	35	19.1	14	21.1
	10 中央周	1	73.0	-	-	7	66.7	15	69.5	9	72.2	15	66.7	15	71.1	36	65.1	14	70.1
	10a 栄養孔位周	9	79.2	-	-	11	76.1	22	77.8	19	80.6	-	-	-	-	-	-	14	78.2
	10b 最小周	7	65.1	-	-	13	60.4	24	62.3	15	66.1	-	-	-	-	35	60.3	14	63.6
	9/8 中央断面示数	-	-	-	-	7	70.8	15	78.2	10	77.1	12	74.9	17	75.0	36	74.8	14	76.3
9a/8a 栄養孔断面示数	9	73.3	-	-	12	69.6	23	74.3	19	73.5	-	-	-	-	35	72.2	14	74.9	
10b/1 長厚示数	1	21.5	-	-	7	19.9	11	20.4	6	21.4	-	-	-	-	14	19.9	14	21.2	
腓骨	1 全長	-	-	-	4	298.0	9	301.4	2	323.0	-	-	-	-	13	302.5	14	300.6	
	2 中央最大径	-	-	-	4	13.0	11	12.2	7	15.1	-	-	-	-	35	12.4	14	12.9	
	3 中央最小径	-	-	-	4	9.0	11	9.5	7	11.3	-	-	-	-	35	8.7	14	8.6	
	4 中央周	-	-	-	4	34.8	11	37.1	7	42.7	-	-	-	-	35	35.7	14	36.8	
	4a 最小周	-	-	-	5	29.4	15	33.9	5	34.2	-	-	-	-	34	29.9	14	32.3	
3/2 中央断面示数	-	-	-	4	69.8	11	77.8	7	74.8	-	-	-	-	35	70.3	14	67.6		
4a/1 長厚示数	-	-	-	4	10.1	8	11.0	2	11.0	-	-	-	-	13	10.4	10	10.8		

1) 富田ほか (2016)、2) 岡崎ほか (2004)、3) 中橋・土肥 (2008)、4) 中橋 (1993)、5) 報告者計測、6) 加藤 (1991)、7) 阿部 (1957)、8) 齋藤 (1955)

表 46 主成分分析の固有ベクトル（男性）

	成分	
	1	2
最大長	0.758	0.210
最大幅	0.360	0.791
Ba-Br高	0.365	0.767
頬骨弓幅	0.869	-0.379
中顔幅	0.867	-0.433
上顔高	0.142	0.575
眼窩幅	0.530	0.218
眼窩高	0.007	0.464
鼻幅	0.746	-0.318
鼻高	0.217	0.392
固有値	3.25	2.44
累積寄与率 (%)	32.50	56.88

表 47 主成分分析の固有ベクトル（女性）

	成分	
	1	2
最大長	-0.080	0.978
最大幅	0.876	-0.097
Ba-Br高	0.870	0.299
中顔幅	-0.752	0.073
眼窩幅	0.225	0.322
眼窩高	0.773	-0.068
鼻幅	-0.207	0.078
鼻高	0.724	-0.140
固有値	3.31	1.19
累積寄与率 (%)	41.41	56.33

表 48 推定身長（男性）の比較（単位はcm）

男 性		n	M
浦山2次	74号		153.8
大町3次 ¹⁾	(近世)	2	161.8
稲荷谷 ²⁾	(近世)	12	155.4
原田 ³⁾	(近世)	30	158.7
席田青木 ⁴⁾	(近世)	30	158.5
甕棺 (江戸市中) ⁵⁾	(近世)	38	154.9
早桶 (江戸市中) ⁵⁾	(近世)	30	155.0
芝公園 ⁶⁾	(近世)	15	159.0
九州) ⁵⁾	(現代)	59	155.2

1)富田ほか (2016)、2)岡崎ほか (2004)、3)中橋・土肥 (2008)、4)中橋 (1993)、5)報告者計測、6)加藤 (1991)、7)阿部 (1957)

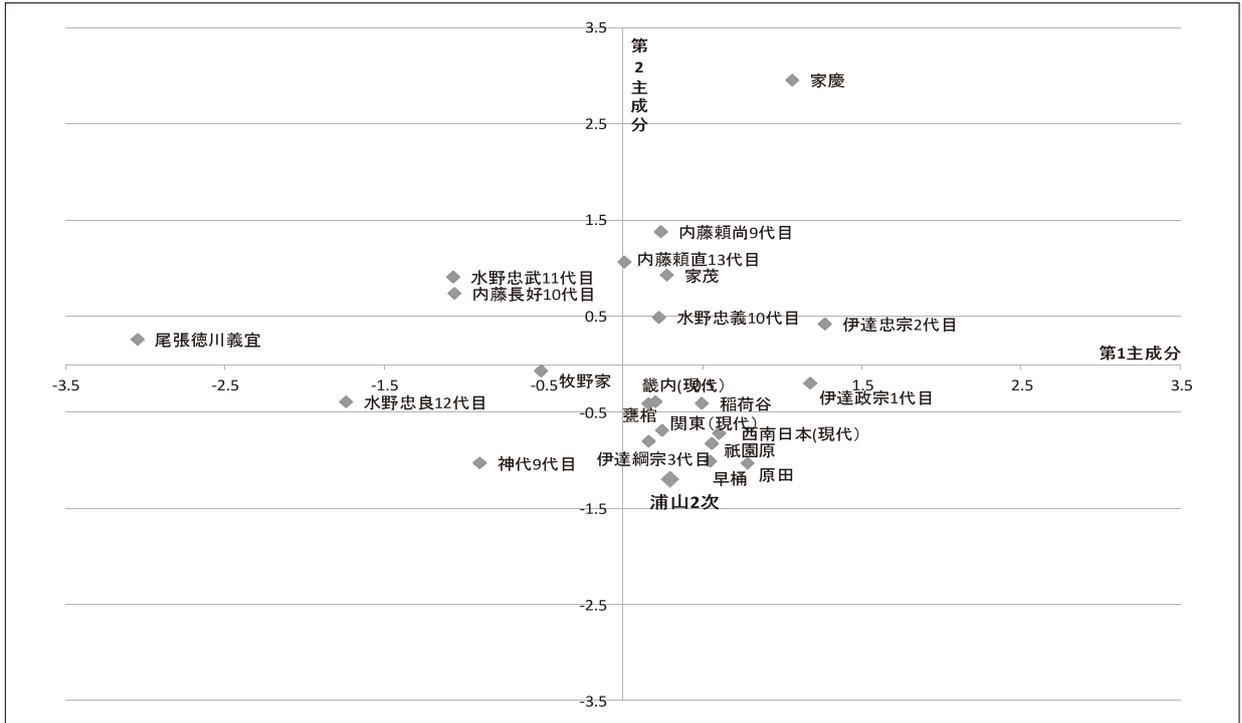


図7 主成分分析（男性）（10項目）

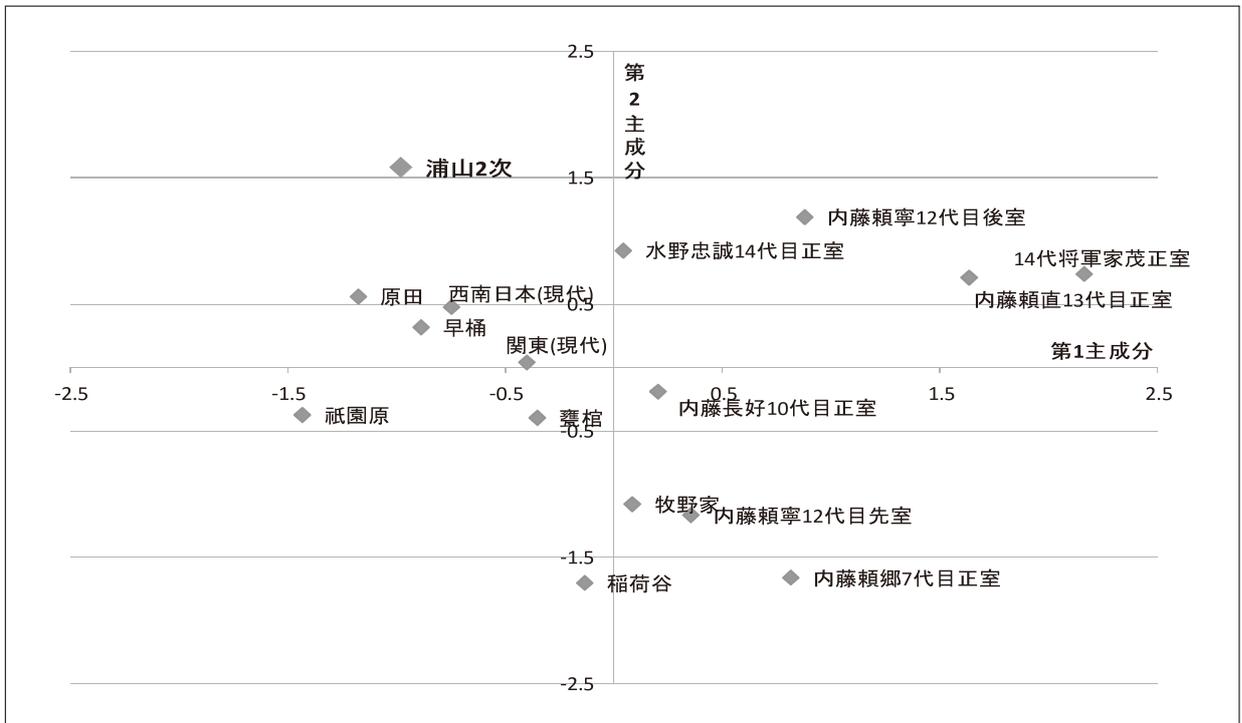


図8 主成分分析（女性）（7項目）



写真番号 31 3号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 34 37号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 32 3号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 35 37号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 33 3号人骨頭蓋（上面観）



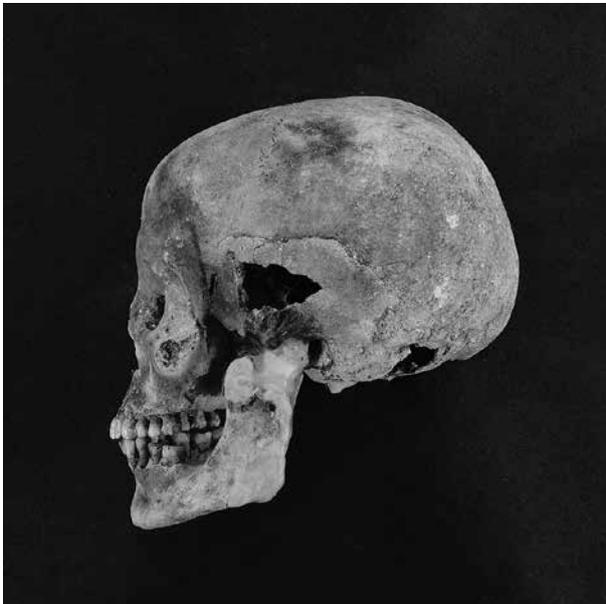
写真番号 36 37号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 37 54号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 40 64号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 38 54号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 41 64号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 39 54号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 42 64号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 43 66号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 46 67号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 44 66号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 47 67号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 45 66号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 48 67号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 49 68号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 52 70号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 50 68号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 53 70号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 51 68号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 54 70号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 55 71号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 58 72号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 56 71号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 59 72号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 57 71号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 60 72号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 61 74号人骨頭蓋（正面観）



写真番号 62 74号人骨頭蓋（側面観）



写真番号 63 74号人骨頭蓋（上面観）



写真番号 64 3号人骨上肢骨



写真番号 65 3号人骨下肢骨



写真番号 66 9号人骨上肢骨



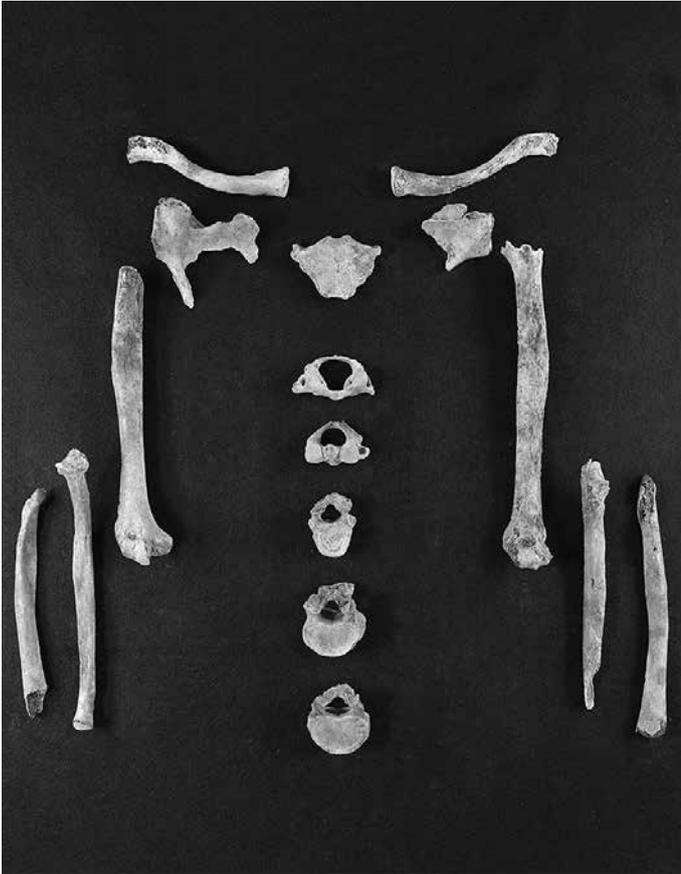
写真番号 68 37号人骨上肢骨



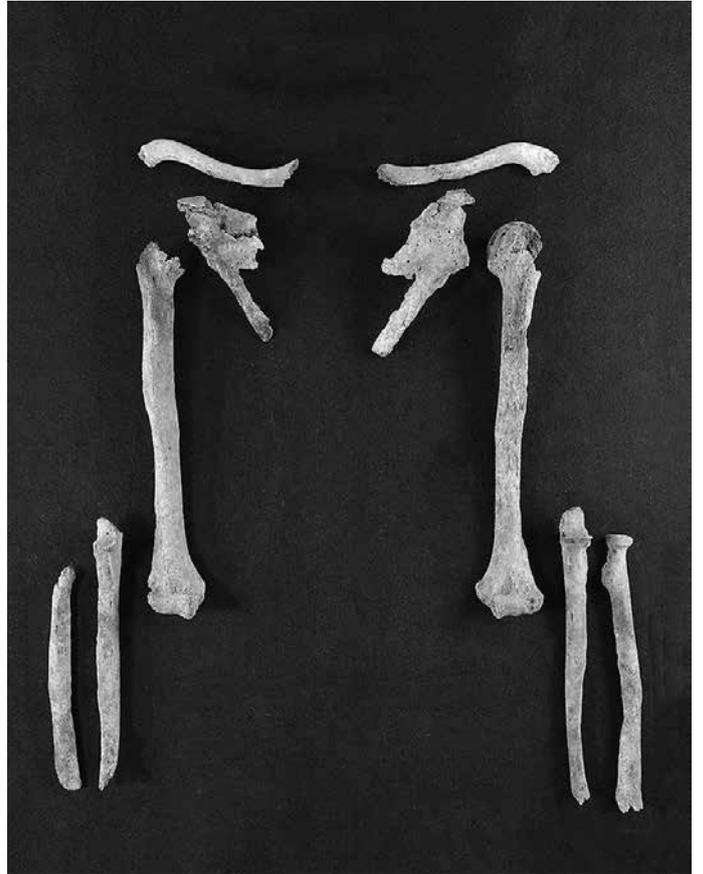
写真番号 67 9号人骨下肢骨



写真番号 69 37号人骨下肢骨



写真番号 70 54号人骨上肢骨



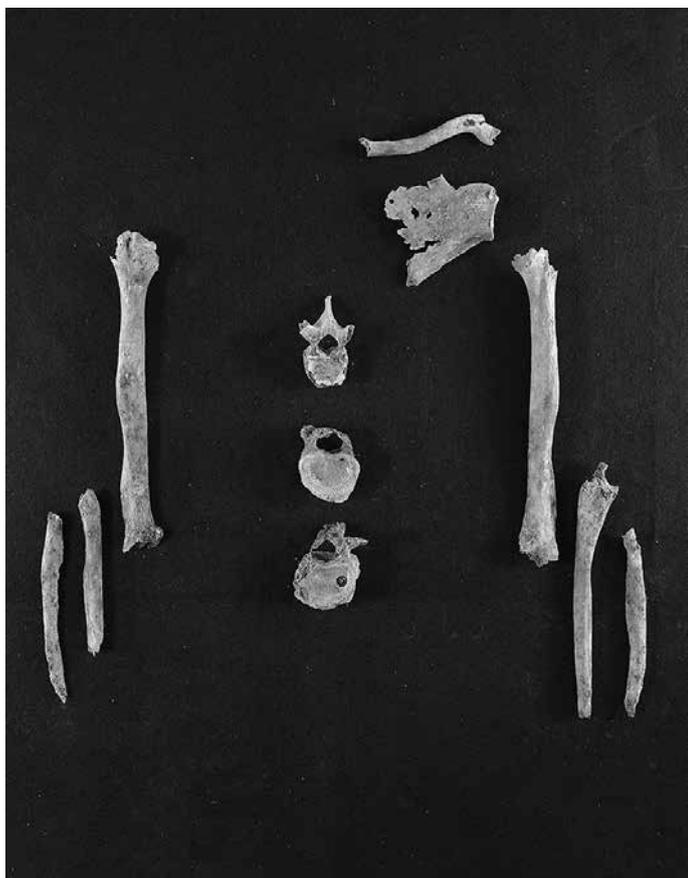
写真番号 72 56号人骨上肢骨



写真番号 71 54号人骨下肢骨



写真番号 73 56号人骨下肢骨



写真番号 74 62号人骨上肢骨



写真番号 76 64号人骨上肢骨



写真番号 75 62号人骨下肢骨



写真番号 77 64号人骨下肢骨



写真番号 78 67号人骨上肢骨



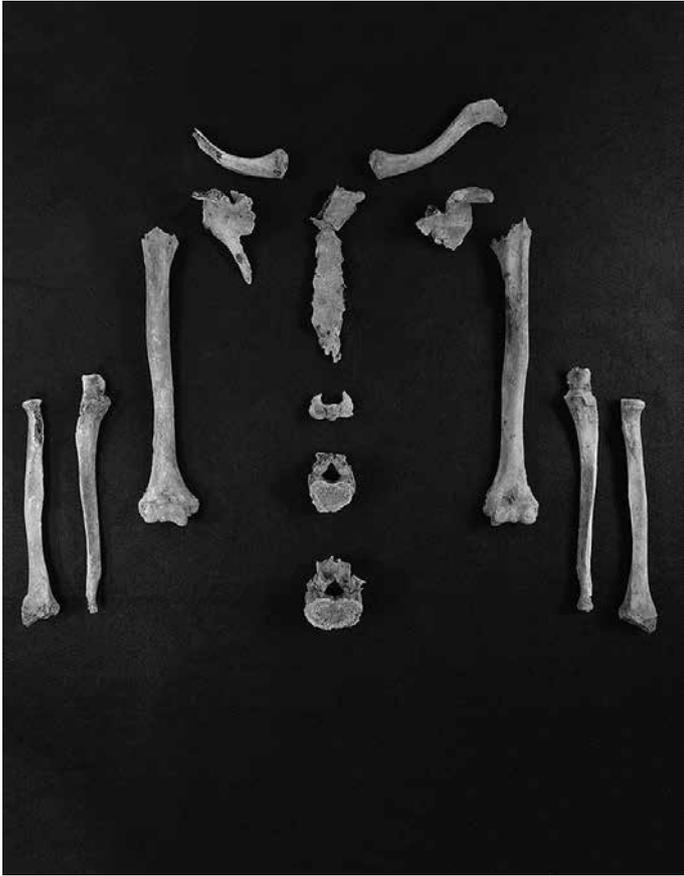
写真番号 80 68号人骨上肢骨



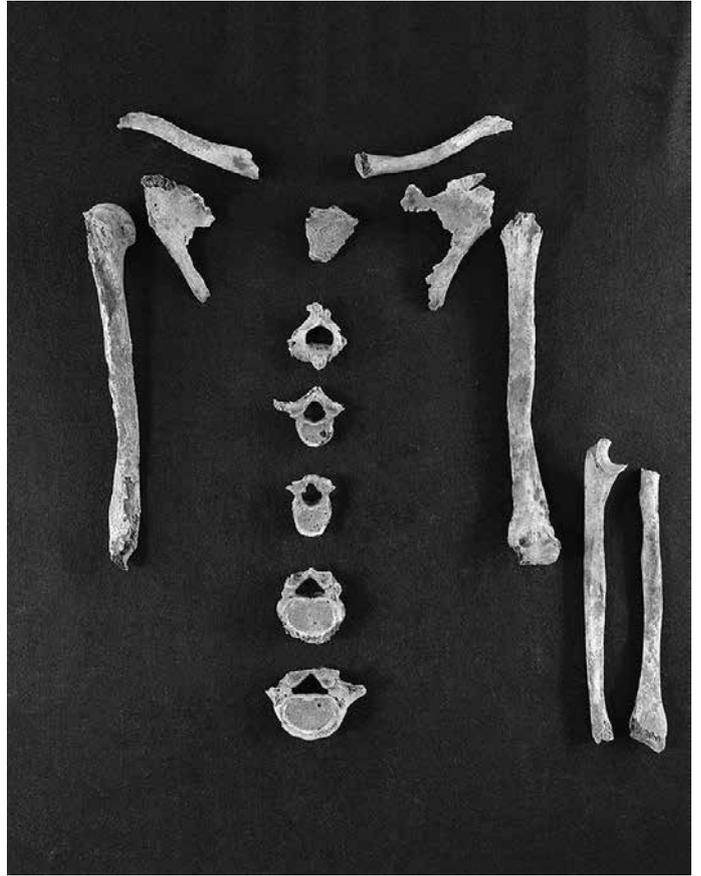
写真番号 79 67号人骨下肢骨



写真番号 81 68号人骨下肢骨



写真番号 82 70号人骨上肢骨



写真番号 84 71号人骨上肢骨



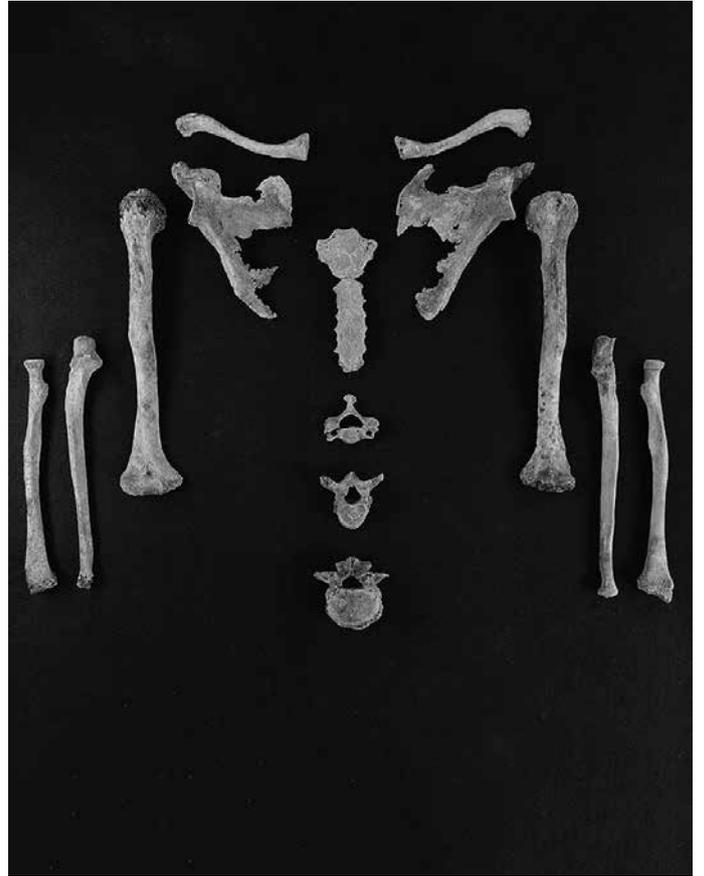
写真番号 83 70号人骨下肢骨



写真番号 85 71号人骨下肢骨



写真番号 86 73号人骨上肢骨



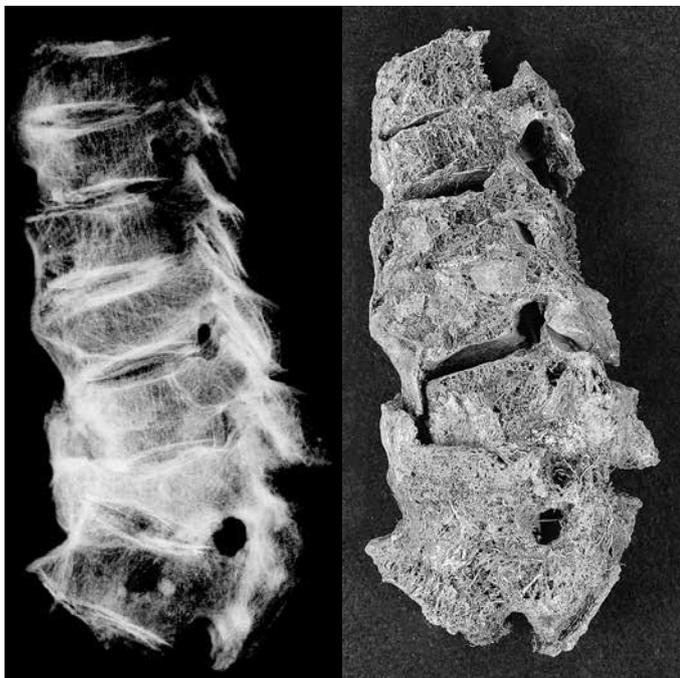
写真番号 88 74号人骨上肢骨



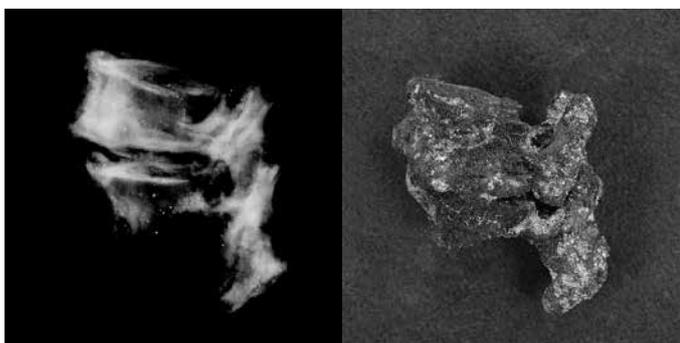
写真番号 87 73号人骨下肢骨



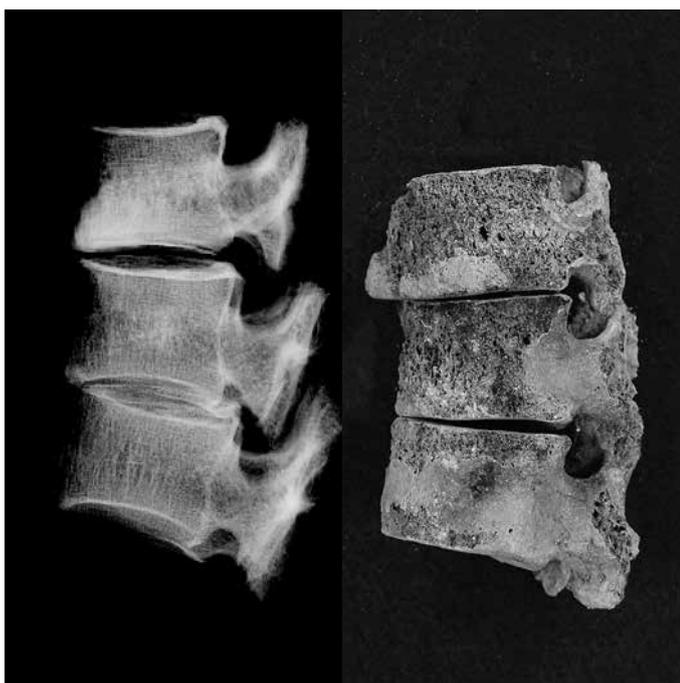
写真番号 89 74号人骨下肢骨



写真番号 90 10号人骨胸椎・腰椎の骨棘形成
(左：X線、右：写真)



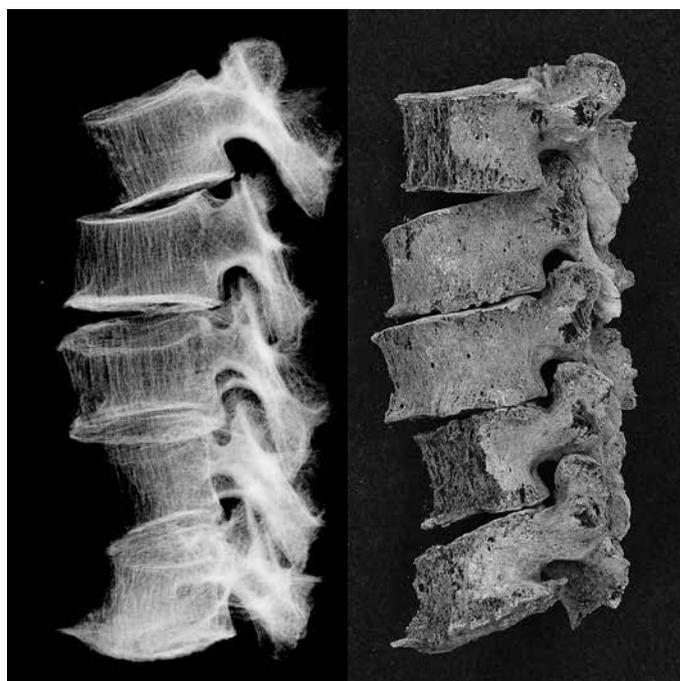
写真番号 91 38B号人骨腰椎の骨棘形成
(左：X線、右：写真)



写真番号 92 54号人骨腰椎の骨棘形成
(左：X線、右：写真)



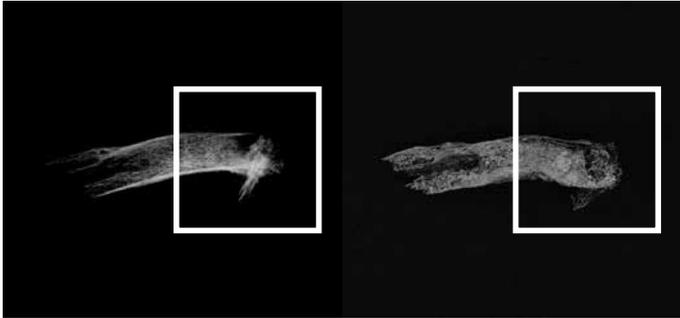
写真番号 93 64号人骨胸椎の骨棘形成
(左：X線、右：写真)



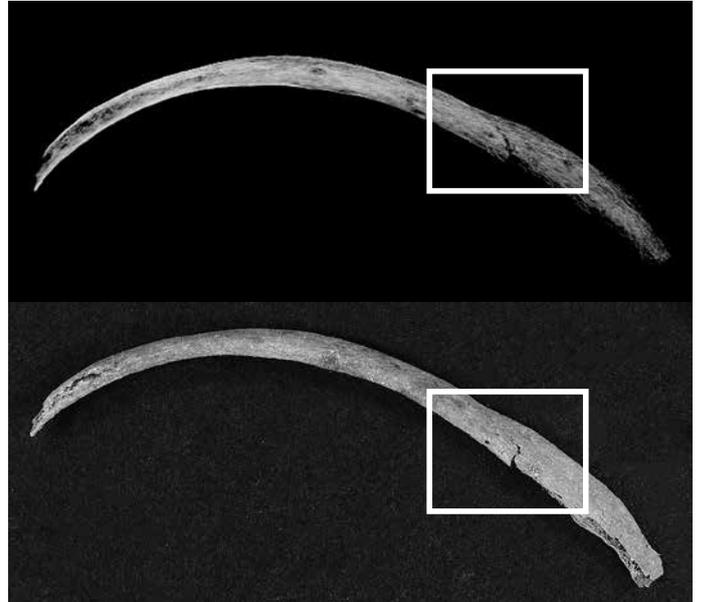
写真番号 94 70号人骨胸椎の骨棘形成
(左：X線、右：写真)



写真番号 95 74号人骨胸椎・腰椎
(左：X線、右：写真)



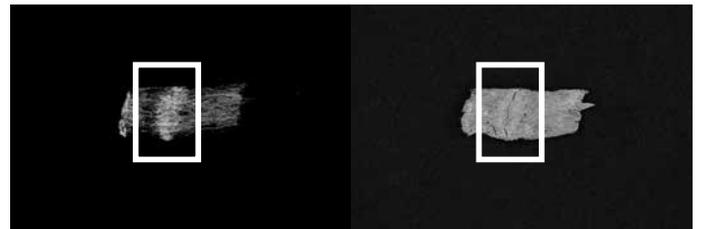
写真番号 96 10 号人骨左鎖骨の骨折
(左：X線、右：写真)



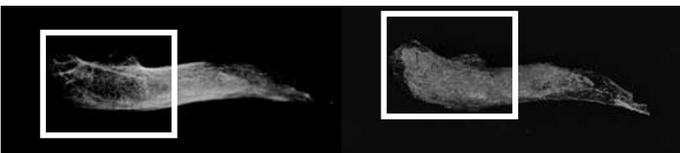
写真番号 100 72 号人骨右肋骨の骨折
(上：X線、下：写真)



写真番号 97 54 号人骨左前腕の骨折
(左：X線、右：写真)



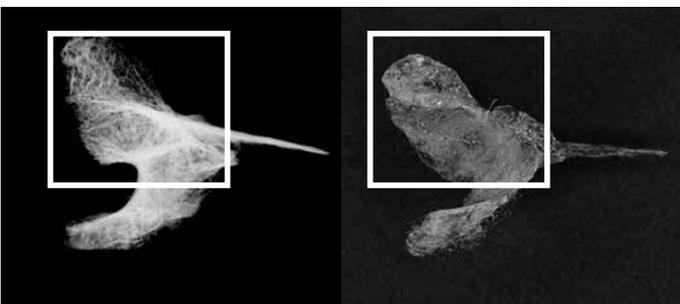
写真番号 101 72 号人骨肋骨の骨折
(左：X線、右：写真)



写真番号 98 66 号人骨左鎖骨の骨折
(左：X線、右：写真)



写真番号 102 74 号人骨エナメル質減形成
(下顎左犬歯)



写真番号 99 66 号人骨左肩甲骨の骨折
(左：X線、右：写真)

4、御笠団印出土地周辺遺跡第8次調査補遺

(1) 報告経緯

御笠団印出土地周辺遺跡第8次調査は、太宰府市坂本3丁目41-1で、1993（平成5）年9月22日～1994（平成6）年1月20日にかけて調査を実施し、現在坂本公園となっている。この調査については、1997（平成9）年に太宰府市の文化財第33集『辻遺跡』で報告されたが、今回報告する遺物だけが、他の調査現場に間違えて収納され、未報告となっていたため、追加で報告することとなった。

(2) 出土遺物

茶灰色シルト出土遺物（Fig. 65）

須恵器

坏c(1) 底部端に高台を貼付し、色調は淡灰白色を呈する。底部外面には「林」の墨書があるが、文字の形から欠損部分に続きがあると推測される。復元高台径11.4cm。

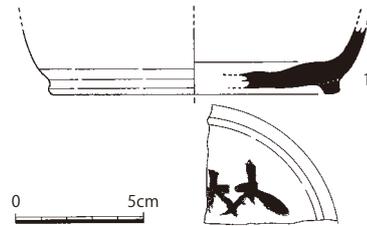


Fig. 65 御笠団印出土地周辺遺跡第8次調査茶灰色シルト出土遺物実測図(1/3)

写真図版

写真図版には遺構・遺物の主な写真を掲載している。その他の遺構・遺物の写真は、付録の CD にカラー情報で収録している。



サコ遺跡第1次調査区全景（天が東、空中写真）



サコ遺跡第1次調査区と宝満山（西から、空中写真）



サコ遺跡第1次調査墓地全景（天が北、空中写真）



サコ遺跡第1次調査墓地東側（天が北、空中写真）



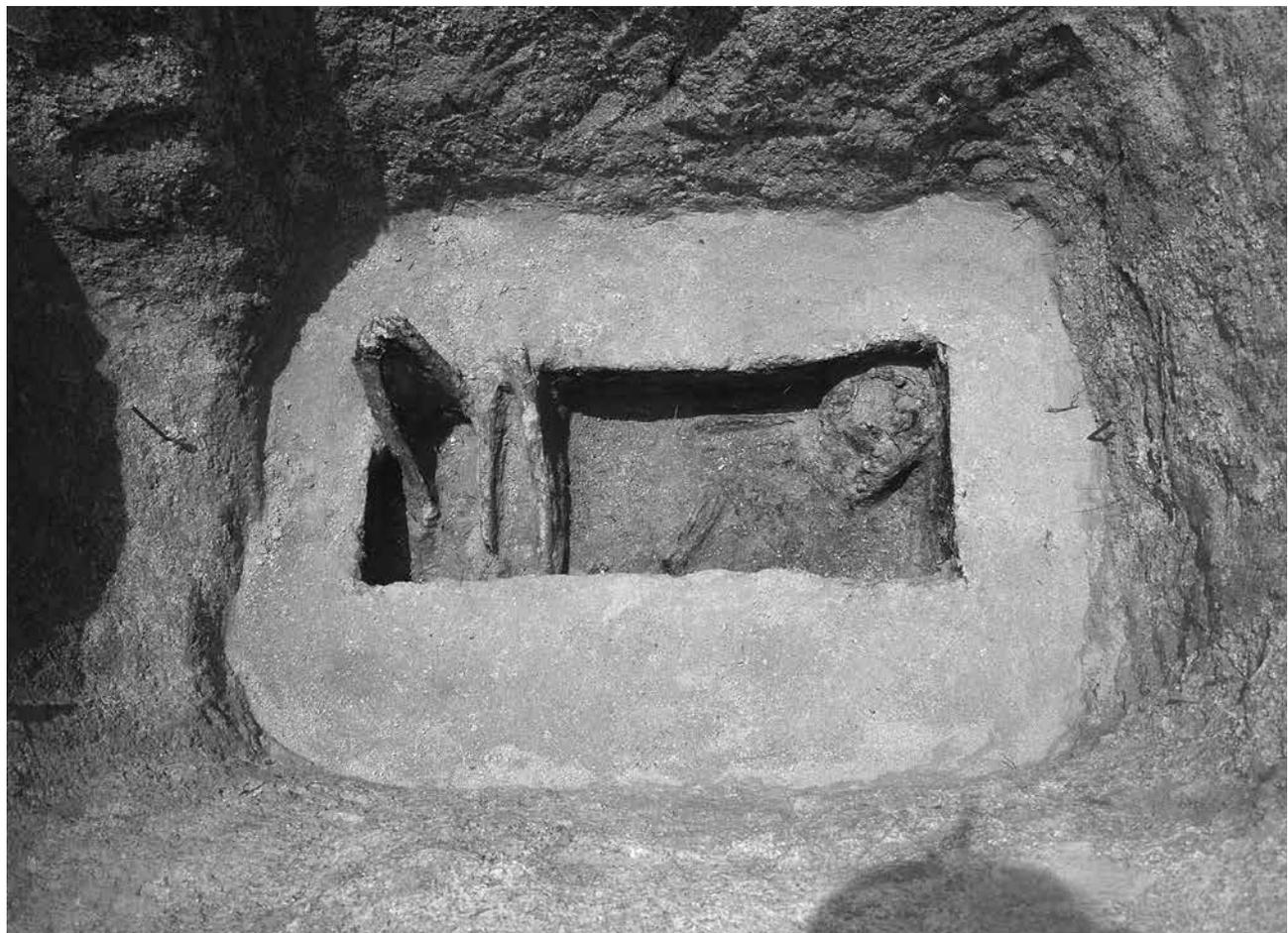
サコ遺跡第1次調査墓地西側（天が北、空中写真）



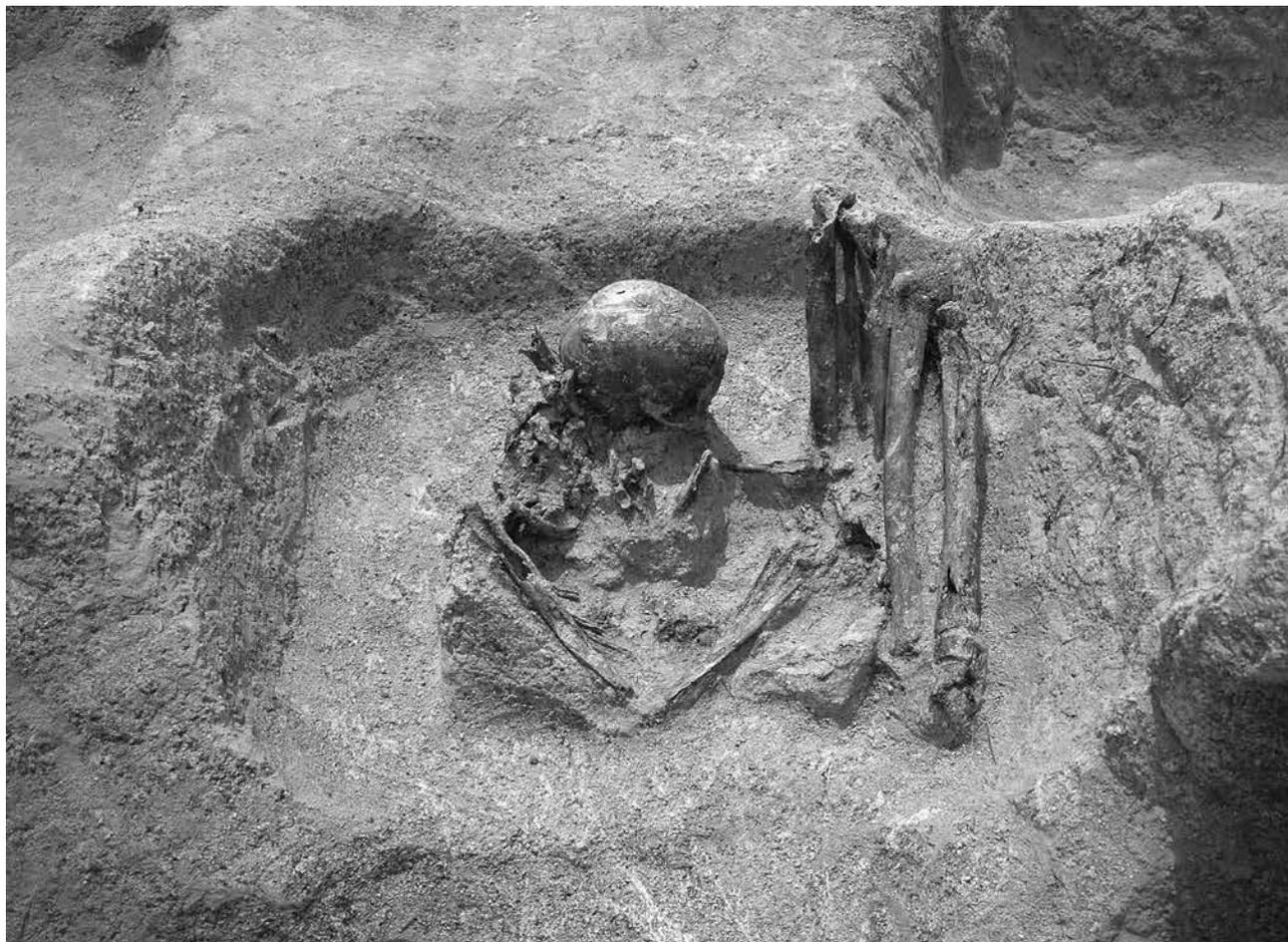
サコ遺跡第1次調査 墓地完掘状況（西から）



サコ遺跡 1ST018 人骨検出状況（南から）



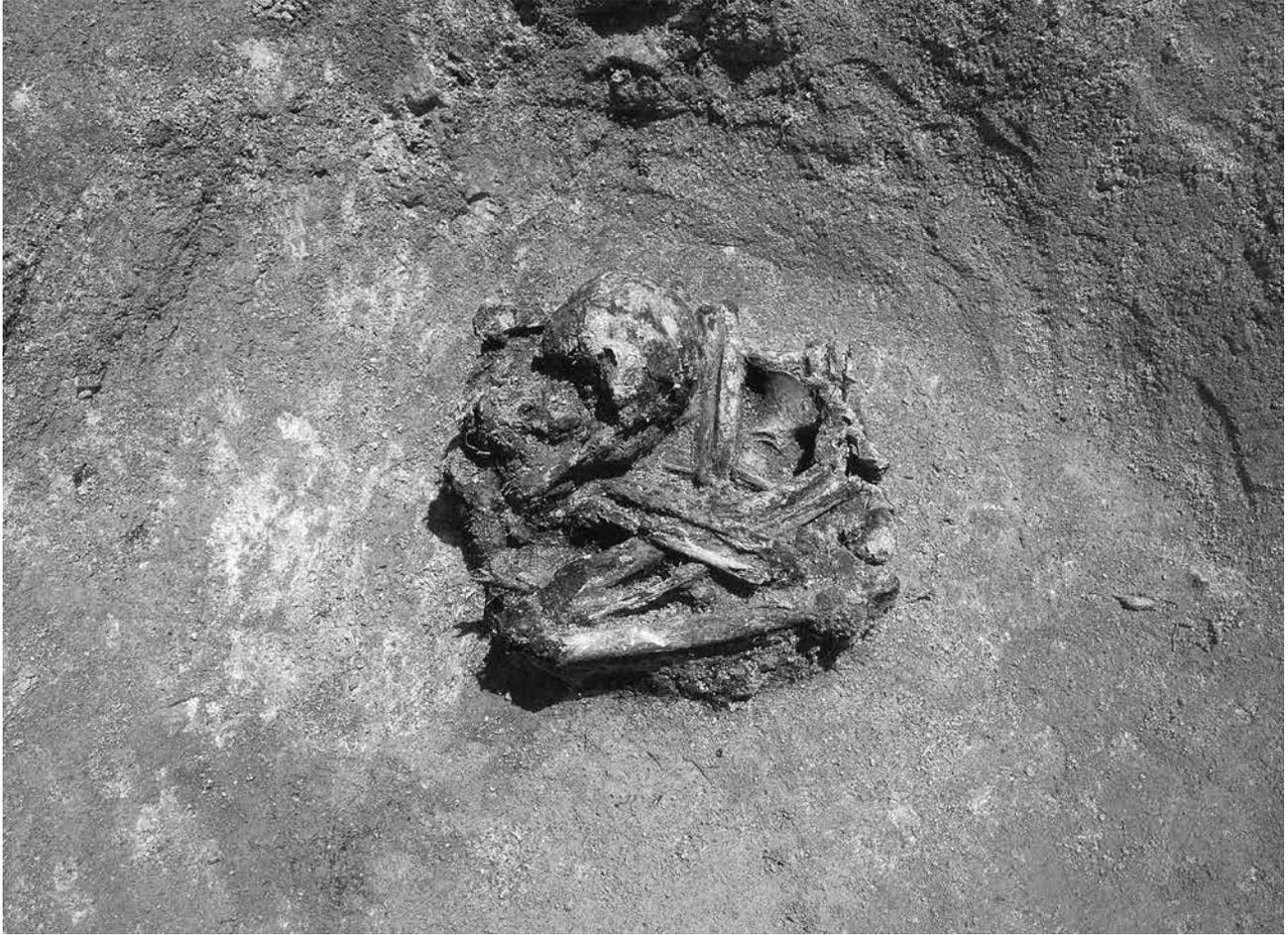
サコ遺跡 1ST031 人骨検出状況（東から）



サコ遺跡 1ST032 人骨検出状況（西から）



サコ遺跡 1ST043 人骨検出状況（北東から）



サコ遺跡 1ST104 人骨検出状況（北西から）



サコ遺跡 1SX001 出土状況（北から）



浦山遺跡第1次調査区全景（天が北東、空中写真）



浦山遺跡第1次調査区全景（北西から、空中写真）



浦山 ISI055 土器出土状況（南東から）



浦山 ISX001 石列完掘状況（北西から）



浦山遺跡第2次調査全景（上が南東、空中写真）



浦山遺跡第2次調査区から大宰府政庁跡を望む（北西から、空中写真）



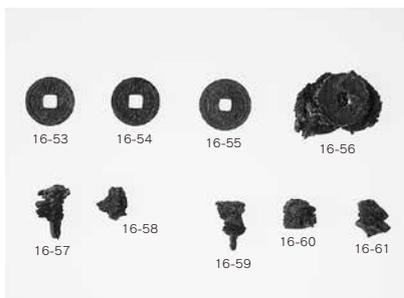
浦山遺跡第2次調査南尾根全景（上が南西、空中写真）



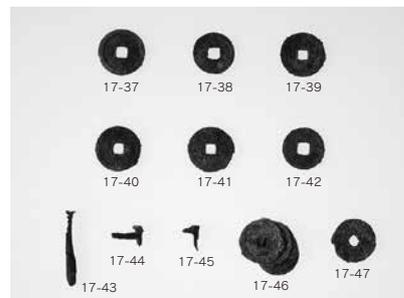
浦山遺跡第2次調査北尾根全景（上が南西、空中写真）



サコ 1ST003 出土肥前系磁器小椀
(Fig. 14-1)



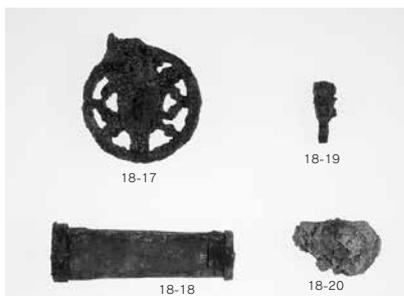
サコ 1ST017・019
出土銭貨・鉄釘 (Fig. 16)



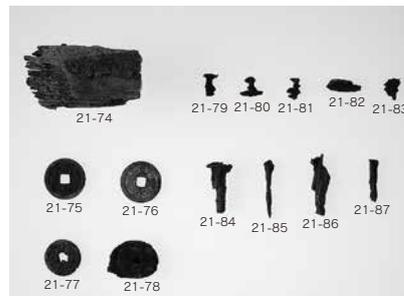
サコ 1ST027・029・031・032
出土銭貨・鉄釘 (Fig. 17)



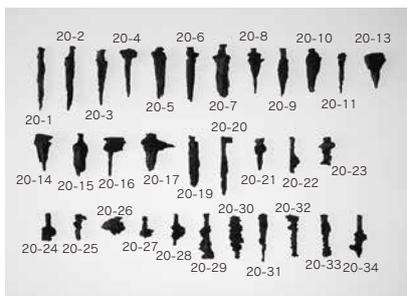
サコ 1ST043 出土肥前系陶器甕
(Fig. 18-7)



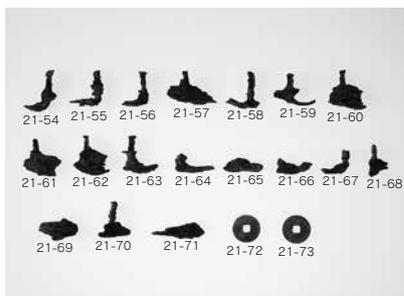
サコ 1ST061 出土金属製品
(Fig. 18)



サコ 1ST102 出土金属製品
(Fig. 21)



サコ 1ST098 出土鉄釘 (Fig. 20)



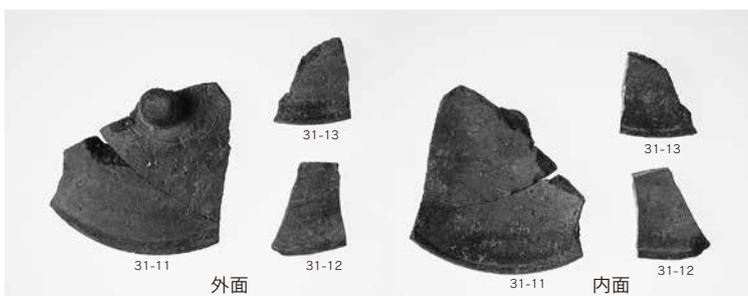
サコ 1ST098 出土鉄釘・銭貨
(Fig. 21)



サコ 1SX001 出土須恵器 (Fig. 22)



浦山 1SI055 出土須恵器坏身 (Fig. 30)



浦山 1SD035 出土須恵器蓋 (Fig. 31)



浦山 2ST002 出土肥前系陶器甕
(Fig. 45-5)



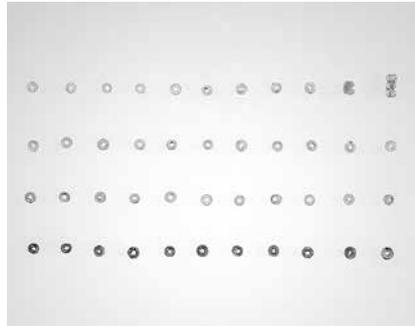
浦山 2ST002・003・005・009
出土金属製品 (Fig. 45)



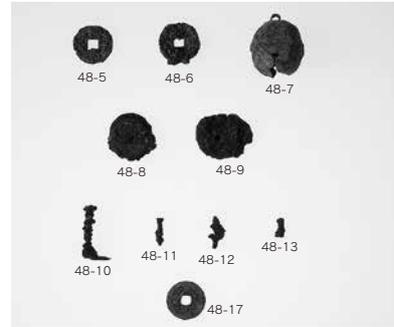
浦山 2ST020 出土肥前系陶器甕
(Fig. 48-1)



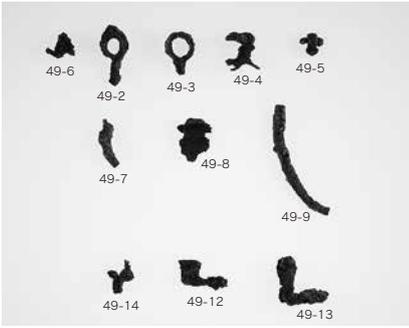
浦山 2ST019 出土肥前系陶器甕
(Fig. 47-1)



浦山 2ST019 出土小玉 (Fig. 47)



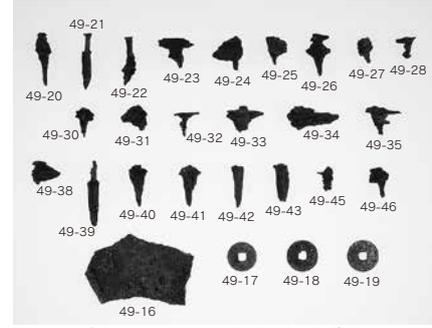
浦山 2ST021・023・024・028
出土金属製品 (Fig. 48)



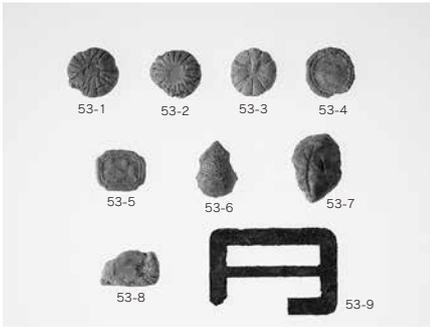
浦山 2ST029・030 出土金属製品
(Fig. 49)



浦山 2ST031 出土肥前系磁器小皿
(Fig. 49-15)



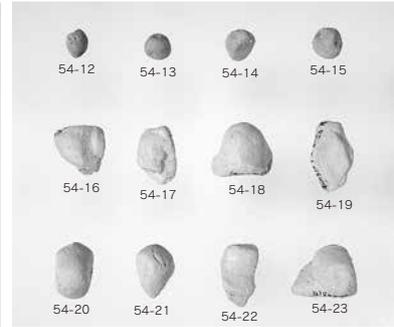
浦山 2ST031 出土金属製品
(Fig. 49)



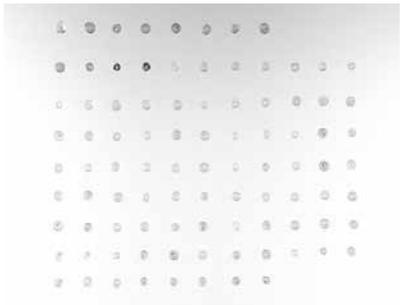
浦山 2ST075 出土遺物 (Fig. 53)



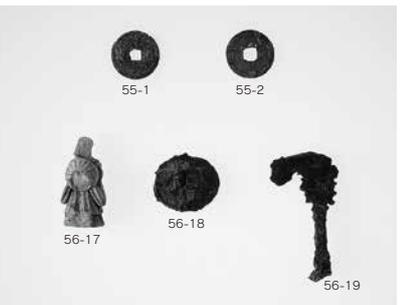
浦山 2ST050 出土遺物 (Fig. 54)



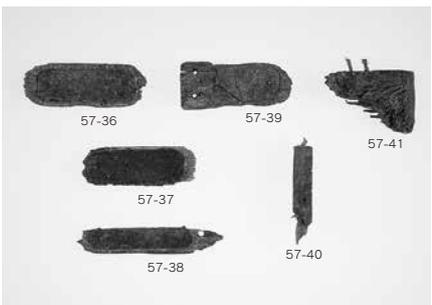
浦山 2ST050・050 黄灰色土
出土土製品 (Fig. 54)



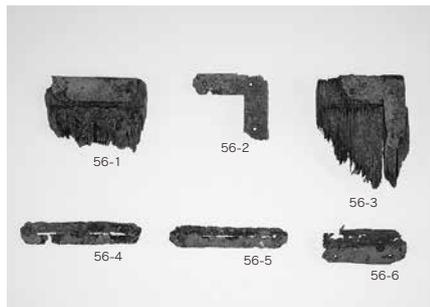
浦山 2ST051 出土小玉 (Fig. 55)



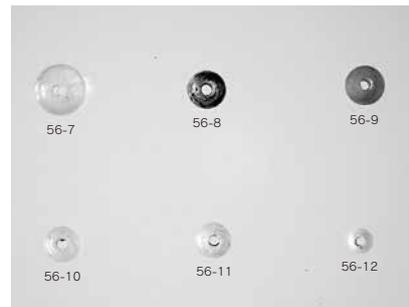
浦山 2ST051 出土金属製品・
ST055 出土遺物 (Fig. 55・56)



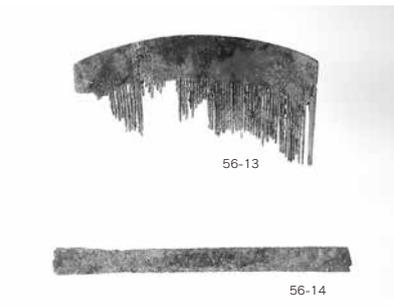
浦山 2ST065 出土隅飾留金具
(Fig. 57)



浦山 2ST052 出土隅飾留金具
(Fig. 56)



浦山 2ST052 出土小玉 (Fig. 56)



浦山 2ST052 出土櫛・笄 (Fig. 56)

報告書抄録

ふりがな	さこ・うらやまいせき									
書名	サコ・浦山遺跡									
副書名	サコ遺跡第1次調査・浦山遺跡第1・2次調査									
シリーズ名	太宰府市の文化財									
シリーズ番号	142集									
編著者	宮崎亮一、高橋学、遠藤茜、富田啓貴、梶佐古幸謙、松尾樹志郎、中野真澄、星野宙也、山下理呂、James Frances Loftus III、Coralie Ferrero、米元史織、舟橋京子									
編集機関	太宰府市教育委員会									
所在地	福岡県太宰府市観世音寺一丁目1番1号									
発行年月日	2021（令和3）年9月30日									
ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
さこいせき サコ遺跡 第1次	条坊外	さかもと 坂本三丁目	402214		57310.0	-45146.0	20130411	20130624	1154	宅地造成 記録保存調査
うらやまいせき 浦山遺跡 第1次	条坊外	さかもと 坂本三丁目	402214		57180.0	-45260.0	20130226	20130329	330	宅地造成 記録保存調査
うらやまいせき 浦山遺跡 第2次	条坊外	さかもと 坂本三丁目	402214		57220.0	-45090.0	20150120	20150331	758	宅地造成 記録保存調査
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物		特記事項			
サコ遺跡 第1次	墓地	奈良、江戸 明治	墓、溝		須恵器、肥前系陶磁器 銭貨、鉄釘					
浦山遺跡 第1次	墓地	古墳、奈良	竪穴住居、柵列 石列、溝、土坑		須恵器、土師器、瓦、砥石					
浦山遺跡 第2次	墓地	江戸、明治	墓		肥前系陶磁器、銭貨、鉄釘 ガラス小玉、榎、陶製人形					

太宰府市の文化財 第142集

サコ・浦山遺跡

- サコ遺跡第1次調査・浦山遺跡第1・2次調査 -

令和3（2021）年9月

編集 太宰府市教育委員会

発行 太宰府市観世音寺一丁目1番1号

印刷 株式会社 三光

福岡市博多区山王1丁目14-4

